昭和六年五月一日印刷
昭和六年五月十日發行

國譯一切經 阿含部 六

不許複製

編輯兼發行者 岩野眞雄
東京市芝區芝公園七號地十番

印刷者 渡邊通夫
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

印刷所 日進舍
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

發行所 大東出版社
東京市芝區芝公園地七號地十番
振替東京一九四七一番
電話芝(二一)一六番
(三〇四〇番)

製本所　兩角製本所

索　　引

凡　例

1. 原語はパーリ語を主とす。〔　　〕は梵語。
2. 經についでは一々そのパーリ對經を示す。
3. 語の排列は五十音順により、濁音は淸音の次に、半濁音は濁音の次におき、且つ同一文字を以て始まる數語は同一箇所にあつむ。
4. ヰはイの部に、ヱはエの部に、ヲはオの部に入る。又檢出の便を考慮し、促音は凡べて同一箇所にあつむ。例へばアウ、アフ、オウ、ワウを凡べてオウの部に集めたるが如し。
5. 頁は中阿含全三卷共通の「本丁」に據る、1—416(第一卷)、417—786(第二卷)787—1155(第三卷)。

—ア—

—イ(ヰ)—

—ウ—

—エ(ヱ)—

—オ(ヲ)—

―カ―

—キ—

—ク—

—サ—

―シ―

―ス―

—セ—

—ソ—

—タ—

—チ—

―ツ―

—ニ—

—ヒ—

—フ—

—へ—

—ホ—

—マ—

—メ—

—モ—

—ヤ—

—ユ—

—ヨ—

—ラ—

―リ―

―ル―

―レ―

―ロ―

—ワ—

— 中阿含索引終 —

頁	行	誤	正
六五一	2	欲を行(い)じ	欲を行じ
〃	17	喜(よろこ)を懐かしむ	喜(よろこび)を懐かしむ
六五二	16-17	六には大飢(さ)に	六には大飢(き)に
六五三	5	惡朋友(あくはうう)	惡朋友(いう)
〃	11	財利(ちいり)を獲ず	財利(さいり)を獲ず
〃	19	言語(りんご)至りて	言語(ごんご)至りて
六五六	2	父母(ぶも)を奉敬し	父母(ぶも)を奉敬し
六五八	2	讃善(さんせん)す	讃(さん)善す
〃	8	四□爲す	四と爲す
六六〇	8	殺羊(くこやう)皮嚢	殺羊(くやう)皮嚢
〃	11	彼中に	彼の中に
六六九	14	世間の習斷ず	世間の習を斷ず
六七九	17	善く挙行する	善く奉行する
六八〇	17	生活(せいくわつ)の具	生活(しやうくわつ)の具
六八五	7	三□びに	三たびに
〃	16	解(け)する所	解(げ)する所
六九四	註〔一七〕	娑羅樹香と樹心	娑羅樹香とは樹心
六九九	註〔六〕	(unanuda	(Upananda
七〇七	17-18	我已に解(け)す	我已に解(げ)す
七一四	1	頌(しゆ)	頌(じゆ)
七一八	16	これに奉事	これ奉事
七二六	9	工師族爲ら(れ)ば	工師族爲(た)らば
七二七	4	父母とを作し	父母と作し
七三一	6	彼二兒有り	彼四兒有り
七三四	14	諦かに聽き	諦かに聽け
七三七	2	瞿曇-隨す	瞿曇を隨す
七四二	註〔三〕	a fire- nt	a fire-hut
七六五	11	比丘衆(びくゆ)	比丘衆(びくしゆ)
七六七	6	明成(じやうぎやう)成	明行(ぎやうにやう)成
七七一	18-19	天中に上生ぜん	天中に上生せん
七八二	2	摩尊磨	摩納磨
〃	4	災尊甚だ多し	災患甚だ多し

以上

頁	行	誤	正
五一四	7	刀杖劫抄の食……	刀杖もて劫抄するの食……
〃	〃	遣信せず	遣信せず
〃	20	晝夜に手抒べ	晝夜に手抒し
五一六	6	苦行に因り、	苦行に因りて、
五一七	2、4	諛・諂	諛諂
五一九	7	邪見・見取・を生ぜず	邪見・見取を生ぜず
〃	11、12	諛・諂	諛諂
五二一	15	默然ならしめ	默然たらしめ
五二三	2	食すと說かん」と。	食すと說かん」と』
五二四	12	蚊虻	蚊虻
五二五	12	現法	現法
五二六	7	非有想處	非無想處
〃	註〔三〕12	二十四を擧け	二十四を擧げ
五三〇	14-15	塚間・村邑	塚間・村邑
五三三	12	漏盡・智通・作證	漏盡智通作證
五三八	12	(6)云何が業を知るや	(5)云何が業を知るや
五四六	註〔二〕3	「說」のを除き、	「說」を除き、
五四七	註〔三〕10	apalikhitm	apalikhitam
五五七	16	聽せば	聽さば
五六三	1	我昔時父悅の頭檀家	我昔時父悅頭檀の家
五七三	10-11	沙門二十億も亦	沙門二十億も亦
五七五	6	求むるを以て故に	求むるを以ての故に
五七六	12	意所知の〔乃至〕、法と意と	〔乃至〕意所知の法、意と
五九五	8	諸の弟子學道	諸の弟子學道
五九八	3	種を斷して子無し	種を斷じて子無し
六〇一	3	尊者晉頭を破り	尊者晉の頭を破り
六〇二	9	毘闍延哆に如きもの	毘闍延哆に如くもの
六〇四	15	勸發・渇仰	勸發・渇仰
六〇五	7	具足〔我〕	具足〔戒〕
〃	10	善く受け善へ持し	善く受け善く持し
六〇六	13	賴吒鍮羅	賴吒惒羅
六一〇	9	瓔珞を以て而かも	瓔珞を以て速かに
〃	10	不乖速かにし	不乖し
六一一	14	〔　〕盧吒林	鍮盧吒林
〃	16	この〔　〕盧吒に	この鍮盧吒に
〃	18	卽便ち〔　〕盧吒林	卽便ち鍮盧吒林
〃	19	結跏趺坐する見て	結跏趺坐するを見て
六一三	20	大王、王、是の如く	大王、是の如く
六三六	3	勸發・渇仰	勸發・渇仰
六四二	7	身觸を覺り、意法を知る	身觸を覺り、意法を知る
六四八	3	寤めたてまつらしを以て	寤めたてまつらせしを以て

頁	行	誤	正
四六一	8	初めて道を得たひし時	初みて道を得たまひし時
〃	12	無愧心諂	無愧心穢
〃	18	調悔心穢	調悔心穢
四六三	13	すな ち斷ず	すなはち斷ず
四六四	8	掘持せしむる能はず	掘持せしむる能はず。
四六六	3・4	諛・諂	諛諂
四七一	7	閑居	閑居
〃	註(一)		「緣起經」「阿難惑經」「人從所成經」を追補す。
四七五	註(二六)	指名の觸あるきべきや	指名の觸あるべきや
四七六	6	『無きなり』。阿難、	『無きなり』。『阿難、
四七八	1	彼受けず、已りて	彼受けず已りて
〃	19	施設し而も施設し、	施設して而も施設し、
四八〇	2	亦是の如く思はず。	亦是の如く是の如く思はず。
四八一	8	非無相處天	非無想處天
四八二	註(四六)	(Rūpi rūpāni passati)	(Rūpī rūpāni passati)
四八四	1	儀容序庠たり、	儀容庠序たり、
〃	7	外身を觀する	外身を觀ずる
〃	7	明有り達有り。	明有り達有り。
〃	13	出息を念じて	出息を念じて
四八七	7	自ら比す。	自ら比す、

頁	行	誤	正
四九一	17	或はこれより聞くもの。』	或はこれより聞くもの〔あり〕。』
〃	19	或は治生を行し、	或は治生を行じ、
四九三	7	本と爲が故に	本と爲すが故に
四九九	15	この苦行に因が故に	この苦行に因るが故に
五〇一	4	滅するを得、	滅するを得、
五〇五	5	縛る有り、過失	縛る有り、過失
五〇六	1	法に向ひ法に次し、	法・次法に向ひ、
〃	1・6	法に向ひ法に次す。	法・次法に向ふ。
五〇八	19	解脫するを得、一切の	解脫するを得、一切の
〃	18	戒德具足は我が戒なり	戒德具足は謂く我が戒なり
五〇九	5	是なりやと」	是なりやと」。
〃	6	非るは是なり	非ざるは是なり
〃	8	非ざるは是をりと	非ざるは是なりと
〃	12	是なりや」愛なく	是なりや、愛無く
五一〇	註(一)	(Tūpi ṭhānāni)	(Tīpi ṭhānāni)
五一三	註(三)	比丘たちの所へと詣ぜずして	比丘たちの所へも詣せずして
〃	9	嘿然ならしむ	嘿然たらしむ
〃	13	嘿然らしめ	嘿然たらしめ
〃	15	音聞無く	音聲無く
五一三	20	行を憎惡ぜば	行を憎惡せば

〔本丁〕	〔行〕	〔誤〕	〔正〕
三九六	1	天耳智通	天耳智通
三九七	17	無上正法閣	無上慧堂正法の閣
四〇四	16	一・二日六・七日	一・二日、六・七日
四〇五	15	離るゝを得すと	離るゝを得ずと
四一七	註〔八〕	文の數字正確を缺ぐ	文の數字正確を缺く
四一四	註〔一〕	「離睡經」Ther.G. 1146–1149 偈註を追補す。	
〃	4	睡眠しぬ	睡眠しぬ
〃	6	婆耆痩・靈山……	婆耆痩、靈山……
〃	註〔三〕	(Bhaggkan)	(Bhaggeau)

第二卷の部

〔本丁〕	〔行〕	〔誤〕	〔正〕
四一七	18	勸發	勸發
四一八	1	歡喜せしめて已りて	歡喜せしめ已りて
〃	10	禪は聲を刺と爲す	禪は聲を以て刺と爲す
四三三	註〔五〕	bahi rāni	bahirāni
四三四	1	火・風・空・識界	水・火・風・空・識界
〃	13	法、如すくと	法の如くすと
〃	19	精勤にして	精勤して
四三五	5	願ふ	願ふ
四三七	8	義を解すに因る	義を解するに因る
四三七	10	心定を得、	心定を得。
四三三	4	我の教勅	我が教勅
〃	6	陰・内・外……	陰・内・外……
〃	註〔三三〕	三十項	三十項
四四〇	13	惡不善の心に欲を	惡不善の心欲を
四四一	3	屛處在りて	屛處に在りて
〃	18	心に惡無く欲を生ぜざれば	心に惡無く心に欲を生ぜざれば
四四二	4、10	〃	〃
四四四	11	喩	喩
四五〇	1	亦涅槃を得るや、諸賢、	亦涅槃を得るや。諸賢、
四五一	5	所以者何	所以者何
〃	6	戻語法に〔於いて〕	戻語法に〔於て〕
〃	9	悪欲念欲れすば	惡欲念欲すれば
〃	11	瞋恚・憎嫉	瞋恚・憎嫉
四五五	2	又斎牧無く	又斎牧無く
四五七	13	善法を觀ず、我諸の善法を見る。	善法を觀ず、我諸の善法を觀る。
四六〇	9–10	修せずと知る	修するにあらずと知る
四六一	4	諷誦し持すべし。	諷誦し持すべし」

頁	行	誤	正
三三六	9	闘は甚悪なり	闘は甚悪たり
三三八	6	徐庠して	徐庠して
三四〇	2	聴明挺出し	聴明挺出し
三四一	3	國・倉庫財物	國・倉庫・財物
三四二	6	嚴ろすべし	嚴るべし
三四三	14	卿に付せん	卿に付せん
三四四	18	歡喜して	歡喜して
三四五	12	成就、歡喜	成就・歡喜
三四八	12	遠離獨住	遠離獨住
三四九	10	(4)睡眠患	(4)睡眠患
三五〇	13	(7)恐怖患	(7)恐怖患
三五一	10	我本得し所の	我本得し所の
三五三	4	彼心清淨を得、	彼心清淨を得。
三五六	11	心放逸く	心放逸無く
三六〇	9	枝提痩・水渚林	技提痩水渚林
〃	15	道を不戲樂・不戲行・不戲	道は不戲・樂不戲・行不戲
三六一	3	王・王臣 好き……	王・王臣の好き……
〃	9	氍氀毾㲪	氍氀毾㲪
三六四	1	法作已に辨ず	佛の法作已に辨ず
三六四	8	現世ノ欲	現世の欲
三六七	16	憐念慇傷	憐念慇傷
三六八	7	自ら覺り	自ら覺り
〃	9、12	精勤にして	精勤して
〃	15	樂共俱定	樂共俱定
〃	〃	捨共俱定	捨共俱定
〃	註	郁伽支羅經第五の註として S. v. 142 を補ふ。	
三七〇	15	尊者	尊者
三七三	4	如來・無事處・山林……	如來の無事處・山林……
三七七	1	婬・怒・癡・薄く	婬・怒・癡薄く
三七八	15、18	これ比丘猶ほ人有り、	これを比丘、猶ほ人有り
三七九	10	大眷屬坐して	大眷屬坐して
〃	20	不存と存を稱說し	不存を存と稱說し
三八一	5-6	見有れば	見有れば
三八四	6	陀羅呵	阿羅訶
三八七	20	勝・如・妙不妙・有るを……	勝・如・妙・不妙有るを……
三八九	19	沙・門梵志	沙門・梵志
三九一	12	勸發・渇仰	勸發・渇仰
三九二	19	迦絺那法	迦絺那法

頁	行	誤	正
二七四	2	境界中の若し	境界中の如し
二七九	10	大天榛林	大天榛林
二八一	12	聞り已りて	聞き已りて
二八四	4	而を頌も說きて	而も頌を說きて
二八五	註(一)	中欄以下參照）の次に「佛般泥洹經」「般泥洹經」「大般涅槃經」「根本說一切有部毘奈耶雜事」三七參照 を追補す。	
二八五	註(七)	迦維衛	迦維羅衛
二八六	10	舞聲	舞聲
二八七	20	氍氀毾毲	氍氀毾毲
二九三	14-15	道法御天人師にして・佛衆祐と	道法御・天人師にして佛・衆祐と
二九六	17	比丘比、丘尼	比丘・比丘尼
二九九	3	加陵伽波……	加陵伽波……
〃	9	比丘衆・戒・不放逸	比丘衆、戒・不放逸
〃	13	捺林駛河岸	捺林駛河岸
三〇一	5	床褥・氍氀	床褥・氍氀
〃	13	觀法如法行法如法	觀法如法・行法如法
〃	16	氍氀	氍氀
三〇二	17	欲の爲め	欲の爲に
三〇三	18	觀法・如法・行法・如法	觀法如法・行法如法
〃	20	氍氀	氍氀
三〇四	9	觀法・如法・行法・如法	觀法如法・行法如法
三〇六	9	なり已りて比丘、	なり已りて、比丘、
〃	15	(4)比丘人壽	(4)比丘、人壽
三一三	註(一)	更に「大正句王經」「鳩摩迦葉經」「僮迦葉解難經」を追補す。	
三一七	6	我この見・欲取……	我この見、欲取……
三一九	3	商人食食鬼	商人食鬼
〃	8	我この見・欲取……	我この見、欲取……
三二〇	1	汝この見・欲取……	汝この見、欲取・
〃	5	長夜に受持しぬ、	長夜に受持しぬ。
〃	7	蜱肆、(10)また……	蜱肆、(10)また……
〃	15	斷捨する所と爲る、	斷捨する所と爲ると。
三二一	20	この見・欲取……	この見、欲取……
三二二	15	良田を耕し	良田を耕し
〃	18	長夜に受持しぬ、	長夜に受持しぬ。
三二三	10	諸法聞き已りて	諸方聞き已りて
〃	20	優多羅	優多羅
三二四	10	彼の肆燄王	彼の蜱肆王
三二六	12	[illegible]羅國王	拘婆羅國王
〃	13	四種の軍・象軍、……	四種の軍、象軍・……（他の頁にあるものも斯く訂正す）

頁	行	誤	正
二三三	註(六)	祭祀に	祭祀とに
二三四	10	沙門瞿曇・鬱毘邏迦葉	沙門瞿曇鬱毘邏迦葉
〃	13	彼の爲に法ば說き	彼の爲に法を說き
二三七	2	佛足に稽首(けいしや)	佛足に稽首(けいしゅ)
二三八	19	殺と離れ	殺を離れ
二四二	註(二)	ki r	kikin
二四六	14	籠中(ら)	籠中(り)
二四九	註(一)	A. i. 138 の次に「增一」三二品の四、「泥犁經」の後半を追補す。	
〃	6	我は今出世・如來……	我今世に出で、如來……
二五一	7	死時生時、	死時・生時、
〃	註(三)	(yama-raia)	(yama-rāja)
二五二	1	惡行	惡業
〃	12	閻王(おんわう)	閻王(えんわう)
〃	16	檻中に(らん)	檻中に(かん)
二五四	10	恐懼怖(きよくくふ)	恐懼怖(きようくふ)
二五五	1	焰無く(ほのほエ)	焰無く(ほのほな)
二五六	13	骨體(こつる)	骨髏(こつろ)
二五七	12	鐵鍱林(てはてふ)	鐵鍱林(てつ)
〃	20	畜牧產業(ちくぼく)	畜牧產業(もく)
二六〇	14	烏鳥犲汝	烏鳥、汝
〃	16-17	梵志故に生じぬ	梵志故に坐じぬ
二六一	4	諸(もろもろ)生活(せいくわつ)の具	諸の生活(しやう)の具
二六二	7	遠離に樂しみ	遠離を樂しみ
〃	15	我(わが)大墓より	我(われ)大墓より
二六三	20	弊腐敗(え)	弊腐敗(はい)
二六五	6	衣鉢(えはち)	衣鉢(えはつ)
〃	10	心を淨除(じやちよ)	心を淨除(じやうちよ)
二六七	8	好しと我また	好しと、我また
〃	11	七反人(てん)に生じて	七反人(にん)に生じて
〃	15	比丘尼・優婆・塞	比丘尼・優婆塞・
二六九	8	散華塗香・屋舍	散華・塗香・屋舍
〃	9	綩綖(おんえん)・給使(きふじみ)・明燈	綩綖(をん)・給使(し)・明燈
二七一	7	當佛有るべし。彌勒・如來。	當に佛有るべし。彌勒、如來。
〃	10	梵志(んし)	梵志(ぼんし)
〃	18	彌勒・如來・無所著	彌勒、如來・無所著
〃	20	如くなるん。	如くならん。
二七三	9	彌勒・如來・無所著	彌勒、如來・無所著
〃	14	具足し(ぐれく)	具足し(ぐそく)

頁	行	誤	正
一七五	5	晃昱天	晃昱天
〃	註〔九〕6	初の二天な後の……	初の二天なく後の……
〃	註〔一〕	「五分律」二八巻の次に「増一」四八品の二の前半を追補す	
〃	註〔三〕4	瞻波と名く	瞻波と名づく
一七六	註〔七〕	Nandimukhi iatti	Nandimukhī ratti
一七七	15	白珂	白珂
〃	〃	なるが如、く	なるが如く、
一八一	14	勸發	勸發
一八三	11	家に還歸し	家に還歸し
〃	16	命澡罐	命澡罐
一八四	6	郁迦長者	郁伽長者
一八五	13	語る	語ぐる
一八八	3、17	勸發	勸發
一八九	16	汝善利有り	汝善利有り
一九〇	7	說法	說法
一九三	18	八未曾有法	八未曾有法
一九四	註〔一〇〕	定(Samādhi)	定(Samādhi)
一九六	6	すなはち止を得	すなはち止を得
二〇〇	註〔一〕	「雜阿含」一八の六を追補す。	
二〇一	10	この處り有り	必ずこの處有り
二〇七	16	食無に非ず	食無きに非ず
二一三	4	厭を習と爲す	厭を習と爲す
二一四	註〔一〕	Ud. IV. 1. を更に追補す。	
二一七	18	禁戒を修習し	禁戒を修習し
二二〇	6	世に出つる時	世に出づる時
二二一	12	餔時	晡時(他の頁にても餔とあるは晡の誤り)
二二二	10	諦かに聽け	諦かに聽け
二二三	8	上連り通り	上連り通り
二二五	4	栴陀ルを名づけ	栴陀尼と名づけ
〃	5	整御	整御
二二九	17	妙乘具	妙乘具
二三〇	7	剎判種	剎利種
〃	18	莊飾	莊飾
〃	〃	作りたり優婆の……	作りたる優婆の……
〃	註〔二〕	「書字、	「書字」、
二三二	3	剃除し	剃除し
〃	註〔一〕	「四分」三三卷、「十誦律」三四卷、「智度論」引用「撰集百縁經」一九參照を加ふ。	

一二八	15	氣(さ)上り	氣(き)上り
〃	〃	皺(しは)	皺(しわ)
一二九	18	無有色(しきう)	無色有(しきう)
一三〇	1	正見乃至正法	正見乃至正定
一三三	19	識(しさ)に因りて	識(しき)に因りて
一三四	13	最(もつま)も廣大	最(もつと)も廣大
一三四	18	四大造(だう)	四大造(ざう)
一三六	10	羞厭(しうねん)	羞厭(えん)
〃	20	これ我(われ)、これ我所(がしよ)	これ我(が)、これ我所(がしよ)
一三七	9	浴澡(よくさう)して	澡浴(さうよく)して
一四〇	5	山(やき)を崩す	山(やま)を崩す
〃	6	哆羅葉	哆邏葉
〃	18	石擲(ちやう)	石擲(ちやく)
〃	註2	三五頁	三五〇頁
一五二	註(五)	那伽の王	那伽の主
一五三	7	釋白淨・閻浮樹に……	釋白淨、閻浮樹に……
〃	〃	釋白淨・日中後……	釋白淨、日中後……
一五四	6	□を取り、蟲を去り	槽を取り、蟲を去り

一五四	10-11	水邊の高樓臺觀(ろう)	水邊の高樓臺觀(る)
一五六	註	侍者經第二の註として Thera G. 1018-1050 を追補す。	
〃	13	大日乾連	大目乾連
一五七	註(一五)	(Mahaunda)	(Mahāunda)
〃	註(一九)1	如ゝ其像定	如其像定
〃	〃 8	居十	居士
〃	〃 13	譯出されゝ……	譯出されし……
一六三	4	此丘衆	比丘衆
一六四	13	……住す。また次に……	……住す。(17)また次に……
一六五	11	薄拘羅(はくら)	薄拘羅(ばくら)
一六七	註(八)	藥藥用果の名	藥用果の名
一六八	15	白珂(はくか)	白珂(びやくか)
〃	19	羅刹魚摩竭	羅刹魚・摩竭
〃	註(八)	(Timi amii gala)	(Timi rapingala)
一六九	12	大海を曰はゞ	大海と曰はゞ
一七一	7	門し稱せば	門と稱せば
〃	15	工師種(こうし)	工師種(く)
一七四	7	未曾有法(ぞう)	未曾有法(ぞう)
〃	註(四)	四天王衆	四王天衆
一七五	2	說法(はふ)	說法(ぽふ)

頁	行	誤	正
六六	7	欺誑	欺誑
七三	1	見・善・觀	見善觀
七六	10	波羅牢伽彌尼	波羅牢伽彌尼
七七	2	星の如く	是の如く
八一	1	歎じて曰はく	歎じて曰はく
〃	9	第一の論師	第一の論士
八二	12	著衣を袒き	著衣を袒ぎ
八三	17	伽彌尼	伽彌尼
八六	10	疑を斷し	疑を斷じ
八八	3	色有斷貪斷業	色有斷貪斷業
八九	13	命終りて	命終りて
九一	18	積聚博聞	積聚博聞
九三	19	翫習	翫習
九五	16-17	是の如きを	是の如きことを
九九	註(二)	A. iv. 373 の次に「増一」三七品之六、Dhp. A. II. p. 178 を追加す。	
〃	4	善い哉	善き哉
〃	12	この語を作しぬ、	この語を作しぬ。
〃	18	遊ふ	遊ぶ

頁	行	誤	正
一〇二	5	過を悔いぬ、	過を悔いぬ、
〃	6	發露	發露
〃	15	身不淨行	身不淨行
一〇三	10	煩悶飢渇頓之し、	煩悶・飢渇・頓乏し、
一〇八	14	(1)諸賢、	(11)諸賢、
一一三	5,13,18	云何が陀然	云何陀然
一一四	3	尊者	尊者
一一六	4-5	等正覺・四梵室を説く	等正覺、四梵室を説く
〃	註(一)	『増一』五一品の八 を追補す、	
一二〇	2	尊者舍梨子、	尊者舍梨子、
〃	3-4	王者城	王舍城
〃	12	大施	大施
〃	15	釋の宗施を捨て鬚髪……	釋の宗族を捨て鬚髪……
一二一	16	一歩する	一歩する
一二二	14	無礙心	無疑心
一二三	1	舍衛國	舍衛國
〃	12	蝿蚤	蝿蚤
一二六	註	大拘絺羅經第九の巴利對釋として A. iv. 382 を加ふ。	

頁	行	誤	正
三六	20	身見・戒取〔見〕	身見・戒〔禁〕取〔見〕
三七	註〔一六〕	護(Samvara)	護(Saṃvara)
三八	3	専心精勤にして	専心精勤して
四一	4	蚊虻蠅蚤虱	蚊虻蠅蚤虱
〃	14	必す苦果……	必ず苦果……
四四	17	正念正智なり瞿曇、	正念正智なり。瞿曇、
四六	6	不與取	不與取
四八	註〔一〕	M. 61, Rāhulovāda-suttanta	M. 61, Rāhulovāda-sutta
〃	註〔一〕	「法句譬喩經」三卷・「大論」一三卷(二五の一五八上)、「根本説一切有部毘奈耶」二五を補ふ。	
〃	註〔二〕	Kalanbakanivāpa	Kalandakanivāpa
四九	13	髂・脊・脇・項・額	髂・脊・脇・項・額
五四	4	諸生活	諸生活
〃	13	正念正智	正念正智
五五	8	穢汚す能はず	穢汚する能はず
〃	10	世尊』所以如何	世尊』『所以者何
〃	11	是を以て男女、	是を以て、男女、
五六	3	世間解無上士・道法御	世間解・無上士・道法御
〃	11	勸發	勸發
〃	註〔三〕	(K saputta)	(Kesaputta)
五六	註〔一〇〕	偏袒右肩	偏袒右肩
五八	3	諸生活の具を見て	諸生活の具を見て
五九	8	受持具足し得、	受持し具足するを得、
六〇	註	伽彌尼經第七の註として	S. iv. 311 を加ふ。
〃	註〔二〕	abavana	ambavana
〃	4	色像巍巍	色像巍巍
〃	11	懈り	懈り
〃	17	成就す〔そは〕	成就す。〔そは〕
六一	15	稱歎求索すが爲に	稱歎求索するが爲に
〃	20	地獄の中生ずる……	地獄の中に生ずる……
〃	註〔一〕	Vin. i. 233 の次に「五分」二二卷・「四分」四二卷を加ふ。	
〃	註〔六〕	師子(Siha)	師子(Sīha)
六五	20	裸行にして衣無く	裸形にして衣無く
〃	註〔一七〕	以上	以下
六六	1	刀杖もて劫抄する……	刀杖もて劫抄する……
〃	2	欺妄の食	欺妄の食
〃	3	糞蠅有りて	糞蠅有りて
〃	16	尊祐大德叉手して彼に向ふ。	尊祐大德とし叉手を彼に向く。

中阿含正誤表

備考　〔行〕の列に於て單に數字のみを示せるは本文の行數とす。

第一卷の部

〔本丁〕	〔行〕	〔誤〕	〔正〕
三	註18	烏陀那	烏陀那
四	9	彼の人〔人〕	彼の人〔人〕
五	12	二の薫ずる	香の薫ずる
七	14	易く〔得〕難からずして得	易く〔得〕、難からずして得
九	14	愧の平道	愧の平道
九	20	竟り亦善し	竟り亦善し
一〇	14	粘豆	粘豆
〃	〃	外の怨敵	外の怨敵
一三	註〔九〕	漏と煩惱の異名	漏とは煩惱の異名
一四	15-16	甚だ苦し世尊	甚だ苦し、世尊
一六	13	截斷	截斷
一七	1	その身に纏絡	その身を纏絡
二一	16	五十分結	五下分結
二三	註	世間福經第七の註として「增一」四〇の七を加ふ。	
〃	註〔一〕	(Kosam)	(Kosambi)
二四	9	朝粥	朝粥
二五	註〔一三〕	恒伽(Ganga)	恒伽(Gangā)
二六	6	常住を得ず	常住を得ず
〃	15	摩企	摩企
二八	註〔一七〕	禪定・智慧・均等の力	禪定・智慧均等の力
〃	註〔一九〕	世界欲界	世界、欲界
〃	14	意に於て如何、昔、	意に於て如何。昔、
二九	10	安隱快樂	安隱快樂
三〇	15	勸發	勸發
〃	註〔八〕	舍梨(Sāri)	舍梨(Sāri)
三一	19	云何が賢者	云何賢者
三二	10	道跡斷智淨を以つて	道跡斷智淨を以て
〃	11	仁に問ふ云何、賢者	仁に問ふ、云何賢者
〃	註〔二三〕	道跡斷智淨(Ñāṇada-	道跡斷智淨(Ñāṇada-
三三	註〔二六〕	梵 Prasena it	梵 Prasenajit
三四	13	優波斯舍	優波斯舍
三五	5	盡ることを得、	盡ることを得。
〃	註〔一〕	Sabbāsava sutta の次に「一切流攝守因經」を加ふ	

聖旨を失ふを懼る。若し本の制に從へば名類多く舊に異り則ち先習に逆忤し衆情に怗はず。こゝを以てその人自ら專らにするを得ず。時に改本有り舊名に從ふのみ。然るに五部の異同孰かその正を知らん。而も道慈愚にして意怏々たり、遂本に於て故諸の名を改むる者皆抄出して注下し、新舊兩存して別に一卷と爲し、目錄と相連ね以て後に示し、將來諸賢、同異を知りて更に採訪するを得しむ。脫れて高明の外國晉胡の方言を善くする者に遇ひ、その得失を訪ひ之を刊して正に從ふ。

後出中阿含經記畢

後出中阿含經記

一 昔釋法師長安に於て 二 中阿含・增壹・阿毘曇・廣說・僧伽羅叉・阿毘曇心・婆須蜜・三法度・二衆從解脱・從解脱緣を出す。この諸經律凡そ百餘萬言、並に本に違ひ旨を失ひ、名實に當らず、係に依り辭に屬し、句味亦差ふ。良に譯人造次にして未だ晉の言を善くせざるに由るが故に爾らしむるのみ。會ま 三 燕秦 戰を交へ關中大に亂る。こゝに於て良匠世に背くが故に以て改正するを獲ず、乃ち數年を經ぬ。關東小しく淸きに至りて冀州の道人釋法和、罽賓の沙門僧伽提和門徒を招集して倶に洛邑に遊び四五年の中研講して精を遂げ、その人漸く漢語を曉り然る後先の失を知りぬ。こゝに於て和乃ち先失を追恨し卽ち提和に從ひて更に阿毘曇及び廣說を出しぬ。これよりの後この諸經律漸く皆譯正し。唯中阿含・僧伽羅叉・婆須蜜・從解脱緣未だ更に出さざるのみ。會ま僧伽提和進みて京師に遊び運に應じて流化し江左に法施す。時に晉國の大長者尙書令衞將軍、東亭侯優婆塞王元琳、常に正法を護持し以て己の任と爲す。卽ち檀越なり。經を出さんが爲の故に精舍を建立し、延べて有道の釋慧持等義學の沙門四十餘人を請し諸の所安を施し四事乏しき無し。又豫て經師僧伽羅叉を請し長供すること數年、然る後乃ち晉の 四 隆安元年丁酉の歲十一月十日を以て楊州丹陽郡建康縣界に於てその精舍に在りて更にこの中阿含を出し、罽賓の 五 沙門僧伽羅叉を請じて胡本を誦せしめ、僧伽提和を請じて胡を轉じて晉と爲し、豫州の沙門道慈筆受し、吳國の李寶 康化共に書す。來る二年戊戌の歲六月二十五日に至り草本始めて訖る。この中阿含凡そ 六 五誦有り、都べて十八品、二百二十二經有り。合して五十一萬四千八百二十五字、分ちて六十卷と爲す。時に國の大難に過ひ、未だ卽ち正書せず。乃ち 七 五年辛丑の歲に至り方に正寫するを得、校定して流傳す。その人 譯する「所」これを 八 先出に准ずるに大に不同有り。この二百二十二經中に於て若し委靡順從すれば則ち

【一】 釋法師。曇摩難提のこと、「出三藏記」一三卷、「高僧傳」一卷を見よ。これ第一譯なり。

【二】 これ等諸經・論・律の中、現存するもの中・增壹・阿毘曇心・婆須蜜・三法度等のみ。但これも内容同一なりや否やを保すべからず。

【三】 姚萇が關内に寇したるをいふ。

【四】 東晉安帝の隆安元年、西紀三九七年。

【五】 僧伽羅叉（執本又は譯主）、僧伽提和（譯語又は傳語）、道慈（筆受）、李寶・康化（書記）。これ第二譯卽ちこの底本なり。

【六】 五誦の意は譯本一卷と頭註〔七〕に說明せり。品の名は十七なれど梵志品は第三日誦に屬する分十經と四日誦に屬する十經とを別々に算するが如し。

【七】 隆安五年、西紀四〇一年、この年羅什長安に來る。

【八】 第一譯 今はなし。

無學法を修すべきや。若し時に如來世に出で無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛衆祐と號し、彼乃至五蓋・心穢・慧羸を斷じ、無學正見を修し乃至無學正智を修す。これを老死を斷ぜんと欲せば當に十無學法を修すべしと謂ふ。是の如く數ば斷じ解脱し過度し拔絶し滅止し總知し別知するも「亦然り。」老死を別知せんと欲せば當に十無學法を修すべし。云何が老死を別知せんと欲せば當に十無學法を修すべきや。若し時に如來世に出で無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛衆祐と號し、彼乃至五蓋・心穢・慧羸を斷じ、無學正見を修し乃至無學正智を修す。これを老死を別知せんと欲せば當に十無學法を修すべしと謂ふ。』佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

中阿含經卷第六十

（[illegible]六十例經第十一　一一五三

んと欲せば當に八支聖道を修すべし。云何が老死を斷ぜんと欲せば當に八支聖道を修すべきや。若し時に如來世に出で無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛衆祐と號し、彼乃至五蓋・心穢・慧羸を斷じ、正見を修し乃至正定を修して八と爲す。これを老死を斷ぜんと欲せば當に八支聖道を修すべしと謂ふ。是の如く數ば斷じ解脱し過度し拔絕し滅止し總知し別知するも「亦然り。」老死を別知せんと欲せば當に八支聖道を修すべし。云何が老死を別知せんと欲せば當に八支聖道を修すべきや。若し時に如來世に出で無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛衆祐と號し、彼乃至五蓋・心穢・慧羸を斷じ、正見を修し乃至正定を修して八と爲す。これを老死を別知せんと欲せば當に八支聖道を修すべしと謂ふ。老死を斷ぜんと欲せば當に十一切處を修すべし。云何が老死を斷ぜんと欲せば當に十一切處を修すべきや。若し時に如來世に出で無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛衆祐と號し、彼乃至五蓋・心穢・慧羸を斷じ、第一地一切處、四維・上下・不二・無量を修す。是の如く水一切處・火一切處・風一切處・青一切處・黃一切處・赤一切處・白一切處・無量空處一切處を修して「亦然り。」第十無量識處一切處、四維・上下・不二・無量を修す。これを老死を斷ぜんと欲せば當に十一切處を修すべしと謂ふ。是の如く數ば斷じ解脱し過度し拔絕し滅止し總知し別知するも「亦然り。」老死を別知せんと欲せば當に十一切處を修すべし。云何が老死を別知せんと欲せば當に十一切處を修すべきや。若し時に如來世に出で無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛衆祐と號し、彼乃至五蓋・心穢・慧羸を斷じ、第一地一切處、四維・上下・不二・無量を修す。是の如く水一切處・火一切處・風一切處・青一切處・黃一切處・赤一切處・白一切處・無量空處一切處を修して「亦然り。」第十無量識處一切處、四維・上下・不二・無量を修す。これを老死を別知せんと欲せば當に十一切處を修すべしと謂ふ。老死を斷ぜんと欲せば當に十無學法を修すべし。云何が老死を斷ぜんと欲せば當に十

世に出で無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛衆祐と號し、彼乃至五蓋・心穢・慧羸を斷じ、信根・精進・念・定・慧根を修す。これを老死を別知せんと欲せば當に五根を修すべしと謂ふ。老死を斷ぜんと欲せば當に五力を修すべし。云何が老死を斷ぜんと欲せば當に五力を修すべきや。若し時に如來世に出で無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛衆祐と號し、彼乃至五蓋・心穢・慧羸を斷じ、信力・精進・念・定・慧力を修す。これを老死を斷ぜんと欲せば當に五力を修すべしと謂ふ。是の如く數ば斷じ解脱し過度し拔絶し滅止し總知し別知するも「亦然り。」老死を別知せんと欲せば當に五力を修すべし。云何が老死を別知せんと欲せば當に五力を修すべきや。若し時に如來世に出で無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛衆祐と號し、彼乃至五蓋・心穢・慧羸を斷じ、信力・精進・念 定・慧力を修す。これを老死を別知せんと欲せば當に五力を修すべしと謂ふ。老死を斷ぜんと欲せば當に七覺支を修すべし。云何が老死を斷ぜん欲せば當に七覺支を修すべきや。若し時に如來世に出で無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛衆祐と號し、彼乃至五蓋・心穢・慧羸を斷じ、念覺支を修し、離に依り無欲に依り滅に依り非品に趣く。是の如く法・精進・喜・息・定を修して「亦然り。」捨覺支を修し、離に依り無欲に依り滅に依り非品に趣く。これを老死を斷ぜんと欲せば當に七覺支を修すべしと謂ふ。是の如く數ば斷じ解脱し過度し拔絶し滅止し總知し別知するも「亦然り。」老死を別知せんと欲せば當に七覺支を修すべし。云何が老死を別知せんと欲せば當に七覺支を修すべきや。若し時に如來世に出で無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛衆祐と號し、彼乃至五蓋・心穢・慧羸を斷じ、念覺支を修し、離に依り無欲に依り滅に依り非品に趣く。是の如く法・精進・喜・息定を修して「亦然り。」捨覺支を修し、離に依り無欲に依り滅に依り非品に趣く。これを老死を別知せんと欲せば當に七覺支を修すべしと謂ふ。老死を斷ぜ

品に趣く。これを老死を斷ぜんと欲せば當に四如意足を修すべしと謂ふ。是の如く數ば斷じ解脫し過度し拔絕し滅止し總知し別知するも「亦然り。」老死を別知せんと欲せば當に四如意足を修すべし。云何が老死を別知せんと欲せば當に四如意足を修すべきや。若し時に如來世に出で無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛衆祐と號し、彼乃至五蓋・心穢・慧羸を斷じ、欲定如意足を修し斷行を成就し、離に依り無欲に依り滅に依り非品に趣く。是の如く精進定・心定を修して「亦然り。」思惟定如意足を修し斷行を成就し、離に依り無欲に依り滅に依り非品に趣く。これを老死を別知せんと欲せば當に四如意足を修すべしと謂ふ。老死を斷ぜんと欲せば當に四禪を修すべし。云何が老死を斷ぜんと欲せば當に四禪を修すべきや。若し時に如來世に出で無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛衆祐と號し、彼乃至五蓋・心穢・慧羸を斷じ、欲を離れ惡不善の法を離れ「乃」至第四禪を得、成就して遊ぶ。これを老死を斷ぜんと欲せば當に四禪を修すべしと謂ふ。是の如く數ば斷じ解脫し過度し拔絕し滅止し總知し別知するも「亦然り。」老死を別知せんと欲せば當に四禪を修すべし。云何が老死を別知せんと欲せば當に四禪を修すべきや。若し時に如來世に出で無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛衆祐と號し、彼乃至五蓋・心穢・慧羸を斷じ、欲を離れ惡不善の法を離れ「乃」至第四禪を得、成就して遊ぶ。これを老死を別知せんと欲せば當に四禪を修すべしと謂ふ。老死を斷ぜんと欲せば當に五根を修すべし。云何が老死を斷ぜんと欲せば當に五根を修すべきや。若し時に如來世に出で無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛衆祐と號し、彼乃至五蓋・心穢・慧羸を斷じ、信根・精進・念・定・慧根を修す。これを老死を斷ぜんと欲せば當に五根を修すべしと謂ふ。是の如く數ば斷じ解脫し過度し拔絕し滅止し總知し別知するも「亦然り。」老死を別知せんと欲せば當に五根を修すべし。云何が老死を別知せんと欲せば當に五根を修すべきや。若し時に如來

別知せんと欲せば當に四念處を修すべしと謂ふ。老死を斷ぜんと欲せば當に四正斷を修すべし。云何が老死を斷ぜんと欲せば當に四正斷を修すべきや。若し時に如來世に出で無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛衆祐と號し、彼乃至五蓋・心穢・慧羸を斷じ、已に生ぜる惡不善の法は斷ぜんが爲の故に欲を發し方便を求め精勤して心を擧げて斷じ、未だ生ぜざる惡不善の法は生ぜざらんが爲の故に欲を發し方便を求め精勤して心を擧げて斷じ、未だ生ぜざる善法は生ぜんが爲の故に欲を發し方便を求め精勤して心を擧げて斷じ、已に生ぜる善法は久しく住して忘れず退かず增長廣大して修習し具足せんが爲の故に欲を發し方便を求め精勤して心を擧げて斷ず。これを老死を斷ぜんと欲せば當に四正斷を修すべしと謂ふ。是の如く數ば斷じ解脫し過度し拔絕し滅止し總知し別知するも[亦然り。]老死を別知せんと欲せば當に四正斷を修すべし。云何が老死を別知せんと欲せば當に四正斷を修すべきや。若し時に如來世に出で無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛衆祐と號し、彼乃至五蓋・心穢・慧羸を斷じ、已に生ぜる惡不善の法は斷ぜんが爲の故に欲を發し方便を求め精勤して心を擧げて斷じ、未だ生ぜざる惡不善の法は生ぜざらんが爲の故に欲を發し方便を求め精勤して心を擧げて斷じ、未だ生ぜざる善法は生ぜんが爲の故に欲を發し方便を求め精勤して心を擧げて斷じ、已に生ぜる善法は久しく住して忘れず退かず增長廣大して修習し具足せんが爲の故に欲を發し方便を求め精勤して心を擧げて斷ず。これを老死を別知せんと欲せば當に四正斷を修すべしと謂ふ。老死を斷ぜんと欲せば當に四如意足を修すべし。云何が老死を斷ぜんと欲せば當に四如意足を修すべきや。若し時に如來世に出で無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛衆祐と號し、彼乃至五蓋・心穢・慧羸を斷じ、欲定如意足を修し斷行を成就し、離に依り無欲に依り滅に依り非品に趣く。是の如く精進定心定を修して[亦然り。]思惟定如意足を修し斷行を成就し、離に依り無欲に依り滅に依り非

空處一切處を修して[亦然り。]第十無量識處一切處・四維・上下・不二・無量を修す。これを無明を別知せんと欲せば當に十一切處を修すべしと謂ふ。無明を斷ぜんと欲せば(10)當に十無學法を修すべし。云何が無明を斷ぜんと欲せば當に十無學法を修すべきや。若し時に如來世に出で無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛衆祐と號し、彼乃至五蓋・心穢・慧羸を斷じ、無學正見を修し乃至無學正智を修す。これを無明を斷ぜんと欲せば當に十無學法を修すべしと謂ふ。是の如く數ば斷じ解脱し過度し拔絶し滅止し總知し別知するも[亦然り。]無明を別知せんと欲せば當に十無學法を修すべし。云何が無明を別知せんと欲せば當に十無學法を修すべきや。若し時に如來世に出で無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛衆祐と號し、彼乃至五蓋・心穢・慧羸を斷じ、無學正見を修し乃至無學正智を修す。これを無明を別知せんと欲せば當に十無學法を修すべしと謂ふ。無明の如く行亦是の如く、行の如く識亦是の如く、識の如く名色亦是の如く、名色の如く六處亦是の如く、六處の如く更樂亦是の如く、更樂の如く覺亦是の如く、覺の如く愛亦是の如く、愛の如く受亦是の如く、受の如く有亦是の如く、有の如く生亦是の如し。老死を斷ぜんと欲せば當に四念處を修すべし。云何が老死を斷ぜんと欲せば當に四念處を修すべきや。若し時に如來世に出で無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛衆祐と號し、彼乃至五蓋・心穢・慧羸を斷じ、內身を觀じて身の如く[乃]至覺・心・法を觀じて[覺・心・]法の如し。これを老死を斷ぜんと欲せば當に四念處を修すべしと謂ふ。是の如く數ば斷じ解脱し過度し拔絶し滅止し總知し別知するも[亦然り。]老死を別知せんと欲せば當に四念處を修すべし。云何が老死を別知せんと欲せば當に四念處を修すべきや。若し時に如來世に出で無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛衆祐と號し、彼乃至五蓋・心穢・慧羸を斷じ、內身を觀じて身の如く乃至覺・心・法を觀じて[覺・心]法の如し。これを老死を

(10)十無學法。

離に依り無欲に依り滅に依り非品に趣く。是の如く法・精進・喜・息・定を修して「亦然り。」捨覺支を修し、離に依り無欲に依り滅に依り非品に趣く。これを無明を別知せんと欲せば當に七覺支を修すべしと謂ふ。無明を斷ぜんと欲せば(8)當に八支聖道を修すべし。云何が無明を斷ぜんと欲せば當に八支聖道を修すべきや。若し時に如來世に出で無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛衆祐と號し、彼乃至五蓋・心穢・慧羸を斷じ、正見を修し乃至正定を修して八と爲す。これを無明を斷ぜんと欲せば當に八支聖道を修すべしと謂ふ。是の如く數ば斷じ解脫し過度し拔絕し滅止し總知し別知するも「亦然り。」無明を別知せんと欲せば當に八支聖道を修すべし。云何が無明を別知せんと欲せば當に八支聖道を修すべきや。若し時に如來世に出で無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛衆祐と號し、彼乃至五蓋・心穢・慧羸を斷じ、正見を修し乃至正定を修して八と爲す。これを無明を別知せんと欲せば當に八支聖道を修すべしと謂ふ。無明を斷ぜんと欲せば當に(9)十一切處を修すべし。云何が無明を斷ぜんと欲せば當に十一切處を修すべきや。若し時に如來世に出で無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛衆祐と號し、彼乃至五蓋・心穢・慧羸を斷じ、第一地一切處、四維・上下・不二・無量を修す。是の如く水一切處・火一切處・風一切處・青一切處・黃一切處・赤一切處・白一切處・無量空處一切處を修して「亦然り。」第十無量識處一切處、四維・上下・不二・無量を修す。これを無明を斷ぜんと欲せば當に十一切處を修すべしと謂ふ。是の如く數ば斷じ解脫し過度し拔絕し滅止し總知し別知するも「亦然り。」無明を別知せんと欲せば當に十一切處を修すべし。云何が無明を別知せんと欲せば當に十一切處を修すべきや。若し時に如來世に出で無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛衆祐と號し、彼乃至五蓋・心穢・慧羸を斷じ、第一地一切處、四維・上下・不二・無量を修す。是の如く水一切處・火一切處・風一切處・青一切處・黃一切處・赤一切處 白一切處・無量

(8)八正道。

(9)十一切處。十遍處(Dasa Kasinā)(Dasa Kasinā)。

根を修すべしと謂ふ。是の如く數ば斷じ解脫し過度し拔絕し滅止し、總知し別知するも[亦然り。]無明を別知せんと欲せば當に五根を修すべし。云何が無明を別知せんと欲せば當に五根を修すべきや。若し時に如來世に出で無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛衆祐と號し、彼乃至五蓋・心穢・慧羸を斷じ、信根・精進・念・定・慧根を修す。これを無明を別知せんと欲せば當に五根を修すべしと謂ふ。無明を斷ぜんと欲せば(6)當に五力を修すべし。云何が無明を斷ぜんと欲せば當に五力を修すべきや。若し時に如來世に出で無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛衆祐と號し、彼乃至五蓋・心穢・慧羸を斷じ、信力・精進・念・定・慧力を修す。これを無明を斷ぜんと欲せば當に五力を修すべしと謂ふ。是の如く數ば斷じ解脫し過度し拔絕し滅止し總知し別知するも[亦然り。]無明を別知せんと欲せば當に五力を修すべし。云何が無明を別知せんと欲せば當に五力を修すべきや。若し時に如來世に出で無所著・等正覺 明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛衆祐と號し、彼乃至五蓋・心穢・慧羸を斷じ、信力精進・念・定・慧力を修す。これを無明を別知せんと欲せば當に五力を修すべしと謂ふ。無明を斷ぜんと欲せば(7)當に七覺支を修すべし。云何が無明を斷ぜんと欲せば當に七覺支を修すべきや。若し時に如來世に出で無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛衆祐と號し、彼乃至五蓋・心穢・慧羸を斷じ、念覺支を修し離に依り無欲に依り滅に依り非品に趣く。是の如く法・精進・喜・息・定を修して[亦然り。]捨覺支を修し離に依り無欲に依り滅に依り非品に趣く。これを無明を斷ぜんと欲せば當に七覺支を修すべしと謂ふ。是の如く數ば斷じ解脫し過度し拔絕し滅止し總知し別知するも[亦然り。]無明を別知せんと欲せば當に七覺支を修すべし。云何が無明を別知せんと欲せば當に七覺支を修すべきや。若し時に如來世に出で無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛衆祐と號し、彼乃至五蓋・心穢・慧羸を斷じ、念覺支を修し、

(6)五力。

(7)七覺支。

穢・慧羸を斷じ、欲定如意足を修し斷行を成就し、離に依り無欲に依り滅に依り非品に趣く。是の如く精進定・心定を修して「亦然り。」思惟定如意足を修し斷行を成就し、離に依り無欲に依り滅に依り非品に趣く。これを無明を斷ぜんと欲せば當に四如意足を修すべしと謂ふ。是の如く數ば斷じ解脫し過度し拔絕し滅止し總知し別知するも「亦然り。」無明を別知せんと欲せば當に四如意足を修すべし。云何が無明を別知せんと欲せば當に四如意足を修すべきや。若し時に如來世に出で無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛衆祐と號し、彼乃至五蓋・心穢・慧羸を斷じ、欲定如意足を修し斷行を成就し、離に依り無欲に依り滅に依り非品に趣く。是の如く精進定・心定を修して「亦然り。」思惟定如意足を修し斷行を成就し、離に依り無欲に依り滅に依り非品に趣く。これを無明を別知せんと欲せば當に四如意足を修すべしと謂ふ。無明を斷ぜんと欲せば當に四禪を修すべし。云何が無明を斷ぜんと欲せば(4)當に四禪を修すべきや。若し時に如來世に出で無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛衆祐と號し、彼乃至五蓋・心穢・慧羸を斷じ、欲を離れ惡不善の法を離れ「乃」至第四禪を得、成就して遊ぶ。これを無明を斷ぜんと欲せば當に四禪を修すべしと謂ふ。是の如く數ば斷じ解脫し過度し拔絕し滅止し總知し別知するも「亦然り。」無明を別知せんと欲せば當に四禪を修すべし。云何が無明を別知せんと欲せば當に四禪を修すべきや。若し時に如來世に出で無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛衆祐と號し、彼乃至五蓋・心穢・慧羸を斷じ、欲を離れ惡不善の法を離れ「乃」至第四禪を得、成就して遊ぶ。これを無明を別知せんと欲せば當に四禪を修すべしと謂ふ。無明を斷ぜんと欲せば(5)當に五根を修すべし。云何が無明を斷ぜんと欲せば當に五根を修すべきや。若し時に如來世に出で無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛衆祐と號し、彼乃至五蓋・心穢・慧羸を斷じ、信根・精進・念・定・慧根を修す。これを無明を斷ぜんと欲せば當に五

(4) 四禪。

(5) 五根。

來世に出で無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛衆祐と號し、彼乃至五蓋・心穢・慧羸を斷じ内身を觀じて身の如く［乃］至覺・心・法を觀じて［覺・心・］法の如し。これを無明を別知せんと欲せば當に四念處を修すべしと謂ふ。無明を斷ぜんと欲せば(2)當に四正斷を修すべし。云何が無明を斷ぜんと欲せば當に四正斷を修すべきや。若し時に如來世に出で無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛衆祐と號し、彼乃至五蓋・心穢・慧羸を斷じ、已に生ぜる惡不善の法は斷ぜんが爲の故に欲を發し方便を求め精勤して心を擧げて斷じ、未だ生ぜざる惡不善の法は生ぜざらんが爲の故に欲を發し方便を求め精勤して心を擧げて斷じ、未だ生ぜざる善法は生ぜんが爲の故に欲を發し方便を求め精勤して心を擧げて斷じ、已に生ぜる善法は久しく住して忘れず退かず增長廣大し修習具足する爲の故に欲を發し方便を求め精勤して心を擧げて斷ず。これを無明を斷ぜんと欲せば當に四正斷を修すべしと謂ふ。是の如く數ば斷じ解脱し過度し拔絕し滅止し總知し別知するも［亦然り。］無明を別知せんと欲せば當に四正斷を修すべし。云何が無明を別知せんと欲せば當に四正斷を修すべきや。若し時に如來世に出で無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛衆祐と號し、彼乃至五蓋・心穢・慧羸を斷じ、已に生ぜる惡不善の法は斷ぜんが爲の故に、欲を發し方便を求め精勤して心を擧げて斷じ、未だ生ぜざる惡不善の法は生ぜざらんが爲の故に、欲を發し方便を求め精勤して心を擧げて斷じ、未だ生ぜざる善法は生ぜんが爲の故に、欲を發し方便を求め精勤して心を擧げて斷じ、已に生ぜる善法は久しく住して忘れず退かず增長廣大し修習具足する爲の故に、欲を發し方便を求め精勤して心を擧げて斷ず。これを無明を別知せんと欲せば當に四正斷を修すべしと謂ふ。無明を斷ぜんと欲せば(3)當に四如意足を修すべし。云何が無明を斷ぜんと欲せば當に四如意足を修すべきや。若し時に如來世に出で無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛衆祐と號し、彼乃至五蓋・心

(2) 四正斷。

(3) 四如意足。

り、是の如くしてこの淳大苦陰生ず。世常有りと、我一向にこれを說かず。何等を以ての故に我一向にこれを說かざるや。これ義と相應するに非ず法と相應するに非ず梵行の本に非ず、智に趣かず覺に趣かず涅槃に趣かず。この故に我一向にこれを說かず。是の如く世無常なり、世底有り世底無し、命卽ちこれ身なり、命異り身異ると爲す、如來終る、如來終らず、如來終り終らず、如來亦終るに非ず亦終らざるに非ずと、我一向にこれを說かず。何等を以ての故に我一向にこれを說かざるや。これ義と相應するに非ず法と相應するに非ず梵行の本に非ず、智に趣かず覺に趣かず涅槃に趣かず。この故に我一向にこれを說かず。何等の法か我一向に說くや。この義我一向に說く、苦・苦習・苦滅・苦滅道跡、我一向に說く。何等を以ての故に我一向にこれを說くや。こはこれ義と相應し、これ法と相應し、これ梵行の本たり、智に趣き覺に趣き涅槃に趣く。この故に我一向にこれを說く。これを說くべからざるは則ち說かず、說くべきは則ち說くと爲す。當に是の如く持すべし。當に是の如く學すべし。』佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

二百二十二、例經第十一

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『若し無明を斷ぜんと欲せば、(1)當に四念處を修すべし。云何が無明を斷ぜんと欲せば、當に四念處を修すべきや。若し時に如來世に出で無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛衆祐と號し、彼乃至五蓋・心穢・慧羸を斷じ、內身を觀じて身の如く[乃]至覺・心・法を觀じて[覺・心・]法の如し。これを無明を斷ぜんと欲せば當に四念處を修すべしと謂ふ。是の如く數ば斷じ解脫し過度し拔絕し滅止し總知し別知するも[亦然り。]無明を別知せんと欲せば當に四念處を修すべし。云何が無明を別知せんと欲せば當に四念處を修すべきや。若し時に如

(1)四念處。

る、如來終らず、如來終り終らず、如來亦終るに非ず亦終らざるに非ずと[なすの見に於て]、若し愚癡の人有りて是の如き念を作し、若し世尊我が爲に一向にこはこれ眞諦にして餘は皆虛妄の言なりと說きたまはざれば、我世尊に從ひて梵行を學せずと[念ぜば]、彼の愚癡の人竟に知るを得ず、その中間に於て而も命終らん。世常有りと、この見に因るが故に我に從ひて梵行を學せんは、この事然らず。是の如く世常有る無し、世底有り、世底無し、命卽ちこれ身なり、命異り身異ると爲す、如來終る、如來終らず、如來終り終らず、如來亦終るに非ず亦終らざるに非ずやとする、この見に因るが故に我に從ひて梵行を學せんは、この事然らず。世常有りと、この見有るが故に我に從ひて梵行を學せざらんは、この事然らず。是の如く世常有る無し、世底有り、世底無し、命卽ちこれ身なり、命異り身異ると爲す、如來終る、如來終らず、如來終り終らず、如來亦終るに非ず亦終らざるに非ずやとする、この見有るが故に我に從ひて梵行を學せざらんは、この事然らず。世常有りと、この見無きが故に我に從ひて梵行を學せんは、この事然らず。是の如く世常有る無し、世底有り、世底無し、命卽ちこれ身なり、命異り身異ると爲す、如來終る、如來終らず、如來終り終らず、如來亦終るに非ず亦終らざるに非ずやとする、この見無きが故に我に從ひて梵行を學せざらんは、この事然らず。是の如く世常有る無し、世底有り、世底無し、命卽ちこれ身なり、命異り身異ると爲す、如來終る、如來終らず、如來終り終らず、如來亦終るに非ず亦終らざるに非ずやとする、この見無きが故に我に從ひて梵行を學せざらんは、この事然らず。世常有りとする者、生有り老有り病有り死有り、愁慼・啼哭・憂苦・懊惱あり、是の如くしてこの淳大苦陰生ず。是の如く世常無し、世底有り、世底無し、命卽ちこれ身なり、命異り身異ると爲す、如來終る、如來終らず如來、終り終らず、如來亦終るに非ず亦終らざるに非ずとする者、生有り老有り病有り死有り、愁慼・啼哭・憂苦・懊惱あ

若し世尊我が爲に一向にこはこれ眞諦にして餘は皆虚妄の言なりと說きたまはざれば、我世尊に從ひて梵行を學せずと「念ぜば」、彼の愚癡の人竟に知るを得ず、その中間に於て而も命終らん。猶ほ人有るが如し。身に毒箭を被り毒箭に因るが故に極重の苦を受く。彼親族有り、憐念愍傷し利義・饒益・安隱を求むるが爲にすなはち箭醫を求む。然るに彼の人は方にこの念を作す、未だ箭を拔くべからず。我應に先づ彼の人是の如き姓是の如き名是の如き生なり、長短麁細と爲すや、黑し白し黑からず白からずと爲すや、剎利族梵志・居士・工師族と爲すや、東方・南方・西方・北方と爲すやを知るべし。未だ箭を拔くべからず。我應に先づ彼の弓柘と爲すや桑と爲すや槻と爲すや角と爲すやを知るべし。未だ箭を拔くべからず。我應に先づ弓札彼これ牛の筋と爲すや麞・鹿の筋と爲すやこれ絲と爲すやを知るべし。未だ箭を拔くべからず。我應に先づ弓の色黑と爲すや白と爲すや赤と爲すや黃と爲すやを知るべし。未だ箭を拔くべからず。我應に先づ弓の弦筋と爲すや絲と爲すや紵と爲すや麻と爲すやを知るべし。未だ箭を拔くべからず。我應に先づ箭の簳、木と爲すや竹と爲すやを知るべし。未だ箭を拔くべからず。我應に先づ箭の纒これ牛の筋と爲すや麞・鹿の筋と爲すやこれ絲と爲すやを知るべし。未だ箭を拔くべからず。我應に先づ箭の羽飄[四]鵃の毛と爲すや鵰・鷲の毛と爲すや[五]鶤鷄の毛と爲すや鶴の毛と爲すやを知るべし。未だ箭を拔くべからず。我應に先づ箭鏑、[六]鉀と爲すや矛と爲すや[七]鈹刀と爲すやを知るべし。未だ箭を拔くべからず。我應に先づ箭鏑を作りし師・是の如き姓是の如き名是の如き生なり、長短麁細と爲すや、黑し白し黑からず白からずと爲すや、東方・西方・南方・北方と爲すやを知るべしと。彼の人竟に知るを得ず、その中間に於て而も命終る。若し愚癡の人有りて是の如き念を作し、若し世尊我が爲に一向に世常有りと說きたまはざれば、我世尊に從ひて梵行を學せずと「念ぜば、」彼の愚癡の人竟に知るを得ず、その中間に於て而も命終らん。是の如く世常有る無し、世底有り、世底無し、命即ちこれ身なり、命異り身異ると爲す、如來終

【四】鵃、鶴に似、白面青色の鳥。
【五】鶤鷄、大きなにはとり。
【六】鉀、箭鏃。
【七】鈹、つるぎの一種。

まはゞ、世尊、當に我が爲に說きたまふべし。若し世尊一向にこはこれ眞諦にして餘は皆虛妄の言なりと知りたまはざれば、當に直に知らずと言ひたまふべし。』世尊問ひて曰はく『鬘童子、我本頗し汝が爲に是の如く世常有りと說きて、汝來りて我に從ひて梵行を學するや。』鬘童子答へて曰く『不なり世尊。』『是の如く世常有る無し、世底有り、世底無し、命卽ちこれ身なり、命異り身異ると爲す、如來終る、如來終らず、如來終り終らず、如來亦終るに非ず亦終らざるに非ずや「となすの見に於て」、我本頗し汝が爲に是の如くこはこれ眞諦にして餘は皆虛妄の言なりと說きて、汝來りて我に從ひて梵行を學するや。』鬘童子答へて曰く『不なり世尊。』『鬘童子、汝本頗し我に向ひて、若し世尊我が爲に一向に世常有りと說きたまはゞ、我當に世尊に從ひて梵行を學すべしと說きしや。』鬘童子答へて曰く『不なり世尊。』『是の如く世常有る無し、世底有り、世底無し、命卽ちこれ身なり、命異り身異ると爲す、如來終る、如來終らず、如來終り終らず、如來亦終るに非ず亦終らざるに非ずや「となすの見に於て」、鬘童子、汝本頗し我に向ひて、若し世尊我が爲に一向にこはこれ眞諦にして餘は皆虛妄の言なりと說きたまはゞ、我當に世尊に從ひて梵行を學すべしと說きしや。』鬘童子答へて曰く『不なり世尊。』世尊告げて曰はく『鬘童子、我本汝に向ひて所說有らず、汝本亦我に向ひて所說有らず、汝愚癡の人何の故に虛妄もて我を誣謗するや。』こゝに於て尊者鬘童子世尊の爲に面訶責數せられ內に憂慼を懷き低頭默然し辯を失ひて言無く所伺有るが如し。こゝに於て世尊鬘童子を面訶し已りて諸の比丘に告げたまはく『若し愚癡の人有りて是の如き念を作し、若し世尊我が爲に一向に世常有りと說きたまはざれば、我世尊に從ひて梵行を學せずと「念ぜば」、彼の愚癡の人竟に知るを得ず、その中間に於て而も命終らん。是の如く世常有る無し、世底有り、世底無し、命卽ちこれ身なり、命異り身異ると爲す、如來終る、如來終らず、如來終り終らず、如來亦終るに非ず亦終らざるに非ずや「とするの見に於て」、若し愚癡の人有りて是の如き念を作し、

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時[二]尊者鬘童子獨り安靖處に燕坐し思惟して心にこの念を作しぬ。所謂この見、世尊捨置除却して盡く通說したまはず、謂く[三]世常有り世常有る無し、世底有り、世底無し、命卽ちこれ身なり、命異り身異ると爲す、如來終る、如來終らず、如來終り終らず、如來亦終るに非ず亦終らざるに非ずや「となすの見」なり。我これを欲せず、我これを忍ばず、我これを可とせず。若し世尊我が爲に一向に世常有りと說きたまはゞ、我彼に從ひて梵行を學せん。若し世尊我が爲に一向に世常有りと說きたまはざれば、我當に彼を難詰しこれを捨てゝ而も去るべし。是の如く世常有る無し、世底有り、世底無し、命卽ちこれ身なり、命異り身異ると爲す、如來終る、如來終らず、如來終り終らず、如來亦終るに非ず亦終らざるに非ずや「となすの見に於て」、若し、世尊我が爲に一向にこはこれ眞諦にして餘は皆虛妄の言なりと說きたまはゞ、我彼に從ひて梵行を學せん。若し世尊我が爲に一向にこはこれ眞諦にして餘は皆虛妄の言なりと說きたまはざれば、我當に彼を難詰しこれを捨てゝ而も去るべしと。こゝに於て尊者鬘童子則ち晡時に於て燕坐より起ち佛の所に往詣し稽首して禮を作し却きて一面に坐し白して曰く『世尊、我今獨り安靖處に燕坐し思惟して心にこの念を作しぬ、所謂この見世尊捨置除却して盡く通說したまはず。謂く世常有り、世常有る無し、世底有り、世底無し、命卽ちこれ身なり、命異り身異ると爲す、如來終る、如來終らず、如來終り終らず、如來亦終るに非ず亦終らざるに非ずや「となすの見」なり。我これを欲せず、我これを忍ばず、我これを可とせずと。若し世尊一向に世常有りと知りたまはゞ、世尊、當に我が爲に說きたまふべし。若し世尊一向に世常有りと知りたまはざれば、當に直に知らずと言ひたまふべし。是の如く世常有る無し、世底有り、世底無し、命卽ちこれ身なり、命異り身異ると爲す、如來終る、如來終らず、如來終り終らず、如來亦終るに非ず亦終らざるに非ずや「となすの見に於て」、若し世尊一向にこはこれ眞諦にして餘は皆虛妄の言なりと知りた

【二】 尊者鬘童子（Māluṅkyāputta）。五六卷「五下分結經」既出。

【三】 上「見經」既出、同經及註を見よ。

盡覺捨置除却して盡く通說したまはず。謂く世常有り、世常有る無し、世底有り、世底無し、命卽ちこれ身なり、命異り身異ると爲す、如來終る、如來終らず、如來終り終らず、如來亦終るに非ず亦終らざるに非ずや「となすの見」なり。世尊・如來・無所著・正盡覺この諸見應ずるが如く知りたまふ。』異學梵志又復問ひて曰く『所謂この見沙門瞿曇捨置除却し盡く通說せず、謂く世常有り、世常無し、世底有り、世底無し、命は卽ちこれ身なり、命異り身異ると爲す、如來終る、如來終らず、如來終り終らず、如來亦終るに非ず亦終らざるに非ずや「となすの見」なり。沙門瞿曇云何がこの諸見應ずるが如く知るや。』尊者阿難答へて曰く『梵志、所謂この見世尊・如來・無所著・正盡覺捨置除却して盡く通說したまはず、謂く世常有り、世常有る無し、世底有り、世底無し、命は卽ちこれ身なり、命異り身異ると爲す、如來終る、如來終らず、如來終り終らず、如來亦終るに非ず亦終らざるに非ずや「となすの見」なり。異學梵志、是の如く具し是の如く受け是の如く趣き是の如く生じ是の如く後世に至ると、所謂これ世尊・如來・無所著・正盡覺捨置除却して盡く通說したまはず。謂く世常有り世常有る無し、世底有り、世底無し、命は卽ちこれ身なり、命異り身異ると爲す、如來終る、如來終らず、如來終り終らず、如來亦終るに非ず亦終らざるに非ずや「となすの見」なり。是の如くこの諸見を知り、この諸見應に是の如く知るべし。』異學梵志白して曰く『我今自ら阿難に歸す。』尊者阿難告げて曰く『梵志、汝自ら我に歸すること莫れ。我自ら佛に歸するが如く、汝亦應に自ら歸すべし。』異學梵志白して曰く『阿難、我今自ら佛・法・及び比丘衆に歸す。唯願はくは世尊、我を受けて優婆塞と爲したまへ。今日より始めて終身自ら歸し乃ち命盡くるに至らん。』尊者阿難の所說是の如し。彼の異學梵志尊者阿難の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

二百二十一、[一]箭喩經第十

【一】 M. 63. Cūla-Māluṅkya-sutta. 失譯「箭喩經。」

想を度り乃至非有想非無想處に成就して遊べば、これを比丘煩熱せずして死し煩熱せずして命終ると謂ふ。』時に諸の比丘又復問ひて曰く『比丘煩熱せずして死し煩熱せずして命終ること、これに極まるや。』尊者阿那律陀答へて曰く『諸賢、比丘煩熱せずして死し煩熱せずして命終ること、これに極まらず。また次に諸賢、若し比丘有りて一切の非有想非無想處想を度り知滅し身觸れ成就して遊び、及び慧觀して諸漏已に盡くれば、これを比丘煩熱せずして死し煩熱せずして命終ると謂ふ。』時に諸の比丘又復問ひて曰く『比丘煩熱せずして死し煩熱せずして命終ること、これに極まるや。』尊者阿那律陀答へて曰く『諸賢、比丘煩熱せずして死し煩熱せずして命終ること、これに極まる。』時に諸の比丘尊者阿那律陀の所説を聞き善く受持し誦して卽ち坐より起ち尊者阿那律陀の足に稽首し繞三匝して去りぬ。尊者阿那律陀の所説是の如し。彼の諸の比丘尊者阿那律陀の所説を聞きて歡喜奉行しぬ。

二百二十、[一] 見經第九

我が聞きしこと是の如し。ある時佛般涅槃の後久しからずして尊者阿難王舍城に遊び竹林迦蘭哆園に在りぬ。こゝに於て一異學梵志有りき。これ尊者阿難未だ出家せざる時の友なり。中後に彷徉して尊者阿難の所に往詣し共に相問訊し却きて一面に坐し尊者阿難に語げぬ『問ふ所有らんと欲す。我が問を聽すや。』尊者阿難答へて曰く『梵志、問はんと欲せばすなはち問へ。我聞き已りて當に思ふべし。』異學梵志卽便ち問ひて曰く『所謂この見捨置除却して盡く通說せざるや、謂く[二]世常有り、世常有る無し、世底有り、世底無し、命卽ちこれ身なり、命異り身異ると爲す、如來終る、如來終らず、如來終り終らず、如來亦終るに非ず亦終らざるに非ずや[となすの見]なり。沙門瞿曇この諸見應に知るべきが如く知るや。』尊者阿難答へて曰く『梵志、所謂この見世尊・如來・無所著・正

【一】 A. iv. (7. 失譯「邪見經。」

【二】 (1)世有常(Sassato loko)、(2)世無有常(Asassato loko)、(3)世有底(Antavā loko)、世界は有限なり、(4)世無底(Anantavā loko)、(5)命卽是身(Taṁ jīvaṁ taṁ sarīraṁ)、生命と身體とは同一物、(6)命異身異(Aññaṁ jīvaṁ aññaṁ sarīraṁ)、(7)如來終(Hoti Tathāgato parammaraṇā)、死後如來身はあり、(8)如來不終(Na hoti Tathāgato p. m.)、(9)如來終不終(Hoti ca na ca hoti T. p. m.)、(10)如來亦非終亦非不終(N'eva hoti na na hoti T. p. m.)。六〇卷「箭喩經」、長阿含一二卷「清淨經」その他に出づ。

二百十九、阿那律陀經〔下〕第八

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時諸の比丘則ち哺時に於て燕坐より起ち尊者阿那律陀の所に往詣し稽首して足を禮し却きて一面に坐し白して曰く『我等問ふ所有らんと欲す。聽きて乃ち敢へて陳ぶるや。』尊者阿那律陀答へて曰く『諸賢、問はんと欲せばすなはち問へ。我聞き已りて當に思ふべし。』時に諸の比丘卽便ち問ひて曰く『云何が比丘煩熱せずして死し煩熱せずして命終るや。』尊者阿那律陀答へて曰く『諸賢、若し比丘見質直にして及び聖愛戒を得れば、これを比丘煩熱せずして死し煩熱せずして命終ると謂ふ。』時に諸の比丘又復問ひて曰く『比丘煩熱せずして死し煩熱せずして命終ること、これに極まるや。』尊者阿那律陀答へて曰く『諸賢、比丘煩熱せずして死し煩熱せずして命終ること、これに極まらず。また次に諸賢、若し比丘[一]內身を觀じて身の如く乃至覺・心・法を觀じて〔覺・心・〕法の如し。これを比丘煩熱せずして死し煩熱せずして命終ると謂ふ。』時に諸の比丘又復問ひて曰く『比丘煩熱せずして死し煩熱せずして命終ること、これに極まるや。』尊者阿那律陀答へて曰く『諸賢、比丘煩熱せずして死し煩熱せずして命終ること、これに極まらず。また次に諸賢、若し比丘[二]慈心と倶にして一方に遍滿し成就して遊び、是の如く二・三・四方・四維・上下・一切に普周く心慈と倶にして、結無く怨無く恚無く諍無く極廣甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。是の如く悲・喜〔亦然り。〕心捨と倶にして、結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。これを比丘煩熱せずして死し煩熱せずして命終ると謂ふ。』時に諸の比丘又復問ひて曰く『比丘煩熱せずして死し煩熱せずして命終ること、これに極まるや。』尊者阿那律陀答へて曰く『諸賢、比丘煩熱せずして死し煩熱せずして命終ること、これに極まらず。また次に諸賢、若し比丘一切の[三]色

【一】四念處。
【二】四無量心。
【三】四無色定。

に買ひ別に尊者阿難に施しぬ。尊者阿難受け已りて招提僧に施與しぬ。尊者阿難の所說是の如し。第十居士八城尊者阿難の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

二百十八、阿那律陀經〔上〕第七

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時諸の比丘則ち晡時に於て燕坐より起ち尊者阿那律陀の所に往詣し稽首して足を禮し却きて一面に坐し白して曰く『我等問ふ所有らんと欲す。聽きて乃ち敢へて陳ぶるや。』尊者阿那律陀答へて曰く『諸賢、問はんと欲せばすなはち問へ。我聞き已りて當に思ふべし。』時に諸の比丘即便ち問ひて曰く『云何が比丘賢にして死し賢にして命終るや。』尊者阿那律陀答へて曰く『諸賢、若し比丘欲を離れ惡不善の法を離れ〔乃〕至第四禪を得、成就して遊べば、これを比丘賢にして死し賢にして命終ると謂ふ。』時に諸の比丘又復問ひて曰く『比丘賢にして死し賢にして命終ること、これに極まるや。』尊者阿那律陀答へて曰く『諸賢、比丘賢にして死し賢にして命終ること、これに極まらず、また次に諸賢、若し比丘如意足・天耳・他心智・宿命智・生死智・漏盡〔智〕を得、無漏を得、心解脫し、慧解脫し現法中に於て自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊び、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辦じ更に有を受けずと如眞を知る。これを比丘賢にして死し賢にして命終ると謂ふ。』時に諸の比丘又復問ひて曰く『比丘賢にして死し賢にして命終ること、これに極まるや。』尊者阿那律陀答へて曰く『諸賢、比丘賢にして死し賢にして命終ること、これに極まる。』こゝに於て諸の比丘尊者阿那律陀の所說を聞き善く受持し誦し已りて即ち坐より起ち尊者阿那律陀の足に稽首し繞三匝して而も去りぬ。尊者阿那律陀の所說是の如し。彼の諸の比丘尊者阿那律陀の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

【七】招提僧（Cātuddisa）。招提とは「四方」の意。四方僧、來來の比丘僧を招提僧といふ。

【一】尊者阿那律陀（Āyasmā Anuruddha）。

【二】四禪。

【三】如意足以下六通一九卷「迦絺那經」、二六卷「瞻經」その他に出づ。

て漏盡を得んは、或はこの處有り。若し彼に生じて漏盡を得ざれば、或はこの法に因りて欲法・愛法・樂法・靖法し愛樂歡喜し、五下分結を斷じ盡し、彼に化生して而も般涅槃し、不退法を得て終に此に還らず。これを如來・無所著・正盡覺・慧眼を成就し第一義を見、一法有るを說き、若し聖弟子漏盡に住して餘無く心解脫を得としたまふと謂ふ。また次に居士、多聞の聖弟子一切の色想を度り乃至非有想非無想處に成就して遊ぶ。彼この處に於て法を觀じて法の如し。彼この處に於て法を觀じて法の如く、彼に住して漏盡を得んは或はこの處有り。若し彼に住して漏盡を得ざれば、或はこの法に因りて欲法・愛法・樂法・靖法し愛樂歡喜し、五下分結を斷じ盡し、彼に化生して而も般涅槃し、不退法を得て終に此に還らず。これを如來・無所著・正盡覺・慧眼を成就し第一義を見、一法有るを說き、若し聖弟子漏盡に住して餘無く心解脫を得としたまふと謂ふ。』こゝに於て第十居士八城卽ち坐より起ち偏に著衣を袒ぎ叉手して白して曰く『尊者阿難、甚奇甚特なり。我尊者阿難に一甘露門を問ふに而も尊者阿難一時に我が爲めに十二甘露法門を說く。今この十二甘露法門必ず所依に隨ひて安隱にして出づるを得。尊者阿難、猶ほ村を去ること遠からずして大屋舍有り十二戶を開くがごとし。若し人所爲の故に彼の屋中に入る。また一人來りて彼の人の爲に義及び饒益を求めず安隱を求めずして而も彼の屋を燒く。尊者阿難、彼の人必ずこの十二戶を得所依に隨ひて出で、自ら安隱を得。是の如く我尊者阿難に一甘露門を問ふに而も尊者阿難一時に我が爲に十二甘露法門を說く。今この十二甘露法門必ず所依に隨ひて安隱にして出づるを得。尊者阿難、梵志法律中に不善の法律を說くすら尙ほ師を供養す。況やまた我大師尊者阿難を供養せざらんや。』こゝに於て第十居士八城卽ち夜中に於て極妙淨美豐饒の食噉含消を施設し、食を施設し已りて平旦座を敷き、雞園の衆及び鞞舍離の衆を請じて皆一處に集め、自ら澡水を行じて則ち極妙淨美豐饒の食噉含消を以て手もて自ら斟酌して飽滿するを得しめ、食訖りて器を收め澡水を行じ竟りて五百種の物を持つて屋

ぬ。時に諸の上尊名德の比丘彼の爲に法を說き、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ、無量の方便もて彼の爲めに法を說き勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已りて默然として而も住しぬ。時に諸の上尊比丘彼の爲に法を說き勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已り、こゝに於て第十居士八城白して曰く『上尊、尊者阿難今何處に在りや。我往きて見んと欲す。』諸の上尊比丘答へて曰く『居士、尊者阿難今鞞[六]舍離、獼猴江邊の高樓臺觀に在り。若し見んと欲せば往きて彼に至るべし。』その時第十居士八城卽ち座より起ち諸の上尊比丘の足に稽首し繞三匝して而も去り尊者阿難の所に往詣し稽首して足を禮し却きて一面に坐し白して曰く『尊者阿難、問ふ所有らんと欲す。我が問を聽すや。』尊者阿難告げて曰く『居士、問はんと欲せば便ち問へ。我聞き已りて當に思ふべし。』居士問ひて曰く『尊者阿難、世尊・如來・無所著・正盡覺・慧眼を成就し第一義を見、頗し一法を說き、若し聖弟子漏盡に住して餘無く心解脫を得と[し]たまふや。』尊者阿難答へて曰く『是の如し。』居士問ひて曰く『尊者阿難、世尊・如來・無所著・正盡覺・慧眼を成就し第一義を見、云何が一法有るを說き、若し聖弟子漏盡に住して餘無く心解脫を得としたまふや。』尊者阿難答へて曰く『居士、多聞の聖弟子欲を離れ惡不善の法を離れ[乃]至第四禪を得、成就して遊ぶ。彼この處に依りて法を觀じて法の如し。彼この處に依りて法を觀じて法の如く彼に住して漏盡を得んは、或はこの處有り。若し彼に住して漏盡を得ざれば、或はこの法に因りて欲法・愛法・樂法・靖法し愛樂歡喜し、五下分結を斷じ盡し、彼に化生して而も般涅槃し、不退法を得て終に此に還らず。また次に居士、多聞の聖弟子心慈と倶にして一方に遍滿し成就して遊び、是の如く二・三・四方・四維・上下、一切に普周く心慈と倶にして結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。是の如く悲・喜[亦然り]。心捨と倶にして結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。彼この處に依りて法を觀じて法の如し。彼この處に依りて法を觀じて法の如く、彼に住し

【六】鞞舍離(Vesāli)。

る時すなはち愁慼・啼哭・憂苦・煩惋・懊惱を生ず。』末利また問ひぬ『王、尸利阿荼[七]大臣を愛し一奔陀利象を愛し婆夷利童女を愛し雨日蓋を愛し加尸及び拘薩羅國を愛さるゝや。』答へて曰く『實に愛す。』末利また問ひぬ『若し加尸及び拘薩羅國變易して異らば、王當に云何がせらるべきや。』答へて曰く『末利、我具足する所の五欲の功德自ら娛樂する者、彼の二國に由る。若し加尸及び拘薩羅國當に變易して異るべくば、我乃ち命無きに至らん。況やまた愁慼・啼哭・憂苦・煩惋・懊惱を生ぜざらんや。』末利白して曰く『この事を以ての故に知る、愛生ずる時すなはち愁慼・啼哭・憂苦・煩惋・懊惱を生ず。末利王に問ふ。意に於て云何。我を愛さるゝと爲すや。』王また答へて曰く『我實に汝を愛す。』末利また問ひぬ『若し我一旦變易して異らば、王當に云何がせらるべきや。』答へて曰く『末利、若し汝一旦變易して異らば、我必ず愁慼・啼哭・憂苦・煩惋・懊惱を生ぜん。』末利白して曰く『この事を以ての故に知る、愛生ずる時すなはち愁慼・啼哭・憂苦・煩惋・懊惱を生ず。』拘薩羅王波斯匿語げて曰く『末利、今日より去りて沙門瞿曇この事に因りてこれ我が師なり、我はこれ彼の弟子なり。末利、我今自ら佛・法及び比丘衆に歸す。唯願はくは世尊、我を受けて優婆塞と爲したまへ。今日より始めて終身自ら歸し乃ち命盡くるに至らん。』佛說是の如し。拘薩羅王波斯匿及び末利皇后佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

二百十七、八城經第六[一]

我が聞きしこと是の如し。ある時佛般涅槃の後久しからずして衆多の上尊名德の比丘[二]波羅利子城に遊び[三]雞園に住在しぬ。[四]この時第十居士八城多くの妙貨を持ちて波羅利子城に往至し[五]治生販賣しぬ。こゝに於て第十居士八城彼の多くの妙貨賣れ速に售れて大に財利を得、歡喜踊躍して波羅利子城を出で雞園の衆多の上尊名德の比丘の所に往詣し、稽首して足を禮し却きて一面に坐し

【七】尸利阿荼(Sirivaḍḍha)。

【一】M. 52, Aṭṭhakanagara-sutta. 安世高譯「十支居士八城人經。」

【二】波羅利子城(Pāṭaliputta-nagara)。

【三】雞園(Kukkuṭārāma)。

【四】第十居士八城(Dasama Gahapati Aṭṭhakanagara)。

【五】治生、商業をいふ、vāṇijja.

て曰はく『那利鴦伽、我今汝に問はん。解する所に隨ひて答へよ。那利鴦伽、意に於て云何。若使人有り母命終れば、彼の人發狂して心大に錯亂し衣を脫ぎ裸形にして路に隨ひて遍く走り、是の如き說を作す、諸賢、我が母を見るや、諸賢、我が母を見るやと。那利鴦伽、この事を以ての故に知るべし、若し愛生ずる時すなはち愁慼・啼哭・憂苦・煩惋・懊惱を生ずと。是の如く父兄姉妹「亦然り。」兒婦命終れば彼の人發狂して心大に錯亂し衣を脫ぎ裸形にして路に隨ひて遍く走り、是の如き說を作す、諸賢、我が兒婦を見るや、諸賢、我が兒婦を見るやと。那利鴦伽、この事を以つての故に知るべし、若し愛生ずる時すなはち愁慼・啼哭・憂苦・煩惋・懊惱を生ずと。那利鴦伽、昔一人の婦有り、暫く家に歸る。彼の諸の親族奪ひて更に嫁せしめんと欲す。彼の女これを聞きて即便ち速疾に還りて夫の家に至り、その夫に語げて曰く『君、今當に知るべし、我が親族強ひて君が婦を奪ひて他人に嫁與せんと欲す。何の計を作さんと欲するや。』こゝに於て彼の人即ち婦の臂を執り將ゐて屋中に入り是の如き語を作す、『倶に後世に至らん、倶に後世に至らんと。すなはち利刀を以てその婦を斫殺し幷に自ら害し已る。那利鴦伽、この事を以つての故に知るべし、若し愛生ずる時すなはち愁慼・啼哭・憂苦・煩惋・懊惱を生ずと。』那利鴦伽梵志佛の所說を聞きて善く受持し誦し即ち座より起ち繞三匝して而も去り還りて拘薩羅王波斯匿の所に至り白し曰く『天王、沙門瞿曇實に是の如く說く、若し愛生ずる時すなはち愁慼・啼哭・憂苦・煩惋・懊惱を生ずと。』拘薩羅王波斯匿聞き已りて末利皇后に語げて曰く『沙門瞿曇實に是の如く說く、若し愛生ずる時すなはち愁慼・啼哭・憂苦・煩惋・懊惱を生ずと。』末利皇后白して曰く『大王、我大王に問はん。解する所に隨ひて答へられよ。意に於て云何。[六]王鞞留羅大將を愛さるゝや。』答へて曰く『實に愛す。』末利また問ひぬ『若し鞞留羅大將變易して異らば、王當に云何がせらるべきや。』答へて曰く『末利、若し鞞留羅大將變易して異らば、我必ず愁慼・啼哭・憂苦・煩惋・懊惱を生ぜん。』末利白して曰く『この事を以ての故に知る、愛生ず

【六】鞞留羅大將(Viḍūḍabha Senāpati)。

曇と共に論ぜし所の者、盡く彼に向ひて說くべし。』こゝに於て梵志衆多の市郭兒共に博戲する所に往至し、若し世尊と共に論ぜし所の者、盡く彼に向ひて說きぬ。衆多の市郭の博戲兒聞き已りて語げて曰く『梵志、何ぞ若し愛生ずる時すなはち愁慼・啼哭・憂苦・煩惋・懊惱を生ずと言ふや。梵志、當に知るべし、若し愛生ずる時喜心樂を生ず。』梵志聞き已りてすなはちこの念を作しぬ、博戲兒の說く所正に我と同じと、頷頭きて而も去りぬ。こゝに於てこの論展轉して廣布し乃ち王宮に入りぬ。拘薩羅王波斯匿沙門瞿曇是の如き說を作し、若し愛生ずる時すなはち愁慼・啼哭・憂苦・煩惋・懊惱を生ず「と說く」と聞き、[四]末利皇后に語げて曰く『我瞿曇是の如き說を作し、若し愛生ずる時すなはち愁慼・啼哭・憂苦・煩惋・懊惱を生ず「と說く」と聞く。』末利皇后聞き已りて白して曰く『是の如し大王、是の如し大王、若し愛生ずる時すなはち愁慼・啼哭・憂苦・煩惋・懊惱を生ず。』拘薩羅王波斯匿末利皇后に語げて曰く『師の宗說を聞けば弟子必ず同じ。沙門瞿曇はこれ汝が師なるが故に是の如き說を作し、汝はこれ彼の弟子なるが故に是の如き說を作し、若し愛生ずる時すなはち愁慼・啼哭・憂苦・煩惋・懊惱を生ずと。』末利皇后白して曰く『大王、若し信ぜざれば自ら往きて問はるべく、亦使を遣さるべし。』こゝに於て拘薩羅王波斯匿即ち[五]那利鴦伽梵志に告げて曰く『汝沙門瞿曇の所に往き我が爲に問訊せよ、沙門瞿曇聖體康强安快無病にして起居輕便、氣力常の如きやと。是の如き語を作せ、拘薩羅王波斯匿問訊す、聖體康强、安快無病にして起居輕便、氣力常の如きや。沙門瞿曇實に是の如く說き、若し愛生ずる時すなはち愁慼・啼哭・憂苦・煩惋・懊惱を生ずと「說く」やと。那利鴦伽、若し沙門瞿曇所說有らば、汝當に善く受持し誦すべし。所以者何。是の如きの人終に妄言せず。』那利鴦伽梵志王の敎を受け已りて卽ち佛の所に詣り共に相問訊し却きて一面に坐し白して曰く『瞿曇、拘薩羅王波斯匿問訊す、聖體康强、安快無病にして起居輕便、氣力常の如きや。沙門瞿曇、實に是の如く說き、若し愛生ずる時すなはち愁慼・啼哭・憂苦・煩惋・懊惱を生ずと「說く」や。』世尊告げ

【四】末利(Mallikā)。摩利迦、勝鬘と譯す。

【五】那利鴦伽(Nālijaṅgha)。竹膊と譯す。

巻の第六十

二百十六、愛生經第五[一]

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時一梵志有りて唯一兒有り、心極めて愛念し忍意溫潤してこれを視て厭ふこと無かりき。忽ちすなはち命終りぬ。命終の後梵志愁憂して飲食すること能はず衣裳を著けず亦香を塗らず、但塚に至りて哭し兒の臥する處を憶しぬ。こゝに於て梵志周遍く彷徉して佛の所に往詣し共に相問訊し却きて一面に坐しぬ。世尊問ひて曰はく『梵志、今汝の[三]諸根自心に住するに似ざるや。』梵志答へて曰く『今我が諸根何に由りて當に自心に住するを得べきや。所以者何。唯一兒有り心極めて愛念し忍意溫潤してこれを視て厭ふこと無かりしに、忽ちすなはち命終りぬ。彼命終し已りて我すなはち愁憂して飲食すること能はず衣裳を著けず亦香を塗らず、但塚に至りて哭し兒の臥する處を憶す。』世尊告げて曰はく『是の如し梵志、是の如し梵志、若し愛生ずる時はすなはち愁慼・啼哭・憂苦・煩惋・懊惱を生ず。』梵志語げて曰く『瞿曇、何ぞ若し愛生ずる時すなはち愁慼・啼哭・憂苦・煩惋・懊惱を生ずと言ふや。瞿曇、當に知るべし、若し愛生ずる時喜心樂を生ず。』世尊是の如く再び三たびに至り告げて曰はく『是の如し梵志、是の如し梵志、若し愛生ずる時すなはち愁慼・啼哭・憂苦・煩惋・懊惱を生ず。』梵志亦再び三たびに至り語げて曰く『瞿曇、何ぞ若し愛生ずる時すなはち愁慼・啼哭・憂苦・煩惋・懊惱を生ずと言ふや。瞿曇、當に知るべし、若し愛生ずる時喜心樂を生ず。』時に彼の梵志佛の所說を聞きて言是なりと說かず但非なりと說き已りて卽ち坐より起ち頭を奮ひて而も去りぬ。その時勝林にその門前に於て衆多の[五]市郭兒有りて而も共に博戲しぬ。梵志遙に見已りてすなはちこの念を作しぬ『世中若し聰明にして智慧ある者有れば、博戲人に過ぎたるは無し。我今寧ろ彼に往き、若し瞿

【一】M. 87, Piya-jātika-sutta.「增一阿含」二三品の三經、「生經」二五、子命過經、安世高譯「婆羅門子命終愛念不離經」

【三】「居士よ、己の心に住するもの諸根、汝にこれあるなし。汝の諸根に變異あり。」

【五】市郭兒。市の住民。

ず乃至天人亦稱して廣布せず。我が斷廣布し流布し乃至天人亦稱して廣布す。云何が我が斷廣布し流布し乃至天人亦稱して廣布するや。謂く八支正道なり。正見乃至正定を八と爲す。これを我が斷廣布し流布し乃至天人亦稱して廣布すと謂ふ。我是の如し。諸の沙門・梵志虛僞妄言し善ならず眞實ならず我を誣謗す、彼實に衆生有りて斷壞を施設するに、沙門瞿曇施設する所無しと。彼實に衆生有りて斷壞を施設す。若しこの我無くば是の如く說かず。彼の如來現法中に於て一切を斷知し息・止滅涅槃を得と。』佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

中阿含經卷第五十九

す。比丘有り、無量地處に一を修し、上・下・諸方・不二を思惟し、無量水處・無量火處・無量風處・無量青處・無量黄處・無量赤處・無量白處・無量空處・無量識處を、第十に一を修し、上下・諸方・不二を思惟す。衆生是の如く一切處を樂しみ意解する者、變易して異有り。多聞の聖弟子是の如く觀ずれば則ち彼を厭ふ。彼を厭ひ已りて尙ほ第一をすら欲せず。況やまた下賤をや。これを第一清淨說と謂ひ最も第一なりと施設す。謂く[五]我無く我有せず、及び彼の證の爲の故に道を施設す。これを第一[六]外依見處と謂ひ最も依見處なり。謂く一切色想を度り乃至非有想非無想處を得、成就して遊ぶ。これを現法中に於て第一に涅槃を求め趣至すると謂ひ、現法中に於て最も涅槃を施設す。謂く[七]六更樂處の生・滅・味・離・慧もて如眞を見ると、及び彼の證の爲の故に道を施設す。また次に四斷有り。云何が四と爲す。樂を斷ずること遲き有り、樂を斷ずること速き有り、苦を斷ずることゝ遲き有り、苦を斷ずること速き有り。中に於て若し樂を斷ずることゝ遲き有れば、これ樂遲きが故に下賤と說く。中に於て若し樂欲を斷ずるもの有り、若し人有りてこの法を習へば初より厭足無し。若しまた人有り飲酒を習へば初より厭足無し。若しまた人有り睡眠を修習すれば初より厭足無し。これを比丘、若し人この三法を習ふ者有れば初より厭足無く亦復滅盡處に至る能はずと謂ふ。この故に諸の比丘常に當にこの三法を捨離してこれに親近せざるべし。是の如く諸の比丘當にこの學を作すべし。』その時諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

三善根を供養し、　三痛三覆露れ、　相法三不覺愛敬して厭足無し。

[八]若し樂を斷ずること速き者有れば、これ樂を斷ずること速きが故にこの斷亦下賤と說く。中に於て若し苦を斷ずること遲き者有れば、これ苦を斷ずることゝ遲きが故にこの斷亦下賤と說く。中に於て若し苦を斷ずること速き者有れば、これ苦を斷ずること速きが故にこの斷廣布するに非ず流布せ

【五】我無我不有。「我はあらじ、我が〔有〕あらじ、我はあらざらん、我が〔有〕あらざらん。」

【六】外依見處 (Bāhiraka diṭṭhigata)。

【七】六更樂處生滅味離慧見如眞。「六觸處の集・滅・味・過患・出離・如實に知り取著なくして解脫すると。」

【八】底本には校合の爲め元本のこの文を載す。

し。猶ほ成就せる波羅㮈衣熟く擣ち磨碾し光色悅澤あり、青くして青色あり青く見え青く光るが如し。是の如く比丘、内に色想無くして外色を觀じ、青くして青色あり青く見え青く光り、無量無量にして、意を淨め意を潤し樂しみて憎惡せざるもの、彼の色除き已りて知り除き已りて見て是の如き想を作す。これを第五除處と謂ふ。(6)また次に比丘、内に色想無くして外色を觀じ、黄にして黄色あり黄に見え黄に光る。猶ほ[三]頻頭歌羅華黄にして黄色あり黄に見え黄に光るが如し。猶ほ成就せる波羅㮈衣の熟く擣ち磨碾し光色悅澤あり、黄にして黄色あり黄に見え黄に光るが如し。是の如く比丘、内に色想無くして外色を觀じ、黄にして黄色あり黄に見え黄に光り、無量無量にして意を淨め意を潤し、樂しみて憎惡せざるもの、彼の色除き已りて知り除き已りて見て是の如き想を作す。これを第六除處と謂ふ。(7)また次に比丘、内に色想無くして外色を觀じ、赤くして赤色あり赤く見え赤く光る。猶ほ[四]加尼歌羅華赤くして赤色あり赤く見え赤く光るが如し。猶ほ成就せる波羅㮈衣の熟く擣ち磨碾し光色悅澤あり、赤くして赤色あり赤く見え赤く光るが如し。是の如く比丘、内に色想無くして外色を觀じ、赤くして赤色あり赤く見え赤く光り、無量無量にして意を淨め意を潤し樂しみて憎惡せざるもの、彼の色除き已りて知り除き已りて見て是の如き想を作す。これを第七除處と謂ふ。(8)また次に比丘、内に色想無くして外色を觀じ、白くして白色あり白く見え白く光る。猶ほ太白[星]白色あり白く見え白く光るが如し。猶ほ成就せる波羅㮈衣の熟く擣ち磨碾し光色悅澤あり白くして白色あり白く見え白く光るが如し。是の如く比丘、内に色想無くして外色を觀じ、白くして白色あり白く見え白く光り、無量無量にして意を淨め意を潤し樂しみて憎惡せざるもの、彼の色除き已りて知り除き已りて見て是の如き想を作す。これを第八除處と謂ふ。衆生是の如く除處を樂しみ意解する者、變易して異有り。多聞の聖弟子是の如く觀ずれば則ち彼を厭ふ。彼を厭ひ已りて尙ほ第一をすら欲せず。況やまた下賤をや。また次に十の一切處有り。云何が十と爲

【三】頻頭歌羅華(Bandhu-jivaka puppha)。金色華。

【四】加尼歌羅華(Kaṇikāra-puppha)。

を厭ひ已りて尙ほ第一をすら欲せず。況やまた下賤をや。所謂日月の境界光明の照す所、照す所諸方なり。謂く千世界なり。この千世界・千日・千月・千弗于逮・千閻浮洲・千拘陀尼洲・千欝單越洲・千須彌山・千四大王天・千四天王子・千三十三天・千釋天・因陀羅・千焔摩天・千須焔摩天子・千兜率哆天・千兜率哆天子・千化樂天・千善化樂天子・千他化樂天・千自在天子・千梵世界及び千別梵有り。彼の中一梵大梵有り富祐にして作化尊たり、衆生を造る父たり、已に有り、當に有るべし。彼の大梵は變易して異有り。多聞の聖弟子是の如く觀ずれば則ち彼を厭ふ。彼を厭ひ已りて尙ほ第一をすら欲せず。況やまた下賤をや。後時この世敗壞す。この世敗壞する時衆生晃昱天中に生ず。彼の中色乘あり[二]意生にして一切を具足し支筋減ぜず諸根壞れず喜を以て食と爲し形色淸淨にして自身光照し、虛空を飛乘し彼に住すること久遠なり。晃昱天は變易して異有り。多聞の聖弟子是の如く觀ずれば則ち彼を厭ふ。彼を厭ひ已りて尙ほ第一をすら欲せず。況やまた下賤をや。また次に四想有り、比丘想・小想・大想・無量想有り、無所有の衆生是の如く樂想あり意解する者變易して異有り。多聞の聖弟子是の如く觀ずれば則ち彼を厭ふ。彼を厭ひ已りて尙ほ第一をすら欲せず。況やまた下賤をや。また次に八除處有り。云何が八と爲す。(1)比丘內に色想有りて外色を觀じ、少しの善色惡色、彼の色除き已りて知り、除き已りて見て、是の如き想を作す。これを第一除處と謂ふ。(2)また次に比丘、內に色想有りて外色を觀じ、無量の善色惡色、彼の色除き已りて知り、除き已りて見て、是の如き想を作す。これを第二除處と謂ふ。(3)また次に比丘、內に色想無くして外色を觀じ、少しの善色惡色、彼の色除き已りて知り、除き已りて見て、是の如き想を作す。これを第三除處と謂ふ。(4)また次に比丘、內に色想無くして外色を觀じ、無量の善色惡色、彼の色除き已りて知り、除き已りて見て、是の如き想を作す。これを第四除處と謂ふ。(5)また次に比丘、內に色想無くして外色を觀じ、青くして青色あり青く見え青く光る。猶ほ青水華青くして青色あり、青く見え青く光るが如

【二】意生(Manomaya)。意のまゝに生れ出るを得る身。

當に比丘・比丘尼に與ふべし。漸く舍羅舍羅磨尼離を學せよ。阿難、この辟訶提を以て三衣を作りて受持し、彼の拘薩羅家をして長夜に福を增益せしめよ。』尊者阿難拘薩羅王波斯匿の爲に默然として而も受けぬ。こゝに於て拘薩羅王波斯匿尊者阿難默然として受くるを知り已りて辟訶提衣を法の爲に布施しぬ。尊者阿難卽ち座より起ち繞三匝して而も去りぬ。去りて後久しからずして尊者阿難辟訶提衣を持ちて佛の所に往詣し佛足に稽首し却きて一面に住し白して曰く『世尊、この辟訶提衣今日拘薩羅王波斯匿法の爲に布施しぬ。我願はくは世尊、兩足を以て辟訶提衣の上に著き、拘薩羅家をして長夜に福を增益するを得しめたまへ。』こゝに於て世尊兩足を以て辟訶提衣の上に著き告げて曰はく『阿難、若し汝拘薩羅王波斯匿と共に論ぜし所の者は、今悉く我に向ひて而も廣くこれを說け。』こゝに於て尊者阿難拘薩羅王波斯匿と共に論ぜし所の者は、盡く佛に向ひて說き、叉手して白して曰く『我是の如く說くも世尊を誣謗せざるや。眞に如法を說き法次法を說き、如法に於て過失有らざるや。』世尊答へて曰はく『汝是の如く說くも我を誣謗せず、眞に如法を說き法次法を說き、亦如法に於て過失有らず。阿難、若し拘薩羅王波斯匿この義を以てこの句を以てこの文を以て來りて我に問はゞ、我亦拘薩羅王波斯匿の爲にこの義を以てこの句を以てこの文を以て彼に答へん。阿難、この義汝の所說の如し。汝當に是の如く受持すべし。所以者何。この說卽ちこれその義なり。』佛說是の如し。尊者阿難及び諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

二百十五、[一]第一得經第四

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『若し拘薩羅王波斯匿の有する所の境界教令の及ぶ所、彼の中拘薩羅王波斯匿最も第一と爲す。拘薩羅王波斯匿は變易して異有り。多聞の聖弟子是の如く觀ずれば則ち彼を厭ふ。彼

【一】A. v. 59.

法は而も成就し、成就すべからざる法はすなはち成就せず、成就すべき法は而も成就し、成就すべからざる法はすなはち成就せずし已りて不善の法轉た滅じ善法轉た增す。この故に如來必ずこの法を行じたまふ。』拘薩羅王波斯匿問ひて曰く『阿難、如來何の故に必ずこの法を行ずるや。』尊者阿難答へて曰く『大王、欲を離れ欲已に盡き、恚を離れ恚已に盡き、癡を離れ癡已に盡き、如來一切の善法を成就し一切の不善の法を斷じ、教師・妙師・善順師たり、將御し順御し善語し妙語し善順語す。この故に如來必ずこの法を行じたまふ。』拘薩羅王波斯匿歎じて曰く『善き哉善き哉、阿難、如來行ずべき法は必ず行ず。所以者何。如來・無所著・正盡覺を以ての故に。阿難、汝彼の師の弟子にして學道して無上安隱の涅槃を得んと欲す。汝尚ほこの法を行ず。況やまた如來この法を行ぜざらんや。阿難善く說き我今歡喜す、阿難快く說き我極めて歡喜す。若し村の輸租阿難の法應に受くべくば、我が村の輸租法の爲に布施せん。阿難、若し象・馬・牛・羊、阿難の法應に受くべくば、我が象・馬・牛・羊法の爲に布施せん。阿難、若し婦女及び童女阿難の法應に受くべくば、我が婦女及び童女法の爲に布施せん。阿難、若し[五]生色寶阿難の法應に受くべくば、我が生色寶法の爲に布施せん。阿難、かくの如きの事阿難皆應に受くべからず。我が拘薩羅家に一衣有り[六]鞞訶提と名づけ、彼第一なり。王[七]織料の孔を以て中に盛り送り來りて信と爲す。阿難、若し拘薩羅家の[八]劫貝の諸の衣は、この鞞訶提諸の衣中に於て最も第一と爲す。所以者何。この鞞訶提衣長さ十六肘廣さ八肘なり。我この鞞訶提衣今法の爲の故に阿難に布施せん。阿難、當に三衣を作り持つて彼の拘薩羅家をして長夜に福を增益せしむべし。』尊者阿難答へて曰く『止みね止みね大王、但心靖ければ足る。自ら三衣有り。謂く我受くる所なり。』拘薩羅王波斯匿白して曰く『阿難、我喩を說くを聽け。慧者喩を聞けば則ちその義を解す。猶ほ大雨時の如し。この阿夷羅婆提河水滿ち兩岸溢れて則ち流出す。阿難、見るや。』尊者阿難答へて曰く『見るなり。』拘薩羅王波斯匿白して曰く『是の如く阿難、若し三衣有らば

【五】生色寶。金なり、金は原語に Jātarūpa といふ。
【六】鞞訶提（Bahitika）。外國製品の意。
【七】織料。卽ち傘の柄の中に入れて來て贈物となしたるの意。こゝに王とあるは巴利原典にては阿闍世王なり。卽ち同王が贈物（信）として波王に送りたるものか。
【八】劫貝（Kappāsika）。綿衣なり。

如來・無所著・正盡覺を以ての故に。阿難、汝彼の師の弟子にして學道して無上安隱の涅槃を得んと欲す。汝倘この法を行ぜず。況やまた如來この法を行ぜんや。』拘薩羅王波斯匿問ひて曰く『阿難、如來頗し是の如き身行を行ずるや、謂くこの身行沙門梵志の聰明にして智慧あるもの及び餘の世間の憎惡する所爲らざるものなり。』尊者阿難答へて曰く『大王、如來必ず是の如き身行を行じたまふ、謂くこの身行沙門梵志の聰明にして智慧あるもの及び餘の世間の憎惡する所爲らざるものなり。』拘薩羅王波斯匿問ひて曰く『阿難、云何が身行と爲すや。』尊者阿難答へて曰く『大王、謂く善身行なり。』拘薩羅王波斯匿問ひて曰く『阿難、云何が善身行なりや。』尊者阿難答へて曰く『大王、謂く身行罪無し。』拘薩羅王波斯匿問ひて曰く『阿難、云何が身行罪無きや。』尊者阿難答へて曰く『大王、謂く身行を行ずるは智者の憎惡せざる所なり。』拘薩羅王波斯匿問ひて曰く『阿難、云何が智者の憎惡せざる所なりや。』尊者阿難答へて曰く『大王、謂く身行を行じて自ら害せず彼を害せず倶に害せず、覺あり慧あり惡相助けず、涅槃を得智に趣き覺に趣き涅槃に趣至し、彼行ずべき法の如眞を知り、行ずべからざる法亦如眞を知り、行ずべき法の如眞を知り行ずべからざる法亦如眞を知り已りて受くべき法の如眞を知り、受くべからざる法亦如眞を知り、受くべき法の如眞を知り受くべからざる法亦如眞を知り已りて斷ずべき法の如眞を知り、斷ずべからざる法亦如眞を知り、斷ずべき法の如眞を知り斷ずべからざる法亦如眞を知り已りて成就すべき法の如眞を知り、成就すべからざる法亦如眞を知り、成就すべき法の如眞を知り成就すべからざる法亦如眞を知り已りて行ずべき法は而も行じ、行ずべからざる法はすなはち行ぜず、行ずべき法は而も行じ、行ずべからざる法はすなはち行ぜずし已りて受くべき法は而も受け、受くべからざる法はすなはち受けず、受くべき法は而も受け、受くべからざる法はすなはち受けずし已りて斷ずべき法は而も斷じ、斷ずべからざる法はすなはち斷ぜず、斷ずべき法は而も斷じ斷ずべからざる法はすなはち斷ぜずし已りて成就すべき

く『大王、謂く身行罪有り。』拘薩羅王波斯匿問ひて曰く『阿難、云何が身行罪有りや。』尊者阿難答へて曰く『大王、謂く身行を行ずるは智者の憎惡する所なり。』拘薩羅王波斯匿問ひて曰く『阿難、云何が智者の憎惡する所なりや。』尊者阿難答へて曰く『大王、謂く身行を行ずれば、自ら害し彼を害し、倶に害し、智慧を滅し惡相助け、涅槃を得ず智に趣かず覺に趣かず涅槃に趣かず、彼行ずべき法の如眞を知らず、行ずべからざる法亦如眞を知らず。行ずべき法の如眞を知らず、行ずべからざる法亦如眞を知らずし已りて受くべき法の如眞を知らず、受くべからざる法亦如眞を知らず、受くべき法の如眞を知らず、受くべからざる法亦如眞を知らずし已りて斷ずべき法の如眞を知らず、斷ずべからざる法亦如眞を知らず、斷ずべき法の如眞を知らず、斷ずべからざる法亦如眞を知らずし已りて成就すべき法の如眞を知らず、成就すべからざる法亦如眞を知らず、成就すべき法の如眞を知らず、成就すべからざる法亦如眞を知らずし已りて行ずべき法はすなはち行ぜず、行ずべからざる法は而も行ず。行ずべき法はすなはち行せず、行ずべからざる法は而も行じ已りて受くべき法はすなはち受けず、受くべからざる法は而も受け、受くべき法はすなはち受けず、受くべからざる法は而も受け已りて斷ずべき法はすなはち斷ぜず、斷ずべからざる法は而も斷じ、斷ずべき法はすなはち斷ぜず、斷ずべからざる法は而も斷じ已りて成就すべき法はすなはち成就せず、成就すべからざる法は而も成就し、成就すべき法はすなはち成就せず成就すべからざる法は而も成就し已りて不善の法轉た增し善法轉た減ず。この故に如來終にこの法を行じたまはず。』拘薩羅王波斯匿問ひて曰く『阿難、如來何の故に終にこの法を行ぜざるや。』尊者阿難答へて曰く『大王、欲を離れ欲已に盡き恚を離れ恚已に盡き癡を離れ癡已に盡き、如來一切不善の法を斷じ一切の善法を成就し、教師・妙師・善順師たり、將御し順御し善語し妙語し善順語す。この故に如來終にこの法を行じたまはず。』拘薩羅王波斯匿歎じて曰く『善き哉善き哉、阿難、如來行ずべからざる法は終に行ぜず。所以者何。

給孤獨園に至らんと欲す。』拘薩羅王波斯匿語げて曰く『阿難、若し勝林に於て急事無くば、共に阿【四】夷羅婆提河に往至すべし。慈愍の爲の故に。』尊者阿難拘薩羅王波斯匿の爲に默然として而も受けぬ。こゝに於て拘薩羅王波斯匿尊者阿難をして前に在らしめ、共に阿夷羅婆提河に至り、到り已りて乘を下り彼の象の薦を取りて四疊して地に敷き尊者阿難を請じぬ『阿難、この座に坐すべし。』尊者阿難答へて曰く『止みね止みね大王、但心靖ければ足る。』拘薩羅王波斯匿再び三たび尊者阿難を請じぬ『阿難、この座に坐すべし。』尊者阿難亦再び三たび語げぬ『止みね止みね大王、但心靖ければ足る。我自ら尼師檀有り。我今當に坐すべし。』こゝに於て尊者阿難尼師檀を敷きて結跏趺坐しぬ。拘薩羅王波斯匿尊者阿難と共に相問訊し却きて一面に坐し語げて曰く『阿難、問ふ所有らんと欲す。我が問を聽すや。』尊者阿難答へて曰く『大王、問はんと欲せばすなはち問はれよ。我聞き已りて當に思ふべし。』拘薩羅王波斯匿問ひて曰く『阿難、如來頗し是の如き身行を行ずるや、謂くこの身行沙門梵志の憎惡する所爲る[ものなり。]』尊者阿難答へて曰く『大王、如來是の如き身行を行じたまはず、謂くこの身行沙門梵志の聰明にして智慧あるもの及び餘の世間の憎惡する所　る[ものなり。]』拘薩羅王波斯匿聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、阿難、我及ばざる所、若し聰明にして智慧あるもの及び餘の世間と、而も阿難これに及びぬ。阿難、若し不善の相有りて悉く而も毀呰、稱譽すれば、我等彼の眞實を見ず。阿難、若し善相有りて悉く而も毀呰、稱譽すれば、我彼の眞實を見る。阿難、如來頗し是の如き身行を行ずるや、謂くこの身行沙門梵志の聰明にして智慧あるもの及び餘の世間の憎惡する所　るものたり。』尊者阿難答へて曰く『大王、如來終に是の如き身行を行じたまはず。謂くこの身行沙門梵志の聰明にして智慧あるもの及び餘の世間の憎惡する所爲るものなり。』拘薩羅王波斯匿問ひて曰く『阿難、云何が身行と爲すや。』尊者阿難答へて曰く『大王、不善身行なり。』拘薩羅王波斯匿問ひて曰く『阿難、云何が不善身行なりや。』尊者阿難答へて曰

【四】 阿夷羅婆提河(Aciravati)。

集まりて講堂に在らしめ、還りて佛の所に詣り白して曰く『世尊、若し比丘有りて彌婁離林に依りて住する者、彼の一切已に講堂に集まりぬ。唯願はくは世尊、自ら當に時を知りたまふべし。』こゝに於て世尊尊者阿難を將ゐて講堂に往至し比丘衆の前に座を敷きて而も坐し告げて曰はく『比丘、今拘薩羅王波斯匿我が前に在りてこの法莊嚴經を說き已りて即ち座より起ち我が足に稽首し繞三匝して而も去りぬ。汝等當にこの法莊嚴經を受持し善く誦し善く習ふべし。所以者何。比丘、この法莊嚴經如義如法にして梵行の本爲り、智に趣き覺に趣き涅槃に趣至す。若し族姓子至信に家を捨て家無くして學道する者、亦當にこの法莊嚴經を受持すべく、當に誦すべく、當に習ふべし。』佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

二百十四、[一]鞞訶提經第三

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衛國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時尊者阿難舍衛國に住しぬ。東園鹿子母堂に於て小事の爲の故に、彼の時尊者阿難一比丘を將ゐ舍衛より出でゝ東園鹿子母堂に往至し、所爲の事訖りて彼の比丘を將ゐ還りて勝林給孤獨園に往至しぬ。その時拘薩羅王波斯匿[二]一奔陀利象に乘り[三]尸利阿荼大臣と倶に舍衛國を出でぬ。尊者阿難遙に拘薩羅王波斯匿の來るを見已りて伴の比丘に問ひぬ『彼はこれ拘薩羅王波斯匿なりや。』答へて曰く『是なり。』尊者阿難すなはち道を下りて避け一樹下に至りぬ。拘薩羅王波斯匿遙に尊者阿難の樹間に在るを見問ひて曰く『尸利阿荼、彼はこれ沙門阿難なりや。』尸利阿荼答へて曰く『是なり。』拘薩羅王波斯匿尸利阿荼大臣に告げて曰く『汝この象を御して沙門阿難の所に至らしめよ。』尸利阿荼王の敎を受け已りて即ちこの象を御して尊者阿難の所に至らしめぬ。こゝに於て拘薩羅王波斯匿問ひて曰く『阿難、何處より來り何處に至らんと欲するや。』尊者阿難答へて曰く『大王、我東園鹿子母堂より來り勝林

【一】 M. 88, Bāhitika-sutta.
【二】 一奔陀利象(Ekapuṇḍarīka Nāga)。
【三】 尸利阿荼(Sirivaḍḍha)。

而も法靖有り、これに因るが故に我この念を作すと謂ふ、如來・無所著・正盡覺、所說の法善にして世尊の弟子衆は善く趣向すと。(9)また次に世尊、我仙餘及び宿舊の二臣に於て錢財の賜を出し亦常に稱譽す。彼の命我に由る。然も彼の仙餘及び宿舊の二臣をして意を下して我を恭敬し尊重し供養し奉事すること世尊の爲に意を下して恭敬し尊重し供養し奉事するが如くならしむること能はず。これを我佛に於て而も法靖有り、これに因るが故に我この念を作すと謂ふ、如來・無所著・正盡覺所說の法善にして世尊の弟子衆は善く趣向すと。(10)また次に世尊、我昔出征して一小屋中に宿し、仙餘・宿舊の二臣を試み、彼の頭何處に向ひて眠るや、我に向ふと爲すや、世尊に向ふと爲すやを知らんと欲しぬ。こゝに於て仙餘・宿舊の二臣則ち初夜に於て結跏趺坐し默然として燕坐し、中夜に至りて世尊某方處に在すと聞き、すなはち頭を以て彼に向け足を以て我に向けぬ。我見已りてこの念を作しぬ、この仙餘及び宿舊の二臣現勝事に在らず。この故に彼意を下して我を恭敬し尊重し供養し奉事すること世尊の爲に意を下して我を恭敬し尊重し供養し奉事するが如くならずと。これを我佛に於て而も法靖有り、これに因るが故に我この念を作すと謂ふ、如來・無所著・正盡覺所說の法善にして世尊の弟子衆は善く趣向すと。(11)また次に世尊、我亦國王たり世尊亦法王たり、我亦刹利たり世尊亦刹利たり、我亦拘薩羅「に在り」世尊亦拘薩羅「に在り」、我年八十世尊亦八十なり。世尊、この事を以ての故に我世尊の爲に形壽を盡して意を下し恭敬し尊重し供養し奉事するに堪耐す。世尊、我今多事なり、還りて辭を請はんと欲す。』世尊告げて曰はく『大王、自ら時を知られよ。』こゝに於て拘薩羅王波斯匿佛の所說を聞きて善く受持し誦し即ち坐より起ち佛足に稽首し繞三匝して而も去りぬ。その時尊者阿難世尊の後に住し拂を執りて佛に侍しぬ。こゝに於て世尊迴顧して告げて曰はく『阿難、若し比丘有りて彌婁離林に依りて住する者、彼の一切をして集まりて講堂に在らしめよ。』こゝに於て尊者阿難佛の教を受け已りて若し諸の比丘彌婁離林に依りて住する者、彼の一切をして

【八】仙餘（Isidatta）、宿舊（Purāṇa）。

宗を壞り、輙ち自ら論を立して而もこの說を作す、我等沙門瞿曇の所に往至し是の如き是の如き事を問ひ、若し能く答ふれば當に彼を難詰すべし。若し答ふること能はざるも亦難詰し已りて之を捨てゝ而も去らんと。彼世尊某村邑に遊びたまふと聞き佛の所に往至し世尊に事を問ひ、世尊爲に答へたまふ。彼答を聞き已りてすなはち歡喜を得、卽ち世尊に從ひて出家學［道］を求めて而も具足を受け比丘の法を得。佛すなはち彼を度して而も具足を授け比丘の法を得しめたまふ。若し彼の諸尊出家學道して而も具足を受け比丘の法を得已りて獨住遠離し心放逸無く修行精勤す。彼獨住遠離し心放逸無く修行精勤し已りて、若し族姓子の［その］爲にする所［なる］鬚髮を剃除し袈裟衣を著け至信に家を捨て家無くして學道する者、唯無上の梵行訖り現法中に於て自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊び、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辦じ更に有を受けずと如眞を知る。若し彼の諸尊法を知り已り乃至阿羅訶を得、阿羅訶を得已りてすなはちこの念を作す、諸賢、我本幾ど了じ幾ど失ひぬ。所以者何。我本沙門に非ずして沙門と稱し梵行に非ずして梵行と稱し阿羅訶に非ずして阿羅訶と稱しぬ。我等今これ沙門なりこれ梵行なりこれ阿羅訶なりと。これを我佛に於て而も法靖有り、これに因るが故に我この念を作すと謂ふ、如來・無所著・正盡覺、所說の法善にして世尊の弟子衆は善く趣向すと。(8)また次に世尊、我自ら若し國に居りて過無き者を殺さしめ、過有る者を殺さしむ。然も都べて坐する在り。我故に是の如き說を作すを得ず、卿等並び住するも人卿の事を問ふ無く人我が事を問ふ。卿等この事を斷ずる能はず、我能くこの事を斷ずと。その中間に於て競ひて餘事を論じ前論の訖るを待たず。我數ば世尊大衆に圍繞せられて法を說きたまふを見る。彼の中一人鼾眠して聲を作す、人有り彼に語ぐ、君鼾眠して聲を作すこと莫れ。君世尊の說法甘露の如きを聞くを用ひざるやと。彼の人聞き已りて卽便ち默然たり。我この念を作す、如來・無所著・正盡覺の衆調御士甚奇甚特なり。所以者何。無刀杖を以て皆自ら如法に安隱快樂なりと。これを我佛に於て

尙敢へて世尊に事を問はず、況やまた難詰せんと欲するをや。これを我佛に於て法靖有り、これに因るが故に我この念を作すと謂ふ、如來・無所著・正盡覺所說の法善なり、世尊の弟子衆は善く趣向すと。(5)また次に世尊、我一沙門梵志を見るに、聰明にして智慧ありて自ら聰明にして智慧あり博聞にして決定すと稱し、諸經を暗識し强敵を制伏し談論覺了し、名德流布して一切世間聞知せざる無く、遊ぶ所至る處に諸の見宗を壞り、輙ち自ら論を立して而もこの說を作す、我等沙門瞿曇の所に往至し是の如き是の如き事を問ひ、若し能く答ふれば當に彼を難詰すべし、若し答ふること能はざるも亦難詰し已りて之を捨てゝ而も去らんと。彼世尊某村邑に遊びたまふと聞き、佛の所に往至し世尊に事を問ひ、世尊爲に答へたまふ。彼答を聞き已りてすなはち歡喜を得、佛足に稽首し繞三匝して而も去る。これを我佛に於て而も法靖有り、これに因るが故我この念を作すと謂ふ、如來・無所著・正盡覺所說の法善なり、世尊の弟子衆は善く趣向すと。(6)また次に世尊、我一沙門梵志を見るに、聰明にして智慧ありて自ら聰明にして智慧あり博聞にして決定すと稱し、諸經を暗識し强敵を制伏し談論覺了し、名德流布して一切世間聞知せざる無く、遊ぶ所至る處諸の見宗を壞り、輙ち自ら論を立して而もこの說を作す、我等沙門瞿曇の所に往至し是の如き是の如き事を問ひ、若し能く答ふれば當に彼を難詰すべし。若し答ふること能はざるも亦難詰し已りて之を捨てゝ而も去らんと。彼世尊某村邑に遊びたまふと聞き佛の所に往至し世尊に事を問ひ、世尊爲に答へたまふ。彼答を聞き已りてすなはち歡喜を得、卽ち自ら佛・法及び比丘衆に歸し、世尊彼を受けて優婆塞と爲したまひ、終身自ら歸し乃ち命盡くるに至る。これを我佛に於て而も法靖有り、これに因るが故に我この念を作すと謂ふ、如來・無所著・正盡覺所說の法善なり、世尊の弟子衆は善く趣向すと。(7)また次に世尊、我一沙門梵志を見るに聰明にして智慧ありて自ら聰明にして智慧あり博聞にして決定すと稱し、諸經を暗識し强敵を制伏し談論覺了し、名德流布して一切世間聞知せざる無く遊ぶ所至る處に諸の見

を以ての故に諸尊羸痩憔悴し形色極めて悪く身に白皰を生じ人見るを憙ばずと。我往きて彼に問ふ、諸尊何の故に羸痩憔悴し形色極めて悪く身に白皰を生じ人見るを憙ばざるや、諸尊梵行を樂行せざるや、身に患有りと爲すや、屛處に悪を作すと爲すや、この故に諸尊羸痩憔悴し形色極めて悪く身に白皰を生じ人見るを憙ばざるやと。彼我に答へて曰く、大王、これ白病なり、大王、これ白病なりと。世尊、我世尊の弟子諸の比丘衆を見るに、樂行端正にして面色悅澤あり形體淨潔にして無爲無求なり、他の妻食を護ること鹿の如く、自ら形壽を盡して梵行を修行す。我見已りてこの念を作す、この諸尊何の故に樂行端正にして面色悅澤あり形體淨潔にして無爲無求なり、他の妻食を護ること鹿の如く、自ら形壽を盡して梵行を修行するや。この諸尊或は離欲を得或は增上心を得、現法に樂居し易くして〔得〕、難からずして得、この故にこの諸尊樂行端正にして面目悅澤あり形體淨潔にして無爲無求なり、他の妻食を護ること鹿の如く、自ら形壽を盡して梵行を修行す。若し欲を行じて樂行端正ならば、我應に樂行端正なるべし。何を以ての故に。我五欲の功德を得、易くして〔得〕、難からずして得。若しこの諸尊離欲を得增上心を得現法に於て樂居し、易くして〔得〕難からずして得。この故にこの諸尊樂行端正にして面色悅澤あり形體淨潔にして無爲無求なり、他の妻食を護ること鹿の如く、自ら形壽を盡して梵行を修行すと。これを我佛に於て而も法靖行り。これに因るが故に我この念を作すと謂ふ、如來・無所著・正盡覺所說の法善なり。世尊の弟子衆は善く趣向すと。(4)また次に世尊我一沙門梵志を見るに、聰明にして智慧ありて自ら聰明にして智慧あり博聞にして決定すと稱し、諸經を暗識し強敵を制伏し談論覺了し、名德流布して一切世間聞知せざる無く、遊ぶ所至る處に諸の見宗を壞り、輒ち自ら論を立して而もこの說を作す、我等沙門瞿曇の所に往至し是の如き是の如き事を問ひ、若し能く答ふれば當に彼を難詰すべし。若し答ふること能はざるも亦難詰し已りて之を捨てゝ而も去らんと。彼世尊某村邑に遊びたまふと聞き佛の所に往至し、

【七】護ニ他妻食一如レ鹿。「他人の施せるものを食ひ、野獣の如く〔自由の〕心を以て。」

はこれ拘薩羅王波斯匿なりと。世尊答へて曰はく『是の如し大王、汝はこれ拘薩羅王波斯匿なり。汝はこれ拘薩羅王波斯匿なり。』拘薩羅王波斯匿再び三たび自ら姓名を稱し已りて佛足に稽首し却きて一面に坐しぬ。世尊問ひて曰はく『大王、我に何等の義有るを見て而も自ら意を下し稽首して足を禮し供養し承事するや。』拘薩羅王波斯匿答へて曰く『世尊、我佛に於て而も[六]法靖有り。これに因るが故に我この念を作す、如來・無所著・正盡覺、所說の法は善なり、世尊の弟子衆は善く趣向すと。(1)世尊、我坐し都べて坐する時母子と共に諍ひ子母と共に諍ひ父子・兄弟・姉妹・親屬展轉して共に諍ふを見る。彼鬪諍する時母は子の惡を說き子は母の惡を說き、父子・兄弟・姉妹・親屬相更に惡を說く。況やまた他人をや。我世尊の弟子諸の比丘衆を見るに世尊に從ひて梵行を行ず。或は比丘有りて少多諍を起し戒を捨て道を罷むるも、佛の惡を說かず諸法の惡を說かず、衆の惡を說かず、但自ら責數し、我惡と爲す、我德無しと爲す。所以者何。我世尊に從ひて自ら形壽を盡して梵行を修行すること能はずと。これを我佛に於て而も法靖有り。これに因るが故に我この念を作すと謂ふ、如來・無所著・正盡覺所說の法は善なり。世尊の弟子衆は善く趣向すと。(2)また次に世尊、我一沙門梵志を見るに、或は九月或は十月少多梵行を學行し[後]捨て隨ひて本服し、また欲の爲に染められ欲に染み欲に著し欲の爲に縛せられ、憍慠にして受け入れて災患を見ず出要を見ずして而も行欲を樂しむ。世尊、我世尊の弟子諸の比丘衆を見るに、自ら形壽を盡して梵行を修行し乃ち億數に至る。我この外に於て是の如き清淨の梵行世尊の家の如きを見ず。これを我佛に於て而も法靖有り、これに因るが故に我この念を作すと謂ふ、如來・無所著・正盡覺所說の法は善なり。世尊の弟子衆は善く趣向すと。(3)また次に世尊、我一沙門梵志を見るに、羸瘦憔悴し形色極めて惡く身に白皰を生じ人見るを憙ばず。我この念を作す、この諸尊何を以て羸瘦憔悴し形色極めて惡く身に白皰を生じ人見るを憙ばざるや。この諸尊必ず梵行を樂行せず或は身に患有り或は屏處に惡を作す。この

【六】法靖。宋本「法靜」に作るといふ。原典には Dhammavinaya 法律。

我が聞きしこと是の如し。ある時佛釋中に遊び釋家の都邑彌婁離[二]と名づくるに在しぬ。その時拘薩羅王波斯匿長作[三]と共に倶に所爲有るが故に出でゝ邑名城[四]に詣りぬ。拘薩羅王波斯匿彼の園觀に至り諸の樹下寂として音聲無く遠離して惡無く人民有ること無く隨順して燕坐するを見、見已りて世尊を憶念し、拘薩羅王波斯匿告げて曰く『長作、今この樹下寂として音聲無く遠離して惡無く人民有ること無く隨順して燕坐す。此處に我數ば往きて佛を見ぬ。長作、世尊今何處に在すや。我往きて見んと欲す。』長作答へて曰く『天王、我世尊釋中に遊び釋家の都邑彌婁離と名づくるに在すと聞く。』拘薩羅王波斯匿また問ひて曰く『長作、釋家の都邑彌婁離と名づくるは此を去ること幾許ぞ。』長作答へて曰く『天王、此を去ること三拘婁舍[五]なり。』拘薩羅王波斯匿告げて曰く『長作、嚴駕を勅すべし。我佛に詣らんと欲す。』長作教を受けて卽ち嚴駕を勅し白して曰く『天王、嚴駕已に訖りぬ。天王の意に隨ひたまへ。』拘薩羅王波斯匿卽ち昇乘して城外に出で往きて釋家の都邑彌婁離と名づくるに至りぬ。その時彌婁離の門外に衆多の比丘露地に經行しぬ。拘薩羅王波斯匿諸の比丘の所に往詣し問ひて曰く『諸尊、世尊今何處に在りて晝行したまふや。』衆多の比丘答へて曰く『大王、彼の東向の大屋窓を開き戸を閉づ。世尊今彼の中に在りて晝行したまふ。大王、見んと欲せばすなはち彼に往詣し到り已りて外に住し謦欬して戸を敲け。世尊聞きたまはゞ必ず爲に戸を開きたまはん。』拘薩羅王波斯匿卽便ち車を下り、若し王刹利頂有り來りて而も人處を得大地を敎令するに五儀飾有り、劍・蓋・華鬘及び珠柄の拂・嚴飾の屣なり。彼盡く脫ぎ已りて長作に授與しぬ。長作念じて曰く、天王今は必ず當に獨り入りたまふべし、我等應に共に此に住して待つべきのみと。こゝに於て拘薩羅王波斯匿眷屬に圍遶せられ歩みて彼の東向の大屋に往至し到り已りて外に住し謦欬して戸を敲きぬ。世尊聞き已りて卽ち爲に戸を開きたまひ、拘薩羅王波斯匿すなはち彼の屋に入り前みて佛の所に至り稽首して足を禮し再び三たび自ら姓名を稱し、我はこれ拘薩羅王波斯匿なり、我

【二】彌婁離(Medaḷumpa)。
【三】長作(Dīgha Kāraṇiya)。
【四】邑名城(Nagaraka)。
【五】拘婁舍（梵 Krośa 巴 Kosa)。距離の名、牛の聲の聞ゆる間といふ。

羅王波斯匿聞き已りて歎じて曰く『阿難の所說師の如し。阿難の所說善師の如し。更に問ふ所有らんと欲す。我が問を聽すや。』世尊告げて曰はく『大王、問はんと欲せば意の問ふ所を恣にせよ。』拘薩羅王波斯匿問ひて曰く『瞿曇、頗し梵有りや。』世尊問ひて曰はく『大王、何の意にて梵有りやと問ふや。大王、若し我梵有りと施設すれば、彼の梵清淨なり。』世尊拘薩羅王波斯匿とその中間に於てこの事を論ぜし時彼の使人想年少吉祥子を將ゐて來り還り拘薩羅王波斯匿の所に詣り白して曰く『天王、想年少吉祥子已に來りて此に在り。』拘薩羅王波斯匿聞き已りて想年少吉祥子に問ひて曰く『前日王大衆と共に會坐し、誰か最も前に、沙門瞿曇是の如く說く、本無く當に有らざるべく今現、に亦無し。若し餘の沙門梵志一切知り一切見る有りと、說きしや。』想年少吉祥子答へて曰く『天王、鞞留羅大將前に說きぬ。』鞞留羅大將聞き已りて白して曰く『天王、この想年少吉祥子前に說きぬ。』是の如く彼の二人更に互に共にこの論を諍ひぬ。その中間に於て彼の御者卽便ち駕を嚴り拘薩羅王波斯匿の所に至り白して曰く『天王、駕を嚴り已りて至りぬ。天王、當に時を知りたまふべし。』拘薩羅王波斯匿聞き已りて世尊に白して曰く『我瞿曇に一切知の事を問ふに沙門瞿曇我に一切知の事を答へ、我沙門瞿曇に四種の清淨を問ふに沙門瞿曇我に四種の清淨を答へ、我沙門瞿曇に所得を問ふに沙門瞿曇我に所得を答へ、我沙門瞿曇に梵有りやと問ふに沙門瞿曇我に梵有りと答へぬ。若し我更に餘事を問はゞ沙門瞿曇必ず我に餘事を答へん。瞿曇、我今多事にして還りて辭を請はんと欲す。』世尊答へて曰はく『大王、自ら當に時を知るべし。』拘薩羅王波斯匿世尊の所說を聞きて善く受持し誦し卽ち座より起ち世尊を繞ること三匝して而も去りぬ。佛說是の如し。拘薩羅王波斯匿尊者阿難及び一切の大衆佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

二百十三、[一] 法莊嚴經第二

【一】M. 89, Dhammacetiya-sutta.「增一阿含」三十八品の一〇。

諍無く諍を樂はざるものこの間に來らざるは、且く彼の天を置け。若し天有りて諍あり諍を樂ふものこの間に來らば、沙門瞿曇、必ず彼の天福勝り梵行勝ると說く。この天自在に彼の天を退け彼の天を遣るを得。』この時尊者阿難世尊の後に在り拂を執りて佛に侍しぬ。こゝに於て尊者阿難この念を作しぬ、この鞞留羅大將これ拘薩羅王波斯匿の子なり。我はこれ世尊の子、今正にこれ時なり。子と子と共に論ぜんと。こゝに於て尊者阿難鞞留羅大將に語げて曰く『我汝に問はんと欲す。解する所に隨ひて答へよ。大將、意に於て云何。拘薩羅王（鉃）〔波〕斯匿の所有の境界敎令の及ぶ所、拘薩羅王波斯匿福勝り梵行勝るが故に、寧ろ自在に退去遣去するを得るや。』鞞留羅大將答へて曰く『沙門、若し拘薩羅王波斯匿の所有の境界敎令の及ぶ所、拘薩羅王波斯匿福勝り梵行勝るが故に自在に退去遣去するを得。』『大將、意に於て云何。若し拘薩羅王波斯匿の境界に非ずして敎令の及ばざる所、拘薩羅王波斯匿福勝り梵行勝るが故に、意自在を得彼を退け彼を遣るや。』鞞留羅大將答へて曰く『沙門、若し拘薩羅王波斯匿の境界に非ずして敎令の及ばざる所、拘薩羅王波斯匿福勝り梵行勝るが故に自在に彼を退け彼を遣るを得ず。』尊者阿難また問ひて曰く『大將、頗し三十三天有るを聞くや。』鞞留羅大將答へて曰く『我拘薩羅王波斯匿と遊戲せる時三十三天有るを聞きぬ。』『大將、意に於て云何。拘薩羅王波斯匿福勝り梵行勝るが故に寧ろ自在に彼の三十三天を退け彼の三十三天を遣るを得るや。』鞞留羅大將答へて曰く『沙門、拘薩羅王波斯匿尙三十三天を見ることを得る能はず。況やまた退け遣るをや。彼の三十三天を退け遣らんは終にこの處無し。』『是の如く大將、若し天有りて諍無く諍を樂はずしてこの間に來らざる者、この天福勝り梵行勝る。若しこの天有りて諍有り諍を樂ひてこの間に來る者、この天彼の天に於て尙見ることを得る能はず。況やまた天と天と退け遣らんをや。若し彼を退け遣らんは終にこの處無し。』こゝに於て拘薩羅王波斯匿問ひて曰く『瞿曇、この沙門何等と名づくるや。』世尊答へて曰はく『この比丘阿難と名づけ、これ我が侍者なり。』拘薩

羅王波斯匿聞き已りて歎じて曰く『沙門瞿曇の所說師の如し。沙門瞿曇の所說善師の如し。更に問ふ所有らんと欲す。我が問を聽すや。』世尊答へて曰はく『大王、問はんと欲せば意の問ふ所を恣にせよ。』拘薩羅王波斯匿問ひて曰く『瞿曇、こゝに四種、刹利・梵志・居士・工師有り。これ勝如有りや、これ差別有りや、謂く斷なり。』世尊答へて曰はく『こゝに四種、刹利・梵志・居士・工師有り。彼等等しく斷じ、斷に於て勝如有ること無く差別有ること無し。猶ほ東方の刹利の童子來るが如し。彼乾ける娑羅木を取りて火母を作り鑽を鑽りて火を生ず。南方の梵志の童子來りて、彼乾ける娑羅木を取りて火母を作り鑽を鑽りて火を生ず。西方の居士の童子來りて、乾ける梅檀木を取りて火母を作り鑽を鑽りて火を生ず。北方の工師の童子來りて、彼乾ける鉢投摩木を取りて火母を作り鑽を鑽りて火を生ず。大王、意に於て云何。謂く彼の若干種の人若干種の木を持ちて火母を作り鑽を鑽りて火を生ず。彼の中或は人有り、燥草木を著き、烟を生じ焰を生じ色を生ず。大王、烟と烟、焰と焰、色と色に於て何等の差別を說くや。』拘薩羅王波斯匿答へて曰く『謂く彼の若干種の人若干種の木を取りて火母を作り鑽を鑽りて火を生ず。彼の中或は人有り、燥草木を著き、烟を生じ焰を生じ色を生ず。瞿曇、我烟と烟・焰と焰・色と色差別有りと說かず。』『是の如く大王、こゝに四種、刹利・梵志・居士・工師有り。彼の一切等等しく斷じ、斷に於て勝如有ること無く差別有ること無し。』拘薩羅王波斯匿聞き已りて歎じて曰く『沙門瞿曇の所說師の如し。沙門瞿曇の所說善師の如し。更に問ふ所有らんと欲す。我が問を聽すや。』世尊告げて曰はく『大王、問はんと欲せば意の問ふ所を恣にせよ。』拘薩羅王波斯匿問ひて曰く『瞿曇、天有りや。』世尊問ひて曰はく『大王、何の意にて天有りやと問ふや。』拘薩羅王波斯匿答へて曰く『瞿曇、若し天有りて諍有り諍を樂はゞ、彼應にこの間に來るべし。若し天有りて諍無く諍を樂はざれば、應にこの間に來るべからず。』その時鞞留羅大將拘薩羅王波斯匿の後に住在し拂を執りて王を拂ひぬ。鞞留羅大將白して曰く『瞿曇、若し天有りて

了して以て正に苦を盡す。これを第五斷支と謂ふ。こゝに四種、刹利・梵志・居士・工師有り、彼若しこの五斷支を成就すれば、必ず善師如來・無所著・正盡覺を得、必ず可意を得て不可意無く、亦長夜に於て義・饒益を得、安隱快樂なり。こゝに四種、刹利・梵志・居士・工師有り、これを勝如ありと謂ひ、これを後世に於て差別ありと謂ふ。』拘薩羅王波斯匿聞き已りて歎じて曰く『沙門瞿曇の所說師の如し、沙門瞿曇の所說善師の如し。更に問ふ所有らんと欲す。我が問を聽すや。』世尊告げて曰はく『大王、問はんと欲せば意の問ふ所を恣にせよ。』拘薩羅王波斯匿問ひて曰く『瞿曇、こゝに四種、刹利・梵志・居士・工師有り、これ斷行に於て勝如有りや、これ差別有りや。』世尊答へて曰はく『こゝに四種、刹利・梵志・居士・工師有り、これ斷行に於て勝如有り、これ差別有り。大王、意に於て云何。若し信ある者の斷ずる所、これ信ならずして斷ぜんは終にこの處無し。若し少病の者の斷ずる所、これ多病にして斷ぜんは終にこの處無し。若し不諂不誑の者の斷ずる所、これ諂誑にして斷ぜんは終にこの處無し。若し精勤の者の斷ずる所これ懈怠して斷ぜんは終にこの處無し。若し智慧の者の斷ずる所、これ惡慧にして斷ぜんは終にこの處無し。猶は四御、象御・馬御・牛御・人御の如し。彼の中二御調すべからず御すべからず、二御調すべく御すべし。大王、意に於て云何。若しこの二御調すべからず御すべからざるもの、彼來りて地を調し地を御し御事を受けんは終にこの處無し。若し彼の二御調すべく御すべきもの、來り至りて地を調し地を御し御事を受けんは必ずこの處有り。是の如く大王、意に於て云何。若し信ある者の斷ずる所、これ信ならずして斷ぜんや。終にこの處無し。若し少病の者の斷ずる所、これ多病にして斷ぜんや。終にこの處無し。若し不諂不誑の者の斷ずる所、これ諂誑にして斷ぜんや。終にこの處無し。若し精勤の者の斷ずる所、これ懈怠し　斷ぜんや。終にこの處無し。若し智慧の者の斷ずる所、これ惡慧にして斷ぜんや。終にこの處無し。是の如くこの四種、刹利・梵志・居士・工師、これを斷行に於て勝如と謂ひ、これを差別と謂ふ。拘薩

【九】斷行（Padhānavemat-ta）、

見る[者]有りと。大王、我是の如く說けるを憶ふ。』拘薩羅王波斯匿聞き已りて歎じて曰く『沙門瞿曇の所說師の如し。沙門瞿曇の所說善師の如し。更に問ふ所有らんと欲す。我が問を聽すや。』世尊告げて曰はく『大王、問はんと欲せば意の問ふ所を恣にせよ。』拘薩羅王波斯匿問ひて曰く『瞿曇、こゝに四種、刹利・梵志・居士・工師有り、勝如有り差別有りと爲すや。』世尊答へて曰はく『こゝに四種、刹利・梵志・居士・工師有り。これ勝如有り差別有り。刹利・梵志種、これ人間に於て最上德と爲し、居士・工師種、これ人間に於て下德と爲す。こゝに四種、刹利・梵志・居士・工師有り、これを勝如と謂ひこれを差別と謂ふ。』拘薩羅王波斯匿聞き已りて歎じて曰く『沙門瞿曇の所說師の如し、沙門瞿曇の所說善師の如し。』拘薩羅王波斯匿白して曰く『瞿曇、我但現世の義を問はず、亦復後世の義を問はんと欲す。我が問を聽すや。』世尊告げて曰はく『大王、問はんと欲せば意の問ふ所を恣にせよ。』拘薩羅王波斯匿問ひて曰く『瞿曇、こゝに四種、刹利・梵志・居士・工師有り、これ後世に於て勝如有り差別有りや。』世尊答へて曰はく『こゝに四種、刹利・梵志・居士・工師有り、これ勝如有り差別有り、謂く後世に[於て]なり。こゝに四種、刹利・梵志・居士・工師有り、若しこの五斷支を成就すれば、必ず善師如來・無所著・正盡覺を得、必ず可意を得て不可意無く、亦長夜に於て義・饒益を得、安隱快樂なり。云何が五と爲す。多聞の聖弟子如來を信著し根生定立して謂く沙門・梵志・天及び魔・梵及び餘の世間能く奪ふ者無し。これを第一斷支と謂ふ。また次に大王、多聞の聖弟子少病無病にして等食道を成就し、熱せず冷めず正に不諍を樂ひ、謂く食飮消し正に安隱に消す。これを第二斷支と謂ふ。また次に大王、多聞の聖弟子諂無く誑無く質直にして如眞を世尊及び諸の梵行に現ず。これを第三斷支と謂ふ。また次に大王、多聞の聖弟子常に精進を行じ惡不善を斷じ諸の善法を修し、恒に自ら意を起し專一堅固にして諸の善本の爲に方便を捨てず。これを第四斷支と謂ふ。また次に大王、多聞の聖弟子智慧を修行し興衰の法を觀じ、かくの如き智を得、聖慧明達し分別曉

【八】五斷支(Pañca padh-niyaṅgāni)。五種の勤勉して求むべき性質。

佛を見たまはゞ當に我等が爲に世尊に稽首し、聖體康强、安快無病にして起居輕便、氣力常の如きやと問訊したてまつるべしと。故に是の如く世尊に白す、賢及び月の姉妹世尊に稽首し、聖體康强、安快無病にして起居輕便、氣力常の如きやと問訊したてまつると。翟曇、彼の賢及び月、世尊に稽首し、聖體康强、安快無病にして起居輕便、氣力常の如きやと問訊したてまつる。』世尊答へて曰はく『大王、今賢及び月の姉妹安隱快樂なれ、今天及び人・阿修羅・揵塔和・羅刹及び餘の若干身安隱快樂なれ。』こゝに於て拘薩羅王波斯匿佛と共に相問訊し却きて一面に坐し白して曰く『翟曇、我問ふ所有らんと欲す。聽きて乃ち敢へて陳ぶるや。』世尊告げて曰はく『大王、問はんと欲せば意の問ふ所を恣にせよ。』拘薩羅王波斯匿すなはち問ひて曰く『翟曇、我沙門翟曇是の如き說を作すと聞く、本[五]無く、當に有らざるべく、今現に亦無し。若し餘の沙門梵志ありて、一切知り一切見るものと。翟曇、是の如く說けるを憶ふや。』世尊答へて曰はく『大王、我是の如き說を作せるを憶はず、本無く、當に有らざるべく、今現に亦無し。若し餘の沙門梵志ありて一切知り一切見るものと。』その時鞞[六]留羅大將拘薩羅王波斯匿の後に住在し拂を執りて王を拂ひぬ。こゝに於て拘薩羅王波斯匿迴顧して鞞留羅大將に告げて曰く『前日王大衆と共に坐し誰か最も前に、沙門翟曇是の如き說を作す、本無く、當に有らざるべく、今現に亦無し、若し餘の沙門梵志ありて一切知り一切見る者と、說けるや。』鞞留羅大將答へて曰く『天王、想年少吉祥子[七]有りて前にこの說を作しぬ。』拘薩羅王波斯匿聞き已りて一人に告げて曰く『汝想年少吉祥子の所に往至し是の如き語を作せ、拘薩羅王波斯匿汝を呼ぶと。』彼の人敎を受けて卽ち想年少吉祥子の所に往き是の如き語を作しぬ『年少、拘薩羅王波斯匿汝を呼ぶ。』彼の人去りて後、こゝに於て拘薩羅王波斯匿世尊に白して曰く『沙門翟曇、頗し異說異受有りて沙門翟曇、說きし所を憶ふや。』世尊答へて曰はく『大王、我憶ふに、曾て是の如く說きぬ、本無く、當に有らざるべく、今現に亦無し、若し餘の沙門梵志ある時は一切を知りある時は一切を

【五】巴利文「一切智者一切見者にして、絶對の智見を有すと公言し得る沙門婆羅門あらずと。」

【六】鞞留羅大將（Vidūḍabha）。

【七】想年少吉祥子（Sañjaya Brāhmaṇa Ākāsagotta）。

に至り窓を開きて戸を閉ぢ密處に座を布き尼師檀を敷きて結跏趺坐しぬ。彼の時使人還りて拘薩羅王波斯匿の所に詣り白して曰く『天王、我已に沙門瞿曇に通じぬ。沙門瞿曇今天王を待つ。唯願はくは天王、自ら當に時を知りたまふべし。』拘薩羅王波斯匿御者に告げて曰く『汝駕を嚴るべし。我今往きて沙門瞿曇を見んと欲す。』御者教を受けて卽便ち駕を嚴りぬ。その時[四]賢及び月の姉妹拘薩羅王波斯匿と共に坐して食せる時、今日拘薩羅王波斯匿當に往きて佛を見るべしと聞き白して曰く『大王、若し今往きて世尊を見たまはゞ、願はくは我等が爲に世尊に稽首し、聖體康强、安快無病にして起居輕便、氣力常の如きやと問訊し、是の如き語を作したまへ、賢及び月の姉妹世尊に稽首して聖體康强、安快無病にして起居輕便、氣力常の如きやと問訊したてまつると。』拘薩羅王波斯匿賢及び月の姉妹の爲に默然として而も受けぬ。彼の時御者駕を嚴り已訖りて白して曰く『天王、駕を嚴ること已に辦じぬ。天王の意に隨ひたまへ。』時に王聞き已りて卽便ち車に乘り鬱頭隨若より出でゝ普棘刺林に往至しぬ。その時普棘刺林の門外に衆多の比丘露地に經行しぬ。拘薩羅王波斯匿諸の比丘の所に往詣し問ひて曰く『諸賢、沙門瞿曇今何處に在りや。我往きて見んと欲す。』諸の比丘答へて曰く『大王、彼の東向の大屋窓を開き戸を閉ぢ世尊中に在す。大王見んと欲せば彼の屋に詣り外に在りて住し已りて謦欬して戸を敲くべし。世尊聞きたまはゞ必ず爲に戸を開きたまはん。』拘薩羅王波斯匿卽便ち車を下り眷屬に圍遶せられ歩きて彼の東向の大屋に往至し、到り已りて外に住し謦欬して戸を敲きぬ。世尊聞き已りて卽ち爲に戸を開きたまひぬ。拘薩羅王波斯匿すなはち彼の屋に入り前みて佛の所に詣り白して曰く『瞿曇、賢及び月の姉妹世尊に稽首し、聖體康强、安快無病にして起居輕便、氣力常の如きやと問訊したてまつる。』世尊王に問ひたまはく『賢及び月の姉妹更に人の使ふ無きや。』拘薩羅王波斯匿白して曰く『瞿曇、當に知るべし。今日賢及び月の姉妹我と共に坐して食し、我今當に往きて佛を見んと欲すべしと聞きすなはち白して曰く、大王、若し往きて

【四】賢(Sukula)、月(Soma)。

巻の第五十九

例品第四（十一經有り）

〔十一經とは〕一切智、法〔莊〕嚴、鞞訶〔提〕、第一得、愛生・及び八城、阿那律陀二あり、〔諸〕見・箭喩（比）例最も後に在り。

二百十二、[一] 一切智經第一

我が聞きしこと是の如し。ある時佛 欝頭隨若[二]に遊び 普棘刺林[三]に在しぬ。その時拘薩羅王波斯匿沙門瞿曇欝頭隨若に遊び普棘刺林に在りと聞きぬ。拘薩羅王波斯匿聞き已りて一人に告げて曰く『汝沙門瞿曇の所に往詣し、我が爲に問訊せよ、聖體康强、安快無病にして起居輕便、氣力常の如きやと。是の如き語を作せ、拘薩羅王波斯匿、聖體康强、安快無病にして起居輕便、氣力常の如きやと問訊したてまつると。又復語げて曰く、拘薩羅王波斯匿來りて相見んと欲すと。』彼の人教を受けて佛の所に往詣し共に相問訊し却きて一面に坐し白して曰く『瞿曇、拘薩羅王波斯匿、聖體康强、安快無病にして起居輕便、氣力常の如きやと問訊したてまつる。拘薩羅王波斯匿來りて相見んと欲す。』世尊答へて曰はく『今拘薩羅王波斯匿安隱快樂なれ。今天及び人、阿修羅・揵搭和・羅刹及び餘の若干身安隱快樂なれ。拘薩羅王波斯匿若し來らんと欲せば、自ら意に隨ふべし。』彼の時使人佛の所說を聞きて善く受け持し誦して卽ち坐より起ち遶三匝して去りぬ。その時尊者阿難世尊の後に住し拂を執りて佛に侍しぬ。使人去りて後、こゝに於て世尊迴顧して告げて曰はく『阿難、汝來りて共に東向の大屋に詣り窓を開きて戶を閉ぢ彼の密處に住せよ。今日拘薩羅王波斯匿一心無亂に法を聽受せんと欲す。』尊者阿難白して曰く『唯然り。』こゝに於て世尊尊者阿難を將ゐて彼の東向の大屋

【一】 M. 90, Kaṇṇakatthala-sutta.
【二】 欝頭隨若（Ujuññā）。
【三】 普棘刺林（Kaṇṇakatthala）。

羅、幾くの因幾くの緣有りて無想定より起つや。』尊者大拘絺羅答へて曰く『三因三緣有りて無想定より起つ。云何が三と爲す。一には一切の想を念じ、二には無想界を念ぜず、三にはこの身に因り六處に因り命根に緣る。(31)これを三因三緣ありて無想定より起つと謂ふ。』是の如く彼の二尊更に相稱歎し善き哉善き哉と。更互に說く所、歡喜奉行し、坐より起ちて去りぬ。

中阿含經卷第五十八

(31)三因三緣從₂無想定₁起。

觸、二には無所有觸、三には無相觸なり。比丘滅盡定より起つ時、(25)この三觸に觸る。』尊者舍黎子聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢者拘絺羅。』尊者舍黎子歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢者拘絺羅、空・無願・無相、この三法義を異にし文を異にするや、義を一にし文を異にすると爲すや。』賢者大拘絺羅答へて曰く『空・無願・無想、(26)この三法義を異にし文を異にす。』尊者舍黎子聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢者拘絺羅。』尊者舍黎子歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢者拘絺羅、幾くの因幾くの緣有りて不移動定を生ずるや。』尊者大拘絺羅答へて曰く『四因四緣有りて不移動定を生ず。云何が四と爲す。若し比丘欲を離れ惡不善の法を離れ、[乃]至第四禪を得、成就して遊ぶ。(27)これを四因四緣ありて不移動定を生ずと謂ふ。』尊者舍黎子聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢者拘絺羅。』尊者舍黎子歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢者拘絺羅、幾くの因幾くの緣有りて無所有定を生ずるや。』尊者大拘絺羅答へて曰く『三因三緣有りて無所有定を生ず。云何が三と爲す。若し比丘一切の色想を度り、[乃]至無所有處を得、成就して遊ぶ。(28)これを三因三緣有りて無所有定を生ずと謂ふ。』尊者舍黎子聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢者拘絺羅。』尊者舍黎子歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢者拘絺羅、幾くの因幾くの緣有りて無想定を生ずるや。』尊者大拘絺羅答へて曰く『二因二緣有りて無想定を生ず。云何が二と爲す。一には一切の想を念ぜず、二には無想界を念ず。(29)これを二因二緣ありて無想定を生ずと謂ふ。』尊者舍黎子聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢者拘絺羅。』尊者舍黎子歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢者拘絺羅、幾くの因幾くの緣有りて無想定に住するや。』尊者大拘絺羅答へて曰く『二因二緣有りて無想定に住す。云何が二と爲す。一には一切の想を念ぜず、二には無想界を念ず。(30)これを二因二緣ありて無想定に住すと謂ふ。』尊者舍黎子聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢者拘絺羅。』尊者舍黎子歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢者拘絺

---

(25)觸二三觸一。

【E】空(Suññata)、無願(Appaṇihita)、無相(Animitta)。

(26)三法異レ義異レ文。

(27)四因四緣生二不移動定一。

(28)三因三緣生二無所有定一。

(29)二因二緣生二無想定一。

(30)二因二緣住二無想定一。

行しぬ。また問ひて曰く『賢者拘絺羅、若し死[者]と及び滅盡定に入るものとは何の差別有りや。』尊者大拘絺羅答へて曰く『死は壽命滅訖し溫暖已に去り諸根敗壞す。比丘滅盡定に入るは、壽滅訖せず暖亦去らず諸根敗壞せず。死[者]と及び滅盡定に入るものとは、(20)これを差別と謂ふ。』尊者舍黎子聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢者拘絺羅。』尊者舍黎子歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢者拘絺羅、若し滅盡定に入ると及び無想定に入るとは何の差別有りや。』尊者大拘絺羅答へて曰く『比丘滅盡定に入るは、想及び知滅す。比丘無想定に入るは、想知滅せず。若し滅盡定に入ると及び無想定に入るとは、(21)これを差別と謂ふ。』尊者舍黎子聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢者拘絺羅。』尊者舍黎子歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢者拘絺羅、若し滅盡定より起つと及び無想定より起つとは、何の差別有りや。』尊者大拘絺羅答へて曰く『比丘滅盡定より起つ時是の如く念ぜず、我滅盡定より起つと。比丘無想定より起つ時是の如き念を作す、我有想と爲すや、我無想と爲すやと。滅盡定より起つと及び無想定より起つとは、(22)これを差別と謂ふ。』尊者舍黎子聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢者拘絺羅。』尊者舍黎子歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢者拘絺羅、比丘滅盡定に入る時先づ何法を滅するや、身行と爲すや口・意行と爲すや。』尊者大拘絺羅答へて曰く『比丘滅盡定に入る時、(23)先づ身行を滅し次に口行を滅し後に意行を滅す。』尊者舍黎子聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢者拘絺羅。』尊者舍黎子歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢者拘絺羅、比丘滅盡定より起つ時先づ何法を生ずるや、身行・口・意行と爲すや。』尊者大拘絺羅答へて曰く『比丘滅盡定より起つ時(24)先づ意行を生じ次に口行を生じ後に身行を生ず。』尊者舍黎子聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢者拘絺羅。』尊者舍黎子歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢者拘絺羅、比丘滅盡定より起つ時幾くの觸に觸るゝや。』賢者大拘絺羅答へて曰く『比丘滅盡定より起つ時三觸に觸る。云何が三と爲す。一には不移動

(20)死及入滅盡定差別。

(21)入滅盡定及入無想定差別。

(22)從二滅盡定一起及從二無想定一起差別。

(23)先滅二身行、次口意行一。

(24)先生二意行次口身行一。

に盡く境界を受け、誰か彼の依と爲るや。』尊者大拘絺羅答へて曰く『五根の異行、異境界各々自ら境界を受く。眼根・耳・鼻・舌・身根なり。この五根の異行、異境界各々自境界を受け、意彼の爲に盡く境界を受け、(15)意彼の依と爲る。』尊者舎黎子聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢者拘絺羅。』尊者舎黎子歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢者拘絺羅、意は何に依りて住するや。』尊者大拘絺羅答へて曰く(16)『意は壽に依り壽に依りて住す。』尊者舎黎子聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢者拘絺羅。』尊者舎黎子歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢者拘絺羅、壽は何に依りて住するや。』尊者大拘絺羅答へて曰く(17)『壽は暖に依り暖に依りて住す。』尊者舎黎子聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢者拘絺羅。』尊者舎黎子歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢者拘絺羅、壽及び暖この二法合すると爲すや、別なりと爲すや、この二法別に施設するを得べきや。』尊者大拘絺羅答へて曰く『壽及び暖この二法合して別ならず、この二法別に施設すべからず。所以者何。壽に因るが故に暖有り、暖に因るが故に壽有り。若し壽無ければ則ち暖無く、暖無ければ則ち壽無し。猶ほ油に因り炷に因るが故に燈を燃すを得るが如し。彼の中燄に因るが故に光有り、光に因るが故に燄有り。若し燄無ければ則ち光無く、光無ければ則ち燄無し。是の如く壽に因るが故に暖有り、暖に因るが故に壽有り。若し壽無ければ則ち暖無く、暖無ければ則ち壽無し。(18)この故にこの二法合して別ならず、この二法別に施設すべからず。』尊者舎黎子聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢者拘絺羅。』尊者舎黎子歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢者拘絺羅、幾くの法有りて生身死し已りて身塚間に棄てられ木の如くにして情無きや。』尊者大拘絺羅答へて曰く『三法有りて生身死し已りて身塚間に棄てられ木の如くにして情無し。云何が三と爲す。一には壽二には暖三には識なり。(19)この三法ありて生身死し已りて身塚間に棄てられ木の如くにして情無し。』尊者舎黎子聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢者拘絺羅。』尊者舎黎子歎じ已りて歡喜奉

(15)意爲二五根依一。
(16)意依レ壽。
(17)壽依レ暖。
(18)壽暖二法不レ別。不レ可二別施設一。
(19)有二三法一如レ木無レ情。

の攝する所、二には戒の攝する所、三には博聞の攝する所、四には止の攝する所、五には觀の攝する所なり。(9)これを五支有りて正見を攝し心解脫果慧解脫果を得、心解脫功德慧解脫功德を得と謂ふ。』尊者舍黎子聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢者拘絺羅。』尊者舍黎子歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢者拘絺羅、云何が當來の有を生ずるや。』尊者大拘絺羅答へて曰く『愚癡の凡夫無知不多聞にして無明に覆はれ愛結に繫がれ、善知識を見ず聖法を知らず聖法を御せず。(10)これを當來の有を生ずと謂ふ。』尊者舍黎子聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢者拘絺羅。』尊者舍黎子歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢者拘絺羅、云何が當來の有を生ぜざるや。』尊者大拘絺羅答へて曰く『若し無明已に盡き明已に生ずれば、必ず苦を盡す。(11)これを當來の有を生ぜずと謂ふ。』尊者舍黎子聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢者拘絺羅。』尊者舍黎子歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢者拘絺羅、幾くの覺有りや。』尊者大拘絺羅答へて曰く『三覺有り。樂覺苦覺不苦不樂覺なり。これ何に緣りて有りや。(12)更樂に緣りて有り。』尊者舍黎子聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢者拘絺羅。』尊者舍黎子歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢者拘絺羅、覺・想・思の三法合すると爲すや、別なりと爲すや、この三法別に施設すべきや。』尊者大拘絺羅答へて曰く『覺・想・思この三法合して別ならず、この三法別に施設すべからず。所以者何。覺の覺る所は卽ちこれ想の想ふ所、思の思ふ所なり(13)この故にこの三法合して別ならず、この三法別に施設すべからず。』尊者舍黎子聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢者拘絺羅。』尊者舍黎子歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢者拘絺羅、滅は何の對有りや。』尊者大拘絺羅答へて曰く(14)『滅は對有ること無し。』尊者舍黎子聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢者拘絺羅。』尊者舍黎子歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢者拘絺羅、五根の異行、異境界有りて各々自境界を受く。眼根・耳・鼻・舌・身根なり。この五根の異行異境界各々自境界を受く。誰か彼の爲

(9)有二五支一攝二正見一。
(10)生二當來有一。
(11)不レ生二當來有一。
(12)三覺緣二更樂一有。
(13)三法不レ別、不レ可二別施設一。
(14)滅無レ對。

なりや。』尊者大拘絺羅答へて曰く『識これを識るが故に識と說く。何等を識るや。色を識り聲・香・味・觸・法を識る。(4)識これを識るが故に識と說く。』尊者舍黎子聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢者拘絺羅。』尊者舍黎子歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢者拘絺羅、智慧及び識、この二法合すると爲すや、別なりと爲すや、この二法別に施設するを得べきや。』尊者大拘絺羅答へて曰く『この二法合して別ならず、この二法別に施設すべからず。所以者何。智慧の知る所卽ちこれ識の識る所なり。(5)この故この二法合して別ならず、この二法別に施設すべからず。』尊者舍黎子聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢者拘絺羅。』尊者舍黎子歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢者拘絺羅、知は汝何等を以て知るや。』尊者大拘絺羅答へて曰く『知は我智慧を以つて知る。』尊者舍黎子聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢者拘絺羅。』尊者舍黎子歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢者拘絺羅、智慧何の義有り何の勝有り何の功德有りや。』尊者大拘絺羅答へて曰く(6)『智慧は厭の義無欲の義見如眞の義有り。』尊者舍黎子聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢者拘絺羅。』尊者舍黎子歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢者拘絺羅、云何が正見なる。』尊者大拘絺羅答へて曰く『苦の如眞を知り苦の習滅道の如眞を知れば、(7)これを正見と謂ふ。』尊者舍黎子聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢者拘絺羅。』尊者舍黎子歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢者絺拘羅、幾くの因幾くの緣ありて正見を生ずるや。』尊者大拘絺羅答へて曰く『二因二緣ありて而も正見を生ず。云何が二と爲す。一には他より聞き二には內に自ら思惟す。(8)これを二因二緣ありて而も正見を生ずと謂ふ。』尊者舍黎子聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢者拘絺羅。』尊者舍黎子歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢者拘絺羅、幾くの支有りて正見を攝し心解脫果慧解脫果を得、心解脫功德慧解脫功德を得るや。』尊者大拘絺羅答へて曰く『五支有りて正見を攝し心解脫果慧解脫果を得、心解脫功德慧解脫功德を得。云何が五と爲す。一には眞諦

(4)識。

(5)二法不レ別。不レ可ニ別施設一。

(6)智慧厭義、無欲義、見如眞義。

(7)正見。

(8)正見之二因二緣。

來りて我に問はゞ、我毘舍佉優婆夷の爲に亦この義を以てこの句を以てこの文を以て而も彼に答へん。比丘尼、この義汝が所說の如く、汝當に是の如く持すべし。所以者何。この說卽ちこれ義なるが故に。』佛說是の如し。法樂比丘尼及び諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

二百十一、大拘絺羅經第十[一]

我が聞きしこと是の如し。ある時佛王舍城に遊び竹林迦蘭哆園に在しぬ。その時　尊者舍梨子[二]則ち晡時に於て燕坐より起ち尊者　大拘絺羅[三]の所に往詣し共に相問訊し却きて一面に坐しぬ。尊者舍梨子語げて曰く『賢者拘絺羅、問ふ所有らんと欲す。我が問を聽すや。』尊者大拘絺羅白して曰く『尊者舍梨子、問はんと欲せばすなはち問へ。我聞き已りて當に思ふべし。』尊者舍梨子問ひて曰く『賢者拘絺羅・不善は不善と說き不善根は不善根と說く。何者か不善にして何者か不善根なりや。』尊者大拘絺羅答へて曰く『身惡行・口・意惡行これ不善なり。貪・恚・癡これ不善根なり。(1)これを不善と謂ひこれを不善根と謂ふ。』尊者舍梨子聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢者拘絺羅。』尊者舍梨子歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢者拘絺羅、善　善と說き善根は善根と說く。何者か善と爲し何者か善根なりや。』尊者大拘絺羅答へて曰く『身妙行・口・意妙行これ善なり、不貪・不恚・不癡これ善根なり。(2)これを謂ひて善と爲しこれを善根と謂ふ。』尊者舍梨子聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢者拘絺羅。』尊者舍梨子歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢者拘絺羅、智慧は智慧と說く。何者か智慧なる。』尊者大拘絺羅答へて曰く『是の如きを知るが故に智慧と說く。何等を知るや。この苦の如眞を知りこの苦の習を知りこの苦の滅を知りこの苦滅道の如眞を知る。(3)是の如きを知るが故に智慧と說く。』尊者舍梨子聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢者拘絺羅。』尊者舍梨子歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢者拘絺羅、識は識と說く。何者か識

【一】 M. 43, Mahā-Vedalla sutta.
【二】 舍梨子(Sāriputta)。舍利子舍利弗と同じ。
【三】 大拘絺羅(Mahā-Koṭṭhita)。

(1)不善、不善根。

(2)善、善根。

(3)智慧。

(25)『苦覺は樂覺を以つて對と爲す。』毘舍佉優婆夷聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢聖。』法樂比丘尼答へて曰く(26)『樂覺苦覺は不苦不樂を以て對と爲す。』毘舍佉優婆夷聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢聖。』毘舍佉優婆夷歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢聖、不苦不樂覺は何の對有りや。』法樂比丘尼答へて曰く(27)『不苦不樂覺は無明を以つて對と爲す。』毘舍佉優婆夷聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢聖。』毘舍佉優婆夷歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢聖。無明は何の對有りや。』法樂比丘尼答へて曰く(28)『無明は明を以て對と爲す。』毘舍佉優婆夷聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢聖。』毘舍佉優婆夷歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢聖、明は何の對有りや。』法樂比丘尼答へて曰く(29)『明は涅槃を以て對と爲す。』毘舍佉優婆優聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢聖。』毘舍佉優婆夷歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢聖、涅槃は何の對有りや。』法樂比丘尼告げて曰く『君無窮の事を問はんと欲す。然も君事を問ひて我が邊を窮むることを得る能はず。涅槃は對無し。涅槃は羂無く羂を過ぐるを以て羂々滅訖す。この義を以ての故に世尊に從ひて梵行を行ず。』こゝに於て毘舍佉優婆夷法樂比丘尼の所說を聞きて善く受け善く持し善く誦習し已りて卽ち坐より起ち稽首して法樂比丘尼の足を禮し繞三匝して而も去りぬ。こゝに於て法樂比丘尼毘舍佉優婆夷の去るを見、後久しからずして佛の所に往詣し佛足に稽首し却きて一面に坐し、毘舍佉優婆夷と共に論ぜし所の者盡く佛に向ひて說き、叉手を佛に向け白して曰く『世尊、我是の如く說き是の如く答へぬ。世尊を誣謗すると爲すに非ざるや、眞實を說き如法を說き法次法を說くや、如法中に於て相違有り諍有り咎有るに非ざるや。』世尊答へて曰はく『比丘尼、汝是の如く說き是の如く答ふるも我を誣謗せず。汝眞實を說き如法を說き法次法を說き、如法中に於て而も相違せず諍答無し。比丘尼、若し毘舍佉優婆夷この句を以てこの文を以て

(25)苦覺は樂覺を對す。
(26)樂覺苦覺は不苦不樂を對とす。
(27)不苦不樂は無明を對とす。
(28)無明は明を對とす。
(29)明は涅槃を對とす。

あり。この覺を不苦不樂覺と謂ふ。』毘舍佉優婆夷聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢聖。』毘舍佉優婆夷歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢聖、樂覺は云何が樂あり云何が苦あり云何が無常にして云何が災患あり云何が使なりや。苦覺は云何が樂あり云何が苦あり云何が無常にして云何が災患あり云何が使なりや。不苦不樂覺は云何が樂あり云何が苦あり云何が無常にして云何が災患あり云何が使なりや。』法樂比丘尼答へて曰く『(22)樂[一五]覺は生は樂、住は樂、變易は苦、無常は即ちこれ災患にして欲は使なり。苦覺は生は苦、住は苦、變易は樂、無常は即ちこれ災患にして恚は使なり。不苦不樂覺は不知は苦、不知は樂、無常は即ちこれ變易にして無明は使なり。』毘舍佉優婆夷聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢聖。』毘舍佉優婆夷歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢聖、一切の樂覺欲使なりや。一切の苦覺恚使なりや。一切の不苦不樂覺無明使なりや。』法樂比丘尼答へて曰く『(23)一切の樂覺欲使なるに非ず。一切の苦覺恚使なるに非ず。一切の不苦不樂覺無明使なるに非ず。云何が樂覺欲使に非ざるや。若し比丘欲を離れ惡不善の法を離れ、覺有り觀有り、離より生ずる喜と樂とあり初禪を得、成就して遊べば、これを樂覺欲使に非ずと謂ふ。所以者何。これ欲を斷ずるが故に。云何が苦覺恚使に非ざるや。若し上解脫樂を求め、求願悒悒して憂苦を生ずれば、これを苦覺恚使に非ずと謂ふ。所以者何。これ恚を斷ずるが故に。云何が不苦不樂覺無明使に非ざるや。樂滅し苦滅し喜憂は本已に滅し、不苦不樂にして捨あり念あり、淸淨にして第四禪を得、成就して遊ぶ。これを不苦不樂覺無明使に非ずと謂ふ。所以者何。これ無明を斷ずるが故に。』毘舍佉優婆夷聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢聖。』毘舍佉優婆夷歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢聖、樂覺は何の對ありや。』法樂比丘尼答へて曰く(24)『樂覺は苦覺を以つて對と爲す。』毘舍佉優婆夷聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢聖。』毘舍佉優婆夷歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢聖。苦覺は何の對有りや。』法樂比丘尼答へて曰く

【一五】樂覺は生ずると住するとは樂、その變化は苦、無常は災患にして欲は使（Anusaya）なり。

(22)一覺の苦・樂・無常・災患・使。

(23)樂覺必ずしも欲使に非ず。苦覺恚使に非ず、不苦不樂覺無明使に非ず。

(24)樂覺は苦覺を對とす。

と、及び無想定より起つ者と、何の差別有りや。』法樂比丘尼答へて曰く『比丘滅盡定より起つ時この念を作さず、我滅盡定より起たんと。比丘無想定より起つ時是の如き念を作す、我想有りと爲し、我想無しと爲すと。若し滅盡定より起つ[者]と、及び無想定より起つ者と、(16)これを差別と謂ふ。』毘舍佉優婆夷聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢聖。』毘舍佉優婆夷歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢聖、比丘滅盡定に入る時、我滅盡定に入ると、是の如き念を作すや。』法樂比丘尼答へて曰く『比丘滅盡定に入る時この念を作さず、(17)我滅盡定に入ると。然も本是の如く心を修習す。こゝを以っての故に是の如く趣向す。』毘舍佉優婆夷聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢聖。』毘舍佉優婆夷歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢聖、比丘滅盡定より起つ[時、]我滅盡定より起つと、是の如き念を作すや。』法樂比丘尼答へて曰く『比丘滅盡定より起つ時、この念を作さず、(18)我滅盡定より起つと。然もこの身及び六處に因り命根に緣る。この故に定より起つ。』毘舍佉優婆夷聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢聖。』毘舍佉優婆夷歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢聖、比丘滅盡定より起ち已りて心何の樂しむ所何の趣く所何の順ふ所ありや。』法樂比丘尼答へて曰く『比丘滅盡定より起ち已りて(19)心離を樂み離に趣き離に順ふ。』毘舍佉優婆夷聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢聖。』毘舍佉優婆夷歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢聖、幾くの覺有りや。』法樂比丘尼答へて曰く『三覺有り。樂覺・苦覺・不苦不樂覺なり。これ何に緣りて有りや。(20)更樂に緣りて有り。』毘舍佉優婆夷聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢聖。』毘舍佉優婆夷歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢聖、云何が樂覺なり、云何が苦覺なり、云何が不苦不樂覺なりや。』法樂比丘尼答へて曰く『(21)若し樂更樂に觸れられて生ずれば、身心樂善覺あり。この覺を樂覺と謂ふ。若し苦更樂に觸れられて生ずれば、身心苦不善覺あり。この覺を苦覺と謂ふ。若し不苦不樂更樂に觸れられて生ずれば、身心不苦不樂非善非不善覺

(15)二無心定者の別。

(16)二無心定を起つものゝ別。

(17)滅盡定に入るの念なし。

(18)滅盡定より起つの念なし。

(19)樂ㇾ離、趣ㇾ離、順ㇾ離(Vivekaninna', vivekapoṇa, vivekapabbhāra)。

(20)三覺あり、更樂によりて起る。

(21)三種の更樂によりて三種の覺あり。

夷聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢聖。』毘舍佉優婆夷歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢聖、初禪幾支有りや。』法樂比丘尼答へて曰く『(11)初禪五支有り。覺・觀・喜・樂・一心なり。これを初禪五支有りと謂ふ。』毘舍佉優婆夷聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢聖。』毘舍佉優婆夷歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢聖、云何が斷、云何が定相、云何が定力、云何が定功、云何が修定なりや。』法樂比丘尼答へて曰く『若し善く心一を得れば、(12)これを定と謂ふ。四念處、これを定相と謂ひ、四正斷、これを定力と謂ひ、四如意足、これを定功と謂ひ、若しこの諸の善法服を習ひ數々專修し精勤すれば、これを修定と謂ふ。』毘舍佉優婆夷聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢聖。』毘舍佉優婆夷歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢聖、幾くの法有りて生身死し已りて身塚間に棄てられ木の如く無情なりや。』法樂比丘尼答へて曰く『三法有りて生身死已りて身塚間に棄てられ木の如く無情なり。云何が三と爲す。一には壽、二には暖、三には識なり。(13)これを三法ありて生身死し已りて身塚間に棄てられ木の如く無情なりと謂ふ。』毘舍佉優婆夷聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢聖。』毘舍佉優婆夷歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢聖、若し死[者]と及び[一]滅盡定に入る者と何の差別有りや。』法樂比丘尼答へて曰く『死者は壽命滅し訖り溫暖已に去り諸根敗壞す。比丘滅盡定に入れば壽滅し訖らず暖亦去らず諸根敗壞せず。(14)若し死[者]と及び滅盡定に入る者と、これを差別と謂ふ。』毘舍佉優婆夷聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢聖。』毘舍佉優婆夷歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢聖、若し滅盡定に入る[者]と、及び[二]無想定に入る者と、何の差別有りや。』法樂比丘尼答へて曰く『比丘滅盡定に入れば[三]想及び知滅し、無想定に入れば想知滅せず。若し滅盡定に入る[者]と、及び無想定に入る者と、(15)これを差別と謂ふ。』毘舍佉優婆夷聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢聖。』毘舍佉優婆夷歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢聖、若し滅盡定より起つ[者]

(11)初禪五支。

(12)定、定相、定力、定功、修定。

(13)壽・暖・識の三法。

【一】滅盡定(Nirodha-samāpatti)。又滅受想定(Saññā-vedayita-nirodha)ともいふ。心心所を滅して起らざらしむる定をいふ。この定に入れるものは一見死者の如し。

(14)死者と入滅盡定者との差別。

【二】無想定(Asaññi-samāpatti)。第四禪の無想天に生れんがため、外道の修する定。

【三】想と受とを滅す。故にこれを「滅受想定」とも呼ぶ。

吐き盡し染まず滅し息め沒す。(4)これを自身滅すと謂ふ。』毘舍佉優婆夷聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢聖。』毘舍佉優婆夷歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢聖、陰を陰盛と說き、陰を盛陰と說き、陰は卽ちこれ盛陰なり、盛陰は卽ちこれ陰なりや。陰異り盛陰異ると爲すや。』法樂比丘尼答へて曰く『或は陰は卽ちこれ盛陰なり、或は陰は盛陰に非ず。云何が陰卽ちこれ盛陰なりや。若し色漏有り受有り、覺・想・行・識漏有り受有れば、(5)これを陰は卽ちこれ盛陰なりと謂ふ。云何が陰盛陰に非ざるや。色漏無く受無く、覺・想・行・識漏無く受無ければ、これを陰盛陰に非ずと謂ふ。』毘舍佉優婆夷聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢聖。』毘舍佉優婆夷歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢聖、云何が八支聖道なりや。』法樂比丘尼答へて曰く『八支聖道とは、正見乃至正定これを謂ひて八と爲し、(6)これを八支聖道と謂ふ。』毘舍佉優婆夷聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢聖。』毘舍佉優婆夷歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢聖、八支聖道【九】有爲なりや。』法樂比丘尼答へて曰く『是の如し。(7)八支聖道有爲なり。』毘舍佉優婆夷聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢聖。』毘舍佉優婆夷歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢聖、幾聚有りや。』法樂比丘尼答へて曰く『(8)三聚有り。【一〇】戒聚・定聚・慧聚なり。』毘舍佉優婆夷聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢聖。』毘舍佉優婆夷歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢聖、八支聖道三聚を攝するや、三聚八支聖道を攝すると爲すや。』法樂比丘尼答へて曰く『八支聖道三聚を攝するに非ず、(9)三聚八支聖道を攝す。正語・正業・正命、この三道支は聖戒聚の攝する所、正念・正定、この二道支は聖定聚の攝する所、正見・正志・正方便、この三道聖支は慧聚の攝する所なり。これを八支聖道三聚を攝するに非ず、三聚八支聖道を攝すと謂ふ。』毘舍佉優婆夷聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢聖。』毘舍佉優婆夷歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢聖、滅有對なりや。』法樂比丘尼答へて曰く『(10)滅無對なり。』毘舍佉優婆

(4)滅二身見一。

(5)陰卽盛陰、陰非二盛陰一。

(6)八支聖道。

【九】有爲(Saṅkhata)。
(7)八支聖道有爲也。

【10】(8)三聚、戒聚(Sīlakkhandha)定聚(Samādhikkhandha)、慧聚(Paññākkhandha)。

(9)三聚攝二八支聖道一。

(10)滅無對。

卷の第五十八

二百十、法樂比丘尼經第九[一]

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時[二]毘舍佉優婆夷[三]法樂比丘尼の所に往詣し稽首して足を禮し却きて一面に坐し法樂比丘尼に白して曰く『[四]賢聖、問ふ所有らんと欲す。我が問を聽すや。』法樂比丘尼答へて曰く『毘舍佉、問はんと欲せばすなはち問へ。我聞き已りて當に思ふべし。』毘舍佉優婆夷すなはち問ひて曰く『賢聖、[五]自身を自身と說く。云何が自身と爲すや。』法樂比丘尼答へて曰く『世尊[六]五盛陰を說きたまふ、(1)自身は色盛陰・覺・想・行・識盛陰なりと。これを世尊五盛陰を說きたまふと謂ふ。』毘舍佉優婆夷聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢聖。』毘舍佉優婆夷歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢聖、云何が[七]自身見と爲すや。』法樂比丘尼答へて曰く『[八]多聞ならざる愚癡の凡夫善知識を見ず聖法を知らず聖法を御せず。彼色これ神なりと見、神色有りと見、神中に色有りと見、色中に神有りと見、覺・想・行・識これ神なりと見、神識有りと見、神中に識有りと見、識中に神有りと見る(2)これを自身見と謂ふ。』毘舍佉優婆夷聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢聖。』毘舍佉優婆夷歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢聖、云何が身見無きや。』法樂比丘尼答へて曰く『多聞の聖弟子善知識を見、聖法を知り善く聖法を御す。彼色これ神なりと見ず、神色有りと見ず、神中色有りと見ず、色中神有りと見ず。覺・想・行・識これ神なりと見ず、神識有りと見ず、神中識有りと見ず、識中神有りと見ず。(3)これを身見無しと謂ふ。』毘舍佉優婆夷聞き已りて歎じて曰く『善き哉善き哉、賢聖。』毘舍佉優婆夷歎じ已りて歡喜奉行しぬ。また問ひて曰く『賢聖、云何が自身を滅するや。』法樂比丘尼答へて曰く『色盛陰斷じて餘無く、捨て吐き盡し染まず滅し息め沒す。覺・想・行・識盛陰斷じて餘無く、捨て

【一】 M. 44, Cūla-Vedalla-sutta.
【二】 毘舍佉優婆夷(Visākhā-upāsikā)。
【三】 法樂比丘尼(Dhammadinnā Bhikkhunī)。
【四】 賢聖 Ayyā の譯、「律」にては「大姉」と譯せり、比丘尼を尊びて呼ぶ稱。
【五】 自身(Sakkāya)。
【六】 五盛陰 (Pañca Upādānakkhandha)、色覺(＝受)想行識の五をいふ。有情の身心を組成せる法をいふ。
(1)自身。
【七】 自身見 (Sakkāya diṭṭhi)。
【八】 神、こゝに神といへるは總て我(Attā)なり。
(2)自身見。
(3)無二身見一。

て倶に熾にして遂に火焰を見る。後人更に草木・糠・糞掃を益す者有ること無ければ、前薪已に盡きて後[薪]更に益さず、受くる所無くして已に自ら速に滅す。是の如く迦旃、我是の如く說く、世の前際を置け世の後際を置け、設令一生も憶せざれど。我が弟子の比丘來りて諛諂せず欺誑せず質直なれば、我これを教化す。若し我が教化に隨ひて是の如く行ぜば、必ず正法を知るを得ん。』この法を說きたまひし時異學鞞摩那修塵を遠ざけ垢を離れ諸法の法眼生じぬ。こゝに於て異學鞞摩那修法を見、法を得、白淨の法を覺りて更に餘尊無く、また他に由らず、疑を斷じ惑を度し猶豫有ること無く、已に果證に住し世尊の法に於て無所畏を得、佛足に稽首して白して曰く『世尊、願はくは佛に從ひて出家學道するを得、具足を受け比丘たるを得て梵行を行ぜん。』世尊告げて曰はく『善き哉比丘として、梵行を行ぜよ。』異學佛に從ひて出家學道するを得、即ち具足を受け比丘たるを得て梵行を行じぬ。尊者鞞摩那修出家學道し具足を受け已りて法を知り法を見、乃至阿羅訶を得ぬ。佛說是の如し。尊者鞞摩那修及び諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

中阿含經卷第五十七

向ひて瞋恚し憎嫉・不可「意」を生じ我を誣謗せんと欲し我を墮さんと欲し、是の如く我を誣謗し是の如く我を墮して而も我に語げて曰く、瞿曇、一沙門梵志有り、世の前際を知らず世の後際を知らず、無窮の生死を知らずして而も究竟智を得、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辦じ更に有を受けずと如眞を知ると記說す。瞿曇、我この念を作す、云何がこの沙門梵志世の前際を知らず世の後際を知らず、無窮の生死を知らずして而も究竟智を得、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辦じ更に有を受けずと如眞を知ると記說するやと。世尊知り已りて告げて曰はく『迦旃、若し沙門梵志有りて世の前際を知らず世の後際を知らず、無窮の生死を知らずして而も究竟智を得、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辦じ更に有を受けずと如眞を知ると記說すれば、彼應に是の如く說くべし、世の前際を置け、世の後際を置けと。迦旃、我是の如く說く、世の前際を置け世の後際を置け、設ひ一生も憶せざれと。我が弟子の比丘來りて諛諂せず欺誑無くして質直なれば、我これを敎化す。若し我が敎化に隨ひて是の如く行ぜば、必ず正法を知るを得ん。迦旃、猶ほ嬰孩の童子少年柔軟にして仰ぎ向きて臥するを父母彼の手足を縛するが如し。彼後に於て轉た大となり諸根成就す。父母彼の手足を解く。彼唯縛を解く時を憶して縛せる時を憶せず。是の如く迦旃、我是の如く說く、世の前際を置け世の後際を置け。設令一生も憶せざれと。我が弟子の比丘來りて諛諂せず欺誑せず質直なれば、我これを敎化す。若し我が敎化に隨ひて是の如く行ぜば、必ず正法を知るを得ん。迦旃、譬へば油に因り炷に因りて而も燈を燃すが若し。人油を益す無く亦炷を易へざれば、前油已に盡きて後「油」更に益さず、受くる所無くして已に自ら速に滅す。是の如く迦旃、我是の如く說く、世の前際を置け世の後際を置け、設令一生も憶せざれと。我が弟子の比丘來りて諛諂せず欺誑せず質直なれば、我これを敎化す。若し我が敎化に隨ひて是の如く行ぜば、必ず正法を知るを得ん。迦旃、猶ほ十木聚・二十・三十・四十・五十・六十木聚の如し。火を以つてこれを燒くに洞然とし

が如し。こゝに於て世尊面り訶責し已りてまた歡悅せしめんと「欲」して告げて曰はく『迦旃、五欲の功德有りて喜ぶべく意に念樂し欲と相應して樂しむ。眼に色を知り耳に聲を知り鼻に香を知り舌に味を知り身に觸を知る。迦旃、色、或は愛有る者、或は愛せざる者、若し一人有り、彼この色に於て意に可とし意に稱し意に樂ひ意に足し意に滿願すれば、彼餘の色に於て最上最妙なりと雖も而も欲せず思はず願はず求めず。彼この色に於て最勝最上なり「とす」。迦旃、是の如く聲・香・味・觸「亦然り。」迦旃、觸、或は愛有る者、或は愛せざる者、若し一人有り、彼この觸に於て意に可とし意に稱し意に樂ひ意に足し意に滿願すれば、彼餘の觸に於て最上最妙なりと雖も而も欲せず思はず願はず求めず。彼この觸に於て最勝最上なり「とす。」』こゝに於て異學鞞摩那修叉手を佛に向け白して曰く『瞿曇、甚奇甚特なり。沙門瞿曇我が爲めに無量の方便もて欲樂・欲樂第一を說きたまふ。瞿曇猶ほ草火に因りて木火を燃し、木火に因りて草火を燃すが如し。是の如く沙門瞿曇我が爲めに無量の方便もて欲樂・欲樂第一を說きたまふ。』世尊告げて曰はく『止みね止みね、迦旃、汝長夜に異見・異忍・異樂・異欲・異意あるが故に盡く我が說く所の義を知ることを得ず。迦旃、謂く我が弟子初夜にも後夜にも常に眠臥せず正定正意にして道品を修習し、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辦じ更に有を受けずと如眞を知る。彼盡く我が所說を知る。』こゝに於て異學鞞摩那修佛に向ひて瞋恚し憎嫉不可「意」を生じ世尊を誣謗せんと欲し世尊を墮さんと欲し、是の如く世尊を誣謗し是の如く世尊を墮して語げて曰く『瞿曇、沙門梵志有り、世の前際を知らず世の後際を知らず、無窮の生死を知らずして而も究竟智を得、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辦じ更に有を受けずと如眞を知ると記說す。瞿曇、我是の如く念ず、云何がこの沙門梵志世の前際を知らず世の後際を知らず、無窮の生死を知らずして而も究竟智を得、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辦じ更らに有を受けずと如眞を知ると記說するやと。』こゝに於て世尊すなはちこの念を作したまひぬ、この異學鞞摩那修我に

の光明より最上にして最勝と爲す。』世尊問ひて曰はく『迦旃、意に於て云何。謂く螢火蟲の夜闇中に在りて光明照耀すると、及び燃油燈の夜闇中に在りて光明照耀すると、中に於て光明何者か最上たり最勝と爲すや。』異學箄摩那修答へて曰く『瞿曇、燃燈の光明螢火蟲の光明より最上にして最勝と爲す。』世尊問ひて曰はく『迦旃、意に於て云何。謂く燃油燈の夜闇中に在りて光明照耀すると、及び大木積を燃す火の夜闇中に在りて光明照耀すると、中に於て光明何者か最上たり最勝と爲すや。』異學箄摩那修答へて曰く『瞿曇、大木積を燃す火の光明、燃油燈の光明より最上にして最勝と爲す。』世尊問ひて曰はく『迦旃、意に於て云何。謂く大木積を燃す火の夜闇中に在りて光明照耀すると、及び太白星の平旦曀無く光明照耀すると、中に於て光明何者か最上たり最勝と爲すや。』異學箄摩那修答へて曰く『瞿曇、太白星の光、大木積を燃す火の光より最上にして最勝と爲す。』世尊問ひて曰はく『迦旃、意に於て云何。謂く太白星の平旦曀無く光明照耀すると、及び月殿の光夜半に曀無 光明照耀すると、中に於て光明何者か最上たり最勝と爲すや。』異學箄摩那修答へて曰く『瞿曇、月殿の光明太白星の光より最上にして最勝と爲す。』世尊問ひて曰はく『迦旃、意に於て云何。謂く月殿の光夜半に曀無く光明照耀すると、及び日殿の光秋時中天に向ひ淨くして曀無く光明照耀すると、中に於て光明何者か最上たり最勝と爲すや。』異學箄摩那修答へて曰く『瞿曇、日殿の光明月殿の光より最上にして最勝と爲す。』世尊告げて曰はく『迦旃、多く諸天有り。今この日月大如意足有り大威德有り大福祐有り大威神有りと雖も然もその光明故に諸天の光明に及ばず。我昔曾て諸天と共に集まり彼と共に事を論じ、我の所說彼の天の意に可ひしも、然も、我この說を作さず、彼妙色なり最妙色なり、彼の色最勝なり彼の色最上なりと。迦旃、而も汝螢火蟲の光色より最弊最醜なるを、彼妙色なり最妙色なり、彼の色最勝なり彼の色最上なりと說き、問ひ已りて知らず。』こゝに於て異學箄摩那修世尊の爲に面り訶責せられ已りて內に憂慼を懷き、低頭默然として辯を失ひ言無く所伺有る

二百九、[一]鞞摩那修經第八

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衛國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時[二]異學鞞摩那修中後に彷徉して佛の所に往詣し相問訊し已りて問ひて曰く『瞿曇、最色なり最色なり。瞿曇、最色なり。』世尊問ひて曰はく『[三]迦旃、何等か色なる。』異學鞞摩那修答へて曰く『瞿曇、若し色更に色有ること無く最上最妙最勝なれば、瞿曇、彼の色最勝なり、彼の色最上なり。』世尊告げて曰はく『迦旃、猶ほ人有りて是の如き說を作すが如し。若しこの國中女有りて最妙なれば、我彼を得んと欲すと。彼若し人有り是の如く問ひ、君、國中に女有りて最妙にして是の如き姓、是の如き名、是の如き生なりと知るや、長短麁細と爲し、白し黑しと爲し、白からず黑からずと爲し、刹利の女と爲し、梵志・居士・工師の女と爲し、東方・南方・西方・北方と爲す「と知る」やと「問はゞ」、彼の人答へて曰く、我知らずと。また彼の人に問ふ、君、國中に女有りて最妙にして是の如き姓、是の如き名、是の如き生なり、長短・麁細なり、白し黑し、白からず黑からず、刹利の女なり梵志・居士・工師の女なり、東方・南方・西方・北方の者なりと知らず見ずして而もこの說を作し、我彼の女を得んと欲すと「說く」やと。是の如く迦旃、汝この說を作す、彼妙色なり最妙色なり、彼の色最勝なり彼の色最上なりと。汝に彼の色を問ふに然も知らず。』異學鞞摩那修白して曰く『瞿曇猶ほ紫磨極妙の金精の如し。金師善く磨き瑩治して淨からしめ、藉くに白練を以てし日中に安著すればその色極妙にして光明照耀す。是の如く瞿曇我彼妙色なり最妙色なり、彼の色最勝なり彼の色最上なりと說く。』世尊告げて曰はく『迦旃、我今汝に問はん。解する所に隨ひて答へよ。迦旃、意に於て云何。謂く紫磨の金精藉くに白練を以てし日中に安著してその色極妙にして光明照耀すると、及び螢火蟲の夜闇中に在りて光明照耀すると、中に於て光明何者か最上たり最勝と爲すや。』異學鞞摩那修答へて曰く、『瞿曇、螢火の光明紫磨の金精

[一] M. 80, Vekhanassutta. 求那跋陀羅譯「鞞摩肅經」
[二] 異學鞞摩那修(Vekhanassa paribbājaka)。
[三] 迦旃(Kaccāna)。姓なるべし。

りて一向に世證を作すや。』世尊答へて曰はく『優陀夷、比丘欲を離れ惡不善の法を離れ、覺有り觀有り、離より生ずる喜と樂とあり初禪を得、成就して遊び、彼の天の戒等・心等・見等を共にするを得。彼覺觀已に息み內靖一心にして覺無く觀無く、定より生ずる喜と樂とあり第二禪を得成就して遊び、彼の天の戒等・心等・見等を共にするを得。彼喜欲を離れ捨無求にして遊び、正念正智にして而も身に樂を覺り、謂く[彼の]聖[者]の說く所の(聖)所捨・念・樂住・空あり第三禪を得、成就して遊び、彼の天の戒等・心等・見等を共にするを得。優陀夷、これを一道跡一向に世證を作すと謂ふ。』異學箭毛問ひて曰く『瞿曇、沙門瞿曇の弟子この世一向に樂なるが爲の故に、一道跡一向に世證を作すが故に、沙門瞿曇に從ひて梵行を學するや。』世尊答へて曰はく『優陀夷、我が弟子世一向に樂なるが爲の故ならず、亦一道跡一向に世證を作すが爲の故ならずして我に從ひて梵行を學す。優陀夷、更に最上最妙最勝の作證を爲す有るが故に、我が弟子我に從ひて梵行を學す。』こゝに於て彼の大衆高大音聲を放ち『彼これ最上最妙最勝の作證の爲の故に、沙門瞿曇の弟子沙門瞿曇に從ひて梵行を學す。』こゝに於て異學箭毛己の衆に勅して默然たらしめ已りて白して曰く『瞿曇、云何が最上最妙最勝の作證の爲の故に、沙門瞿曇の弟子沙門瞿曇に從ひて梵行を學するや。』世尊答へて曰はく『優陀夷、比丘は樂滅し苦滅し喜憂は本已に滅し、不苦不樂にして捨あり念あり清淨にして第四禪を得成就して遊ぶ。優陀夷、これを最上最妙最勝の作證の爲の故に、我が弟子我に從ひて梵行を學すと謂ふ。』こゝに於て異學箭毛卽ち坐より起ち佛足に稽首せんと欲しぬ。こゝに於て異學箭毛の諸の弟子異學梵行者異學箭毛に白して曰く『尊、今應に師と作るべき時、沙門瞿曇の爲に弟子と作らんと欲するや。尊應に師と作るべからざる時、沙門瞿曇の爲に弟子と作るや。』これを異學箭毛の諸の弟子梵行を學する者異學箭毛の爲に而も障礙を作すと爲し、世尊に從ひて梵行を學すと謂ふ。佛說是の如し。異學箭毛佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

離れ殺を斷ずれば彼一向に樂なりと爲すや、苦を雜ふと爲すや。』異學箭毛答へて曰く『瞿曇、これ苦を雜ふ。』『若し一有りて不與取・邪婬・妄言を離れ乃至邪見を離れ正見を得れば、彼一向に樂なりと爲すや、苦を雜ふと爲すや。』異學箭毛答へて曰く『瞿曇、これ苦を雜ふ。』世尊問ひて曰はく『優陀夷、是の如く苦を雜へ道跡を樂しみ世證を作すと爲すに非ざるや。』異學箭毛答へて曰く『瞿曇、是の如く苦を雜へ道跡を樂しみ世證を作す。』異學箭毛白して曰く『世尊、この說を悔過す、善逝、この說を悔過す。』世尊問ひて曰はく『優陀夷、汝何の意もて故に是の如き說を作すや、世尊、この說を悔過す。善逝、この說を悔過すと。』異學箭毛答へて曰く『瞿曇、我向には後世一向に樂にして一道跡有りて一向に世證を作すと說きぬ。沙門瞿曇、今善く我を檢し善く教へ善く訶し、我をして虛妄にして所有無からしむ。瞿曇、この故に我是の如く說く、世尊、この說を悔過す、善逝 この說を悔過すと。』世尊告げて曰はく『優陀夷、世に一向に樂有り一道跡有りて一向に世證を作す。』異學箭毛問ひて曰く『瞿曇、云何が世一向に樂にして云何が一道跡ありて一向に世證を作すや。』世尊答へて曰はく『若し時に如來世に出で無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛衆祐と號し、彼乃至五蓋・心穢・慧羸を斷じ、欲を離れ惡不善の法を離れ、覺有り觀有り、離より生ずる喜と樂とあり初禪を得、成就して遊び、彼の天の戒等・心等・見等を共にせず。彼覺觀已に息み內靖一心にして覺無く觀無く、定より生ずる喜と樂とあり第二禪を得、成就して遊び、彼の天の戒等・心等・見等を共にせず。彼喜欲を離れ、捨・無求にして遊び、正念正智にして而も身に樂を覺り、謂く〔彼の〕聖〔者〕の說く所の（聖）所捨・念・樂住・空あり第三禪を得、成就して遊び、彼の天の戒等・心等・見等を共にせず。優陀夷、これを世一向に樂なりと謂ふ。』異學箭毛問ひて曰く『瞿曇、世中の一向樂唯これに極まるや。』世尊答へて曰はく『世中の一向樂但これに極まらず。優陀夷、更に一道跡有りて一向に世證を作す。』異學箭毛問ひて曰く『瞿曇、云何が更に一道跡有

を燃す火の光より最上にして最勝と爲す。』世尊問ひて曰はく『優陀夷、意に於て云何。謂く太白星の平旦曀無く光明照耀すると、及び月殿の光夜半曀無く光明照耀すると、中に於て光明何者か最上たり最勝と爲すや。』異學箭毛答へて曰く『瞿曇、月殿の光明、太白星の光より最上にして最勝と爲す。』世尊問ひて曰はく『優陀夷、意に於て云何。謂く月殿の光夜半曀無く光明照耀すると、及び日殿の光秋時中天に向ひ淨くして曀無く光明照耀すると、中に於て光明何者か最上たり最勝と爲すや。』異學箭毛答へて曰く『瞿曇、日殿の光明月殿の光より最上にして最勝と爲す。』世尊告げて曰はく『優陀夷、多く諸天有り。今この日月大如意足有り大威德有り大福祐有り大威神有りと雖も然もその光明故に諸天の光明に及ばず。我昔曾て諸天と共に集まりて彼と共に事を論じ、我の所說彼の天の意に可ひしも、然も我この說を作さゞりき、彼の色色を過ぎ彼の色最勝なり彼の色最上なりと。優陀夷、而も汝螢火蟲の光色より、最弊最醜なるを彼の色色を過ぎ彼の色最勝なり彼の色最上なりと說き、問ひ已りて知らず。』異學箭毛白して曰く『世尊、この說を悔過す。善逝、この說を悔過す。』世尊問ひて曰はく『優陀夷、汝何の意もて是の如く說くや、世尊、この說を悔過す、善逝、この說を悔過すと。』異學箭毛答へて曰く『瞿曇、我この說を作しぬ、彼の色色を過ぎ彼の色最勝なり彼の色最上なりと。沙門瞿曇、今善く我を檢し善く敎へ善く訶し我をして虛妄にして所有無からしむ。瞿曇、この故に我是の如く說く、世尊、この說を悔過す、善逝、この說を悔過すと。』異學箭毛語げて曰く『瞿曇、後世一向に樂にして一道跡有りて一向に世證を作す。』世尊問ひて曰はく『優陀夷、云何が後世一向に樂にして、云何が一道跡有りて一向に世證を作すや。』異學箭毛答へて曰く『瞿曇、或は一有り、殺を離れ殺を斷じ、不與取・邪婬・妄言、乃至邪見を離れ正見を得。瞿曇、これを後世一向に樂なりと謂ひ、これを一道跡有りて一向に世證を作すと謂ふ。』世尊告げて曰はく『優陀夷、我今汝に問はん。解する所に隨ひて答へよ。優陀夷、意に於て云何。若し一有りて殺を

【八】巴利文「一向に安樂なる世界あり、[この]一向に安樂なる世界を實現するに適宜の道あり」

黑からずと爲し、刹利の女と爲し、梵志居士工師の女と爲し、東方・南方・西方・北方と爲す「と知る」や」「問へば」、彼の人答へて曰く、我知らずと。また彼の人に問ふ、君、國中に女有り、最妙にして是の如き姓是の如き名是の如き生なり、長短麁細、白し黑し白からず黑からず、刹利の女なり、梵志・居士・工師の女なり、東方・南方・西方・北方の者なりと知らず見ずして而もこの說を作し、我彼の女を得んと欲すと「說く」やと。是の如く優陀夷、汝この說を作す、彼色色を過ぐれば、彼の色最勝なり彼の色最上なりと說くと。問ひて曰ふに、汝彼の色を然も知らず。』異學箭毛白して曰く『瞿曇、猶ほ紫磨極妙の金精の如し。金師善く磨き瑩治して淨ならしめ藉くに白練を以てし日中に安著するに、その色極妙にして光明照耀す。是の如く瞿曇、我彼の色色を過ぎ、彼の色最勝なり彼の色最妙なりと說く。』世尊告げて曰はく『優陀夷、我今汝に問はん。解する所に隨ひて答へよ。優陀夷、意に於て云何。謂く紫磨の金精藉くに白練を以てし日中に安著し、その色極妙にして光明照耀すると、及び螢火蟲の夜闇中に在りて光明照耀すると、中に於て光明何者か最上にして最勝と爲すや。』異學箭毛答へて曰く『瞿曇、螢火の光明紫磨の金精の光明より最上にして最勝と爲す。』世尊問ひて曰はく『優陀夷、意に於て云何。謂く螢火蟲の夜闇中に在りて光明照耀すると、及び燃油燈の夜闇中に在りて光明照耀すると、中に於て光明何者か最上たり最勝と爲すや。』異學箭毛答へて曰く『瞿曇、燃燈の光明、螢火蟲の光明より、最上にして最勝と爲す。』世尊問ひて曰はく『優陀夷、意に於て云何。謂く燃油燈の夜闇中に在りて光明照耀すると、及び大木積を燃す火の夜闇中に在りて光明照耀すると、中に於て光明何者か最上たり最勝と爲すや。』異學箭毛答へて曰く『瞿曇、大木積を燃す火の光明、燃油燈の光明より最上にして最勝と爲す。』世尊問ひて曰はく『優陀夷、意に於て云何。謂く大木積を燃す火の夜闇中に在りて光明照耀すると、及び太白星(七)の平旦曀無く光明照耀すると、中に於て光明何者か最上たり最勝と爲すや。』異學箭毛答へて曰く『瞿曇、太白星の光、大木積

【七】太白星(Osadhi-tāra-kā)。曉の明星。

事を答ふ。我亦往きて彼に過去の事を問ひ、彼亦我に過去の事を答へ、我彼に問ふ所の事に隨ひ彼亦我に答へて問ふ所の事に隨ふ。また次に優陀夷、我弟子有り、謂く淸淨の天眼の人[眼]を出過せるを[以て]、この衆生の死時・生時・好色・惡色・妙と不妙、善處及び不善處に往來するを見、この衆生の所作業に隨ひてその如眞を見、若しこの衆生身惡行を成就し口・意惡行を成就し聖人を誣謗し、邪見にして邪見業を成就すれば、彼これに因緣して身壞れ命終りて必ず惡處に至り地獄の中に生ぜん。若しこの衆生身妙行を成就し口・意妙行を成就し聖人を誣謗せず、正見にして正見業を成就すれば、彼これに因緣して身壞れ命終りて必ず善處に昇り天中に生ずるを得んと[見る。]彼來りて我に未來の事を問ひ、我彼に未來の事を答ふ。我亦往きて彼に未來の事を問ひ、彼亦我に未來の事を答ふ。我彼に問ふ所の事に隨ひ彼亦我に答へて問ふ所の事に隨ふと。瞿曇、我この生に於て本作せる所を作し本得し所を得て、尙ほ[之を]憶すること能はず。況やまた能く因有り緣有りて無量の本昔生ぜし所の事を憶するをや。瞿曇、我尙ほ飄風鬼を見ること能はず。況やまた淸淨の天眼の人[眼]を出過せる[を以て]この衆生の死時・生時・善色・惡色・妙と不妙、善處及び不善處に趣至するを見、この衆生の所作業に隨ひてその如眞を見るをや。瞿曇、我この念を作す、若し沙門瞿曇我に師に從ひて法を學すやと問はゞ、儻し能く彼に答へて可意ならしむるやと。』世尊問ひて曰はく『優陀夷、汝師に從ひてその法を學するに云何。』異學箭毛答へて曰く『瞿曇、彼色色を過ぎ、彼の色最勝なり、彼の色最上なりと說く。』世尊問ひて曰はく『優陀夷、何等か色なりや。』異學箭毛答へて曰く『瞿曇、若し色更に色有ること無ければ最上最妙にして最勝と爲す。彼の色最勝なり彼の色最上なり。』世尊告げて曰はく『優陀夷、猶ほ人有るが如し。是の如き說を作す、若しこの國中女有りて最妙なれば我彼を得んと欲すと。彼に若し人有り是の如く問ひ、君、國中に女有り、最妙にして是の如き姓是の如き名是の如き生なりと知るや。[また]長短麁細と爲し、白し黑しと爲し、白からず

【六】飄風鬼。つむじかぜを起す神。

是の如く長壽して是の如く久しく住し是の如く壽訖り、此に死して彼に生じ、彼に死して此に生じ、我生じて此に在り、是の如き姓是の如き字にして是の如く生じ、是の如く飲食し是の如く苦樂を受け、是の如く長壽して是の如く久しく住し是の如く壽訖らんと。彼來りて我に過去の事を問ひ、我彼に過去の事を答へ、我亦往きて彼に過去の事を問ひ、彼亦我に過去の事を答へ、我彼に問ふ所の事に隨ひ、彼亦我に答へて問ふ所の事に隨ふ。また次に優陀夷、我弟子有り、謂く清淨の天眼の人[眼]を出過せるを[以て]この衆生の死時・生時・好色・惡色・妙と不妙、善處及び不善處に往來するを見、この衆生の所作業に隨ひて、その如眞を見、若しこの衆生身惡行を成就し口・意惡行を成就し聖人を誹謗し、邪見にして邪見業を成就すれば、彼これに因緣して身壞れ命終りて必ず惡處に至り地獄の中に生ぜん。若しこの衆生身妙行を成就し口・意・妙行を成就し聖人を誹謗せず、正見にして正見業を成就すれば、彼これに因緣して身壞れ命終りて必ず善處に昇り天中に生ずるを得んと[見る。]彼來りて我に未來の事を問ひ、我彼に未來の事を答ふ。我亦往きて彼に未來の事を問ひ、彼亦我に未來の事を答ふ。我彼に問ふ所の事に隨ひ彼亦我に答へて問ふ所の事に隨ふ。」異學箭毛白して曰く『瞿曇、若し是の如くば、我轉た知らず我轉た見ず、轉た癡にして癡に墮しぬ。謂く沙門瞿曇是の如く說く、優陀夷、止みね止みね、汝長夜に異見・異忍・異樂・異欲・異意あるが故に盡く我が說く所の義を知るを得ず。優陀夷、我弟子有り、因有り緣有り、無量の過去に本昔生ぜし所を憶す、謂く一生・二生・百生・千生、成劫・敗劫・無量の成敗劫、衆生の名某なり。我曾て彼に生じ是の如き姓是の如き字にして是の如く生じ、是の如く飲食し是の如く苦樂を受け、是の如く長壽し是の如く久しく住し是の如く壽訖り、此に死して彼に生じ彼に死して此に生じ、我生じて此に在り、是の如き姓是の如き字にして是の如く生じ、是の如く飲食し是の如く苦樂を受け是の如く長壽し是の如く久しく住し是の如く壽訖らんと。彼來りて我に過去の事を問ひ、我彼に過去の

の論を聞かんと欲せば、後に聞くに難からず。沙門瞿曇、若し再び三たびに至りてそれを聞かんと欲せば今當にこれを說くべし。瞿曇、我策慮有り思惟有り策慮地に住し思惟地に住し、智慧有り辯才有り、實に[三]薩云然有りて一切知り一切見て餘知無く餘見無しと說くもの有れば、我往きて事を問ふに然も彼知らず。瞿曇、我この念を作す、こはこれ何等なりやと。』世尊問ひて曰はく『優陀夷、汝策慮有り思惟有り策慮地に住し思惟地に*住し、智慧有り辯才有り。誰か實に薩云然有りて一切知り一切見、餘知無く餘見無しと說き、汝往きて事を問ふに而も彼知らざるや。』異學箭毛答へて曰く『瞿曇、謂く不蘭迦葉これなり。所以者何。瞿曇、不蘭迦葉自ら實に薩云然有りて一切知り一切見、餘知無く餘見無しと說く。我策慮有り思惟有り策慮地に住し思惟地に住し、智慧有り辯才有り。我往きて事を問ふに然も彼知らず。瞿曇、この故に我この念を作す、こはこれ何等なりやと。是の如く摩息迦利瞿舍利子、娑若鞞羅遲子、尼揵親子、彼復迦旃、阿夷哆雞舍劍婆利〔亦然り。〕瞿曇、阿夷哆雞舍劍婆利自ら實に薩云然有りて一切知り一切見、餘知無く餘見無しと說く。我策慮有り思惟有り策慮地に住し思惟地に住し、智慧有り辯才有り。我往きて事を問ふに然も彼知らず。瞿曇、この故に我この念を作す、こはこれ何等なりやと。瞿曇、我また この念を作す、若し我當に沙門瞿曇の所に往詣して過去の事を問はゞ、沙門瞿曇必ず能く我が過去の事を答ふべし。我當に沙門瞿曇の所に往詣して未來の事を問はゞ、沙門瞿曇必ず能く我が未來の事を答ふべし。また次に若し我沙門瞿曇に問ふ所の事に隨はゞ、沙門瞿曇必ず亦我に答へて問ふ所の事に隨はんと。』世尊告げて曰はく『優陀夷、止みね止みね。汝長夜に[四]異見・異忍・異樂・異欲・異意あるが故に盡く我が說く所の義を知るを得ず。優陀夷、我弟子有り、因有り緣有り、無量の過去に本昔生ぜし所を憶す。謂く一生・二生・百生・千生、[五]成劫・敗劫無量の成敗劫、衆生の名某なり、我曾て彼に生じ是の如き姓是の如き字にして是の如く生じ、是の如く飲食し是の如く苦樂を受け

【三】薩云然(Sabbaññu)。一切智の意。

＊「有」と底本に記す。

【四】異見＝異れる意見。異忍＝異れる忍耐力。異樂＝異れる樂み。異欲＝他に關心すること。異意＝他を師とすること。

【五】成劫(Vivatta-kappa)、敗劫(Saṃvatta-kappa)。劫、劫波は計算し能はざるほど極めて長き時間をいふ。空なる世界の成立する間を成劫と云ひ、出來上りたる世界に生物の住む間を住劫、それが再び破壞する間を敗劫又は壞劫、而して破壞し盡して空無なる間を空劫といふ。

きて歡喜奉行しぬ。

二百八、[一]箭毛經〔下〕第七

我が聞きしこと是の如し。ある時佛王舍城に遊び竹林加蘭哆園に在しぬ。その時世尊夜を過ぎて平旦衣を著け鉢を持し王舍城に入りて而も乞食を行じ、乞食を行じ已りて衣鉢を收擧し手足を澡洗し尼師壇を以て肩上に著け孔雀林の異學園中に往至したまひぬ。その時孔雀林の異學園中に一異學有り、名づけて[二]箭毛と曰ひ名德の宗主にして衆人の師とする所、大名譽有り衆の敬重する所にして大徒衆を領じ五百の異學の尊ぶ所なりき。彼大衆に在りて喧鬧婬亂し高大の音聲を放ち種々の畜生の論を說きぬ。謂く王を論じ賊を論じ鬪を論じ食を論じ衣服を論じ婦人を論じ童女を論じ婬女を論じ世間を論じ容野を論じ海中を論じ國人民を論じ、彼共に集坐して是の如き比の畜生の論を說きぬ。異學箭毛遙に佛の來るを見、已の衆に勅して曰く『汝等默然として住せよ。彼の沙門瞿曇來る。彼の衆默然たり、常に默然を樂しみ默然を稱說す。彼若しこの衆の默然たるを見ば或は來りて相見ん。』異學箭毛衆に命じて默然たらしめ已りて自ら默然として住しぬ。世尊異學箭毛の所に往詣したまひ、異學箭毛即ち坐より起ち偏に著衣を袒ぎ叉手を佛に向け白して曰く『善く來りぬ、沙門瞿曇、沙門瞿曇久しく此に來らず。願はくはこの坐に坐せよ。』世尊すなはち異學箭毛の敷きし所の座に坐したまひ、異學箭毛すなはち世尊と共に相問訊し却きて一面に坐しぬ。世尊問ひて曰はく『優陀夷、向に何等を論じ何の事を以ての故に共に此に集坐するや。』異學箭毛答へて曰く『瞿曇、且くこの論を置け、この論妙に非ず。沙門瞿曇、この論を聞かんと欲せば、後に聞くに難からず。』世尊是の如く再び三たび問ひて曰はく『優陀夷、向に何等を論じ何の事を以ての故に共に此に集坐するや。』異學箭毛亦再び三たび答へて曰く『瞿曇、且くこの論を置け。この論妙に非ず。沙門瞿曇、こ

【一】M. 79, Cūḷa-Sakuludāyi-sutta.

【二】箭毛(Sakuludāyi)?

來りて相對する者必ず能くこれを伏したまふ。謂く正法律に於て說くべからず、自の所說に於て說くを得べからずと。優陀夷、若し我が弟子無上智慧に因るが故に我を稱說すれば、彼この處に因りて我を恭敬・尊重・供養・奉事し常に隨ひて離れず。(3)また次に優陀夷、我弟子有り、謂く無上知見[に因りて]我を稱說す、世尊[四]遍く知り、知らざるに非ず、遍く見、見ざるに非ず。彼弟子の爲に法を說きたまふに、因有りて因無きに非ず、緣有りて緣無きに非ず、答ふべくして答ふべからざるに非ず、離有りて離無きに非ずと。優陀夷、若し我が弟子無上知見に因るが故に我を稱說すれば、彼この處に因りて我を恭敬・尊重・供養・奉事し、常に隨ひて離れず。(4)また次に優陀夷、我弟子有り、謂く愛箭を厭ひて而も來りて我に問ふ、苦はこれ苦、習はこれ習、滅はこれ滅、道はこれ道なりやと。我卽ち彼に答ふ、苦はこれ苦、習はこれ習、滅はこれ滅、道はこれ道なりと。優陀夷、若し我が弟子而も來りて我に問ひ、我答へて意歡喜せしむべくば、彼この處に因りて我を恭敬・尊重・供養・奉事し、常に隨ひて離れず。(5)また次に優陀夷、我弟子の爲に或は宿命智通作證明達を說き、我は漏盡智通作證明達を說く。優陀夷、若し我が弟子この正法律中に於て受くるを得、度るを得、彼岸に至るを得、疑無く惑無く、善法中に於て猶豫有ること無ければ、彼この處に因りて我を恭敬・尊重・供養・奉事し、常に隨ひて離れず。優陀夷、これを我に更に五法有りて諸の弟子をして我を恭敬・尊重・供養・奉事し、常に隨ひて離れざらしむと謂ふ。』こゝに於て異學箭毛卽ち坐より起ち偏に著衣を袒ぎ叉手を佛に向け白して曰く『瞿曇、甚奇甚特なり。善く妙事を說き我が體を潤澤すること猶ほ甘露の如し。瞿曇、猶ほ大雨のこの地高下普く潤澤するを得るが如く、是の如く沙門瞿曇、我等が爲に善く妙事を說き我が體を潤澤すること猶ほ甘露の如し。世尊、我已に解す、善逝、我已に知る。世尊、我今自ら佛・法及び比丘衆に歸す。唯願はくは世尊、我を受けて優婆塞と爲したまへ。今日より始めて終身自ら歸し乃ち命盡くるに至らん。』佛說是の如し。異學箭毛佛の所說を聞

(3)無上知見(Abhikkanta-ñāṇadassana)。
[四] 底本に「遊」とあり、宋・元・正倉院本「遍」と訂正。
(4)厭愛箭(Dukkhotiṇṇa dukkhapareta)。

夷、我粳糧の成熟して麩無き無量の雜味あるを食す。優陀夷、或は我が弟子その形壽を盡して而も乞食を行じ棄捨する所の食を「食し」亦この說を作す、我が世尊麁食にして足るを知り、麁食にして足るを知るを稱說したまふと。優陀夷、若し我が弟子麁食にして足るを知るに因るが故に我を稱說すれば、彼この處に因るが故に我を恭敬・尊重・供養・奉事せず亦相隨はず。(3)また次に優陀夷、我が食一[一二]鞞羅食の如く、或は半鞞羅の如し。優陀夷、或は我が弟子食一[一三]拘拕の如く、或は半拘拕の如し。亦この說を作す、我が世尊少食にして少食を稱說したまふと。優陀夷、若し我が弟子少食に因るが故に我を稱說すれば、彼この處に因るが故に我を恭敬・尊重・供養・奉事せず、亦相隨はず。(4)また次に優陀夷、我或は高樓に住し或は棚閣に住す。優陀夷、或は我が弟子彼に九月十月を過す。一夜覆處に於て宿る。亦この說を作す、我が世尊麁住止床座にして足るを知り、麁住止床座にして足るを知るを稱說したまふと。優陀夷、若し我が弟子麁住止床座にして足るを知るに因るが故に我を稱說すれば、彼この處に因るが故に我を恭敬・尊重・供養・奉事せず、亦相隨はず。(5)また次に優陀夷、我常に比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷を作鬧す。或は我が弟子半月を過ぎて一たび衆に入る。法淸淨の爲の故なり。亦この說を作す、我が世尊燕坐し燕坐を稱說したまふと。優陀夷、若し我が弟子燕坐に因るが故に我を稱說すれば、彼この處に因るが故に我を恭敬・尊重・供養・奉事せず、亦相隨はず。優陀夷、我にこの五法「而も」諸の弟子をして我を恭敬・尊重・供養・奉事し常に隨ひて離れざらしむるもの無し。

優陀夷、我更に五法有り、諸の弟子をして我を恭敬・尊重・供養・奉事し、常に隨ひて離れざらしむ。云何が五と爲す。(1)優陀夷、我弟子有り、謂く無上戒「に因りて」我を稱說す、世尊戒大戒を行じ、所說の如く所作亦然り、所作の如く所說亦然りと。優陀夷、若し我が弟子無上戒に因りて我を稱說すれば、彼この處に因りて我を恭敬・尊重・供養・奉事し常に隨ひて離れず。(2)また次に優陀夷、我弟子有り、謂く無上智慧「に因りて」我を稱說す、世尊、智慧極大の智慧を行じたまふ。若し談論行り

【一二】 鞞羅(Beluva)。果實の名。

【一三】 拘拕(Kosaka)。食を盛る器物の名。

(1)無上戒(Adhisila)。

(2)無上智慧(Adhipañña)。

有りて諸の弟子をして恭敬・尊重・供養・奉事し常に隨ひて離れざらしむと見る。云何が五と爲す。(1)沙門瞿曇麁衣にして足るを知り、麁衣にして足るを知るを稱說す。若し沙門瞿曇麁衣にして足るを知り、麁衣にして足るを知るを稱說すれば、これを我沙門瞿曇第一法有りて諸の弟子をして恭敬・尊重・供養・奉事し常に隨ひて離れざらしむと見ると謂ふ。(2)また次に沙門瞿曇麁食にして足るを知り、麁食にして足るを知るを稱說す。若し沙門瞿曇麁食にして足るを知り、麁食にして足るを知るを稱說すれば、これを我沙門瞿曇第二法有りて諸の弟子をして恭敬・尊重・供養・奉事し常に隨ひて離れざらしむと見ると謂ふ。(3)また次に沙門瞿曇少食にして少食を稱說す。若し沙門瞿曇少食にして少食を稱說すれば、これを我沙門瞿曇第三法有りて諸の弟子をして恭敬・尊重・供養・奉事し常に隨ひて離れざらしむと見ると謂ふ。(4)また次に沙門瞿曇麁住止床座にして足るを知り、麁住止床座にして足るを知るを稱說す。若し沙門瞿曇麁住止床座にして足るを知り、麁住止床座にして足るを知るを稱說すれば、これを我沙門瞿曇第四法有りて諸の弟子をして恭敬・尊重・供養・奉事し常に隨ひて離れざらしむと見ると謂ふ。(5)また次に沙門瞿曇燕坐し燕坐を稱說す。若し沙門瞿曇燕坐し燕坐を稱說すれば、これを我沙門瞿曇第五法有りて諸の弟子をして恭敬・尊重・供養・奉事し常に隨ひて離れざらしむと見ると謂ふ。これを我沙門瞿曇五法有りて諸の弟子をして恭敬・尊重・供養・奉事し常に隨ひて離れざらしむと見ると謂ふ。』世尊告げて曰はく『優陀夷、我この五法を以て諸の弟子をして我を恭敬・尊重・供養・奉事し常に隨ひて離れざらしむるにあらず。(1)優陀夷我が所持の衣聖刀もて割截するに隨ひ染汙惡色なり。是の如く聖衣染汙惡色たり。優陀夷、或は我が弟子謂く形壽を盡して棄捨する所の糞掃の衣を衣、亦この說を作す、我が世尊、麁衣にして足るを知り、麁衣にして足るを知るを稱說したまふと。優陀夷、若し我が弟子麁衣にして足るを知るに因るが故に我を稱說すれば、彼この處に因るが故に我を恭敬・尊重・供養・奉事せず、亦相隨はず。(2)また次に優陀

難じ、これ不可なり、これ不相應なり、これ不等なりと說き已りてすなはち捨てゝ而も去る。是の如く摩息加利瞿舍利子、婆若鞞羅遲子、尼揵親子、波復迦旃、阿夷哆雞舍劍婆利〔亦然り〕と。瞿曇、我等是の如き念を作しぬ、この阿夷哆雞舍劍婆利弟子の爲に恭敬・尊重・供養・奉事せられず、弟子の爲に法罵もて罵られ、衆多の弟子師を難じ、これ不可なり、これ不相應なり、これ不等なりと說き已りてすなはち捨てゝ而も去ると。瞿曇、昔時阿夷哆雞舍劍婆利數ば弟子衆に在りて手を擧げて大に喚びぬ、汝等住まるべし。人來りて汝等に事を問ふもの有ること無く、人我に事を問ふ。汝等この事を斷ずること能はず、我能くこの事を斷ずと。而も弟子その中間に於て更に餘事を論じて師の事を說き訖るを待たず。瞿曇、我等またこの念を作しぬ、是の如くこの阿夷哆雞舍劍婆利弟子の爲に恭敬・尊重・供養・奉事せられず、弟子の爲に法罵もて罵られ、衆多の弟子師を難じ、これ不可なり、これ不相應なりこれ不等なりと說き已りてすなはち捨てゝ而も去ると。瞿曇、我等またこの念を作しぬ、この沙門瞿曇弟子の爲に恭敬・尊重・供養・奉事せられ、弟子の爲に法罵もて罵られず、亦弟子師を難じ、これ不可なり、これ不相應なり、これ不等なりと說き已りてすなはち捨てゝ而も去るもの無しと。瞿曇、昔時沙門瞿曇數ば大衆に在りて無量百千の衆に圍繞せられて法を說きぬ。その中に於て一人有り鼾眠して聲を作す。又一人有り彼の人に語げて曰く、鼾眠して聲を作すこと莫れ。汝世尊の微妙の法を說きたまふこと甘露の如くなるを聞かんと欲せざるやと。彼の人卽便ち默然として聲無かりき。瞿曇、我等またこの念を作しぬ、是の如くこの沙門瞿曇、弟子の爲に恭敬・尊重・供養・奉事せられ、弟子の爲に法罵もて罵られず、亦弟子師を難じ、これ不可なり、これ不相應なりこれ不等なりと說き已りてすなはち捨てゝ而も去るもの無しと。』世尊聞き已りて異學箭毛に問ひて曰はく『優陀夷[二]、汝我に幾ばくの法有りて諸の弟子をして我を恭敬し尊重し供養し奉事し常に隨ひて離れざらしむと見るや。』異學箭毛答へて曰く『瞿曇、我瞿曇に五法

【二】優陀夷（Udāyi）。箭毛はSakula-Udāyiなれば此處に單に優陀夷と呼ばれたるなり。

曰く『瞿曇、且くこの論を置け。この論妙に非ず。沙門瞿曇、この論を聞かんと欲せば後に聞くに難からず。沙門瞿曇、若し再び三たびに至りてそれを聞かんと欲せば、今當にこれを說くべし。瞿曇、我等拘薩羅國の衆多の梵志と悉く共に拘薩羅學堂に集坐し、是の如き論を說きぬ、鴦伽摩竭陀國人大善利有り、鴦伽摩竭陀國人大善利を得。かくの如く大福田衆王舍城に在りて共に夏坐を受く。謂く[五]不蘭迦葉なり。所以者何。瞿曇 不蘭迦葉名德の宗主にして衆人の師とする所、大名譽有り衆の敬重する所にして大徒衆を領し五百の異學の尊ぶ所なり。この王舍城に於て共に夏坐を受く。是の如く[六]摩息迦利瞿舍利子、[七]婆若鞞羅遲子、[八]尼揵親子、[九]波復迦栴、[一〇]阿夷哆雞舍劍婆利[亦然り。]瞿曇、阿夷哆雞舍劍婆利名德の宗主にして衆人の師とする所、大名譽有り衆の敬重する所にして大徒衆を領し五百の異學の尊ぶ所なり。この王舍城に於て共に夏坐を受くと。向には亦沙門瞿曇を論じぬ。この沙門瞿曇名德の宗主にして衆人の師とする所、大名譽有り衆の敬重する所にして大比丘衆を領し千二百五十人の尊ぶ所なり。亦この王舍城に在りて共に夏坐を受くと。瞿曇、我等またこの念を作しぬ。今この諸尊沙門梵志、誰か弟子の爲に恭敬・尊重・供養・[奉]事せられ、弟子の爲に法罵もて罵らるゝに非ず、亦弟子師を難じ、これ一向に不可不相應不等なりと說き已りてすなはち捨てゝ而も去る[者]無きやと。瞿曇、我等またこの念を作しぬ、この不蘭迦葉、弟子の爲に恭敬・尊重・供養・奉事せられず、弟子の爲に法罵もて罵られ、衆多の弟子師を難じ、これ不可なりこれ不相應なり、これ不等なりと說き已りてすなはち捨てゝ而も去らんと。瞿曇、昔時不蘭迦葉數ば弟子衆に在りて手を擧げて大に喚びぬ、汝等住まるべし。人來りて汝等に事を問ふもの有ること無し。人我に事を問ふ。汝等この事を斷ずること能はず。我能くこの事を斷ずと。而も弟子その中間に於て更に餘事を論じて師の事を說き訖るを待たず。瞿曇、我等またこの念を作しぬ、是の如くこの不蘭迦葉弟子の爲に恭敬・尊重・供養・奉事せられず、弟子の爲に法罵もて罵られ衆多の弟子師を

【五】不蘭迦葉(Puraṇa-kassapa)。富蘭那迦葉、六師外道の隨一。
【六】摩息迦利瞿舍利子(Makkhali-gosāla)、梵語にては Maskari-gośāliputra なるより右の音譯出でたるなり。
【七】婆若鞞羅遲子(Sañjaya-velaṭṭhiputta)。
【八】尼揵親子(Nigaṇṭha-Nātaputta)。
【九】波復迦栴(Pakudha-kaccāyana)。
【一〇】阿夷哆雞舍劍婆利(Ajita-kesakambali)。

卷の第五十七

二百七、[一]箭毛經［上］第六

我が聞きしこと是の如し。ある時佛王舍城に遊び、竹林伽蘭哆園に在し、大比丘衆と倶に、千二百五十人而も夏坐を受けぬ。その時世尊夜を過ぎて平旦衣を著け鉢を持し王舍城に入りて而も乞食を行じ、乞食を行じ已りて衣鉢を收擧し手足を澡洗し尼師檀を以て肩上に著け[二]孔雀林の異學園中に往至したまひぬ。その時孔雀林の異學園中に一異學有り、名づけて[三]箭毛と曰ひ、名德の宗主にして衆人の師とする所、大名譽有り、衆の敬重する所にして大徒衆を領し五百の異學の尊ぶ所なりき。彼大衆に在りて喧鬧撓亂して高大の音聲を放ち、種々の[四]畜生の論を說きぬ。謂く王を論じ賊を論じ鬪を論じ食を論じ衣服を論じ婦人を論じ童女を論じ婬女を論じ世間を論じ空野を論じ海中を論じ國人民を論じ、彼［等］共に集坐して是の如き此の畜生の論を論じぬ。異學箭毛遙に佛の來るを見、己の衆に勅して曰く『汝等、默然として住せよ。彼の沙門瞿曇來る。彼の衆默然たり、常に默然を樂しみ默然を稱說す。彼若しこの衆默然たるを見ば或は來りて相見ん。』異學箭毛衆をして默然たらしめ已りて自ら默然として住しぬ。世尊異學箭毛の所に往詣したまひ、異學箭毛卽ち坐より起ち偏に著衣を袒ぎ叉手を佛に向け白して曰く『善く來りぬ、沙門瞿曇、沙門瞿曇久しく此に來らず。願はくはこの座に坐したまへ。』世尊すなはち異學箭毛の敷きし所の座に坐したまひ、異學箭毛則ち世尊と共に相問訊し却きて一面に坐しぬ。世尊問ひて曰はく『優陀夷、向に何等を論じ何の事を以ての故に共に此に集坐するや。』異學箭毛答へて曰く『瞿曇、且くこの論を置け。この論妙に非ず。沙門瞿曇、この論を聞かんと欲せば、後に聞くに難からず。』世尊是の如く再び三たび問ひて曰はく『優陀夷、向に何等を論じ何の事を以ての故に共に此に集坐するや。』異學箭毛亦再び三たび答へて

【一】 M. 77, Mahā-sakuludāyi-sutta.
【二】 孔雀林(Moranivāpa)。
【三】 箭毛(Sakuludāyi)。
【四】 畜生論、二六卷「優曇婆羅經」その他に出づ。長阿含八卷「散陀那經」にては「遮汁濁亂之言」といふ、二十七あり。

成就すれば、必ず知り必ず見必ず正盡覺し、必ず甘露門に至り近く涅槃に住す。我涅槃を得ざる無しと說く。』佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

中阿含經卷第五十六

ら方便して燕坐を斷ずる者有れば、これを第二に心中の縛を解くと謂ひ、謂く欲なり。また次に一有 說く所聖義と相應し柔軟 して疑蓋無し。謂く戒を說き定を說き慧を說き解脫を說き解脫知見を說き、損を說き不聚會を說き少欲を說き知足を說き斷を說き無欲を說き滅を說き燕坐を說き緣起を說く。是の如く比丘、沙門の說く所の者、彼の心趣向し靖くして住し解し自ら方便して燕坐を斷ず。若しこの心趣向し靖くして住し解し自ら方便して燕坐を斷ずる者有れば、これを第三に心中の縛を解くと謂ひ、謂く說なり。また次に數ば道俗と共に會せず調亂せず憍慠ならずして學問す。若し數ば道俗と共に會せず調亂せず憍慠ならずして學問する者有れば、彼の心趣向し靖くして住し解し、自ら方便して燕坐を斷ず。若しこの心趣向し靖くして住し解し自ら方便して燕坐を斷ずる者有れば、これを第四に心中の縛を解くと謂ひ、謂く不聚會なり。また次に少しく得る所有るが故にその中間に於て住せずまた昇進を求む。若し少しく得る所「有るが」故にその中間に於て住せずまた昇進を求むる者有れば、彼の心趣向し靖くして住し解し自ら方便して燕坐を斷ず。若しこの心趣向し靖くして住し解し自ら方便して燕坐を斷ずる者「有れば」これを第五に心中の縛を解くと謂ひ、謂く昇進なり。若し比丘・比丘尼善くこの心中の五穢及び善くこの心中の五縛を說く者有れば、これを比丘・比丘尼の淸淨法と謂ふ。彼この十支に住し已りてまた[六]五法を修習す。云何が五と爲す。欲定心を修し斷如意足を成就し離に依り無欲に依り滅に依り捨に依り非品に趣向し、精進定・心定・思惟定を修し斷如意足を成就し離に依り無欲に依り滅に依り捨に依り非品に趣向し、[七]堪任第五たり。彼この堪任等の十五法を成就し自受を成就すれば、必ず知り必ず見必ず正盡覺し甘露門に至り近く涅槃に住す。我涅槃に至らざる無しと說く。猶ほ雞十卵或は十二を生み、時に隨ひて覆蓋し時に隨ひて溫暖し時に隨ひて看視するが如し。雞設し放逸有れば、彼の中或は雞子觜を以て足を以てその卵を啄破し、自ら安隱にして出づる者、彼第一と爲す。是の如く比丘この堪任等の十五法自受を

【六】五法。欲定心。巴利語 Chanda-samādhi-padhāna-saṅkhāra-samannāgata「欲定勤行を具有する。」

【七】堪任(Ussoḷhi)。

ら方便して燕坐を斷ずる者有れば、これを第三に心縛を解かずと謂ふ。謂く說なり。(4)また次に數ば道俗共に會し調亂憍傲して學問せず。若し數ば道俗共に會し調亂憍傲して學問せざる者有れば、彼の心趣向せず靖からず住せず解せず、自ら方便して燕坐を斷ず。若しこの心趣向せず靖からず住せず解せず自ら方便して燕坐を斷ずれば、これを第四に心縛を解かずと謂ふ。謂く聚會なり。(5)また次に少しく得る所有るが故にその中間に於て住してまた昇進を求めず。若し少しく得る所有るが故にその中間に於て住してまた昇進を求めざれば、彼の心趣向せず靖からず住せず解せず、自ら方便して燕坐を斷ず。若しこの心趣向せず靖からず住せず解せず、自ら方便して燕坐を斷ずれば、これを第五に心縛を解かずと謂ふ。謂く昇進なり。若し比丘・比丘尼有りてこの心中の五穢を拔かず及びこの心中の五縛を解かざれば、これを比丘・比丘尼の必退法と謂ふ。若し比丘・比丘尼有りて善く心中の五穢を拔き善く心中の五縛を解けば、これを比丘・比丘尼の清淨法と謂ふ。云何が善く心中の五穢を拔くや。或は一有りて世尊を疑はず猶豫せず意を開き意解け意靖し。若し世尊を疑はず猶豫せず意を開き意解け意靖き者有れば、これを第一に善く心中の穢を拔くと謂ひ、謂く世尊に於てなり。是の如く法・戒・教[に於て亦然り。] 若し梵行[者]有り世尊に稱譽せらるるも、彼[此を]責數せず輕易せず觸嬈せず侵害せず、意を開き意解け意靖ければ、これを第五に善く心中の穢を拔くと謂ひ、謂く梵行に於てなり。云何が心中の五縛を解くや。或は一有り身[に於て]染を離れ欲を離れ愛を離れ渴を離る。若し身[に於て]染を離れ欲を離れ愛を離れ渴を離るゝ者有れば、彼の心趣向し、靖くして住し解し、自ら方便して燕坐を斷ず。若しこの心趣向し、靖くして住し解し自ら方便して燕坐を斷ずる者有れば、これを第一に心中の縛を解く　謂ひ、謂く身なり。また次に欲に於て染を離れ欲を離れ愛を離れ渴を離る。若し欲に於て染を離れ欲を離れ愛を離れ渴を離るゝ者有れば、彼の心趣向し靖くして住し解し自ら方便して燕坐を斷ず。若しこの心趣向し靖くして住し解し自

二百六、[一]心穢經第五

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『若し比丘・比丘尼心中の[二]五穢を拔かず心中の[三]五縛を解かざれば、これ比丘・比丘尼必退法說くと爲す。云何が心中の五穢を拔かざるや。或は一有りて世尊を疑ひ猶豫して意を開かず意を解かず竟靖らず。若し一有りて世尊を疑ひ猶豫して意を開かず意を解かず意靖からざればこれを第一心穢を拔かずと謂ふ。謂く世尊に於てなり。是の如く法・戒・敎に「於て亦然り」。若し諸の梵行[者]有りて世尊に稱譽せらるれば、彼すなはち[此を]責數し輕易し觸嬈し侵害し、意を開かず意を解かず意靖からず。これを第五に心中の穢を拔かずと謂ふ。謂く梵行に於てなり。云何が心中の五縛を解かざるや。(1)或は一有りて[四]身[に於て]染を離れず欲を離れず愛を離れず渴を離れず。若し身[に於て]染を離れず欲を離れず愛を離れず渴を離れざる者有れば、彼の心趣向せず靖からず住せず解せず、自ら方便して燕坐を斷ず。若しこの心趣向せず靖からず住せず解せず、自ら方便して燕坐を斷ずる者有れば、これを第一に心縛を解かずと謂ふ。謂く身なり。(2)また次に[五]欲に於て染を離れず欲を離れず愛を離れず渴を離れず。若し欲に於て染を離れず欲を離れず愛を離れず渴を離れざる者有れば、彼の心趣向せず靖からず住せず解せず、自ら方便して燕坐を斷ず。若しこの心趣向せず靖からず住せず解せず、自ら方便して燕坐を斷ずる者有れば、これを第二に心縛を解かずと謂ふ。謂く欲なり。(3)また次に一有りて說く所聖道と相應し柔軟にして疑蓋無し。謂く戒を說き定を說き慧を說き解脫を說き解脫知見を說き、損を說き不聚會を說き少欲を說き知足を說き斷を說き無欲を說き滅を說き燕坐を說き緣起を說く。是の如く比丘、沙門說 所の者、彼心趣向せず靖からず住せず解せず、自ら方便して燕坐を斷ず。若しこの心趣向せず靖からず住せず解せず、自

【一】 M. 16, Cetokhila-sutta.「增一」五一品の一。

【二】 五穢(Pañca cetokhilā)、心の五種の穢をいふ、五とは(1)世尊を疑ひ、(2)法、(3)戒、(4)敎を疑ひ、(5)諸梵行者の世尊に稱譽さるれば、それを責數す。

【三】 五縛(Pañca vinibandhā)。心を縛するもの五種をいふ。

【四】 身(Kāya)、染(Rāga)、欲(Chanda)、愛(Pema)、渴(Pipāsā)。

【五】 欲(Kāma)。

量識處に成就して遊ぶ、彼此處に依りて興衰を觀覺し、彼此處に依りて興衰を觀覺し已りて彼に住して必ず漏盡を得。設し彼に住して漏盡を得ざれば、必ず當に昇進して止息處を得べし。云何が昇進して止息處を得るや。彼一切の無量識處を度り、無所有、無所有處に成就して遊ぶ。彼若し覺る所或は樂或は苦或は不苦不樂有れば彼この覺無常なりと觀じ興衰を觀じ無欲を觀じ滅を觀じ斷を觀じ捨を觀ず。彼是の如くこの覺無常なりと觀じ興衰を觀じ無欲を觀じ滅を觀じ斷を觀じ捨を觀じ已りてすなはちこの世を受けず、この世を受けずし已りてすなはち恐怖せず、恐怖せざるに因りてすなはち般涅槃し、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辦じ更に有を受けずと如眞を知る。猶ほ村を去ること遠からずして大芭蕉有るがごとし。若し人斧を持ちて芭蕉樹を破り、破りて片と作し、破りて十分と爲し或は百分と作し、破りて十分と爲し或は百分と作し已りてすなはち葉葉を擗きて彼の節を見ず。況やまた實をや。阿難、是の如く比丘若し覺る所或は樂・或は苦・或は不苦不樂有れば、彼この覺無常なりと觀じ興衰を觀じ無欲を觀じ滅を觀じ斷を觀じ捨を觀じ、彼是の如くこの覺無常なりと觀じ興衰を觀じ無欲を觀じ滅を觀じ斷を觀じ捨を觀じ已りてすなはちこの世を受けず、この世を受けずし已りてすなはち恐怖せず、恐怖せざるに因り已りてすなはち般涅槃し、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辦じ更に有を受けずと如眞を知る。』こゝに於て尊者阿難叉手を佛に向け白して曰く『世尊、甚奇甚特なり。世尊諸の比丘の爲に依に依り依に立ち漏を捨離するを說き漏を過ぐするを說きたまふ。然も諸の比丘速に無上を得ず。謂く畢り究竟し盡く。』世尊告げて曰はく『是の如し阿難、是の如し阿難、甚奇甚特なり。我諸の比丘の爲に依に依り依に立ち漏を捨離するを說き漏を過度するを說く。然も諸の比丘速に無上を得ず。謂く畢り究竟し盡く。所以者何。人勝如有るが故に修道すなはち精麤有り。修道精麤有るが故に人すなはち勝如有り。阿難、この故に我人勝如有りと說く。』佛說是の如し。尊者阿難及び諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

【三】無所有處。

欲す。當に何の方便を以て我をして安隱に彼の岸に至らしむべきやと。またこの念を作す、我今寧ろこの岸邊に於て草木を收聚し〔八〕桴栰を縛り作り之に乘りて而も度るべしと。彼すなはち岸邊に草木を收聚し桴栰を縛り作り之に乘りて而も度り安隱に彼に至る。是の如く阿難、若し比丘有りて厭離に攀緣し厭離に依り厭離に住し、身惡を止息するが故に、心離定に入るが故に、欲を離れ惡不善の法を離れ、覺有り觀有り、離より生ずる喜と樂とあり初禪を得、成就して遊ぶ。彼此處に依りて興衰を觀覺し、彼此處に依りて興衰を觀覺し已りて彼に住して必ず漏盡を得。設し彼に住して漏盡を得ざれば、必ず當に昇進して止息處を得べし。云何が昇進して止息處を得るや。彼覺觀已に息み內靖一心にして覺無く觀無く、定より生ずる喜と樂とあり、第二禪を得、成就して遊ぶ。彼此處に依りて興衰を觀覺し、彼此處に依りて興衰を觀覺し已りて彼に住して必ず漏盡を得。設し彼に住して漏盡を得ざれば、必ず當に昇進して止息處を得べし。云何が昇進して止息處を得るや。彼喜欲を離れ捨無求にして遊び、正念正智にして而も身に樂を覺ふ。謂く[彼の]聖[者]の說く所の(聖)所捨・念・樂住・空あり、第三禪を得、成就して遊ぶ。彼此處に依りて興衰を觀覺し、彼此處に依りて興衰を觀覺し已りて彼に住して必ず漏盡を得。設し彼に住して漏盡を得ざれば、必ず當に昇進して止息處を得べし。云何が昇進して止息處を得るや。彼樂滅し苦滅し喜憂は本已に滅し、不苦不樂にして捨あり念あり、清淨にして第四禪を得、成就して遊ぶ。彼此處に依りて興衰を觀覺し、彼此處に依りて興衰を觀覺し已りて彼に住して必ず漏盡を得。設し彼に住して漏盡を得ざれば、必ず當に昇進して止息處を得べし。云何が昇進して止息處を得るや。彼一切の色想を度り有礙想を滅し若干想を念ぜず、無量空、この〔九〕無量空處に成就して遊ぶ。彼此處に依りて興衰を觀覺し、彼此處に依りて興衰を觀覺し已りて彼に住して必ず漏盡を得。設し彼に住して漏盡を得ざれば、必ず當に昇進して止息處を得べし。云何が昇進して止息處を得るや。彼一切の無量空處を度り、無量識、この〔一〇〕無

〔八〕桴栰。いかだ。
〔九〕無量空處。
〔一〇〕無量識處。

阿難、或は一有りて欲の爲に纒はれず、若し欲の纒を生ずれば卽ち捨の如眞を知り、彼捨の如眞を知り已りて彼の欲の纒すなはち滅す。阿難、或は一有りて恚の爲に纒はれず、若し恚の纒を生ずれば卽ち捨の如眞を知り、彼捨の如眞を知り已りて彼の恚の纒すなはち滅す。阿難、或は一有りて身見の爲に纒はれず、若し身見の纒を生ずれば卽ち捨の如眞を知り、彼捨の如眞を知り已りて彼の身見の纒すなはち滅す。阿難、或は一有りて戒[禁]取の爲に纒はれず。若し戒[禁]取の纒を生ずれば卽ち捨の如眞を知り、彼捨の如眞を知り已りて彼の戒[禁]取の[纒]すなはち滅す。阿難、或は一有りて疑の爲に纒はれず、若し疑の纒を生ずれば卽ち捨の如眞を知り、彼捨の如眞を知り已りて彼の疑の纒すなはち滅す。阿難、この道に依りこの跡に依りて五下分結を斷ず。阿難、猶ほ恒伽河のごとし。その水岸に溢る。若し人有り來りて彼の岸に事有り、河を度るを得んと欲し、彼この念を作す、この恒伽河その水岸に溢る。我彼の岸に於て事有り度らんと欲す。身に力有りて我をして安隱に浮びて彼の岸に至らしむる無しと。阿難、當に知るべし、彼の人力無し。是の如く阿難、若し人有りて覺・滅・涅槃にその心向はずして而も淸淨ならず解脫に住せず。阿難、當に知るべし、この人彼の羸人力有ること無きが如し。阿難、猶ほ恒伽河のごとし。その水岸に溢る。若し人有り來りて彼の岸に事有り、河を度るを得んと欲し、彼この念を作す、この恒伽河その水岸に溢る。我彼の岸に於て事有り度らんと欲す。身今力有りて我をして安隱に浮びて彼の岸に至らしむと。阿難、當に知るべし、彼の人力有り。是の如く阿難、若し人有りて覺・滅・涅槃に心向ひ淸淨にして而も解脫に住す。阿難、當に知るべし、この人彼の力人の如し。阿難、猶ほ山水甚だ深く極めて廣く、長流駛疾して多く所漂有り、その中船無く亦橋梁無きが如し。或は人有り來りて彼の岸に事有り、則便ち度らんと求む。彼度らんと求むる時而もこの念を作す、今この山水甚だ深く極めて廣く、長流駛疾して多く所漂有り、その中船無く亦橋梁の而も度るべき者無し。我彼の岸に於て事有り度らんと

【七】覺・滅・涅槃 (Sambodhi, nirodha, nibbāna)?

世尊に從ひて聞き已りて善く受け善く持せん。』世尊告げて曰はく『阿難、諦かに聽け、善く之を思念せよ。』尊者阿難白して曰く『唯然り。當に敎を受けて聽くべし。』佛言はく『阿難、(1)或は一有りて欲の爲に纒はれ欲心生じ已りて捨の如眞を知らず。彼捨の如眞を知らずし已りて欲轉た熾盛にして制除すべからず。これ下分結なり。阿難、(2)或は一有りて恚の爲に纒はれ恚心生じ已りて捨の如眞を知らず。彼捨の如眞を知らずし已りて恚轉た熾盛にして制除すべからず。これ下分結なり。阿難、(3)或は一有りて身見の爲に纒はれ身見心生じ已りて捨の如眞を知らず。彼捨の如眞を知らずし已りて身見轉た盛にして制除すべからず。これ下分結たり。阿難、(4)或は一有りて戒[禁]取の爲に纒はれ戒[禁]取心生じ已りて捨の如眞を知らず。彼捨の如眞を知らずし已りて戒[禁]取轉た盛にして制除すべからず。これ下分結なり。阿難、(5)或は一有りて疑の爲に纒はれ疑心生じ已りて捨の如眞を知らず。彼捨の如眞を知らずし已りて疑轉た熾盛にして制除すべからず。これ下分結 り。阿難、若し[五]道に依り跡に依れば五下分結を斷ず。彼この道に依らずこの跡に依らずして五下分結を斷ぜんは、終にこの處無し。阿難、猶ほ人有るが如し。[六]實を求むるを得んと欲し、實を求むるが爲の故に斧を持ちて林に入る。彼の人樹の根莖枝葉及び實を成就するを見る。彼の人根莖を截らずして實を得て歸らんは、終にこの處無し。是の如く阿難、若し道に依り跡に依れば五下分結を斷じ、この道に依らずこの跡に依らずして五下分結を斷ぜんは、終にこの處無し。阿難、若し道に依り跡に依れば五下分結を斷ず。彼この道に依りこの跡に依りて五下分結を斷ぜんは、必ずこの處有り。阿難、猶ほ人有るが如し。實を求むるを得んと欲し、實を求むるが爲の故に斧を持ちて林に入り、彼の人樹の根莖枝葉及び實を成就するを見る。彼の人根莖を截り、實を得て歸らんは、必ずこの處有り。是の如く阿難、若し道に依り跡に依れば五下分結を斷ず。この道に依りこの跡に依りて五下分結を斷ぜんは、必ずこの處有り。阿難、何の道に依り何の跡に依りて五下分結を斷ずるや。

(1)欲。
(2)恚。
(3)身見。
(4)戒禁取。
(5)疑。
【五】道(Magga)、跡(Paṭipadā)。
【六】實(Sāra)。樹の精なり。

に告げたまはく『我曾て[二]五下分結を說きぬ。汝等受持するや。』諸の比丘默然として答へず。世尊また再び三たび諸の比丘に告げたまはく『我曾て五下分結を說きぬ。汝等受持するや。』諸の比丘亦再び三たび默然として答へず。その時[三]尊者鬘童子彼の衆中に在りぬ。こゝに於て尊者鬘童子卽ち坐より起ち偏に著衣を袒ぎ叉手を佛に向け白して曰く『世尊曾て五下分結を說きたまひぬ。我これを受持す。』世尊問ひて曰はく『鬘童子、我曾て五下分結を說きぬ。汝受持するや。』尊者鬘童子答へて曰く『世尊曾て[四]初下分結を說きたまひぬ。これを我受持す。欲・恚・身見・戒取・疑なり。世尊第五下分結を說きたまひぬ。これを我受持す。』世尊訶して曰はく『鬘童子、汝云何が我五下分結を說くを受持するや。鬘童子、汝何の口より我五下分結を說くを受持するや。鬘童子、衆多の異學來りて嬰孩童子を以て汝を責數し喩し詰責すと爲すに非ざるや。(1)鬘童子、嬰孩・幼小柔軟にして仰眠し、意に欲想無し。況やまた欲心纏住するをや。然も彼の性使故に欲使と說く。(2)鬘童子、嬰孩・幼小柔軟にして仰眠し、衆生想無し。況やまた恚心纏住するをや。然も彼の性使故に恚使と說く。(3)鬘童子、嬰孩・幼小・柔軟にして仰眠し、自身想無し。況やまた身見心纏住するをや。然も彼の性使故に身見使と說く。(4)鬘童子、嬰孩・幼小・柔軟にして仰眠し、戒想有ること無し。況やまた戒[禁]取心纏住するをや。然も彼の性使故に戒[禁]取使と說く。(5)鬘童子、嬰孩・幼小・柔軟にして仰眠し、法想有ること無し。況やまた疑心纏住するをや。然も彼の性使故に疑使と說く。鬘童子、衆多の異學來りてこの嬰孩童子を以て汝を責數し喩し詰責すと爲すに非ざるや。』こゝに於て尊者鬘童子世尊の爲に面り訶責せられ已りて內に憂慼を懷き低頭默然し、辯を失ひて言無く所伺有るが如し。彼の時世尊面前に鬘童子を訶責し已りて默然として而も住したまひぬ。その時尊者阿難世尊の後に立ち扇を執りて佛を扇ぎぬ。こゝに於て尊者阿難叉手を佛に向け白して曰く『世尊、今正にこの時なり。善逝、今正にこの時なり。若し世尊諸の比丘の爲に五下分結を說きたまはゞ、諸の比丘

【二】五下分結(Pañc' orambhāgiyā saṃyojanā)、一卷「水喩經」註〔七〕を見よ。

【三】尊者鬘童子(Āyasmā Māluṅkyāputto)。

【四】宋元明の三本「說二初下分結」に作り、正倉院聖語藏本は次の「欲・恚・身見・戒取・疑」の欲字を除くといふ。この二者を合して完全なる意味をなすが如し。

(1)欲使(Kāmacchanda saṃyojana)。
(2)恚使(Byāpāda-s.)。
(3)身見使(Sakkāyadiṭṭhi-s.)。
(4)戒禁取見使(Sīlabbata parāmāsa-s.)。
(5)疑使(Vicikicchā-s.)。

興し、無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛・衆祐と號し、彼乃至五蓋心穢慧羸を斷じ欲を離れ惡不善の法を離れ第四禪を得るに至り成就して遊ぶ。彼是の如く定心清淨にして穢無く煩無く、柔軟にして善く住し不動心を得、漏盡智通を修學して作證し、彼この苦の如眞を知り、この苦の習を知り、この苦の滅を知り、この苦滅道の如眞を知り、この漏の如眞を知り、この漏の習を知り、この漏の滅を知り、この漏滅道の如眞を知る。彼是の如く知り是の如く見、欲漏心解脫し有漏・無明漏心解脫し、解脫し已りてすなはち解脫を知り、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辦じ更に有を受けずと如眞を知る。彼その時に於て自在に行き自在に住し自在に坐し自在に臥す。所以者何。彼自ら無量の惡不善の法の盡くるを見る。この故に彼自在に行き自在に住し自在に坐し自在に臥す。五比丘、猶ほ無事にして人民無き處の如し。彼に野鹿有り、自在に行き自在に住し自在に伏し自在に臥す。所以者何。彼の野鹿獵師の境界に在らず。この故に自在に行き自在に住し自在に伏し自在に臥す。かくの如く五比丘、比丘漏盡きて無漏を得、心解脫し慧解脫し、自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊び、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辦じ更に有を受けずと如眞を知る。彼その時に於て自在に行き自在に住し自在に坐し自在に臥す。所以者何。彼自ら無量の惡不善の法の盡くるを見る。この故に彼自在に行き自在に住し自在に坐し自在に臥す。五比丘、これを無餘解脫と說き、これを無病・無上安隱の涅槃と說き、これを無老・無死・無愁憂慼・無穢汚・無上安隱の涅槃と說くと。』佛說是の如し。尊者阿難及び諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

二百五[一]　五下分結經第四

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び、勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊諸の比丘

【一】 M. 64, Mahā-Mālunkya-sutta.

惑・無穢汚・無上安隱の涅槃を得、知を生じ見を生じ、定んで道品法あり、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辨じ更に有を受けずと如眞を知りぬ。こゝに於て世尊また彼に告げて曰く、五比丘、五欲の功德有りて愛すべく樂ふべく意の念ずる所なるべく善く欲と相應す。云何が五と爲す。眼に色を知り耳に聲を知り鼻に香を知り舌に味を知り身に觸を知る。五比丘、愚癡の凡夫而も多聞せず善友を見ず聖法を知らず聖法を御せず。彼觸染貪著し、憍傲にして受入し、災患を見ず出要を見ずして而も之を取用す。當に知るべし。彼[三]弊魔に隨ひ自ら弊魔と作り弊魔の手に墮し、魔網の爲に纒はれ魔羂に纒はれ魔の纒を脫せず。五比丘、猶ほ野鹿纒の爲に纒はるゝが如し。當に知るべし、彼獵師に隨ひ自ら獵師と作り、獵師の手に墮し獵師の網の爲に纒はれ、獵師來り已るも脫することを得る能はず。是の如く五比丘、愚癡の凡夫而も多聞せず善友を見ず聖法を知らず聖法を御せず、彼この五欲の功德に於て觸染貪著し、憍傲にして受入し、災患を見ず出要を見ずして而も之を取用す。當に知るべし。彼弊魔に隨ひ自ら弊魔と作り弊魔の手に墮し魔網の爲に纒はれ魔の纒に纒はれ魔の纒を脫せず。五比丘、多聞の聖弟子善知識を見て而も聖法を知り、又聖法を御す。彼この五欲の功德に於て觸れず染まず貪らず著せず、亦憍傲ならず受入せず、災患を見出要を見て而も之を取用す。當に知るべし。彼弊魔に隨はず自ら魔と作らず魔の手に墮せず魔網の纒ふ所と爲らず魔纒の纒ふ所と爲らず、すなはち魔の纒を解脫す。五比丘、猶ほ野鹿纒を脫することを得るが如し。當に知るべし、彼獵師に隨はず自ら獵師と作らず獵師の手に墮せず獵師の網の纒ふ所と爲らず、獵師來り已れば則ち能く脫するを得。是の如く五比丘、多聞の聖弟子善知識を見て而も聖法を知り又聖法を御す。彼この五欲の功德に於て觸れず染まず貪らず著せず、亦(見て)憍傲ならず受入せず、災患を見出要を見て而も之を取用す。當に知るべし、彼弊魔に隨はず自ら魔と作らず魔の手に墮せず魔網の纒ふ所と爲らず、すなはち魔の纒を解脫す。五比丘、若し時に如來世に出

【三】　弊魔(Pāpimā)。

ける極妙の威德に堪えず、即ち坐より起ち、衣鉢を持つ者有り、床を敷く者有り、水を取る者、足を洗はんと欲する者有り。我この念を作しぬ。この愚癡の人何ぞ牢固無きや。自ら制度を立てゝ還つて本要に違ふと。我彼を知り已りて五比丘の敷きし所の座に坐しぬ。時に五比丘我が姓字を呼び及び我を〔一九〕卿と「呼び」ぬ。我彼に語げて曰く、五比丘、我は如來・無所著・正盡覺なり。汝等我が本の姓字を稱すること莫れ、亦我を卿と「呼ぶ」こと莫れ。所以者何。我無病・無上安隱の涅槃を求めて無病・無上安隱の涅槃を得、我無老・無死・無愁憂慼・無穢汚・無上安隱の涅槃を求めて無老・無死・無愁憂慼・無穢汚・無上安隱の涅槃を得、知を生じ見を生じ、定んで道品法あり、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辦じ更に有を受けずと如眞を知りぬと。彼我に語げて曰く、卿瞿曇、本是の如く行じ是の如き道跡あり是の如く苦行して尚〔二〇〕人上の法差降聖知聖見を得ること能はざりき。況やまた今日多欲多求にして妙なる飲食・好き粳糧飯及び麨酥蜜を食し麻油もて體を塗るをやと。我また語げて曰く、五比丘、汝等本の時我是の如く諸根淸淨にして光明照耀するを見しやと。時に五比丘また我に答へて曰く、本卿の諸根淸淨にして光明照耀するを見ざりき。卿瞿曇、今諸根淸淨にして形色極妙面光照耀すと。我その時に於て即ち彼に告げて曰く、五比丘、當に知るべし、二邊行有り。諸の爲道者當に學すべからざる所なり。一に曰く欲樂下賤の業にして凡人の行ずる所に著す。二に曰く自ら煩ひ自ら苦しみ賢聖の求むる法に非ずし、義と相應する無し。五比丘、この二邊を捨て中道を取り明を成じ智を成じ定を成就して而も自在を得、智に趣き覺に趣き涅槃に趣く有り。謂く八正道なり。正見乃至正定、これを謂ひて八と爲すと。意欲隨順して五比丘を敎へ、二人を敎化すれば三人乞食し、三人食を持ち來りて六人の食に足る。三人を敎化すれば二人乞食し、二人食を持ち來りて六人の食に足る。我是の如くして敎へ是の如くして彼を化し、無病・無上安隱の涅槃を求めて無病・無上安隱の涅槃を得、無老・無死・無愁憂慼・無穢汚・無上安隱の涅槃を求めて無老・無死・無愁憂

【一九】卿於我（Āvusovādena samudācaranti）。「余を君と呼べり。」

【二〇】人上法差降聖知聖見（Uttari-manussa-dhammā alamariya-ñāṇa-dassana-visesaṃ）。「人法に勝れる、極めて貴き特殊知見。」

【眼】を出過せるを以て五比丘の[一六]波羅㮈・仙人住處鹿野園中に在るを見、我[意に]隨ひて覺樹の下に住し、衣を攝り鉢を持して波羅㮈、迦尸の都邑に往きぬ。その時異學[一七]優陀遙に我の來るを見て而も我に語げて曰く、賢者瞿曇、諸根清淨にして形色極めて妙に、面光照耀す。賢者瞿曇、師はこれ誰と爲し、誰に從ひて學道し誰の法を信ずと爲すやと。我その時に於て卽ち優陀の爲に偈を說きて答へて曰く、

我最上最勝にして一切の法に著せず、諸愛盡く解脫して自ら覺る。誰をか師と稱せん。等しきもの無く勝るもの有ること無く、自ら無上覺を覺り、如來・天人師にして普く力を成就するを知る。

優陀我に問ひて曰く、賢者瞿曇、自ら勝ると稱するやと。我また偈を以て而も彼に答へて曰く、

勝者是の如く有り、謂く諸漏盡くるを得。我諸の惡法を害す。優陀、故に我勝る。

優陀また我に問ひて曰く、賢者瞿曇、何處に至らんと欲するやと。我時に偈を以て而も彼に答へて曰く、

我波羅㮈に至り、妙なる甘露の鼓を擊ち、無上の法輪を轉ぜん。世未だ曾て轉ぜざる所たり。

優陀我に語げて曰く、賢者瞿曇、或はこれ有るべしと。是の如く語げ已りて卽ち彼邪道を經てすなはち還り去りぬ。我自ら仙人住處・鹿野園中に往至しぬ。時に五比丘遙に我の來るを見、各相約勅して而も制を立てゝ曰く、諸賢、當に知るべし。[一八]この沙門瞿曇來る。多欲多求にして妙なる飲食・好き粇糧飯及び酥酪蜜を食し、麻油もて體に塗る。今また來至す。汝等但坐し、愼みて起ち迎ふること莫れ、亦禮を作すこと莫れ。豫め一座を留め、請じて坐せしむること莫れ、到り已らば語げて曰へ、卿坐せんと欲せば自ら欲する所に隨へと。我時に五比丘の所に往至しぬ。時に五比丘我に於

【一六】波羅㮈(Bārāṇasī)、仙人住處(Isipatana)、鹿野苑(Migadāya)。
【一七】優陀(Upaka)。

【一八】Vin. i. 9.

河の清流岸に盈つ。我彼を見已りてすなはちこの念を作しぬ、この地至りて愛樂すべく、山林欝茂し、尼連禪河の清流岸に盈つ。若し族姓子學する有らんと欲せば、中に於て學すべし。我亦當に學すべし。我今寧ろこの中に於て學すべしと。卽便ち草を持ちて〔一〕覺樹に往詣し到り已りて布下し尼師檀を敷きて結跏趺坐しぬ、要ず坐を解かずして漏盡を得るに至らんとて。我すなはち坐を解かずして漏盡を得るに至りぬ。無病・無上安隱の涅槃を求めてすなはち無病・無上安隱の涅槃を得、無老・無死・無愁憂慼・無穢汚・無上安隱の涅槃を求めてすなはち無老・無死・無愁憂慼・無穢汚・無上安隱の涅槃を得、知を生じ見を生じ、〔二〕定んで道品法あり、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辨じ更に有を受けずと如眞を知りぬ。我初めて無上正盡覺を覺りてすなはち〔三〕この念を作しぬ、我當に誰が爲に先づ法を説くべきやと。我またこの念を作しぬ、我今寧ろ阿羅羅加摩の爲に先づ法を説くべきやと。その時天有り虚空中に住して而も我に語げて曰く、大仙人當に知るべし。阿羅羅加摩、彼命終りて來た今七日に至ると。我亦自ら阿羅羅加摩その命終りて來た今七日を得と知り、我またこの念を作しぬ、阿羅羅加摩、彼の人長衰してこの法を聞かず。若しこれを聞かば速に〔四〕法次法を知らんと。我初め無上正盡覺を覺り已りて是の如き念を作しぬ、我當に誰が爲に先づ法を説くべきやと。我またこの念を作しぬ、我今寧ろ欝陀羅羅摩子の爲に先づ法を説くべきやと。天また空に住して而も我に語げて曰く、大仙人當に知るべし、欝陀羅羅摩子命終り已りて來た二七日なりと。我亦自ら欝陀羅羅摩子命終り已りて來た二七日なるを知り、我またこの念を作しぬ、欝陀羅羅摩子彼の人長衰してこの法を聞かず。若し法を聞かば速に法・次法を知らんと。我初め無上正盡覺を覺り已りて是の如き念を作しぬ、我當に誰が爲に先づ法を説くべきやと。〔五〕我またこの念を作しぬ、昔五比丘我が爲に勞を執り饒益する所多し。我苦行せる時彼の五比丘我に承事しぬ。我今寧ろ五比丘の爲に先づ法を説くべきやと。我またこの念を作しぬ、昔の五比丘今何處に在りやと。我清淨の天眼の人

〔一〕覺樹(Bodhirukkha)。菩提樹なり。

〔二〕定道品法(Akuppā me vimutti)、「余の解脱は誤りなし。」

〔三〕Vin. i. 7.

〔四〕法次法(Dhammānu-dhamma)。

〔五〕Vin. i. 8.

し問ひて曰く、欝陀羅、我汝が法中に於て學せんと欲す。爾るべしと爲すや不やと。欝陀羅羅摩子我に答へて曰く、賢者、我不可無し。汝學せんと欲せばすなはち學せよと。我また問ひて曰く、欝陀羅、汝が[父]羅摩自ら知り自ら覺り自ら作證する[所]、何等の法なりやと。欝陀羅・羅摩子我に答へて曰く、賢者、一切無所有處を度り非有想非無想處を得、成就して遊ぶ。賢者、我が父羅摩自ら知り自ら覺り自ら作證する[所]、謂くこの法なりと。我またこの念を作しぬ、但羅摩獨りこの信有るにあらず、我亦この信有り、但羅摩獨りこの精進有るにあらず、我亦この精進有り。但羅摩獨りこの慧有るにあらず、我亦この慧有り。羅摩この法を自ら知り自ら覺り自ら作證す。我何の故にこの法を自ら知り自ら覺り自ら作證するを得ざらんやと。我この法を證せんと欲せるが故にすなはち獨り遠離・空・安靖處に住し、心放逸無くして修行精勤しぬ。我獨り遠離・空・安靖處に住し、心放逸無くして修行精勤し已りて久しからずして彼の法を證するを得、彼の法を證し已りてまた欝陀羅羅摩子の所に往き問ひて曰く、欝陀羅、汝が父羅摩、この法自ら知り自ら覺り自ら作證し、謂く一切無所有處を度りて非有想非無想處を得、成就して遊ぶやと。欝陀羅羅摩子我に答へて曰く、賢者、我が父羅摩この法自ら知り自ら覺り自ら作證し、謂く一切無所有處を度り非有想非無想處を得、成就して遊ぶと。欝陀羅また我に語げて曰く、我が父羅摩この法作證するが如く、汝亦然り。汝この法作證するが如く、我が父亦然り。賢者、汝來りて共にこの衆を領ぜよと。欝陀羅羅摩子師處と同じく我亦師の如く、最上の恭敬・最上の供養・最上の歡喜を[爲しぬ。]我亦この念を作しぬ、この法智に趣かず覺に趣かず涅槃に趣かず。我今寧ろこの法を捨てゝ更に無病・無上安隱の涅槃を求め、無老・無死・無愁憂慼・無穢汚・無上安隱の涅槃を求むべしと。我卽ちこの法を捨てゝすなはち無病・無上安隱の涅槃を求め、無老・無死・無愁憂慼・無穢汚・無上安隱の涅槃を求め已りて〔七〕象頂山の南〔八〕欝鞞羅梵志の村、名づけて〔九〕斯那と曰ふに往きぬ。彼の中に於て地至りて愛樂すべく山林欝茂し、〔一〇〕尼連禪

【七】象頂山(Gayāsīsa)。象頭山。
【八】欝鞞羅 Uruvelā)、
【九】村名曰斯那 (Senāni-gama)。
【一〇】尼連禪河(Nerañjarā)。

家無くして學道し、身命清淨を護り、口・意命清淨を護り、我この戒身を成就し已りて無病・無上安隱の涅槃、無老・無死・無愁憂慼・無穢汚・無上安隱の涅槃を求めんと欲せるが故に更に【四】阿羅羅・伽羅摩の所に往き問ひて曰く、阿羅羅、我汝の法に於て梵行を行ぜんと欲す。爾るべしと爲すや不やと。阿羅羅我に答へて曰く、賢者、我不可無し。汝行ぜんと欲せばすなはち行ぜよと。我また問ひて曰く、阿羅羅、云何が汝この法自ら知り自ら覺り自ら作證するやと。阿羅羅我に答へて曰く、賢者、我一切識處を度り【五】無所有處を得、成就して遊ぶ。この故に我が法自ら知り自ら覺り自ら作證すと。我またこの念を作しぬ、但阿羅羅獨りこの信有るにあらず、我亦この信有り。但阿羅羅獨りこの精進有るにあらず、我亦この精進有り。但阿羅羅獨りこの慧有るにあらず、我亦この慧有り。阿羅羅この法に於て自ら知り自ら覺り自ら作證すと。我この法を證せんと欲せるが故にすなはち獨り遠離・空・安靖處に住し、心放逸無くして修行精勤し、我獨り遠離・空・安靖處に住し、心放逸無くして修行精勤し已りて久しからずして彼の法を證し得ぬ。彼の法を證し已りてまた阿羅羅・伽羅摩の所に往詣し、問ひて曰く、阿羅羅、この法自ら知り自ら覺り自ら作證して、謂く一切無量識處を度り無所有處を得、成就して遊ぶやと。阿羅羅・伽羅摩我に答へて曰く、賢者、我がこの法自ら知り自ら覺り自ら作證し、謂く無量識處を度り無所有處を得、成就して遊ぶと。阿羅羅・伽羅摩また我に語げて曰く、賢者、これを我この法作證するが如く、汝亦然り、汝この法作證するが如く我亦然りと爲す。賢者、汝來りて共にこの衆を領ぜよと。これを阿羅羅・伽羅摩師の處我と同等なりと爲し、最上の恭敬・最上の供養・最上の歡喜を「爲しぬ。」我またこの念を作しぬ、この法智に趣かず覺に趣かず涅槃に趣かず。我今寧ろこの法を捨てゝ、更に無病・無上安隱の涅槃を求め、無老・無死・無愁憂慼・無穢汚・無上安隱の涅槃を求むべしと。我即ちこの法を捨てゝすなはち無病・無上安隱の涅槃を求め、無老・無死・無愁憂慼・無穢汚・無上安隱の涅槃を求め已りて【六】鬱陀羅羅摩子の所に往詣

【四】阿羅羅・伽羅摩（Āḷāra Kālāma）。

【五】無所有處。佛教にては無色界の第三天なり、阿羅羅はこれを人間の修行によりて達し得る極致として示したるなり。

【六】鬱陀羅羅摩子（Uddaka Rāmaputta）。

く『二種の求有り。一に曰く聖求、二に曰く非聖求なり。云何が非聖求なる。有一は實に病法にして病法を求め、實に老法・死法・愁憂慼法にして「老法・死法・愁憂慼法を求め」、實に穢汚法にして穢汚法を求む。云何が實に病法にして病法を求め、云何が病法なりや。兒子兄弟これ病法なり。象馬・牛羊・奴婢・錢財・珍寶・米穀、これ病害法なり。衆生中に於て觸染貪著し、憍慠にして受入し、災患を見ず出要を見ずして而も之を取用す。云何が老法・死法・愁憂慼法・穢汚法なりや。兒子兄弟これ「老法・死法・愁憂慼法・」穢汚法なり。象馬・牛羊・奴婢・錢財・珍寶・米穀これ「老法・死法 愁憂慼法・」穢法・害法なり。衆生中に於て染觸貪著し憍慠にして受入し、災患を見ず出要を見ずして而も之を取用す。彼の人無病・無上安隱の涅槃を求めんと欲して、無病無上安隱の涅槃を得んは終にこの處無し。無老・無死・無愁憂慼・無穢汚・無上安隱の涅槃を求め、無老・無死・無愁憂慼・無穢汚・無上安隱の涅槃を得んは、終にこの處無し。これを非聖求と謂ふ。云何が聖求なりや。有一はこの念を作す、我自ら實に病法なり、無辜にして病法を求む。我自ら實に老法・死法・愁憂慼法・穢汚法なり、無辜にして「老法・死法・愁憂慼法・」穢汚法を求む。我今寧ろ無病・無上安隱の涅槃を求め、無老・無死・無愁憂慼・無穢汚法・無上安隱の涅槃を求むべしと。彼の人すなはち無病・無上安隱の涅槃を求めて、無病・無上安隱の涅槃を得んは、必ずこの處有り。無老・無死・無愁憂慼・無穢汚・無上安隱の涅槃を求め、無老・無死・無愁憂慼・無穢汚・無上安隱の涅槃を得んは、必ずこの處有り。我本未だ無上正盡覺を覺らざりし時亦是の如く念じぬ、我自ら實に病法なり、無辜にして病法を求む。我自ら實に老法・死法・愁憂慼法・穢汚法なり。無辜にして「老法・死法・愁憂慼法・」穢汚法を求む。我今寧ろ無病・無上安隱の涅槃を求め、無老・無死・無愁憂慼・無穢汚・無上安隱の涅槃を求むべきやと。我時に年少の童子にして清淨の靑髮あり、盛年にして年二十九なりき。その時極めて多く樂戲し莊飾し遊行しぬ。我その時に於て父母啼哭し諸親樂しまざるに、我鬚髮を剃除し袈裟衣を著け至信に家を捨て

巻の第五十六

二百四、[一]羅摩經第三

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衛國に遊び東園鹿子母堂に在しぬ。その時世尊則ち晡時に於て燕坐より起ち堂上より來下し、尊者阿難に告げたまはく『我今汝と共に[二]阿夷羅婆提河に至りて浴せん。』尊者阿難白して曰く『唯然り。』尊者阿難戸鑰を執持し遍く諸屋に詣りて而も彷徉し、諸の比丘を見てすなはちこの說を作しぬ『諸賢、共に[三]梵志羅摩の家に詣るべし。』諸の比丘すなはち共に梵志羅摩の家に往詣しぬ。世尊尊者阿難を將ゐて阿夷羅婆提河に往至し、衣を岸上に脫ぎ、すなはち水に入りて浴し、浴し已りて還た出でゝ體を拭き衣を著けぬ。その時尊者阿難世尊の後に立ち扇を執りて佛を扇ぎぬ。こゝに於て尊者阿難叉手を佛に向け白して曰く『世尊、梵志羅摩の家極めて好く整頓し甚だ愛樂すべし。唯願はくは世尊、慈愍を以ての故に梵志羅摩の家に往至したまへ。』世尊、尊者阿難の爲に默然として而も受けたまひぬ。こゝに於て世尊、尊者阿難を將ゐて梵志羅摩の家に往至したまひぬ。その時梵志羅摩の家衆多の比丘集坐して法を說きぬ。佛門外に住まり諸の比丘法を說き訖竟るを待ちたまひぬ。衆多の比丘尋いで法を說き訖り默然として而も住しぬ。世尊知り已りて謦欬して門を敲きたまひ、諸の比丘聞きて卽ち往きて門を開き、世尊すなはち梵志羅摩の家に入り、比丘衆の前に於て座を敷きて而も坐し、問ひて曰はく『諸の比丘、向に何等を說き何の事を以ての故に集坐して此に在りや。』時に諸の比丘答へて曰く『世尊、向には法を說き、この法の事を以て集坐して此に在り。』世尊歎じて曰はく『善き哉善き哉、比丘集坐しては當に二事を行ずべし。一に曰く說法、二に曰く默然なり。所以者何。我亦汝が爲に法を說かん。諦かに聽け、諦かに聽きて、善く之を思念せよ。』時に諸の比丘白して曰く『唯然り。當に教を受けて聽くべし。』佛言は

【一】M. 26, Ariyapariyo-sana-sutta.

【二】阿夷羅婆提河（Aciravatī nadī）。

【三】梵志羅摩（Rammaka Brāhmaṇa）。

に智有るに奉事して智慧の人の「如く」ならん。世尊、我今再び自ら佛・法及び比丘衆に歸す。唯願はくは世尊、我を受けて優婆塞と爲したまへ。今日より始めて終身自ら歸し乃ち命盡くるに至らん。世尊、我本信じ敬重せし所の外道の沙門・梵志は、今日より斷たん。世尊、我今三たび自ら佛・法及び比丘衆に歸す。唯願はくは世尊我を受けて優婆塞と爲したまへ。今日より始めて終身自ら歸し乃ち命盡くるに至らん。」』佛說是の如し。哺利多居士及び諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

中阿含經卷第五十五

この八支斷絶俗事有りて而も作證するを得と謂ふ。居士、彼覺有り觀有り[乃至、覺觀]息み內靖・一心にして覺無く觀無く、定より生ずる喜と樂とあり、第二禪を得、成就して遊ぶ。彼已に喜欲を離れ捨無求にして遊び、正念正智にして而も身に樂を覺ふ。謂く[彼の]聖[者]の說く所の(聖)所捨・念・樂住・空あり、第三禪を得、成就して遊ぶ。彼樂滅し苦滅し喜憂は本已に滅し、不苦不樂にして捨あり念あり、清淨にして第四禪を得、成就して遊ぶ。彼已に是の如く定心を[得]清淨にして穢無く煩無く柔軟にして善く住し不動心を得、漏盡智通を修學して作證す。彼この苦の如眞を知りこの苦の習を知りこの苦の滅を知り、この苦滅道の如眞を知り、この漏の如眞を知りこの漏の習を知りこの漏の滅を知りこの漏滅道の如眞を知る。彼是の如く知り是の如く見、欲漏心解脫し有漏・無明漏心解脫し、解脫し已りてすなはち解脫を知り、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辨じ更に有を受けずと如眞を知る。』この法を說きたまひし時、哺利多居士塵を遠ざけ垢を離れ諸法の法眼生じぬ。こゝに於て哺利多居士法を見、法を得、白淨の法を覺り疑を斷じ惑を度り、更に餘尊無くまた他に由らず、猶豫有ること無く已に果證に住し、世尊の法に於て無所畏を得、佛足に稽首して白して曰く『世尊、我今自ら佛・法及び比丘衆に歸す。唯願はくは世尊我を受けて優婆塞と爲したまへ。今日より始めて終身自ら歸し乃ち命盡くるに至らん。世尊、我本白淨衣を著け白巾もて頭を裹み杖を拄へ蓋執り及び俗屣を著け、園より園に至り、觀より觀に至り、林より林に至り遍く遊行し彷徉し、若し諸の沙門梵志を見れば、すなはちこの語を作しぬ、諸賢、我俗を離れ俗を斷じ諸の俗事を捨つと。彼の諸の沙門梵志濡軟柔和にして我に語げて言はく、唯然り賢哺利多、俗を離れ俗を斷じ諸の俗事を捨つと。世尊、我その時に於て彼實に無智なるを智處に安著し實に無智なるを祠り又無智なるに食せしめ、實に無智なるに奉事することを智慧の人の如くなりき。世尊、我今日より諸の比丘衆及び世尊の弟子これ實に智有るを智慧處に安著し、實に智有るを祠り又智有るに食せしめ、實

りて而も共に歎じて曰く、是の如く善を爲し是の如く快を爲す。若し財物有れば應に是の如く極めて自ら娛樂するを作すべしと。その物主者欲する所に隨ひて奪ひ或は人をして奪はしめ、卽便ち自ら奪ひ或は人をして奪はしむ。多人見已りて而も共に說きて曰く、彼假借せる者、實に欺誑してこれ假借に非ずと爲す。所以者何。その物主者欲する所に隨ひて奪ひ或は人をして奪はしめ、卽便ち自ら奪ひ或は人をして奪はしむと。居士、多聞の聖弟子亦復この思惟を作す、[二]欲は假借の如し。世尊欲は假借の如しと說きたまふ。樂少く苦多く、多く災患有り。當に之を遠離すべし。若しこゝに欲を捨離し惡不善の法を離るゝもの有れば、謂くこの一切世間の飮食永く盡きて餘無けん。當に彼を修習すべしと。居士、猶ほ村を去ること遠からずして大果樹有るがごとし。この樹常に多く好美の果有り。若し人有り來りて飢餓羸乏し果を食するを得んと欲し、彼この念を作す、この樹常に多く好美の果有り。我飢え羸乏し果を食するを得んと欲す。然るにこの樹下自落果の飽食するを得、及び持ち歸り去るを[得]べきもの無し。我能く樹に緣づ。我今寧ろこの樹に上るべきやと。念じ已りてすなはち上る。また一人有り來りて飢餓羸乏し果を食するを得んと欲し、極利の斧を持つ。彼この念を作す、この樹常に多く好美の果有り。然るにこの樹下自落果の飽食するを得、及び持ち歸り去るを[得]べきもの無し。我樹に緣づる能はず。我今寧ろこの樹を斫り倒すべきやと。卽便ち斫り倒す。居士の意に於て云何。若し樹上の人速に來下せざれば、樹地に倒るゝ時必ずその臂[及び]餘の支體を折るや。』居士答へて曰く『唯然り瞿曇。』『居士の意に於て云何。若し樹上の人速に來下すれば、樹地に倒るゝ時寧ろその臂[及び]餘の支體を折るや。』居士答へて曰く『不なり瞿曇。』『居士、多聞の聖弟子亦復この思惟を作す、[三]欲は樹果の如し。世尊欲は樹果の如しと說きたまふ。樂少く苦多く、多く災患有り。當に之を遠離すべし。若しこゝに欲を捨離し惡不善の法を離るゝもの有れば、謂くこの一切世間の飮食永く盡きて餘無けん。當に彼を修習すべしと。これを聖法律中更に

〔二〕欲如二假借一。

〔三〕欲如二樹果一。

士答へて曰く『不なり瞿曇。所以者何。彼火坑を見てすなはちこの思惟を作す、若し火坑に墮せば必ず死すること疑無し。設し死せざるも定んで極苦を受けんと。彼火坑を見てすなはち遠離を思ひ捨離を願求す。』『居士、多聞の聖弟子亦復この思惟を作す、[九]欲は火坑の如し。世尊欲は火坑の如しと說きたまふ。樂少く苦多く、多く災患有り。當に之を遠離すべし。若しこゝに欲を捨離し惡不善の法を離るゝもの有れば、謂くこの一切世間の飲食永く盡きて餘無けん。當に彼を修習すべしと。居士、猶ほ村を去ること遠からずして大毒蛇有るがごとし。至惡にして苦毒あり黑色にして畏るべし。若し人有り來りて愚ならず癡ならず亦顚倒せず、自ら本心に住して自由自在なり。樂を用ひて苦を用ひず、甚だ苦を憎惡し、活を用ひて死を用ひず、甚だ死を憎惡す。居士の意に於て云何。この人寧ろ當に手を以て及び餘の支體を授與し、我を螫せ、我を螫せと、是の如き說を作すべきや。』居士答へて曰く『不なり瞿曇。所以者何。彼毒蛇を見てすなはちこの思惟を作す、若し我手及び餘の支體を以て蛇をして螫さしむれば、必ず死すること疑無し。設し死せざるも定んで極苦を受けんと。彼毒蛇を見てすなはち遠離を思ひ捨離を願求す。』『居士、多聞の聖弟子亦復この思惟を作す、[一〇]欲は毒蛇の如し。世尊欲は毒蛇の如しと說きたまふ。樂少く苦多く、多く災患有り。當に之を遠離すべし。若しこゝに欲を捨離し惡不善の法を離るゝもの有れば、謂くこの一切世間の飲食永く盡きて餘無けん。當に彼を修習すべしと。居士、猶ほ人有るが如し。夢に五欲を具足するを得て自ら娛しむ。彼若し寤め已りて都べて一も見ず。居士、多聞の聖弟子亦復この思惟を作す、[一一]欲は夢の如し。世尊欲は夢の如しと說きたまふ。樂少く苦多く、多く災患有り。當に之を遠離すべし。若しこゝに欲を捨離し惡不善の法を離るゝもの有れば、謂くこの一切世間の飲食永く盡きて餘無けん。當に彼を修習すべしと。居士、猶ほ人有るが如し。樂具を假借し、或は宮殿・樓閣或は園觀・浴池或は象馬車乘或は綩綿被或は指環・臂釧或は香瓔珞・頸鉗或は金寶・華鬘或は名衣・上服を[假借す。]多人見已

【九】欲如二火坑一。

【一〇】欲如二毒蛇一。

【一一】欲如レ夢。

唇を破り齒を缺き或は咽喉を傷く。然も狗これを以て飢を除くを得ず。居士、多聞の聖弟子亦復この思惟を作す、[六]欲は骨鏁の如し。世尊欲は骨鏁の如しと說きたまふ。樂少く苦多く、多く災患有り。當に之を遠離すべし。若しこゝに欲を捨離し惡不善の法を離るゝもの有れば、謂くこの一切世間の飲食永く盡きて餘無けん。當に彼を修習すべしと。居士、猶ほ村を去ること遠からずして小肉臠有りて露地に墮在するがごとし。或は烏或は鵄彼の肉を持ち去る。餘の烏・鵄烏競ひて而も之を逐ふ。居士の意に於て云何。若しこの烏鵄速にこの小肉臠を捨てざれば、餘の烏鵄競ひて而も逐ふを致すや。』居士答へて曰く『唯然り瞿曇。』『居士の意に於て云何。若しこの烏鵄能く速にこの小肉臠を捨つれば、餘の烏鵄烏當にまた競ひ逐ふべきや。』居士答へて曰く『不なり瞿曇。』『居士、多聞の聖弟子亦復この思惟を作す、[七]欲は肉臠の如し。世尊欲は肉臠の如しと說きたまふ。樂少く苦多く、多く災患有り。當に之を遠離すべし。若しこゝに欲を捨離し惡不善の法を離るゝもの有れば、謂くこの一切世間の飲食永く盡きて餘無けん。當に彼を修習すべしと。居士、猶ほ人有るが如し。手に火炬を把り風に向ひて而も行く。居士の意に於て云何。若使この人速に捨てざれば、必ずその手[及び]餘の支體を燒くや。』居士答へて曰く『唯然り瞿曇。』『居士の意に於て云何。若使この人速に炬を捨つれば、當にその手[及び]餘の支體を燒くべきや。』居士答へて曰く『不なり瞿曇。』『居士、多聞の聖弟子亦復この思惟を作す、[八]欲は火炬の如し。世尊欲は火炬の如しと說きたまふ。樂少く苦多く、多く災患有り。當に之を遠離すべし。若しこゝに欲を捨離し惡不善の法を離るゝもの有れば、謂くこの一切世間の飲食永く盡きて餘無けん。當に彼を修習すべしと。居士、猶ほ村を去ること遠からずして大火坑有るがごとし。その中火を滿して而も烟燄無し。若し人有り來りて愚ならず癡ならず 顚倒せず、自ら本心に住して自由自在なり。樂を用ひて苦を用ひず、甚だ苦を憎惡し、活を用ひて死を用ひず、甚だ死を憎惡す。居士の意に於て云何。この人寧ろ當に火坑に入るべきや。居

【六】欲如二骨鏁一。五四卷「阿梨吒經」參照。

【七】欲如二肉臠一。

【八】欲如二火炬一。

[者]梵行者我に戒を道説すべく、諸方悉く當に我が惡名を聞くべく、身壞れ命終りて必ず惡處に至り地獄の中に生ぜん。是の如く害恚すればこの惡報を現世及び後世に受く。我今寧ろ害恚無く害恚を斷ずるに依るべきやと。すなはち害恚無く害恚を斷ずるに依る。是の如く多聞の聖弟子害恚無く害恚を斷ずるに依る。居士、(7)多聞の聖弟子云何が憎嫉惱無く憎嫉惱を斷ずるに依るや。多聞の聖弟子この思惟を作す、憎嫉惱すれば必ず惡報を現世及び後世に受く。若し我憎嫉惱すれば、すなはち當に自ら害し亦他を誣謗し、天及び諸の智[者]梵行者我に戒を道説すべく、諸方悉く當に我が惡名を聞くべく、身壞れ命終りて必ず惡處に至り地獄の中に生ぜん。是の如く憎嫉惱すればこの惡報を現世及び後世に受けん。我今寧ろ憎嫉惱無く憎嫉惱を斷ずるに依るべきやと。すなはち憎嫉惱無く憎嫉惱を斷ずるに依る。是の如く多聞の聖弟子憎嫉惱無く憎嫉惱を斷ずるに依る。居士、(8)多聞の聖弟子云何が增上慢無く增上慢を斷ずるに依るや。多聞の聖弟子この思惟を作す、增上慢あれば必ず惡報を現世及び後世に受く。若し我增上慢あれば、すなはち當に自ら害し亦他を誣謗し、天及び諸の智[者]梵行者我に戒を道説すべく、諸方悉く當に我が惡名を聞くべく、身壞れ命終りて必ず惡處に至り地獄の中に生ぜん。是の如く增上慢あれば、この惡報を現世及び後世に受けん。我今寧ろ增上慢無く增上慢を斷ずるに依るべきやと。すなはち增上慢無く增上慢を斷ずるに依る。是の如く多聞の聖弟子增上慢無く增上慢を斷ずるに依る。これを聖法律中八支斷絶俗事有りと謂ふ。』居士問ひて曰く『瞿曇、聖法律中但この斷俗事あるのみなりや、また更に有りや。』世尊答へて曰はく『聖法律中但この斷絶俗事有るのみならず、更に八支斷絶俗事有りて作證するを得。』晡利多居士聞き已りて便ち白巾を脫ぎ叉手を佛に向け白して曰く『瞿曇、聖法律中云何が更に八支斷絶俗事有りて作證するを得るや。』世尊答へて曰はく『居士、猶ほ狗有るが如し。飢餓[illegible]乏して屠牛處に至る。彼の屠牛の師・屠牛の弟子淨摘して肉を除き骨を擲ちて狗に與ふ。狗骨を得已りて處々咬嚙し

(7) 離憎嫉惱(Nindāroṣa)。

(8) 離增上慢(Atimāna)。

不與取を離れ不與取を斷ずるに依るべきやと。すなはち不與取を離れ不與取を斷ずるに依る。是の如く多聞の聖弟子不與取を離れ不與取を斷ずるに依る。居士、(3)多聞の聖弟子云何が邪婬を離れ邪婬を斷ずるに依るや。多聞の聖弟子この思惟を作す、邪婬すれば必ず惡報を現世及び後世に受く。若し我邪婬すればすなはち當に自ら害し亦他を誣謗し、天及び諸の智[者]梵行者我に戒を道說すべく、諸方悉く當に我が惡名を聞くべく、身壞れ命終りて必ず惡處に至り地獄の中に生ぜん。是の如く邪婬すればこの惡報を現世及び後世に受けん。我今寧ろ邪婬を離れ邪婬を斷ずるに依るべきやと。すなはち邪婬を離れ邪婬を斷ずるに依る。是の如く多聞の聖弟子邪婬を離れ邪婬を斷ずるに依る。居士、(4)多聞の聖弟子云何が妄言を離れ妄言を斷ずるに依るや。多聞の聖弟子この思惟を作す、妄言すれば必ず惡報を現世及び後世に受く。若し我妄言すれば、すなはち當に自ら害し亦他を誣謗し、天及び諸の智[者]梵行者我に戒を道說すべく、諸方悉く當に我が惡名を聞くべく、身壞れ命終りて必ず惡處に至り地獄の中に生ぜん。是の如く妄言すればこの惡報を現世及び後世に受けん。我今寧ろ妄言を離れ妄言を斷ずるに依るべきやと。すなはち妄言を離れ妄言を斷ずるに依る。是の如く多聞の聖弟子妄言を離れ妄言を斷ずるに依る。居士、(5)多聞の聖弟子云何が貪著無く貪著を斷ずるに依るや。多聞の聖弟子この思惟を作す、貪著すれば必ず惡報を現世及び後世に受く。若し我貪著すれば、すなはち當に自ら害し亦他を誣謗し、天及び諸の智[者]梵行者我に戒を道說すべく、諸方悉く當に我が惡名を聞くべく、身壞れ命終りて必ず惡處に至り地獄の中に生ぜん。是の如く貪著すればこの惡報を現世及び後世に受けん。我今寧ろ貪著無く貪著を斷ずるに依るべきやと。すなはち貪著無く貪著を斷ずるに依る。是の如く多聞の聖弟子貪著無く貪著を斷ずるに依る。居士、(6)多聞の聖弟子云何が害恚無く害恚を斷ずるに依るや。多聞の聖弟子この思惟を作す、害恚すれば必ず惡報を現世及び後世に受く。若し我害恚すればすなはち當に自ら害し亦他を誣謗し、天及び諸の智

(3) 離邪婬。

(4) 離妄言。

(5) 離貪著。(Giddhilobha)。

(6) 離害恚(Kodhupāyāsa)?

らず、この事可ならず。我俗を離れ俗を斷じ諸の俗事を捨つ。而も沙門瞿曇我を喚びて居士と爲すや。』世尊答へて曰はく『汝、相幖幟居士の如き有り。この故に我汝を喚び、居士、座有り、坐せんと欲せばすなはち坐せと。』世尊問ひて曰はく『汝云何が俗を離れ俗を斷じ諸の俗事を捨つるや。』哺利多居士答へて曰く『瞿曇、我が家一切有する所の財物盡く持つて兒に施し、我無爲無求にして遊び、唯往きて食を取りて存命するのみ。是の如く我俗を離れ俗を斷じ諸の俗事を捨つ。』世尊告げて曰はく『居士、聖法律中是の如くして俗事を斷絶せず。居士、聖法律中八支斷俗事有り。』こゝに於て哺利多居士杖を捨て蓋を却け及び俗縦を脱ぎ、叉手を佛に向け白して曰く『瞿曇、聖法律中云何が八支斷俗事ありや。』世尊答へて曰はく『居士、多聞の聖弟子殺を離れ殺を斷ずるに依り、不與取を離れ不與取を斷ずるに依り、邪婬を離れ邪婬を斷ずるに依り、妄言を離れ妄言を斷ずるに依り、貪著無く貪著を斷ずるに依り、害恚無く害恚を斷ずるに依り、憎嫉惱無く憎嫉惱を斷ずるに依り、增上慢無く增上慢を斷ずるに依る。居士、(1)多聞の聖弟子云何が殺を離れ殺を斷ずるに依るや。多聞の聖弟子この思惟を作す、殺せば必ず惡報を現世及び後世に受く、若し我殺せばすなはち當に自ら害し亦他を誣謗し、天及び諸の智[者]梵行者我に戒を道說すべく、諸方悉く當に我が惡名を聞くべく、身壞れ命終りて必ず惡處に至り地獄の中に生ぜん。是の如く殺せばこの惡報を現世及び後世に受けん。我今寧ろ殺を離れ殺を斷ずるに依るべきやと。すなはち殺を離れ殺を斷ずるに依る。是の如く多聞の聖弟子殺を離れ殺を斷ずるに依る。居士、(2)多聞の聖弟子云何が不與取を離れ不與取を斷ずるに依るや。多聞の聖弟子この思惟を作す、與へられざるに取れば必ず惡報を現世及び後世に受く。若し我與へられざるに取れば、すなはち當に自ら害し亦他を誣謗し、天及び諸の智[者]梵行者我に戒を道說すべく、諸方悉く當に我が惡名を聞くべく、身壞れ命終りて必ず惡處に至り地獄の中に生ぜん。是の如く與へられざるに取ればこの惡報を現世及び後世に受けん。我今寧ろ

(1) 離殺生。

(2) 離不與取。

因るが故に說く、人王は天の樂に如かずと。若し人の千六百歳はこれ他化樂天の一晝一夜なり。是の如き三十晝夜を一月と爲し、十二月を一歳と爲し、かくの如くして萬六千歳、これ他化樂天の壽なり。居士の婦、必ずこの處有り、若し族姓男・族姓女、聖八支齋を持すれば、身壞れ命終りて他化樂天中に生ず。』こゝに於て鹿子母毘舍佉叉手を佛に向け白して曰く『世尊、聖八支齋甚奇甚特なり。大利大果あり大功德有り大廣布有り。世尊、我今より始めて自ら形壽を盡して聖八支齋を持し、その事力に隨ひて布施し福を修せん。』こゝに於て鹿子母佛の所說を聞きて善く持して佛足に稽首し繞三匝して而も去りぬ。佛說是の如し。鹿子母毘舍佉及び諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

二百三、哺利多經第二[一]

我が聞きしこと是の如し。ある時佛[二]那難大に遊び[三]波和利㮈園の中に在しぬ。その時[四]哺利多居士白淨衣を著け白巾もて頭を裹み杖を拄へ蓋を執り世俗屐を著けて園より園に至り觀より觀に至り林より林に至りて遍く遊行し彷徉し、若し諸の沙門梵志を見ればすなはちこの說を作しぬ『諸賢、當に知るべし、我俗を離れ俗を斷じ諸の俗事を捨つと。』彼の諸の沙門・梵志濡軟柔和の語を以て曰く『唯然り賢哺利多、俗を離れ俗を斷じ諸の俗事を捨つ。』こゝに於て哺利多居士遍く遊行し彷徉して佛の所に往詣し、共に相問訊し、當に佛前に在りて杖を拄へて而も立ちぬ。世尊告げて曰はく『居士、座有り、坐せんと欲せばすなはち坐せ。』哺利多居士白して曰く『瞿曇、この事然らず。この事可ならず。所以者何。我俗を離れ俗を斷じ諸の俗事を捨つ。而も沙門瞿曇、我を喚びて居士と爲すや。』世尊答へて曰はく『汝[五]相幖幟居士の如き有り。この故に我汝を喚び、居士、座有り、坐せんと欲せばすなはち坐せと。』世尊是の如くまた再び三たびに至りて告げて曰はく『居士、座有り、坐せんと欲せばすなはち坐せ。』哺利多居士亦再び三たびに至りて白して曰く『瞿曇、この事然

【一】M.54, Potaliya-sutta.
【二】那難大(Nāḷandā)。那蘭陀。
【三】波和利㮈園(Pāvārikambavana)。巴利文にてはこは央瞿多羅(Aṅguttarāpa)の阿波那(Āpaṇa)邑にての事とす。
【四】哺利多(Potaliya)。
【五】汝の外觀は居士らしき所あり。

八には阿和檀提、九には枝提、十には跋耆、十一には跋蹉、十二には跋羅、十三には蘇摩、十四には蘇羅吒、十五には喩尼、十六には劍浮、この諸國に有する所の錢寶・金・銀・摩尼・眞珠・琉璃・壤伽・碧玉・珊瑚・留邵・鞞留・鞞勒・馬瑙・蜻蛸・赤石・旋珠、設使人有り中に於て王と作り用に隨ひて自在なる者、彼の一切比丘聖八支齋を持するに[比すれば]十六分に直せず。居士の婦、我これに因るが故に說く、人王は天の樂に如かず。若人の五十歲はこれ四王天の一晝一夜なり。是の如き三十晝夜を一月と爲し、十二月を一歲と爲し、かくの如くして五百歲、これ四王天の壽なり。居士の婦、必ずこの處有り。若し族姓男族姓女聖八支齋を持すれば身壞れ命終りて四王天中に生ず。居士の婦、我これに因るが故に說く、人王は天の樂に如かずと。若し人の百歲は、これ三十三天の一晝一夜なり。是の如き三十晝夜を一月と爲し、十二月を一歲と爲し、かくの如くして千歲、これ三十三天の壽なり。居士の婦、必ずこの處有り。若し族姓男・族姓女、聖八支齋を持すれば、身壞れ命終りて三十三天中に生ず。居士の婦、我これに因るが故に說く、人王は天の樂に如かずと。若し人の二百歲はこれ焰摩天の一晝一夜なり。是の如き三十晝夜を一月と爲し、十二月を一歲と爲し、かくの如くして二千歲、これ焰摩天の壽なり。居士の婦、必ずこの處有り、若し族姓男・族姓女、聖八支齋を持すれば、身壞れ命終りて焰摩天中に生ず。居士の婦、我これに由るが故に說く、人王は天の樂に如かずと。若し人の四百歲はこれ兜率陀天の一晝一夜なり。是の如き三十晝夜を一月と爲し、十二月を一歲と爲し、かくの如くして四千歲、これ兜率陀天の壽なり。居士の婦、必ずこの處有り、若し族姓男・族姓女、聖八支齋を持すれば、身壞れ命終りて兜率哆天中に生ず。居士の婦、我これに因るが故に說く、人王は天の樂に如かずと。若し人の八百歲はこれ化樂天の一晝一夜なり。是の如き三十晝夜を一月と爲し、十二月を一歲と爲し、かくの如くして八千歲、これ化樂天の壽なり。居士の婦、必ずこの處有り、若し族姓男・族姓女、聖八支齋を持すれば身壞れ命終りて化樂天中に生ず。居士の婦、我これに

「人仙經」、羅什譯「仁王般若波羅蜜經」、等に出づ、何れも多少の相違あり。本經亦巴利經と異る。

【九】壤伽(Saṅkha)。亦梁といふに同じ。

【一〇】留邵、鞞留、鞞勒。共に寶玉の名なるらしけれど考へ得ず。「一切經音義」五二卷には初の一のみに註して「寶名也」といふ。

【一一】蜻蛸は八卷「阿修羅經」その他に「瑇瑁」とし、三四卷「商人求財經」に「玳瑁」とせるものと同じ。たいまい、龜甲なり。

有の穢汚・惡不善の法彼亦滅するを得。これを多聞の聖弟子戒齋を持し戒共に會し、戒に因るが故に心靖くして喜を得、若し惡伺有れば彼すなはち滅するを得、所有の穢汚惡不善の法彼亦滅するを得と謂ふ。(v)また次に居士の婦、多聞の聖弟子若し齋を持する時諸天を憶念す、實に四王天有り。彼の天若し信を成就すれば、こゝに於て命終りて彼の間に生ずるを得。我亦彼の信有り。彼の天若し戒・聞・施・慧を成就すればこゝに於て命終りて彼の間に生ずるを得。我亦彼の慧有り。實に三十三天・焔摩天・兜率哆天・化樂天・他化樂天有り、彼の天若し信を成就すれば、こゝに於て命終りて彼の間に生ずるを得。我亦彼の信有り。彼の天若し戒・聞・施・慧を成就すれば、こゝに於て命終りて彼の間に生ずるを得。我亦彼の慧有りと。彼是の如く憶念し、及び諸天の信・戒・聞・施・慧を「憶念するを」作し已りて、若し惡伺有れば彼すなはち滅するを得、所有の穢汚惡不善の法彼亦滅するを得。居士の婦、多聞の聖弟子諸天に縁るが故に心靖くして喜を得、若し惡伺有れば彼すなはち滅するを得、所有の穢汚・惡不善の法彼亦滅するを得。猶ほ上色の金垢を生じて不淨なるが如し。火に因りて排し鉆もて椎ち赤土・人力もて磨拭し瑩治してすなはち明淨を得。是の如く多聞の聖弟子若し齋を持する時諸天を憶念し、實に四王天有り、彼の天若し信を成就すれば、こゝに於て命終りて彼の間に生ずるを得。我亦彼の信有り。彼の天若し戒・聞・施・慧を成就すれば、こゝに於て命終りて彼の間に生ずるを得。我亦彼の慧有り。實に三十三天・焔摩天・兜率哆天・化樂天・他化樂天有り。彼の天若し信を成就すれば、こゝに於て命終りて彼の間に生ずるを得。我亦彼の信有り。彼の天若し戒・聞・施・慧を成就すれば、こゝに於て命終りて彼の間に生ずるを得。我亦彼の慧有りと。彼是の如く憶念し、及び諸天の信・戒・聞・施・慧を「憶念する」を作し已りて、若し惡伺有れば、彼すなはち滅するを得、所有の穢汚・惡不善の法彼亦滅するを得。居士の婦、若し是の如き聖八支齋を行ぜば、若し[八]十六大國有り、謂く一には鴦迦、二には摩竭陀、三には迦尸、四には拘薩羅、五には拘樓、六には般闍羅、七には阿攝貝

(v) 憶念諸天。

【八】 十六大國は佛陀時代に於ける印度の大國なり、長阿含四卷「闍尼沙經」、法賢譯

得、若し惡伺有れば彼すなはち滅するを得、所有の穢汚・惡不善の法彼亦滅するを得。猶ほ人衣に垢膩不淨有るが如し。灰・皂莢・澡豆・湯水・人力・浣に因るが故に彼すなはち淨を得。是の如く多聞の聖弟子若し齋を持する時衆を憶念し、世尊の弟子衆善く趣向し質直にして要を行じ趣を行ず。如來の衆中實に阿羅訶眞人趣・阿羅訶果證・阿那含趣・阿那含果證・斯陀含趣・斯陀含果證・須陀洹趣・須陀洹果證有り、これを四雙人・八輩聖士と爲し、これを世尊の弟子衆戒・定・慧・解脫・解脫智見を成就し、呼ぶべく請ずべく供養すべく奉事すべく敬重すべく、則ち天人の良福田と爲すと謂ふと。彼是の如く衆を憶念するを作し已りて、若し惡伺有れば彼すなはち滅するを得、所有の穢汚・惡不善の法彼亦滅するを得。居士の婦、多聞の聖弟子衆に緣るが故に心靖くして喜を得、若し惡伺有れば彼すなはち滅するを得、所有の穢汚・惡不善の法彼亦滅するを得。これを多聞の聖弟子衆齋を持し衆共に會し、衆に因るが故に心靖くして喜を得、若し惡伺有れば彼すなはち滅するを得、所有の穢汚・惡不善の法彼亦滅するを得と謂ふ。(iv)また次に居士の婦、多聞の聖弟子若し齋を持する時自戒を憶念す、缺かず穿たず穢無く汚無く、極めて廣く極めて大にしてその報を望まず、智者稱譽し善く具し善く趣き善く受け善く持すと。彼是の如く自戒を憶念するを作し已りて、若し惡伺有れば彼すなはち滅するを得、所有の穢汚・惡不善の法彼亦滅するを得。居士の婦、多聞の聖弟子戒に緣るが故に心靖くして喜を得、若し惡伺有れば彼すなはち滅するを得、所有の穢汚・惡不善の法彼亦滅するを得。猶ほ鏡垢を生じて明かならざるが若如し、石に因りて磨き鋥瑩[七]し、人力に由りて治してすなはち明淨を得。是の如く多聞の聖弟子若し齋を持する時自戒を憶念し、缺かず穿たず穢無く汚無く極めて廣く極めて大にしてその報を望まず、智者稱譽し善く具し善く趣き善く受け善く持すと。彼是の如く自戒を憶念するを作し已りて、若し惡伺有れば彼すなはち滅するを得、所有の穢汚・惡不善の法彼亦滅するを得。居士の婦、多聞の聖弟子戒に緣るが故に心靖くして喜を得、若し惡伺有れば彼(穢)すなはち滅するを得、所

(iv) 憶念自戒。

【七】磨鋥鋥、音(ヂヤウ)、劍の光をみがき出すこと。

伺有れば彼すなはち滅するを得、所有の穢汚・惡不善の法彼亦滅するを得。これを多聞の聖弟子梵齋を持し梵共に會し梵に因るが故に心靖くして喜を得、若し惡伺有れば彼すなはち滅するを得、所有の穢汚・惡不善の法彼亦滅するを得と謂ふ。(ii)また次に居士の婦、多聞の聖弟子若し齋を持する時法を憶念す、この法世尊善く說きたまひ、究竟して恒に變易せず、正智の知る所・正智の見る所・正智の覺る所なりと。彼是の如く法を憶念するを作し已りて、若し惡伺有れば彼すなはち滅するを得、所有の穢汚・惡不善の法彼亦滅するを得。居士の婦、多聞の聖弟子法に緣るが故に心靖くして喜を得、若し惡伺有れば彼すなはち滅するを得、所有の穢汚・惡不善の法彼亦滅するを得。猶ほ人身に垢膩不淨有るがごとし。麩・澡豆・暖湯・人力・極洗浴に因るが故に身すなはち淨を得。是の如く多聞の聖弟子若し齋を持する時法を憶念し、この法世尊善く說きたまひ、究竟して恒に變易せず、正智の知る所・正智の見る所・正智の覺る所なりと。彼是の如く法を憶念するを作し已りて、若し惡伺有れば彼すなはち滅するを得、所有の穢汚・惡不善の法彼亦滅するを得。居士の婦、多聞の聖弟子法に緣るが故に心靖くして喜を得、若し惡伺有れば彼すなはち滅するを得、所有の穢汚・惡不善の法彼亦滅するを得。居士の婦、これを多聞の聖弟子法齋を持し法共に會し、法に因るが故に心靖くして喜を得、若し惡伺有れば彼すなはち滅するを得、所有の穢汚・惡不善の法彼亦滅するを得と謂ふ。(iii)また次に居士の婦、多聞の聖弟子若し齋を持する時衆を憶念す、世尊の弟子衆善く趣向し質直にして要を行じ趣を行ず。如來の衆中實に阿羅訶眞人趣・阿羅訶果證・阿那含趣・阿那含果證・斯陀含趣・斯陀含果證・須陀洹趣・須陀洹果證有り、これを四雙人・八輩聖士と爲し、これを世尊の弟子衆戒・定・慧・解脫・解脫智見を成就し、呼ぶべく請ずべく供養すべく奉事すべく敬重すべく、則ち天人の良福田と爲すと謂ふと。彼是の如く衆を憶念するを作し已りて若し惡伺有れば彼すなはち滅するを得、所有の穢汚・聖不善の法彼亦滅するを得。居士の婦、多聞の聖弟子衆に緣るが故に心靖くして喜を

(ii) 憶念法。

(iii) 憶念衆。

くして異る無けんと。この故に齋を説く。(vii)また次に居士の婦、多聞の聖弟子若し齋を持する時この思惟を作す、阿羅訶の眞人、形壽を盡して華鬘・瓔珞・塗香・脂粉・歌舞・倡伎及び往觀聽を離れ華鬘・瓔珞・塗香・脂粉・歌舞・倡伎及び往觀聽を斷じ、彼華鬘・瓔珞・塗香・脂粉・歌舞・倡伎及び往觀聽に於てその心を淨除す。我この日この夜に於て華鬘・瓔珞・塗香・脂粉・歌舞・倡伎及び往觀聽を離れ、華鬘・瓔珞・塗香・脂粉・歌舞・倡伎及び往觀聽を斷じ、我華鬘・瓔珞・塗香・脂粉・歌舞・倡伎及び往觀聽に於てその心を淨除し、我この支を以て阿羅訶に於て等しく同じくして異る無けんと。この故に齋を説く。(viii)また次に居士の婦、多聞の聖弟子若し齋を持する時この思惟を作す、阿羅訶の眞人、形壽を盡して非時食を離れ非時食を斷じ、一食して夜食せず、時食を樂しみ、彼非時食に於てその心を淨除す。我この日この夜に於て非時食を離れ非時食を斷じ、一食して夜食せず、時食を樂しみ、我非時食に於てその心を淨除し、我この支を以て阿羅訶に於て等しく同じくして異る無けんと。この故に齋を説く。彼この聖八支齋を(往)[行]じ已りて、上に於て當にまた五法を修習すべし、云何が五と爲す。(i)居士の婦、多聞の聖弟子若し齋を持する時如來を憶念す、彼の世尊、如來・無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛衆祐と號すと。彼是の如く如來を憶念し已りて、若し惡伺有れば彼すなはち滅するを得、所有の穢汚惡不善の法彼また滅するを得。居士の婦、多聞の聖弟子如來に縁るが故に心靖くして喜を得、若し惡伺有れば彼すなはち滅するを得、所有の穢汚惡不善の法彼亦滅するを得。譬へば人頭に垢膩有るが若如し。膏澤・暖湯・人力・洗沐に因るが故に彼すなはち淨を得。是の如く多聞の聖弟子若し齋を持する時如來を憶念し、彼の世尊、如來・無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛衆祐と號すと。彼是の如く如來を憶念するを作し已りて、若し惡伺有れば彼すなはち滅するを得、所有の穢汚・惡不善の法彼亦滅するを得。居士の婦、多聞の聖弟子如來に縁るが故に心靖くして喜を得、若し惡

(vii) 離華鬘瓔珞塗香脂粉歌舞倡伎、往觀聽。

(viii) 離非時食。

【六】 五法。

(i) 憶念如來。

我亦形壽を盡して不與取を離れ不與取を斷じ、與へられて而も後に取り與取を樂しみ常に布施を好み、心放捨を樂しみ歡喜して悋むこと無くその報を望まず、盜を以て心を覆はず、能く自ら己を制し、我不與取に於てその心を淨除し、我この支を以て阿羅訶に於て等しく同じくして異る無けんと。この故に齋を說く。(iii)また次に居士の婦、多聞の聖弟子若し齋を持する時この思惟を作す、阿羅訶の眞人、形壽を盡して非梵行を離れ非梵行を斷じ、梵行を修行し至誠にして心淨く行臭穢無く欲を離れ婬を斷じ、彼非梵行に於てその心を淨除す。我この日この夜に於て非梵行を離れ非梵行を斷じ、梵行を修行し至誠にして心淨く、行臭穢無く、欲を離れ婬を斷じ、我非梵行に於てその心を淨除し、我この支を以て阿羅訶に於て等しく同じくして異る無けんと。この故に齋を說く。(iv)また次に居士の婦、多聞の聖弟子若し齋を持する時この思惟を作す、阿羅訶の眞人、形壽を盡して妄言を離れ妄言を斷じ、眞諦言にして眞諦を樂しみ眞諦に住し、人の爲に信ぜられ世間を欺かず、彼妄言に於てその心を淨除す。我亦形壽を盡して妄言を離れ妄言を斷じ、眞諦言にして眞諦を樂しみ眞諦に住し、人の爲に信ぜられ世間を欺かず、我妄言に於てその心を淨除し、我この支を以て阿羅訶に於て等しく同じくして異る無けんと。この故に齋を說く。(v)また次に居士の婦、多聞の聖弟子若し齋を持する時この思惟を作す、阿羅訶の眞人、形壽を盡して酒放逸を離れ酒放逸を斷じ、彼酒放逸に於てその心を淨除す。我亦形壽を盡して酒放逸を離れ酒放逸を斷じ、我酒放逸に於てその心を淨除し、我この支を以て阿羅訶に於て等しく同じくして異る無けんと。この故に齋を說く。(vi)また次に居士の婦、多聞の聖弟子齋を持する時この思惟を作す、阿羅訶の眞人、形壽を盡して高廣大床を離れ高廣大床を斷じ、或は床に、或は草を敷きて下に坐臥するを樂しみ、彼高廣大床に於てその心を淨除す。我この日この夜に於て高廣大床を離れ高廣大床を斷じ、或は床に、或は草を敷きて下に坐臥するを樂しみ、我高廣大床に於てその心を淨除し、我この支を以て阿羅訶に於て等しく同じ

(iii) 離非梵行。

(iv) 離妄言。

(v) 離飲酒。

(vi) 離高廣大床。

や。若し出家して尼揵を學する者有り、彼人に勸めて曰く、汝東方に於て百由延を過ぎて外に衆生有れば、彼を擁護するが故に刀杖を棄捨せよ。是の如く南方・西方〔亦然り。〕北方〔に於て〕百由延を過ぎて外に衆生有れば、彼を擁護するが故に刀杖を棄捨せよ。これを彼人に勸進すと爲す。或は想有りて衆生を護り、或は想無くして衆生を護らざれ。汝當に十五日に[五]從解脫を說く時、衣を脫ぎ裸形にして東に向ひて住立し、是の如き說を作すべし、我父母無く、父母有るに非ず、我妻子無く、妻子有るに非ず、我奴婢無く、奴婢の〔生〕〔主〕に非ずと。居士の婦、彼眞諦語を勸進せんとして而も反つて虛妄の言を勸進す。彼の人日々にその父母を見てすなはちこの念を作す、これ我が父母なりと。父母日々にその兒子を見て亦この念を作す、これ我が兒子なりと。彼妻子を見て而もこの念を作す、これ我が妻子なりと。妻子彼を見て亦この念を作す、これ我が尊長なりと。彼奴婢を見てまたこの念を作す、これ我が奴婢なりと。奴婢彼を見て亦この念を作す、これ我が大家なりと。彼これを用ひ、與へられずして而も用ひんと欲す、これ與へられて用ふるに非ず。これを名づけて尼揵齋と曰ふと謂ふ。若し是の如く尼揵齋を持すれば、大利を獲ず大果を得ず大功德無く廣布するを得ず。居士の婦、(3)云何が名づけて聖八支齋と爲す。多聞の聖弟子若し齋を持する時この思惟を作す、(i)阿羅訶の眞人、形壽を盡くして殺を離れ殺を斷じ刀杖を棄捨し、慚有り愧有り慈悲心有り、一切乃至蜫蟲を饒益し、彼殺生に於てその心を淨除す。我亦形壽を盡して殺を離れ殺を斷じ刀杖を棄捨し、慚有り愧有り慈悲心有り、一切乃至蜫蟲を饒益し、我今殺生に於てその心を淨除し、我この支を以て阿羅訶に於て等しく同じくして異る無けんと。この故に齋を說く。(ii)また次に居士の婦、多聞の聖弟子若し齋を持する時この思惟を作す、阿羅訶の眞人、形壽を盡して不與取を離れ不與取を斷じ、與へられて而も後に取り與取を樂しみ常に布施を好み　心放捨を樂しみ歡喜して悋むこと無く、その報を望まず、盜を以て心を覆はず、能く自ら己を制し　彼不與取に於てその心を淨除す。

【五】從解脫は波羅提木叉なり。

(3) 聖八支齋。

(i) 離殺生。

(ii) 離不與取。

巻の第五十五

晡利多品第五（十經あり）

〔十經とは〕持齋・晡利多、羅摩・五下分〔結〕、心穢・箭毛は二あり、鞞摩那修〔學〕、法樂比丘尼、〔大〕拘絺羅は後にあり。

二百二、持齋經第一【一】

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衛國に遊び東園鹿子母堂【二】に在しぬ。その時鹿子母毘舍佉平旦沐浴し白淨衣を著け子婦等を將ゐ眷屬に圍繞せられて佛の所に往詣し稽首して禮を作し却きて一面に住しぬ。世尊問ひて曰はく『居士の婦、今沐浴せるや。』答へて曰く『世尊、我【三】今齋を持す。善逝、我今齋を持す。』世尊問ひて曰はく『居士の婦、今何等の齋を持するや。』齋に三種有り。云何が三と爲す。一には放牛兒齋二には尼揵齋三には聖八支齋なり。居士の婦、(1)云何が名づけて放牛兒齋と爲す。若し放牛兒朝に澤中に放ち晡に收めて村に還る。彼村に還る時是の如き念を作す、我今日此處に在りて牛を放つ。明日當に彼處に在りて牛を放つべし。我今日此處に在りて牛に飲ます。明日當に彼處に在りて牛に飲ますべし。我が牛今此處に在りて宿止す。明日當に彼處に在りて宿止すべしと。居士の婦、是の如く人有りて若し齋を持する時この思惟を作す、我今日かくの如きの食を食す。明日當に彼の如きの食を食すべし。我今日かくの如きの飲を飲む。明日當に彼の如を飲を飲むべし。我今かくの如き含消を含消す。明日彼の如き含消を含消せんと。その人こゝに於て晝夜に欲の過に樂著す。これを名づけて放牛兒齋と曰ふと謂ふ。若し是の如く放牛兒齋を持齋すれば、大利を得ず大果を得ず、大功德無く廣布を得ず。(2)居士の婦云何が名づけて尼揵齋と爲す

【一】A. i. 205, iv. 255. 支謙譯「齋經」、失譯「優陂夷墮舍迦經」、沮渠京聲譯「八關齋經」。

【二】東園鹿子母堂。二三卷「黑比丘經」註「三」を見よ。

【三】持齋。八齋戒を保ちて一日一夜を清淨に神聖に過すをいふ。

【四】三種齋　放牛兒齋(Gopālakūposatha)　尼揵齋(Nigaṇṭhūposatha)　聖八支齋 Ariyūposatha)。

(1) 放牛兒齋。

(2) 尼揵齋。

若し樂覺は彼すはなち滅す。樂滅すれば則ち受滅し、受滅すれば則ち有滅し、有滅すれば則ち生滅し、生滅すれば則ち老死滅し愁慼・啼哭・憂苦・懊惱滅するを得べし。是の如くしてこの淳大苦陰滅す。比丘、具足して愛盡き解脫すと爲すに非ざるや。』比丘答へて曰く『是の如し世尊。具足して愛盡き解脫す。』この法を說きたまへる時この三千大千世界三反震動し、動き盡く動き、戰き盡く戰き、震ひ盡く震ひぬ。この故にこの[二四]經愛盡解脫と稱す。佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

中阿含經卷第五十四

【二四】愛盡解脫（Taṇhāsaṅkhaya-vimutta）,

爲に法を說き、畢究竟して熱せず恒に變易せざる法、正智にして知る所、正智にして見る所、正智にして覺る所なり。また次に[三]三事合會して母胎に入る。父母一處に聚集し、母滿精堪耐し、香陰已に至る。この三事合會して母胎に入る。母胎或は持つこと九月十月にして更に生ず。生じ已りて血を以て長養す。血は聖法中に於てこれを母乳と謂ふ。彼後時に於て諸根轉た大となり、根轉た成就し、麁なる飯麨を食し、蘇油もて身に塗り、彼眼に色を見て好色に樂著し惡色を憎惡し、身を立せず少心を念じ、心解脫慧解脫の如眞を知らず、所生の惡不善の法滅盡して餘無きにあらず、敗壞して餘無きにあらず。是の如く耳・鼻・舌・身「亦然り。」意に法を知りて好法に樂著し惡法を憎惡し、身を立せず少心を念じ、心解脫慧解脫の如眞を知らず、所生の惡不善の法滅盡して餘無きにあらず、敗壞して餘無きにあらず。彼是の如く憎不憎の所受の覺に隨ひて或は樂或は苦或は不苦不樂、彼彼の覺を樂しみ、求め著して彼の覺を受く。彼彼の覺を樂しみ求め著して彼の覺を受け已りて、若し覺を樂しめば、これを受と爲す。彼受に緣りて有有り、有に緣りて生有り、生に緣りて老死有り愁慼・啼哭・憂苦・懊惱生ずるを得べし。是の如くしてこの淳大苦陰生ず。比丘、具足して愛に繫がれ相續すと爲　嗏帝比丘雞和哆子の如くに非ざるや。』比丘答へて曰く『是の如し世尊、具足して愛に繫がれ相續し嗏帝比丘雞和哆子の如し。』『若し時に如來世に出で無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛衆祐と號し、彼眼に色を見て好色に於て而も樂著せず、惡色に於て而も憎惡せず、身を立し無量心を念じ、心解脫・慧解脫の如眞を知り、所生の惡不善の法滅盡して餘無く敗壞して餘無し。是の如く耳・鼻・舌・身「亦然り」意に法を知りて好法に著せず惡法を惡まず、身を立し無量心を念じ、心解脫・慧解脫の如眞を知り、所生の惡不善の法滅盡して餘無く敗壞して餘無し。彼是の如く憎不憎の所受の覺を滅し、或は樂或は苦或は不苦不樂、彼彼の覺を樂しまず求めず著せず覺を受けず。彼彼の覺を樂しまず求めず著せず覺を受けずし已りて、

【三】三事合會入於母胎(Tiṇ-ṇaṁ sannipātā g.bbhassa avakkanti)。

向ひ、來の血を出せるや。』比丘答へて曰く『不なり世尊。』世尊歎じて曰はく『善き哉善き哉、若し汝等是の如く知り是の如く見、汝等頗し故らに戒を犯し戒を捨て道を罷めしや。』比丘答へて曰く『不なり世尊。』世尊歎じて曰はく『善き哉善き哉、若し汝等是の如く知り是の如く見、汝等頗しこれを捨てゝ更に外尊を求め福田を求むるや。』比丘答へて曰く『不なり世尊。』世尊歎じて曰はく『善き哉善き哉、若し汝等是の如く知り是の如く見、汝等、頗し沙門梵志と作り是の如く說くや、諸尊、知るべきは則知り、見るべきは則ち見ると。』比丘答へて曰く『不なり世尊。』世尊歎じて曰はく『善き哉善き哉、若し汝等是の如く知り是の如く見、汝等、頗し吉祥清淨と爲すや。』比丘答へて曰く『不なり世尊。』世尊歎じて曰はく『善き哉善き哉、若し汝等是の如く知り是の如く見、汝等、頗し諸の沙門梵志の爲に吉祥と相應し諸の見苦を雜へ毒を雜へ煩熱を雜へ懊惱を雜ふるは、彼これ眞實なりや。』比丘答へて曰く『不なり世尊。』世尊歎じて曰はく『善き哉善き哉、若し汝等是の如く知り是の如く見、汝等、頗し身に疹患を生じ、甚重の苦を生じ乃ち命斷たんと欲するに至りてこれを捨て更に外を求め、頗し彼の沙門梵志有りて一句呪・二句・三句・四句・多句・百句を持ちこの呪を持ちて我が苦を脫せしめよと「言はゞ」、これを苦の習・苦の得・苦の盡を求むと謂ふや。』比丘答へて曰く『不なり世尊。』世尊歎じて曰はく『善き哉善き哉、若し汝等是の如く知り是の如く見、汝等頗し八有を受くるや。』比丘答へて曰く『不なり世尊。』世尊歎じて曰はく『善き哉善き哉、若し汝等是の如く知り是の如く見、汝等、頗し是の如く說くや、我等沙門を恭敬し沙門を敬重し、沙門瞿曇はこれ我が尊師なりと。』比丘答へて曰く『不なり世尊。』世尊歎じて曰はく『善き哉善き哉、若し汝等自ら知り自ら見自ら覺り最正覺を得れば、汝等所問に隨ひて答ふるや。』比丘答へて曰く『是の如し世尊。』世尊歎じて曰はく『善き哉善き哉、我正に汝等を御し、畢究竟して煩無く熱無く恒に變易せざる法に於て正智にして知る所、正智にして見る所、正智にして覺る所、これに因るが故に我向に說きぬ。我汝が

れば則ち識滅す。我等の意是の如し。所以者何。行滅すれば則ち識滅す。』『無明滅すれば則ち行滅す。これ無明滅すれば則ち行滅すと說く。汝等の意に於て云何。』比丘答へて曰く『世尊、無明滅すれば卽ち行滅す。我等の意是の如し。所以者何。無明滅すれば則ち行滅す。これを無明滅すれば則ち行滅し、行滅すれば則ち識滅し、識滅すれば則ち名色滅し、名色滅すれば則ち六處滅し、六處滅すれば則ち更樂滅し、更樂滅すれば則ち覺滅し、覺滅すれば則ち愛滅し、愛滅すれば則ち受滅し、受滅すれば則ち有滅し、有滅すれば則ち生滅し、生滅すれば則ち老死滅し、愁慼・啼哭・憂苦・懊惱滅するを得べしと爲す。是の如くし この淳大苦陰滅す。』世尊歎じて曰はく『善き哉善き哉、比丘、汝等是の如く說く。所以者何。我亦是の如く說く、無明滅すれば則ち行滅し、行滅すれば則ち識滅し、識滅すれば則ち名色滅し、名色滅すれば則ち六處滅し、六處滅すれば則ち更樂滅し、更樂滅すれば則ち覺滅し、覺滅すれば則ち愛滅し、愛滅すれば則ち受滅し、受滅すれば則ち有滅し、有滅すれば則ち生滅し、生滅すれば則ち老死滅し愁慼・啼哭・憂苦・懊惱滅するを得べし。是の如くしてこの淳大苦陰滅すと。』世尊歎じて曰はく『善き哉善き哉、若し汝等是の如く知り是の如く見、汝等、頗し過去に於てこの念を作すや、我過去の時有り、我過去の時無し、云何が過去の時有り、何に由りて過去の時有りやと。』比丘答へて曰く『不なり世尊。』世尊歎じて曰はく『善き哉善き哉。若し汝等是の如く知り是の如く見、汝等頗し未來に於てこの念を作すや、我未來當に有るべし、我未來當に無かるべし、云何が未來有り、何に由りて未來有りやと。』比丘答へて曰く『不なり世尊。』世尊歎じて曰はく『善き哉善き哉。若し汝等是の如く知り是の如く見、汝等頗し內に於て疑惑有りや、これ云何、これ何等ぞ、この衆生何所より來り何處に趣き至るや、何に因りて已に有り、何に因りて當に有るべきやと。』比丘答へて曰く『不なり世尊。』世尊歎じて曰はく『善き哉善き哉、若し汝等是の如く知り是の如く見、[三三]汝等頗し故らに父母を殺し弟子阿羅訶を害し聖衆を破壞し、惡意もて佛に

【三三】五逆罪又は五無間業(Pañcānantarika kamma)といふもの、(1)殺父、(2)殺母、(3)殺阿羅漢、(4)破和合僧、(5)出佛身血。

に縁りて老死有り愁慼・啼哭・憂苦・懊惱生ずるを得べし。是の如くしてこの淳大苦陰生ずと。生滅すれば則ち老死滅す。これ生滅すれば則ち老死滅すと説く。汝等の意に於て云何。』比丘答へて曰く『世尊、生滅すれば則ち老死滅す。我等の意是の如し。所以者何。生滅すれば則ち老死滅す。』『有滅すれば則ち生滅す。これ有滅すれば則ち生滅すと説く。汝等の意に於て云何。』比丘答へて曰く『世尊、有滅すれば則ち生滅す。我等の意是の如し。所以者何。有滅すれば則ち生滅す。』『受滅すれば則ち有滅す。これ受滅すれば則ち有滅すと説く。汝等の意に於て云何。』比丘答へて曰く『世尊、受滅すれば則ち有滅す。我等の意是の如し。所以者何。受滅すれば則ち有滅す。』『愛滅すれば則ち受滅す。これ愛滅すれば則ち受滅すと説く。汝等の意に於て云何。』比丘答へて曰く『世尊、愛滅すれば則ち受滅す。我等の意是の如し。所以者何。愛滅すれば則ち受滅す。』『覺滅すれば則ち愛滅す。これ覺滅すれば則ち愛滅すと説く。汝等の意に於て云何。』比丘答へて曰く『世尊、覺滅すれば則ち愛滅す。我等の意是の如し。所以者何。覺滅すれば則ち愛滅す。』『更樂滅すれば則ち覺滅す。これ更樂滅すれば則ち覺滅すと説く。汝等の意に於て云何。』比丘答へて曰く『世尊、更樂滅すれば則ち覺滅す。我等の意是の如し。所以者何。更樂滅すれば則ち覺滅す。』『六處滅すれば則ち更樂滅す。これ六處滅すれば則ち更樂滅すと説く。汝等の意に於て云何。』比丘答へて曰く『世尊、六處滅すれば則ち更樂滅す。我等の意是の如し。所以者何。六處滅すれば則ち更樂滅す。』『名色滅すれば則ち六處滅す。これ名色滅すれば則ち六處滅すと説く。汝等の意に於て云何。』比丘答へて曰く『世尊、名色滅すれば則ち六處滅す。我等の意是の如し。所以者何。名色滅すれば則ち六處滅す。』『識滅すれば則ち名色滅す。これ識滅すれば則ち名色滅すと説く。汝等の意に於て云何。』比丘答へて曰く『世尊、識滅すれば則ち名色滅す。我等の意是の如し。所以者何。識滅すれば則ち名色滅す。』『行滅すれば則ち識滅す。これ行滅すれば則ち識滅すと説く。汝等の意に於て云何。』比丘答へて曰く『世尊、行滅す

答へて曰く『世尊、愛に緣りて受有り。我等の意是の如し。所以者何。愛に緣りて受有り。』『覺に緣りて愛有り。これ覺に緣りて愛有りと說く。汝等の意に於て云何。』比丘答へて曰く『世尊、覺に緣りて愛有り。我等の意是の如し。所以者何。覺に緣りて愛有り。』『更樂に緣りて覺有り。これ更樂に緣りて覺有りと說く、汝等の意に於て云何。』比丘答へて曰く『世尊、更樂に緣りて覺有り。我等の意是の如し。所以者何。更樂に緣りて覺有り。』『六處に緣りて故樂あり。これ六處に緣りて更樂有りと說く。汝等の意に於て云何。』比丘答へて曰く『世尊、六處に緣りて更樂有り。我等の意是の如し。所以者何。六處に緣りて更樂有り。』『名色に緣りて六處有り。これ名色に緣りて六處有りと說く。汝等の意に於て云何。』比丘答へて曰く『世尊、名色に緣りて六處有り。我等の意是の如し。所以者何。名色に緣りて六處有り。』『識に緣りて名色有り。これ識に緣りて名色有りと說く。汝等の意に於て云何。』比丘答へて曰く『世尊、識に緣りて名色有り。我等の意是の如し。所以者何。識に緣りて名色有り。』『行に緣りて識有り。これ行に緣りて識有りと說く。汝等の意に於て云何。』比丘答へて曰く『世尊、行に緣りて識有り。我等の意是の如し。所以者何。行に緣りて識有り。』『無明に緣りて行有り。これ無明に緣りて行有りと說く。汝等の意に於て云何。』比丘答へて曰く『世尊、無明に緣りて行有り。我等の意是の如し。所以者何。無明に緣りて行有り。これを無明に緣りて行有り行に緣りて識有り識に緣りて名色有り名色に緣りて六處有り六處に緣りて更樂有り更樂に緣りて覺有り覺に緣りて愛有り愛に緣りて受有り受に緣りて有有り有に緣りて生有り生に緣りて老死有り、愁慼・啼哭・憂苦・懊惱生ずるを得べしと爲す。是の如くしてこの淳大苦陰生ず。』世尊歎じて曰はく『善き哉善き哉、比丘、汝等是の如く說く。所以者何。我亦是の如く說く、無明に緣りて行有り、行に緣りて識有り、識に緣りて名色有り、名色に緣りて六處有り、六處に緣りて更樂有り、更樂に緣りて覺有り、覺に緣りて愛有り、愛に緣りて受有り、受に緣りて有有り、有に緣りて生有り、生

何に習ひ何よりして而も生じ、何に由りて有りや。彼の四食は[一〇]愛に因り愛に習ひ、愛よりして而も生じ愛に由りて有り。愛何に因り何に習ひ何よりして而も生じ、何に由りて有りや。[一一]愛は覺に因り覺に習ひ、覺よりして而も生じ覺に由りて有り。覺何に因り何に習ひ、何よりして而も生じ何に由りて有りや。覺は[一二]更樂に因り更樂に習ひ、更樂よりして而も生じ更樂に由りて有り。更樂何に因り何に習ひ、何よりして而も生じ何に由りて有りや。更樂は[一三]六處に因り六處に習ひ、六處よりして而も生じ六處に由りて有り。六處何に因り何に習ひ、何よりして而も生じ何に由りて有りや。六處は[一四]名色に因り名色に習ひ、名色よりして生じ名色に由りて有り。名色何に因り何に習ひ、何よりして而も生じ何に由りて有りや。名色は[一五]識に因り識に習ひ、識よりして而も生じ識に由りて有り。識何に因り何に習ひ、何よりして而も生じ何に由りて有りや。識は[一六]行に因り行に習ひ、行よりして而も生じ行に由りて有り。行何に因り何に習ひ、何よりして而も生じ何に由りて有りや。行は[一七]無明に因り無明に習ひ、無明よりして生じ無明に由りて有り。これを無明に緣りて行有り、行に緣りて識有り、識に緣りて名色有り、名色に緣りて六處有り、六處に緣りて更樂有り、更樂に緣りて覺有り、覺に緣りて愛有り、愛に緣りて[一八]受有り、受に緣りて[一九]有有り、有に緣りて[二〇]生有り、生に緣りて[二一]老死・愁慼・啼哭・憂苦・懊惱有りと爲す。是の如くしてこれ等の大苦陰生じ、生に緣りて老死有り。これ生に緣りて老死有りと說く。汝等の意に於て云何。』比丘答へて曰く『世尊、生に緣りて老死有り。我等の意是の如し。所以者何。生に緣りて老死有り。』『有に緣りて生有り。これ有に緣りて生有りと說く。汝等の意に於て云何。』比丘答へて曰く『世尊、有に緣りて生有り。我等の意是の如し。所以者何。有に緣りて生有り。』『受に緣りて有有り。これ受に緣りて有有りと說く。汝等の意に於て云何。』比丘答へて曰く『世尊、受に緣りて有有り。我等の意是の如し。所以者何。受に緣りて有有り。』『愛に緣りて受有り。これ愛に緣りて受有りと說く。汝等の意に於て云何。』比丘

【一〇】愛（Taṇhā）。
【一一】覺（Vedanā）。受卽ち感情。
【一二】更樂（Phassa）。觸。
【一三】六處（Saḷāyatana）。
【一四】名色（Nāma-rūpa）。
【一五】識（Viññāṇa）。
【一六】行（Saṅkhārā）。
【一七】無明（Avijjā）。
【一八】受（Upādāna）。
【一九】有（Bhava）。
【二〇】生（Jāti）。
【二一】老死・愁慼・啼哭・憂苦・懊惱（Jarāmaraṇa, soka, paridevā, dukkha, domanassa, upāyāsā）。

こと無きや。』比丘答へて曰く『不なり世尊。』世尊告げて曰はく『眞說是の如しと、慧もて如眞を見ば所有の疑惑、彼滅するや。』比丘答へて曰く『唯然り世尊。』世尊告げて曰はく『如來の眞說是の如しと、慧もて如眞を見ば、所有の疑惑、彼滅するや。』比丘答へて曰く『唯然り世尊。』世尊告げて曰はく『如來滅し已りて所有の眞、彼亦滅の法なりと、是の如く慧もて如眞を見ば、所有の疑惑、彼滅するや』比丘答へて曰く『唯然り世尊。』世尊告げて曰はく『眞說已に疑惑無きや。』比丘答へて曰く『唯然り世尊。』世尊告げて曰はく『如來の眞說已に疑惑無きや。』比丘答へて曰く『唯然り世尊。』世尊告げて曰はく『如來已に滅し所有の眞、彼亦滅の法なりと[知り]已りて疑惑無きや。』比丘答へて曰く『唯然り世尊。』世尊歎じて曰く『善き哉善き哉。若し汝等是の如く知り是の如く見、謂く我がこの見、是の如く清淨なり[として]彼に著し彼を惜しみ彼を守りて捨てしめんと欲せざれば、彼等我長夜に栰喩法を說くを知り、知り已りて塞がる所流開するや。』比丘答へて曰く『不なり世尊。』『世尊歎じて曰はく『善き哉善き哉、若し汝等是の如く知り是の如く見、謂く我がこの見、是の如く清淨なり[として]彼に著せず彼を惜しまず彼を守らず捨てしめんと欲せば、汝等我長夜に栰喩法を說くを知り、知り已りて塞がる所流開するや。』比丘答へて曰く『唯然り世尊。』世尊歎じて曰はく『善き哉善き哉、若し異學有り來りて汝等に問ひ、賢者、汝等若し是の如き清淨の見有れば、彼何の義あり何の爲にして何の功德ありやと[言はゞ]、汝等云何が答ふるや。』比丘答へて曰く『世尊、若し異學有り來りて我に問ひ、賢者、汝等若し是の如き清淨の見有れば、我何の義あり何の爲にして何の功德ありやと[言はゞ]我等當に是の如く答ふべし、諸賢、厭の義の爲、無欲の義の爲、如眞を見知するの義の爲の故にと。世尊、若し異學來りて我に問はゞ、汝等當に是の如く答ふべし。』世尊歎じて曰はく『善き哉善き哉、若し異學來りて汝に問はゞ、汝等應に是の如く答ふべし。所以者何。この所說の觀、一に[九]曰く摶食麁細、二に曰く更樂、三に曰く意念、四に曰く識なり。この四食何に因り

【九】 四食(Cattāro āhārā)。
(1)摶食麁細 Kabaliṅkāra-āhāro oḷāriko vā sukhumo-vā)。
(2)更樂(Phusso)、
(3)意念(Sañcetanā)。
(4)識(Viññāṇaṁ)、

起り、識緣有れば則ち生じ緣無ければ則ち滅すと說く。識所緣に隨ひて生じ、卽ち彼の緣、眼色に緣りて識を生ずと說き、識を生じ已りて眼識と說く。是の如く耳・鼻・舌・身[亦然り。]意法[に緣りて]識を生じ、識を已りて意識と說く。猶ほ火の所緣に隨ひて生ずるが若如し。卽ち彼の緣、木に緣りて火を生ずと說き木火と說く。草糞聚火に緣りて草[火]・糞聚火と說く。是の如く識所緣に隨ひて生じ、卽ち彼の緣、眼色に緣りて識を生ずと說き、識を生じ已りて眼識と說く。是の如く耳・鼻・舌・身[亦然り。]意法に緣りて識を生じ、識を生じ已りて意識と說く。』世尊歎じて曰はく『善き哉善き哉、汝等我是の如く法を說くと知る。然るにこの嗏帝比丘愚癡の人顚倒して義及び文を受解す。彼自ら顚倒して受解するに因るが故に我を誣謗し自ら傷害するを爲し、犯有り罪有り、諸の智梵行者の喜ばざる所にして而も大罪を得。汝愚癡の人この惡不善の處有るを知るや。』こゝに於て嗏帝比丘世尊の爲に面り呵責せられ已りて內に憂慼を懷き低頭默然し、辯を失ひて言無く所伺有るが如し。こゝに於て世尊嗏帝比丘を面訶し已りて諸の比丘に告げたまはく『我當に汝が爲に法を說くべし。究竟して煩無く熱無く恒有にして變ぜず。諸の智[者]是の如きを禁觀す。諦に聽け、諦に聽きて善く之を思念せよ。』時に諸の比丘敎を受けて而も聽きぬ。佛言はく『[五]眞說見るや。』比丘答へて曰く『唯然り世尊。』世尊告げて曰はく『[六]如來の眞說見るや。』比丘答へて曰く『唯然り世尊。』世尊告げて曰はく『如來滅し已りて所有の眞、彼亦滅の法なりと見るや。』比丘答へて曰く『唯然り世尊。』世尊告げて曰はく『眞說已に見るや。』比丘答へて曰く『唯然り世尊。』世尊告げて曰はく『如來の眞說已に見るや。』比丘答へて曰く『唯然り世尊。』世尊告げて曰はく『[七]如來滅し已りて所有の眞、彼亦滅の法なりと已に見るや。』比丘答へて曰く『唯然り世尊。』世尊告げて曰はく『[八]眞說疑惑有ること無きや。』比丘答へて曰く『不なり世尊。』世尊告げて曰はく『如來の眞說疑惑有ること無きや。』比丘答へて曰く『不なり世尊。』世尊告げて曰はく『如來滅し已りて所有の眞、彼亦滅の法にして疑惑有る

【五】眞說見耶、「眞說見はるるや」か、これ以外に適宜の讀方を見出し得ず。巴利文にては Bhūtam idan ti bhikkhave passatha「比丘等よ、これは生物なりと見るや。」

【六】如來眞說見耶。巴利文 Tad-āhārasambhavan ti bhikkhave passatha「比丘等よ、そは食より生ぜりと見るや。」食と如來とは甚だしく異れるものなるが、この句並に次の句より推すに、漢譯者は āhāra を araha と誤りたるなり。

【七】如來滅已、所有眞彼亦滅法見耶。Tad āhāranirodhā yaṁ bhūtaṁ taṁ nirodhadhammaṁ ti bhikkhave passatha「その食の滅止よりして、比丘等よ、生ぜるものは總てこれ滅止する性なりと見るや。」

【八】巴利文「比丘等よ、これは生物なりや否やと思ひ迷へるものに疑惑起るや。」

今この識緣に因るが故に起る。世尊無量の方便もて識緣に因るが故に起り、識緣有れば則ち生じ緣無ければ則ち滅すと說きたまふ。嗏帝比丘、汝速にこの惡見を捨つべしと。我等訶し已りて、かくの如き惡見、そを强力に執して而も一向に說く、こはこれ眞實にして餘は虛妄なりと。是の如くして再び三たびするも、世尊、我等が如き嗏帝比丘をしてこの惡見を捨てしむること能はずして坐より起ちて去りぬ。』世尊聞き已りて一比丘に告げたまはく『汝嗏帝比丘の所に往き是の如き語を作せ、世尊汝を呼びたまふと。』こゝに於て一比丘世尊の敎を受けて卽ち坐より起ち佛足に稽首し繞三匝して而も去り、嗏帝比丘の所に至り卽ち彼に語げて曰く『世尊汝を呼びたまふ』嗏帝比丘卽ち佛の所に詣り佛足に稽首し却きて一面に坐しぬ。世尊問ひて曰はく『汝實に是の如く說くや、我知る、世尊是の如く法を說きたまふ、今この識往生して更に異らずと。』嗏帝比丘答へて曰く『世尊、我實に知る、世尊是の如く法を說きたまふ、今この識往生して更に異らずと。』世尊問ひて曰はく『何者か識なる。』嗏帝比丘答へて曰く『世尊、謂くこの〔四〕識說き覺り、[自ら]作し作さしめ、起り等しく起る。謂く彼善惡業を作して而も報を受く。』世尊訶して曰はく『嗏帝、汝云何が我是の如く法を說くを知り、汝何の口より我是の如く法を說くと聞き、汝愚癡の人、我一向に說かざるに汝一向に說くや。汝愚癡の人、諸の比丘共に汝を訶するを聞く時應に如法に答ふべし。我今當に諸の比丘に問ふべし。』こゝに於て世尊諸の比丘に問ひたまはく『汝等亦是の如く我是の如く法を說くと知るや、今この識往生して更に異らずと。』時に諸の比丘答へて曰く『不なり。』世尊問ひて曰はく『汝等云何が我法を說くと知るや。』諸の比丘答へて曰く『我等世尊是の如く法を說きたまふと知る、識緣に因るが故に起ると。世尊識緣に因るが故に起り、識緣有れば則ち生じ緣無ければ則ち滅すと說きたまふ。我等世尊是の如く法を說きたまふと知る。』世尊歎じて曰はく『善き哉善き哉、諸の比丘、汝等我是の如く法を說くと知る。所以者何。我亦是の如く識緣に因るが故に起ると說く。我識緣に因るが故に

【四】此識說覺作教作、起等起。謂彼作善惡業而受報也。巴利文「この話者知者にして此處彼處に善惡業の果報を受く。」

の如し。』佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

二百一、[一]嗏帝經第十

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時[二]嗏帝比丘雞和哆子是の如き惡見を生じぬ、我知る、世尊是の如く法を說きたまふ、今[三]この識往生して更に異らずと。諸の比丘聞き已りて嗏帝比丘の所に往至し問ひて曰く『嗏帝、汝實に是の如く說くや、我知る、世尊是の如く法を說きたまふ、今この識往生して更に異らずと。』嗏帝比丘答へて曰く『諸賢、我實に知る、世尊是の如く法を說きたまふ、今この識往生して更に異らずと。』時に諸の比丘嗏帝比丘を訶して曰く『汝この說を作すこと莫れ。世尊を誣謗すること莫れ。世尊を誣謗するは不善なり。世尊亦是の如く說きたまはず。嗏帝比丘、今この識、緣に因るが故に起る。世尊無量の方便もて識、緣に因るが故に起り、緣有れば則ち生じ、緣無ければ則ち滅すと說きたまふ。嗏帝比丘、汝速にこの惡見を捨つべし。』嗏帝比丘諸の比丘の爲に訶せられ已りて、かくの如き惡見、それを强力に執して而も一向に說きぬ、『こはこれ眞實にして餘は虛妄なり。』是の如くして再び三たびするも衆多の比丘嗏帝比丘をしてこの惡見を捨てしむること能はずして、坐より起ちて去り佛の所に往詣し佛足に稽首し却きて一面に坐し白して曰く『世尊、嗏帝比丘是の如き惡見を生ず、我知る、世尊是の如く法を說きたまふ、今この識往生して更に異らずと。世尊、我等聞き已りて嗏帝比丘の所に往詣し問ひて曰く、嗏帝、汝實に是の如く說くや、我知る、世尊是の如く法を說きたまふ、今この識往生して更に異らずと。嗏帝比丘我等に答へて曰く、諸賢、我實に知る、世尊是の如く法を說きたまふ、今この識往生して更に異らずと。世尊、我等訶して曰く、嗏帝比丘、汝この說を作すこと莫れ、世尊を誣謗すること莫れ。世尊を誣謗するは不善なり。世尊亦是の如く說きたまはず。嗏帝比丘、

【一】 M. 38, Mahā-taṇhā-saṅkhaya-sutta.
【二】 嗏帝雞和哆子(Sāti kevaṭṭa-putta)。漁夫の子サーティの意。
【三】「奔馳し輪廻するはこの識にして他にあらず。」

こと莫く、亦歡喜すること莫く、亦心樂し去ること莫るべし。所以者何。我等神無く神所有無し。猶ほ今この勝林門外の燥草枯木の如し。或は他人有りて持ち去り火に燒き意の用ふる所に隨ふ。意に於て云何。彼の燥草枯木頗しこの念を作し、他人我を持ち去り火に燒き意の用ふる所に隨ふと[思ふ]や。』諸の比丘答へて曰く『不なり世尊。』『是の如く若しは他人汝等を罵詈し撾打し瞋恚し責數する者有るも、若しは恭敬し供養し禮事し尊重する者有るも、汝これに因りて亦當に瞋恚憎嫉すること莫く害心を起すこと莫く、亦歡悅歡喜すること莫く、亦心樂しむこと莫るべし。所以者何。我等神無く神所有無し。(有)我が法善く說き發露し廣布して空缺有ること無く、流布し宣傳し乃ち天人に至る。是の如く我が法善く說き發露し廣布して空缺有ること無く、流布し宣傳し乃ち天人に至る。若し正智慧解脫して命終れば、彼有無窮なりと施設せず。我が法善く說き發露し廣布して空缺有ること無く、流布し宣傳して乃ち天に至る。是の如く我が法善く說き發露し廣布して空缺有ること無く、流布し宣傳して乃ち天人に至る。若し五下分結盡くる有りて而も命終れば、彼の間に生じてすなはち般涅槃し、不退法を得てこの世に還らず。我が法善く說き發露し廣布して空缺有ること無く、流布し宣傳し乃ち天人に至る。是の如く我が法善く說き發露し廣布して空缺有ること無く、流布し宣傳し乃ち天人に至る。彼三結已に盡き婬怒癡薄く、一たび天上人間に往來するを得、一たび往來し已りてすなはち苦邊を得。我が法善く說き發露し廣布して空缺有ること無く、流布し宣傳し乃ち天人に至る。是の如く我が法善く說き發露し廣布して空缺有ること無く、流布し宣傳し乃ち天人に至る。彼の三結已に盡き須陀洹を得て惡法に墮せず、定んで正覺に趣き極めて七たび天上人間に往來し、七たび往來し已りてすなはち苦邊を得。我が法善く說き發露し廣布して空缺有ること無く流布し宣傳し乃ち天人に至る。是の如く我が法善く說き發露し廣布して空缺有ること無く、流布し宣傳し乃ち天人に至る。若し我を信樂する有りて而も命終れば、皆善處に生じ、上有餘

るや。無明の塹已に知り、根本を拔絕し打破してまた當に生ずべからず。是の如くして比丘塹を度るを得。云何が比丘塹を過ぐるや。有愛已に盡き已に知り、根本を拔絕し打破してまた當に生ずべからず。是の如くして比丘塹を過ぐるを得。云何が比丘埳を破るや。無窮の生死已に盡き已に知り、根本を拔絕し打破してまた當に生ずべからず。是の如くして比丘變を破るを得。云何が比丘門無きや。五下分結已に盡き已に知り、根本を拔絕し、打破してまた當に生ずべからず。是の如くして比丘門無きを得。云何が比丘聖智慧鏡ありや。我慢已に盡き已に知り、根本を拔絕し、打破してまた當に生ずべからず。是の如くして比丘聖智慧鏡あり。これを比丘塹を度り塹を過ぎ塹を破り門無く聖智慧鏡ありと謂ふ。是の如く正解脫し、如來、[二〇]因提羅及び[二一]天伊沙那有り、梵及び眷屬有り、彼求めて如來所依の識を得ることと能はず、如來これ梵、如來これ冷、如來煩熱せず、如來これ異ならずと、我是の如く說く。諸の沙門梵志我を誣謗し、虛妄の言にして眞實ならず、沙門瞿曇御して施設する所無く、彼實に衆生有りて斷滅壞を施設し、若しこの中我無くば說かず。彼の如來現法中に於て無憂を說く。若し他人有りて如來を罵詈し如來を撾打し、瞋恚して責數すれば、如來彼の處に因りて瞋恚せず憎嫉せず、終に害心無し。若し人如來を罵詈し撾打し瞋恚し責數する時如來の意云何。如來この念を作す、若し我本作す所本造る所の者、彼に因りてこの言を致すと。然も如來を罵詈し撾打し瞋恚し責數すれば、如來この意を作す。若し他人有りて如來を恭敬し供養し禮事し尊重すれば、如來これに因りて以て悅を爲さず、以て歡喜を爲さず、心以て樂を爲さず。若し他人如來を恭敬し供養し禮事し尊重すれば、如來の意云何。如來この念を作す、若し我今知る所斷ずる所、彼に因りてこれを致すと。若し他人有りて如來を恭敬し供養し禮事し尊重すれば、如來この意を作す。』こゝに於て世尊諸の比丘に告げたまはく『若しは他人、汝等を罵詈し撾打し瞋恚し責數する者有るも、若しは恭敬し供養し禮事し尊重する者有るも、汝等これに因りて亦當に瞋恚憎嫉すること莫く害心を起す

【二〇】因提羅（巴 Inda, 梵 Indra）。帝釋天をいふ。
【二一】天伊沙那（Īsānā devā）。

狂癡を發せざるや。』比丘答へて曰く『不なり世尊。』世尊歎じて曰はく『善き哉善き哉。汝等是の如き身を受けよ、所有の身常住にして變易せず磨滅せざるの法の[如きを。]汝等是の如き身を受くるを見、受くべき所の身を[見]已るに、常住にして變易せず磨滅せざるの法なりや。』比丘答へて曰く『不なり世尊。』世尊歎じて曰はく『善き哉善き哉、謂ふ所神に因るが故に我有り、神無ければ則ち我無し。これ神・神所有得べからず施設すべからずと爲し、及び心中の有見處・結著・諸使亦得べからず施設すべからず。比丘、具足して見及び見所相續を說くと爲すこと、猶ほ阿梨吒比丘本伽陀婆利爲りし如くに非ざるや。』比丘答へて曰く『是の如し世尊、具足して見及び見所相續を說くと爲すこと、[一九]猶ほ阿梨吒比丘本伽陀婆梨爲りしが如し。』『また次に六見處有り。云何が六と爲す。比丘は所有の色、過去・未來・現在、或は內或は外、或は精或は麤、或は妙或は不妙、或は近或は遠、彼の一切我が有に非ず我彼の有に非ず、亦これ神に非ずと、是の如く慧觀してその如眞を知る。所有の覺、所有の想・所有の此見、我が有に非ず、我慧の有に非ず彼當に我無かるべく、當に有ならざるべく、彼の一切我が有に非ず我彼の有に非ず、亦これ神に非ずと、是の如く慧觀してその如眞を知る。所有の此見、若しは見聞識知、得る所、觀ずる所意に思念する所、この世より彼の世に至り、彼の世よりこの世に至る、彼の一切我が有に非ず我彼の有に非ず、亦これ神に非ずと、是の如く慧觀してその如眞を知る。所有の此見、こはこれ神、こはこれ世、こはこれ我、我當に後世あるべく、常に變易せず恒に磨滅せざるの法、彼の一切我が有に非ず我彼の有に非ず、復これ神に非ずと、是の如く慧觀してその如眞を知る。(所)[若し]比丘あり、この六見處これ神と見ず、亦神所有と見ず、彼是の如く見ずし已りてすなはちこの世を受けず、この世を受けずし已りてすなはち恐怖無く、恐怖せざるに因り已りてすなはち般涅槃を得、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辦じ更に有を受けずと如眞を知る。これを比丘塹を度り塹を過ぎ壕を破り門無く聖智慧鏡ありと謂ふ。云何が比丘塹を度

【一九】阿梨吒比丘はもと伽陀婆利即ち鷲驅したりしこと上に註せるが如し。

一切の我・我所作を捨離し慢使を滅するが故に法を說く時憂感し煩勞し啼哭し胸を椎ちて而も狂癡を發し、是の如く說く、我斷壞してまた有らずと。所以者何。彼の比丘の謂ふ所長夜に愛すべからず樂ふべからず意に念ずべからず。比丘、多く行じて彼すなはち憂感し煩勞し啼哭し胸を椎ちて而も狂癡を發す。比丘、是の如く外に因りて恐怖あり。』比丘世尊を歎じ已りてまた問ひて曰く『世尊、[一八]頗し外に因りて恐怖無き有りや。』世尊答へて曰はく『有り。』比丘また問ひて曰く『世尊、云何が外に因りて恐怖無きや。』世尊答へて曰はく『比丘は是の如く見ず是の如く說かず、こはこれ神、こはこれ世、こはこれ我、我當に後世あるべしと。彼是の如く見ず是の如く說かず。或は如來に遇ひ或は如來の弟子に遇ひ聰明にして智慧ありて而も善く言語し智慧を成就す。彼或は如來或は如來の弟子一切の自身を滅するが故に法を說き、一切の漏・一切の我・我所作を捨離し慢使を滅するが故に法を說く。彼或は如來或は如來の弟子一切の自身を滅するが故に法を說き、一切の漏・一切の我・我所作を捨離し慢使を滅するが故に法を說く時、憂感せず煩勞せず啼哭せず、胸を椎たず狂癡を發せず、是の如く說かず、我斷壞してまた有らずと。所以者何。彼の比丘謂ふ所、長夜に愛すべく樂ふべく意念すべし。比丘、多く行じて彼すなはち憂感せず煩勞せず啼哭せず、胸を椎たず狂癡を發せず。比丘、是の如く外に因りて恐怖無し。』その時比丘世尊を歎じて曰く『善き哉善き哉。』善き哉と歎じ已りて佛の所說を聞き善く受持し誦して則便ち默然たり。こゝに於て世尊諸の比丘を歎じて曰はく『善き哉善き哉、比丘、是の如きを受け、受くべき所を受け已りて憂感を生ぜず煩勞せず啼哭せず胸を椎たず狂癡を發せざれ。汝等受くる所受くべき所を見て憂感を生ぜず煩勞せず啼哭せず、胸を椎たず狂癡を發せざるや。』比丘答へて曰く『不なり世尊。』世尊歎じて曰はく『善き哉善き哉、汝等是の如きに依り、依るべき所を見、見已りて憂感を生ぜず煩勞せず啼哭せず、胸を椎たず狂癡を發せされ。汝等是の如きに依るを見、依るべき所を見、見已りて憂感を生ぜず煩勞せず啼哭せず、胸を椎たず

【一八】因外無恐怖(Bahiddhā asati aparitassanā)。

しは〔一四〕見聞識知、得る所觀ずる所、意の思念する所、この世より彼の世に至り、彼の世よりこの世に至る、彼の一切我が有に非ず、我彼の有に非ず、亦これ神に非ずと。是の如く慧觀してその如眞を知る。(6)所有の此見、こはこれ神、こはこれ世、こはこれ我、我當に後世あるべく、常に變易せず恒に磨滅せざる法[なりとする、]彼の一切我が有に非ず我彼の有に非ず、亦これ神に非ずと、是の如く慧觀してその如眞を知る。』こゝに於て一比丘あり、坐より而も起ち偏に著衣を袒ぎ叉手を佛に向け白して曰く『世尊〔一五〕頗し内に因りて恐怖有る有りや。』世尊答へて曰はく『有り。』比丘また問ひて曰く『世尊、云何が内に因りて恐怖有りや。』世尊答へて曰はく『比丘は是の如く見是の如く說く。彼或は昔時[我がものなりしもの][今]無く我[がもの]有らんと設くるもの[我]得ざらんと。彼是の如く見、是の如く說き、憂慼し煩勞し啼哭し、胸を椎ちて而も狂癡を發す。比丘、是の如く内に因りて恐怖あり。』比丘世尊を歎じ已りてまた問ひて曰く『世尊、〔一六〕頗し内に因りて恐怖無きありや。』世尊答へて曰はく『有り』比丘また問ひて曰く『世尊、云何が内に因りて恐怖無きや。』世尊答へて曰はく『比丘は是の如く見ず是の如く說かず、彼或は昔時[我がものなりしもの今]無く、我[がもの]有らんと設くるもの[我]得ざらんと。彼是の如く見ず是の如く說かずして憂慼せず煩勞せず啼哭せず、胸を椎たず狂癡を發せず。比丘、是の如く内に因りて恐怖無し。』比丘世尊を歎じ已りてまた問ひて曰く『世尊、〔一七〕頗し外に因りて恐怖有る有りや。』世尊答へて曰はく『有り。』比丘また問ひて曰く『世尊、云何が外に因りて恐怖有りや。』世尊答へて曰はく『比丘は是の如く見是の如く說く、こはこれ神、こはこれ世、こはこれ我、我當に後世あるべしと。彼是の如く見是の如く說く。或は如來に遇ひ或は如來の弟子に遇ひ聰明にして智慧ありて而も善く言語し智慧を成就す。彼或は如來、或は如來の弟子、一切の自身を滅するが故に法を說き、一切の漏・一切の我・我所作を捨離し慢使を滅するが故に法を說く。彼或は如來、或は如來の弟子一切の自身を滅するが故に法を說き、一切の漏・

〔一四〕見聞識知、所レ得所レ觀、意所ニ思念一。「見聞覺知する所、至る所、求むる所、心を以て思念する所。」

〔一五〕因レ内有恐怖(Ajjhattaṁ asati paritassanā)、内に無きことによる有恐怖。

〔一六〕因レ内無恐怖(Ajjhattaṁ asati aparitassanā)。内になきことによる無恐怖。

〔一七〕因外有恐怖(Bahiddhā asati paritassanā)。

度らんと求むる時而もこの念を作す、今この山水甚だ深く極めて廣く、長流駛疾にして多く漂ふ所有り、その中舡無く亦橋梁の而も度るべきもの無し。我彼の岸に於て事有りて度らんと欲す。當に何の方便を以て我をして安隱に彼の岸に至らしむべきやと。またこの念を作す、我今寧ろこの岸邊に於て草木を收聚し縛りて　桴栰を作り之に乘りて而も度るべしと。彼すなはち岸邊にて草木を收聚し縛りて桴栰を作り之に乘りて而も度り安隱に彼に至り、すなはちこの念を作す、今我この栰多く所益有り。この栰に乘り已りて我をして安隱に彼の岸より來り度りてこの岸に至らしむ。我今寧ろ以つて右肩に著け或は頭に戴きて去るべしと。彼すなはち栰を以て右肩の上に著け或は頭に戴きて去る。意に於て云何。彼是の如きを作し竟りて能く栰の爲に所益有らんや。』時に諸の比丘答へて曰く『不なり。』世尊告げて曰はく『彼の人云何がして栰の爲に作す所能く益有らんや。彼の人この念を作す、今我この栰多く所益有り。この栰に乘り已りて我をして安隱にして彼の岸より來り度りてこの岸に至らしむ。我今寧ろ更にこの栰を以て還た水中に著け、或は岸邊に著け而も捨て去るべきやと。彼の人すなはちこの栰を以て還た水中に著け或は岸邊に著け之を捨てゝ而も去る。意に於て云何。彼是の如きを作し、栰の爲に作す所能く益あらんや。』時に諸の比丘答へて曰く『益するたり。』世尊告げて曰はく『是の如く我汝等が爲に長夜に栰喩法を說き、棄捨せしめんと欲し、受けしめんと欲せず。若し汝等我長夜に栰喩法を說くを知らば、當に以てこの法を捨つべし。況や非法をや。また次に[一二]六見處あり。云何が六と爲す。比丘は(1)所有の色、過去・未來・現在、或は內或は外、或は精或は麤、或は妙或は不妙、或は近或は遠、[一三]彼の一切我が有に非ず、我彼の有に非ず、亦これ神に非ずと、是の如く慧觀してその如眞を知る。(2)所有の覺、(3)所有の想、(4)所有の此見我が彼に非ず、我彼の有に非ず。我當に我無かるべく、當に有ならざるべし。彼の一切我が有に非ず、我彼の有に非ず、亦これ神に非ずと。是の如く慧觀してその如眞を知る。(5)所有の此見、若

【二】 桴栰。やはりいかだ。

【一二】 六見處 (Cha diṭṭhiṭ-ṭhānāni)。
【一三】 彼一切非我有、我非彼有、亦非是神 (Etaṁ mama, eso 'ham asmi, eso me attā)「それは吾が有、吾はそれなり、それは吾が我」

す。彼自ら顚倒して受解するに因るが故に、是の如く是の如く彼の法を知る。謂く正經・歌詠・記說・偈他・因緣・撰錄・本起・此說・生處・廣解・未曾有法及び說義なり。彼諍ひてこの義を知り、解脫を受けずしてこの義を知り、彼の爲す所この法を知るに［在りて而も］この義を得ず、但極苦を受け唐じく自ら疲勞す。所以者何。彼顚倒して法を受解するを以ての故に。或は族姓子有りて顚倒せずして善く義及び文を受解す。所以者何。彼顚倒せずして善く受解するに因るが故に、是の如く彼の法を知る。謂く正經・歌詠・記說・偈他・因緣・撰錄・本起・此說・生處・廣解・未曾有法及び說義なり。彼諍はずしてこの義を知り、唯解脫を受けてこの義を知る。彼の爲す所この法を知るに［在りて］この義を得、極めて苦を受けず亦疲勞せず。所以者何。顚倒せずして法を受解するを以ての故に。譬へば若し人蛇を捉ふるを得んと欲してすなはち行きて蛇を求むるが如し。彼蛇を求むる時手に鐵杖を執り野林間に行きて極めて大なる蛇を見、先づ鐵杖を以て彼の蛇の頂を押へ手にその頭を捉ふ。彼の蛇尾を反して廻り或は手足及び餘の支節に纒ふと雖も然も螫すこと能はず。彼の人の爲す所蛇を取捉するを求むるに［在りて］而もこの義を得、極苦を受けず、亦疲勞せず。所以者何。彼善く蛇を取るの法を解するを以ての故に。是の如く或は族姓子有りて顚倒せずして善く義及び文を受解す。彼顚倒せずして善く受解するに因るが故に、是の如く是の如く彼の法を知る。謂く正經・歌詠・記說・偈他・因緣・撰錄・本起・此說・生處・廣解・未曾有法及び說義なり。彼諍はずしてこの義を知り、唯解脫を受けてこの義を知る。彼の爲す所この法を知るに［在りて］この義を得、極苦を受けず亦疲勞せず。所以者何。顚倒せずして法を受解するを以ての故に。我汝等が爲に長夜に（一〇）筏喩法を說かん。棄捨せしめんと欲し受けしめんと欲せざるが故に。云何が我汝等が爲めに長夜に筏喩法を說き、棄捨せしめんと欲し受けしめんと欲せざるや。猶ほ山水甚だ深く極めて廣く長流駛疾にして多く漂ふ所有り、その中舡無く亦橋梁無きが如し。或は人有り來りて而も彼の岸に於て事有り度らんと欲す。彼

【一〇】筏喩法（Kullūpama）。

比丘、汝等我是の如く法を說くを知る。所以者何。我亦是の如く說く、欲は障礙有り。我欲は障礙有りと說く。欲は骨鏁の如し。我欲は骨鏁の如しと說く。欲は肉臠の如し。我欲は肉臠の如しと說く。欲は把炬の如し。我欲は把炬の如しと說く。欲は火坑の如し。我欲は火坑の如しと說く。欲は毒蛇の如し。我欲は毒蛇の如しと說く。欲は夢の如し。我欲は夢の如しと說く。欲は假借の如し。我欲は假借の如しと說く。欲は樹果の如し。我欲は樹果の如しと說く。』世尊歎じて曰はく『善き善哉き哉、汝等我是の如く法を說くを知る。然るにこの阿梨吒愚癡の人顚倒して義及び文を受解す。彼自ら顚倒して受解するに因るが故に我を誣謗し自ら傷害するを爲し犯有り罪有り、諸の智[者]・梵行者の憙ばざる所にして而も大罪を得。汝愚癡の人この惡不善の處有るを知るや。』こゝに於て阿梨吒比丘世尊の爲に面り訶責せられ已りて內に憂慼を懷き低頭して默然し、辯を失ひて言無く所伺有るが如し。こゝに於て世尊阿梨吒比丘を面訶し責數し已りて諸の比丘に告げたまはく『若し我が說く所の法盡く具に義を解する者は當に是の如く受持すべし。若し我が說く所の法盡く具に義を解せざる者はすなはち當に我及び諸の智[者]・梵行者に問ふべし。所以者何。或は癡人有りて顚倒して義及び文を受解す。彼自ら顚倒して受解するに因るが故に是の如く是の如く彼の法を知る。謂く[八]正經・歌詠・記說・偈他・因緣・撰錄・本起・此說・生處・廣解・未曾有法及び說義なり。彼諍ひてこの義を知り、解脫を受けずしてこの義を知り、彼の爲す所この法を知るに[有りて而も]この義を得ず、但極苦を受け唐じく自ら疲勞す。所以者何。彼顚倒を以て法を受解するが故に。[九]譬へば若し人蛇を捉ふるを得んと欲してすなはち行きて蛇を求むるが如し。彼蛇を求むる時、野林間に行き、極めて大なる蛇を見すなはち前みて手を以てその腰中を捉ふ。蛇廻りて頭を擧げ或は手及び餘の支節を蜇す。彼の人の爲す所蛇を取捉するを求むるに[在りて而も]この義を得ず、但極苦を受け唐じく自ら疲勞す。所以者何。善く蛇を取るの法を解せざるを以ての故に。是の如く或は癡人有りて顚倒して義及び文を受解

【八】十二部經なり、一卷「善法經」、註〔一二〕を見よ。

【九】蛇喩法（Alagaddūpa-ma）。

便もて欲は障礙有りと說きたまふ。阿梨吒、汝速にこの惡見を捨つべしと。我等訶し已りて、[なほ彼]かくの如き惡見、そを强力に執して而も一向に說きぬ、こはこれ眞實にして餘は虛妄なりと。是の如くして再び三たびするも、世尊我等が如き阿梨吒比丘をしてこの惡見を捨てしむること能はずして坐より起ちて去りぬ。』世尊聞き已りて一比丘に告げたまはく『汝阿梨吒比丘の所に往き、是の如き語を作せ、世尊汝を呼びたまふと。』こゝに於て一比丘世尊の敎を受け卽ち坐より起ち佛足に稽首し遶三匝して而も去り、阿梨吒比丘の所に至りて卽ち彼に語げて曰く『世尊汝を呼びたまふ。』阿梨吒比丘卽ち佛の所に詣り、佛足に稽首し却きて一面に坐しぬ。世尊問ひて曰はく『阿梨吒、實に是の如く說くや、我知る、世尊是の如く法を說きたまふ、欲を行ぜば障礙無しと。』阿梨吒答へて曰く『世尊、我實に知る、世尊是の如く法を說きたまふ、欲を行ぜば障礙無しと。』世尊訶して曰く『阿梨吒、汝云何が我是の如く法を說くを知り、汝何の口よりして我是の如く法を說くと聞き、汝愚癡の人、我一向に說かざるを、汝一向に說くや。汝愚癡の人、諸の比丘共に訶するを聞かば、汝時に應に如法に答ふべし。我今當に諸の比丘に問ふべし。』こゝに於て世尊諸の比丘に問ひたまはく『汝等亦是の如く我是の如く法を說き、欲を行ぜば障礙無しと[說く]と知るや。』時に諸の比丘答へて曰く『不なり。』世尊問ひて曰はく『汝等云何が我法を說くを知るや。』諸の比丘答へて曰く『我等世尊是の如く法を說きたまふを知る。欲は障礙有りと。世尊欲は障礙有りと說きたまふ。欲は[五]骨鏁の如し。世尊欲は骨鏁の如しと說きたまふ。欲は肉臠の如し。世尊欲は肉臠の如しと說きたまふ。欲は把炬の如し。世尊欲は把炬の如しと說きたまふ。欲は火坑の如し。世尊欲は火坑の如しと說きたまふ。欲は毒蛇の如し。世尊欲は毒蛇の如しと說きたまふ。欲は夢の如し。世尊欲は夢の如しと說きたまふ。[六]欲は假借の如し。世尊欲は假借の如しと說きたまふ。[七]欲は樹果の如し。世尊欲は樹果の如しと說きたまふと知る。』世尊歎じて曰はく『善き哉善き哉、諸の

【五】骨鏁(Aṭṭhikaṅkala)。

【六】假借(Yācitaka)。借りたるもの、借物の意。

【七】巴利文にては以上の外屠殺場(Asisūnā)、鐵刺(Sattisūla)の二を加ふ。毒蛇(巴利文蛇頭)が最後に出る外順序も全く同じ。

巻の第五十四

二百、[一]阿梨吒經第九

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時[二]阿梨吒比丘、本の[三]伽陀婆梨是の如き惡見を生じぬ、[四]我知る、世尊是の如く法を說きたまふ、欲を行ぜば障礙無しと。諸の比丘聞き已りて阿梨吒比丘の所に往至し問ひて曰く『阿梨吒、汝實に是の如く說くや、我知る、世尊是の如く法を說きたまふ、欲を行ぜば障礙無しと。』時に阿梨吒答へて曰く『諸賢、我實に知る、世尊是の如く法を說きたまふ、欲を行ぜば障礙無しと。』諸の比丘阿梨吒を訶して曰く『汝この說を作すこと莫れ、世尊を誣謗すること莫れ。世尊を誣謗するは不善なり。世尊亦是の如く說きたまはず。阿梨吒、欲は障礙有り。世尊無量の方便もて欲は障礙有りと說きたまふ。阿梨吒、汝速にこの惡見を捨つべし。』阿梨吒比丘諸の比丘の爲めに訶せられ已りて「なほ彼」かくの如き惡見、そを强力に執して而も一向に說きぬ『こはこれ眞實にして餘は虛妄なり。』是の如くして再び三たびするも衆多の比丘阿梨吒比丘をしてこの惡見を捨てしむること能はずして坐より起ちて去り佛の所に往詣し佛足に稽首し却きて一面に坐し白して曰く『世尊、阿梨吒比丘是の如き惡見を生じぬ、我知るに世尊是の如く法を說きたまふ、欲を行ぜば障礙無しと。世尊、我等聞き已りて阿梨吒比丘の所に往詣し問ひて曰く、阿梨吒、汝實に是の如く說くや、我知る、世尊是の如く法を說きたまふ、欲を行ぜば障礙無しと。阿梨吒比丘我等に答へて曰く、諸賢、我實に知る、世尊是の如く法を說きたまふ、欲を行ぜば障礙無しと。世尊、我等訶して曰く、阿梨吒、汝この說を作すこと莫れ、世尊を誣謗すること莫れ、世尊を誣謗するは不善なり。世尊亦是の如く說きたまはず。阿梨吒、欲は障礙有り。世尊無量の方

【一】M. 22, Alagaddūpama-sutta.
【二】阿梨吒(Ariṭṭha)。
【三】本伽陀婆梨(Gaddhabādhi-pubba)。以前鷲を馴すものであつたの意。
【四】巴利文「世尊の障礙の法と示したまひしものを、受用する障礙あるに非ずと、斯くの如く世尊は法を說きたまへりと余は解す。」

樂と名づく。若し衆生彼の中に生じ、既に彼に生じ已りて若し眼に色を見て意の喜可する所、彼これ喜可、意の潤愛する所、彼これ潤愛、意の善樂する所、彼これ善樂なり。耳に聞く所の聲、鼻に嗅ぐ所の香、舌に嘗むる所の味、身に覺る所の觸、意に知る所の法、意の喜可する所、彼これ喜可、意の潤愛する所、彼これ潤愛、意の善樂する所、彼これ善樂なり。これを善處の樂と謂ふ。比丘、我汝等が爲に無量の方便もて彼の善處を說き善處の事を說きぬ。然もこの善處の樂具に說くべからず。但善處唯樂有り。比丘、若し智慧の人或時善處より來りて人間に下生し、若し家有れば極大富樂にして錢財無量、諸の畜牧多く封戶食邑米穀豐溢し及び若干種の諸の生活の具あり。彼云何と爲す。謂く刹利大長者の家、梵志大長者の家、居士大長者の家及び餘の極大富樂にして錢財無量、諸の畜牧多く封戶食邑米穀豐溢し及び若干種の諸の生活の具ある、是の如き家に生じ、端正にして愛すべく衆人敬順して極めて名譽有り大威德有り、多く人の愛する所多く人の念ずる所なり。彼身妙行を行じ口・意妙行を行じ、彼身妙行を行じ口・意妙行を行じ已りてこれに因りこれに緣りて身壞れ命終りて還た善處に至り天中に生ず。猶ほ二人而も共に博戲するが如し。彼に一人有り、始めて(求めて)是の如き行を取りて多く錢財を得。彼この念を作す。我田作せず、然も我始めて是の如き行を取りて多く錢財を得と。比丘、この行甚だ少し。謂く多く錢財を得[るの行。]比丘、謂くこの所行、身妙行を行じ口・意妙行を行じ、彼身妙行を行じ口・意妙行を行じ已りてこれに因りこれに緣りて身壞れ命終りて還た善處に至り天中に生ず。比丘、この諸の行、この行最も愛すべく最も樂ふべく、最も意の念ずる所たるべし。比丘、具足して智慧人の法を說くと爲すに非ざるや。』比丘白して曰はく『唯然り世尊、具足して智慧人の法を說きたまふと爲す。』世尊告げ　曰はく『これを愚癡人の法・智慧人の法と謂ふ。汝等、應に當に愚癡人の法・智慧人の法を知り、愚癡人の法・智慧人の法を知り已りて、愚癡人の法を捨て智慧人の法を取るべし。當に是の如く學すべし。』佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

中阿含經卷第五十三

て、これに因りこれに緣りて身壞れ命終りて必ず善處に昇り天中に上生す。旣に彼に生じ已りて樂報を受け、一向に愛すべく一向に樂ふべくして而も意念ずべし。若しこの念を作し、一向に愛すべく一向に樂ふべくして而も意念ずべきものと[作さば、] これ善處を說く。所以者何。彼の善處は一向に愛すべく一向に樂ふべくして而も意念ずべし。』その時一比丘有り、卽ち坐より起ち偏に著衣を袒ぎ叉手して佛に向け白して曰く『世尊、善處の樂云何。』世尊答へて曰はく『比丘、善處は盡く說くべからず。謂ふ所の善處の樂、但善處唯樂有り。』比丘また問ひて曰く『世尊、喩を以てその義を現し得べきや。』世尊答へて曰はく『亦喩を以てその義を現すべし。猶ほ轉輪王七寶と四種の人、如意足とを成就するが如し。比丘意に於て云何。彼の轉輪王七寶と四種の人如意足を成就し、彼これに因りて身心極喜樂を受くるや。』比丘答へて曰く『世尊、一寶・一人如意足を成就するすら尙極喜樂を受く。況やまた轉輪王七寶と四種の人如意足とを成就し、爲に極喜樂を受くるに非ざらんや。』こゝに於て世尊手に石子の猶ほ小豆の如きを取りて告げて曰はく『比丘、汝我が手にこの石子の小豆の如きを取るを見るや。』丘丘答へて曰く『見るなり世尊。』世尊また問ひて曰く『比丘、意に於て云何。我石子の猶ほ小豆の如きを取りて雪山王に比するに、何者か大と爲す。』比丘答へて曰く『世尊、手に石子の猶ほ小豆の如きを取りて雪山王に比したまふに、百倍千倍百千萬倍するも終に相及ばず數ふべからず算すべからず譬喩すべからず比方すべからず。但雪山王極大甚大なり。』世尊告げて曰はく『比丘、若し我石子の猶ほ小豆の如きを取りて雪山王に比するに、百倍千倍百千萬倍するも終に相及ばず數ふべからず算すべからず譬喩すべからず比方すべからず。但雪山王極大甚大なり。是の如く比丘、若し轉輪王七寶と四種の人如意足とを成就し彼の人身心極喜樂を受くるを諸天の樂に比するに、百倍千倍百千萬倍するも終に相及ばず數ふべからず算すべからず。譬喩すべからず比方すべからず。所謂善處の樂、但善處唯樂有り。比丘、云何が善處の樂なる。彼善處有り六更

はちこの念を作す、若し無量の善法を成就し、他人見已りて稱譽すれば、我亦この無量の善法有り。若し他知らば亦當に我を稱譽すべしと。これを智慧の人現法中に於て身心則ち第一の喜樂を受くと謂ふ。[三三]また次に彼の智慧の人又王の人種々に賊を治し、謂く手を截り足を截り並に手足を截り、耳を截り鼻を截り並に耳鼻を截り、或は臠々に割き、鬚を抜き髪を抜き或は鬚髪を抜き、或は檻中に著け、衣は火を裹みて燒き、或は沙壅草を以て火炳を纏ひ、或は鐵驢の腹中に内れ、或は鐵猪の口中に著け、或は鐵虎の口中に置きて燒き、或は銅釜中に安じ或は鐵釜中に著けて煮、或は段々に截り、或は利叉もて刺し、或は鈎を以て鈎け、或は鐵床に臥せしめて沸油を以て澆ぎ、或は鐵臼に坐せしめて鐵杵を以て擣き、或は毒龍に蜇さしめ、或は鞭を以て鞭ち或は杖を以て撾ち或は棒を以て打ち、或は活きながら標頭に貫き、或はその首を梟すを見る。彼の智慧の人見已りてすなはちこの念を作す、若し無量の惡不善の法を成就すれば、王知りて捉へ已りて是の如く考治す。我この無量の惡不善の法無し。若し王知らば終に是の如く我を苦治せざらん。これを智慧の人現法中に於て身心則ち第二の喜樂を受くと謂ふ。[三四]また次に彼の智慧の人身妙行を行じ口・意妙行を行じ、彼若し時に疾病あり、或は床に坐臥し或は榻に坐臥し或は地に坐臥し、或は身に極苦甚重の苦を生じ乃至命斷たんと欲す。彼の有する所の身妙行・口・意妙行、彼その時に於て懸向して上に在り。猶ほ晡時日下りて高山の影懸向して地に在るが如し。是の如く彼の有する所の身妙行・口・意妙行、彼その時に於て懸向して上に在り。彼この念を作す、これ我が身妙行・口・意妙行懸向して上に在り。我本の時に於て惡を作さず多く福を作し、若し處有り惡を作さされば、凶暴ならず無理の事を作さず、福を作し善を作し恐怖を作し、歸命する所依怙する所、我彼の善處に至りて而も悔を生ぜず、悔を生ぜずし已りて賢にして死し賢にして命終ると。これを智慧の人現法中に於て身心則ち第三の喜樂を受くと謂ふ。[三五]また次に彼の智慧の人身妙行を行じ口 意妙行を行じ、彼身妙行・口・意妙行を行じ已り

【三三】第二の喜樂。

【三四】第三の喜樂。

【三五】第四の喜樂。

餘の下賤の家、弊惡貧窮にして飮食有ること少く、謂く食を得ること甚だ難き、是の如き家に生じ、旣に彼に生じ已りて或は瞎或は跛、或は臂肘短く或は身傴曲り或は左手を用ひ、惡色羊面にして醜陋短壽、他の爲に使はる。彼身惡行を行じ口・意惡行を行じ、彼身惡行を行じ口・意惡行を行じ已りてこれに因りこれに緣りて身壞れ命終りて還た惡處に至り地獄の中に生ず。猶ほ二人而も共に博戲するが如し。彼に一人有り始めて是の如き行を取りすなはち奴婢を失ひ及び妻子を失ひ、また己の身を取りて烟屋中に倒懸す。彼この念を作す、我食せず飮せず、然も我始めて是の如き行を取りてすなはち奴婢を失ひ及び妻子を失ひ、また己身を取りて烟屋中に倒懸すと。比丘、この行甚だ少くして奴婢を失ひ妻子を失ひ、また己身を取りて烟屋中に倒懸す。比丘、謂くこの行行ずべき所、身惡行を行じ口・意惡行を行じ、彼身惡行を行じ口・意惡行を行じ已りてこれに因りこれに緣りて身壞れ命終りて還た惡處に至り地獄の中に生ず。比丘、この諸の行最も愛すべからず、實に樂ふべからず、意の念ずる所に非ず。比丘、具足して愚癡の法を說くに非ざるや。』比丘答へて曰く『唯然り世尊、具足して愚癡の法を說きたまふと爲す。』世尊告げて曰はく[三一]『云何が智慧の法なる。彼の智慧の人三相の智慧標・智慧像有り。謂く智慧の人を成就し智慧を說く。云何が三と爲す。智慧の人は善思を思ひ善說を說き善作を作す。こゝを以て智慧の人智慧と說く。若し智慧の人善思を思はず善說を說かず善作を作さゞれば、應に智慧の人智慧と說くべからず。智慧の人善思を思ひ善說を說き善作を作すを以ての故に、この智慧の人智慧と說く。智慧の人は現法中に於て身心則ち三種の喜樂を受く。云何が智慧の人現法中に於て身心則ち三種の喜樂を受くるや。智慧の人は或は所行有り或は聚會して坐し或は道巷に在り或は市中に在り或は四衢頭に〔在り〕て、智慧の人相應の事を說く。[三二]智慧の人は殺を斷じ殺・不與取・邪婬・妄言を離れ、乃至邪見を斷じて正見を得及び餘の無量の善法を成就す。若し無量の善法を成就すれば、他人見已りてすなはち之を稱譽す。彼の智慧の人聞き已りてすな

【三一】以下は智慧者の法を說く。

【三二】智慧の人。第一の喜樂。

何と爲す。謂く雜・猪・狗・豺・烏・拘樓羅 拘稜迦なり。愚癡の人は本の時食味に貪著せるを以て身惡行を行じ口・意惡行を行ず。彼身惡行を行じ口・意惡行を行じ已りてこれに因りこれに緣りて身壞れ命終りて畜生の中に生じ、謂く屎不淨を食す。これを畜生の苦と謂ふ。比丘、我汝等が爲に無量の方便もて彼の畜生を說き畜生の事を說きぬ。然もこの畜生の苦具に說くべからず。但畜生唯苦有り。比丘、若し愚癡の人畜生より出で還た生じて人と爲らんは極大甚難なり。所以者何。彼の畜生の中仁義を行ぜず禮法を行ぜず妙善を行ぜず。彼の畜生は更に相食噉し、强きは弱きを食し大は小を食す。比丘、猶ほこの地その中水を滿し、一[三〇]瞎龜有り、壽命百千の歲なり。彼の水上に小さく輕き木板有りて唯一孔有り、風の爲に吹かるゝが如し。比丘、意に於て云何。彼の瞎龜の頭寧ろこの小さく輕き木板の一孔中に入るを得んや。』比丘答へて曰く『世尊、或は入るを得べし。但久しく久しく甚難なり。』世尊告げて曰はく『比丘、或時瞎龜百年を過ぎ已りて東方より來りて而も一たび頭を擧ぐ。彼の小木板唯一孔有り、東風の爲に吹かれ移りて南方に至る。或時瞎龜百年を過ぎ已りて南方より來りて而も一たび頭を擧ぐ。彼の一孔の板南風の爲に吹かれ移りて西方に至る。或時瞎龜百年を過ぎ已りて西方より來りて而も一たび頭を擧ぐ。彼の一孔の板西風の爲に吹かれ移りて北方に至る。或時瞎龜北方より來りて而も一たび頭を擧ぐ。彼の一孔の板北風の爲に吹かれ隨ひて諸方に至る。比丘、意に於て云何。彼の瞎龜の頭寧ろこの一孔板に入るを得んや。』比丘答へて曰く『世尊、或は入るを得べし。但久しく久しく甚難なり。』『比丘、是の如く、彼の愚癡の人畜生より出で還た生じて人と爲るは亦復甚だ難し。所以者何。彼の畜生ゝ中仁義を行はず禮法を行はず妙善を行はず。彼の畜生は更に相食噉し、强きは弱きを食し大は小を食す。比丘、若し愚癡の人或時畜生より出で還た生じて人と爲り、彼若し家有れば、小姓下賤にして弊惡貧窮、飮食有ること少く、謂く食を得ること甚だ難し。彼云何と爲す。謂く獄卒の家・工師の家・巧手の家・陶師の家、是の如き比の

【三〇】盲龜浮木の喩。瞎は盲なり。

地獄唯苦有り。比丘、若し愚癡の人或時地獄より出でゝ畜生に生ぜば、畜生亦甚だ苦なり。比丘、[二二]云何が畜生の苦なる。若し衆生畜生の中に生じ、謂く彼闇冥中に生じ闇冥中に長じ闇冥中に死す。彼云何と爲す。謂く地生蟲なり。愚癡の人は本の時食味に貪著せるを以て身惡行を行じ、口・意惡行を行ず。彼身惡行を行じ口・意惡行を行じ已りてこれに因りこれに縁りて身壞れ命終りて畜生の中に生じ、謂く闇冥中に生じ闇冥中に長じ闇冥中に死す。これを畜生の苦と謂ふ。比丘、[二三]云何が畜生の苦なる。若し衆生畜生の中に生じ、謂く身中に生じ身中に長じ身中に死す。彼云何と爲す。謂く蛸蟲と名づく。愚癡の人は本の時食味に貪著せるを以て身惡行を行じ口意惡行を行ず。彼身惡行を行じ口・意惡行を行じ已りてこれに因りこれに縁りて身壞れ命終りて畜生の中に生じ、謂く身中に生じ身中に長じ身中に死す。これを畜生の苦と謂ふ。比丘、[二四]如何が畜生の苦なる。若し衆生畜生の中に生じ、謂く水中に生じ水中に長じ水中に死す。彼云何と爲す。謂く魚・摩竭魚[二五]・龜鼉[二六]婆留尼[二七]提鼻 提鼻伽羅・提鼻[提鼻]伽羅なり。愚癡の人は本の時食味に貪著せるを以て身惡行を行じ口・意惡行を行ず。彼身惡行を行じ口・意惡行を行じ已りてこれに因りこれに縁りて身壞れ命終りて畜生の中に生じ謂く水中に生じ水中に長じ水中に死す。これを畜生の苦と謂ふ。比丘、云何が[二八]畜生の苦なる。若し衆生畜生の中に生じ、謂く生草樹木を齒齧して食す。彼云何と爲す。謂く象・馬・駱駝・牛・驢・鹿・水牛及び猪なり。愚癡の人は本の時食味に貪著せるを以て身惡行を行じ口・意惡行を行ず。彼身惡行を行じ口・意惡行を行じ已りてこれに因りこれに縁りて身壞れ命終りて畜生の中に生じ、謂く生草樹木を齒齧して食す。これを畜生の苦と謂ふ。比丘、[二九]如何が畜生の苦なる。若し衆生畜生の中に生じ、謂く彼人の大小便の氣を聞きて卽ち走りて彼に往趣し彼の食を食す。猶ほ男女飲食の香を聞きて卽便ち彼に往趣するが如し。是の如くして彼の食彼の食と說く。是の如く比丘、若し衆生畜生の中に生じ、謂く彼人の大小便の氣を聞きて卽ち走りて彼に往趣し彼の食を食す。彼云

【二二】畜生の苦(1)、闇中生。

【二三】畜生の苦(2)、身中生。

【二四】畜生 苦(3)、水中生。

【二五】摩竭魚(M.kara)。海中の怪魚。

【二六】婆留尼(Vāruṇi)。怪魚又は海蛇。

【二七】提鼻(Timi)。提鼻伽羅(Timiṅgala)、提鼻提鼻伽羅(Timitimiṅgala)。八卷「阿修羅經」にては「提鼻」を「帝鯢」に作る。共に想像的怪魚

【二八】畜生の苦(4)、草木食。

【二九】畜生の苦(5)、大小便食。

苦痛逼迫し、歳數甚だ多くして乃至百千[歳]無量の苦極重の甚苦を受け終に死するを得ず、要ず當に惡不善の業盡くるに至るべし。これを地獄の苦と謂ふ。比丘、[一九]云何が地獄の苦なる。衆生地獄の中に生じ、既に中に生じ已りて獄卒火山の洞然として倶熾なるを以てそれをして上下せしめ、彼若し足を下せばその皮肉血卽ちすなはち燒け盡き、若し足を擧ぐる時はその皮肉血還た生じて故の如し。彼是の如く考治され苦痛逼迫し、歳數甚だ多くして乃至百千[歳]無量の苦極重の甚苦を受け終に死するを得ず、要ず當に惡不善の業盡くるに至るべし。これを地獄の苦と謂ふ。比丘、[二〇]云何が地獄の苦なる。衆生地獄の中に生じ、既に彼に生じ已りて獄卒手に捉へ大鐵釜の洞然として倶熾なるを以てその身を倒擧し足上にし頭下にして以て釜中に著く。彼その中に於て或は上り或は下り、或は方維に至り、自體沫出して還たその身を煮る。猶ほ大豆・小豆・蘊豆・苦豆・芥子水多き釜中に著き、下より極めて火を然し、彼の豆中に於て或は上り或は下り、或は方維に至りて自ら沫し纒ひて煮るが如し。是の如く衆生地獄の中に生じ、既に彼に生じ已りて獄卒手に捉へ鐵釜の洞然として倶熾なるを以てその身を倒擧し足上にし頭下にして以て釜中に著け、彼その中に於て或は上り或は下り、或は方維に至り、自體沫出し還たその身を煮る。彼是の如く考治され苦痛逼迫し、歳數甚だ多くして乃至百千[歳]無量の苦極重の甚苦を受け終に死するを得ず、要ず當に惡不善の業盡くるに至るべし。これを地獄の苦と謂ふ。比丘、[二一]云何が地獄の苦なる。彼の地獄の中に獄有り、六更樂と名づく。苦し衆生彼の中に生じ、既に彼に生じ已りて、若し眼に色を見るも憙ばず可とせず、これ憙可に非ず、意潤愛せず、これ潤愛に非ず、意善樂せず、これ善樂に非ず。耳に聞く所の聲、鼻に齅ぐ所の香、舌に嘗むる所の味、身に覺る所の觸、意に知る所の法、憙ばず可とせず、これ憙可に非ず、意潤愛せず、これ潤愛に非ず。意善樂せず、これ善樂に非ず。これを地獄の苦と謂ふ。比丘、我汝等が爲に無量の方便もて彼の地獄を說き地獄の事を說きぬ。然もこの地獄の苦具に說くべからず。但

【一九】地獄の苦(9)、火山。

【二〇】地獄の苦(10)、大鐵釜。

【二一】地獄の苦(11)、六更樂。

銅を以てその口中に灌ぎ、脣を燒き舌を燒き齗を斷き咽を燒き心を燒き胃を燒きて身より下り出づ。彼是の如く考治され苦痛逼迫し、歲數甚だ多くして乃至百千[歲]無量の苦極重の甚苦を受け終に死するを得ず、要ず當に惡不善の業盡くるに至るべし。これを地獄の苦と謂ふ。比丘、[一五]云何が地獄の苦なる。衆生地獄の中に生じ、既に彼に生じ已りて獄卒手に捉ふれば則ち鐵地の洞然として倶熾なるを以て仰向して臥せしめ、五縛を陀して治し兩手兩足は鐵釘を以て釘け、一鐵釘を以て別にその腹に釘け、彼是の如く考治され苦痛逼迫し、歲數甚だ多くして乃至百千[歲]無量の苦極重の甚苦を受け終に死するを得ず、要ず當に惡不善の業盡くるに至るべし。これを地獄の苦と謂ふ。比丘、[一六]云何が地獄の苦なる。衆生地獄の中に生じ、既に彼に生じ已りて獄卒手に捉ふれば則ち鐵地の洞然として倶熾なるを以てそれをして地に伏せしめ、口より舌を出し百釘を以て張りて皺無く縮無か[らしむ。]猶ほ牛皮百釘を以て張りて皺無く縮無か[らしむる]が如し。是の如く衆生地獄の中に生じ、既に彼に生じ已りて獄卒手に捉ふれば則ち鐵地の洞然として倶熾なるを以てそれをして地に伏せしめ、口より舌を出し百釘を以て張りて皺無く縮無か[らしむ。]彼是の如く考治され(者)苦痛逼迫し、歲數甚だ多くして乃至百千[歲]無量の苦極重の甚苦を受け終に死するを得ず、要ず當に惡不善の業盡くるに至るべし。これを地獄の苦と謂ふ。比丘、[一七]云何が地獄の苦なる。衆生地獄の中に生じ、既に彼に生じ已りて獄卒手を以てその頭皮を捉へ剝ぎ下して足に至り、足より皮を剝ぎ上りてその頭に至り、則ち鐵車の洞然として倶熾なるを以て、以て車に縛著しすなはち鐵地の洞然として倶熾なるに於て牽挽往來す。彼是の如く考治[され]苦痛逼迫し、歲數甚だ多くして乃至百千[歲]無量の苦極重の甚苦を受け終に死するを得ず、要ず當に惡不善の業盡くるに至るべし。これを地獄の苦と謂ふ。比丘、[一八]云何が地獄の苦なる。衆生地獄の中に生じ、既に彼に生じ已りて獄卒火の洞然として倶熾なるを以て地に揚撲せしめ、また手に取りて自らその身に灌がしむ。彼是の如く考治され

【一五】地獄の苦(4)、五縛。
【一六】地獄の苦(6)、百釘。
【一七】地獄の苦(7)、鐵車。
【一八】地獄の苦(8)、火。

の如きを取りて雪山王に比するは、百倍千倍百千萬倍するも終に相及ばず、數ふべからず算すべからず譬喩すべからず比方すべからず、但雪山王極大甚大なり。是の如く比丘、若しこの人一日三百矛刺を被り、彼これに因緣して身心惱極重の憂苦を受くるも地獄の苦に比すれば、百倍千倍百千萬倍するも終に相及ばず、數ふべからず算すべからず、譬喩すべからず比方すべからず。但地獄の中極苦甚苦なり。比丘、〔一〇〕云何が地獄の苦なる。衆生地獄の中に生じ、既に彼に生じ已りて獄卒手に捉ふれば則ち鐵斧の洞然として俱熾なるを以てその身を斫治して或は〔一一〕八楞と作し或は六楞と爲し或は四方と爲し或は團圓ならしめ、或は高くし或は下げ、或は好く或は惡く、彼是の如く考治され苦痛逼迫し、歲數甚だ多くして乃至百千〔歲〕無量の苦極重の甚苦を受けて終に死するを得ず、要ず當に惡不善の業盡くるに至るべし。これを地獄の苦と謂ふ。比丘、〔一二〕云何が地獄の苦なる。衆生地獄の中に生じ、既に彼に生じ已りて獄卒手に捉ふれば則ち鐵釿の洞然として俱熾なるを以てその身を斫治して或は八楞と作し或は六楞と爲し或は四方と爲し、或は團圓ならしめ、或は高くし或は下げ、或は好く或は惡く、彼是の如く考治され苦痛逼迫し、歲數甚だ多くして乃至百千〔歲〕無量の苦・極重の甚苦を受けて終に死するを得ず。要ず當に惡不善の業盡くるに至るべし。これを地獄の苦と謂ふ。比丘、〔一三〕云何が地獄の苦なる。衆生地獄の中に生じ、既に彼に生じ已りて獄卒手に捉ふれば則ち鐵槍の洞然として俱熾なるを以て强ひて坐上せしめ、すなはち＊鐵鉗を以てその口を鉗開し則ち鐵丸の洞然として俱熾なるを以てその口中に著け、脣を燒き舌を燒き齗を燒き咽を燒き心を燒き胃を燒きて身より下り出づ。彼是の如く考治され苦痛逼迫し、歲數甚だ多くして乃至百千〔歲〕無量の苦・極重の甚苦を受けて終に死するを得ず、要ず當に惡不善の業盡くるに至るべし。これを地獄の苦と謂ふ。比丘、〔一四〕云何が地獄の苦なる。衆生地獄の中に生じ、既に彼に生じ已りて獄卒手に捉ふれば則ち鐵鏘の洞然として俱熾なるを以て强ひて坐上せしめ、すなはち鐵鉗を以てその口を鉗開し則ち融

〔一〇〕地獄の苦(1)鐵斧。

〔一一〕八楞は八角なり。

〔一二〕地獄の苦(2)、鐵釿（鐵製のもの）。

〔一三〕地獄の苦(3)、鐵槍
＊鐵鉗（鐵製のはさみ）。

〔一四〕地獄の苦(4)、鐵鏘。

比丘また問ひて曰く『世尊、喩を以てその義を現し得べきや。』世尊答へて曰はく『亦喩を以てその義を現すべし。比丘、猶ほ王の人、賊を收むるが如し。送りて刹利頂生王の所に詣り白して曰く、天王、この賊人罪有り。願はくは天王治しまたへと。刹利頂生王告げて曰く、汝等將ゐ去りてこの人の罪を治し朝に百矛を以て刺せと。王の人教を受けてすなはち將ゐ去りて治し、朝に百矛を以て刺す。彼の人故の[ごとく]活く。刹利頂生王問ひて曰く、彼の人云何と。王の人答へて曰く、天王、彼の人故の[ごとく]活くと。刹利頂生王また告げて曰く、汝等去りて日中にまた百矛を以て刺せと。王の人教を受けて日中にまた百矛を以て刺す。彼の人故の[ごとく]活く。刹利頂生王また問ひて曰く、彼の人云何と。王の人答へて曰く、天王、彼の人故の[ごとく]活くと。刹利頂生王また告げて曰く、汝等去りて日西する[時]また百矛を以て刺せと。王の人教を受けて日西する[時]また百矛を以て刺す。然るに彼の人身一切穿決破碎し壞れ盡き、一處として完き無く錢孔の如きに至る。刹利頂生王まだ問ひて曰く、彼の人云何。王の人答へて曰く、天王、彼の人故の[ごとく]活く。然るに彼の身一切穿決破碎し壞れ盡き、一處として完き無く錢孔の如くに至ると。比丘、意に於て云何。若し彼の人一日三百矛刺を被れば、彼の人これに因りて身心惱極憂苦を受くるや。』比丘答へて曰く『世尊、一矛刺を被るも尙極苦を受く。況やまた一日三百矛刺を受くるをや。彼の人身心豈惱極憂苦を受けざらんや。』こゝに於て世尊手に　石子の猶ほ小豆の如きを取り告げて曰はく『比丘、汝我が手にこの石子の小豆の如きを取るを見るや。』比丘答へて曰く『見るなり世尊。』世尊また問ひて曰はく『比丘、意に於て云何。我石子の猶ほ小豆の如きを取りて雪山王に比せんに、何者か大と爲すや。』比丘答へて曰く『世尊、手に石子の猶ほ小豆の如きを取り、雪山王に比したまふは、百倍千倍百千萬倍するも終に相及ばず、數ふべからず算すべからず譬喩すべからず比方すべからず。但雪山王極大甚大なり。』世尊告げて曰はく『比丘、若し我石子の猶ほ小豆

【八】　賊の喩。

【九】　石子猶如₂小豆₁、巴利文にては「拳大の石」

段々に截り、或は利叉もて刺し、或は鈎を以て鈎け、或は鐵床に臥せしめて沸油を以て澆ぎ、或は鐵臼に坐せしめて鐵杵を以て擣き、或は毒龍に螫さしめ、或は鞭を以て鞭ち或は杖を以て撾ち、或は棒を以て打ち、或は活きながら標頭に貫き、或はその首を梟すを見、彼の愚癡の人見已りてすなはちこの念を作す、若し無量の惡不善の法を成就すれば、王知りて捉へ已りて是の如く考治す。我亦この無量の惡不善の法有り。若し王知らば亦當に我を苦治し考[治]すること是の如くなるべしと。これを愚癡の人現法中に於て身心則ち第二の憂苦を受くと謂ふ。また[五]次に彼の愚癡の人身惡行を行じ意惡行を行ず。彼若し時に疾病ありて苦を受け、或は床に坐臥し或は榻に坐臥し或は地に坐臥して身に極苦甚苦を生じ乃至命斷たんと欲し、彼の有する所の身惡行・口・意惡行、彼その時に於て懸向して上に在り。猶ほ晡時に日下りて高山の影懸向して地に在るが如し。是の如く彼の有する所の身惡行・口・意惡行、彼その時に於て懸向して上に在り。彼この念を作す、こはこれ我が身惡行口・意惡行懸向して上に在り。我本の時に於て福を作さず多く惡を作しぬ。若し處有れば、惡者凶暴を作し無理の事を作し、福を作さず善を作さず恐怖を作さず、歸命する所、依怙する所、我彼の惡處に至らんと。これより悔を生じ、悔を生じ已りて不善にして死し不善にして命終る。これを愚癡の人現法中に於て身心則ち第三の憂苦を受くと謂ふ。[六]また次に彼の愚癡の人身惡行を行じ口・意惡行を行ず。彼身惡行を行じ口・意惡行を行じ已りてこれに因りこれに緣りて身壞れ命終りて必ず惡處に至り地獄の中に生ず。既に彼に生じ已りて苦報を受け、[七]一向に愛すべからず樂ふべからず意念ずべからず。若しこの說を作し、一向に愛すべからず樂ふべからず意念ずべからずと[說かば]、これ地獄を說く。所以者何。彼の地獄は一向に愛すべからず樂ふべからず意念ずべからず。』その時一比丘有り、卽ち坐より起ち偏に著衣を袒ぎ叉手を佛に向け白して曰く『世尊、地獄の苦云何。』世尊答へて曰はく『比丘、地獄盡く說くべからず。謂ふ所の地獄の苦、比丘、但地獄の苦唯苦有り。』

【五】第三の憂苦。

【六】第四の憂苦(死後)。

【七】一向不可愛・一向不可樂・一向不可意念(Ekanta-aniṭṭha, ekantakanta, ekanta amanāpa)。

卷の第五十三

百九十九、[一]癡慧地經第八

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『我今汝が爲に愚癡の法・智慧の法を說かん。諦かに聽け、諦かに聽きて、善く之を思念せよ。』時に諸の比丘教を受けて而も聽きぬ。佛言はく『云何が愚癡の法なる。愚癡の人三相の[二]愚癡標・愚癡像有り。愚癡を成就するの人愚癡を說くと謂ふ。云何が三と爲す。愚癡の人惡思を思ひ惡說を說き惡作を作す。こゝを以て愚癡を說く。若し愚癡の人惡思を思はず惡說を說かず惡作を作さゞれば、應に愚癡の人愚癡を說くべからず。愚癡の人惡思を思ひ惡說を說き惡作を作すを以ての故に、こゝを以て愚癡の人愚癡を說く。彼の愚癡の人現法中に於て身心に則ち三種の憂苦を受く。云何が愚癡の人身心に則ち三種の憂苦を受くるや、[三]愚癡の人は或は所行有り、或は聚會して坐し、或は道巷に在り或は市中に在り或は四衢頭に[在りて]愚癡人相應の事を說く。愚癡の人は、殺生・不與取・行邪婬・妄言乃至邪見あり、及び餘の無量の惡不善の法を成就す。若し無量の惡不善の法を成就すれば、他人見已りてすなはちその惡を說く。彼の愚癡の人聞き已りてすなはちこの念を作す、若し無量の惡不善の法を成就し、他人見已りてその惡を說かば、我亦この無量の惡不善の法有り。若し他知らば亦當に我が惡を說くべしと。これを愚癡の人現法中に於て身心則ち第一の憂苦を受くと謂ふ。[四]また次に彼の愚癡の人又王の人罪人を收捉し種々苦治し、謂く手を截り足を截り並に手足を截り、耳を截り鼻を截り並に耳鼻を截り、或は臠々に割き、鬚を拔き髮を拔き或は鬚髮を拔き、或は檻中に著き衣は火を裹みて燒き、或は沙壅草を以て火烘を纏ひ、或は鐵驢の腹中に內れ或は鐵猪の口中に著け或は鐵虎の口中に置きて燒き、或は銅釜中に安じ或は鐵釜中に著けて煮、或は

【一】 M. 129, Bālapaṇḍita-sutta. 竺曇無蘭譯「佛說泥犁經。」

【二】 愚癡標愚癡像(Bālalakkhaṇa, nimitta, apadāna)「愚人の相、徵、特質」の意。

【三】 愚癡の人、第一の憂苦。

【四】 第二の憂苦

く堪耐す。阿奇舍那、若し聖弟子如來に隨ひて能く堪忍すれば、彼その時に於て調御し善く調御し、上調御最上調御を得、上息・最上息を得、諸の曲惡・恐怖・愚癡・及び諛諂を除き清淨にして塵を止め無垢無穢、呼ぶべく請ずべく敬すべく重んずべく、實に供養すべく一切天人の良福田爲り。阿奇舍那、猶ほ野象能く堪忍すれば、彼その時に於て調御し善く調御し上調御を得、最上調御・上速疾・無上速疾を得、王乘に中り王稟を受食し、王象と稱說すべきが如し。是の如く阿奇舍那、若し聖弟子如來に隨ひて能く堪忍すれば、彼その時に於て調御し善く調御し、上調御・最上調御を得、上息・最上息を得、諸の曲惡・恐怖・愚癡及び諛諂を除き、清淨にして塵を止め無垢無穢、呼ぶべく請ずべく敬すべく重んずべく、實に供養すべく、一切天人の良福田爲り。阿奇舍那、少き野象調御せずして死せば、調御せずして死すと說き、中老の野象調御せずして死せば、調御せずして死すと說く。阿奇舍那、少き聖弟子調御せずして命終れば、調御せずして命終ると說き、中老の聖弟子調御せずして命終れば、調御せずして命終ると說く。阿奇舍那、少き野象善く調御して死せば、善く調御して死すと說き、中老の野象善く調[御]して死せば、善く調御して死すと說く阿奇舍那少き聖弟子善く調御して命終れば、善く調御して命終ると說き、中老の聖弟子善く調御して命終れば、善く調御して命終ると說く。』佛說是の如し。沙彌阿夷那和提及び諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

中阿含經卷第五十二

當に內身を觀じて身の如くにして欲相應の念を念ずること莫く、乃至覺・心・法を觀じて[覺・心・]法の如くにして非法相應の念を念ずること莫るべしと。若し聖弟子內身を觀じて身の如くにして欲相應の念を念ぜず、乃至覺・心・法を觀じて[覺・心・]法の如くにして非法相應の念を念ぜざれば、是の如くして聖弟子如來の敎に隨ふ。阿奇舍那、猶ほ野象の調象師よりして則ち柔軟可愛の言を以て向はれ、臥起・去來・取捨・屈伸すれば、是の如くして野象調象師の敎に隨ふが如し。是の如く阿奇舍那、若し聖弟子內身を觀じて身の如くにして欲相應の念を念ぜず、乃至覺・心・法を觀じて[覺・心・]法の如くにして非法相應の念を念ぜざれば是の如くして聖弟子如來の敎に隨ふ。若し聖弟子如來の敎に隨へば、如來また更に比丘を調御し、汝當に欲を離れ惡不善の法を離れ、[乃至]第四禪を得、成就して遊ぶに至るべしと。若し聖弟子欲を離れ惡不善の法を離れ、[乃至]第四禪を得成就して遊ぶに至れば、是の如くして聖弟子則ち如來に隨ひ住して移動せず。阿奇舍那、猶ほ野象調象師の治に從ひて移動せざる時、前脚を擧げず亦後脚を動かさず、兩髀・兩脇・尾脊・頭額・耳牙及び鼻皆動搖せず。是の如くして野象調象師に隨ひて住して移動せざるがごとし。是の如く阿奇舍那、若し聖弟子欲を離れ惡不善の法を離れ、[乃至]第四禪を得、成就して遊ぶに至れば、是の如くして聖弟子則ち如來に隨ひて住して移動せず。若し聖弟子如來に隨ひて住して移動せざれば、彼その時に於て則ち能く飢渴・寒熱・蚊虻・蠅・蚤・風日の逼る所を堪忍し惡聲捶杖亦能く之を忍び、身諸の疾に遇ひ極めて苦痛を爲し命絕えんと欲するに至るも諸の不可樂皆能く堪耐す。阿奇舍那、猶ほ野象調象師に隨ひて住して移動せず。彼その時に於て刀・楯・矟・鉾・戟・斧・鉞・喚呼・高聲を忍び、若し螺を嘯吹し鼓を擊ち鐘を椎つも皆能く堪任するが如し。是の如く阿奇舍那、若し聖弟子如來に隨ひて住して移動せざれば、彼その時に於て則ち能く飢渴・寒熱・蚊虻・蠅・蚤・風日の逼る所を堪忍し惡聲捶杖亦能くこれを忍び、身諸の疾に遇ひ極めて苦痛を爲し命絕えんと欲するに至るも、諸の不可樂皆能

その時に於て刀・楯・矟・鉾・戟・斧・鉞、喚呼高聲を忍び、若し螺を嘯吹し鼓を撃ち鐘を椎つも、皆能く堪忍す。若し彼の野象能く堪忍すれば、彼その時に於て調御し善く調御し上調御を得、最上調御・上速疾・無上速疾を得て王乘に中り[二]王廩を受食し王象と稱說すべし。是の如く阿奇舍那若し時に如來世に出で無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛衆祐と號し、彼この世・天及び魔・梵・沙門・梵志に於て人より天に至るまで、自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊び、彼法を說きて初め妙・中ごろ妙・竟り亦妙にして義有り文有り具足し淸淨にして梵行を顯現す。彼の說く所の法を居士の子聞き、居士の子聞き已りて如來所說の法を信ずるを得、彼信を得已りて鬚髮を剃除し袈裟衣を著け至信に家を捨て家無くして學道す。阿奇舍那、その時聖弟子出でゝ露地に在り。猶ほ王の野象のごとし。是の野象貪欲樂著すれば、林中に在りと謂ふが如く、阿奇舍那、是の如く天及び人貪欲樂著すれば、五欲色聲香味觸に在りと謂ふ。如來初始めて彼の比丘を御し、汝當に身及び命淸淨を護るべし。當に口意及び命淸淨を護るべしと。若し聖弟子身及び命淸淨を護り、口意及び命淸淨を護れば、如來また比丘を調御し、[三]汝當に內身を觀じて身の如く、乃至覺・心・法を觀じて「覺・心・」法の如くなるべしと。若し聖弟子內身を觀じて身の如く、乃至覺・心・法を觀じて「覺・心・」法の如くなれば、この四念處謂く賢聖弟子の心中に在りてその心を繫縛し家を樂ふ意を制し家の欲念を除き家の疲勞を止め、正法を樂ひ聖戒を修習せしむ。阿奇舍那、猶ほ調象師刹利頂生王の敎を受け已りて極大の杖を持ちて右肩上に著け野象の所に往き、杖を以て地に著け、野象の頸に繫ぎて野を樂ふ意を制し野の欲念を除き野の疲勞を止め、村邑を樂ひ人間に習愛せしむるがごとし。是の如く阿奇舍那、この四念處、謂く賢聖弟子の心中に在りてその心を繫縛し家を樂ふ意を制し家の欲念を除き家の疲勞を止め、正法を樂ひ聖戒を修習せしむ。若し聖弟子內身を觀じて身の如く、乃至覺・心・法を觀じて「覺・心・」法の如くなれば、彼の如來また更に比丘を調御し、汝

【二】受食王廩（Rājabhog-gā）。王の扶持米を受くるの意、Lord Chalmers は巴利語を 'a prize to his royal master' と譯す、「王の富」、「王の受用するもの」の意。

【三】四念處に就ては八卷「阿修羅經」本文及び註〔一〇〕を見よ。

を斷じ、欲知無く欲見無く欲覺無きは、この地王童子知らんは、見んは終にこの處無し。阿奇舍那、昔は[九]剎利頂生王に[一〇]捕象師有りき。王之に告げて曰く、汝捕象師、我が爲に野象を捕取し將來し、得已らば我に白せと。時に捕象師王の教を受け已りて卽ち王象に乘り野林中に往きぬ。彼の捕象師野林中に在りて大野象を見、見已りて捉へて王象の項に繫著しぬ。彼の時王象、野象を將ゐて出でゝ露地に在り。彼の捕象師還りて剎利頂生王の所に詣り白して曰く、天王、已に野象を得て露地に繫在しぬ。天王の意に隨ひたまへと。剎利頂生王聞き已りて告げて曰く、善調象師、汝今速にこの野象を調し、伏して善調象たらしむべし。善調し已らば還り來りて我に白せと。こゝに於て善調象師王の教を受け已りて極大の杖を持ちて右肩上に著け、野象の所に往き杖を以て地に著け、野象の項を繫ぎて野を樂ふの意を制し野の欲念を除き野の疲勞を止め、村邑を樂ひ人間に習愛せしめ、善調象師先づ飮食を與へぬ。阿奇舍那、若し彼の野象調象師より初めて飮食を受くれば、善調象師すなはちこの念を作す、今この野象必ず生活するを得ん。所以者何。この野大象初より飮食を受くと。若し彼の野象調象師より初めて飮食を受くれば、善調象師則ち柔軟可愛の言を以て向ひ、臥起・去來・取捨・屈申す。若し彼の野象調象師よりして則ち柔軟可愛の言を以て向はれ、臥起・去來、取捨屈申すれば、是の如くして野象調象師の教に隨ふ。阿奇舍那、若し彼の野象調象師よりして教を受くれば、善調象師則ち前の兩脚・後脚・兩髀・兩脇・尾脊・頭額・耳牙を縛し及びその鼻を縛し、人をして鉤を捉へてその頭上に騎らしめ、衆多の人をして刀・楯・矟・鉾・戟・斧・鉞を持ちて而も前に在りて立たしめ、善調象師手に鋒鉾を執り野象の前に在りて而もこの語を作す、我今汝を治して移動せざらしめ、汝を治して動搖すること勿らしむと。若し彼の野象調象師の治に從ひて移動せざる時、前脚を擧げず亦後脚を動かさず兩髀・兩脇・尾脊・頭額・耳牙及び鼻皆動搖せず。是の如くして野象調象師に隨ひて住して移動せず、阿奇舍那、若し彼の野象調象師に隨ひて移動せされば、彼

【九】野象柔調の話。
【一〇】捕象師(Nāgavanika)。

じ欲に著し欲愛の爲に食はれ、欲の爲に燒かれ、若し地欲を斷じ欲愛を斷じ、欲煩熱を斷じ、欲知無く欲見無く傳覺無きは、この地王童子知らんは、見んは、終にこの處無し。所以者何。阿奇舍那、王童子耆婆先那常に欲を行ず。阿奇舍那、[七]猶ほ四調御・象調御・馬調御・牛調御・人調御のごとし。中に於て二調御、調御すべからず、二調御、御調御すべし。阿奇舍那意に於て云何。若しこの二調御、調御すべからざるもの、この未調・未調地・未調御・御事を受けんは、終にこの處無し。若しこの二調御・調御し善く調御すべきもの、この調未・調地御・御事を受けんは、必ずこの處有り。是の如くこれ阿奇舍那止むるも、王童子耆婆先那云何が得ん。欲を行じ欲に著し欲愛の爲に食はれ欲の爲に燒かれ、若し地欲を斷じ欲愛を斷じ欲煩熱を斷じ、欲知無く欲見無く欲覺無きは、この地王童子知らんは、見んは、終にこの處無し。所以者何。阿奇舍那、王童子耆婆先那常に欲を行ず。阿奇舍那、[八]猶ほ村を去ること遠からずして大石山有るがごとし。缺無く穿無く實にして而も虛ならず、堅固不動にして都合して一と爲る。或は二人有り、正に見んと欲する者、彼の中の一人速疾く山に上り、第二人の者山下に依住す。石山上の人石山の邊に好き平地・園觀・林木・清泉・華池・長流・河水有るを見、山上の人見已りて山下の人に語ぐ、汝山の邊に好き平地・園觀・林木・清泉・華池・長流・河水有るを見るやと。山下の人答へて曰く、若し我山を見るに彼の邊に好き平地・園觀・林木・清泉・華池・長流・河水有らんは、終にこの處無しと。こゝに於て石山上の人疾に疾に來下し山下の人を捉へ速疾く將ゐて石山上に上り到り已りて問ひて曰く、汝山の邊に好き平地・園觀・林木・清泉・華池・長流・河水有るを見るやと。彼の人答へて曰く、今始めて見ると。また彼の人に問ひて曰く、汝本見ると言はんは終にこの處無し。今また見ると言ふは何の謂と爲すやと。彼の人答へて曰く、我本山の障礙する所と爲るが故に見ざりしのみと。是の如く阿奇舍那止むるも、王童子耆婆先那云何が得ん。欲を行じ欲に著し欲愛の爲に食はれ欲の爲に燒かれ、若し地欲を斷じ欲愛を斷じ欲煩熱

【七】四調御の喩。

【八】石山上人下人の喩。

夷那和提の所に至り共に相問訊し却きて一面に坐し語げて曰く『[四]賢者阿奇舍那、問ふ所有らんと欲す。我が問を聽すや。』沙彌阿夷那和提告げて曰く『賢王童子、問はんと欲せばすなはち問へ。我聞きて當に思ふべし。』王童子問ひて曰く『阿奇舍那、實に比丘この法律中に不放逸にして行じ精勤して[五]一心を得るや。』沙彌答へて曰く『賢王童子、實に比丘この法律中に不放逸にして行じ精勤して一心を得。』王童子また問ひて曰く『賢者阿奇舍那、汝當に[六]聞く所に隨ひ、汝誦習する所に隨ふ者盡く我に向ひて、比丘この法律中に不放逸にして行じ精勤して一心を得[と謂ふ]が如く說くべし。』沙彌答へて曰く『賢王童子、我聞く所の法に隨ひ誦習する所に隨ひ廣く汝に向ひて、比丘この法律中に不放逸にして行じ精勤して一心を得[と謂ふ]が如く說くに堪任せず。賢王童子、若し我聞く所の法に隨ひ誦習する所に隨ひて賢王童子に向ひ、比丘この法律中に不放逸にして行じ精勤して一心を得[と謂ふ]が如く說かば、或は賢王童子知らざらん。是の如くして我唐しく煩勞せん。』王童子沙彌に語げて曰く『賢者、阿奇舍那、汝未だ他の爲に伏せられず。何の意を以ての故に而も自ら退くや。賢者阿奇舍那、聞く所の法に隨ひ誦習する所に隨ふが如く、我に向ひて、比丘この法律中に不放逸にして行じ精勤して一心を得[と謂ふ]が如く說くべし。若し我知らば善と爲し、若し我知らざれば我すなはちまた更に諸の法を問はず。』こゝに於て沙彌阿夷那和提聞く所の法に隨ひ誦習する所に隨ひ童子耆婆先那に向ひて、比丘この法律中に不放逸にして行じ精勤して一心を得[と謂ふ]が如く說きぬ。こゝに於て王童子耆婆先那語げて曰く『賢者阿奇舍那、若し比丘この法律中に不放逸にして行じ精勤して一心を得んは、終にこの處無し。』この處無しと說き已りて卽ち坐より起ち辭せずして而も去りぬ。王童子耆婆先那去りて後久しからず。こゝに於て沙彌阿夷那和提佛の所に往詣し稽首して禮を作し却きて一面に坐し、王童子耆婆先那と共に論ぜし所の者、盡く佛に向ひて說きぬ。世尊聞き已りて沙彌に告げて曰はく『阿奇舍那止むるも王童子耆婆先那云何が得ん。欲を行

【四】賢者阿奇舍那(Bho Aggivessana)。沙彌阿夷那和提と同一なることを記憶せよ。

【五】一心(Cittassa ekaggatā)。心一境性なり。

【六】隨所聞、隨所誦習(Yathāsutaṃ yathāpariyattaṃ)。「聞きたる通り、學びたる通りに。」

慢を行ずべきを而も治し應に治すべきに而も不慢を行ぜば、これ不如法の業、不如律の業にして衆亦罪有り。優婆離、若し比丘衆共に和合し、所作業に隨ひて即ちこの業を說けば、これ如法の業、如律の業にして衆亦罪無し。優婆離、若し比丘衆共に和合し、應に面前律を與ふべきは即ち面前律を與へ、應に憶律を與ふべきは即ち憶律を與へ、應に不癡律を與ふべきは即ち不癡律を與へ、應に自發露律を與ふべきは即ち自發露律を與へ、應に君律を與ふべきは即ち君律を與へ、應に責數すべきは即ち責數し、應に下置すべきは即ち下置し、應に擧すべきは即ち擧し、應に擯すべきは即ち擯し、應に憶すべきは即ち憶し、應に根本より治すべきは即ち根本より治し、應に驅出すべきは即ち驅出し、應に不慢を行ずべきは即ち不慢を行じ、應に治すべきは即ち治せば、これ如法の業、如律の業にして衆亦罪無し。優婆離、汝當に所作業に隨ひて即ちこの業を說くを學すべし。應に面前律を與ふべきは即ち面前律を與へ、應に憶律を與ふべきは即ち憶律を與へ、應に不癡律を與ふべきは即ち不癡律を與へ、應に自發露律を與ふべきは即ち自發露律を與へ、應に君律を與ふべきは即ち君律を與へ、應に責數すべきは即ち責數し、應に下置すべきは即ち下置し、應に擧すべきは即ち擧し、應に擯すべきは即ち擯し、應に憶すべきは即ち憶し、應に根本より治すべきは即ち根本より治し、應に驅出すべきは即ち驅出し、應に不慢を行ずべきは即ち不慢を行じ、應に治すべきは即ち治する者、優婆離、汝當に是の如く學すべし。』佛說是の如し。尊者優婆離及び諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

[一] 百九十八、調御地經第七

我が聞きしこと是の如し。ある時佛王舍城に遊び竹林迦蘭陀園に在しぬ。その時[二]沙彌阿夷那和提亦王舍城に遊び無事處に在りて禪屋中に住しぬ。彼の時王の[三]童子耆婆先那中後に彷徉し沙彌阿

【一】 M. 125, Dantabhūmi-sutta.
【二】 沙彌阿夷那和提 (Aciravato samaṇuddesa)。
【三】 童子耆婆先那(Jayasena rājakumāra)。

和合し、應に面前律を與ふべきに而も憶律を與へ、應に憶律を與ふべきに而も面前律を與ふれば、これ不如法の業、不如律の業にして衆亦罪有り、優婆離、若し比丘衆共に和合し、應に憶律を與ふべきに而も不癡律を與へ、應に不癡律を與ふべきに而も憶律を與ふれば、これ不如法の業、不如律の業にして衆亦罪有り。優婆離、若し比丘衆共に和合し、應に不癡律を與ふべきに而も自發露律を與へ、應に自發露律を與ふべきに而も不癡律を與ふれば、これ不如法の業、不如律の業にして衆亦罪有り。優婆離、若し比丘衆共に和合し、應に自發露律を與ふべきに而も君律を與へ、應に君律を與ふべきに而も自發露律を與ふれば、これ不如法の業、不如律の業にして衆亦罪有り。優婆離、若し比丘衆共に和合し、應に君律を與ふべきを而も責數し、應に責數すべきに而も君律を與ふれば、これ不如法の業、不如律の業にして衆亦罪有り。優婆離、若し比丘衆共に和合し、應に責數すべきを而も下置し、應に下置すべきを而も責數すれば、これ不如法の業、不如律の業にして衆亦罪有り優婆離、若し比丘衆共に和合し、應に下置すべきを而も擧し、應に擧すべきを而も下置すれば、これ不如法の業、不如律の業にして衆亦罪有り。優婆離、若し比丘衆共に和合し、應に擧すべきを而も擯し、應に擯すべきを而も擧すれば、これ不如法の業、不如律の業にして衆亦罪有り。優婆離、若し比丘衆共に和合し、應に擯すべきに而も憶[律]を與へ、應に憶[律]を與ふべきを而も擯せば、これ不如法の業、不如律の業にして衆亦罪有り。優婆離、若し比丘衆共に和合し、應に憶[律]を與ふべきを而も根本より治し、應に根本より治すべきに而も憶[律]を與ふれば、これ不如法の業、不如律の業にして衆亦罪有り。優婆離、若し比丘衆共に和合し、應に根本より治すべきを、而も驅出し、應に驅出すべきを而も根本より治すれば、これ不如法の業、不如律の業にして衆亦罪有り。優婆離、若し比丘衆共に和合し、應に驅出すべきに而も不慢を行じ、應に不慢を行ずべきを而も驅出せば、これ不如法の業、不如律の業にして衆亦罪有り。優婆離、若し比丘衆共に和合し、應に不

衆共に和合し、應に君[律]を與ふべき者を而も[一二]責數し、應に責數すべき者に而も君[律]を與ふれば、これ如法の業、如律の業なりや。』世尊答へて曰はく『不なり優婆離。』尊者優婆離また問ひて曰く『世尊、若し比丘衆共に和合し、應に責數すべき者を而も[一三]下置し、應に下置すべき者を而も責數すれば、これ如法の業、如律の業なりや。』世尊答へて曰はく『不なり優婆離。』尊者優婆離また問ひて曰く『世尊、若し比丘衆共に和合し、應に下置すべき者を而も擧し、應に[一四]擧すべき者を而も下置すれば、これ如法の業、如律の業なりや。』世尊答へて曰はく『不なり優婆離。』尊者優婆離また問ひて曰く『世尊、若し比丘衆共に和合し、應に擧すべき者を而も[一五]擯し、應に擯すべき者を而も擧すれば、これ如法の業、如律の業なりや。』世尊答へて曰はく『不なり優婆離。』尊者優婆離また問ひて曰く『世尊、若し比丘衆共に和合し、應に擯すべき者に而も憶[律]を與へ、應に憶[律]を與ふべき者を而も擯すれば、これ如法の業、如律の業なりや。』世尊答へて曰はく『不なり優婆離。』尊者優婆離また問ひて曰く『世尊、若し比丘衆共に和合し、應に憶[律]を與ふべき者を而も[一六]根本より治し、應に根本より治すべき者に而も憶[律]を與ふれば、これ如法の業、如律の業なりや。』世尊答へて曰はく『不なり優婆離。』尊者優婆離また問ひて曰く『世尊、若し比丘衆共に和合し、應に根本より治すべき者を而も[一七]驅出し、應に驅出すべき者を而も根本より治せば、これ如法の業、如律の業なりや。』世尊答へて曰はく『不なり優婆離。』世尊優婆離また問ひて曰く『世尊、若し比丘衆共に和合し、應に驅出すべき者に而も[一八]不慢を行じ、應に不慢を行ずべき者を而も驅出すれば、これ如法の業、如律の業なりや。』世尊答へて曰はく『不なり優婆離。』世尊優婆離また問ひて曰く『世尊、若し比丘衆共に和合し、應に不慢を行ずべき者を而も[一九]治し應に治すべき者に而も不慢を行ぜば、これ如法の業、如律の業なりや。』世尊答へて曰はく『不なり優婆離。』優婆離、若し比丘衆共に和合し、異業を作し異業を說かば、これ不如法の業、不如律の業にして衆亦罪有り。優婆離、若し比丘衆共に

【一二】 責數(Tajjaniya)=呵責(四分律)。

【一三】 下置(Nissaya)=依止(四分律)。

【一四】 擧(Ukkhepaniya)。

【一五】 擯(Pabbājaniya)=擯出、擯罰、驅遣。

【一六】 從根本治(Mūlāya paṭikassana)=本日治(四分律)。

【一七】 驅出(Parivāsa)=波利婆沙(四分律)。

【一八】 不慢(Mānatta)=摩那埵(四分律)。

【一九】 治(Abbhāna)=阿浮訶那(四分律)。

阿難、我向に說く所の六慰勞法とは、これに因るが故に說く。阿難、若し汝等この六諍の本正に絕斷すれば、及びこの七止諍、衆中鬪諍を起すも如棄糞掃止諍律を以て止むれば、またこの六慰勞法を行ずれば、阿難是の如く汝等去りて後に於て共同し和合し歡喜して諍はず、一心を同一にし一教を同一にし水乳を合一し快樂にして遊行して我が在る時の如くならん。』佛說是の如し。尊者阿難及び諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百九十七、[一]優婆離經第六

我が聞きしこと是の如し。ある時佛[二]瞻波に遊び[三]恒伽池岸に在しぬ。その時[四]尊者優婆離則ち晡時に於て燕坐より起ち佛の所に往詣し佛足に稽首し却きて一面に坐し白して曰く『世尊、若し比丘衆[五]共に和合して異業を作し異業を說かば、これ[六]如法の業、如律の業なりや。』世尊答へて曰はく『不なり優婆離。』尊者優婆離、また問ひて曰く『世尊、若し比丘衆共に和合し、應に[七]面前律を與ふべき者に而も[八]憶律を與へ、應に憶律を與ふべき者に而も面前律を與ふれば、これ如法の業、如律の業なりや。』世尊答へて曰はく『不なり優婆離。』尊者優婆離また問ひて曰く『世尊、若し比丘衆共に和合し、應に憶律を與ふべき者に而も[九]不癡律を與へ、應に不癡律を與ふべき者に而も憶律を與ふれば、これ如法の業、如律の業なりや。』世尊答へて云はく『不なり優婆離。』尊者優婆離また問ひて曰く『世尊、若し比丘衆共に和合し、應に不癡律を與ふべき者に而も[一〇]自發露律を與へ、應に自發露律を與ふべき者に而も不癡律を與ふれば、これ如法の業、如律の業なりや。』世尊答へて曰はく『不なり優婆離。』尊者優婆離また問ひて曰く『世尊、若し比丘衆共に和合し、應に自發露律を與ふべき者に而も[一一]君律を與へ、應に君律を與ふべき者に而も自發露律を與ふれば、これ如法の業、如律の業なりや。』尊者答へて曰はく『不なり優婆離。』尊者優婆離また問ひて曰く『世尊、若し比丘

【一】Mahāvagga, IX. 6, 1—8.「四分律」四四卷。
【二】瞻波(Campā)。占波。
【三】恒伽池(Gaggarā)。蓮池。
【四】尊者優婆離(Āyasmā Upāli)
【五】共和合(Samaggā)。
【六】如法業、如律業、法と律とに適へる羯磨作法なりや。
【七】面前律＝現前毘尼(四分律)。
【八】憶律＝憶念毘尼(四分律)。
【九】不癡律＝(四分律)。
【一〇】自發露律＝自言治(四分律)。
【一一】君律＝作多覓罪(四分律)。

到り已りて稽首して長老上尊比丘の足を禮し、長跪叉手して長老上尊比丘に白して曰ふべし、『諸尊、我等道無く理無く我等惡不善なるを聽したまへ。所以者何。我等この善説の法律に於て至信に家を捨て家無くして學道し、鬪訟憎嫉して相憎み共に諍ふ。諸賢、この諍に因りて我等戒を犯せば、偸羅柘を除き家相應を除く、我自ら己の爲、亦彼の諸賢の爲の故に今長老上尊に向ひ至心もて發露し自ら説き顯示して敢へて覆藏せず、更に善く護持して後また作さゞらんと。阿難、彼の比丘當にこの比丘に語げて曰ふべし、賢者、汝自ら戒を犯すを見るやと。彼應に答へて曰ふべし、實に自ら犯す所を見ると。彼當にこれに語ぐべし、更に善く護持してまた作すこと莫れと。第二部亦復是の如し。阿難、これを應與如棄糞掃止諍律と謂ひ、是の如くしてこの諍を斷ずるに謂く、如棄糞掃止諍律に因るなり。阿難、我今汝が爲に[一七]六慰勞法を説かん。諦に聽け、諦に聽きて、善く之を思念せよ。』尊者阿難白して曰く『唯然り。當に教を受けて聽くべし。』佛言はく『云何が六と爲す。(1)慈身業もて諸の梵行に向ふ。この法慰勞法にして愛法樂法なり。愛せしめ重んぜしめ奉せしめ敬せしめ修せしめ、攝せしめ、沙門を得、一心を得、精進を得、涅槃を得。(2)慈口業、(3)慈意業もて「諸の梵行に向ふ」。(4)若し法利如法に得、自ら得る所の飯食鉢中に在るに至り、是の如き利分ちて諸の梵行に布施す。この法慰勞法にして愛法樂法なり、愛せしめ重んぜしめ奉せしめ敬せしめ修せしめ攝せしめ、沙門を得、一心を得、精進を得、涅槃を得。(5)若し戒有りて缺かず穿たず、穢無く、黑無く、地の如くにして他に隨はず、聖[者]の稱譽する所具足し善く受持し、是の如き戒分ちて諸の梵行に布施すれば、この法慰勞法にして愛法樂法なり、愛せしめ重んぜしめ奉せしめ敬せしめ修せしめ攝せしめ、沙門を得、一心を得、精進を得、涅槃を得。(6)若し聖見出要有りて明見深達し、能く正に苦を盡くし、是の如き見分ちて諸の梵行に布施すれば、この法慰勞法にして愛法樂法なり、愛せしめ重んぜしめ奉せしめ敬せしめ修せしめ攝せしめ、沙門を得、一心を得精進を得、涅槃を得。

【一七】　六慰勞法(Cha sārāṇiyā dhammā)。

く、云何がこの諍を斷ずるに、謂く展轉止諍律に因るや。阿難、二比丘有り、その中間に於て若干意に諍を起し謂く、これ法なり法に非ず、これ律たり律に非ず、これ犯なり犯に非ずとし、或は輕しとし或は重しとし、說くべしとし說くべからずとし、護るべしとし護るべからずとし、餘有りとし餘無しとし、悔ゆべしとし悔ゆべからずとす。阿難、彼の比丘猥處にこの諍を止む。若し猥處に止むれば、この諍當に止むと言ふべし。若し猥處に止まざれば、この諍衆に白すべし。若し衆中に於て止むれば、この諍當に止むと言ふべし。若し衆中に於て止まざれば、阿難、相近く住する者、中に於て若し比丘經を持し律を持し【一四】母を持する者有れば、この比丘共に彼に往至しこの諍事を說き、若し道路に在りて止むれば、この諍當に止むと言ふべし。若し道路に止まざれば、この諍當にまた衆に向ひて說くべし。若し衆に在りて止むれば、この諍當に止むと言ふべし。若し衆に在りて止まざれば、阿難、若し伴助多き者、經を持し律を持し母を持すれば、彼の比丘應にこの諍を止め、法を以て律を以て尊師の敎の如くして面前に歡喜せしむべし。阿難、これを應與展轉止諍律と謂ひ、是の如くしてこの諍を斷ずるに、謂く展轉止諍律に因るなり。阿難、(7)云何が應に如棄糞掃止諍律を與ふべく、云何がこの諍を斷ずるに、謂く如棄糞掃止諍律に因るや。阿難、若し住處有り、諸の比丘衆鬪訟憎嫉して相憎み共に諍ふ。阿難、彼の諸の比丘二部を分立す。二部を分立し已りて若し一部中に於て長老上尊の者有り、或は次者有り、宗主者有り、或は次者有れば、阿難、この比丘彼の比丘に語げて曰く、諸賢、我等道無く理無く我等惡不善なるを聽せ。所以者何。我等この善說の法律に於て至信に家を捨て家無くして學道し、鬪訟憎嫉して相憎み共に諍ふ。諸賢、この諍に因りて我等戒を犯せば、【一五】偸羅柘を除き【一六】家相應を除く。我自ら己の爲、亦彼の諸賢の爲の故に、今[諸]賢に向ひ至心もて發露し自ら說き顯示して敢へて覆藏せず、更に善く護持して後また作さざらんと。阿難、若しこの部中一比丘の應ずる者無ければ、阿難、この比丘應に彼の第二部に往至し、

【一四】母(Mātikā)、施護譯「摩怛里迦。」

(7)如棄糞掃止諍律(Ukkhopaniya)。施護譯「如草覆地」(Tiṇavitthāraka)。

【一五】偸羅柘(Thullavajja)。重罪なり。
【一六】家相應(Gihipaṭisaṃyutta)。

り、應に不癡律を與へ、法を以て律を以て尊師の教の如くして面前に歡喜せしむべし。阿難、これを應與不癡止諍律と謂ひ、是の如くしてこの諍を斷ずるに、謂く不癡止諍律に因るなり。阿難、(4)云何が應に自發露止諍律を與ふべく、云何がこの諍を斷ずるに、謂く自發露止諍律に因るや。阿難、若し一人有り、戒を犯し、或は語る者有り或は語らざる者あり、或は憶する者有り、或は憶せざる者あり。阿難、若し處に衆和して集會する者有れば、彼の比丘應に詣りて偏に著衣を袒ぎ屣を脫ぎ衆に入りて稽首して長老上尊比丘の足を禮し、長跪叉手して長老上尊比丘に白して曰ふべし。諸尊、我某戒を犯せるを聽したまへ。我今長老上尊比丘に向ひて至心に發露し自ら說き顯示し敢へて覆藏せず。更に善く護持して後また作さざらんと。阿難、諸の比丘衆當に彼の比丘に問ひて曰ふべし、賢者、自ら犯す所を見るやと。彼應に答へて曰ふべし、實に自ら犯す所を見ると。衆當に彼に語ぐべし、更に善く護持してまた作すこと莫れと。阿難、これを應與自發露止諍律と謂ひ、是の如くしてこの諍を斷ずるに、謂く自發露止諍律に因るなり。阿難、(5)云何が應に君止諍律を與ふべく、云何がこの諍を斷ずるに、謂く與君止諍律に因るや。阿難、若し一人有り、羞恥を知らず見聞を悔いず、他の疑者惡欲に從ひ、彼を犯し已りて一處知と稱し已りて一處見と稱し、一處知と稱し已りて一處見と稱し、一處見と稱し已りて一處知と稱し、衆中に在りて一處知と稱し、衆中に在りて一處見と稱し、一處知と稱し已りて一處見と稱し、一處見と稱し已りて一處知と稱す。阿難、彼の比丘の爲の故に衆共に和し集まり應に君律を與ふべし、君道無く理無く、君惡にして不善なり。所以者何。謂く、君戒を犯し已りて一處知と稱し一處見と稱し、一處知と稱し已りて一處見と稱し、一處見と稱し已りて一處知と稱し、衆中に在りて一處知と稱し、衆中に在りて一處見と稱し、一處知と稱し已りて一處見と稱し、一處見と稱し已りて一處知と稱すと。阿難、これを應與君止諍律と謂ひ、是の如くしてこの諍を斷ずるに、謂く與君止諍律に因るなり。阿難、(6)云何が應に展轉止諍律を與ふべ

(4)自發露止諍律(Patiññāya kāretabbam)。施護譯「自言治。」

(5)君止諍律(Tassapāpiyasikā)。兩勢經には「居」(Nissaya)。

(6)展轉止諍律(Yebhuyyasikā)、

面前に歡喜せしむ。阿難、これを應與面前止諍律と謂ひ、是の如くしてこの諍を斷ずるに、謂く面前止諍律に因るなり。阿難、(2)云何が應に憶止諍律を與ふべし、云何がこの諍を斷ずるに、謂く憶止諍律に因るや。阿難、若し一人有り、戒を犯して而も憶せず。諸の比丘見已りてすなはち彼に語げて曰く、汝曾て戒を犯し而も自ら憶せず。汝應に衆に從ひて憶律を求むべし。衆當に共に賢者に憶律を與ふべしと。阿難、若し處に衆和し集會する者有れば、彼の比丘應に詣りて偏に著衣を袒ぎ屣を脫ぎ衆に入り、稽首して長老上尊比丘の足を禮し長跪叉手して長老上尊比丘に白して曰ふべし、諸尊、我曾て戒を犯して而も憶せざるを聽したまへ。我今衆に從ひて憶律を求む。願はくは衆和合して我に憶律を與へたまへと。阿難、彼の比丘の爲の故に衆共に和して集まり、應に憶律を與へ、法を以て律を以て尊師の敎の如くして面前に歡喜せしむべし。阿難、これを應與憶止諍律と謂ひ、是の如くしてこの諍を斷ずるに、謂く憶止諍律に因るなり。阿難、(3)云何が應に不癡止諍律を與ふべく、云何がこの諍を斷ずるに、謂く不癡止諍律に因るや。阿難、若し一人有り、狂發して而も心顚倒す。彼狂發して心顚倒し已りて不淨行多く沙門の法に非ず、法行に順はずして而も違犯を說く。彼後時に於て還た本心を得。諸の比丘見已りてすなはち彼に語げて曰く、汝曾て狂發して而も心顚倒し、狂發し心顚倒し已りて不淨行多く沙門の法に非ず、法行に順はずして而も違犯を說きぬ。賢者後に於て還た本心を得ぬ。賢者衆に從ひて不癡律を求むべし。衆當に共に賢者に不癡律を與ふべし。阿難、若し處に衆和して集會する者有れば、彼の比丘應に詣りて偏に著衣を袒ぎ屣を脫ぎ衆に入りて稽首して長老上尊比丘の足を禮し、長跪叉手して長老上尊比丘に白して曰ふべし、諸尊、我曾て狂發して而も心顚倒し、狂發して心顚倒し已りて不淨行多く沙門の法に非ず、法行に順はずして而も違犯を說けるを聽したまへ。我後時に於て還た本心を得ぬ。我今衆に從ひて不癡律を求む。願はくは衆和合して我に不癡律を與へたまへと。阿難、彼の比丘の爲の故に衆共に和し集ま

(2)憶止諍律(Sativinaya)。施護譯「憶念毘尼。」

(3)不癡止諍律(Amūḷhavinaya)。施護譯「不癡毘尼。」

天人極苦患を生ず。阿難、是の如き鬪諍、汝內外見に於て而も盡きざれば、この諍を斷ずるが爲の故に、汝當に速に方便を求め學して極めて精勤し、正念正智にして忍びて退かしむることを莫るべし。阿難、猶ほ人火の爲に頭を燒き衣を燒けば、急に方便を求め頭を救ひ衣を救ふがごとし。是の如く鬪諍、汝內外見に於て而も盡きざれば、この諍を斷ぜんが爲の故に、汝當に速に方便を求め學して極めて精勤し、正念正智にして忍びて退かしむること莫るべし。阿難、是の如き鬪諍、汝內外見に於て盡くれば、汝當に彼の心を重護し常に放逸無からしむべし。この諍を止めんと欲するが故に。是の如くしてこの諍、汝根本を斷ぜん。阿難、猶ほ人火の爲に頭を燒き衣を燒けば、急に方便を求め頭を救ひ衣を救ふがごとし。是の如く鬪諍、汝內外見に於て盡くれば、汝當に彼の心を重護し、常に放逸無からしむべし。この諍を止めんと欲するが故に。是の如くしてこの諍、汝根本を斷ぜん。また次に阿難、[三]七止諍有り。一には應に面前止諍律を與ふべし。二には應に憶止諍律を與ふべし。三には應に不癡止諍律を與ふべし。四には應に自發露止諍律を與ふべし。五には應に君止諍律を與ふべし。六には應に展轉止諍律を與ふべし。七には應に如棄糞掃止諍律を與ふべし。阿難、

(1)云何が應に面前止諍律を與ふべく、云何がこの諍を斷ずるに、謂く面前止諍律に因るや。阿難、一人の者は一人敎訶し護るに法律を以てし尊師の敎の如くして面前に歡喜せしめ、一人の者は二人、一人の者は多人、一人の者は衆敎訶し護るに法律を以てし尊師の敎の如くして面前に歡喜せしむ。二人の者は二人敎訶し護るに法律を以てし尊師の敎の如くして面前に歡喜せしめ、二人の者は多人、二人の者は衆、二人の者は一人敎訶し護るに法律を以てし尊師の敎の如くして面前に歡喜せしむ。多人の者は衆、多人の者は一人、多人の者は二人敎訶し護るに法律を以てし尊師の敎の如くして面前に歡喜せしむ。衆の者は衆敎訶し護るに法律を以てし尊師の敎の如くして面前に歡喜せしめ、衆の者は一人、衆の者は二人、衆の者は多人敎訶し護るに法律を以てし尊師の敎の如くして

【三】七止諍(Satta adhikaraṇa-samathā)。三五卷「雨勢經」に出づ。

(1)面前止諍律(Sammukhā-vinaya)。施護譯「現前毘尼。」

諍本を搆設し、謂く聞きて而も止むべし。』こゝに於て尊者阿難、叉手を佛に向け白して曰く『世尊、今正にこの時なり。善逝、今正にこの時なり。若し世尊諸の比丘の爲に六諍本を說きたまはゞ、諸の比丘世尊に從ひて聞き當に善く受持すべし。』世尊告げて曰はく『阿難、諦に聽け、善く之を思念せよ。我當に汝が爲に具さに分別して說くべし。』尊者阿難白して曰く『唯然り。當に教を受けて聽くべし。』佛言はく『阿難、或は一人有り、[10]瞋惱者にして纒を[11]結ぶ。阿難、謂く人瞋惱者にして纒を結べば、彼師を敬せず法を見ず戒を護らず。彼師を敬せず法を見ず戒を護らずし已りてすなはち衆中に於て是の如き諍を起す。謂くこの鬪諍多人を益せず、多人[これによりて]苦有り、義に非ず饒益に非ず安隱快樂に非ず、乃至天人極苦患を生ず。阿難、是の如き鬪諍、汝內外見に於て而も盡きざれば、この諍を斷ずるが爲の故に、汝當に速に方便を求め學して極めて精勤し、正念正智にして忍びて退かしむることを莫るべし。阿難、猶ほ人火の爲に頭を燒き衣を燒けば急に方便を求めて頭を救ひ衣を救ふがごとし。是の如く鬪諍、汝內外見に於て而も盡きざれば、この諍を斷ずるが爲の故に、汝當に速に方便を求め學して極めて精勤し、正念正智にして忍びて退かしむることを莫るべし。阿難、是の如き鬪諍、汝內外見に於て盡くれば、汝當に彼の心を重護し、常に放逸無かるべし。この諍を止めんと欲するが故に。是の如くしてこの諍、汝根本を斷ず。阿難猶ほ人火の爲に頭を燒き衣を燒けば、急に方便を求め頭を救ひ衣を救ふがごとし。是の如き鬪諍、汝內外見に於て盡くれば、汝當に彼の心を重護し、常に放逸無かるべし。この諍を止めんと欲するが故に。是の如くしてこの諍、汝根本を斷ず。是の如く[12]不語・結・慳・嫉・諂・誑・無慚・無愧・惡欲・邪見にして惡性制すべからず。阿難、若し一人有りて惡欲邪見にして惡性制すべからざれば、彼師を敬せず法を見ず戒を護らず。彼師を敬せず、法を見ず戒を護らずし已りてすなはち衆中に於て是の如き諍を起す。謂くこの鬪諍多人を益せず多人[これによりて]苦有り、義に非ず饒益に非ず安隱快樂に非ず、乃至

【一〇】瞋惱者(Kodhana)。忿の人。
【一一】結纒者(Upanāhi)。恨の人。

【一二】不語(Makkha)、
結(Palāsa)、
慳(Macchera)、
嫉(Issā)、
諂(Māyā)、
誑(Sātheyya)、
無慚(Ahiri)、
無愧(Anottappa)、
惡欲(Pāpiccha)、
邪見(Micchādiṭṭhi)。

壞して住無く依怙する所無し、彼の尊ぶ所の師亦如來・無所著・等正覺に非ずと。世尊、我これを聞き已りて恐怖驚懼し、擧身の毛竪ち、比丘をして世尊去りたまひて後而も衆中に在りて是の如き鬪諍を起すもの有らしむること莫れと。謂くこの鬪諍多人を益せず、多人[これによりて]苦有り、義に非ず、饒益に非ず安隱快樂に非ず、乃至天人極苦患を生ず。世尊、我一比丘世尊の前に坐し至心に世尊を敬重し善逝を善護したてまつるを見、世尊、我これを見已りてすなはちこの念を作す、若しこの比丘をして世尊去りたまひて後而も衆中に在りて是の如き鬪諍を起さしむれば、謂くこの鬪諍多人を益せず、多人[これによりて]苦有り、義に非ず饒益に非ず安隱快樂に非ず、乃至天人極苦患を生ずと。』こゝに於て世尊問ひて曰はく『阿難、汝何等か衆中に鬪諍有る者を見、謂くこの鬪諍多人を益せず、多人[これによりて]苦有り、義に非ず饒益に非ず安隱快樂に非ず、乃至天人極苦患を生ずと[爲すや。]』尊者阿難答へて曰く『世尊、謂く鬪諍有り、増上戒・増上心・増上觀に因りその衆中に於て生じて而も生ぜば、世尊、謂くこの鬪諍多人を益せず、多人[これによりて]苦有り、義に非ず饒益に非ず安隱快樂に非ず、乃至天人極苦患を生ず。』世尊告げて曰はく『阿難、この鬪諍甚だ少し、謂く增上戒・增上心・增上觀に因る。阿難、若し鬪諍有り、道に因り道迹に因りてその衆中に於て生じ而も生ぜば、阿難、謂くこの鬪諍多人を益せず、多人[これによりて]苦有り、義に非ず饒益に非ず安隱快樂に非ず。阿難、汝その中に二比丘有りて各々意を異にして而も鬪諍を起し、これ法なりこれ非法なり、これ律なりこれ非律なり、これ犯なりこれ犯に非ずとし、或は輕しとし或は重しとし、悔ゆべしとし悔ゆべからずとし、護るべしとし護るべからずとし、餘有りとし餘無しとし、起るとし起らずとするを見ば、阿難、意に於て云何。若し我が法衆、四念處・四正斷・四如意足・五根・五力・七覺支・八支聖道、自ら知り自ら覺り自ら作證するや。阿難、尼揵親子實に薩云若に非ずして而も自ら薩云若と稱す。阿難、若し尼揵親子一切知り一切見れば、彼弟子の爲めに[九]六

【七】四念處以下、八卷「阿修羅經」註[一〇]以下を見よ。
【八】薩云若(Sabbaññu)。一切智者の義。
【九】六諍本(Cha vivāda-mūlāni)。

相應し、汝相應せずして應に前を說くべくして而も後を說き、應に後を說くべくして而も前を說く。我勝り汝如かず。我汝に事を問ふも汝答ふること能はず。我已に汝を伏す。當にまた更に問ふべし。若し汝動かば我重ねて汝を縛せんと。更互に憍慠して但勝說を求め、而も訶する者無し。尼揵親子若し在家白衣の弟子有れば、彼皆この尼揵親子の諸の弟子等を厭患す。所以者何。その說く所惡法律なるを以ての故に。これ出要に非ず正覺に趣かず、亦善逝の所說に非ず。崩壞して住無く依怙する所無し。彼の尊ぶ所の師亦如來・無所著・等正覺に非ず。』尊者阿難聞き已りて語げて曰く『賢者周那、この說に因りて往きて佛を見、世尊に奉獻すべきを得ん。賢者周那、今共に佛に詣り、具さに世尊に向ひて而もこの事を說かん。儻し能くこれに因りて世尊に從ひて異法を聞くことを得ん。』こゝに於て尊者阿難沙彌周那と俱に佛に往詣し佛足に稽首し、尊者阿難却きて一面に住し、沙彌周那却きて一面に坐しぬ。尊者阿難白して曰く『世尊、今日沙彌周那我が所に來詣し我が所に稽首し却きて一面に坐しぬ。我問ひて曰く、賢者周那、何の所より來り何の處に夏坐せるやと。沙彌周那即ち我に答へて曰く、尊者阿難、我波和より來り波和中に於て而も夏坐を受けぬ。尊者阿難、彼の波和中に一尼揵有り名づけて親子と曰ひ、彼に在りて命終りぬ。終りて後久しからずして尼揵親子の諸の弟子等各々破壞し共に和合せず、各々破壞不和合の事を說き、鬪訟して相縛し相憎み共に諍ひ、我この法を知り汝知らず。汝何の法を知り我が知る所に如くや。我齊整し汝齊整せず。我相應し、汝相應せずして應に前を說くべくして而も後を說き、應に後を說くべくして而も前を說く。我勝り汝如かず。我汝に事を問ふも汝答ふること能はず。我已に汝を伏す。當にまた更に問ふべし。若し汝動かば我重ねて汝を縛せんと。更互に憍慠して但勝說を求め、而も訶する者無し。尼揵親子若し在家白衣の弟子有れば、彼皆この尼揵親子の諸の弟子等を厭患す。所以者何。その說く所惡法律たるを以ての故に。これ出要に非ず、正覺に趣かず、亦善逝の所說に非ず。崩

卷の第五十二

百九十六、[1]周那經第五

我が聞きしこと是の如し。ある時佛跋耆[2]に遊び　舍彌村[3]に在しぬ。その時　沙彌周那[4]彼の波和[5]中に於て而も夏坐を受けぬ。彼の波和中に一尼揵[6]有り名づけて親子と曰ひ、彼に在りて命終りぬ。終りて後久しからずして尼揵親子の諸の弟子等各々破壞して共に和合せず、各々破壞不和合の事を說き、鬪訟して相縛し相憎み共に諍ひ、我この法を知り、汝知らず、汝何の法を知りて我が知る所に如くや。我齊整し汝齊整せず。我相應し、汝相應せずして應に前を說くべくして而も後を說き、應に後を說くべくして而も前を說く。我勝り汝如かず。我汝に事を問ふも汝答ふること能はず、我已に汝を伏しぬ。當にまた更に問ふべし。若し汝動かば、我重ねて汝を縛せんと。更互に憍慠し但勝說を求めて而も訶する者無し。尼揵親子若し在家白衣の弟子有れば、彼皆この尼揵親子の諸の弟子等を厭患しぬ。所以者何。その說く所惡法律なるを以ての故に。これ出要に非ず正覺に趣かず、亦善逝の所說に非ず。崩壞して住無く依怙する所無し。彼の尊ぶ所の師亦如來無所著等正覺に非ず。こゝに於て沙彌周那夏坐を受け訖りて三月を過ぎ已り衣を補治し竟りて衣を攝り鉢を持し舍彌村に往き、舍彌の村北尸攝和林に往き、沙彌周那尊者阿難の所に往詣し、到り已りて足を禮し却きて一面に坐しぬ。尊者阿難問ひて曰く『賢者周那、何の所より來り何の處にて夏坐せるや。』沙彌周那答へて曰く『賢者阿難、我波和より來り、波和中に於て而も夏坐を受けぬ。尊者阿難、彼の波和中に一尼揵有り名づけて親子と曰ひ、彼に在りて命終りぬ。終りて後久しからずして尼揵親子の諸の弟子等各々破壞して共に和合せず、各々破壞不和合の事を說き、鬪訟して相縛し相憎み共に諍ひ、我この法を知り、汝知らず。汝何の法を知りて我が知る所に如くや。我齊整し汝齊整せず、我

【一】 M. 104, Sāmagāma-sutta.「息諍因緣經」(施護譯)。
【二】 跋耆。巴利文 Sakki 釋羈瘦。施護譯にては舍摩迦子聚落。
【三】 舍彌村(Sāmagāma)。
【四】 沙彌周那(Cunda samaṇuddesa) 沙門と決められたる周那、施護譯「沙門名曰尊那」。
【五】 波和(Pāvā)。
【六】 尼揵親子 (Nigaṇṭha Nātaputta)、尼乾陀惹提子は六師外道の一。三卷「踋破經」註[六]に出づ。

て法を知らん。』こゝに於て世尊すなはちこの念を作したまひぬ、この愚癡の人我を越過す。この正法律極大久遠なり。若し法律師有りて食に貪著し食を離れざれば、彼の弟子應に速に放逸を行ずべからず。況やまた我食に貪著せず食を遠離す。信弟子の者應に是の如く說くべし、世尊はこれ我が師なり、我はこれ世尊の弟子なり。世尊我が爲に法を說きたまひ、善逝我が爲に法を說きたまひ、我をして長夜に義を得饒益安隱快樂を得しめたまふと。彼の信弟子世尊の境界に於て多く所作有り、世尊の境界に於て多く饒益せられ、世尊の境界に於て多く所行有り、世尊の境界に入り世尊の境界に止まれば、若し東方に遊べば必ず安樂を得て衆の苦患無く、若し南方西方北方に遊べば必ず安樂を得て衆の苦患無し。若し信弟子世尊の境界に於て多く所作有り、世尊の境界に於て多く饒益せられ、世尊の境界に於て多く所行有り、世尊の境界に入り世尊の境界に止まれば、我尙諸の善法に住すと說かず、況や衰退すと說かんや。但當に晝夜に善法を增上して而も衰退せざるべし。若し信弟子世尊の境界に於て多く所知有り、世尊の境界に於て多く饒益せられ、世尊の境界に於て多く所行有り、世尊の境界に入り世尊の境界に止まれば、二果中に於て必ず一を得ん。[即ち]或は現世に於て究竟智を得、或はまた餘有りて阿那含を得ん。』佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

順住止を行じ、二果中に於て必ず一を得。[卽ち]或は現法に於て究竟智を得、若し餘有れば阿那含を得。謂く我この比丘無放逸を行じて是の如き果有るを見る。この故に我この比丘の爲に無放逸を行ずと說く。若し比丘有りて倶解脫に非ず慧解脫に非ず又身證に非ず復見到に非ず信解脫に非ず亦法行に非ずして而も信行有り。云何が比丘而も信行有りや。若し比丘有りて一向に決定して佛・法・衆を信じ所聞の法に隨ひ、慧を以て觀忍し、法行に如かず。是の如き比丘而も信行有り。この比丘我爲に無放逸を行ずと說く。我この比丘を見、無放逸を行じて何の果有りと爲し、我をしてこの比丘の爲に無放逸を行ずと說かしむるや。或はこの比丘諸根を求め善知識を習ひ、隨順住止を行じ、二果中に於て必ず一を得。[卽ち]或は現法に於て究竟智を得、若し餘有れば阿那含を得。謂く我この比丘無放逸を行じて是の如き果有るを見る。この故に我この比丘の爲に無放逸を行ずと說く。この諸の比丘我無放逸を行ずと說く。我一切の諸の比丘究竟智を得と說かず、亦復一切の諸の比丘初より究竟智を得と說かず。然も漸々習學して迹に趣き、教を受け訶を受け、然る後諸の比丘究竟智を得、これ諸の比丘得る所の究竟智なり。云何が漸々習學して迹に趣き、教を受け訶を受け、然る後諸の比丘究竟智を得、これ諸の比丘得る所の究竟智なりや。或は信有る者すなはち往詣し、往詣し已りてすなはち奉習し、奉習し已りてすなはち一心に法を聽き、一心に法を聽き已りてすなはち法を持し、法を持し已りてすなはち思惟し、思惟し已りてすなはち平量し、平量し已りてすなはち觀察す。賢聖の弟子已に身諦を觀察し慧增上觀を作證し、彼この念を作す、この諦我未だ曾て身に作證せず亦慧增上觀に非ず。この諦今身に作證し慧增上觀を以てすと。是の如く漸々習學して迹に趣き、教を受け訶を受け、然る後諸の比丘究竟智を得、これ諸の比丘得る所の究竟智なり。』こゝに於て世尊告げて曰はく『阿濕貝・弗那婆修、法有り四句と名づく。我汝が爲に說かんと欲す。汝等知らんと欲するや。』阿濕貝及び弗那婆修白して曰く『世尊我等これ誰に[由り]何に由り

【三】 信行（saddhānusārin）。

我この比丘の爲に無放逸を行ずと說く。若し比丘有りて倶解脫に非ず慧解脫に非ず亦身證に非ずして而も見到[八]有り。云何が比丘而も見到有りや。若し比丘有りて一向に決定して佛・法・衆を信じ所聞の法に隨ひ、すなはち慧[九]をもつて觀を增上し忍を增上す。是の如き比丘而も見到有り。この比丘我無放逸を行ずと說く。我この比丘を見、無放逸を行じて何の果有りと爲し、我をしてこの比丘の爲に無放逸を行ずと說かしむるや。或はこの比丘諸根を求め善知識を習ひ、隨順住止を行じ、諸漏已に盡きて無漏を得、心解脫慧解脫し、現法中に於て自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊び、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辦じ、更に有を受けずと如眞を知る。謂く我この比丘無放逸を行じて是の如き果有るを見る。この故に我この比丘の爲に無放逸を行ずと說く。若し比丘有りて倶解脫に非ず慧解脫に非ず又身證に非ず亦見到に非ずして而も信解脫[一〇]有り。云何が比丘信解脫有りや。若し比丘有りて一向に決定して佛・法・衆を信じ所聞の法に隨ひ、慧を以て觀忍し、見到に如かず。是の如き比丘信解脫有り。この比丘我爲に無放逸を行ずと說く。我この比丘を見、無放逸を行じて何の果有りと爲し、我をしてこの比丘の爲に無放逸を行ずと說かしむるや。或はこの比丘諸根を求め善知識を習ひ、隨順住止を行じ、諸漏已に盡きて無漏を得、心解脫し慧解脫し、現法中に於て自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊び、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辦じ、更に有を受けずと如眞を知る。謂く我この比丘無放逸を行じて是の如く果有るを見る。この故に我この比丘の爲に無放逸を行ずと說く。若し比丘有りて倶解脫に非ず慧解脫に非ず又身證に非ず復見到に非ず亦信解脫に非ずして而も法行[一一]有り。云何が比丘而も法行有りや。若し比丘有りて一向に決定して佛・法・衆を信じ所聞の法に隨ひ、すなはち慧を以て觀を增上し忍を增上す。是の如き比丘而も法行有り。この比丘我爲に無放逸を行ずと說く。我この比丘を見、無放逸を行じて何の果有りと爲し、我をしてこの比丘の爲に無放逸を行ずと說かしむるや。或はこの比丘諸根を求め善知識を習ひ、隨

【八】見到(Diṭṭhippatta)。

【九】便以ㇾ慧增二上觀一增二上忍一。又「すなはち慧を以て增上觀し增上忍す。」

【一〇】信解脫(Saddhāvimutta)。

【一一】法行(Dhammānusārin)。

說く。云何が心苦我修せよと說くや。若し心苦を修して惡不善の法轉た減じ善法轉た增せば、是の如き心苦我修せよと說く。彼可修の法如眞を知り不可修の法亦如眞を知り、彼可修の法如眞を知り不可修の法亦如眞を知り已りて不可修の法はすなはち修せず、可修の法はすなはち修す。不可修の法はすなはち修せず、可修の法はすなはち修し已りてすなはち惡不善の法轉た減じ善法轉た增す。我一切の比丘無放逸を行ずと說かず、亦復一切の比丘無放逸を行ぜずと說かず。云何が比丘我無放逸を行ぜずと說くや。若し比丘[五]俱解脫する者有り。云何が比丘俱解脫有りや。若し比丘有りて八解脫身に觸れ成就して遊び、已に慧もて諸漏已に盡き已に知るを見る。是の如く比丘俱解脫有り。この比丘我無放逸を行ぜずと說く。所以者何。この賢者本已に無放逸を行ず。若しこの賢者本放逸有らんは、終にこの處無し。この故に我この比丘無放逸を行ぜずと說く。若し比丘俱解脫に非ずして[六]慧解脫有る者有り。云何が比丘慧解脫有りや。若し比丘有りて八解脫身に觸れず成就して遊び、慧を以て諸漏已に盡き已に知るを見る。是の如き比丘慧解脫有り。この比丘我無放逸を行ぜずと說く。所以者何。この賢者本已に無放逸を行ず。若しこの賢者本放逸有らんは、終にこの處無し。この故に我この比丘無放逸を行ぜずと說く。この二比丘、我無放逸を行ぜずと說く。云何が比丘我爲に無放逸を行ずと說くや。若し比丘有りて俱解脫に非ず亦慧解脫に非ずして而も[七]身證有り。云何が比丘而も身證有りや。若し比丘有り八解脫身に觸れ成就して遊び、慧を以て諸漏已に盡き已に知るを見ず。是の如き比丘而も身證有り。この比丘我爲に無放逸を行ずと說く。我この比丘を見、無放逸を行じて何の果有りと爲し、我をしてこの比丘の爲に無放逸を行ずと說かしむるや。或はこの比丘諸根を求め、善知識を習ひ、隨順住止を行じ、諸漏已に盡きて無漏を得、心解脫慧解脫し、現法中に於て自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊び、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辦じ、更に有を受けずと如眞を知る。謂く我この比丘無放逸を行じて是の如き果有るを見る。この故に

【五】俱解脫(Ubhatobhāga-vimutti)。

【六】慧解脫(Paññāvimutti)。

【七】身證(Kāyasakkhi)。

せず得ず、正盡覺せざれば、或は苦覺有る者、惡不善の法轉た增し善法轉た減ずるも、我應に苦覺を斷ずるを說くべからず。若し我如眞を知らず、見ず解せず得ず、正盡覺せざれば、或は苦覺有る者、惡不善の法轉た減じ善法轉た增すも、我應に苦覺を修するを說くべからず。若し我如眞を知り、見解し得正盡覺すれば、或は樂覺有る者、惡不善の法轉た增し善法轉た減ぜば、この故に我樂覺を斷ずるを說く。若し我如眞を知り、見解し得正盡覺すれば、或は樂覺有る[者]、惡不善の法轉た減じ善法轉た增せば、この故に我樂覺を修するを說く。若し我如眞を知り、見解し得正盡[illegible]すれば、或は苦覺有る者、惡不善の法轉た增し善法轉た減ぜば、この故に我苦覺を斷ずるを說く。若し我如眞を知り、見解し得正盡覺すれば、或は苦覺有る者、惡不善の法轉た減じ善法轉た增せば、この故に我苦覺を修するを說く。所以者何。我一切の身樂を修せよと說かず、亦一切の身樂を修すること莫れと說かず、我一切の身苦を修せよと說かず、亦一切の身苦を修すること莫れと說かず、我一切の心樂を修せよと說かず、亦一切の心樂を修すること莫れと說かず、我一切の心苦を修せよと說かず、亦一切の心苦を修すること莫れと說かず。云何が身樂我修せざれと說くや。若し身樂を修して惡不善の法轉た增し、善法轉た減ぜば、是の如き身樂我修せざれと說く。云何が身樂我修せよと說くや。若し身樂を修して惡不善の法轉た減じ善法轉た增せば、是の如き身樂我修せよと說く。云何が身苦我修せざれと說くや。若し身苦を修して惡不善の法轉た增し、善法轉た減ぜば、是の如き身苦我修せざれと說く。云何が身苦我修せよと說くや。若し身苦を修して惡不善の法轉た減じ、善法轉た增せば、是の如き身苦我修せよと說く。云何が心樂我修せざれと說くや。若し心樂を修して惡不善の法轉た增し善法轉た減ぜば、是の如き心樂我修せざれと說く。云何が心樂我修せよと說くや。若し心樂を修して惡不善の法轉た減じ善法轉た增せば、是の如き心樂我修せよと說く。云何が心苦我修せざれと說くや。若し心苦を修して惡不善の法轉た增し善法轉た減ぜば、是の如き心苦我修せざれと

世尊阿濕貝・弗那婆修比丘を呵したまはく『汝等癡人、何に由りて我是の如く法を說くと知るや。汝等癡人、何の口より聞きて是の如く法を說くと知るや。汝等癡人、我一向に說かざるに、汝等一向に受持す。汝等癡人、衆多の比丘の爲に詰げられし時、應に是の如く如法に答ふべし、我等未だ知らずと。當に諸の比丘に問ふべし。』その時世尊諸の比丘に告げたまはく『汝等亦是の如く我法を說くを知るや若し樂覺を覺る者有れば、彼樂覺を覺り已りて不善の法轉た增し、善法轉た減じ、若し苦覺を覺る者有れば、彼苦覺を覺り已りて不善の法轉た減じ、善法轉た增すと。』衆多の比丘答へて曰く『不なり世尊。』世尊また問ひて曰はく『汝等云何が我法を說くを知るや。』衆多の比丘答へて曰く『世尊、我等、是の如く世尊法を說きたまふと知る、或は樂覺を覺る者有りて、惡不善の法轉た增し善法轉た減じ、或は樂覺を覺る者有りて惡不善の法轉た減じ善法轉た增し、或は苦覺を覺る者有りて惡不善の法轉た增し善法轉た減じ、或は苦覺を覺る者有りて惡不善の法轉た減じ善法轉た增すと。世尊、我等是の如く世尊所說の法を知る。』世尊聞き已りて諸の比丘を歎じて曰はく『善き哉善き哉、若し汝是の如く說き、或は樂覺を覺る者有りて惡不善の[法]轉た增し善法轉た減じ、或は樂覺を覺る者有りて惡不善の[法]轉た減じ善法轉た增し、或は苦覺を覺る者有りて惡不善の法轉た增し善法轉た減じ、或は苦覺を覺る者有りて惡不善の法轉た減じ善法轉た增すと。所以者何。我亦是の如く說く、或は樂覺を覺る者有りて惡不善の法轉た增し、善法轉た減じ、或は樂覺を覺る者有りて惡不善の法轉た減じ善法轉た增し、或は苦覺を覺る者有りて惡不善の法轉た增し善法轉た減じ、或は苦覺を覺る者有りて惡不善の法轉た減じ善法轉た增すと。若し我如眞を知らず見ず解せず得ず、正盡覺せざれば、或は樂覺有る者、不善の法轉た增し善法轉た減ずるも、我應に樂覺を斷ずるを說くべからず。若し我如眞を知らず、見ず解せず得ず、正盡覺せざれば、或は樂覺有る者惡不善の法轉た減じ善法轉た增すも、我應に樂覺を修するを說くべからず。若し我如眞を知らず、見ず解

濕貝・弗那婆修、世尊汝等を呼びたまふと。』一比丘聞き已りて、唯然り世尊と。卽ち坐より起ち佛足に稽首し遶三匝して而も去り、阿濕貝及び弗那婆修比丘の所に至り是の如きを語げて曰く『阿濕貝・弗那婆修、世尊賢者等を呼びたまふ。』阿濕貝・弗那婆修聞き已りて卽ち佛の所に詣り佛足に稽首し卻きて一面に坐しぬ。世尊問ひて曰はく『阿濕貝、弗那婆修、衆多の比丘實に汝等に語げ、阿濕貝・弗那婆修比丘、世尊迦尸國に遊び大比丘衆と倶に一處に遊在し諸の比丘に告げたまはく、我日に一食し、日に一食し已りて無爲無求にして病痛有ること無く身體輕便にして氣力康强、安隱快樂なり。汝等亦應に日に一食すべし。日に一食し已りて無爲無求にして病痛有ること無く身體輕便にして氣力康强、安隱快樂ならんと。その時世尊比丘衆の爲に日一食戒を施設したまひ、諸の比丘衆皆學戒及び世尊の境界諸の微妙の法を奉しぬ。阿濕貝、弗那婆修、汝等亦應に日に一食すべし。日に一食し已りて無爲無求にして病痛有ること無く身體輕便にして氣力康强、安隱快樂ならん。汝等世尊及び比丘衆に違ふこと莫れと「語げ」阿濕貝・弗那婆修、汝等聞き已りて諸の比丘に語げて曰く、諸賢、我等朝食・暮食・晝食・過中食し、朝食・暮食・晝食・過中食し已りて無爲無求にして病痛有ること無く身體輕便にして氣力康强、安隱快樂なり。我等何に緣りて現を捨てゝ而も後を待つべきやと。是の如くすること再び三たびするも、阿濕貝、弗那婆修、諸の比丘汝をして惡邪見を捨てしむることと能はずして卽ち坐より起ち之を捨てゝ而も去りしや。』阿濕貝・弗那婆修答へて曰く『實に爾り。』世尊告げて曰はく『阿濕貝・弗那婆修、汝等、是の如き法を說くを知るや、若し樂覺を覺る者有れば、彼樂覺を覺り已りて惡不善の法轉た增し、善法轉た減じ、若し苦覺を覺る者有れば、彼苦覺を覺り已りて惡不善の法轉た減じ、善法轉た增すと。』阿濕貝・弗那婆修答へて曰く『唯然り。我等是の如く世尊法を說きたまふを知る。若し樂覺を覺る者有れば、彼樂覺を覺り已りて不善の法轉た增し、善法轉た減じ、若し苦覺を覺る者有れば、彼苦覺を覺り已りて不善の法轉た減じ、善法轉た增すと。』

び比丘衆に違ふこと莫れ。』阿濕貝・弗那婆修聞き已りて報へて曰く『諸賢、我等朝食 暮食・晝食・過中食し、朝食・暮食・晝食・過中食し已りて無爲・無求にして、病痛有ること無く身體輕便にして、氣力康强、安隱快樂なり。我等何に緣りて現を捨てゝ而も後を待つべきや。』是の如くすること再び三たびするも、彼の衆多の比丘阿濕貝・弗那婆修をして惡邪見を除かしむること能はずして卽ち坐より起ち之を捨てゝ而も去り、佛の所に往詣し佛足に稽首し卻きて一面に住し白して曰く『世尊、この迦維賴屮に二比丘有り、一に阿濕貝と名づけ二に弗那婆修と名づけ、舊の土地主・寺主・宗主なり。彼朝食・暮食・晝食・過中食し、彼朝食・暮食・晝食・過中食し已りて無爲・無求にして病痛有ること無く身體輕便にして氣力康强、安隱快樂なり。世尊、我等聞き已りてすなはち阿濕貝及び弗那婆修比丘の所に往至して而も彼に語げて曰く、阿濕貝、弗那婆修、世尊迦尸國に遊び大比丘衆と倶に一處に遊在し諸の比丘に告げたまはく、我日に一食し、日に一食し已りて無爲・無求にして病痛有ること無く身體輕便にして氣力康强、安隱快樂なり。汝等亦應に日に一食すべし。日に一食し已りて無爲無求にして病痛有ること無く、身體輕便にして氣力康强、安隱快樂ならんと。その時世尊比丘衆の爲に日一食戒を施設したまひ、諸の比丘衆皆學戒 び世尊の境界・諸の微妙の法を奉 しぬ。阿濕貝、弗那婆修、汝等亦應に日に一食すべし。日に一食し已りて無爲・無求にして病痛有ること無く身體輕便にして氣力康强、安隱快樂ならん。汝等世尊及び比丘衆に違ふこと莫れと。阿濕貝・弗那婆修聞き已りて我等に報へて曰く、諸賢、我等朝食・暮食・晝食・過中食し、朝食・暮食・晝食・過中食し已りて無爲・無求にして病痛有ること無く身體輕便にして氣力康强、安隱快樂なり。我等何に緣りて現を捨てゝ而も後を待つべきやと。是の如くすること再び三たびするも、世尊、我等の如く、阿濕貝・弗那婆修をして惡邪見を除かしむること能はずして卽ち坐より起ち之を捨てゝ而も去りぬ。』世尊聞き已りて一比丘に告げたまはく『汝阿濕貝・弗那婆修比丘の所に往至し是の如きを告げて曰へ、阿

切の怖を除き一切の癡を除き一切の諂を除き一切の塵を止め一切の垢を淨めて而も著する所無く、敬すべく重んずべく奉ずべく祠るべく、一切天人の良福田なり。』佛說是の如し。尊者跋陀和利及び諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百九十五、阿濕貝經第四[一]

我が聞きしこと是の如し。ある時佛迦尸國に遊び大比丘衆と倶に一處に遊在し諸の比丘に告げたまはく『我日に一食し、日に一食し已りて無爲・無求にして病痛有ること無く、身體輕便にして氣力康强、安隱快樂なり。汝等亦應に日に一食すべし。日に一食し已りて無爲・無求にして病痛有ること無く、身體輕便にして氣力康强、安隱快樂ならん。』その時世尊比丘衆の爲に日一食戒を施設したまひ、諸の比丘衆皆學戒及び世尊の境界・諸の微妙の法を奉しぬ。こゝに於て世尊展轉して[二]迦羅賴に到り、迦羅賴の北村、[三]尸攝和林に住したまひぬ。その時迦羅賴中に二比丘有り、一に[四]阿濕貝と名づけ二に弗那婆修と名づけ、舊の土地主・寺主・宗主たり。彼朝食・暮食・晝食・過中食し、彼朝食・暮食・晝食・過中食し已りて無爲・無求にして病痛有ること無く身體輕便にして氣力康强、安隱快樂なりき。衆多の比丘聞き已りて阿濕貝及び弗那婆修比丘の所に往詣して而も彼に語げて曰く『阿濕貝・弗那婆修、世尊迦尸國に遊び大比丘衆と倶に一處に遊在し諸の比丘に告げたまはく、我日に一食し、日に一食し已りて無爲・無求にして病痛有ること無く、身體輕便にして氣力康强、安隱快樂なり。汝等亦應に日に一食すべし。日に一食し已りて無爲・無求にして、病痛有ること無く身體輕便にして、氣力康强、安隱快樂ならんと。その時世尊比丘衆の爲に日一食戒を施設したまひ、諸の比丘衆皆學戒及び世尊の境界、諸の微妙法を奉しぬ。阿濕貝、弗那婆修、汝等亦應に日に一食すべし。日に一食し已りて無爲・無求にして病痛有ること無く身體輕便にして氣力康强、安隱快樂ならん。汝等世尊及

【一】M. 10, Kitāgiri-sutta.
【二】迦羅賴(Kitāgiri)。
【三】尸攝和林(Siṃsapāvana)。
【四】阿濕貝(Assaji)。弗那婆修(Punabbasuka)。

故に戒を施設し、[彼等]我が教を受くるに至る。跋陀和利、我昔時に於て諸の比丘の爲に[一七]清淨馬喩の法を說きぬ。この中何に因る所ぞ、汝憶するや不や。』尊者跋陀和利白して曰く『世尊、この中因る所有り。所以者何。世尊諸の比丘の爲に一坐食戒を施設したまひ、諸の比丘衆皆戒及び世尊の境界、諸の微妙法を奉學し、唯我堪任せずと說き坐より起ちて去りぬ。具戒及び世尊の境界、諸の微妙の法を學せざるを以ての故に。世尊、これをこの中因る所有りと謂ふ。』世尊また告げて曰はく『跋陀和利、この中但これに因らず。跋陀和利 若し、我諸の比丘の爲に當に清淨馬喩の法を說くべくば、汝必ず一心ならず善く恭敬せず、思念して聽かざらん。跋陀和利、これをこの中更に因有りと謂ふ。』こゝに於て尊者、跋陀和利卽ち坐より起ち偏に著衣を袒ぎ叉手を佛に向け白して曰く『世尊、今正にこの時なり。善逝、今正にこの時なり。若し世尊諸の比丘の爲に清淨馬喩の法を說きたまはゞ諸の比丘世尊に從ひ聞き已りて當に善く受持すべし。』世尊告げて曰はく『跋陀和利、猶ほ馬を御するを知る者清淨の良馬を得るが如し。彼の御を知る者先づその口を治し、その口を治し已りて則ち動轉を樂はず、或は欲し或は欲せざる有り。所以者何。未だ曾て治せざるを以ての故に。跋陀和利、若し清淨の良馬御者の治するに從ひ、第一の治もて彼の御馬を成就するを得れば、然もまた更に勒口絆脚を治し、脚を絆ぎ口を勒して而も驅行せしめ、用て上闥して、王乘りて無上の行に堪任せしむ。無上に諸の支節を息治し、悉く御して成ぜしめ、則ち動轉を樂はず、或は欲し或は欲せざる有り。所以者何。數々治するを以ての故に。跋陀和利、若し清淨の良馬、彼の馬を御する者數々治する時成就するを得れば、彼その時に於て調し善く調して無上調を得、第一無上調を得、無上行[を得]第一行を得す、なはち王の乘に中り、王の粟を食し王の馬と稱說せらる。跋陀和利、是の如く若し時に賢良の智人[一八]十無學法、無學正見乃至無學正智を成就すれば、彼その時に於て調し善く調し無上調を得、第一無上調・無上止を得、第一止を得、一切の曲を除き一切の穢を除き一

【一七】清淨馬喩法（Ājāniya susūpama dhamma）。

【一八】十無學法(Dasa asekhā-dhammā)。八正道に(９)正智(Sammā-ñāṇa)、(10)正解脫(Sammā-vimutti)の二を加ふ。

め、禁戒を輕く犯すも亦復是の如し。跋陀和利或は比丘有りて信有り愛有り靖有り。今この比丘信有り愛有り靖有り、若し我等この賢者を苦治するも、今この賢者信有り愛有り靖有り、これに因りて必ず斷ぜん。我等寧ろ善く共にこの賢者を將護すべしと。諸の比丘すなはち善く共に將護す。跋陀和利、[一四]譬へば若し人唯一眼有るが如し。彼の諸の親屬憐念愍傷を爲し利及び饒益を求め安隱快樂を求め、善く共に將護し、この人をして寒熱飢渴あり病有り憂有り病憂有らしむること莫れ、塵すること莫れ、烟りすること莫れ、塵烟すること莫れ。所以者何。また恐らくこの人一眼を失ひ去らんと。この故に親屬善く之を將護す。跋陀和利、是の如く比丘少信少愛にして少しく靖有り。諸の比丘等すなはちこの念を作す、今この比丘少信少愛にして少しく靖有り。若し我等この賢者を苦治すれば、今この賢者少信少愛にして少しく靖有るものこれに因りて必ず斷ぜん。我等寧ろ善く共にこの賢者を將護すべしと。この故に諸の比丘善く共に將護す。猶ほ親屬の一眼人を護るが如し。』こゝに於て尊者跋陀和利即ち坐より起ち偏に著衣を袒ぎ、叉手を佛に向け白して曰く『世尊、何に因り何に緣りて昔日少しく戒を施設したまふに、比丘遵ひ奉持する者有ること多く、何に因り何に緣りて世尊、今日多く戒を施設したまふに、比丘遵ひ奉持する者有ること少きや。』世尊答へて曰はく『跋陀和利、若し比丘衆利を得ざれば、衆すなはち[一五]穢好の法無く、若し衆利を得れば、衆すなはち穢好の法を生じ、穢好の法を生じ已りて、世尊この穢好の法を斷ぜんと欲するが故に、すなはち弟子の爲に戒を施設す。是の如く[一六]稱譽廣大し、上尊王の識知する所[となり]、大に福有り、多く學問す。跋陀和利、若し衆多聞ならざれば、衆すなはち穢好の法を生ぜず若し衆多聞なれば、衆すなはち穢好の法を生ず、衆穢好の法を生じ已りて、世尊この穢好の法を斷ぜんと欲するが故に、すなはち弟子の爲に戒を施設す。跋陀和利、現世の漏を斷ずるを以ての故に弟子の爲に戒を施設せず。我後世の漏を斷ずるを以ての故に弟子の爲に戒を施設す。跋陀和利、この故に我弟子の斷漏の爲の

【一四】一眼者の喩。

【一五】穢好法(Āsavaṭṭhāniyā dhammā)、「諸漏に基ける法」「諸漏に起されたる法」。

【一六】巴利文にては衆廣大となり、利得の頂に達し、稱譽の頂に達し、多聞を得、多時を經の五事を擧ぐ。

者跋陀和利即ち坐より起ち偏に著衣を袒ぎ叉手を佛に向け白して曰く『世尊、何に因り何に緣りて諸の比丘等同じく戒を犯すも、或は苦治有り或は苦治せざるや。』世尊答へて曰はく『跋陀和利、(1)或は比丘有りて數々戒を犯し、數々戒を犯すに因るが故に諸の梵行[者]の爲に訶せられ、見聞する所、他の疑に從へば、彼諸の梵行[者]の爲に訶せられ、見聞する所他の疑に從ひ已りてすなはち異々論外の餘事を說き、瞋恚憎嫉し發怒廣惡あり、衆を觸嬈し衆を輕慢し、是の如き說を作す、我今當に衆をして歡喜して而も可意せしむるを作すべしと、是の如き意を作す。跋陀和利、諸の比丘すなはちこの念を作す、然もこの賢者數々戒を犯し、數々戒を犯すに因るが故に、諸の梵行[者]の爲に訶せられ、見聞する所他の疑に從へば、彼諸の梵行[者]の爲に訶せられ、見聞する所、他の疑に從ひ已りてすなはち異々論外の餘事を說き、瞋恚・憎嫉し發怒廣惡あり、衆を觸嬈し衆を輕慢し、是の如き說を作す、我今當に衆をして歡喜して而も可意せしむるを作すべしと。見已りてこの語を作す、諸尊、當に觀じて久しく任せしむべしと。跋陀和利、諸の比丘是の如く觀じて久しく任せしむ。(2)或は比丘有りて數々戒を犯し、數々戒を犯すに因るが故に諸の梵行[者]の爲に訶せられ、見聞する所他の疑に從へば、彼諸の梵行[者]の爲に訶せられ、見聞する所他の疑に從ひ已りて異々論外の餘事を說かず、瞋恚憎嫉し發怒　惡あらず、衆を觸嬈せず、衆を輕慢せず、是の如く說かず、我今當に衆をして歡喜して而も可意ならしむるを作すべしと。是の如き意を作さず。跋陀和利、諸の比丘すなはちこの念を作す、然もこの賢者數々戒を犯し、數々戒を犯すに因るが故に、諸の梵行[者]の爲に訶せられ、見聞する所他の疑に從へば、彼諸の梵行[者]の爲に訶せられ、見聞する所他の疑に從ひ已りて異々論外の餘事を說かず、瞋恚憎嫉し發怒廣惡あらず、衆を觸嬈せず、衆を輕慢せず、是の如く說かず、我今當に衆をして歡喜して而も可意ならしむるを作すべしと。見已りて而もこの語を作す、諸尊、當に觀じて早く滅せしむべしと。跋陀和利、諸の比丘是の如く觀じて早く滅せし

の如く苦樂を受け、是の如く長壽にして是の如く久しく住し、是の如く壽訖り、此に死して彼に生じ、彼に死して此に生ずと。[亦]我生じて此に在り、是の如き姓是の如き字にして是の如く生じ是の如く飮食し、是の如く苦樂を受け、是の如く長壽にして是の如く久しく住し、是の如く壽訖ると。跋陀和利、これを彼その時に於てこの第一明達を得と謂ひ、本放逸無きを以て遠離に樂住し修行精勤して謂く無智滅して而も智生じ、闇壞れて而も明成じ、無明滅して而も明生じ、謂く憶宿命智作證し明達す。彼是の如くして定心を得、清淨にして穢無く煩無く、柔軟にして善く住し、不動心を得、[二]生死智通を學し作證す。彼清淨の天眼の人[眼]を出過せるを以てこの衆生の死時生時、好色惡色、妙と不妙、善處及び不善處に往來するを見、この衆生の所作業に隨ひてその如眞を見、若しこの衆生身惡行・口意惡行を成就し聖人を誹謗し、邪見にして邪見業を成就すれば、彼これに因緣して身壞れ命終りて必ず惡處に至り地獄の中に生ず。若しこの衆生身妙行・口意妙行を成就し、聖人を誹謗せず、正見にして正見業を成就すれば、彼これに因緣して身壞れ命終りて必ず善處に昇り天中に上生すと[知る。]跋陀和利、これを彼その時に於て第二明達を得と謂ひ、本放逸無きを以て遠離に樂住し修行精勤して無智滅して而も智生じ、闇壞れて而も明成じ、無明滅して而も明生じ、謂く生死智作證し明達す。彼是の如くして定心を得、清淨にして穢無く煩無く柔軟にして善く住し、不動心を得、漏盡智通を學し作證す。彼この苦の如眞を知りこの苦の習を知りこの苦の滅を知りこの苦滅道の如眞を知り、この漏の如眞を知りこの漏の習を知りこの漏の滅を知りこの漏滅道の如眞を知る。彼是の如く知り是の如く見、欲漏心解脫し有漏・無明漏心解脫し、解脫し已りてすなはち解脫を知り、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辨じ更に有を受けずと如眞を知る。跋陀和利、これを彼その時に於て第三明達を得と謂ひ、本放逸無きを以て遠離に樂住し修行精勤して無智滅して而も智生じ、闇壞れて而も明成じ、無明滅して而も明生じ、謂く[三]漏盡智作證し明達す。』こゝに於て尊

【二】生死智通 (Sattānaṁ cutūpapātañāṇa)。

【三】漏盡智 (Āsavānaṁ khayañāṇa)。

の處に住し修行精勤して安隱快樂なり已りて世尊の戒を誣謗せず、天・諸の智〔者〕梵行者を誣謗せず、亦自らの戒を誣謗せず、彼世尊の戒を誣謗せず、天諸の智〔者〕梵行者を誣謗せず、亦自らの戒を誣謗せずし已りてすなはち歡悅を生じ、歡悅を生じ已りてすなはち喜を生じ、喜を生じ已りてすなはち身を止め、身を止め已りてすなはち樂を覺え、樂を覺え已りてすなはち心定まる。跋陀和利、賢聖の弟子心定まり已りてすなはち如實を見、如眞を知り、如實を見、如眞を知り已りてすなはち欲を離れ惡不善の法を離れ、覺有り觀有り、離より生ずる喜と樂とあり、初禪を得、成就して遊ぶ。跋陀和利、これを彼その時に於て第一增上心を得と謂ひ、卽ち現法に於て安樂居を得、易くして〔得〕、難からずして得、無怖に樂住し安隱快樂にして涅槃に昇らしむ。彼覺觀已に息み內靖一心にして覺無く觀無く、定より生ずる喜と樂とあり、第二禪を得、成就して遊ぶ。跋陀和利、これを彼その時に於て第二增上心を得と謂ひ、卽ち現法に於て安樂居を得、易くして〔得〕、難からずして得、無怖に樂住し安隱快樂にして涅槃に昇らしむ。彼喜・欲を離れ捨・無求にして遊び、正念・正智にして而も身に樂を覺え、謂く〔彼の〕聖〔者〕の說く所の(聖)所捨・念・樂住・空あり、第三禪を得、成就して遊ぶ。跋陀和利、これを彼その時に於て第三增上心を得と謂ひ、卽ち現法に於て安樂居を得、易くして〔得〕、難からずして得、無怖に樂住し安隱快樂にして涅槃に昇らしむ。彼樂滅し苦滅し喜憂は本已に滅し、不苦不樂にして捨あり念あり清淨にして第四禪を得、成就して遊ぶ。跋陀和利、これを彼その時に於て第四增上心を得と謂ひ、卽ち現法に於て安樂居を得、易くして〔得〕、難からずして得、無怖に樂住し安隱快樂にして涅槃に昇らしむ。彼是の如くして定心を得、清淨にして穢無く煩無く、柔軟にして善く住し不動心を得、[二]憶宿命智通を覺り作證す。彼行有り相貌有り、本無量の昔經歷せる所を憶ふ。謂く一生・二生・百生・千生、成劫・敗劫、無量の成敗劫、彼の衆生某と名づけ、彼昔更に歷、我曾て彼に生じ、是の如き姓、是の如き字にして、是の如く生じ是の如く飮食し、是

【二】憶宿命智通(Pubbeni-vāsānussatiñāṇa)。

境界、諸の微妙の法を學せざるを以ての故に。』尊者跋陀和利白して曰く『實に爾り。所以者何。世尊比丘衆の爲に一坐食を施設したまひ、諸の比丘衆皆戒及び世尊の境界、諸の微妙の法を奉學せるに、唯我堪任せずと說き坐より起ちて去りぬ。所以者何。具戒及び世尊の境界、諸の微妙の法を學せざるを以ての故に。唯願はくは世尊我が過失を受けたまへ。我過を見已りて當に自ら過を悔ゆべし。今より之を護りてまた更に作さざらん。』世尊告げて曰はく『跋陀和利、是の如く汝實に愚の如く癡の如く、不了の如く不善の如し。所以者何。我比丘衆の爲に一坐食戒を施設し、諸の比丘衆皆戒及び世尊の境界、諸の微妙の法を奉學するに、唯汝堪任せずと說き坐より起ちて去りぬ。所以者何。汝具戒及び世尊の境界、諸の微妙の法を學せざるを以ての故に。跋陀和利、若し汝過有り、見已りて自ら悔い、今より之を護りて更に作さざれば、跋陀和利、是の如くなれば則ち聖法律中に於て益して而も損せず。若し汝過有り、見已りて自ら悔い、今より之を護りて更に作さざれば、跋陀和利、意に於て云何。若し比丘有りて具戒を學せざれば、彼無事處・山林・樹下に住し、或は高巖の寂として音聲無く、遠離して惡無く、人民有ること無きに居り、隨順して燕坐し、彼遠離の處に住し修行精勤して增上心を得、現法に樂居し、彼遠離の處に住して修行精勤し安隱快樂にして以て世尊の戒を誣謗し、及び天・諸の智［者］梵行者を誣謗し、亦自らの戒を誣謗す。彼世尊の戒を誣謗し、及び天・諸の智［者］梵行者を誣謗し、亦自らの戒を誣謗し已りてすなはち歡悅を生ぜず、歡悅を生ぜずし已りてすなはち喜を生ぜず、喜を生ぜずし已りてすなはち身を止めず、身を止めずし已りてすなはち樂を覺えず、樂を覺えずし已りてすなはち心定まらず。跋陀和利、賢聖の弟子心定まらずし已りてすなはち如實を見［ず］、如眞を知らず。跋陀和利、意に於て云何。若し比丘有りて具戒を學すれば、彼無事處・山林・樹下に住し、或は高巖の寂として音聲無く、遠離して惡無く、人民有ること無きに居り隨順して燕坐し、彼遠離の處に住し修行精勤して增上心を得、現法に樂居し、彼遠離

の法を學せずと知らず、汝その時に於てかくの如きを知らざりしや。跋陀和利、汝その時に於て衆多の優婆塞・優婆夷舍衞國に居り、彼我を知り我を見、比丘有り跋陀和利と名け、世尊の弟子にして具戒及び世尊の境界、諸の微妙の法を學せずと知らず、跋陀和利、汝その時に於てかくの如きを知らざりしや。跋陀和利、汝その時に於て衆多の異學沙門・梵志舍衞國に於て而も夏坐を受け、彼我を知り我を見、比丘有り跋陀和利と名づけ、沙門瞿曇の弟子にして名德あり、具戒及び世尊の境界、諸の微妙の法を學せずと知らず、跋陀和利、汝その時に於てかくの如きを知らざりしや。跋陀和利、若し比丘の[四]倶解脱あるもの、我彼に語げて曰く、汝來りて泥に入れと。跋陀和利、意に於て云何。我彼の比丘に教ふるに、彼の比丘寧ろ當に住して而も移避すべきや。』尊者跋陀和利答へて曰く『不なり。』世尊告げて曰はく『跋陀和利、若し比丘有り、設し倶解脱に非ざるも[五]慧解脱有る[者]、設し慧解脱に非ざるも[六]身證有る者、若し身證に非ざるも[七]見到有る者、設し見到に非ざるも[八]信解脱有る[者]、設し信解脱に非ざるも[九]法行有る者、設し法行に非ざるも[一〇]信行有る者[あれば]、我彼に語げて曰く、汝來りて泥に入れと。跋陀和利、意に於て云何。我彼の比丘に教ふるに、彼の比丘寧ろ當に住して而も移避すべきや。』尊者跋陀和利答へて曰く『不なり。』世尊告げて曰はく『跋陀和利、意に於て云何。汝その時に於て信行・法行・信解脱・見到・身證・慧解脱・倶解脱を得しや。』尊者跋陀和利答へて曰く『不なり。』世尊告げて曰はく『跋陀和利、汝その時に於て空屋の如くに非ざりしや。』こゝに於て尊者跋陀和利世尊の爲に面り呵責せられ已りて内に憂慼を懷き低頭默然として辯を失して言無く伺ふ所有るが如し。こゝに於て世尊面り尊者跋陀和利を呵責し已りてまた歡喜せしめんと欲して而も之に告げて曰はく『跋陀和利、汝その時に當りて我に於て信法靖無く愛法靖無く靖法靖無かりき。所以者何。我比丘衆の爲に一坐食戒を施設し、諸の比丘衆皆戒及び世尊の境界、諸の微妙の法を奉學せるに、唯汝堪任せずと說き坐より起ちて去りぬ。所以者何。具戒及び世尊の

【四】 倶解脱(Ubhatobhāga-vimutto。二九參「請請經」註[七]を見よ。
【五】 慧解脱(Paññāvimutta)。
【六】 身證 Kāyasakkhi)。
【七】 見倒(Diṭṭhippatta)。
【八】 信解脱(Saddhāvimutta)。
【九】 法行(Dhammānusārī)。
【一〇】 信行(Saddhānusārī)?

汝亦我に隨はゞ、汝食を請ひ一坐食を持ち去るを聽す。跋陀和利、若し是の如くば快く生活するを得ん。』尊者跋陀和利また再び三たびに至りて白して曰く『世尊、是の如くしたまふも我また一坐食に堪へず。所以者何。若し我一坐食すれば、不了事に同じ懊惱して心悔ゆ。世尊、この故に我一坐食に堪任せず。』その[三]時世尊比丘衆の爲に一坐食戒を施設したまひ、諸の比丘衆皆戒及び世尊の境界、諸の微妙の法を奉學しぬ。唯尊者跋陀和利堪任せずと說き坐より起ちて去りぬ。所以者何。具戒及び世尊の境界、諸の微妙の法を學せざるが故に。こゝに於て尊者跋陀和利遂に藏れて一夏世尊を見ざりき。所以者何。具戒及び世尊の境界、諸の微妙の法を學せざるを以ての故に。時に諸の比丘佛の爲に衣を作りぬ。世尊舍衞國に於て夏坐を受け訖り、三月を過ぎ已りて衣を補治し竟り、衣を攝り鉢を持し當に人間に遊びたまふべかりき。尊者跋陀和利諸の比丘佛の爲に衣を作り、世尊舍衞國に於て夏坐を受け訖り、三月を過ぎ已りて衣を補治し竟り、衣を攝り鉢を持し當に人間に遊びたまふべしと聞き、尊者跋陀和利聞き已りて諸の比丘の所に往詣しぬ。諸の比丘遙に尊者跋陀和利の來るを見てすなはちこの語を作しぬ『尊者跋陀和利、汝當にこれを知るべし、佛の爲に衣を作り、世尊舍衞國に於て夏坐を受け訖り、三月を過ぎ已りて衣を補治し竟り、衣を攝り鉢を持し當に人間に遊びたまふべし。跋陀和利、當に彼處に善く自ら守護すべし。後時に多く煩勞を致さしむること莫れ。』尊者跋陀和利この語を聞き已りて卽ち佛の所に詣り佛足に稽首し白して曰く『世尊、我實に過有り、我實に過有り。愚の如く癡の如く、不了の如く不善の如し。所以者何。世尊比丘衆の爲に一坐食戒を施設したまひ、諸の比丘衆皆戒及び世尊の境界、諸の微妙の法を奉學するに、唯我堪任せずと說き、坐より起ちて去りぬ。所以者何。具戒及び世尊の境界、諸の微妙の法を學せざるを以ての故に。』世尊告げて曰はく『跋陀和利、汝その時に於て衆多の比丘・比丘尼舍衞國に於て而も夏坐を受け、彼我を知り我を見、比丘有り跋陀和利と名づけ、世尊の弟子にして具戒及び世尊の境界、諸の微妙

【三】巴利文「時に具壽跋陀和利は、世尊の學句（戒）を說き敎へたまひ、比丘衆の學を受くるを、「自らは」堪へ得ずと言へり。」

卷の第五十一

百九十四、[1]跋陀和利經第三

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衛國に遊び勝林給孤獨園に在し、大比丘衆と俱にして而も夏坐を受けたまひぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『我一坐食し、一坐食し已りて無爲・無求にして病痛有ること無く、身體輕便にして氣力康强、安隱快樂なり。汝等亦當に一坐食を學すべし。一坐食し已りて無爲・無求にして病痛有ること無く、身體輕便にして氣力康强、安隱快樂ならん。』その時[2]尊者跋陀和利亦衆中に在りき。こゝに於て尊者跋陀和利卽ち坐より起ち偏に著衣を袒ぎ叉手を佛に向け白して曰く『世尊、我一坐食に堪任せず。所以者何。若し我一坐食すべれば、不了事に同じ懊惱して心悔ゆ。世尊、この故に我一坐食に堪任せず。』世尊告げて曰はく『跋陀和利、若し我請を受け汝亦我に隨はゞ、汝食を請ひ一坐食を持ち去るを聽す。跋陀和利、若し是の如くば快く生活するを得ん。』尊者跋陀和利又復白して曰く『世尊、是の如くしたまふも我亦一坐食に堪へず。所以者何。若し我一坐食すれば、不了事に同じ懊惱して心悔ゆ。世尊、この故に我一坐食に堪任せず。』世尊また再び三たびに至りて諸の比丘に告げたまはく『我一坐食し、一坐食し已りて無爲・無求にして病痛有ること無く、身體輕便にして氣力康强、安隱快樂なり。汝等亦當に一坐食を學すべし。一坐食し已りて無爲・無求にして病痛有ること無く、身體輕便にして氣力康强、安隱快樂ならん。』尊者跋陀和利亦再び三たびに至りて坐より而も起ち、偏に著衣を袒ぎ叉手を佛に向け白して曰く『世尊、我一坐食に堪任せず。所以者何。若し我一坐食すれば、不了事に同じ懊惱して心悔ゆ。世尊、この故に我一坐食に堪任せず。世尊また再び三たびに至りて告げて曰はく『跋陀和利、若し我請を受け

【一】M. 65, Bhaddāli-sutta.「增一」四九品の七

【二】尊者跋陀和利（Āyasmā Bhaddāli）。

し。善き哉善き哉、汝等、當に數々利き鋸刀もて沙門の教に喩ふるを念ずべし。汝等數々利き鋸刀もて沙門の教に喩ふるを念じ已りて、二果中に於て必ずその一を得ん。［即ち］或は現世に於て究竟智を得、或はまた餘有りて阿那含を得ん。」佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

中阿含經卷第五十

汝等、若し他人の爲に拳扠され石擲・杖打され刀もて斫らるゝ時、或は心變易すれば、或は口惡言すれば、我汝等これに因りて必ず衰ふと說く。汝等、當に學すべし。若し他人の爲に拳扠され石擲・杖打され刀もて斫らるゝ時、心變易せず口惡言せず、向きに捶打せし人、彼に緣りて慈愍心を起し、心行猶皮囊の如くにして結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。汝等、當に是の如きを學すべし。若し賊有り來りて利き鋸刀を以て節々に解截す。汝等、若し賊有り來りて利き鋸刀を以て節々に解截する時、或は心變易すれば、或は口惡言すれば、我汝等これに因りて必ず衰ふと說く。汝等、當に學すべし。若し賊有り來りて利き鋸刀を以て節々に解截するも、心變易せず口惡言無く、向きに割截せし人、彼に緣りて慈愍心を起し、心慈と倶にして一方に遍滿し成就して遊び、是の如く二・三・四方・四維・上下、一切に普周く心慈と倶にして結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。是の如く悲・喜[亦然り。] 心捨と倶にして結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。汝等、當に是の如きを學すべし。』こゝに於て世尊諸の比丘を歎じて曰はく、『善き哉善き哉、汝等當に數々利き鋸刀の喩もて沙門の敎に喩ふるを念ずべし。汝等數々利き鋸刀もて沙門の敎に喩ふるを念じ已りて、汝等頗し他不愛の惡語言もて我に向ふを見、我聞き已りて堪耐せざるや。』諸の比丘答へて曰く『不なり世尊。』世尊また諸の比丘を歎じて曰はく『善き哉善き哉、汝等、當に數々利き鋸刀もて沙門の敎に喩ふるを念ずべし。汝等數々利き鋸刀もて沙門の敎に喩ふるを念じ已りて、若し汝東方に遊べば、必ず安樂を得、衆の苦患無く、若し南方・西方・北方に遊べば、必ず安樂を得、衆の苦患無し。善き哉善き哉、汝等、當に數々利き鋸刀もて沙門の敎に喩ふるを念ずべし。汝等、數々利き鋸刀もて沙門の敎に喩ふるを念じ已りて、我尙汝諸の善法住まると說かず、況や衰退すと說かんや。但當に晝夜に善法を增長して而も衰退せざるべ

不眞、或は軟或は堅、或は慈或は恚、或は有義或は無義なり。汝等、この互言道、若し他說く時或は心變易すれば、或は口惡言すれば、彼汝等これに因りて必ず衰ふと說く。汝等、當にこの互言道を學すべし、若し他說く時心變易せず口惡言無く、向きに言說するもの、彼に緣りて慈愍心を起し、心行恒伽の水の如くして、結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大、無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ばん。汝等、當に是の如きを學すべし。猶ほ畫師・畫師の弟子の如し。種々の彩を持ち來りて彼この說を作す、我この虛空に於て形像を畫作し彩を以て莊染せんと。意に於て云何。彼の畫師・畫師の弟子この方便を以て寧ろ能く虛空に於て形像を畫作し彩を以て莊染するや。』諸の比丘答へて曰く『不なり世尊、所以者何。世尊、この虛空色に非ずして見るべからず對無し。この故に彼の畫師・畫師の弟子この方便を以て虛空に於て形像を畫作し彩を以て莊染すること能はず。世尊、但彼の畫師・畫師の弟子をして唐じく自ら疲勞せしむ。』『是の如くこの互言道、若し他說く者、或は時或は非時、或は眞或は不眞、或は軟或は堅、或は慈或は恚、或は有義或は無義なり。汝等、この互言道、若し他說く時或は心變易すれば、或は口惡言すれば、我汝等これに因りて必ず衰ふと說く。汝等、當にこの互言道を學すべし。若し他說く時心變易せず口惡言無く向きに言說するもの、彼に緣りて慈愍心を起し、心行虛空の如くにして結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。汝等、當に是の如きを學すべし。猶ほ猫皮嚢柔治して極めて軟かなるが如し。𤼽々の聲を除き𤼽々の聲無し。[※一三] 彼に或は人有り手を以て拳扠し石擲・杖打し、或は刀を以て斫り、或は地に撲著す。意に於て云何。彼の猫皮嚢柔治して極めて軟く、𤼽々の聲を除き𤼽々の聲無きもの、彼寧ろまた𤼽々の聲有りや。』諸の比丘答へて曰く『不なり世尊、所以者何。世尊、彼の猫皮嚢柔治して極めて軟く、𤼽々の聲を除き𤼽々の聲無し。この故にまた𤼽々の聲有ること無し。』『是の如く諸の比丘、若し他人有り拳扠し石擲・杖打し刀もて斫る。

【一三】

※𤼽𤼽聲。𤼽は音(ハツ)、車の破聲なり「一切音義」に、は甎の誤なりとす。甎々は瓦の破れる聲。この方正しからん。

易せず口惡言無く、怨家の人に向ひて彼に緣りて慈悲心を起し心慈と倶にして一方に遍滿し成就して遊び、是の如く二・三・四方・四維・上下、一切に普周く、心慈と倶にして、結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大、無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。是の如く悲喜〔亦然り。〕心捨と倶にして結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大、無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。汝等、當に是の如きを學すべし。猶ほ人有るが如し大[二]鏵鍬を持ち來りて而もこの語を作す、我能くこの大地をして非地作らしめんと。彼すなはち處々掘りてまた掘り、唾溺もて之を汚す。惡語を說く者是の如き說を作す、大地をして非地ならしめんと。意に於て云何。彼の人この方便を以て能く大地をして非地ならしむるや。』諸の比丘答へて曰く『不なり世尊。所以者何。この大地甚深極廣にして而も量るべからず。この故に彼の人この方便を以てこの大地をして非地作らしむること能はず。世尊、但彼の人をして唐じく自ら疲勞せしむ。』『是の如くこの互言道、若し他說く者、或は時或は非時、或は眞或は不眞、或は軟、或は堅、或は慈、或は恚或は有義或は無義なり。汝等、この互言道、若し他說く時或は心變易すれば、或は口惡言すれば、我汝等これに因りて必ず衰ふと說く。汝等、當にこの互言道を學すべし。若し他說く時心變易せず口惡言無く、向きに言說するもの、彼に緣りて慈愍心を起し心行地の如くにして、結無く怨無く恚無く諍無く極廣甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ばん。汝等當に是の如きを學すべし。猶ほ人有るが如し。大[三]草炬を持ちて是の如き語を作す、我この草炬を以て用ひて恒伽の水を熱して沸湯と作らしめんと。意に於て云何。彼の人この方便を以て能く恒伽の水をして熱して沸湯と作らしむるや。』諸の比丘答へて曰く『不なり世尊、所以者何。世尊、彼の恒伽の水甚深極廣にして度量すべからず。この故に彼の人この方便を以て恒伽の水をして熱して沸湯と作らしむること能はず。世尊、但彼の人をして唐じく自ら疲勞せしむ。』是の如くこの互言道、若し他說く者、或は時或は非時、或は眞、或は

【二】鏵鍬。すきとくわ。

【三】草炬（Tiṇukkā）。

て是の如き極大の名稱有りて諸方に流布せしむ、居士の婦、鞞陀提忍辱堪耐し溫和にして善く制し善く定まり善く息むとのみ。我今寧ろまた更に極大に大家居士の婦、鞞陀提實に瞋ると爲すや、實に瞋らずと爲すやを試むべしと。こゝに於て黑婢臥して晡時に至りて乃ち起く。夫人呼びて曰く『黑婢、何ぞ以て乃ち晡時に至りて起き、既に自ら作さず亦作さしめざるや。この黑婢我が教に隨はず、この黑婢我を輕慢すと。すなはち大に瞋恚して而も憎嫉を生じ、額に三脈起ち皺面して自ら往きて戶を閉ぢ關を下し手に大杖を執りて以てその頭を打ち、頭破れ血流れぬ。こゝに於て黑婢頭破れ血流れてすなはち出でゝ比隣に語げ訟聲紛紜として多所に道說しぬ、尊等、この忍辱の行人堪耐し溫和にして善く制し善く定まり善く息みて行ずるを見るや。我を罵りて曰く、黑婢、何ぞ以て乃ち晡時に至りて起き、既に自ら作さず亦作さしめず。この黑婢我が教に隨はず、この黑婢我を輕慢すと。すなはち大に瞋恚して而も憎嫉を生じ、額に三脈起ち皺面して自ら來りて戶を閉ぢ關を下し手に大杖を執りて以て我が頭を打ち頭破れ血流れぬと。その時居士の婦、鞞陀提是の如くしてすなはち極大の惡名有りて諸方に流布しぬ。居士の婦、鞞陀提惡性にして急弊麁獷、定まらず制せず息まずと。是の如く或は一善護善逝の行者有り、謂く他惡語言無きに因る。若し他惡語言せざればすなはち瞋恚せず亦憎嫉せず憂繫住せず憎瞋恚せず惡を發露せず。彼の諸の比丘見已りてすなはちこの念を作す、この賢者忍辱し溫和にして堪耐し善く制し善く定まり善く息むと、若し他惡語言すればすなはち瞋恚し憎嫉して而も憂繫住し憎恚し惡を發すと。彼の諸の比丘見已りてすなはちこの念を作す、この賢者惡性にして急弊麁獷、定まらず制せず息まずと。また次に互に言道する有り。若し他說く者、[一〇]或は時或は非時、或は眞或は非眞、或は軟或は堅、或は慈或は恚、或は有義或は無義なり。汝等、この互に言道する[もの]、若し他說く時或は心變易すれば、或は口惡言すれば、我汝等これに因りて必ず衰ふと說く。汝等、當にこの互言道を學すべし。若し他說く時、心變

【一〇】時非時。時に適ひ、時に適はず。

恭順し、善語恭順の法を成就すれば、我彼善語恭順すと說く。所以者何。或は一善護善逝の行者有り、謂く他に惡語言無きに因る。若し他惡語言せざればすなはち瞋恚せず亦憎嫉せず憂纏住せず憎瞋恚せず惡を發露せず。彼の諸の比丘見已りてすなはちこの念を作す、この賢者忍辱し溫和にして堪耐し善く制し善く定まり善く息む若し他惡語言すればすなはち瞋恚憎嫉して憂纏住し憎恚し惡を發すと。彼の諸の比丘見已りてすなはちこの念を作す、この賢者惡性急弊にして麁獷なり。定まらず制せず息まずと。所以者何。比丘、昔時居士の婦有り鞞陀提と名づけ、極大富樂にして多く錢財有り、畜牧產業稱計すべからず、封戶食邑米穀豐饒にして及び若干種の諸の生活の具ありき。その時居士の婦鞞陀提是の如き大名稱有りて諸方に流布しぬ、居士の婦忍辱堪耐し溫和にして善く制し善く定まり善く息むと。その時居士の婦鞞陀提に婢有り、黑と名づけ、本侍者にして妙善言有り少多の善を行じぬ。彼の黑婢この念を作しぬ、我が大家居士の婦、鞞陀提是の如き大名稱有りて諸方に流布す、居士の婦、鞞陀提忍辱堪耐し溫和にして、善く制し善く定まり善く息むと。我今寧ろ大家居士の婦鞞陀提實に瞋ると爲すや、實に瞋らずと爲すやを試むべしと。こゝに於て黑婢早く起きず。夫人呼びて曰く、黑婢、何ぞ早く起きざるやと。黑婢聞き已りてすなはちこの念を作しぬ、我が大家居士の婦、鞞陀提實に瞋りて瞋らざるに非ず。但我善く能く料理し家業善く經營し善く持するに因るが故に、我が大家居士の婦、鞞陀提をして是の如き極大の名稱有りて諸方に流布せしむ、居士の婦鞞陀提忍辱堪耐し溫和にして善く制し善く定まり善く息むと。我今寧ろまた更に大に大家居士の婦鞞陀提實に瞋ると爲すや、實に瞋らずと爲すや、…………………………を試むべしと。こゝに於て黑婢臥して極めて晚くまで起きず。夫人呼びて曰く、黑婢、何ぞ以て極めて晚くまで起きざるやと。黑婢聞き已りてこの念を作しぬ、我が大家居士の婦、鞞陀提實に瞋りて瞋らざるに非ず。但我善く能く料理し家業善く經營し善く持するに因るが故に、我が大家居士の婦、鞞陀提をし

【八】鞞陀提(Vedehika)。

【九】黑(Kali)。

これを廣布せよ。破群那、汝當に是の如く學すべし。』その時世尊諸の比丘に問ひて曰はく『汝等至信に家を捨て家無くして學道するに非ざるや。』諸の比丘答へて曰く『唯然り世尊。』世尊また諸の比丘に告げて曰はく『こゝを以て汝等至信に家を捨て家無くして學道すれば、應に當に學すべし、若し欲有り念有り家に依らば、これを斷じ、若し欲有り念有らば無欲に依ると、これを習ひこれを修しこれを廣布せよ。汝等當に是の如く學すべし。昔時我曾て諸の比丘に告げぬ、汝等、若しは比丘有りて知識する所多きも、若しは比丘有りて知識する所少きも、彼の一切盡く[四]一坐食を學し、一坐食を學し已り無爲無求にして[五]病痛有ること無く、身體輕便にして氣力康强、安隱快樂なりと。彼の諸の比丘、知識する所多きも、及び知識する「所」少きも、盡く一坐食を學し、一坐食を學し已りて無爲・無求にして病痛有ること無く、身體輕便にして氣力康强、安隱快樂なりき。彼の諸の比丘我が心を可とし、我亦多く敎訶せず、諸の比丘これに因りて念を生じ法・次法に向ひぬ。猶ほ馬車の御者のこれに乘るが如し。左手に轡を執り右手に策を執り、八道に隨ひて行き、意の至る所に在り。是の如く諸の比丘我が心を可し、我亦多く敎訶せず、諸の比丘これに因りて念を生じ法・次法に向ひぬ。猶ほ良地に娑羅樹林有るが如し。彼の治林者聰明黠慧にして而も懈怠せず、彼時に隨ひて娑羅樹の根を治し、數々鋤糞「を施し」水を以て漑灌し、高きは掘り下げ、下れるは塡滿し、若し邊に惡草を生ぜば媷除して之を棄て、若し並に曲戾惡不直を生ぜば根を拔きて外に著け、若枝に橫曲を生ぜば則ち之を落し治し、若し近邊に新に[六]調直好を生ぜば、すなはち時に隨ひて治し、數々鋤糞「を施」し水を以て漑灌す。是の如くして彼の良地の娑羅樹林轉た茂盛す。是の如く諸の比丘我が心を可とし、我亦多く敎訶せず。我彼、善語恭順すと說かず。謂く[七]衣鉢・飮食・床榻・湯藥・諸の生活の具に因るが故にと。所以者何。彼の比丘若しこれを得ざれば還りて善語恭順せず、不善語恭順の法を成就しぬ。若し比丘有りて遠離を爲し遠離に依り遠離に住し善語

【四】一坐食(Ekāsana-bhojana)。一回坐したるまゝ食終るまで座を移すことなくして食すること。

【五】巴利文「病少く惱み少く、起居輕安にして氣力あり、安樂にして住す。」

【六】調直好。眞直にすなほにしてよきもの。

【七】衣鉢その他のもののために彼等は柔和恭順なりとは余は言はず。

百九十三、牟犁破群那經第二[一]

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時　牟犁破群那[二]、比丘尼と數ば共に集會しぬ。若し人有りて牟犁破群那比丘に向ひて比丘尼を道說すれば、彼聞き已りてすなはち瞋恚・憎嫉し乃至鬪諍し、若し人有りて諸の比丘尼に向ひて牟犁破群那比丘を道說すれば、諸の比丘尼聞き已りてすなはち瞋恚・憎嫉し乃至鬪諍しぬ。衆多の比丘聞き已りてすなはち佛に往詣し佛足に稽首し却きて一面に坐し白して曰く『世尊、牟犁破群那比丘、比丘尼と數ば共に集會す。若し人有りて牟犁破群那比丘に向ひて比丘尼を道說すれば、彼聞き已りてすなはち瞋恚・憎嫉し乃至鬪諍し、若し人有りて諸の比丘尼に向ひて牟犁破群那比丘を道說すれば、諸の比丘尼聞き已りてすなはち瞋恚・憎嫉し乃至鬪諍す。』世尊聞き已りて一比丘に告げたまはく『汝牟犁破群那比丘の所に往きて而も之に語げて曰へ、世尊汝を呼びたまふと。』一比丘聞き已りて『唯然り世尊』[と言ひ]、卽ち坐より起ち佛足に稽首し遶三匝して而も去り、牟犁破群那比丘の所に至りて而も之に語げて曰く『世尊汝を呼びたまふ。』牟犁破群那聞き已りて佛の所に來詣し佛の爲に禮を作し却きて一面に坐しぬ。世尊告げて曰はく『破群那、汝實に比丘尼と數ば共に集會し、若し人有りて汝に向ひて比丘尼を道說すれば、汝聞き已りてすなはち瞋恚・憎嫉し乃至鬪諍し、若し人有りて諸の比丘尼に向ひて汝を道說すれば、諸の比丘尼聞き已りてすなはち瞋恚・憎嫉し乃至鬪諍するや。破群那、汝實に是の如くなりや。』破群那答へて曰く『實に爾り世尊。』世尊また問ひて曰はく『破群那、汝至信に家を捨て家無くして學道するに非ざるや。』破群那答へて曰く『唯然り世尊。』世尊告げて曰はく『破群那、こゝを以て汝至信に家を捨て家無くして學道すれば、應に當に學すべし、若し　欲[三]有り念有り家に依らば、これを斷じ、若し欲有り念有らば、無欲に依ると、これを習ひこれを修し

【一】M. 21, Kakacūpama-sutta.「增一阿含」五〇品の八。
【二】牟犁破群那（Moliya-phagguna）。「增一」茂羅破群比丘。
【三】有欲有念依家（Gehasitā chandā, gehasitā vitakkā）。「家に依れる欲、家に欲れる念。」

るや。烏陀夷、比丘一切の無量空處を度り、無量識、この無量識處に成就して遊ぶ。これをこの中過度すと謂ふ。烏陀夷、我これ亦無を得ず斷を得ず過度を得ずと說く。この中何等か過度するや。烏陀夷、比丘一切の無量識處を度り、無所有、この無所有處に成就して遊ぶ。これをこの中過度すと謂ふ。烏陀夷、我これ亦無を得ず斷を得ず過度を得ずと說く。この中何等か過度するや。烏陀夷、比丘一切の無所有處を度り、非有想非無想、この非有想非無想處に成就して遊ぶ。これをこの中過度すと謂ふ。烏陀夷、我非有想非無想處に至るも亦無を得ず斷を得ず過度を得ずと說く。烏陀夷、頗し一結[一九]有り或は多く或は少く久しく住すれば、我無を得ず斷を得ず過度を得ずと說く。謂く我斷ぜされと說くや。』尊者烏陀夷白して曰く『不なり世尊。』世尊歎じて曰はく『善き哉善き哉、烏陀夷、汝その彼の癡人の如くならず。彼の愚癡の人、我その爲に汝等これを斷ぜよと說くに、彼この說を作す、こはこれ小事なり。何ぞ之を斷ずるに足らん。而も世尊今我をしてこんを斷ぜしめ、善逝我をしてこれを斷ぜしめたまふと。亦是の如く說く、この大沙門食を消す能はずと。彼これを斷ぜず。彼但我に於て不可不忍を生じ、及び餘の比丘の善く護り戒を持する者亦復彼の爲に不可不忍を生ず。烏陀夷、この故に彼の癡人縛せらるゝこと極めて堅く極めて牢くして轉た增し轉た急にして斷絕すべからず、解脫を得ず。烏陀夷、若しは族姓子有り、我その爲に、汝等これを斷ぜよと說くに、彼この說を作さず、こはこれ小事なり、何ぞ之を斷ずるに足らん。而も今世尊我をしてこれを斷ぜしめ善逝我をしてこれを絕せしめたまふと。亦是の如く說かず、この大沙門食を消す能はずと。彼すなはちこれを斷ず、彼我に於て不可不忍を生ぜず、及び餘の比丘の善く護りて戒を持する者亦彼の爲に不可不忍を生ぜず。この故に彼の族姓子縛せらるゝこと堅からず牢からず轉た增して急ならず、而も斷絕すべく則ち解脫を得。』佛說是の如し。尊者烏陀夷の佛所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

【一九】結（Saṁyojana）。

れを聖[者]移動すと說く。この中何等を聖[者]移動すと說くや。烏陀夷、比丘覺觀已に息み內靖一心にして覺無く觀無く、定より生ずる喜と樂とあり、第二禪を得、成就して遊ぶ。これを聖[者]移動すと說く。この中何等を聖[者]移動すと說くや。若しこの喜を得れば、これを聖[者]移動すと說く。この中何等を聖[者]移動すと說くや。烏陀夷、比丘喜欲を離れ、捨・無求にして遊び、正念・正智にして而も身に樂を覺り、謂く[彼の]聖[者]、說く所の[聖]所捨・念・樂住・空[あり]、第三禪を得、成就して遊ぶ。これを聖[者]移動すと說く。この中何等を聖[者]移動すと說くや。若しこれ移動すと說き心樂しめば、これを聖[者]移動すと說く。この中何等を聖[者]移動せずと說くや。烏陀夷、樂滅し、苦滅し喜憂は本已に滅し、不苦不樂にして捨あり念あり、清淨にして第四禪を得、成就して遊ぶ。これを聖[者]移動せずと說く。烏陀夷、比丘欲を離れ惡不善の法を離れ覺有り、觀有り離より生ずる喜と樂とあり、初禪を得成就して遊ぶ[一八]。烏陀夷、我これ無を得ず斷を得ず過度を得ずと說く。この中何等か過度するや。烏陀夷、比丘覺觀已に息み、內靖一心にして覺無く、定より生ずる喜と樂とあり、第二禪を得成就して遊ぶ。これをこの中過度すと謂ふ。烏陀夷、我これ亦無を得ず斷を得ず過度を得ずと說く。この中何等か過度するや。烏陀夷、比丘喜欲を離れ、捨・無求にして遊び、正念・正智にして而も身に樂を覺り、謂く[彼の]聖[者]の說く所の(聖)所捨・念・樂住・空[あり]第三禪を得成就して遊ぶ。これをこの中過度すと謂ふ。烏陀夷、我これ亦無を得ず斷を得ず過度を得ずと說く。この中何等か過度するや。烏陀夷、比丘樂滅し苦滅し喜憂は本已に滅し、不苦不樂にして捨あり念あり清淨にして第四禪を得、成就して遊ぶ。これをこの中過度すと謂ふ。烏陀夷、我これ亦無を得ず斷を得ず過度を得ずと說く。この中何等か過度するや。烏陀夷、比丘一切の色想を度り有對想を滅し若干想を念ぜず、無量空、この無量空處に成就して遊ぶ。これをこの中過度すと謂ふ。烏陀夷、我これ亦無を得ず斷を得ずと說く。この中何等か過度す

【一八】「烏陀夷よ、余はこれを不十分なりといひ、捨てよといひ、超越せよといふ。何ものか又その超越なる。」

猶ほ鐵丸鐵犁に日火に燒くが如し。或は人有り二三渧の水を著く。渧遲くして續かず水すなはち速に盡く。烏陀夷、是の如く比丘捨を行ず。彼捨を行じ已りて或時意忘れ倶に欲相應の念有り、愛樂結縛し、遲觀速滅す。烏陀夷、我亦これ縛なりと說き、解脫なりと說かず。所以者何。諸結は不善なり。烏陀夷、結は不善なるが故に、我これ縛なりと說き、解脫なりと說かず。烏陀夷、倶に苦根に在りて遊行し生死無く無上愛盡に於て善く心解脫す。烏陀夷、我解說なりと說き、これ縛なりと說かず。所以者何。諸結已に盡く。烏陀夷、諸結盡くるが故に我解脫なりと說き、これ縛なりと說かず。烏陀夷、樂有り、聖[者の]樂に非ずしてこれ凡夫の樂なり、病の本・癰の本・箭刺の本なり、食有り生死有り、修すべからず習ふべからず。廣布すべからず。我彼を說くに則ち修すべからずと。烏陀夷、樂有り、これ聖[者]の樂にして無欲の樂・離の樂・息の樂・正覺の樂なり、食無く生死無く修すべく習ふべく廣布すべし。我彼を說くに則ち修すべしと。烏陀夷、云何が樂有り、聖[者]の樂に非ず、これ凡夫の樂にして病の本・癰の本・箭刺の本たり、食有り生死有り、修すべからず習ふべからず、廣布すべからず、我彼を說きて修すべかずとなすや。若し五欲に因りて樂を生じ善を生ぜば、この樂聖[者]の樂に非ず、これ凡夫の樂にして病の本・癰の本・箭刺の本たり、食有り生死有り、修すべからず習ふべからず廣布すべからず、我彼を說くに則ち修すべからずと。烏陀夷、云何が樂有り、これ聖[者]の樂・無欲の樂・離の樂・息の樂・正覺の樂にして食無く生死無く、修すべく習ふべく廣布すべく、我彼を說きて則ち修すべしとなすや。烏陀夷、若し比丘欲を離れ惡不善の法を離れ、[乃至]第四禪を得成就して遊ぶに至れば、この樂これ聖[者]の樂・無欲の樂・離の樂・息の樂・正覺の樂にして食無く生死無く、修すべく習ふべく、我彼を說くに則ち修すべしと。烏陀夷、比丘欲を離れ惡不善の法を離れ、覺有り觀有り、離より生ずる喜と樂とあり、初禪を得、成就して遊ぶ。[一七]聖[者]これ移動すと說く。この中何等を聖[者]移動すと說くや。この中覺有り觀有り、こ

【一七】聖說是移動 (Idam kho aham Udāyi iñjitasmiṁ vadāmi)「烏陀夷よ、余はこれを動搖に於て說く。」

具・奴婢象馬その數無量なり。彼比丘食訖りて中後に手足を淨洗し尼師壇を敷き一樹下に坐し清涼和調にして增上心を修するを見、彼見已りて而もこの念を作す、沙門快樂爲り、沙門涅槃の如し。我寧ろ極大富樂の金・寶・財穀・象馬・奴婢を捨て比丘を愛樂し、鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て、家無くして學道すべしと。烏陀夷、若し人この說を作し、彼の居士・居士の子縛せらるゝこと極めて堅く極めて牢くして轉た增し轉た急にして斷絕すべからず解脫を得ずと[言はゞ]、正說と爲すや。尊者烏陀夷白して曰く『不なり世尊、所以者何。彼の居士・居士の子、彼能く極大富樂の金寶・財穀・象馬・奴婢を捨て比丘を愛樂し鬚髮を剃除し袈裟衣を著け至信に家を捨て家無くして學道す。世尊、この故に彼の居士・居士の子縛せらるゝこと堅からず牢からず轉た增して急ならずして而も斷絕すべく則ち解脫を得。』『是の如く烏陀夷、若し族姓子、我その爲に、汝等これを斷ぜよと說くに、彼この說を作さず、こはこれ小事なり。何ぞ之を斷ずるに足らん。而も世尊今我をしてこれを斷ぜしめ、善逝我をしてこれを絕せしめたまふと。亦是の如く說かず、この大沙門食を消す能はずと。彼すなはちこれを斷ず。彼我に於て不可不忍を生ぜず、及び餘の比丘の善く護りて戒を持する者、亦彼の爲に不可不忍を生ぜず。烏陀夷、この故に彼の族姓子縛せらるゝこと堅からず牢からず轉た增して急ならずして而も斷絕すべく則ち解脫を得。烏陀夷、比丘捨を行ず。彼捨を行じ已りて欲相應の念を生じ愛樂結縛す。彼この不斷不住不吐を樂しむ。烏陀夷、我これ縛なりと說き、解脫なりと說かず。所以者何。諸結は不善なり。烏陀夷、結は不善なるが故に我これ縛なりと說き、解脫なりと說かず。烏陀夷、比丘捨を行ず。彼捨を行じ已りて欲想應の念を生じ愛樂結縛す。彼この斷住吐を樂します。烏陀夷、我亦これ縛なりと說き、解脫なりと說かず。所以者何。諸結は不善なり。烏陀夷、結は不善なるが故に我これ縛なりと說き、解脫なりと說かず。烏陀夷、比丘捨を行ず。彼捨を行じ已りて或時意忘れ倶に欲相應の念有り、愛樂結縛し、遲觀速滅す。烏陀夷、

の說を作し、彼の貧窮人錢財作ること無く亦勢力無し。縛せらるゝこと堅からず牢からず轉た增して急ならず、而も斷絕すべく則ち解脫を得んと[言はゞ]、正說と爲すや。』尊者烏陀夷白して曰く『不なり世尊、所以者何。彼の貧窮人錢財有ること無く亦勢力無きも、一瞎婦有り醜にして愛すべからざるも捨離すること能はず。唯一屋有り、崩壞し穿ち漏り鳥鳥の栖む所、弊れて居るべからざるも捨離すること能はず。而して一床有り、また破れ折れ壞れ弊れて臥すべからざるも捨離すること能はず。正に一瓶有り、缺けて用ふべからざるも、捨離すること能はず。比丘を愛樂し鬚髮を剃除し袈裟衣を著け至信に家を捨て家無くして學道す。世尊、この故に彼の貧窮人錢財有ること無く亦勢力無きも縛せらるゝこと極めて堅く極めて牢くして轉た增し轉た急にして斷絕すべからず解脫を得ず。』『是の如く烏陀夷、若し癡人有り、我その爲に、汝等これを斷ぜよと說くに、彼この說を作す、こはこれ小事なり。何ぞ之を斷ずるに足らん。而も世尊今我をしてこれを斷ぜしめ、善逝我をしてこれを絕せしめたまふと。亦是の如く、說くこの大沙門食を消す能はずと。彼これを斷ぜず。彼但我に於て不可不忍を生じ、及び餘の比丘の善く護りて戒を持する者亦復彼の爲に不可不忍を生ず。烏陀夷、この故に彼の癡人縛せらるゝこと極めて堅く極めて牢くして轉た增し轉た急にして斷絕すべからず解脫を得ず。烏陀夷、(4)若し族姓子、我その爲に汝等これを斷ぜよと說くに、彼この說を作さず、こはこれ小事なり。何ぞ之を斷ずるに足らん。而も世尊今我をしてこれを斷ぜしめ、善逝我をしてこれを絕せしめたまふと。亦是の如く說かず、この大沙門食を消す能はずと。彼すなはちこれを斷ず。彼我に於て不可不忍を生ぜず、及び餘の比丘の善く護りて戒を持する者亦彼の爲に不可不忍を生ぜず。烏陀夷、この故に彼の族姓子縛せらるゝこと堅からず牢からず轉た增して急ならずして而も斷絕すべく則ち解脫を得。烏陀夷、猶ほ[一六]居士・居士の子の如し。極大富樂にして多く錢財有り畜牧產業稱計すべからず、封戶・食邑・米穀・豐饒にして及び若干種の諸の生活の

【一六】富樂居士の譬。

かず轉た增して急ならずして而も斷絕すべく則ち解脫を得。』『是の如く烏陀夷、彼の族姓子我その爲に、汝等これを斷ぜよと說くに、彼この說を作さず。こはこれ小事なり。何ぞ之を斷ずるに足らん。而も世尊今我をしてこれを斷ぜしめ、善逝我をしてこれを絕せしめたまふと。亦是の如く說かず、この大沙門食を消す能はずと。彼すなはちこれを斷ず。彼我に於て不可不忍を生ぜず、及び餘の比丘の善く護りて戒を持する者亦彼の爲に不可不忍を生ぜず。烏陀夷、彼の族姓子縛せらるゝこと堅からず牢からず轉た增して急ならず、而も斷絕すべく則ち解脫を得。烏陀夷、(3)若し癡人有り、我その爲に、汝等これを斷ぜよと說くに、彼この我を作す、こはこれ小事なり。何ぞ之を斷ずるに足らん。而も世尊今我をしてこれを斷ぜしめ、善逝我をしてこれを絕せしめたまふと。亦是の如く說く、この大沙門食を消す能はずと。彼これを斷ぜず。彼但我に於て不可不忍を生じ、及び餘の比丘の善く護りて戒を持する者亦復彼の爲に不可不忍を生ず。烏陀夷、彼の癡人縛せらるゝこと極めて堅く極めて牢くして轉た增し轉た急にして斷絕すべからず解脫すべからず。烏陀夷、猶ほ【一五】貧窮人のごとし。錢財有ること無く亦勢力無し。彼一婦有り。その眼また瞎にして醜、愛すべからず。唯一屋有り、崩壞して穿ち漏り、烏鳥の栖む所、弊れて居るべからず、而して一床有り、また破れ折れ壞れ弊れて臥すべからず。正に一瓶有り、缺けて用ふべからず。彼比丘食訖り中後に手足を淨洗し尼師壇を敷き一樹下に坐し清涼和調にして增上心を修するを見、彼見已りて而もこの念を作す、沙門快樂爲り、沙門涅槃の如し。我惡にして德無し。所以者何。我一婦有り、その眼また瞎にして醜、愛すべからざるも捨離すること能はず。唯一屋有り、崩壞し穿ち漏れ烏鳥の栖む所、弊れて居るべからざるも、捨離すること能はず。而して一床有り、また破れ折れ壞れ弊れて臥すべからざるも、捨離すること能はず。正に一瓶有り、缺けて用ふべからざるも、捨離すること能はずと。比丘を愛樂し鬚髮を剃除し袈裟衣を著け至信に家を捨て家無くして學道す。烏陀夷、若し人こ

【一五】貧窮人の譬。

涕唾の爲に縛せられ、彼その中に於て或は苦しみ或は死す。この故に世尊、彼の蠅縛せらるゝこと極めて堅く極めて牢くして轉た增し轉た急にして斷絶すべからず、解脫を得ず。』『烏陀夷、(1)彼の愚癡の人、我その爲に汝等これを斷ぜよと說くに、彼この說を作し、こはこれ小事なり。何ぞ之を斷ずるに足らん。而も世尊今我をしてこれを斷ぜしめ、善逝我をしてこれを絶せしめたまふと。亦是の如く說く、この大沙門食を消す能はずと。彼これを斷ぜず。彼但我に於て不可不忍を生じ、及び餘の比丘の善く護りて戒を持する者亦復彼の爲に不可不忍を生ず。烏陀夷、彼の癡人縛せらるること極めて堅く極めて牢くして轉た增し轉た急にして斷絶すべからず、解脫を得ず。烏陀夷、(2)若し族姓子、我その爲に、汝等これを斷ぜよと說くに、彼この說を作さず、こはこれ小事なり、何ぞ之を斷ずるに足らん。而も世尊今我をしてこれを斷ぜしめ、善逝我をしてこれを絶せしめたまふと。亦是の如く說かず、この大沙門食を消す能はずと。彼すなはちこれを斷ず。彼我に於て不可不忍を生ぜず。及び餘の比丘の善く護りて戒を奉する者亦彼の爲に不可不忍を生ぜず。烏陀夷、彼の族姓子縛せらるゝこと堅からず、牢からず轉た增し急ならずして而も斷絶すべく則ち解脫を得。烏陀夷、猶ほ〔一四〕象王の如し。年六十に至りて而も以て憍慠なり摩訶能伽、牙足體具はり筋力熾盛に、彼堅く縛せられ若し努力して身を轉ずれば、彼の堅く縛せる者則便ち斷絶して本の所に還歸す。烏陀夷、若し人この說を作し、彼の大象王年六十に至りて而も以て憍慠なり摩訶能伽、牙足體具はり筋力熾盛なり。彼縛せらるゝことを極めて堅く極めて牢くして轉た增し轉た急にして斷絶すべからず解脫を得ずと〔言はゞ〕、正說と爲すや。』尊者烏陀夷白して曰く『不なり世尊、所以者何。彼の大象王年六十に至りて而も以て憍慠なり、摩訶能伽牙足體具はり筋力熾盛なり。彼堅く縛せられて若し努力して身を轉ずれば、彼の堅く縛せる者則便ち斷絶し本の所に還歸す。世尊、この故に彼の大象王年六十に至りて而も以て憍慠なり、摩訶能伽、牙足體具はり筋力熾盛なり。彼の縛堅からず牢

【一四】象王の譬、摩訶能伽は「大象」の意。

これを見て或は呼びて共に惡不淨の行を行ず。(4)世尊、昔一比丘夜闇微雨あり睒々たる掣電あり、而も非時に行き他家に入りて乞食しぬ。彼の家の婦人その時外に出でゝ食器を洗蕩しぬ。彼の時婦人[九]電光中に於て遙に比丘を見て謂ひてこれ[一〇]鬼と爲し、見已りて驚怖し身毛皆竪ち聲を失して大呼し卽便ち[一一]墮娠して而もこの語を作しぬ、尊これ鬼たり、尊これ鬼なりと。時に彼の比丘婦人に語げて曰く、妹、我鬼に非ず。我はこれ沙門にして今來りて乞食すと。その時婦人恚りて比丘を罵ること至苦至惡にして而もこの語を作しぬ、この沙門の命根をして早斷せしめよ、この沙門の父母をして早死せしめよ、この沙門の種族をして絕滅せしめよ、この沙門の腹をして裂け破壞せしめよ。禿頭の沙門黑を以て自ら纒ひ子無くして種を斷ず。汝寧ろ利刀を持ちて自らその腹を破るべし。應に非時の夜に乞食を行ずべからず。坐せ、この沙門而も我が娠を墮しぬと。世尊、我彼を憶ひ已りてすなはち歡悅を生ず。世尊、我これに因りて歡悅遍く體に充滿し正念・正智にして喜止樂定を生ず。世尊、我この定に因りて遍く體に充滿し正念正智なり。是の如く世尊、我乏しき所無く安隱快樂にして氣力常の如し。』世尊歎じて曰はく『善き哉善き哉、烏陀夷、汝今その彼の癡人の如くならず。彼の愚癡の人、我その爲に、汝等これを斷ぜよと說くに、彼この說を作す、こはこれ小事なり。何ぞ之を斷ずるに足らん。而も世尊今我をしてこれを斷ぜしめ、善逝我をしてこれを絕せしむと。また是の如く說く、この大沙門食を消す能はずと。彼これを斷ぜず。彼但[一二]我に於て不可不忍を生じ、及び餘の比丘の善く護りて戒を持する者亦復彼の爲に不可不忍を生ず。烏陀夷、彼の癡人縛せらるゝこと極めて堅く極めて牢くして轉た增し轉た急にして斷絕すべからず、解脫を得ず。烏陀夷、猶ほ[一三]蠅有るが如し。涕唾の爲に縛せられ、彼その中に在りて或は苦しみ或は死す。烏陀夷、若し人この說を作し、彼の蠅縛せらるゝこと堅からず牢からず、轉た增し急ならずして而も斷絕すべく則ち解脫を得と[言はゞ]、正說と爲すや。』尊者烏陀夷白して曰く『不なり世尊、所以者何。蠅

【九】於電光中(Vijjantari-kāya)。In the interval of lightning.
【一〇】鬼(Pisāca)。毘舍闍鬼。
【一一】墮娠。流產の意か。
【一二】於我生不可不忍(Mayi appaccayaṁ upaṭṭhapeti)。「余に對して不滿の念を懷く。」
【一三】蠅の譬。

や。』尊者烏陀夷答へて曰く『世尊、我獨り靖處に在りて燕坐思惟し、心にこの念を作す、世尊我等が爲に饒益したまふ所多く、善逝我等が爲に安隱ならしめたまふ所多し。世尊我に於て衆の苦法を除き樂法を增益したまふ。世尊我に於て無量の惡不善の法を除き無量の諸の善妙法を增益したまふと。(1)世尊昔時諸の比丘に告げたまはく、汝等過中食を斷ぜよと。世尊、我等聞き已りて堪へず忍ばず欲せず樂しまず。若し信[心]ある梵志・居士有りて衆の園に往至し廣く施して福を作せば、我等自ら手もて食を受く。而も世尊今我をしてこれを斷ぜしめ、善逝我をしてこれを絕せしめたまふと。またこの說を作す、この大沙門食を消す能はずと。然も我等世尊の威神妙德に於て敬重して堪へず。この故に我等中後食を斷ず。(2)また次に昔時世尊諸の比丘に告げたまはく、汝等夜食を斷ぜよと。世尊我等聞き已りて堪へず忍ばず欲せず樂しまず。二食中に於て最上最妙最勝最美なる者而も世尊今我をしてこれを斷ぜしめ、善逝我をしてこれを絕せしめたまふと。またこの說を作す、この大沙門食を消す能はずと。世尊、昔時一居士有りて多く種々淨妙の食飮を持ちてその家に還歸し內人に勅して曰く、汝等これを受けて一處に擧著せよ。我當に盡く共に集會して夜食すべし。朝中の爲にせずと。世尊、若し諸の家に於て極妙最上の食を施設すれば唯夜食有り。我朝中の爲にす。而も世尊今我をしてこれを斷ぜしめ、善逝我をしてこれを絕せしめたまふ。またこの說を作す、この大沙門食を消す能はずと。然も我等世尊の威神妙德に於て敬重して堪へず。この故に我等夜食を斷ず。世尊、我またこの念を作す、若し比丘有りて非時に村に入りて而も乞食を行じ、或は能く賊の[已に]作業し[未だ]作業せざるに逢ひ、或は虎に逢ひ鹿に逢ひ或は虎鹿に逢ひ、或は豹に逢ひ、羆に逢ひ或は豹羆に逢ひ、或は是の如き處に往きて、或は惡象・惡馬・惡牛・惡狗に逢ひ、或は蛇聚に値ひ、或は塊擲を得、或は杖打を得、或は溝瀆に墮ち或は厠中に墮ち、或は臥牛に乘り、或は深坑に墮ち、或は刺中に入り、空家を觀見して是の如き家に入り、若し彼入り已りて女人

【七】過中食(Divāvikāla-bhojana)。正午を過ぎて後取る食事。

【八】夜食(Rattiṁ vikāla-bhojana)。

卷の第五十

大品第二（十經有り）

〔十經とは〕加樓烏陀夷、牟梨破群那、跋陀（和利）、阿濕貝、周那、優婆離、調御（地）、癡慧地、阿梨吒、嗏帝なり。

百九十二、〔一〕加樓烏陀夷經第一

我が聞きしこと是の如し。ある時佛〔二〕鴦伽國中に遊びたまひ大比丘衆と俱に〔三〕阿惒那に往至し、〔四〕揵若精舍に住したまひぬ。その時世尊夜を過ぎて平旦衣を著け鉢を持し阿惒那に入りて而も乞食を行じ、食訖りて中後に衣鉢を收擧し手足を澡洗し尼師檀を以て肩上に著け、一林に往至し〔五〕晝經行せんと欲したまひぬ。〔六〕尊者烏陀夷亦夜を過ぎて平旦衣を著け鉢を持し阿惒那に入りて而も乞食を行じ、食訖りて中後に衣鉢を收擧し手足を澡洗し、尼師檀を以て肩上に著け、佛の後に隨侍して而もこの念を作しぬ、若し世尊今晝行したまへば、我亦彼に至りて晝行せんと。こゝに於て世尊林中に入り一樹下に至り尼師壇を敷きて結跏趺坐したまひぬ。尊者烏陀夷亦彼の林に入り佛を去ること遠からずして一樹下に至り尼師壇を敷きて結跏趺坐しぬ。その時尊者烏陀夷獨り靖處に在りて燕坐思惟し心にこの念を作しぬ、世尊我等が爲に饒益したまふ所多く、善逝我等が爲に安隱ならしめたまふ所多し。世尊我に於て衆の苦法を除き樂法を增益したまふ。世尊我に於て無量の惡不善の法を除き、無量の諸の善妙法を增益したまふと。尊者烏陀夷則ち晡時に於て燕坐より起ち佛の所に往詣し佛足に稽首し却きて一面に坐しぬ。世尊告げて曰はく『烏陀夷、乏しき所有ること無く安隱快樂にして氣力常の如きや。』尊者烏陀夷白して曰く『唯然り世尊、我乏しき所無く安隱快樂にして氣力常の如し。』世尊また問ひて曰はく『烏陀夷、云何が汝乏しき所無く安隱快樂にして氣力常の如き

〔一〕M. 66, Laṭukikopama-sutta.
〔二〕鴦伽は Aṅgā なれど、巴利本には Aṅguttarāpī とあり、鴦掘多羅、鴦勝なり。
〔三〕阿惒那（Āpaṇa）。
〔四〕揵若（Keniya）といふ結髮外道の精舍。
〔五〕晝經行（Divāvihāra）。
〔六〕尊者烏陀夷（Āyasmā Udāyi = Kāḷodāyi）。

り。こゝに或は失有るべし、弟子多く集會するを以ての故に。また次に阿難、彼の師弟子無事處・山林・樹下に住し、或は高巖の寂として音聲無く遠離して惡無く、人民有ること無きに居り、隨順して燕坐するを効ひ、或は彼處に住して遠離を學し精勤して增上心を得現法に樂居す。彼遠離を學し精勤して安隱快樂に遊行し已りて梵行を隨へて還り、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆私〔隨ふ。〕彼梵行を隨へて還り、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆私〔隨ひ〕已りてすなはち貢高にして家に還る。是の如きは煩梵行爲り。これ亦惡不善の法にして穢汚にして當來有の本たり、煩熱の苦報あり生老病死の因の煩はす所と爲る。これを煩梵行と謂ふ。阿難、煩師煩弟子に於てこの煩梵行最も不可・不樂・不愛と爲し、最も意念ぜず。阿難、この故に汝等我に於て[二六]慈事を行じ、[二七]怨事を行ずること莫れ。阿難、云何が弟子師に於て怨事を行じ、慈事を行ぜざるや。若し尊師弟子の爲に法を說き憐念愍傷し、義及び饒益を求め安隱快樂を求め、慈悲心を發す。これ饒益爲り、これ快樂爲り、これ饒益樂爲り。若し彼の弟子而も恭敬せず亦順行せず智を立せず、その心法・次法に趣向せず、正法を受けず師の教に違犯して定を得る能はざれば、是の如き弟子師に於て怨事を行じ、慈事を行ぜず。阿難、云何が弟子師に於て慈事を行じ、怨事を行ぜざるや。若し尊師弟子の爲に法を說き、憐念愍傷し義及び饒益を求め安隱快樂を求め、慈悲心を發す。これ饒益爲り、これ快樂爲り、これ饒益樂爲り。若し彼の弟子恭敬し順行して而も智を立し、その心法・次法に歸し趣向し、正法を受持し、師の教に違はず能く定を得れば、是の如き弟子師に於て慈事を行じ、怨事を行ぜず。阿難、この故に汝等我に於て慈事を行じ、怨事を行ずること莫れ。所以者何。我、陶師瓦を作るが如しと、是の如く說かず。阿難、我說くこと[二八]嚴急至苦なり。若し眞實有る者は必ず能く[二九]往かんと。」佛說是の如し。尊者阿難及び諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

中阿含經卷第四十九

【二六】行二慈事一（Mittavatāya mm dācarati）。
【二七】行二怨事一（'apattavatāya mm udācarati）。
【二八】巴利文「難じ難じ、迫り迫りて。」
【二九】「往」字、恐く「住」字の衍か。「眞實あるものは能く住立せん。」

病死の因の煩はす所と爲る。これを煩弟子と謂ふ。阿難、云何が[三五]煩梵行爲る。若し如來出世し無所著・等正覺・明 成 成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛衆祐と號し、彼無事處・山林・樹下に住し、或は高巖の寂として音聲無く、遠離して惡無く、人民有ること無きに居り、隨順して燕坐す。阿難、如來何の義を以ての故に無事處・山林・樹下に住し、或は高巖の寂として音聲無く、遠離して惡無く、人民有ること無きに居り、隨順して燕坐するや。』尊者阿難世尊に白して曰く『世尊は法の本爲り、世尊は法主爲り、法は世尊に由る。唯願はくはこれを說きたまへ。我今聞き已りて廣く義を知るを得ん。』佛すなはち告げて曰く『阿難、諦かに聽け、善くこれを思念せよ。我當に汝が爲に具さに分別して說くべし。』尊者阿難敎を受けて而も聽きぬ。佛言はく『阿難、如來未だ得ざるは得んと欲し、未だ獲ざるは獲んと欲し、未だ證せざるは證せんと欲するが爲の故に、無事處・山林・樹下に住し、或は高巖の寂として音聲無く、遠離して惡無く、人民有ること無きに居り、隨順して燕坐するに非ず。阿難、如來但二義を以ての故に無事處・山林・樹下に住し、或は高巖の寂として音聲無く、遠離して惡無く、人民有ること無きに居り、隨順して燕坐す。一には自ら現法に樂居せんが爲の故に。二には後生の人を慈愍せんが故に。或は後生の人有り如來に效ひて無事處・山林・樹下に住し、或は高巖の寂として音聲無く、遠離して惡無く人民有ること無きに居り、隨順して燕坐す。阿難、如來この義を以ての故に無事處・山林・樹下に住し、或は高巖の寂として音聲無く、遠離して惡無く、人民有ること無きにより、隨順して燕坐す。或は彼處に住して遠離を學し精勤して增上心を得、現法に樂居す。彼遠離を學し精勤して安隱快樂に遊行し已りて梵行を隨へて還り、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆私「隨ふ。」彼梵行を隨へて還り、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆私「隨ひ」已りてすなはち貢高ならずして而も家に還らず。阿難、若し彼移動せず心解說作證すれば、我彼障礙有りと說かず。若し彼四增上心を得、現法に樂居するは本精勤して放逸無くして遊行するが爲の故な

【三五】 煩梵行（Brahmacariy-upadava）。

由る。唯願はくはこれを說きたまへ。我［等］今聞き已りて廣く義を知るを得ん。』佛すなはち告げて曰く『阿難、諦かに聽け、善くこれを思念せよ。我當に汝が爲に具に分別して說くべし。』尊者阿難教を受けて而も聽きぬ。佛言はく『阿難、その[二〇]正經・歌詠・記說の故に信ある弟子世尊に隨ひて行じ奉事して命盡くるに至るにあらず。但阿難、或は彼長夜に數ばこの法を聞き誦習すること千に至り、意の惟觀ずる所、明見深達し、若しこの聖論義と相應し、心をして柔和にして諸の陰蓋無からしむるを論じ、謂く施論・戒論・定論・慧論・解脫論・解脫知見論・漸損論・不貪論・少欲論・知足論・無欲論・斷論・滅論・燕坐論・緣起論、是の如き沙門の論ずる所を論じ、得易くして得難からず。この義に因るが故に信ある弟子世尊に隨ひて行じ奉事して命盡くるに至る。阿難、是の如くして煩師爲り煩弟子爲り煩梵行爲り。阿難、云何が[二一]煩師爲る。若し師出世し棄慮思惟有りて棄慮地に往き、思惟觀雜有り、凡人にして辯才有り。彼無事處・山林・樹下に住し或は高巖の寂として音聲無く、遠離して惡無く、人民有ること無きに居り、隨順して宴坐し、或は彼處に住して遠離を學し精勤して增上心を得、現法に樂居す。彼遠離を學し精勤して安隱快樂に遊行し已りて、[二二]弟子を隨へて還る。梵志・居士・村邑國人［隨ふ。］彼弟子を隨へて還り、梵志・居士・村邑國人［隨ひ］已りてすなはち[二三]貢高にして家に還る。是の如きは煩師爲り。これ亦惡不善の法にして穢汚にして當來有の本たり、煩熱の苦報あり生死病死の因の煩はす所と爲る。これを煩師と謂ふ。阿難、云何が[二四]煩弟子爲る。彼の師の弟子彼の遠離を學し、彼無事處・山林・樹下に住し或は高巖の寂として音聲無く、遠離して惡無く、人民有ること無きに居り、隨順して燕坐し、或は彼處に住して遠離を學し精勤して增上心を得、現法に樂居す。彼遠離を學し精勤して安隱快樂に遊行し已りて弟子を隨へて還り、梵志・居士・村邑國人［隨ふ。］彼弟子を隨へて還り、梵志・居士・村邑國人［隨ひ］已りてすなはち貢高にして家に還る。是の如きは煩弟子爲り、これ亦惡不善の法にして穢汚にして當來有の本たり、煩熱の苦報あり生老

【二〇】一卷「七法經」註を見よ。

【二一】煩師(Ācariy upaddava)。阿闍梨卽ち師たる人の災患。

【二二】村里へ還り來るなり。

【二三】高慢の心を起して還り來る。

【二四】煩弟子(Antevāsupaddava)。

をして柔和にして諸の陰蓋無からしむるを論じ、謂く施論・戒論・定論・慧論・解脫論・解脫知見論・漸損論・不貪論・少欲論・知足論・無欲論・斷論・滅論・燕坐論・緣起論、是の如き沙門の論ずる所を論じ、是の如く論じ已りて心中貪伺・憂慼・惡不善の法を生ぜず。これを正知と謂ふ。また次に阿難、[一八]五欲の功德有りて可とし樂しみ、意の所念たり愛色たり、欲と相應す。眼に色を知り耳に聲を知り鼻に香を知り舌に味を知り身に觸を知る。若しは比丘心至到りてこの五欲の功德を觀じその欲の功德に隨ひ、若しは心中に行ずる者[亦然り。]所以者何。前無く後無く、この五欲の功德その欲の功德に隨ひ、心中に行ずる者[亦然り。]阿難、若し比丘觀ずる時則ちこの五欲の功德その欲の功德に隨ひ、心に行ずる者[亦然り。]と知れば、彼の比丘彼々の欲の功德、無常なりと觀じ、衰耗すと觀じ、無欲なりと觀じ、斷を觀じ滅を觀じ斷捨離を觀じ、若しこの五欲の功德欲有り染有れば彼即ち滅す。阿難、若し是の如く比丘觀ずる時則ち知れば、この五欲の功德欲有り染有るは、彼已に斷ず。これを正知と謂ふ。また次に阿難、[一九]五盛陰有り、色盛陰・覺・想・行・識盛陰なり。謂く、比丘是の如く興衰を觀じ、これ色、これ色の習、これ色の滅、これ覺・想・行・識、これ識、これ識の習、これ識の滅なりと。若しこの五盛陰我慢有れば彼即ち滅す。阿難、若し比丘有りて是の如く觀ずる時則ち五陰中我慢已に滅するを知れば、これを正知と謂ふ。阿難、この法、一向に可とし、一向に樂しみ、一向に意念し、漏無く受無く、魔の及ばざる所、惡の及ばざる所、諸の惡不善の法、穢汚にして當來有の本たり、煩熱の苦報あり、生老病死の因と[なるもの]亦及ばざる所なり。謂くこの不放逸を成就す。所以者何。不放逸に因りて諸の如來・無所著・等正覺、覺を得、不放逸根に因りて諸の無量の善法を生じ、若しは隨道品有り。阿難、この故に汝當に是の如く學すべし、我亦不放逸を成就せんと。當に是の如きを學すべし。阿難、何の義を以ての故に、信ある弟子世尊に隨ひて行じ奉事して命盡くるに至るや。』尊者阿難世尊に白して曰く『世尊は法の本爲り、世尊は法主爲り、法は世尊に

【一八】五欲(Pañca kāmaguṇā)。

【一九】五盛陰(Pañc' upādānakkhandhā)。

び、心移動せず近に趣向し清澄を得、內空に住し解するを知らば、これを正知と謂ふ。阿難、比丘當に外空を以て成就して遊ぶべし。彼外空もて成就して遊び已りて心移動せず近に趣向し清澄を得、外空に住し解す。阿難、是の如く比丘觀ずる時則ち外空もて成就して遊び、心移動せず近に趣向し清澄を得、外空に住し解するを知らば、これを正知と謂ふ。阿難、比丘當に內外空を以て成就して遊ぶべし。彼內外空もて成就して遊び已りて心移動せず近に趣向し清澄を得、內外空に住し解す。阿難、是の如く比丘觀ずる時則ち內外空もて成就して遊び、心移動せず近に趣向し清澄を得、內外空に住し解するを知らば、これを正知と謂ふ。阿難、當に不移動を以て成就して遊ぶべし。彼不移動もて成就して遊び已りて心移動せず近に趣向し清澄を得、不移動に住し解す。阿難、是の如く比丘觀ずる時則ち不移動もて成就して遊び、心移動せず近に趣向し清澄を得、不移動に住し解するを知らば、これを正知と謂ふ。阿難、彼の比丘この住處を行じて心若し[13]經行せんと欲せば、彼の比丘禪室より出で室影中に在りて露地に經行し、諸根內に在りて心外に向はず、後前想を作す。是の如く經行し已りて心中貪伺・憂慼・惡不善の法を生ぜず。これを正知と謂ふ。阿難、彼の比丘この住處を行じて心若し[14]坐定せんと欲せば、彼の比丘從ひて經行を離て經行頭に至り尼師檀を敷きて結跏趺坐す。是の如く坐定し已りて心中貪伺・憂慼・惡不善の法を生ぜず。これを正知と謂ふ。阿難、彼の比丘この住處を行じて心若し[15]所念有らんと欲せば、彼の比丘若しこの三惡不善の念、欲念・恚念・害念、この三惡不善の念を念ずること莫れ。若しこの三善念、無欲念・無恚念・無害念、當にこの三善念を念ずべし。是の如く念じ已りて心中貪伺・憂慼・惡不善の法を生ぜず。これを正知と謂ふ。阿難、彼の比丘この住處を行じて心若し[16]所說有らんと欲せば、彼の比丘若しこの非聖論の義と相應する無きを論じ、謂く[17]王論・賊論・鬪諍論・飲食論・衣被論・婦人論・童女論・婬女論・世間論・邪道論・海中論を論ずる「如き」、是の如き種々の畜生の論を論ぜず。若し聖論の義と相應し、心

【一三】經行（Caṅkama）。

【一四】坐定（Nisajja）。

【一五】所念（Vitakka）。

【一六】所說（Bhāsā）。

【一七】二六卷「優婆娑羅經」、四七卷「五支物主經」には「若干種畜生之論」といふ。こゝには十一種を舉ぐるが、巴利文には十八種あり。

念ずと[說かば]、當に知るべし、彼の比丘大に自ら疲勞す。阿難、云何が比丘內心を持し住止して一定ならしむるや。比丘はこの身、離より生ずる喜と樂、漬し盡く潤し漬し普遍く充滿し、離より生ずる喜と樂、處として遍からざる無し。阿難、猶ほ人沐浴器に澡豆を盛り水を以て澆和し和して丸と作らしめ、漬し盡く潤し漬し普遍く充滿し內外周密、處として漏る有ること無きがごとし。是の如く阿難、比丘この身離より生ずる喜と樂、漬し盡く潤し漬し普遍く充滿し、離より生ずる喜と樂、處として遍からざる無し。阿難、是の如く比丘內心を持し住止して一定を得しむ。彼內心を持し住止して一定ならしめ已りて當に內空を念ずべし。彼內空を念じ已りてその心移動し近に趣向せず、清澄を得ず內空に住せず解せず。阿難、若し比丘觀ずる時則ち內空を念じてその心移動し近に趣向せず清澄を得ず內空に住せず解せざるを知らば、彼の比丘當に[10]外空を念ずべし。彼外空を念じ已りてその心移動し近に趣向せず清澄を得ず、外空に住せず解せず。阿難、若し比丘觀ずる時則ち外空を念じてその心移動し近に趣向せず清澄を得ず、外空に住せず解せざるを知らば、彼の比丘當に[11]內外空を念ずべし。彼內外空を念じ已りてその心移動し近に趣向せず清澄を得ず、內外空に住せず解せず。阿難、若し比丘觀ずる時則ち內外空を念じてその心移動し近に趣向せず清澄を得ず、內外空に住せず解せざるを知らば、彼の比丘當に[12]不移動を念ずべし。彼不移動を念じ已りてその心移動し近に趣向せず清澄を得ず、不移動に住せず解せず。阿難、若し比丘觀ずる時則ち不移動を念じてその心移動し近に趣向せず清澄を得ず、不移動に住せず解せざるを知らば、彼の比丘彼々の心、彼々の定に於て御しまた御し、習ひまた習ひ、軟また軟、善快柔和にして攝して遠離を樂しむ。若し彼の心彼々の定に於て御しまた御し、習ひまた習ひ、軟また軟、善快柔和にして攝して遠離を樂しみ已らば、當に內空を以て成就して遊ぶべし。彼內空もて成就して遊び已りて心移動せず近に趣向し清澄を得、內空に住し解す。阿難、是の如く比丘觀ずる時則ち內空もて成就して遊

【一〇】外空(Bahiddhā suññatā)。
【一一】內外空(Ajjhatta-bahiddhāsuññatā)。
【一二】不移動(Āpañja)。

合會し、衆を欲し衆を樂しみ衆に合會して、衆を離るゝを欲せず、獨住遠離の處を樂はざれば、謂く[六]有樂・聖樂・無欲の樂、離樂・息樂・正覺の樂、無食の樂・非生死の樂、若し是の如き樂を得、易くして[得]、難からずして得んは、終にこの處無し。阿難、若し比丘有りて嘩說を欲せず嘩說を樂しまず嘩說に合會せず、衆を欲せず衆を樂しまず衆に合會せずして衆を離れんと欲し常に獨住遠離の處を樂はゞ、謂く有樂・聖樂・無欲の樂、離樂・息樂・正覺の樂、無食の樂・非生死の樂、若し是の如き樂を得、易くして[得]、難からずして得んは、必ずこの處有り。阿難、(2)比丘嘩說を欲し嘩說を樂しみ嘩說に合會[せず]、衆を欲し衆を樂しみ衆に合會[せず]、衆を[七]離れんと欲し、獨住遠離の處を樂はざるべからず。若し比丘有りて嘩說を欲し嘩說を樂しみ嘩說に合會し衆を欲し衆を樂しみ衆に合會し衆を離れんと欲せず、獨住遠離の處を樂はざれば、[八][暫]時愛樂の心解脫及び不[暫]時不移動の心解脫を得んは、終にこの處無し。阿難、若し比丘有りて嘩說を欲せず嘩說を樂しまず嘩說に合會せず、衆を欲せず衆を樂しまず衆に合會せずして衆を離れんと欲し、常に獨住遠離の處を樂はゞ、[暫]時愛樂の心解脫及び不[暫]時不移動の心解脫を得んは、必ずこの處有り。所以者何、我、一色の我をして欲樂せしむるもの有るを見ず。彼の色敗壞變易し、異時に愁慼・啼哭・憂苦・懊惱を生ず。こゝを以ての故に我この(異)住處正に覺り盡く覺る。謂く一切の色想を度し外空を行ず。阿難、我この住處を行じ已りて歡悅を生じ、我この歡悅一切の身覺り正念正智にして喜を生じ止を生じ樂を生じ定を生ず。我がこの定の如く一切の身覺り正念正智なり。阿難、或は比丘・比丘尼・優婆塞・優婆私有り共に來りて我に詣る。我すなはち彼の爲に是の如く是の如く心遠離し無欲を樂しむを行ず。我亦復彼の爲に法を說き彼を勸助す。阿難、若し比丘多く空を行ぜんと欲せば、彼の比丘當に內心を持し住止して一定ならしむべし。彼內心を持し住止して一定ならしめ已りて當に[九]內空を念ずべし。阿難、若し比丘是の如き說を作し、我內心を持し住止せず、一定ならしめず、內空を

【六】巴利文は Nekkhamma-sukha,(出離樂)、paviveka-sukha(遠離樂)、upasama-sukha(安息樂)、sambodhi-sukha(正覺の樂)の四を擧ぐ。

【七】註(五)參照。

【八】時愛樂心解脫 (Sāmāyika kantā cetovimutti)、不時不移動心解脫(Asāmāyika akuppā cetovimutti) Lord Chalmers; Deliverance of heart whether as a passing joy or as an enduring possession.「暫時的にして愛樂すべき心解脫と非暫時非動搖的の心解脫。」

【九】內空(Ajjhattaṁ suññatā)。

阿難、若し過去の諸の如來・無所著・等正覺、彼の一切この眞實空を行じて顚倒せざりき。謂く漏盡きて漏無く、無爲心解脫しぬ。阿難、若し當來の諸の如來・無所著・等正覺、彼の一切この眞實空を行じて顚倒せざらん。謂く漏盡きて漏無く、無爲心解脫せん。阿難、若し今現在の我如來・無所著・等正覺、我亦この眞實空を行じて顚倒せず。謂く漏盡きて漏無く、無爲心解脫す。阿難、汝當に是の如く學すべし。我亦この眞實空を行じて顚倒せず。謂く漏盡きて漏無く、無爲心解脫す。この故に阿難、當に是の如きを學すべし。』佛說是の如し。尊者阿難及び諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百九十一、[一]大空經第五

我が聞きしこと是の如し。ある時佛釋中迦維羅衞に遊び尼拘類園に在しぬ。その時世尊夜を過ぎて、平旦衣を著け鉢を持し迦維羅衞に入りて而も乞食を行じ、食訖りて中後に[二]加羅差摩釋精舍に往詣したまひぬ。その時加羅差摩釋精舍衆多くの床座を敷き、衆多くの比丘、中に於て住止しぬ。彼の時世尊加羅差摩釋精舍より出で、[三]加羅釋精舍に往詣したまひぬ。その時尊者阿難衆多くの比丘と加羅釋精舍中に在り集まりて[四]衣業を作しぬ。尊者阿難遙に佛の來りたまふを見、見已りて出で迎へ佛の衣鉢を取り還りて床座を敷き、水を汲みて足を洗ひぬ。佛足を洗ひ已りて加羅釋精舍に於て尊者阿難の敷く所の座に坐し告げて曰はく『阿難、加羅差摩釋精舍衆多くの床座を敷き、衆多くの比丘、中に於て住止す。』尊者阿難白して曰く『唯然り世尊、加羅差摩釋精舍衆多くの床座を敷き、衆多くの比丘、中に於て住止す。所以者何。我[等]今衣業を作す。』時に世尊また阿難に告げて曰はく『(1)比丘嘩說を欲し嘩說を樂しみ嘩說に合會[せず]、衆を欲し衆を樂しみ衆に合會[せず]、[五]衆を離れんと欲し、獨住遠離の處を樂はざるべからず。若し比丘有りて嘩說を欲し嘩說を樂しみ嘩說に

【一】M. 112, Mahā-Suññata-sutta.

【二】加羅差摩釋精舍(Kāḷakhemakassa Sakkassa vihāro)。

【三】加羅釋精舍(Ghaṭāya Sakkassa vihāro)。

【四】作衣業(Cīvarakammaṁ karoti)、法衣を作りつつあつた。

【五】原文「不欲二嘩衆一」但語勢上少しく改作を加へたり。

これを眞實空を行じて顚倒せずと謂ふ。また次に阿難、比丘若し多く空を行ぜんと欲せば、彼の比丘無量空處想を念ずること莫れ、無量識處想を念ずること莫れ。當に數ば一[九]無所有處想を念ずべし。彼是の如く知り、無量空處想を空じ無量識處想を空じ、然も唯一無所有處想空ならざる有り。若し疲勞の無量空處想に因るが故なる有るは、我これ無きなり。若し疲勞の無量識處想に因るが故なる有るは、我亦これ無し。唯疲勞の一無所有處想に因るが故なる有り。若し彼の中無なれば、こゝを以ての故に彼これ空なりと見る。若し彼に餘有れば、彼眞實有を見る。阿難、これを眞實空を行じて顚倒せずと謂ふ。また次に阿難、比丘若し多く空を行ぜんと欲せば、彼の比丘無量識處想を念ずること莫れ、無所有處想を念ずること莫れ。當に數ば一[一〇]無想心定を念ずべし。彼是の如く知り、無量識處想を空じ無所有處想を空じ、然も唯一無想心定を空ぜざる有り。若し疲勞の無量識處想に因るが故なる有るは、我これ無きなり。若し疲勞の無所有處想に因るが故なる有るは、我亦これ無し。唯疲勞の一無想心定に因るが故なる有り。若し彼の中無なれば、こゝを以ての故に彼これ空なりと見る。若し彼に餘有れば、彼眞實有を見る。阿難、これを眞實空を行じて顚倒せずと謂ふ。彼この念を作す、我本無想心定あり、本行ずる所、本思ふ所なり。若し本行ずる所、本思ふ所は、我彼を樂しまず彼を求めず、應に彼に住すべからずと。是の如く知り是の如く見、欲漏心解脫し有漏・無明漏心解脫し、解脫し已りてすなはち解脫を知り、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辦じ更に有を受けずと如眞を知る。彼是の如く知り、欲漏を空じ有漏を空じ無明漏を空じ、然も唯この我が身の[一一]六處命存を空ぜざる有り。若し疲勞の欲漏に因るが故なる有るは、我これ無きなり。若し疲勞の有漏・無明漏に因るが故なる有るは、我亦これ無し。唯疲勞のこの我が身の六處命存に因るが故なる有り。若し彼の中無なれば、こゝを以ての故に彼これ空なりと見る。若し彼に餘有れば、彼眞實有を見る。阿難、これを眞實空を行じて顚倒せずと謂ふ。謂く漏盡きて漏無く、無爲心解脫す。

【九】無所有處想（Ākiñcaññāyatana）。

【一〇】無想心定（Animitta ceto-samādhi）。想は相に作るを正しとす。

【一一】六處命存（Kāyo saḷāyataniko jīvitapaccayā）生命あるに依る六感覺ある身。

想を念ずること莫れ、無事想を念ずること莫れ。當に數ば一[六]地想を念ずべし。彼の比丘若しこの地、高下有り蛇聚有り棘刺叢有り沙有り石山嶮深河有るを見るも、彼を念ずること莫れ。若しこの地、平正にして掌の如く、處好を觀望するを見れば、當に數ば彼を念ずべし。阿難、猶ほ牛皮の如し。百釘を以て張り、極めて張托し已りて皺無く縮無し。若しこの地高下有り蛇聚有り棘刺叢有り沙有り石山嶮深河有るを見るも、彼を念ずること莫れ。若しこの地平正にして掌の如く、處好を觀望するを見れば、當に數ば彼を念ずべし。彼是の如く知り人想を空じ無事想を空じ、然も唯一地想空ならざる有り。若し疲勞の人想に因るが故なる有るは、我これ無きなり。若し疲勞の無事想に因るが故なる有るは我亦これ無し。唯疲勞の一地想に因るが故なる有り。若し彼の中無なれば、こゝを以ての故に彼これ空なりと見る。若し彼に餘有れば、彼眞實有と見る。阿難、これを眞實空を行じて顚倒せずと謂ふ。また次に阿難、比丘若し多く空を行ぜんと欲せば、彼の比丘無事想を念ずること莫れ、地想を念ずること莫れ。當に數ば一[七]無量空處想を念ずべし。彼是の如く知り、無事想を空じ地想を空じ、然も唯一無量空處想空ならざる有り。若し疲勞の無事想に因るが故なる有るは、我これ無きなり。若し疲勞の地想に因るが故なる有るは、我亦これ無し。唯疲勞の一無量空處想に因るが故なる有り。若し彼の中無なれば、こゝを以ての故に彼これ空なりと見る。若し彼に餘有れば、彼眞實有を見る。阿難、これを眞實空を行じて顚倒せずと謂ふ。また次に阿難、比丘若し多く空を行ぜんと欲せば、彼の比丘地想を念ずること莫れ、無量空處想を念ずること莫れ。當に數ば一[八]無量識處想を念ずべし。彼是の如く知り、地想を空じ無量空處想を空じ、然も唯一無量識處想空ならざる有り。若し疲勞の地想に因るが故なる有るは、我これ無きなり。若し疲勞の無量空處想に因るが故なる有るは、我亦これ無し。唯疲勞の一無量識處想に因るが故なる有り。若し彼の中無なれば、こゝを以ての故に彼これ空なりと見る。若し彼に餘有れば、彼眞實有を見る。阿難、

【六】地想(Paṭhavisaññā)。

【七】無量空處想(Ākāsānañcāyatana-saññā)。

【八】無量識處想(Viññānañcāyatana-saññā)。

所有にして無所有を說き、無因を說き無作を說き無業を說き、謂く彼々の所作善惡の施設、彼此を斷絕し破壞し、我が所說の四十大法品梵輪を轉じ、沙門・梵志・天及び魔・梵及び餘の世間能く制して而も非を言ふ者有ること無ければ、彼亦詰責愁憂恐怖有り。」佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百九十、[一]小空經第四

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び東園鹿子母堂に在しぬ。その時尊者阿難則ち晡時に於て燕坐より起ち佛の所に往詣し佛足に稽首し却きて一面に住し白して曰く『世尊ある時釋[族]中、城を[二]釋都邑と名くるに遊びたまひぬ。我その時に於て世尊に從ひて是の如き義を說きたまふを聞きぬ。阿難、[三]我多く空を行ずと。彼の世尊の所說我善く知り善く受け善く持すと爲すや。』その時世尊答へて曰はく『阿難、彼の我が所說、汝實に善く知り善く受け善く持す。所以者何。我その時より今に至るに及びて多く空を行ず。阿難、この鹿子母堂空にして象馬・牛羊・財物・穀米・奴婢無く、然も唯比丘衆空ならざる有るが如し。これを阿難、若しこの中無なりと爲さば、こゝを以ての故に我これ空なりと見る。若し此に餘有れは我眞實有と見る。阿難、これを眞實空を行じて顚倒せずと謂ふ。阿難、比丘若し多く空を行ぜんと欲せば、彼の比丘[四]村想を念ずること莫れ、人想を念ずること莫れ。當に數ば一無事想を念ずべし。彼是の如く知り、村想を空じ人想を空じ、然も唯一無事處空ならざる有り。若し[五]疲勞の村想に因るが故なる有るは、我これ無きなり。若し疲勞の人想に因るが故なる有るは我亦これ無し。唯疲勞の一無事想に因るが故なるは有り。若し彼の中無ければ、こゝを以ての故に彼これ空なりと見る。若し彼に餘有れば、彼眞實有と見る。阿難、これを眞實空を行じて顚倒せずと謂ふ。また次に阿難、比丘若し多く空を行ぜんと欲せば彼の比丘人

【一】M.121, Cūḷa-Suññata-sutta.

【二】都邑(Nigamaka)。

【三】我多行ゝ空(Suññatāvihārena bahulaṁ viharāmi)。

【四】村想(Gāmasaññā)、村といふ考。人想(Manussasaññā)、人といふ考。無事想(Araññasaññā)、森林に過ぎずといふ考。

【五】疲勞(Daratha)。Lord Chalmers は譯して agitation となす。辭書には心痛、心勞、悲歎等と解す。

る。これを正定と謂ふ。(9)云何が正解脫なる。比丘は欲心解脫し恚癡心解脫す。これを正解脫と謂ふ。(10)云何が正智なる。比丘は欲心解脫を知り恚癡心解脫を知る。これを正智と謂ふ。これを[有]學者八支を成就し漏盡の阿羅訶十支を成就すと爲す。云何が[有]學者八支を成就するや。正見を學し[乃]至正定を學す。これを[有]學者八支を成就すと爲す。云何が漏盡の阿羅訶十支を成就するや。正見を學する無く[乃]至正智を學する無し。これを漏盡の阿羅訶十支を成就すと謂ふ。所以者何。正見は邪見を斷じ、若し邪見に因りて無量の惡不善の法を生ぜば、彼亦之を斷じ、若し正見に因りて無量の正法を生ぜば、彼則ち修習し滿たし具足せしむ。[乃]至正智は邪智を斷じ、若し邪智に因りて無量の惡不善の法を生ぜば、彼亦之を斷じ、若し正智に因りて無量の善法を生ぜば、彼則ち修習して滿たし具足せしむ。これを二十善品・二十不善品と爲し、これを四十大法品を說きて梵輪を轉じ沙門・梵志・天及び魔・梵及び餘の世間能く制して而も非を言ふ者有ること無しと爲す。若し沙門・梵志者有りて我が所說の四十大法品、梵輪を轉じ、沙門・梵志・天及び魔・梵及び餘の世間能く制して而も非を言ふ者有ること無ければ、彼如法に於て十詰責有り。云何が十と爲す。若しは正見を毀呰して邪見を稱譽し、若し邪見の沙門・梵志有れば若しは彼に供養して而も彼を稱譽す。若し沙門・梵志者有りて我が所說の四十大法品、梵輪を轉じ、沙門・梵志・天及び魔・梵及び餘の世間能く制して而も非を言ふ者無ければ、彼如法に於てこれを第十詰責と謂ふ。若しは[乃]至正智を毀呰して邪智を稱譽し、若し邪智の沙門・梵志有れば、若しは彼に供養して而も彼を稱譽す。若し沙門・梵志有りて我が所說の四十大法品、梵輪を轉じ、沙門・梵志・天及び魔・梵及び餘の世間能く制して而も非を言ふ者有ること無ければ、彼如法に於てこれを第十詰責と謂ふ。若し沙門・梵志有りて我が所說の四十大法品梵輪を轉じ、沙門・梵志・天及び魔・梵及び餘の世間能く制して而も非を言ふ者有ること無ければ、これを如法に於て十詰責有りと謂ふ。若し更に餘の沙門・梵志有りて蹲踞して蹲踞を說き、無

(9)正解脫。
(10)正智。

不與取・邪婬、これを邪業と謂ふ。云何が正業なる。殺・不與取・邪婬を離る、これを正業と謂ふ。これを邪業これ邪業なりと見れば、これを正業と謂ひ、正業これ正業なりと見れば、亦正業と謂ふと爲す。彼是の如く知り已りて則便ち求學し邪業を斷じ正業を成就せんと欲す。これを正方便と謂ふ。比丘邪業を斷じ正業を成就せんと念ずるを以てこれを正念と謂ふ。この三支正業に隨ひ見方便に從ふ。この故に正見最も前に在り。(5)若し邪命これ邪命なりと見れば、これを正命と謂ひ、若し正命これ正命なりと見れば、亦正命と謂ふ。云何が邪命なる。若し求むる有りて意を滿たす無ければ若干種の畜生の呪を以てし邪命存命す。彼不如法にして衣被を求むるに非法を以てす。不如法にして飲食・床榻・湯藥、諸の生活の具を求むるに非法を以てす。これを邪命と謂ふ。云何が正命なる。若し求めず意を滿たす無きも若干種の畜生の呪を以てせず、邪命存命せず。彼如法にして衣被を求むるに則ち法を以てす。如法にして飲食・床榻・湯藥、諸の生活の具を求むるに則ち法を以てす。これを正命と謂ふ。これを邪命これ邪命なりと見れば、これを正命と謂ひ、正命これ正命なりと見れば、亦正命と謂ふと爲す。彼是の如く知り已りて則便ち求學し邪命を斷じ正命を成就せんと欲す。これを正方便と謂ふ。比丘邪命を斷じ正命を成就せんと念ずるを以てこれを正念と謂ふ。この三支正命に隨ひ見方便に從ふ。この故に正見最も前に在り。(6)云何が正方便なる。比丘は已に生ぜる惡法は斷ぜんが爲の故に發欲して方便を求め精勤し心を擧げて滅し、未だ生ぜざる惡法は生ぜざらんが爲の故に發欲して方便を求め精勤し心を擧げて滅し、未だ生ぜざる善法は生ぜんが爲の故に發欲して方便を求め精勤し心を擧げて滅し、已に生ぜる善法は住まりて忘れず退轉せず增し廣布し修習し滿具せんが爲の故に發欲して方便を求め精勤し心を擧げて滅す。これを正方便と謂ふ。(7)云何が正念なる。比丘は內身を觀じて身の如く、[乃]至覺・心・法を觀じて[覺・心・]法の如し。これを正念と謂ふ。(8)云何が正定なる。比丘は欲を離れ惡不善の法を離れ[乃至]第四禪を得、成就して遊ぶに至

(5)正命。

(6)正方便。

(7)正念。

(8)正定。

母無く、世に眞人の善處に往至し、善く去り善く向ひ、此世彼世、自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊ぶ無しと見る。これを邪見と謂ふ。云何が正見なる。謂くこの施有り齋有り亦呪說有り、善惡業有り善惡業の報有り、此世彼世有り父有り母有り、世に眞人の善處に往至し善く去り善く向ひ、此世彼世、自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊ぶ有りと見る。これを正見と謂ふ。これを邪見これ邪見なりと見れば、これを正見と謂ひ、正見これ正見なりと見れば亦正見と謂ふと爲す。彼是の如く知り已りて則便ち求學し邪見を斷じて正見を成就せんと欲す。これを正方便と謂ふ。比丘邪見を斷じ正見を成就せんと念ずるを以てこれを正念と謂ふ。この三支正見に隨ひ見方便に從ふ。この故に正見最も前に在り。(2)若し邪志これ邪志なりと見ればこれを正志と謂ひ、若し正志これ正志なりと見れば亦正志と謂ふ。云何が邪志なる。欲念・恚念・害念、これを邪志と謂ふ。云何が正志なる。無欲念・無恚念・無害念、これを正志と謂ふ。これを邪志これ邪志なりと見れば、これを正志と謂ひ、正志これ正志なりと見れば亦正志と謂ふと爲す。彼是の如く知り已りて則便ち求學し邪志を斷じ正志を成就せんと欲す。これを正方便と謂ふ。比丘邪志を斷じ正志を成就せんと念ずるを以てこれを正念と謂ふ。この三支正志に隨ひ見方便に從ふ。この故に正見最も前に在り。(3)若し邪語これ邪語なりと見れば、これを正語と謂ひ、若し正語これ正語なりと見れば、亦正語と謂ふ。云何が邪語なる。妄言・兩舌・麁言・綺語、これを邪語と謂ふ。云何が正語なる。妄言・兩舌・麁言・猗語を離る。これを正語と謂ふ。これを邪語これ邪語なりと見れば、これを正語と謂ひ、正語これ正語なりと見れば、亦正語と謂ふと爲す。彼是の如く知り已りて則便ち求學し邪語を斷じ正語を成就せんと欲す。これを正方便と謂ふ。比丘邪語を斷じ正語を成就せんと念ずるを以てこれを正念と謂ふ。この三支正語に隨ひ見方便に從ふ。この故に正見最も前に在り。(4)若し邪業これ邪業なりと見れば、これを正業と謂ひ、若し正業これ正業なりと見れば、亦正業と謂ふ。云何が邪業なる。殺生・

(2)正志。

(3)正語。

(4)正業。

而も去り佛の所に往詣し稽首作禮し却きて一面に坐し白して曰く『世尊、向に世尊この義を略說して廣く分別せずして卽ち坐より起ち室に入りて燕坐したまひぬ。尊者阿難この句を以てこの文を以て而も廣く之を說きぬ。』世尊聞き已りて歎じて曰はく『善き哉善き哉、我が弟子中眼有り智有り法有り義有り。所以者何。謂く師弟子の爲に略してこの義を說き廣く分別せず。彼の弟子この句を以てこの文を以て而も廣く之を說く。阿難の所說の如く、汝等應に當に是の如く受持すべし。所以者何。說觀義を以て應に是の如くなるべし。』佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百八十九、[一] 聖道經第三

我が聞きしこと是の如し。ある時佛拘樓瘦劒磨瑟曇なる拘樓の都邑に遊びたまひぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『一道有り、衆生をして清淨を得、愁慼啼哭を離れ、憂苦懊惱を滅して、すなはち如法を得しむ。謂く聖正定にして[二]習有り助有り亦復具有りて而も七支有り。聖正定に於て習を說き助を說き亦復具を說く。云何が七と爲す。正見・正志・正語・正業・正命・正方便・正念なり。若しこの七支を以て習助具する有りて善く趣向し心一を得れば、これを聖正定と謂ひ習有り助有り亦復具有り。所以者何。正見は正志を生じ、正志は正語を生じ、正語は正業を生じ、正業は正命を生じ、正命は正方便を生じ、正方便は正念を生じ、正念は正定を生ず。賢聖の弟子是の如く心正定あり、頓に婬怒癡を盡くし、賢聖の弟子是の如く正心解脫し、頓に生已に盡き梵行已に立ち所作已に辦じ更に有を受けずと如眞を知るを知る。彼の中正見最もその前に在り。(1)若し邪見これ邪見なりと見れば、これを正見と謂ひ、若し正見これ正見なりと見れば亦正見と謂ふ。云何が邪見なる。謂くこの施無く齋無く呪說有ること無く、善惡業無く善惡業の報無く、此世彼世無く父無く

【一】M. 117, Mahā-Cattārīsaka-sutta.

【二】習、助、具(Upanisa, parikkhāra)。

(1)正見。

『諸賢、我喩を說くを聽け。慧者喩を聞けば則ちその義を解す。諸賢、猶ほ人有り、實[7]を求むるを得んと欲し、實を求むるが爲の故に斧を持ちて林に入り、彼大樹の根莖節枝葉華實を成すを見、彼の人根莖節實に觸れず但枝葉に觸るゝが如し。諸賢の說く所亦復是の如し。世尊現に在すに捨て來りて我に就きて而もこの義を問ふ。所以者何。諸賢當に知るべし。世尊はこれ眼これ智これ義これ法・法主・法將にして、眞諦義を說き一切の義を現すは彼の世尊に由る。諸賢、應に世尊の所に往詣して而もこの義を問ふべし、世尊、これ云何、これ何の義なりやと。如し世尊說きたまはゞ諸賢等當に善く受持すべし。』時に諸の比丘白して曰く『唯然り、尊者阿難、世尊はこれ眼これ智これ義これ法・法主・法將にして眞諦義を說き一切の義を現すは彼の世尊に由る。然るに尊者阿難これ佛の侍者にして而も佛の意を知り、常に世尊の稱譽したまふ所と爲り、及び諸の智[者]梵行人[の稱譽する所と爲る。』尊者阿難、能く廣く世尊の向に略說したまひし所の義を分別せん。唯願はくは尊者阿難、慈愍の爲の故に而も廣く之を說かれよ。』尊者阿難諸の比丘に告げぬ『諸賢等、共に我が說く所を聽け。諸賢、邪見[8]は非法にして正見はこれ法なり。若し邪見に因りて無量の惡不善の法を生ずる有れば、これを非義[9]と謂ふ。若し正見に因りて無量の善法を生ぜば、これを是義と謂ふ。諸賢、乃至[10]邪智は非法にして正智は是法なり。若し邪智に因りて無量の惡不善の法を生ぜば、これを非義と謂ひ、若し正智に因りて無量の善法を生ぜば、これを是義と謂ふ。諸賢、謂く世尊略してこの義を說き廣く分別せずして卽ち坐より起ち室に入りて燕坐したまひぬ、この故に汝等當に法と非法、義と非義とを知るべし。法と非法、義と非義とを知り已りて汝等當に如法如義を學すべしとて。この世尊略して說き廣く分別したまはざりし義、我この句を以てこの文を以て廣く說くこと是の如し、諸賢、往きて佛に向ひ具に陳すべし。若し世尊所說の義の如くば、諸賢等すなはち受持すべし。』こゝに於て諸の比丘尊者阿難の所說を聞き善く受持し誦し卽ち坐より起ち尊者阿難を遶ること三匝にして

【七】實(Sāra)、樹の心をいふ。

【八】邪見(Micchādiṭṭhi)、正見(Sammādiṭṭhi)。

【九】非義(Anattha)、是義(Attha)。

【一〇】邪正見の次に邪正思惟、語、業、命、精進、念、定、智、解脫の九あり。十邪正道なり。

所、虚妄言せずこれ眞これ實にして顯示分別してその行を施設し流布し次第に說く。他の意の弊惡を斷ぜんと欲し難詰して則ち說くべし。正法中に於て而も稱すべく、自ら已に知る所を立して彼の法人法衆の前に住して自ら我智慧有りて普く知ると稱す。中に於て若し是の如く智慧の事を說く者有れば、これを法衆と謂ふ。この故に汝等當に法と非法、義と非義とを知るべし。法と非法、義と非義とを知り已りて汝等當に如法如義を學すべし。』佛是の如きを說きたまひて、卽ち座より起ち室に入りて燕坐したまひぬ。こゝに於て諸の比丘すなはちこの念を作しぬ、諸賢、當に知るべし。世尊略してこの義を說き廣く分別せずして卽ち坐より起ち室に入りて燕坐したまひぬ、この故に汝等當に法と非法、義と非義とを知るべし。法と非法、義と非義とを知り已りて汝等當に如法如義を學すべしとて彼[等]またこの念を作しぬ、諸賢、誰か能く廣く世尊の向に略說したまひし所の義を分別せんと。彼[等]またこの念を作しぬ、尊者阿難これ佛の侍者にして而も佛の意を知り、常に世尊の稱譽したまふ所と爲り、及び諸の智[者]梵行人[の稱譽する所と爲る]。尊者阿難能く廣く世尊の向に略說したまひし所の義を分別せん。諸賢、共に尊者阿難の所に往詣しこの義を說かことを請はん。若し尊者阿難分別を爲さば我等當に善く受持すべしと。』こゝに於て諸の比丘尊者阿難の所に往詣し共に相問訊し却きて一面に坐し白して曰く『尊者阿難、當に知るべし、世尊略してこの義を說き廣く分別せずして卽ち坐より起ち室に入りて燕坐したまひぬ、汝等當に法と非法、義と非義とを知るべし。法と非法、義と非義とを知り已りて汝等當に如法如義を學すべしと。我等すなはちこの念を作しぬ、諸賢、誰か能く廣く世尊の向に略說したまひし所の義を分別せんと。我等またこの念を作しぬ、尊者阿難これ佛の侍者にして而も佛の意を知り、常に世尊の稱譽したまふ所と爲り、及び諸の智[者]梵行人[の稱譽する所と爲る]。尊者阿難能く廣く世尊の向に略說したまひし所の義を分別せんと。唯願はくは尊者阿難、慈愍の爲の故に而も廣く之を說かれよ。』尊者阿難告げて曰く

騈車叛兵走男走女に逢ひ、或は是の如き道を行きて惡象・惡馬・惡牛・惡狗に逢ひ、或は蛇衆に値ひ或は塊擲を得、或は杖打を得、或は溝瀆に墮ち或は廁中に墮ち、或は臥牛に乘り或は深坑に墮ち或は刺中に入り、或は村邑を見て名を問ひ道を問ひ男を見、女を見て姓を問ひ名を問ひ或は室舍を觀、或は是の如くして族に入り、彼既に入り已りて而も我に問ひて曰く、尊、何に從ひて行くやと。我彼に答へて曰く、諸賢、我惡道に趣くと。瞿曇、沙門蠻頭是の如き比の五百思を思ひ、若し異沙門・梵志有りて一切知り一切見れば、自ら我無餘有りて無餘を知ると稱し、彼の過有るを見る。』こゝに於て世尊經行を離れ經行頭に至り尼師檀を敷きて結跏趺坐し諸の比丘に問ひたまはく『我が說く所の智慧の事汝等受持するや。』彼の諸の比丘默然として答へず。世尊また再び三たびに至りて問ひて曰はく『諸の比丘、我が說く所の智慧の事汝等受持するや。』諸の比丘亦再び三たびに至りて默然として答へざりき。彼の時一比丘有り卽ち坐より起ち偏に著衣を袒ぎ叉手を佛に向け白して曰く『世尊、今正にこの時なり、善逝、今正にこの時なり。若し世尊諸の比丘の爲に智慧の事を說きたまはゞ、諸の比丘世尊に從ひて聞き當に善く受持すべし。』世尊告げて曰はく『比丘、諦かに聽け、善く之を思念せよ。我當に汝が爲に具さに分別して說くべし。』時に諸の比丘白して曰く『唯然り。當に教を受けて聽くべし。』佛また告げて曰はく『凡そ二衆有り。一に曰く【六】法衆、二に曰く非法衆なり。何者か非法衆なる。或は一有り非法を行じ非法を說き、彼の衆亦非法を行じ非法を說く。彼の非法人非法衆の前に住し自ら已に知る所、而も虛妄言してこれ眞實ならず、顯示分別してその行を施設し流布し次第に法を說く。他の意の弊惡を斷ぜんと欲し難詰して說くべからず。正法律中に於て稱すべからず、自ら已に知る所を立して彼の非法人非法衆の前に住して自ら我智慧有りて普く知ると稱す。中に於て若し是の如く智慧の事を說く者有れば、これを非法衆と謂ふ。何者か法衆なる。或は一【人】有り法を行じ法を說き、彼の衆亦法を行じ法を說き、彼の法人法衆の前に住し自ら已に知る

【六】 法衆、非法衆（Dhammaparisā, Adhammaparisā）。

拔絕して終にまた生ぜずと。漏盡の比丘、梵行を知るを得、己に法を立する者は應に是の如く答ふべし。汝等之を聞きて當に善く然可し歡喜し奉行すべし。善く彼を然可し歡喜し奉行し已りて當にまた是の如く彼の比丘に語ぐべし、賢者、初め說きて我等已に可とし意歡喜しぬ。然も我等賢者に從ひて上また上、智慧應答の辯才を求めんと欲しぬ。こゝを以ての故に我等賢者に從ひて問ひてまた問ひしのみと。』佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百八十八、阿夷那經第二[一]

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び[二]東園鹿子母堂に在しぬ。その時世尊則ち晡時に於て燕坐より起ち堂上より來下し、堂影中に在りて露地に經行し、諸の比丘の爲に廣く甚深微妙の法を說きたまひぬ。彼の時異學[三]阿夷那なる[四]沙門蠻頭の弟子、遂に世尊の燕坐より起ち堂上より來下し、堂影中に在りて露地に經行し、諸の比丘の爲に廣く甚深微妙の法を說きたまふを見、異學阿夷那なる沙門蠻頭の弟子、佛の所に往詣し共に相問訊し佛に隨ひて經行しぬ。世尊迴顧して問ひて曰はく[五]『阿夷那、沙門蠻頭、實に五百思を思ひ、若し異沙門・梵志有りて一切知り一切見れば、[彼]自ら我無餘有りて無餘を知ると稱し、彼の過有るを見て自ら過有りと稱するや。』異學阿夷那なる沙門蠻頭の弟子答へて曰く『瞿曇、沙門蠻頭實に五百思を思ひ、若し異沙門・梵志有りて一切知り一切見れば、[彼]自ら我無餘有りて無餘を知ると稱し、彼の過有るを見て自ら過有りと稱す。』世尊また問ひて曰はく『阿夷那、云何が沙門蠻頭五百思を思ひ、若し異沙門・梵志有りて一切知り一切見れば、自ら我無餘有り無餘を知ると稱し、彼の過有るを見て自ら過有りと稱するや。』異學阿夷那なる沙門蠻頭の弟子答へて曰く『瞿曇、沙門蠻頭是の如き說を作す、若しは行・若しは住・若しは坐・若しは臥・若しは眠・若しは寤、或は晝或は夜、常に礙ゆること無くして知見し、或時は驕象逸馬

【一】 A. v. 229, 224.
【二】 東園鹿子母堂舍(Pubbārāma Migāramātu-pāsāda)。舍衞城の東にある故東園といふ。舍衞城長者彌伽羅はもと外道の信者なりしが、その婦毘舍佉に化せられて信佛者となり、よりてその婦を母と呼びて貴びしより「彌伽羅母」の名を生じたり。鹿子母はその意譯にして、要するに毘舍佉信女の事なり。
【三】 阿夷那(Ajita)。
【四】 沙門蠻頭 (Paṇḍita)。こゝには蠻頭の弟子とあれど、巴利文には同梵行者とあり。
【五】 巴利文にてはこれは阿夷那の言なり「尊瞿曇よ、パンヂタと名くる同梵行者あり、五百種の心所を思惟せり。これ等[の心所]によりて過ありとさるれば、異學者自ら過ありと知る。」

翔するが如し。我亦是の如し。諸賢、我已にこの聖戒身及び極知足を成就し、また諸根を守り常に閉塞を念じ明達を念欲し念心を守護して而も成就するを得、恒に意を起さんと欲し、若し眼に色を見るも然も相を受けず亦色を味はず。謂く忿諍の故に眼根を守護し心中貪伺・憂慼・惡不善の法を生ぜず、彼に趣向するが故に眼根を守護しぬ。是の如く耳・鼻・舌・身［亦然り。］若し意に法を知るも然も相を受けず亦法を味はず。謂く忿諍の故に、意根を守護し心中貪伺・憂慼・惡不善の法を生ぜず、彼に趣向するが故に意根を守護しぬ。諸賢、我已にこの聖戒身及び極知足を成就し、諸根を聖護し、正に出入を知り善觀分別し、屈伸・低仰・儀容庠序、善く僧伽梨及び諸の衣鉢を著け、行住坐臥・眠寤・語默、皆正に之を知りぬ。諸賢、我已にこの聖戒身及び極知足を成就し、亦聖戒を成就し諸根を護り、正に出入を知るを得、獨住遠離して無事處に在り、或は樹下・空・安靖處・山巖・石室・露地・穰積に至り、或は林中に至り、或は塚間に在り、諸賢、我已に無事處に在り、或は樹下・空・安靖處に至りて尼師檀を敷きて結跏趺坐し正身正願にして反念向はず、貪伺を斷除し心に諍有ること無く、他の財物、諸の生活の具を見て貪伺を起し我が得たらしめんと欲せず、我貪伺に於てその心を淨除しぬ。是の如く瞋恚・睡眠・調悔［亦然り。］疑を斷じ惑を度し諸の善法に於て猶豫有ること無く、我疑惑に於てその心を淨除しぬ。諸賢、我已にこの五蓋・心穢・慧羸を斷じ欲を離れ惡不善の法を離れ、［乃至］第四禪を得成就して遊ぶに至りぬ。諸賢、我已に是の如き定心を得淸淨にして穢無く煩無く柔軟にして善く住し不動心を得、漏盡通智に趣向し作證しぬ。諸賢、我この苦の如眞を知りこの苦の習を知りこの苦の滅を知りこの苦滅道の如眞を知り、この漏を知りこの漏の習を知りこの漏の滅を知りこの漏滅道の如眞を知り、彼是の如く知り是の如く見、欲漏心解脫し、有漏・無明漏心解脫し、解脫し已りてすなはち解脫を知り、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辦じ更に有を受けずと如眞を知りぬ。諸賢、我是の如く知り是の如く見、內身の有識及び外の諸の相、一切の我・我行及び慢使斷知し根本を

せしめ定を得ざらしむる、是の如き言を斷じ、若し所說有れば淸和柔潤にして耳に順ひ心に入り喜ぶべく、愛すべく、他をして安樂ならしめ言聲具了し、人をして畏れしめず、他をして定を得しむる、是の如き言を說き、我麁言に於てその心を淨除しぬ。諸賢、我綺語を離れ綺語を斷じ、時說・眞說・法說・義說・止息說・樂止息說し、事時に順ひて宜しきを得、善く敎へ善く呵し、我綺語に於てその心を淨除しぬ。諸賢、我治生を離れ治生を斷じ、稱量及び斗斛を棄捨し亦貨を受けず人を縛束せず斗量を折るを望まず、小利を以て人を侵欺せず、我治生に於てその心を淨除しぬ。諸賢、我寡婦童女を受くるを離れ寡婦童女を受くるを斷じ、我寡婦童女を受くるに於てその心を淨除しぬ。諸賢、我奴婢を受くるを離れ奴婢を受くるを斷じ、我奴婢を受くるに於てその心を淨除しぬ。諸賢、我象馬牛羊を受くるを離れ象馬牛羊を受くるを斷じ、我象馬牛羊を受くるに於てその心を淨除しぬ。諸賢、我雞猪を受くるを離れ雞猪を受くるを斷じ、我雞猪を受くるに於てその心を淨除しぬ。諸賢、我田業店肆を受くるを離れ田業店肆を受くるを斷じ、我田業店肆を受くるに於てその心を淨除しぬ。諸賢、我生稻麥豆を受くるを離れ生稻麥豆を受くるを斷じ、我生稻麥豆を受くるに於てその心を淨除しぬ。諸賢、我酒を離れ酒を斷じ、我飲酒に於てその心を淨除しぬ。諸賢、我高廣大床を離れ高廣大床を斷じ、我高廣大床に於てその心を淨除しぬ。諸賢、我華鬘・瓔珞・塗香・脂粉を離れ、華鬘・瓔珞・塗香・脂粉を斷じ、我華鬘・瓔珞・塗香・脂粉に於てその心を淨除しぬ。諸賢、我歌舞・倡伎及び往觀聽を離れ歌舞・倡伎及び往觀聽を斷じ、我歌舞・倡伎・往觀聽に於てその心を淨除しぬ。諸賢、我生色像寶を受くるを離れ生色像寶を受くるを斷じ、我生色像寶を受くるに於てその心を淨除しぬ。諸賢、我過中食を離れ過中食を斷じ、一食して夜食・學時食せず、我過中食に於てその心を淨除しぬ。諸賢、我已にこの聖戒身を成就しぬ。また知足を行じ、衣は形を覆ふを取り食は軀を充すを取り、我往く所の處、衣鉢自ら隨ひ顧戀有ること無し。猶ほ鴈鳥兩翅と倶に空中を飛

【一〇】「[illegible]縮刷經」にては「聖戒聚。」

の如く彼の比丘に問ふべし、賢者、云何が知り云何が見て、この內身共有の識及び外の諸の相、一切の我・我作及び慢使を斷知し、根本を拔絕して終にまた生ぜざるやと。漏盡の比丘、梵行を知るを得、已に法を立する者は應に是の如く答ふべし、諸賢、[八]我本未だ出家學道せざりし時、生・老病死・啼泣・困苦・愁慼・憂悲を厭ひ、この大苦陰を斷ぜんと欲しぬ。諸賢、我厭患し已りて而もこの觀を作しぬ、在家は至狹塵勞の處、出家學道は發露曠大なり。我今家に在りて鎖の爲に鎖され、形壽を盡して梵行を淨修するを得ず。我寧ろ少しの財物及び多くの財物を捨て、少しの親族及び多くの親族を捨て、鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て、家無くして學道すべしと。諸賢、我後時に於て少しの財物及び多くの財物を捨て、少しの親族及び多くの親族を捨て、鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道しぬ。諸賢、我出家學道し族相を捨て已りて、[九]比丘の要を受け禁戒を修習し從解脫を守護し、又復善く威儀禮節を攝し、纖介の罪を見て常に畏怖を懷き學要を受持しぬ。諸賢、我殺を離れ殺を斷じ刀杖を棄捨し慚有り愧有り、慈悲心有りて一切乃至蜫蟲を饒益し、我殺生に於てその心を淨除しぬ。我不與取を離れ不與取を斷じ、與へられて而して後取り與取を樂しみ常に布施を好み歡喜して悋しむこと無くその報を望まず。我不與取に於てその心を淨除しぬ。諸賢、我非梵行を離れ非梵行を斷じ梵行を勤修し妙行を精勤し淸淨にして穢無く欲を離れ婬を斷じ、我非梵行に於てその心を淨除しぬ。諸賢、我妄言を離れ妄言を斷じ眞諦言にして眞諦を樂しみ眞諦に住して移動せず、一切信ずべくして世間を欺かず、我妄言に於てその心を淨除しぬ。諸賢、我兩舌を離れ兩舌を斷じ不兩舌を行じ他を破壞せず、此に聞き彼に語げて此を破壞せんと欲せず、彼に聞き此に語げて彼を破壞せんと欲せず、離るれば合せんと欲し、合すれば歡喜し、群黨を作らず群黨を樂しまず群黨を稱せず、我兩舌に於てその心を淨除しぬ。諸賢、我麁言を離れ麁言を斷じ、若し所言有れば辭氣麁獷、惡聲の耳に逆ひ衆の喜ばざる所、衆の愛せざる所、他をして苦惱

【八】以下一九卷「伽絺那經」參照。

【九】「伽絺那經」にては「受比丘學」

し歡喜し奉行すべし。善く彼を然可し歡喜し奉行し已りて當にまた是の如く彼の比丘に問ふべし、賢者、世尊[六]內の六處を說きたまふ。眼處・耳・鼻・舌・身・意處なり。賢者、この內の六處を云何が知り云何が見て、受くる所無く漏盡き心解脫すと知るを得るやと。漏盡の比丘、梵行を知るを得、已に法を立する者は應に是の如く答ふべし、諸賢、我眼及び眼識に於て眼識に知る法倶に知り、二法知り已る。諸賢、若し眼及び眼識、眼識に知る法の樂み已に盡き、彼盡く欲無く滅し息止し、受くる所無く漏盡き心解脫すと知るを得。是の如く耳・鼻・舌・身［亦然り。］意及び意識［に於て、］意識に知る法倶に知り、二法知り已る。諸賢、若し意及び意識、意識に知る法の樂み已に盡き、彼盡く欲無く滅し息止し、受くる所無く漏盡き心解脫すと知るを得。諸賢、我この內の六處を是の如く知り是の如く見て、受くる所無く漏盡き心解脫すと知るを得と、漏盡の比丘、梵行を知るを得、已に法を立する者は應に是の如く答ふべし。汝等之を聞きて當に善く然可し歡喜し奉行すべし。善く彼を然可し歡喜し奉行し已りて當にまた是の如く彼の比丘に問ふべし、賢者、世尊[七]六界を說きたまふ。地界・水界・火界・風界・空界・識界なり。賢者、この六界を云何が知り云何が見て、受くる所無く漏盡き心解脫すと知るを得るやと。漏盡の比丘、梵行を知るを得、已に法を立する者は應に是の如く答ふべし、諸賢、我地界これ我所なりと見ず、我地界所に非ず、地界これ神に非ず。然も謂く三受は地界に依りて住し識使の著する所、彼盡く欲無く滅し息止し、受くる所無く漏盡き心解脫すと知るを得。是の如く水・火・風・空［亦然り。］識界これ我所に非ず、我識界所に非ず、識界これ神に非ず。然も謂く三受は識界に依りて住し識使の著する所、彼盡く欲無く滅し息止し、受くる所無く漏盡き心解脫すと知るを得。諸賢、我この六界を是の如く知り是の如く見て、受くる所無く漏盡き心解脫すと知るを得と、漏盡の比丘、梵行を知るを得、已に法を立する者は應に是の如く答ふべし。汝等之を聞きて當に善く然可し歡喜し奉行すべし。善く彼を然可し歡喜し奉行し已りて當にまた是

【六】內六處(Cha ajjhattikāni āyatanāni)。

【七】六界(Cha dhātuyo)。

にまた是の如く彼の比丘に問ふべし、賢者、世尊四食を說きたまひ、衆生これを以て存し長養するを得。云何が四と爲す。一に曰く〔四〕摶食麁細、二に曰く更樂、三に曰く意念、四に曰く識なりと。賢者、云何がこの四食を知り云何が見て、受くる所無く漏盡き心解脫すと知るを得るやと。漏盡の比丘、梵行を知るを得已に法を立する者は應に是の如く答ふべし、諸賢、我摶食に於て意高からず下からず、倚らず縛されず、染せず著せず、解を得、脫を得、盡く解脫を得、心顚倒を離れ、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辨じ更に有を受けずと如眞を知る。是の如く更樂・意念〔亦然り。〕識食〔に於て〕高からず下からず、倚らず縛されず、染せず著せず、解を得、脫を得、盡く解脫を得、心顚倒を離れ、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辨じ更に有を受けずと如眞を知る。諸賢、我この四食を是の如く知り是の如く見て、受くる所無く漏盡き心解脫すと知るを得と、漏盡の比丘梵行を知るを得已に法を立する者應に是の如く答ふべし。汝等之を聞きて當に善く然可し歡喜し奉行すべし。善く彼を然可し歡喜し奉行し已りて當にまた是の如く彼の比丘に問ふべし、賢者、世尊〔五〕四說を說きたまふ。云何が四と爲す。一に曰く見見說、二に曰く聞聞說、三に曰く識識說、四に曰く知知說なり。賢者、この四說を云何が知り云何が見て、受くる所無く漏盡き心解脫すと知るを得るやと。漏盡の比丘、梵行を知るを得、已に法を立する者は應に是の如く答ふべし、諸賢、我見見說に於て高からず下からず、倚らず縛されず、染せず著せず、解を得脫を得、盡く解脫を得、心顚倒を離れ、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辨じ更に有を受けずと如眞を知る。是の如く聞聞・識識〔亦然り。〕知知說〔に於て〕高からず下からず、倚らず縛されず、染せず著せず、解を得、脫を得、盡く解脫を得、心顚倒を離れ、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辨じ更に有を受けずと如眞を知る。諸賢、我この四說を是の如く知り是の如く見て、受くる所無く漏盡き心解脫すと知るを得と、漏盡の比丘、梵行を知るを得、已に法を立する者は應に是の如く答ふべし。汝等之を聞きて當に善く然可

【四】摶食麁細(Kabaliṅkārāhāra)、更樂食(Phassāhāra)意念食(Manosañcetanāhāra)識食(Viññāṇāhāra)。

【五】四說(Vohāra)、見見說(Diṭṭhe diṭṭhavāditā)、聞聞說(Sute sutavāditā)、識識說(Mute mutavāditā)、知知說(Viññāte viññātavāditā)。

雙品第一（五經あり）

〔五經とは〕說智・阿夷那・拘樓に聖道を明し、東園に小空を論じ、大空最も後に在り。

百八十七、[一]說智經第一

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『若し比丘有り來りて汝に向ひて、已に得る所の智を說き、我生已に盡き梵行已に立ち所作已に辨じ更に有を受けずと如眞を知ると〔いはゞ〕、汝等之を聞きて當に善く然可し歡喜し奉行すべし。善く彼を然可し歡喜し奉行し已りて、當にまた是の如く彼の比丘に問ふべし、賢者、世尊[二]五盛陰、色盛陰・覺・想・行・識盛陰を說きたまふ。賢者、この五盛陰を云何が知り云何が見て、[三]受くる所無く漏盡き心解脫すと知るを得るやと。漏盡の比丘、梵行を知るを得、已に法を立する者は應に是の如く答ふべし、諸賢、色盛陰は果に非ず、空虛にして欲すべからず、恒有せず倚るべからず、變易の法なりと、我是の如きを知り、若し色盛陰に於て欲有り染有り著あり縛・縛著使有れば、彼盡く欲無く滅し息止し、受くる所無く漏盡き心解脫すと知るを得、是の如く覺・想・行〔亦然り。〕識盛陰は果に非ず空虛にして欲すべからず、恒有せず倚るべからず、變易の法なりと、我是の如きを知り、若し識盛陰に於て欲有り染有り著有り縛・縛著使有れば、彼盡く欲無く滅し息止し、受くる所無く漏盡き心解脫すと知るを得。諸賢、我五盛陰を是の如く知り是の如く見て、受くる所無く漏盡き心解脫すと知るを得と。漏盡の比丘、梵行を知るを得、已に法を立する者は應に是の如く答ふべし。汝等之を聞きて當に善く然可し歡喜し奉行すべし。善く彼を然可し歡喜し奉行し已りて當

【一】M. 112, Chabbisodhana-sutta.

【二】五盛陰（Pañc' upādānakkhandhā）。

【三】無所受漏盡心解脫（Anupādāya āsavehi cittaṃ vimuttaṃ）。

如きは境界なり、是の如きは沙門なり。我是の如くこの正法律を成就すと。有信の弟子往きて如來を見、如來に奉持し如來に從ひて法を聞く。如來爲に法を說きて、上また上、妙また妙、善く黑白を除く。如來爲に法を說きて上また上、妙また妙、善く黑白を除けば、是の如く是の如く聞き已りて一法を知斷し、諸の法に於て究竟を得、世尊を靖信し、彼世尊正盡覺なりとすと。また應に彼に問ふべし、賢者何の行有り何の力有り何の智有りて賢者をして一法を知斷せしめ、諸の法に於て究竟を得、世尊を靖信し、彼世尊正盡覺なりとするやと。彼是の如く答へん、賢者、我世尊の心を知らず、亦餘事を知るに非ず。我世尊に因りて是の如き靖信有り、世尊我が爲に法を說きて上また上、妙また妙、善く黑白を除きたまふと。賢者、如如に世尊我が爲に法を說きたまへば、是の如く是の如く我聞き、如來我が爲に法を說きて上また上、妙また妙、善く黑白を除きたまふ。是の如く是の如く我聞き已りて一法を知斷し、諸の法に於て究竟を得、世尊を靖信し、彼世尊正盡覺なりとす。賢者、我この行有りこの力有りこの智有りて我をして一法を知斷せしめ、諸の法に於て究竟を得、世尊を靖信し、彼世尊正盡覺なりとすと。若しこの行有りこの力有り深く如來に著し信根已に立てば、これを信、見本不壞にして智と相應すと謂ひ、沙門・梵志・天及び魔・梵及び餘の世間、能く奪ふこと有ること無し。是の如く如來を求解し、是の如く正に如來を知る。』佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

中阿含經卷第四十八

所の眼耳に知らるゝ法、彼の尊者に有りと知る。若し此有らば當にまた更に求むべし。彼の尊者長夜に此法を行ずと爲すや暫く行ずと爲すやと。若し求むる時則ち彼の尊者長夜に此法を行じ、暫く行ずるにあらずと知る。若し常に行ぜば當にまた更に求むべし。彼の尊者　名譽の爲にすと爲すや利義の爲にこの禪に入ると爲すや、名譽の爲にせず、利義の爲にこの禪に入らずとなすやと。若し求むる時則ち彼の尊者災患の爲の故にこの禪に入るに非ずと知る。若しこの說を作す有り、彼の尊者樂しみ行じて恐怖するに非ず、欲を離れ欲を行ぜず欲已に盡くと[說かば]、すなはち應に彼に問ふべし、賢者、何の行有り何の力有り何の智有りて賢者をして自ら正觀して是の如く說き、彼の尊者樂しみ行じて恐怖するに非ず、欲を離れ欲を行ぜず欲已に盡く[と說か]しむるやと。彼若しこの答を作し、賢者、我彼の心を知らず亦餘事を知るに非ず。然も彼の尊者或は獨住し或は衆に在り或は集會に在り、若しは善逝有り、若しは善逝の化する所と爲り、宗主と爲る。食に因りて彼の賢者を見るべし。我自ら知らず、我彼の尊者に從ひて聞き面前に諮受しぬ、我樂しみ行じて恐怖するに非ず、欲を離れ欲を行ぜず欲已に盡くと。賢者、我この行有りこの力有りこの智有りて我をして自ら正觀して是の如く說き、彼の尊者樂しみ行じて恐怖するに非ず、欲を離れ欲を行ぜず欲已に盡くと[說か]しむと[說かば]、中に於て當にまた彼の如來の法を問ふべし。若し穢汚有りて眼耳に知らるゝ法、彼處に有りてこの法滅盡して餘無きや、若し雜有りて眼耳に知らるゝ法、彼處に有りてこの法滅盡して餘無きや、若し白淨有りて[知らるゝ]法、彼處に有りてこの法滅盡して餘無きやと。如來彼の爲に答へん、若し穢汚有りて眼耳に知らるゝ法、彼處に有りてこの法滅盡して餘無し。若し雜有りて眼耳に知らるゝ法、彼處に有りてこの法滅盡して餘無し。若し穢汚有りて眼耳に知らるゝ法は、如來滅斷し根本を拔絕して終にまた生ぜず。若し雜有りて眼耳に知らるゝ法は、如來滅斷し根本を拔絕して終にまた生ぜず。若し白淨有りて[知らるゝ]法は、是の如きは我が白淨なり、是の

【七】長夜行(Dīgharattaṃ samāpanno)。
【八】この一段漢譯の意明瞭を缺く。巴利文「この尊者比丘は名高く譽高くなれりや、茲に彼に或種の災患ありや。」此處に ñattajjhāpanna の語あり、jjhā の綴りに捕はれて「禪」の字を持出せしかと思ふ。
【九】災患(ādīnava)。

三族姓子、尊者阿那律陀・難提・金毘羅有りと。長鬼天、若し彼の三族家、この三族姓子鬚髮を剃除し、袈裟衣を著け、至信に家を捨て家無くして學道し、彼の三族家、[二]この三族姓子の所因所行を憶へば、彼亦長夜に大善利を得、安隱快樂なり。若し彼の村邑及び天・魔・梵・沙門・梵志、人より天に至るまで、この三族姓子の所因所行を憶へば、彼亦長夜に利饒益を得安隱快樂なり。長鬼天、この三族姓子是の如く大如意足有り大威德有り大福祐有り大威神有り。』佛說是の如し。この三族姓子及び長鬼天佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百八十六、[一] 求解經第五

我が聞きしこと是の如し。ある時佛拘樓瘦劍摩瑟曇なる拘樓の都邑に遊びたまひぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『彼の意に緣りて他心如眞を知らざれば、彼世尊正盡覺知るべからず。云何が如來を求解せんや。』時に諸の比丘世尊に白して曰く『世尊は法の本爲り、世尊は法の主爲り、法は世尊に出る。唯願はくは之を說きたまへ。我等聞き已りて廣く義を知るを得ん。』佛すなはち告げて曰はく『比丘、諦かに聽け、善く之を思念せよ。我當に汝が爲に具さに分別して說くべし。』時に諸の比丘敎を受けて聽きぬ。世尊告げて曰はく『彼の意に緣りて他心如眞を知らざれば、當に[三]二事を以て如來を求解すべし。一には眼に知らるゝ色、二には耳に聞かるゝ聲なり。若し[四]穢汚有りて眼耳に知らるゝ法はこれ彼の尊者に有りと爲すや無しと爲すやと。若し求むる時則ち穢汚有る所の眼耳に知らるゝ法、彼の尊者に無しと知る。若し此無くば當にまた更に求むべし。若し[五]雜有りて眼耳に知らるゝ法はこれ彼の尊者に有りと爲すや無しと爲すやと。若し求むる時則ち雜有る所の眼耳に知らるゝ法、彼の尊者に無しと知る。若し此無くば當にまた更に求むべし。若し[六]白淨有りて眼耳に知らるゝ法はこれ彼の尊者に有りと爲すや無しと爲すやと。若し求むる時則ち白淨有る

【二】「これ等三族姓子を淨信を以て憶念すれば、そはこれ等に取りて長夜に利益安樂のためならん」

【一】M. 47, Vīmaṃsaka-sutta.

【二】巴利文「詮索する比丘の他人の心の有樣を知らんとするものは、如來に對して詮議をなすべきなり、正覺者なりや否やを知らんがために」

【三】「眼と耳とに識知せらるる法に於て。」

【四】穢汚法 (Saṅkiliṭṭhā dhammā)。

【五】雜法(Vītimissā dhammā)。

【六】白淨法(Vodātā dhammā)。

まひて即ち尊者阿那律陀・尊者難提・尊者金毘羅の爲に法を說き勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ、無量の方便もて彼の爲に法を說き勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已りて坐より起ちて去りたまひぬ。こゝに於て尊者阿那律陀・難提・金毘羅世尊を送りてその近遠に隨ひ、すなはち住する所に還りぬ。尊者難提尊者金毘羅尊者阿那律陀を歎じて曰く『善き哉善き哉、尊者阿那律陀、我等初より、尊者阿那律陀是の如き義を說くを聞かず、我等是の如く大如意足有り大威德有り大福祐有り大威神有りと。然るに尊者阿那律陀盡く世尊に向ひて極めて我等を稱譽しぬ。』尊者阿那律陀、尊者難提金毘羅を歎じて曰く『善き哉善き哉、尊者、我亦初より未だ曾て諸賢より等しく聞かず、尊者是の如く大如意足有り大威德有り大福祐有り大威神有りと。然るに我長夜に心を以て尊者の心を知り、尊者大如意足有り大威德有り大福祐有り大威神有りと［知りぬ。］是の故に我世尊に向ひて是の如く是の如く說きぬ。』こゝに於て[七]長鬼天形體極妙光明巍々として夜將に旦に向はんとするに、佛の所に往詣し佛足に稽首し却きて一面に住し世尊に白して曰く『大仙人、諸の跋耆人大善利を得。謂く現に世尊及び三族姓子、尊者阿那律陀・尊者難提・尊者金毘羅有り。』[八]地神長鬼天より所說を聞き、高大音聲を放ちぬ『大仙人、諸の跋耆人大善利を得。謂く現に世尊及び三族姓子、尊者阿那律陀・難提・金毘羅有り。』地神より聲を聞きて[九]虛空天・[一〇]四王天・三十三天・焰摩天・兜率哆天・化樂天・他化樂天須臾にして聲徹して梵天に至りぬ『大仙人、諸の跋耆人大善利を得。謂く現に世尊及び三族姓子、尊者阿那律陀・難提・金毘羅有り。』世尊告げて曰はく『是の如し、是の如し、長鬼天、諸の跋耆人大善利を得、謂く現に世尊及び三族姓子、尊者阿那律陀・難提・金毘羅有り。長鬼天、地神汝の聲を聞き已りてすなはち高大音聲を放ちぬ、大仙人、諸の跋耆人大善利を得。謂く現に世尊及び三族姓子、尊者阿那律陀・難提・金毘羅有りと。地神より聲を聞きて虛空天・四天王天・三十三天・焰摩天・兜率哆天・化樂天・他化樂天須臾にして聲徹して梵天に至りぬ、大仙人、諸の跋耆人大善利を得。謂く現に世尊及び

【七】長鬼天(Dīgha parajjna yakkha)。

【八】地神(Bhummā devā)。地居天、地上に住める天子。

【九】虛空天(Ākāsaṭṭhā devā)。空居天。

【一〇】四王天以下の諸天に就ては二卷「十日經」註(一九)以下を見よ。

法を得て而も差降安樂住止有り。世尊、我が心慈と俱にして一方に遍滿し成就して遊び、是の如く二・三・四方・四維・上下、一切に普周く、心慈と俱にして結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。是の如く、悲・喜〔亦然り〕。心捨と俱にして結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。世尊、この住止を捨て此を過ぎ此を度り、謂く更にこの餘有りて人上の法を得て而も差降安樂住止有り。』世尊歎じて曰はく『善き哉善き哉、阿那律陀、この住止を捨て此を過ぎ此を度り、頗し更に餘有りて人上の法を得て而も差降安樂住止有りや。』尊者阿那律陀白して曰く『世尊、この住止を捨て此を過ぎ此を度り、更にまた餘有りて人上の法を得て而も差降安樂住止有り。世尊、我等一切の色想を度り非有想非無想處を得成就して遊ぶに至る。世尊、この住止を捨て此を過ぎ此を度り、謂く更にこの餘有りて人上の法を得て而も差降安樂住止有り。』世尊歎じて曰はく『善き哉善き哉、阿那律陀、この住止を捨て此を過ぎ此を度り、頗し更に餘有りて人上の法を得て而も差降安樂住止有りや。』尊者阿那律陀白して曰く『世尊、この住止を捨て此を過ぎ此を度り、更にまた餘有りて人上の法を得て而も差降安樂住止有り。世尊、我等如意足・天耳智・他心智・宿命智・生死智を得、諸漏已に盡きて無漏を得、心解脫し慧解脫し、現法中に於て自ら知り自ら覺り自ら作證し成就して遊び、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辦じ更に有を受けずと如眞を知る。世尊、この住止を捨て此を過ぎ此を度り、謂く更にこの餘有りて人上の法を得て而も差降安樂住止有り。』世尊歎じて曰はく『善き哉善き哉、阿那律陀、この住止を捨て此を過ぎ此を度り、頗し更に餘有りて人上の法を得て而も差降安樂住止有りや。』尊者阿那律陀白して曰く『世尊、この住止を捨て此を過ぎ此を度り、更に餘有りて人上の法を得て而も差降安樂住止有ること無し。』こゝに於て世尊すなはちこの念を作したまひぬ、この族姓子の遊行する所安隱快樂なり。我今寧ろ彼の爲に法を說くべしと。世尊この念を作し已りた

謂く我是の如き梵行[者]と共に行ずと。世尊。我常に彼の梵行[者]に向ひて慈身業を行じ、[六]見と不見と等しくして異有ること無く、慈口業を行じ、慈意業を行じ、見と不見と等しくして異有ること無し。世尊、我この念を作す、我今寧ろ自ら己心を捨て彼の諸賢の心に随ふべしと。我すなはち自ら己心を捨て彼の諸賢の心に随ひ、我未だ曾て一不可心有らず。世尊、是の如く我常に安隱にして乏しき所有ること無し。』尊者難提に問ひたまふに答ふること亦是の如し。また尊者金毘羅に問ひて曰はく『汝常に安隱にして乏しき所無きや。』尊者金毘羅白して曰く『世尊、我常に安隱にして乏しき所有ること無し。』問ひて曰はく『金毘羅、云何が安隱にして乏しき所無きや。』尊者金毘羅白して曰く『世尊、我この念を作す、我善利有り大功德有り。謂く我是の如き梵行[者]と共に行ずと。世尊、我常に彼の梵行[者]に向ひて慈身業を行じ、見と不見と等しくして異有ること無し。慈口業を行じ、慈意業を行じ、見と不見と等しくして異有ること無し。世尊、我この念を作す、我今寧ろ自ら己心を捨て彼の諸賢の心に随ふべしと。我すなはち自ら己心を捨て彼の諸賢の心に随ひ、我未だ曾て一不可心有らず。世尊、是の如く我常に安隱にして乏しき所有ること無し。』世尊歎じて曰はく『善き哉善き哉、阿那律陀、是の如く汝等常に共に和合し安隱にして諍無く、心を一にし師を一にし水乳を合一し、頗し人上の法を得て而も差降安樂住止有りや。』尊者阿那律陀白して曰く『世尊、是の如し。我等常に共に和合し安隱にして諍無く、心を一にし師を一にして水乳を合一し、人上の法を得て而も差降安樂住止有り。世尊、我等欲を離れ惡不善の法を離れ[乃至]第四禪を得、成就して遊ぶに至る。世尊、是の如く我等常に共に和合し安隱にして諍無く、心を一にし師を一にし水乳を合一し、この人上の法を得て而も差降安樂住止有り。』世尊歎じて曰はく『善き哉善き哉、阿那律陀、この住止を捨て此を過ぎ此を度り、頗し更に餘有りて人上の法を得て而も差降安樂住止有りや。』尊者阿那律陀白して曰く『世尊、この住止を捨て此を過ぎ此を度り、更にまた餘有りて人上の

【六】蔭日向なく。

汲み洗足器を出し、足橙及び拭脚巾・水瓶・澡罐を安洗し、若し乞食する所能く盡く食へば、すなはち盡く之を食ひ、若し餘有れば器に盛りて覆擧し、食訖りて鉢を收め手足を澡洗し、尼師壇を以て肩上に著け室に入りて燕坐す。若し彼乞食し後に還る者有れば、能く盡く食へば亦盡く之を食ひ、若し足らざれば前の餘食を取りて足して而も之を食ひ、若し餘有ればすなはち淨地及び蟲無き水中に瀉著し、彼の食器を取りて淨洗し拭き已りて一面に擧著し、床席を收卷し足橙を拾洗し拭脚巾を收め洗足器及び水瓶・澡罐を擧し、食堂を掃灑し糞除淨し已りて衣鉢を收擧し手足を澡洗し尼師壇を以て肩上に著け室に入りて燕坐す。彼の尊者等晡時に至りて若し先に燕坐より起つ者有れば、水瓶・澡罐を見、空にして水有ること無ければすなはち持ち行きて取り、若し能く勝ふればすなはち擧して持來し一面に安著す。若し勝ふること能はざれば則便ち手を以て一比丘を招き、兩人共に擧持して一面に著け各相語らず各相問はず。彼の尊者等五日に一だび集まりて或は共に法を說き、或は聖く默然たり。こゝに於て守林人遙に世尊の來りたまふを見、逆へて呵止して曰く『沙門、沙門、この林に入ること莫れ。所以者何。今この林中に三族姓子有り。尊者阿那律陀・尊者難提・尊者金毘羅なり。彼若し汝を見ば或は不可有らん。』世尊告げて曰はく『汝守林人、彼若し我を見ば必ず可にして不可無けん。』こゝに於て尊者阿那律陀遙に世尊の來りたまふを見卽ち彼を呵して曰く『汝守林人、世尊を呵すること莫れ。汝守林人、善逝を呵すること莫れ。所以者何。これ我が尊來りたまひ、我が善逝來りたまふ。』尊者阿那律陀出でゝ世尊を迎へ、佛の衣鉢を攝め、尊者難提佛の爲に牀を敷き尊者金毘羅佛の爲に水を取りぬ。その時世尊手足を洗ひ已りて彼の尊者の敷きし所の座に坐し、坐し已りて問ひて曰はく『阿那律陀、汝常に安隱にして乏しき所無きや。』尊者阿那律陀白して曰く『世尊、我常に安隱にして乏しき所有ること無し。』世尊また問ひたまはく『阿那律陀、云何が安隱にして乏しき所無きや。』尊者阿那律陀白して曰く『世尊、我この念を作す、我善利有り大功德有り。

【五】足橙。洗ひたる足を上せるもの。

んと欲せば即ち彼住止し中前遊行す。彼若し諸所に住止し日中晡時遊行するを得んと欲せば即ち彼住止し日中晡時遊行す。賢者目揵連、是の如き比丘牛角娑羅林を起發せんと。』世尊歎じて曰はく『善き哉善き哉、目揵連、舍梨子比丘の所說の如し。所以者何。舍梨子比丘心を用ふるに隨ひて自在なり。』こゝに於て尊者舍梨子即ち坐より起ち偏に著衣を袒ぎ叉手を佛に向け白して曰く『世尊、我及び諸賢是の如く說き已りて告げて曰く、賢者目揵連、我及び諸賢已に各自ら說くことその所知に隨ふ。賢者目揵連、我等寧ろ彼の諸賢と共に佛の所に往詣し、向にこの事を論ぜし中に於て誰か最も善き說を爲せるやを知るべしと。世尊、我等誰か善き說を爲せるや。』世尊答へて曰はく『舍梨子、一切悉く善し。所以者何。この諸の法は盡く我が所說なり。舍梨子、我が所說を聽け。是の如き比丘牛角娑羅林を起發せん。舍梨子、若し比丘有りて依住する所の城郭村邑に隨ひ、彼夜を過ぎて平旦衣を著け鉢を持し村に入りて乞食し、善く身を守護し善く諸根を斂め善くその念を立し、彼乞食し已りて日中を過ぎて後衣鉢を收擧し手足を澡洗し尼師壇を以て肩上に著け、或は無事處に至り或は樹下に至り或は空・安靖處に至り、尼師壇を敷きて結跏趺坐し、結跏趺坐を解かずして乃ち漏盡に至る。彼すなはち結跏趺坐を解かずして乃ち漏盡に至れば、舍梨子、是の如き比丘牛角娑羅林を起發せん。』佛說是の如し彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百八十五、[一]牛角娑羅林經〔下〕第四

我が聞きしこと是の如し。ある時佛[二]那摩提瘦に遊び[三]揵祁精舍に在しぬ。その時世尊夜を過ぎて平旦衣を著け鉢を持し那摩提に入りて而も乞食を行じ、食訖りて中後に牛角娑羅林に往詣したまひぬ。その時牛角娑羅林に三族姓子有り、共に中に在りて住しぬ。尊者阿那律陀・尊者[四]難提・尊者金毘羅なり。彼の尊者等の所行是の如し。若し彼乞食し前に還る者有れば、すなはち床を敷き水を

【一】M. 31, Cūḷa-Gosiṅga-sāla-sutta.
【二】那摩提(Nādika)。
【三】揵祁精舍(Giñjakāvasatha)。
【四】難提(Nandiya)、金毘羅(Kimbila)。

梨子白して曰く『世尊、尊者大迦葉是の如く說き已りて我また問ひて曰く、賢者目揵連、尊者大迦葉已に說くことを所知に隨ふ。我今また問はん。賢者目揵連、この牛角娑羅林甚だ愛樂すべし。夜明月有り諸の娑羅樹皆妙香を敷き、猶ほ天華の若し。賢者目揵連、何等の比丘牛角娑羅林を起發するやと。賢者大目揵連卽ち我に答へて曰く、尊者舍梨子、若し比丘有りて大如意足有り大威德有り大福祐有り大威神有り自在無量の如意足あり、彼無量の如意足を行じ、一を變じて衆と爲し、衆を合して一と爲し、一は則ち一に住め、知有り見有り、石壁を徹過すること空の如くにして無礙、地に出入すること猶ほ水の若如く、水を履むこと地の如くにして而も陷沒せず、虛空に上昇して結跏趺坐すること猶ほ鳥の若如し。今この日月大如意足有り大威德有り大福祐有り大威神有るをば、手を以て捫摸し、身梵天に至る。尊者舍梨子、是の如き比丘牛角娑羅林を起發せんと。』世尊歎じて曰はく『善き哉善き哉、舍梨子、目揵連比丘の所說の如し。所以者何。目揵連比丘大如意足有り。』こゝに於て尊者大目揵連卽ち坐より起ち偏に著衣を袒ぎ叉手を佛に向け白して曰く『世尊、我及び諸尊是の如く說き已りてすなはち尊者舍梨子に白して曰く、尊者舍梨子、我及び諸尊已に各自ら說くことその所知に隨ふ。我今問はん。尊者舍梨子、この牛角娑羅林甚だ愛樂すべし。夜明月有り諸の娑羅樹皆妙香を敷き、猶ほ天華の若し。尊者舍梨子、何等の比丘牛角娑羅林を起發するやと。尊者舍梨子卽ち我に答へて曰く、賢者目揵連、若し比丘有りて心を用ふるに隨ひて自在にして而も心に隨はず。彼若し隨所に住止し中前遊行するを得んと欲せば卽ち彼住止し中前遊行す。彼若し隨所に住止し日中晡時遊行するを得んと欲せば卽ち彼隨所に住止し日中晡時遊行す。賢者目揵連、猶ほ王・王臣のごとし、衣服甚だ多く若干種の雜妙色衣有り。彼若し中前著くるを得んと欲せば卽ち取りてこれを著く。彼若し日中晡時著くるを得んと欲せば卽ち取りてこれを著く。賢者目揵連、是の如く若し比丘有りて心を用ふるに隨ひて自在にして而も心に隨はず。彼若し隨所に住止し中前遊行するを得

に於て千の士塹有れば、彼少方便有りて須臾にして盡く見るがごとし。尊者舍梨子、是の如く若し比丘有りて天眼を逮得し天眼を成就し千世界に於て彼少方便もて須臾にして盡く見れば、尊者舍梨子、是の如き比丘牛角娑羅林を起發せんと。』世尊歎じて曰はく『善き哉善き哉、舍梨子、阿那律陀比丘の所說の如し。所以者何。阿那律陀比丘天眼を成就す。』尊者舍梨子白して曰く『世尊、賢者阿那律陀是の如く說き已りて我また問ひて曰く、賢者迦旃延、賢者阿那律陀比丘已に說くこと所知に隨ふ。我今また問はん。賢者迦旃延、この牛角娑羅林甚だ愛樂すべし。夜明月有り諸の娑羅樹皆妙香を敷き、猶ほ天華の若し。賢者迦旃延、何等の比丘牛角娑羅林を起發するやと。賢者迦旃延即ち我に答へて曰く、尊者舍梨子、猶ほ二比丘法師共に甚深の阿毘曇を論ずるがごとし。彼の問ふ所の事善く解し悉く知り答亦無礙にして說法辯捷なり。尊者舍梨子、是の如き比丘牛角娑羅林を起發せんと。』世尊歎じて曰はく『善き哉善き哉、舍梨子、迦旃延比丘の所說の如し。所以者何。迦旃延比丘法師を分別す。』尊者舍梨子白して曰く『世尊、賢者迦旃延是の如く說き已りて我また問ひて曰く、尊者大迦葉、賢者迦旃延比丘已に說くこと所知に隨ふ。我今また問はん。尊者大迦葉、この牛角娑羅林甚だ愛樂すべし。夜明月有り諸の娑羅樹皆妙香を敷き、猶ほ天華の若し。尊者大迦葉、何等の比丘牛角娑羅林を起發するやと。尊者大迦葉即ち我に答へて曰く、賢者舍梨子、若し比丘有りて自ら無事にして無事を稱說し、自ら少欲有りて少欲を稱說し、自ら知足有りて知足を稱說し、自ら樂しみて遠離獨住に在りて、樂しみて遠離獨住に在るを稱說し、自ら修行精勤して修行精勤を稱說し、自ら正念正智を立して正念正智を立するを稱說し、自ら定を得て定を得るを稱說し、自ら智慧有りて智慧を稱說し、自ら諸の漏已に盡きて、諸の漏已に盡くるを稱說し、自ら勸發・渴仰・成就・歡喜して勸發・渴仰・成就・歡喜を稱說すれば、賢者舍梨子、是の如き比丘牛角娑羅林を起發せんと。』世尊歎じて曰はく『善き哉善き哉、舍梨子、迦葉比丘の所說の如し。所以者何。迦葉比丘常に無事を行ず。』尊者舍

善く來りぬ賢者阿難、善く來りぬ阿難、善く來りぬ阿難、世尊の侍者世尊の意を解し常に世尊の稱譽したまふ所と爲り及び諸の智梵行人「の稱譽する所となる。」我今賢者阿難に問はん。この牛角娑羅林甚だ愛樂すべし。夜明月有り諸の娑羅樹皆妙香を敷き、猶ほ天華の若し。賢者阿難、何等の比丘牛角娑羅林を起發するやと。賢者阿難卽ち我に答へて曰く、尊者舍梨子、若し比丘有りて廣學多聞にして守持して忘れず、積聚博聞し、謂ふ所の法は初め妙、中ごろ妙、竟り亦妙にして義有り文有り、具足し清淨にして梵行を顯現するもの、是の如き諸法廣學多聞にして翫習千に至り、意の惟觀する所明見深達、彼の所說の法簡要捷疾にして正と相應し諸の結を斷たんと欲せば、尊者舍梨子、是の如き比丘牛角娑羅林を起發せんと。』世尊歎じて曰はく『善き哉善き哉、舍梨子、實に阿難比丘の所說の如し。所以者何。阿難比丘多聞を成就す。』尊者舍梨子白して曰く『世尊、賢者阿難是の如く說き已りて我また問ひて曰く、賢者離越哆、賢者阿難比丘已に說くこと所知に隨ふ。我今また問はん。賢者離越哆、この牛角娑羅林甚だ愛樂すべし。夜明月有り諸の娑羅樹皆妙香を敷き猶ほ天華の若し。賢者離越哆、何等の比丘牛角娑羅林を起發するやと。賢者離越哆卽ち我に答へて曰く、尊者舍梨子、若し比丘有りて燕坐を樂しみ內行止みて坐禪を廢せず、觀を成就し常に閑居を好み安靖處を憙ばゞ、尊者舍梨子、是の如き比丘牛角娑羅林を起發せんと。』世尊歎じて曰はく『善き哉善き哉、舍梨子、離越哆比丘の所說の如し。所以者何。離越哆比丘常に坐禪を樂しむ。』尊者舍梨子、白して曰く『世尊、賢者離越哆是の如く說き已りて我また問ひて曰く、賢者阿那律陀、賢者離越哆比丘已に說くこと所知に隨ふ。我今また問はん。賢者阿那律陀、この牛角娑羅林甚だ愛樂すべし。夜明月有り諸の娑羅樹皆妙香を敷き、猶ほ天華の若し。賢者阿那律陀、何等の比丘牛角娑羅林を起發するやと。賢者阿那律陀卽ち我に答へて曰く、尊者舍梨子、若し比丘有りて天眼を逮得し天眼を成就し千世界に於て彼少方便もて須臾にして盡く見る。尊者舍梨子、猶ほ目有る人高樓上に住し下の露地

することと空の如く無礙、地に出入することと猶ほ水の若如く、水を履むこと地の如くにして而も陷沒せず、虛空に上昇して結跏趺坐することと猶ほ鳥の若如く、今この日月の大如意足有り大威德有り大福祐有り大威神有るをば手を以て捫摸し、身梵天に至る。尊者舍梨子、是の如き比丘牛角娑羅林を起發せん。』尊者大目揵連問ひて曰く『尊者舍梨子、我及び諸尊已に各自ら說くことその所知に隨ふ。(7)我今問はん。尊者舍梨子、この牛角娑羅林甚だ愛樂すべし。夜明月有り諸の娑羅樹皆妙香を敷き、猶ほ天華の若し。尊者舍梨子、何等の比丘牛角娑羅林を起發するや。』尊者舍梨子答へて曰く『賢者目揵連、若し比丘有りて心を用ふるに隨ひて自在にして而も心に隨はず、彼若し隨所に住止し〔六〕中前遊行するを得んと欲せば、即ち彼住止し中前に遊行し、彼若し隨所に住止し日中晡時遊行するを得んと欲せば、即ち彼住止し日中晡時遊行す。賢者目揵連、猶ほ王・王臣のごとし。衣服甚だ多く若干種の雜妙色衣有り。彼若し中前著くるを得んと欲せば即ち取りてこれを著く。彼若し日中晡時著くるを得んと欲せば即ち取りてこれを著く。賢者目揵連是の如く若し比丘有りて心を用ふるに隨ひて自在にして而も心に隨はず。彼若し隨所に住止し中前遊行するを得んと欲せば即ち彼住止し中前に遊行す。彼若し隨所に住止し日中晡時遊行するを得んと欲せば即ち彼住止し日中晡時遊行す。賢者目揵連、是の如き比丘牛角娑羅林を起發せん。』尊者舍梨子告げて曰く『賢者目揵連、我及び諸賢已に各自ら說くことその所知に隨ふ。賢者目揵連、我等寧ろ彼の諸賢と共に佛の所に往詣し向にこの事を論ぜし中に於て誰か最も善說を爲せるやを知るべし。』こゝに於て尊者舍梨子・尊者大目揵連・尊者大迦葉・尊者大迦旃延・尊者阿那律陀・尊者離越哆・尊者阿難、佛の所に往詣し、諸尊者等佛足に稽首し却きて一面に坐し、尊者阿難亦佛足に稽首し却きて一面に住しぬ。尊者舍梨子白して曰く『世尊、今日賢者大目揵連・尊者大迦葉・賢者迦旃延・賢者阿那律陀・賢者離越哆・賢者阿難、夜を過ぎて平旦我が所に來詣しぬ。我遙に彼の諸賢の來るを見已りて彼の諸賢に因るが故に說きぬ、

(7)舍梨子。

【六】中前は午前、晡時は夕刻。

て須臾にして盡く見るがごとし。尊者舍梨子是の如く若し比丘有りて天眼を逮得し天眼を成就し千世界に於て彼少方便もて須臾にして盡く見れば、尊者舍梨子、是の如き比丘牛角娑羅林を起發せん。』尊者舍梨子また問ひて曰く『賢者迦旃延、賢者阿那律陀比丘已に說くこと所知に隨ふ。(4)我今また問はん。賢者迦旃延、この牛角娑羅林甚だ愛樂すべし。夜明月有り諸の娑羅樹皆妙香を敷き猶ほ天花の若し。賢者迦旃延、何等の比丘牛角娑羅林を起發するや。』尊者大迦旃延答へて曰く『尊者舍梨子、猶ほ二比丘法師共に甚深の阿毘曇を論ずるがごとし。彼の問ふ所の事善く解し悉く知り答亦無礙にして說法辯捷なり。尊者舍梨子、是の如き比丘牛角娑羅林を起發さん。』尊者舍梨子また問ひて曰く『尊者大迦葉、賢者迦旃延比丘已に說くこと所知に隨ふ。(5)我今また問はん。尊者大迦葉、この牛角娑羅林甚だ愛樂すべし。夜明月有り諸の娑羅樹皆妙香を敷き猶ほ天華の若し。尊者大迦葉、何等の比丘牛角娑羅林を起發するや。』尊者大迦葉答へて曰く『賢者舍梨子、若し比丘有りて自ら無事にして無事を稱說し、自ら少欲有りて少欲を稱說し、自ら知足有りて知足を稱說し、自ら樂しみて遠離獨住に在りて樂しみて遠離獨住に在るを稱說し、自ら修行精勤して修行精勤を稱說し、自ら正念正智を立して正念正智を立するを稱說し、自ら定を得て定を得るを稱說し、自ら智慧有りて智慧を稱說し、自ら諸の漏已に盡きて諸の漏已に盡くるを稱說し、自ら勸發・渴仰・成就・歡喜して勸發・渴仰・成就・歡喜を稱說すれば、賢者舍梨子、是の如き比丘牛角娑羅林を起發せん。』尊者舍梨子また問ひて曰く『賢者目揵連、尊者大迦葉已に說くこと所知に隨ふ。(6)我今また問はん。賢者目揵連、この牛角娑羅林甚だ愛樂すべし。夜明月有り諸の娑羅樹皆妙香を敷き猶ほ天華の若し。賢者目揵連、何等の比丘牛角娑羅林を起發するや。』尊者大目揵連答へて曰く『尊者舍梨子、若し比丘有りて大如意足有り大威德有り大福祐有り大威神有り自在無量の如意足あり、彼無量の如意足を行じ、一を變じて衆と爲し、衆を合して一と爲し、一は則ち一に住め、知有り見有り、石壁を徹過

(4)迦旃延。
(5)大迦葉。
(6)目揵連。

共に尊者舍梨子の所に往詣すべし。儻し能く彼に因りて尊者舍梨子より少多の法を聞かん。』こゝに於て尊者大目揵連・尊者大迦葉・尊者大迦旃延・尊者阿那律陀・尊者離越哆・尊者阿難夜を過ぎて平旦尊者舍梨子の所に往詣しぬ。尊者舍梨子遙に彼の諸尊の來るを見已りて、尊者舍梨子彼の諸尊に因るが故に說きぬ『善く來りぬ、賢者阿難、善く來りぬ阿難、善く來りぬ阿難。世尊の侍者、世尊の意を解し常に世尊の稱譽したまふ所と爲り、及び諸の智梵行人〔の稱譽する所となる。〕(1)我今賢者阿難に問はん、この牛角娑羅林甚だ愛樂すべし。夜明月有り、諸の娑羅樹皆妙香を敷き、猶ほ天花の若し。賢者阿難、[五]何等の比丘牛角娑羅林を起發するや。』尊者阿難答へて曰く『尊者舍梨子、若し比丘有りて廣學多聞にして守持して忘れず、積聚博聞し、謂ふ所の法は初め妙、中ごろ妙、竟り亦妙にして義有り文有り具足し清淨にして梵行を顯現するもの、是の如き諸法廣學多聞にして翫習千に至り、意の惟觀する所明見深達、彼の所說の法、簡要捷疾にして正と相應し、諸の結を斷たんと欲せば、尊者舍梨子、是の如き比丘牛角娑羅林を起發せん。』尊者舍梨子また問ひて曰く『賢者離越哆、賢者阿難比丘已に說くこと所知に隨ふ。(2)我今また問はん。賢者離越哆、この牛角娑羅林甚だ愛樂すべし。夜明月有り諸の娑羅樹皆妙香を敷き、猶ほ天花の若し。賢者離越哆、何等の比丘牛角娑羅林を起發するや。』尊者離越哆答へて曰く『尊者舍梨子、若し比丘有りて燕坐を樂しみ內行止みて坐禪を廢せず、觀を成就し、常に閑居を好み安靖處を憙ばゞ、尊者舍梨子、是の如き比丘牛角娑羅林を起發せん。』尊者舍梨子また問ひて曰く『賢者阿那律陀、賢者離越哆比丘已に說くこと所知に隨ふ。(3)我今また問はん。賢者阿那律陀、この牛角娑羅林甚だ愛樂すべし。夜明月有り諸の娑羅樹皆妙香を敷き猶ほ天華の若し。賢者阿那律陀、何等の比丘牛角娑羅林を起發するや。』尊者阿那律陀答へて曰く『尊者舍梨子、若し比丘有りて天眼を逮得し天眼を成就し千世界に於て彼少方便もて須臾にして盡く見る。尊者舍梨子、猶ほ目有る人高樓上に住し下の露地に於て千の土塹有れば、彼少方便も

(1)阿難。

【五】巴利文「如何なる比丘によりてこの牛角娑羅林は美しく見ゆるや。」

(2)離越哆。

(3)阿那律。

家を捨て家無くして學道し、內行止み內止を得しむ。內止の者、我沙門と說き梵志と說き聖と說き淨浴と說く。是の如く梵志・居士・工師の族姓子、鬚髮を剃除し袈裟衣を著け至信に家を捨て家無くして學道し、內行止み內止を得しむ。內止の者、我沙門と說き梵志と說き聖と說き淨浴と說く。云何が沙門なる。謂く諸の惡不善の法、諸の漏・穢汚、當來有の本、煩熱の苦報なる生老病死の因と爲るものを息止する、これを沙門と謂ふ。云何が梵志なる。謂く諸の惡不善の法・諸の漏・穢汚・當來有の本・煩熱の苦報たる生老病死の因と爲るものを遠離する、これを梵志と謂ふ。云何が聖と爲すや。謂く諸の惡不善の法諸の漏・穢汚、當來有の本、煩熱の苦報たる生老病死の因と爲るものを遠離する、これを謂ひて聖と爲す。云何が淨浴なる。謂く諸の惡不善の法諸の漏・穢汚、當來有の本、煩熱の苦報たる生老病死の因と爲るものを淨浴する、これを淨浴と謂ふ。これを沙門と謂ひこれを梵志と謂ひこれを聖と謂ひこれを淨浴と謂ふ。』佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百八十四、[一]牛角娑羅林經〔上〕第三

我が聞きしこと是の如し。ある時佛跋耆瘦に遊び[二]牛角娑羅林に在し、及び諸の多くの知識せられたる上尊比丘大弟子等、[三]尊者舍梨子・尊者大目揵連・尊者大加葉・尊者大迦旃延・尊者阿那律陀・尊者離越哆・尊者阿難、是の如き比の比丘多くの知識せられたる上尊比丘大弟子等も亦跋耆瘦に遊び牛角娑羅林に在り、並に共に佛の[四]葉屋の邊に近くして住しぬ。こゝに於て尊者大目揵連・尊者大迦葉・尊者大迦旃延・尊者阿那律陀、夜を過ぎて平旦尊者舍梨子の所に往詣しぬ。尊者阿難遙かに彼の諸尊の往くを見已りて白して曰く『賢者離越哆、當に知るべし、この尊者大目揵連・尊者大迦葉、尊者大迦旃延・尊者阿那律陀、夜を過ぎて平旦尊者舍梨子の所に往詣しぬ。賢者離越哆、今彼の諸尊と

【一】 M. 32, Mahā-Gosiṅga-sutta.「增一阿含」三七品の三、「生經」比丘各言志經。

【二】 牛角娑羅林（Gosiṅga-sāla）。「生經」にては音聲叢樹。

【三】 尊者舍梨子（Āyasmā Sāriputta）、大目揵連（Mahā-Moggallāyana）、大迦葉（Mahā-Kassapa）、大迦旃延（Mahā-Kaccāyana）、阿那律（Anuruddha）、離越多（Revata）、阿難（Ānanda）。巴利文には迦旃延を載せず。

【四】 葉屋（Paṇṇa-sāla）。木の葉葺の家の義、堂庵なり。

め、無愧有れば無愧を息め、惡欲有れば惡欲を息め、邪見有れば邪見を息むと。若し我水を持つを見るも、貪伺・恚・瞋・不語・結・慳・嫉・諛諂・無慚・無愧あり惡欲有り邪見有るを以て、こゝを以て持水の者、我これ沙門ならずと說く。これを沙門の道跡に非ず、これ沙門に非ずと謂ふ。云何が沙門の道跡にして沙門ならざるに非ざるや。若し貪伺有れば貪伺を息め、恚有れば恚を息め、瞋有れば瞋を息め、不語有れば不語を息め、結有れば結を息め、慳有れば慳を息め、嫉有れば嫉を息め、諛諂有れば諛諂を息め、無慚有れば無慚を息め、無愧有れば無愧を息め、惡欲有れば惡欲を息め、邪見有れば邪見を息む。この沙門の嫉・沙門の諛諂、沙門の詐欺、沙門の曲、惡處に趣至せしむるをば盡して已に學ぶ、「これ」沙門の道跡にして沙門ならざるに非ず。これを沙門の道跡と謂ひ、沙門ならざるに非ずと「謂ふ。」彼是の如く戒を成就し、身清淨・口意清淨にして貪伺有ること無く、心中恚無く、睡眠有ること無く掉憍慠無く、疑を斷じ惑を度し、正念正智にして愚癡有ること無く、彼心慈と倶にして一方に遍滿し成就して遊び、是の如く二・三・四方・四維・上下、一切に普周く、心慈と倶にして結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大、無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。是の如く悲喜「亦然り。」心捨と倶にして結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大、無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。彼この念を作す、麤有り妙有り想有り、來上出要の如眞を知ると。彼是の如く知り、是の如く見已りて則ち欲漏心解脫し有漏・無明漏心解脫し、解脫し已りてすなはち解脫を知り、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辦じ更に有を受けずと如眞を知る。猶ほ村を去ること遠からずして好浴池有り、清泉流盈し翠草岸を被ひ花樹四周するが如し。或は東方に於て一人有り、來りて飢渴疲極し、衣を岸上に脫ぎ池に入りて快浴し、垢を去り熱を除き亦渴乏を除く。是の如く南方・西方・北方に一人有り、來りて飢渴疲極し、衣を岸上に脫ぎ池に入りて快浴し、垢を去り熱を除き亦渴乏を除く。是の如く刹利の族姓子、鬚髮を剃除し袈裟衣を著け至心に

如し。我彼癡にして沙門道を學すと說くも亦復是の如し。謂く貪伺有りて貪伺を息めず、恚有りて恚を息めず、瞋有りて瞋を息めず、不語有りて不語を息めず、結有りて結を息めず、慳有りて慳を息めず、嫉有りて嫉を息めず、諛諂有りて諛諂を息めず、無慚有りて無慚を息めず、無愧有りて無愧を息めず、惡欲有りて惡欲を息めず、邪見有りて邪見を息めずして僧伽梨を持す。我これ沙門なりと說かず。若し僧伽梨を持つ者、貪伺有れば貪伺を息め、恚有れば恚を息め、瞋有れば瞋を息め、不語有れば不語を息め、結有れば結を息め、慳有れば慳を息め、嫉有れば嫉を息め、諛諂有れば諛諂を息め、無慚有れば無慚を息め、無愧有れば無愧を息め、惡欲有れば惡欲を息め、邪見有れば邪見を息むれば、彼の諸の親々朋友往詣して而もこの說を作す、賢人、汝當に僧伽梨を持するを學すべし。賢、汝僧伽梨を持するを學し、貪伺有れば貪伺を息め、恚有れば恚を息め、瞋有れば瞋を息め、不語有れば不語を息め、結有れば結を息め、慳有れば慳を息め、嫉有れば嫉を息め、諛諂有れば諛諂を息め、無慚有れば無慚を息め、無愧有れば無愧を息め、惡欲有れば惡欲を息め、邪見有れば邪見を息むと。若し我僧伽梨を持つを見るも、貪伺・恚・瞋・不語・結・慳・嫉・諛諂・無慚・無愧・惡欲・邪見有るを以て、こゝを以て我僧伽梨を持つも、我これ沙門に非ずと說く。是の如く[三]無衣・編髮・不坐・一食・常揚水・持水[亦然り]。持水の者我これ沙門に非ずと說く。若し水を持ち、貪伺有れば貪伺を息め、恚有れば恚を息め、瞋有れば瞋を息め、不語有れば不語を息め、結有れば結を息め、慳有れば慳を息め、嫉有れば嫉を息め、諛諂有れば諛諂を息め、無慚有れば無慚を息め、無愧有れば無愧を息め、惡欲有れば惡欲を息め、邪見有れば邪見を息むれば、彼の諸の親々朋友往詣して而もこの賢を作す、賢、汝當に水を持つべし。水を持ち來りて貪伺有れば貪伺を息め、恚有れば恚を息め、瞋有れば瞋を息め、不語有れば不語を息め、結有ればば結を息め、慳有れば慳を息め、嫉有れば嫉を息め、諛諂有れば諛諂を息め、無慚有れば無慚を息

【三】無衣(Acelaka)は、裸形外道、編髮(Jaṭila)は、結髮外道、不坐は、常住立者(Ubbhaṭṭhaka)、常揚水は、水浴者(Udakorohaka)に當るか。

れを梵志と謂ふ。云何が聖と爲すや。謂く諸の惡不善の法諸の漏・穢汚、當來有の本、煩熱の苦報、生老病死の因と爲るを遠離する、これを謂ひて聖と爲す。云何が淨浴なる。謂く諸の惡不善の法諸の漏・穢汚、當來有の本、煩熱の苦報、生老病死の因と爲るを淨浴する、これを淨浴と謂ふ。これを沙門と謂ひこれを梵志と謂ひこれを聖と謂ひこれを淨浴と謂ふ。』佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百八十三、[一]馬邑經〔下〕第二

我が聞きしこと是の如し。ある時佛鴦騎國に遊び大比丘衆と倶に馬邑に往至し馬林寺に住したまひ、及び比丘衆も〔住しぬ〕。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『人汝等を見て沙門、これ沙門なりとし、人汝等に沙門なりやと問ひ、汝〔等〕自ら沙門なりと稱するや。』諸の比丘白して曰く『爾なり、世尊。』佛また告げて曰はく『こゝを以て汝等この要を以てこの沙門なるを以て當に沙門の道跡を學すべし。沙門に非ざること莫れ。沙門の道跡を學し已りて要ずこれ眞諦の沙門にして虛の沙門ならず。若し衣被・飲食・床榻・湯藥及び若干種の諸の生活の具を受くれば、彼供給する所、大福を得、大果を得、大功德を得、大苦報を得。汝等當に是の如きを學すべし。云何が沙門の道跡に非ず、沙門に非ざるや。若し[二]貪伺有りて貪伺を息めず、恚有りて恚を息めず、瞋有りて瞋を息めず、不語有りて不語を息めず、結有りて結を息めず、慳有りて慳を息めず、嫉有りて嫉を息めず、諛諂有りて諛諂を息めず、欺誑有りて欺誑を息めず、無慚有りて無慚を息めず、無愧有りて無愧を息めず、惡欲有りて惡欲を息めず、邪見有りて邪見を息めず。これ沙門の垢、沙門の諛諂、沙門の詐僞、沙門の曲、惡處に趣至せしむるをば未だ盡さずして已に學ぶ、〔これ〕沙門の道跡に非ず、沙門に非ず。猶ほ鐵斧新に作り極利にして頭有り刄有る〔もの〕僧伽梨に裹まるゝが

〔一〕 M. 40, Cūla-Assapura-sutta.

〔二〕 貪伺(Abhijjhā)、恚(Byāpāda)、瞋(Dosa 或 Kodhana?)、不語(Makkha?)、結(Palāsa)、慳(Macchariya)、嫉(Issā)、諛諂(Sāṭheyya)、無慚(Māyā)、欺誑(Ahiri)、無愧(Anottappa)、惡欲(Pāpakā icchā)、邪見(Micchā diṭṭhi)。

意命行清淨にして諸根を守護すれば當にまた何等を作すべきや。(6)比丘當に正に出入を知るを學すべし。善觀分別し屈伸・低仰・儀容・庠序、善く僧伽梨及び諸の衣鉢を著け、行住坐臥眠寤語默皆正に之を知る。若し汝等この念を作し、我が身口意命行清淨にして諸根を守護し正に出入を知り、我が所作已に辦ず、また更に學せず。已に德義を成ず、また上に比丘と作る無しと[せば]、我汝が爲めに說かん、沙門の義を求め沙門の義を失はしむること莫れと。若し上學を求めんと欲せば、比丘身口意命行清淨にして諸根を守護し正に出入を知らば當にまた何等を作すべきや。(7)比丘當に獨住遠離を學すべし。無事處に在り或は樹下・空・安靖處・山巖・石室・露地・穰積に至り或は林中に至り或は塚間に至り、彼已に無事處に在り或は樹下・空・安靖處に至り尼師壇を敷きて結跏趺坐し正身正願反念して向はず、貪伺を斷除し心諍有ること無く他の財物諸の生活の具を見て貪伺を起して、我が得たらしめんと欲せず。彼貪伺に於てその心を淨除す。是の如く瞋恚・睡眠・掉悔[亦然り]疑を斷じ惑を度し、諸の善法に於て猶豫有ること無く、彼疑惑に於てその心を淨除す。彼この五蓋・心穢・慧羸を斷じ、欲を離れ惡不善の法を離れ、[乃至]第四禪を得、成就して遊ぶに至る。彼已に是の如き定心清淨にして穢無く煩無きを得、柔軟にして善く住し不動心を得、漏盡智通に趣向し作證し、彼すなはちこの苦の如眞を知りこの苦の習を知りこの苦の滅を知りこの苦滅道の如眞を知り、亦この漏の如眞を知りこの漏の習を知りこの漏の滅を知りこの漏滅道の如眞を知る。彼是の如く知り是の如く見已りてすなはち欲漏心解脫し有漏・無明漏心解脫し、解脫し已りてすなはち解脫を知り、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辦じ更らに有を受けずと如眞を知る。これを[四]沙門と說き[五]梵志と說き[六]聖と說き[七]淨浴と說く。云何が沙門なる。謂く諸の惡不善の法、諸の漏・穢汚、當來有の本、煩熱の苦報、生老病死の因と爲るを息止する、これを沙門と謂ふ。云何が梵志なる。謂く諸の惡不善の法諸の漏・穢汚、當來有の本、煩熱の苦報、生老病死の因と爲るを遠離する、こ

---

(6)正知二出入一。巴利文「念智。」

(7)獨住遠離。巴利文「除五蓋。」

【四】沙門(Samaṇa)。

【五】梵志(Brāhmaṇa)。

【六】聖(Ariya)。

【七】淨浴(Nahātaka)。

我が身口行清淨にして我が所作已に辦ず、また更に學せず、已に德義を成ず、また上に比丘と作る無しと[せば]、我汝が爲めに說かん、沙門の義を求め沙門の義を失はしむること莫れと。若し上學を求めんと欲せば、比丘若し身口清淨ならば當にまた何等を作すべきや。(3)當に意行清淨を學すべし。仰向發露し善く護りて缺くる無く、これに因りて意行清淨にして自ら擧げず他を下さず、穢無く濁無く、諸の智梵行者の共に稱譽する所と爲る。若し汝等この念を作し、我が身口意行清淨にして我が所作已に辦ず、また更に學せず、已に德義を成ず、また上に比丘と作る無しと[せば]、我汝が爲に說かん、沙門の義を求め沙門の義を失はしむること莫れと。若し上學を求めんと欲せば、比丘若し身口意行清淨ならば當にまた何等を作すべきや。(4)當に命行清淨を學すべし。仰向發露し善く護りて缺くる無く、これに因りて命行清淨にして自ら擧げず他を下さず、穢無く濁無く、諸の智梵行者の共に稱譽する所と爲る。若し汝等この念を作し、我が身口意命行清淨にして我が所作已に辦ず、また更に學せず、已に德義を成ず、また上に比丘と作る無しと[せば]、我汝が爲めに說かん、沙門の義を求め沙門の義を失はしむること莫れと。若し上學を求めんと欲せば、比丘身口意命行清淨ならば當にまた何等を作すべきや。(5)比丘當に諸根を守護するを學すべし。常に閉塞を念じ明達を念欲し念心を守護して而も成就するを得、恒に欲して意を起し、若し眼色を見るも然も相を受けず亦色を味はず。謂く忿諍の故に眼根を守護し、心中貪伺・憂慼・惡不善の法を生ぜず、彼に趣向するが故に眼根を守護す。是の如く耳・鼻・舌・身[亦然り]。若し意法を知るも然も相を受けず亦法を味はず。謂く忿諍の故に意根を守護し、心中貪伺・憂慼・惡不善の法を生ぜず、彼に趣向するが故に意根を守護す。若し汝等この念を作し、我が身口意命行清淨にして諸根を守護し、我が所作已に辦ず、また更に學せず、已に德義を成ず、また上に比丘と作る無しと[せば]、我汝が爲めに說かん、沙門の義を求め沙門の義を失はしむること莫れと。若し上學を求めんと欲せば、比丘身口

(3)意行清淨。
(4)命行清淨。
(5)守二護諸根一。

卷の第四十八

*雙品第四（五經あり。雙品もと十經あり、後の五經を分ちて第五誦に屬せしむ、故に雙品と曰ふ。）

〔五經とは〕馬邑及び馬邑、牛角娑羅林、牛角娑羅林、求解最も後に在り。

百八十二、馬邑經〔上〕第一

我が聞きしこと是の如し。ある時佛鴦騎國に遊び大比丘衆と倶に馬邑に往至し馬林寺に住したまひ、及び比丘衆も〔住しぬ。〕その時世尊諸の比丘に告げたまはく『人汝等を見て沙門、これ沙門なりとし、人汝等に沙門なりやと問ひ、汝〔等〕自ら沙門なりと稱するや。』諸の比丘白して曰はく『爾なり世尊。』佛また告げて曰はく『こゝを以て汝等、この要を以てこの沙門なるを以て當に沙門の法の如く及び梵志の法の如く學すべし。沙門の法の如く及び梵志の法の如く學し已りて、要ずこれ眞諦の沙門にして虛の沙門ならず。若し衣被・飮食・床榻・湯藥及び若干種の諸の生活の具を受くれば、彼供給する所大福を得大果を得大功得を得大廣報を得。汝等當に是の如きを學すべし。云何か沙門の法の如く及び梵志の法の如くなる。(1)身行清淨にして仰向發露し善く護りて缺くる無く、これに因りて淸淨にして自ら擧げず他を下さず、穢無く濁無く、諸の智梵行者の共に稱譽する所と爲る。若し汝この念を作し、我が身行淸淨にして我が所作已に辦ず、また更に學せず。已に德義を成ず、また上に比丘と作る無しと〔せば〕、我汝が爲めに說かん、沙門の義を求め沙門の義を失はしむることを莫れと。若し上學を求めんと欲せば、比丘若し身淸淨ならば當にまた何等を作すべきや。當に口行淸淨を學すべし。仰向發露し善く護りて缺くる無く、これに因りて口行淸淨にして自ら擧げず他を下さず、穢無く濁無く、諸の智梵行者の共に稱譽する所と爲る。若し汝等この念を作し、

＊　雙品なる名目の由來を前半後半兩日誦に亙れることに歸すれど、これは「馬邑」、「牛角娑羅林」、「空」等大小兩經あるによりて名けたるものなり。

【一】　M. 39, Mahā-Assapura-sutta.「增一阿含」四九品の八。

【二】　鴦騎國（Aṅgā）。央伽、鴦伽。十六大國の一、後摩竭陀に併せらる。

【三】　馬邑（Assapura）。

（1）身行淸淨。

（2）口行淸淨。

心穢・慧羸を斷ぜず、心正に四念處を立せずして七覺意を修せんと欲せんは終にこの處無し。若し五蓋・心穢・慧羸を斷じ、心正に四念處を立して七覺意を修せんは必ずこの處有り。阿難、若し五蓋・心穢・慧羸を斷ぜず、心正に四念處を立せず、七覺意を修せずして無上正盡覺を得んと欲せんは終にこの處無し。若し五蓋・心穢・慧羸を斷じ、心正に四念處を立し、七覺意を修して無上正盡覺を得んは必ずこの處有り。阿難、若し五蓋・心穢・慧羸を斷ぜず、心正に四念處を立せず、七覺意を修せず、無上正盡覺を得ずして苦邊を盡さんは終にこの處無し。若し五蓋・心穢・慧羸を斷じ、心正に四念處を立し、七覺意を修し、無上正盡覺を得て苦邊を盡さんは必ずこの處有り。阿難、是の如き比丘是處非處を知る。』尊者阿難白して曰く『世尊、是の如き比丘是處非處を知る。』こゝに於て尊者阿難又手を佛に向け白して曰く『世尊、この經何と名づけ云何が奉持せん。』世尊告げて曰はく『阿難、當にこの多界・法界・甘露界・多鼓・法鼓・甘露鼓・法鏡の四品を受持すべし。この故にこの經を稱し名づけて多界と曰ふ。』佛說是の如し。尊者阿難及び諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

中阿含經卷第四十七

るべきはすなはち見、知るべきはすなはち知ると「說かん」は必ずこの處有り。阿難、若し見諦の人卜問吉凶を信ぜんは終にこの處無し。若し凡夫の人卜問吉凶を信ぜんは必ずこの處有り。阿難、若し見諦の人餘の沙門・梵志に從ひて卜問吉凶と相應し苦有り煩有りと見、これ眞なりと見んは終にこの處無し。若し凡夫の人餘の沙門・梵志に從ひて卜問吉凶と相應し苦有り煩有りと見、これ眞なりと見んは必ずこの處有り。阿難、若し見諦の人極苦甚重の苦を生じ愛すべからず樂ふべからず思ふべからず念ずべからず、乃至命を斷たんとし、この內を捨離して更に外に從ひて求め、或は沙門・梵志有りて一句呪・二句・三句・四句・多句百千句呪を持ちて我が苦を脫せしむとて、これに苦習・苦趣・苦苦盡を求めんは終にこの處無し。若し凡夫の人この內を捨離して更に外に從ひて求め、或は沙門梵志有りて一句呪・二句・三句・四句・多句・百千句呪を持ちて我が苦を脫せしむとて、これに苦習・苦趣・苦苦盡を求めんは必ずこの處有り。阿難、若し見諦の人八有を受けんは終にこの處無し。若し凡夫の人八有を受けんは必ずこの處有り。阿難、若し身惡行・口意惡行あり、これに因りこれに緣りて身壞れ命終りて善處に趣き至り天中に生ぜんは終にこの處無し。若し身惡行・口意惡行あり、これに因りこれに緣りて身壞れ命終りて惡處に趣き至り地獄の中に生ぜんは必ずこの處有り。阿難、若し身妙行・口意妙行あり、これに因りこれに緣りて身壞れ命終りて惡處に趣き至り地獄の中に生ぜんは終にこの處無し。若し身妙行・口意妙行あり、これに因りこれに緣りて身壞れ命終りて善處に趣き至り天中に生ぜんは必ずこの處有り。阿難、若し身惡行・口意惡行ありて樂報を受けんは終にこの處無し。阿難、若し身惡行・口意惡行ありて苦報を受けんは必ずこの處有り。阿難、若し身妙行・口意妙行ありて苦報を受けんは終にこの處無し。若し身妙行・口意妙行ありて樂報を受けんは必ずこの處有り。阿難、若し[五]五蓋・心穢・慧羸を斷ぜずして心正に四念處を立せんは終にこの處無し。若し五蓋・心穢・慧羸を斷じて心正に四念處を立せんは必ずこの處有り。阿難、若し五蓋・

【五】五蓋。貪欲、瞋恚、睡眠、掉擧、疑の五にして、心法を蓋覆し、善法を生ぜざらしむるもの。心穢（Cetaso upakkileso）。心を穢すもの。慧羸（P. ññya dubbalikara-nam）。智慧を弱くするもの。心穢、慧羸は共に五蓋の形容詞で、心を汚し慧を弱くする五蓋の意。

知る。阿難、この六十二界を見、如眞を知る。阿難、是の如き比丘界を知る。』尊者阿難白して曰く『世尊、是の如き比丘界を知る。世尊、(2)云何が比丘處を知るや。』世尊答へて曰はく『阿難、若しは比丘有りて十二處を見、如眞を知る。眼處色處、耳處聲處、鼻處香處、舌處味處、身處觸處、意處法處、阿難、この十二處を見、如眞を知る。阿難、是の如き比丘處を知る。』尊者阿難白して曰く『世尊、是の如き比丘處を知る。(3)云何が比丘因緣を知るや。』世尊答へて曰はく『阿難、若しは比丘有りて因緣及び從因緣起を見、如眞を知る。此に因りて彼有り、此無ければ彼無し。此生ずれば彼生じ、此滅すれば彼滅す。謂く無明に緣りて行有り、乃至生に緣りて老死有り。若し無明滅すればすなはち行滅し、乃至生滅すればすなはち老死滅すと。阿難、是の如き比丘因緣を知る。』尊者阿難白して曰く『世尊、是の如き比丘因緣を知る。云何が比丘是處非處を知るや。』世尊答へて曰はく『阿難、若しは比丘有りて處是處なりと見、如眞を知り、非處是非處なりと見、如眞を知る。阿難、若し[一]世中二轉輪王並びに治する有らんは終にこの處無し。若し[一]世中一轉輪王治する有らんは必ずこの處有り。阿難、若し[一]世中二如來有らんは終にこの處無し。若し[一]世中一如來有らんは必ずこの處有り。阿難、(四)若し諦見の人故らに父母を害し、阿羅訶を殺し、聖衆を破壞し、惡心もて佛に向ひ如來の血を出さんは終にこの處無し。若し凡夫の人故らに父母を害し阿羅訶を殺し聖衆を破壞し惡心もて佛に向ひ如來の血を出さんは必ずこの處有り。阿難、若し見諦の人故らに戒を犯し戒を捨て道を罷めんは終にこの處無し。若し凡夫の人故らに戒を犯し戒を捨て道を罷めんは必ずこの處有り。若し見諦の人この內を捨離し外に從ひて尊を求め福田を求めんは終にこの處無し。若し凡夫の人この內を捨離し外に從ひて尊を求め福田を求めんは必ずこの處有り。阿難、若し見諦の人餘の沙門・梵志に從ひてこの說を作し、諸尊、見るべきはすなはち見、知るべきはすなはち知ると[說かん]は終にこの處無し。若し凡夫の人餘の沙門梵志に從ひてこの說を作し、諸尊、見

(2)處。
(3)因緣。
【四】五逆罪又は五無間業。

白して曰く『世尊、云何が比丘愚癡にして智慧に非ざるや。』世尊答へて曰く『阿難、若し比丘有りて界を知らず處を知らず因緣を知らず是處非處を知らざれば、阿難、是の如き比丘愚癡にして智慧に非ず。』尊者阿難に白して曰く『世尊、是の如き比丘愚癡にして智慧に非ず。世尊、云何が比丘智慧にして愚癡に非ざるや。』世尊答へて曰はく『阿難、若し比丘有りて界を知り處を知り因緣を知り是處非處を知れば、阿難、是の如き比丘智慧にして愚癡に非ず。』尊者阿難白して曰く『世尊、是の如き比丘智慧にして愚癡に非ず。世尊、(1)云何が比丘界を知るや。』世尊答へて曰はく『阿難、(i)若し比丘有りて十八界を見、如眞を知る。眼界・色界・眼識界、耳界・聲界・耳識界、鼻界・香界・鼻識界、舌界・味界・舌識界・身界・觸界・身識界・意界・法界・意識界、阿難、この十八界を見、如眞を知る、(ii)また次に阿難、六界を見、如眞を知る。地界・水界・火界・風界・空界・識界・阿難、この六界を見、如眞を知る。(iii)また次に阿難、六界を見、如眞を知る。欲界・恚界・害界・無欲界・無恚界・無害界、阿難、この六界を見、如眞を知る。(iv)また次に阿難、六界を見、如眞を知る。樂界・苦界・喜界・憂界・捨界・無明界、阿難、この六界を見、如眞を知る。(v)また次に阿難、四界を見、如眞を知る。覺界・想界・行界・識界、阿難、この四界を見、如眞を知る。(vi)また、次に阿難、三界を見、如眞を知る。(vii)また次に阿難、三界を見、如眞を知る。色界・無色界・滅界、阿難、この三界を見、如眞を知る。(viii)また次に阿難、三界を見、如眞を知る。過去界・未來界・現在界、阿難、この三界を見、如眞を知る。(ix)また次に阿難、三界を見、如眞を知る。妙界・不妙界・中界、阿難、この三界を見、如眞を知る。(x)また次に阿難、三界を見、如眞を知る。善界・不善界・無記界、阿難、この三界を見、如眞を知る。(xi)また次に阿難、三界を見、如眞を知る。學界・無學界・非學非無學界、阿難、この三界を見、如眞を知る。(xii)また次に阿難、二界を見、如眞を知る。有漏界・無漏界・阿難、この二界を見、如眞を知る。(xiii)また次に阿難、二界を見、如眞を知る。有爲界・無爲界、阿難、この二界を見、如眞を

【三】 界(Dhātu)、處(āyatana)、因緣(Paṭicca-samuppāda)、是處非處 (Ṭhāna+aṭṭhāna)。

(1) 界。

(i) 十八界(六根、六境、六識)。

(ii) 六界(地水火風空識)。

(iii) 六界 (欲恚害、無欲無恚無害)。

(iv) 六界(樂苦喜憂捨無明)。

(v) 四界(覺想行識)。

(iv) 三界(欲色無色)。

(vii) 三界(色無色滅)。

(viii) 三界(過未現)。

(ix) 三界(妙不妙中)。

(x) 三界(善不善無記)。

(xi) 三界(學無學非)。

(xii) 二界(漏無漏)。

(xiii) 二界(有爲無爲)。

く身口を護り、手を舒べ法を以て乞ひ、離欲[の人]離欲[の人]に施す、この財施第一なり。

佛說是の如し。尊者阿難及び諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百八十一、[一] 多界經第十

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時尊者阿難獨り安靖處に宴坐思惟し心にこの念を作しぬ、諸有の[二]恐怖、彼一切愚癡より生じ智慧よりせず。諸有の遭事災患憂慼彼一切愚癡より生じ智慧よりせずと。こゝに於て尊者阿難則ち晡時に於て宴坐より起ち佛の所に往詣し佛足に稽首し却きて一面に住し白して曰く『世尊、我今獨り安靖處に宴坐思惟し心にこの念を作しぬ、諸有の恐怖、彼一切愚癡より生じ智慧よりせず。諸有の遭事災患憂慼、彼一切愚癡より生じ智慧よりせずと。』世尊告げて曰はく『是の如し阿難、是の如し阿難、諸有の恐怖、彼一切愚癡より生じ智慧よりせず。諸有の遭事災患憂慼、彼一切愚癡より生じ、智慧よりせず。阿難、猶ほ葦積草積より火を生じ樓閣堂屋を燒くが如し。阿難、是の如く諸有の恐怖、愚癡より生じ、智慧よりせず。諸有の遭事災患憂慼、彼一切愚癡より生じ、智慧よりせず。阿難、昔過去の時若し恐怖有る、彼一切亦愚癡より生じ、智慧よりせず。諸有の遭事災患憂慼、彼一切愚癡より生じ智慧よりせざりき。阿難、當來の時諸の恐怖有る、彼一切愚癡より生じ智慧よりせず、諸有の遭事災患憂慼、彼一切愚癡より生じ智慧よりせじ。阿難、今現在諸有の恐怖、愚癡より生じ智慧よりせず、諸有の遭事災患憂慼、彼一切愚癡より生じ智慧よりせず。阿難、これを愚癡に恐怖有りて智慧に恐怖無く、愚癡に遭事災患憂慼有りて智慧に遭事災患憂慼無く、阿難、諸有の恐怖遭事災患憂慼、彼一切愚癡より得べくして智慧よりせずと爲す。』こゝに於て尊者阿難悲泣して涙出で、叉手を佛に向け

【一】M. 115, Bahudhātuka-sutta.

【二】恐怖(Bhaya)、遭事(Upaddava)、災患(Upasagga)、

り。阿難、(i)云何が布施施主淨なるに因り受者「淨なる」に非ざるや。施主精進して妙法を行じ、來を見、果を見、是の如く見是の如く說く、施有り施の果有りと。受者精進せずして惡法を行じ來を見ず、果を見ず、是の如く見是の如く說く、施無く施の果無しと。これを布施施主淨なるに因り、受者「淨なる」に非ずと謂ふ。阿難、(ii)云何が布施、受者淨なるに因り施主「淨なる」に非ざるや。施主精進せずして惡法を行じ來を見ず果を見ず、是の如く見是の如く說く、施無く施の果無しと。受者精進して妙法を行じ來を見果を見是の如く見是の如く說く、施有り施の果有りと。これを布施受者淨なるに因り施主「淨なる」に非ずと謂ふ。阿難、(iii)云何が布施、施主淨なるに因るに非ず亦受者「淨なる」に非ざるや。施主精進せずして惡法を行じ來を見ず果を見ず、是の如く見是の如く說く、施無く施の果無しと。受者亦精進せずして惡法を行じ來を見ず果を見ず、是の如く見是の如く說く、施無く施の果無しと。これを布施施主淨なるに因るに非ず亦受者「淨なる」に非ずと謂ふ。阿難、(iv)云何が布施、施主淨なるに因り受者亦然るや。施主精進して妙法を行じ來を見、果を見、是の如く見是の如く說く、施有り施の果有りと。受者亦精進して妙法を行じ來を見、果を見、是の如く見是の如く說く、施有り施の果有りと。これを布施施主淨なるに因り受者亦然りと謂ふ。』こゝに於て世尊この頌を說きて曰はく、

精進「の人」不精進の人に施し、　如法にして歡喜心を得、　業及び果報有るを信ず。　この施、施主淨なるに因る。　不精進「の人」精進「の人」に施し、　如法ならず、　喜心に非ず、　業及び果報を信ぜず。　この施受者淨なるに因る。　懈怠「の人」不精進「の人」に施し、　如法ならず、　喜心に非ず、　業及び果報を信ぜず。　是の如き施廣報無し。　精進「の人」精進「の人」に施し、　如法にして歡喜心を得、　業及び果報有るを信ず。　是の如き施、廣報有り　奴婢及び貧窮自ら分ち施して歡喜し、　業を信じ果報を信ず。　この施善にして人稱す。　正に善

白して曰く、衆中その所の比丘尼來らば彼に布施せんと。これを第五施衆と謂ひ、大福を得、大果を得、大功德を得、大廣報を得。阿難、當來の時比丘有り、名姓種にして精進せず袈裟衣を著く。彼精進せず、精進せざるが故に施す。衆に依るが故に、衆に緣るが故に、上衆の故に、衆に因るが故に、我その時施主無量にして數ふべからず計るべからざるの福を得、善を得、樂を得と說く。況やまた今の比丘行事を成就し除事を成就し、行事除事を成就し質直を成就し、柔軟を成就し質直柔軟を成就し、忍を成就し樂を成就し、忍樂を成就し、相應を成就し經紀を成就し相應經紀を成就し、威儀を成就し行來遊を成就し威儀行來遊を成就し、信を成就し戒を成就し多聞を成就し施を成就し慧を成就し、信・戒・多聞・施・慧を成就するをや。これを第七施衆と謂ひ、大福を得、大果を得、大功德を得、大廣報を得。これを七施衆有りて大福を得、大果を得、大功德を得、大廣報を得と謂ふ。阿難、(2)云何が十四私施有りて大福を得、大果を得、大功德を得、大廣報を得るや。信[心の]族姓男族姓女有り、如來に布施し[六]緣一覺に施し[七]阿羅訶に施し向阿羅訶に施し阿那含に施し向阿那含に施し斯陀含に施し向斯陀含に施し須陀洹に施し向須陀洹に施し、[八]離欲の外仙人に施し[九]精進の人に施し[一〇]不精進の人に施し畜生に布施す。阿難、畜生に布施すれば福を得ること百倍、不精進の人に施せば福を得ること千倍、精進の人に施せば福を得ること百千倍、離欲の外仙人に施せば福を得ること億百千倍、向須陀洹に施せば無量、得須陀洹は無量、向斯陀含は無量、得斯陀含は無量、向阿那含は無量、得阿那含は無量、向阿羅訶は無量、得阿羅訶は無量、緣一覺は無量なり。況んやまた如來・無所著・等正覺をや。この十四私施大福を得、大果を得、大功德を得、大廣報を得。また次に阿難、四種の布施三の淨施有り。(3)云何が四と爲す。或は布施有り、[一一]施主淨なるに因り、[一二]受者[淨なる]に非ず、或は布施有り、施主[淨なる]に非ず、或は布施有り、受者淨なるに因り施主[淨なる]に非ず、或は布施有り、施主淨なるに因り受者亦然り、施主淨たるに因るに非ず、また受者[淨なる]に非ず、或は布施有り、施主淨なるに因り受者亦然

(2) 十四私施。
【六】 緣一覺(P. cceka-buddha)。Pati+eka+buddha 緣一覺なり。但し「一一覺、獨覺」とするを更に可なりとす。
【七】 阿羅訶、向阿羅訶。阿羅訶は阿羅漢果の人、向阿羅訶は阿羅漢向の人。以下類推せよ。
【八】 離欲外仙人(Bāhiraka kāmesu vītarāgo)。[聖位の]外にあり、諸欲の上に染を離れたるものの意。
【九】 精進人。巴利文「凡夫持戒の人。」
【一〇】 不精進人、「凡夫邪戒の人。」
(3) 四種布施。
【一一】 施主(Dāyaka)。
【一二】 受者(Paṭiggāhaka)。

て曰く『世尊、この新しき金縷の黃色衣、我自ら世尊の爲に作りぬ。我を慈愍したまふが故に願はくは納受を垂れたまへ。』世尊告げて曰はく『瞿曇彌、この衣を持ちて比丘衆に施し、比丘衆に施し已りて、すなはち我に供養し亦衆に供養せよ。』[四]大生主瞿曇彌再び三たびに至りて白して曰く『世尊この新しき金縷の黃色衣、我自ら世尊の爲に作りぬ。我を慈愍したまふが故に願はくは納受を垂れたまへ。』世尊亦再び三たびに至りて告げて曰はく『瞿曇彌、この衣を持ちて比丘衆に施し、比丘衆に施し已りて、すなはち我に供養し、亦衆に供養せよ。』その時尊者阿難世尊の後に立ちて拂を執り佛に侍しぬ。こゝに於て尊者阿難白して曰く『世尊、この大生主瞿曇彌世尊に於て饒益する所多し。世尊の母命終りて後世尊を乳養したてまつりぬ。』世尊告げて曰はく『是の如し阿難、是の如し阿難、大生主瞿曇彌實に我に於て饒益する所多し。我が母命終りて後我を乳養しぬ。阿難、我亦大生主瞿曇彌に於て饒益する所多し。所以者何。大生主瞿曇彌我に因るが故に自ら佛・法及び比丘衆に歸するを得、[五]三尊、苦習滅道を疑はず、信・戒・多聞・施・慧を成就し、殺を離れ殺・不與取・邪婬・妄言を斷じ。酒を離れ酒を斷じぬ。阿難、若し人有り、人に因るが故に自ら佛・法及び比丘衆に歸するを得、三尊、苦習滅道を疑はず、信・戒・多聞・施・慧を成就し、殺を離れ殺・不與取・邪婬・妄言を斷じ、酒を離れ酒を斷ぜば、この人彼の人を供養して形壽を盡すに至り、飮食・衣被・床榻・湯藥・及び若干種の諸の生活の具を以てするも恩を報ずるを得ず。また次に阿難、七施衆有り、十四私施有り、大福を得、大果を得、大功德を得、大廣報を得。阿難、(1)云何が七施衆大福を得、大果を得、大功德を得、大廣報を得るや。信[心の]族姓男族姓女、佛在世の時佛を首と爲し佛及び比丘衆に施す。これを第一施衆と謂ひ、大福を得、大果を得、大功德を得、大廣報を得。信[心の]族姓男族姓女、世尊般涅槃の後久しからずして二部衆に施し、比丘衆に施し比丘尼衆に施し、比丘の僧園に入りて而も衆に白して曰く、衆中その所の比丘來らば彼に布施せんと。比丘僧房に入りて而も衆に

【四】大生主は摩訶簸邏闍鉢提の譯語なり。

【五】三尊とは佛法僧を指す。

(1)七施。

如眞を知り、善戒を從生するの如眞を知り、この善戒滅して餘無く敗壞して餘無きの如眞を知り慧を以て觀じ、賢聖の弟子是の如く行ぜば、善戒を滅して如眞を知る。慧を以て不善念を觀じて如眞を知り、不善念を從生するの如眞を知り、この不善念滅して餘無く敗壞して餘無きの如眞を知り、慧を以て觀じ、賢聖の弟子是の如く行ぜば、不善念を滅して如眞を知る。慧を以て善念を觀じて如眞を知り、善念を從生するの如眞を知り、この善念滅して餘無く敗壞して餘無きの如眞を知り、慧を以て觀じ、賢聖の弟子是の如く行ぜば、善念を滅して如眞を知る。所以者何。正見に因るが故に正志を生じ、正志に因るが故に正語を生じ、正語に因るが故に正業を生じ、正業に因るが故に正命を生じ、正命に因るが故に正方便を生じ、正方便に因るが故に正念を生じ、正念に因るが故に正定を生ず。賢聖の弟子心是の如く定まり已りてすなはち一切の婬・怒・癡を解脫す。物主、賢聖の弟子是の如く正心解脫し已りてすなはち知り、一切の生已に盡き梵行已に立ち、所作已に辨じ更に有を受けずと如眞を知る。これを學見跡八支を成就し、漏盡の阿羅訶[一〇]十支を成就すと謂ふ。物主、云何が學見跡八支を成就するや。謂く正見を學び[乃]至正定を學ぶ。これを學見跡八支を成就すと謂ふ。物主、云何が漏盡の阿羅訶十支を成就するや。謂く無學の正見[乃]至無學の正智・[正解脫]・なり。これを漏盡の阿羅訶十支を成就すと謂ふ。物主、若し十支有れば、我彼を善を成就し、第一義あり、無上士にして第一義を得たる質直の沙門なりと施設す。』佛說是の如し。彼の五支物主及び諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百八十、[一]瞿曇彌經第九

我が聞きしこと是の如し。ある時佛釋羈瘦に遊び加毘羅衛尼拘類樹園に在しぬ。その時[二]摩訶邏闍鉢提瞿曇彌[三]新しき金縷の黃色衣を持ち佛の所に往詣し佛足に稽首し卻きて一面に住し、白し

【九】八聖位の中阿羅漢果を除きたる餘の四向三果の位の人。
【一〇】八正道の外に正智、正解脫の二を加ふ。
【一】M. 142, Dakkhiṇā-vibhaṅga-sutta. 施護譯「分別布施經。」
【二】摩訶簸邏闍鉢提瞿曇彌(Mahāpajāpatī gotamī)。佛の姨母(をば)、大愛道夫人なり、後出家す、その因緣に就ては二八卷「瞿曇彌經」を見よ)
【三】新金縷黃色衣、巴利文にては單に Dussayuga(一對の衣物、一領衣)。

と說く。或は欲想、或は恚想、或は害想なり。物主、衆生欲界想に因るが故に不善念を生じ欲界と相應す。若し想有れば、彼の想に因るが故に不善念を生じ恚害界想に因るが故に不善念を生じ恚害界と相應す。若し想有れば、彼の想に因るが故に不善念を生じ恚害界と相應す。この不善念この想より生ず。物主、不善念何の處に滅して餘無く何の處に敗壞して餘無きや。若し多聞の聖弟子欲を離れ、惡不善の法を離れ、覺有り觀有り、離より生ずる喜と樂とあり初禪を得、成就して遊べばこの不善念滅して餘無く敗壞して餘無し。物主、賢聖の弟子云何が行じて不善念を滅するや。若し多聞の聖弟子内身を觀じて身の如く、[乃]至覺・心・法を觀じて[覺・心・]法の如く、賢聖の弟子是の如く行ぜば、不善念を滅す。物主、(4)云何が善念なりや。無欲念・無恚念・無害念、これを善念と謂ふ。物主、善念何よりして而も生ずるや。我彼の從りて生ずる所を說く。當に知るべし、想より生ず。云何が想と爲す。我想は多種・無量種・若干種行なりと說く。或は無欲想、或は無恚想、或は無害想なり。物主、衆生無欲界想に因るが故に善念を生じ無欲界と相應す。若し想有れば、彼の想に因るが故に善念を生じ無欲界と相應す。物主、衆生無恚無害界に因るが故に善念を生じ無恚無害界と相應す。この善念この想より生ず。物主、善念何の處に滅して餘無く何の處に敗壞して餘無きや。若し多聞の聖弟子樂滅し苦滅し喜憂は本已に滅し、不苦不樂にして捨あり念あり、清淨にして第四禪を得、成就して遊べば、この善念滅して餘無く敗壞して餘無し。物主、賢聖の弟子云何が行じて善念を滅するや。若し多聞の聖弟子内身を觀じて身の如く、[乃]至覺・心・法を觀じて[覺・心・]法の如く、賢聖の弟子是の如く行ぜば、善念を滅す。物主、若し多聞の聖弟子慧を以て不善戒を觀じて如眞を知り、不善戒を從生するの如眞を知り、この不善戒滅して餘無く敗壞して餘無きの如眞を知り慧を以て觀じ、賢聖の弟子是の如く行ぜば、不善戒を滅して如眞を知る。慧を以て善戒を觀じて

し。當に賢聖の弟子云何が行じ善戒を滅するやを知るべしと說く。物主、我、(3)當に不善念を知るべし。當に不善念何よりして而も生ずるやを知るべし。當に不善念何の處に滅して餘無く何の處に敗壞して餘無きやを知るべし。當に賢聖の弟子云何が行じて不善念を滅するやを知るべしと說く。物主、我、(4)當に善念を知るべし。當に善念何よりして而も生ずるやを知るべし。當に善念何の處に滅して餘無く何の處に敗壞して餘無きやを知るべし。當に賢聖の弟子云何が行じて善念を滅するやを知るべしと說く。物主、(1)云何が不善戒なりや。不善身行・不善口意行、これを不善戒と謂ふ。物主、この不善戒何よりして而も生ずるや。我彼の從りて生ずる所を說く。當に知るべし、心より生ず。云何が心と爲す。若し心欲有り恚有り癡有れば、當に知るべし、不善戒この心より生ず。物主、不善戒何の處に滅して餘無く何の處に敗壞して餘無きや。多聞の聖弟子身不善業を捨て身善業を修し口意不善業を捨て口意善業を修せば、これ不善戒滅して餘無く敗壞して餘無し。物主、賢聖の弟子云何が行じて不善戒を滅するや。若し多聞の聖弟子內身を觀じて身の如く「乃」至覺・心・法を觀じて「覺・心・」法の如く、賢聖の弟子是の如く行ぜば、不善戒を滅す。物主、(2)云何が善戒なりや。善身業・善口意業これを善戒と謂ふ。物主、この善戒何よりして而も生ずるや。我彼の從りて生ずる所を說く。當に知るべし、心より生ず。云何が心と爲す。若し心欲無く恚無く癡無ければ、當に知るべし、善戒この心より生ず。物主、善戒何の處に滅して餘無く何の處に敗壞して餘無きや。若し多聞の聖弟子戒を行じて戒に著せざれば、この善戒滅して餘無く敗壞して餘無し。物主、賢聖の弟子云何が行じて善戒を滅するや。若し多聞の聖弟子內身を觀じて身の如く「乃」至・覺・心・法を觀じて「覺・心・」法の如く、賢聖の弟子是の如く行ぜば、善戒を滅す。物主、(3)云何が不善念なりや。欲念・恚念・害念、これを不善念と謂ふ。物主、不善念何よりして而も生ずるや。我彼の從りて生ずる所を說く。當に知るべし、想より生ず。云何が想と爲す我想は多種・無量種・若干種行なり

て第一義を得たる質直の沙門なりと施設す。云何が四と爲す。身惡業を作さず、口惡言せず、邪命を行ぜず、惡念を念ぜず。物主、若しこの四事有れば、我彼を善を成就し、第一善あり、無上士にして第一義を得たる質直の沙門なりと施設す。』九支物主異學沙門文祁子の所説を聞きて是とせず非とせずして坐より起ち去りぬ。かくの如き所説、我自ら佛に詣り當にこの義を問ふべしとて、すなはち佛に往詣し稽首して禮を作し却きて一面に坐し、異學沙門文祁子と共に論ぜし所は、盡く佛に向ひて説きぬ。世尊聞き已りて告げて曰はく『物主、異學沙門文祁子の所説の如く、若し當に爾るべくば、嬰孩の童子支節柔軟にして仰向臥眠するも、亦當に善を成就し第一善あり、無上士にして第一義を得たる質直の沙門なるべし物主、嬰孩の童子尙ほ身想無し。況やまた身惡業を作すをや。唯能く身を動かす。物主、嬰孩の童子尙ほ口想無し。況やまた惡言をや。唯能く啼くを得。物主、嬰孩の童子尙命想無し。況やまた邪命を行ずるをや。唯呻吟有り。物主、嬰孩の童子尙ほ念想無し。況やまた惡念をや。唯母乳を念ず。物主、若し異學沙門文祁子の說く如くんば、是の如くして嬰孩の童子善を成就し第一善あり、無上士にして第一義を得たる質直の沙門たらん。物主、若し四事有ると我彼を善を成就[せず]、第一善なく、然して無上士に非ず第一義を得ず亦質直の沙門に非ずと施設す。云何が四と爲す。身惡業を作さず、口惡言せず、邪命を行ぜず、惡念を念ぜず。物主、若しこの四事有るも、我彼を善を成就[せず]第一善[なく]、然して無上士に非ず第一義を得ず亦質直の沙門に非ずと施設す。物主、身業口業は我この戒を施設す。物主、念は我この心所有と心相隨々を施設す。物主、我、(1)當に不善戒を知るべし。當に不善戒何よりして而も生ずるやを知るべし。當に不善戒何の處に滅して餘無く何の處に敗壞して餘無きやを知るべし。當に賢聖の弟子云何が行じて不善戒を滅するやを知るべしと說く。物主、我、(2)當に善戒を知るべし。當に善戒何よりして而も生ずるやを知るべし。當に善戒何の處に滅して餘無く何の處に敗壞して餘無きやを知るべ

知を斷ず。これを魔王・魔王の眷屬の至らざる所の處と謂ふ。比丘是の如く所依住止して魔王・魔王の眷屬の至らざる所の處たらしむ。當に是の如きを學すべし。」佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百七十九、[一]五支物主經第八

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衛國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時[二]五支物主平日舍衛國を出で佛の所に往詣し世尊に見え供養し禮事せんと欲しぬ。五支物主すなはちこの念を作しぬ、且く往きて佛世尊の或は能く宴坐したまふを見、及び諸尊比丘を[見るを]置き、我今寧ろ[三]一婆邏末利異學園に詣るべしと。こゝに於て五支物主すなはち[四]比道に至り遊戲歡樂して[五]巾頭阿梨に近づき一婆邏末利異學園に往詣しぬ。彼の時婆邏末利異學園中に一異學[六]沙門文祁子有り、彼の中に在りて大宗主爲り、衆人の師として衆の敬重する所にして大衆五百界學師を統領しぬ。彼擾亂の衆に在りて高大の音聲を發し、その譽喧鬧にして若干種の[七]畜生の論を說きぬ。謂く王を論じ賊を論じ鬪諍を論じ飮食を論じ衣被を論じ婦人を論じ童女を論じ婬女を論じ世間を論じ邪道を論じ海中を論じ、是の如き比衆集して若干種の畜生の論を論じぬ。異學沙門文祁子遙に五支物主の來るを見、すなはち自ら己の衆に勅して默然として住せしめぬ、汝等默然たれ。また語言すること莫れ。宜しく自ら收斂すべし。この沙門瞿曇の弟子五支物主來る。(若)沙門瞿曇の在家の弟子有りて舍衛國に居る者、五支物主に過ぎたるは無し。所以者何。彼默然を愛樂し默然を稱說す。若し彼この衆默然たるを見れば或は能く來り前まんと。彼の時異學沙門文祁子已の衆を止め已りて自ら默然として住しぬ。こゝに於て五支物主異學沙門文祁子の所に往詣し、共に相問訊し却きて一面に坐しぬ。異學沙門文祁子語げて曰く『物主、若し四事有れば、我彼を[八]善を成就し、第一善あり無上士にし

【一】 M. 78, Samaṇamaṇḍika-sutta.
【二】 五支物主(Pañcakaṅga-thapati)、五支と名くる大工棟梁の義
【三】 一婆羅末利異學園、巴利文「討論堂、[それは]鎮頭迦林[中にあり]」、一(＝婆羅)より成れる、末利迦(妃が建てたる)精舍。」
【四】 比字宋明本は「此」に作り、元本は「北」に作るといふ。
【五】 巾頭阿梨(Tindukācīra)上の鎮頭迦林なり。
【六】 沙門文祁子 (Samaṇa-Maṇḍika-putta)。
【七】 畜生論 (Tiracchāna-kattā)。二六卷「優曇婆邏經」に出づ。長阿含八卷「散陀那經」には「遮消濁亂之言」といふ。
【八】 巴利文「善を完具し、最上善あり、最上還に達し、克つことかたき沙門なりと稱說す。」

す。猶ほ第四の群鹿亦この念を作し、第一第二第三の群鹿一切獵師・獵師の眷屬の境界を脫せず。我今寧ろ獵師・獵師の眷屬の至らざる所の處に依住し、彼に依住し已りて獵師の食を近食せず、近食せずし已りてすなはち憍恣放逸ならず、放逸ならずし已りてすなはち獵師・獵師の眷屬に隨はざるべしと。第四の群鹿この念を作し已りてすなはち獵師・獵師の眷屬の至らざる所の處に依住し、彼に依住し已りて獵師の食を近食せず、近食せずし已りてすなはち憍恣放逸ならず、放逸ならずし已りてすなはち獵師・獵師の眷屬に隨はず。彼の獵師・獵師の眷屬またこの念を作す、第四の群鹿甚奇儁猛にして第一に儁猛なり。若し、我彼を逐はゞ必ず得ること能はず、餘鹿は則ち當に恐怖し驚き散ずべし。我今寧ろ第四の群鹿を捨罷すべしと。彼の獵師・獵師の眷屬この念を作し已りて則便ち捨罷し、是の如く第四の群鹿すなはち獵師・獵師の眷屬の境界を脫するが如し。當に彼の第四の沙門梵志も亦復是の如しと觀ずべし。比丘、當に是の如きを學し所依住止をして魔王・魔王の眷屬の至らざる所の處たらしむべし。何者か魔王・魔王の眷屬の至らざる所の處たる。謂く比丘欲を離れ、惡不善の法を離れ、[乃至]第四禪を得るに至り成就して遊ぶ。これを魔王・魔王の眷屬の至らざる所の處と謂ふ。また次に何者か魔王・魔王の眷屬の至らざる所の處たる。謂く、比丘心慈と倶にして一方に遍滿し成就して遊び、是の如く二・三・四方・四維・上下、一切に普周く、心慈と倶にして結無く怨無く、恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。是の如く悲喜[亦然り。]心捨と倶にして結無く怨無く恚無く諍無く、極廣甚大無量にして善く修し、一切世間に遍滿し成就して遊ぶ。これを魔王・魔王の眷屬の至らざる所の處と謂ふ。また次に何者か魔王・魔王の眷屬の至らざる所の處たる。謂く比丘一切の色想を度り非有想非無想處に至り成就して遊ぶ。これを魔王・魔王の眷屬の至らざる所の處と謂ふ。また次に何者か魔王・魔王の眷屬の至らざる所の處たる。謂く比丘一切の非有想非無想處を度り想知滅に身觸れ成就して遊び、慧見あり諸漏盡き

近食せずし已りてすなはち憍恣放逸ならず、放逸ならずし已りてすなはち魔王・魔王の眷屬に隨はず、然も二見を受持す。有見及び無見なり。彼この二見を受くるが故にすなはち魔王・魔王の眷屬に隨ひ、是の如く第三の沙門梵志亦魔王・魔王の眷屬の境界を脱せず。猶ほ第三の群鹿亦この念を作し、第一第二の群鹿一切獵師・獵師の眷屬の境界を脱せず。我今寧ろ獵師・獵師の眷屬を離れ依住することと遠からず、住することと遠からずし已りて獵師の食を近食せず、近食せずし已りてすなはち憍恣放逸ならず、放逸ならずし已りてすなはち獵師・獵師の眷屬に隨はざるべしと。第三の群鹿この念を作し已りてすなはち獵師・獵師の眷屬を離れ依住することと遠からず、住することと遠からずし已りて獵師の食を近食せず、近食せずし已りてすなはち憍恣放逸ならず、放逸ならずし已りてすなはち獵師・獵師の眷屬に隨はず。彼の獵師・獵師の眷屬すなはちこの念を作す、第三の群鹿甚奇諂黠にして極めて諂黠なり。所以者何。我が食を食し已りて而も得べからず。我今寧ろ長圍罝を作り、長圍罝を作り已りてすなはち第三の群鹿の所依住止を得べしと。獵師・獵師の眷屬この念を作し已りてすなはち長圍罝を作り、長圍罝を作り已りてすなはち第三の群鹿の所依住止を得、是の如く第三の群鹿亦獵師・獵師の眷屬の境界を脱せざるが如し。所依とは當に知るべし、有見なり。住止とは當に知るべし、無見なり。當に彼の第三の沙門梵志も亦復是の如しと觀ずべし。(4)第四の沙門梵志亦この念を作す、第一第二第三の沙門梵志一切魔王・魔王の眷屬の境界を脱せず。我今寧ろ魔王・魔王の眷屬の至らざる所の處に依住し、彼に依住し已りて世間信施の食を近食せず、近食せずし已りてすなはち憍恣放逸ならず、放逸ならずし已りてすなはち魔王・魔王の眷屬に隨はざるべしと。第四の沙門梵志この念を作し已りてすなはち魔王・魔王の眷屬の至らざる所の處に依住し、彼に依住し已りて世間信施の食を近食せず、近食せずし已りてすなはち憍恣放逸ならず、放逸ならずし已りてすなはち魔王・魔王の眷屬に隨はず。是の如く第四の沙門梵志すなはち魔王・魔王の眷屬の境界を脱

【二】 巴利文にはこゝに十種の問題を擧ぐ、(1)世界は常住、(2)非常住、(3)有限、(4)無限、(5)生命卽ち身體(身心一如)、(6)生命は一、身體は又一(身心不一如)、(7)如來は死後存在す（如來とは此處にては個體の意）、(8)存在せず、(9)存在し又存在せず、(10)存在せず又存在せざるにあらず。

彼近食し已りてすなはち憍恣放逸なり、放逸になり已りてすなはち獵師・獵師の眷屬に隨ひ、是の如く第一の群鹿獵師・獵師の眷屬の境界を脫せざるが如し。當に彼の第一の沙門・梵志も亦復是の如しと觀ずべし。(2)第二の沙門・梵志亦この念を作す、第一の沙門・梵志魔王の食・世間信施の食を近食し、彼近食し已りてすなはち憍恣放逸なり、放逸になり已りてすなはち魔王・魔王の眷屬に隨ひ、是の如く彼の第一の沙門・梵志魔王・魔王の眷屬の境界を脫せず。我今寧ろ世間信施の食を捨て恐怖を離れ、無事處に依り果及び根を食すべしと。第二の沙門・梵志この念を作し已りてすなはち世間信施の食を捨て恐怖を離れ、無事處に依り果及び根を食す。彼春後月に諸の果根盡き身體極めて羸れ氣力衰退し、衰退し已りてすなはち心解脫・慧解脫衰退し、心解脫・慧解脫衰退し已りてすなはち魔王・魔王の眷屬に隨ひ、是の如く第二の沙門梵志亦魔王・魔王の眷屬の境界を脫せず。猶ほ第二の群鹿而もこの念を作し、第一の群鹿獵師の食を近食し、彼近食し已りてすなはち憍恣放逸なり、放逸になり已りてすなはち獵師・獵師の眷屬に隨ひ、是の如く第一の群鹿獵師・獵師の眷屬の境界を脫せず。我今寧ろ獵師の食を捨て恐怖を離れ、無事處に依り草を食し水を飮むべきやと。第二の群鹿この念を作し已りてすなはち獵師の食を捨て恐怖を離れ、無事處に依り草を食し水を飮む。彼春後月に諸の草水盡き身體極めて羸れ氣力衰退し、すなはち獵師・獵師の眷屬に隨ひ、是の如く第二の群鹿亦獵師・獵師の眷屬の境界を脫せざるが如し。當に彼の第二の沙門・梵志も亦復是の如しと觀ずべし。(3)第三の沙門・梵志亦この念を作す、第一第二の沙門梵志一切魔王・魔王の眷屬の境界を脫せず。我今寧ろ魔王・魔王の眷屬を離れ依住すること遠からず、住すること遠からずし已りて世間信施の食を近食せず、近食せずし已りてすなはち憍恣放逸ならず、放逸ならずし已りてすなはち魔王・魔王の眷屬に隨はざるべしと。第三の沙門梵志この念を作し已りてすなはち魔王・魔王の眷屬を離れ依住すること遠からず、住すること遠からずし已りてすなはち世間信施の食を近食せず、

なはち獵師・獵師の眷屬に隨はず。彼の獵師・獵師の眷屬すなはちこの念を作す、第三の群鹿甚奇〔八〕諂黠にして極めて諂黠なり。所以者何。我が食を食し已りて而も得べからず。我今寧ろ〔九〕長圍罥を作り、長圍罥を作り已りてすなはち第三の群鹿の所依住止を得べしと。獵師・獵師の眷屬この念を作し已りてすなはち長圍罥を作り、長圍罥を作り已りてすなはち第三の群鹿の所依住止を得、是の如く第三の群鹿亦復獵師・獵師の眷屬の境界を脫せず。(4)第四の群鹿亦この念を作す、第一第二第三の群鹿一切獵師・獵師の眷屬の境界を脫せず。我今寧ろ獵師・獵師の眷屬の至らざる所の處に依住し、彼に依住し已りて獵師の食を近食せず、近食せずし已りてすなはち憍恣放逸ならず、憍恣放逸ならずし已りてすなはち獵師・獵師の眷屬に隨はざるべしと。第四の群鹿この念を作し已りてすなはち獵師・獵師の眷屬の至らざる所の處に依住し、彼に依住し已りてすなはち獵師の食を近食せず、近食せずし已りてすなはち憍恣放逸ならず、憍恣放逸ならずし已りてすなはち獵師・獵師の眷屬に隨はず。彼の獵師・獵師の眷屬またこの念を作す、第四の群鹿甚奇猛傷にして第一に猛傷なり。若し我彼を逐はゞ必ず得ること能はず。餘の鹿則ち當に恐怖し驚き散ずべし。我今寧ろ第四の群鹿に〔一〇〕捨置すべしと。獵師・獵師の眷屬この念を作し已りて則便ち捨置す。是の如く第四の群鹿すなはち獵師・獵師の眷屬の境界を脫するを得。比丘、我この喩を說きて義を解せしめんと欲す。我今これを說かん。當にその義を觀ずべし。獵師の食とは、當に知るべし、五欲の功德なり。眼色を知り耳聲を知り鼻香を知り舌味を知り身觸を知るなり。獵師の食とは、當に知るべし、これ五欲の功德なり。獵師とは、當に知るべし、これ惡魔王なり。獵師の眷屬とは、當に知るべし、これ魔王の眷屬なり。群鹿とは、當に知るべし。これ沙門・梵志なり。(1)第一の沙門・梵志魔王の食、世間信施の食を近食し、彼近食し已りてすなはち憍恣放逸なり、放逸になり已りてすなはち魔王・魔王の眷屬に隨ふ。是の如く第一の沙門・梵志魔王の境界を脫せず。猶ほ第一群鹿獵師の食を近食し、

【八】諂黠(Saṭha 姦黠、keṭubbhi 狡猾)。
【九】長圍罥。長きかこひあみ。
【一〇】捨置。あみわなをかけぬこと。

卷の第四十七

百七十八、獵師經第七[1]

我が聞きしこと是の如し。ある時佛王舍城に遊び、竹林迦蘭哆園に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『[2]獵師鹿を飼ふに、是の如き心ならず、鹿をして肥ゆるを得、色を得、力を得、樂長壽を得しめんと。獵師鹿を飼ふに是の如き心もて飼ふ、唯近食せんと欲し、近食し已りて　[3]憍恣放逸ならしめ、放逸になり已りて　[4]獵師・獵師の眷族に　[5]隨は「しめ」んと。獵師鹿を飼ふに是の如き心なり。(1)第一の群鹿獵師の食を近食し、彼近食し已りてすなはち憍恣放逸なり。放逸になり已りてすなはち獵師・獵師の眷屬に隨ふ。是の如く彼の第一の群鹿獵師・獵師の眷屬の境界を脫せず。(2)第二の群鹿而もこの念を作す、第一の群鹿獵師の食を近食し、彼近食し已りてすなはち憍恣放逸となり、放逸となり已りてすなはち獵師・獵師の眷屬に隨ふ。是の如く第一の群鹿獵師・獵師の眷屬の　[6]境界を脫せず。我今寧ろ獵師の食を食せず恐怖を離れ、[7]無事處に依り草を食し水を飲むべきやと」第二の群鹿この念を作し已りてすなはち獵師の食を捨て恐怖を離れ無事處に依り草を食し水を飲む。彼春後の月、諸の草水盡き、身體極めて羸れ氣力衰退しすなはち獵師・獵師の眷屬に隨ふ。是の如く彼の第二の群鹿亦復獵師・獵師の眷屬の境界を脫せず。(3)第三の群鹿亦この念を作す、第一第二の群鹿一切獵師・獵師の眷屬の境界を脫せず。我今寧ろ獵師・獵師の眷屬を離れ、衣住すること遠からず、住すること遠からずし已りて獵師の食を近食せず、近食せずし已りてすなはち憍恣放逸ならず、放逸ならずし已りてすなはち獵師、獵師の眷屬に隨はざるべしと。第三の群鹿この念を作し已りてすなはち獵師・獵師の眷屬を離れ、依住すること遠からず、住すること遠からずし已りて獵師の食を近食せず、近食せずし已りてすなはち憍恣放逸ならず、放逸ならずして已りす

【一】M. 25, Nivāpa-sutta.
【二】獵師(Nevāpika)。
【三】憍恣放逸 (Matta, Pamatta)。
【四】獵師眷屬 (Nevāpika-parisā)。
【五】巴利文「欲するまゝにされるもの。」
【六】不ㇾ脫二境界一。「神通威力より脫れず。」
【七】無事處 (Araññāyatana) 森林處。

の如く知るべし。(7の2)また次に比丘、所行・所相・所標、一切の無量識處を度り、無所有、この無所有處に成就して遊び、彼この行を受け、この相標を念じ、念を立すること如法にして一意に住せしめば、彼の比丘應に當に知るべし、我この法を生じ、退かず進まず亦復厭はず、我この法を生じ、能く我をして住せしめて而も我この定必ず久しく住することを得と。彼の比丘應に是の如く知るべし。(7の3)また次に比丘、所行・所相・所標、一切の無量識處を度り、無所有、この無所有處に成就して遊び、彼この行を受けず、この相標を念ぜず、唯非有想非無想處相應の念想昇進具を行ぜば、彼の比丘應に當に知るべし、我この法を生じ、退かず住せず亦復厭はず、我この法を生じ、我をして昇進せしむ。是の如く久しからずして當に非有想非無想處を得べしと。彼の比丘應に是の如く知るべし。(7の4)また次に比丘、所行・所相・所標、一切の無量識處を度り、無所有、この無所有處に成就して遊び、彼この行を受けず、この相標を念ぜず、唯厭相應の念想無欲具を行ぜば、彼の比丘應に當に知るべし、我この法を生じ、退かず住せず亦昇進せず、我この法を生じ、能く我をして厭はしむ。是の如く久しからずして當に漏盡を得べしと。彼の比丘應に是の如く知るべし。想有り知有り、これに齊しく知るを得、乃至非有想非無想處行・餘の第一有を[知るを得ん。]行禪比丘はこれより起ちて當に彼が爲に說くべし。』佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

中阿含經卷第四十六

しむ。是の如く久しからずして當に漏盡を得べしと。彼の比丘應に是の如く知るべし。(6の1)また次に比丘、所行・所相・所標、一切の無量空處を度り、無量識、この無量識處に成就して遊び、彼この行を受けず、この相標を念ぜず、唯無量空處相應の念想退轉具を行ぜば、彼の比丘應に當に知るべし、我この法を生じ、住せず進まず亦復厭はず、我この法を生じて而も我をして退かしむ。然るに我この定久しく住することを得ずと彼の比丘應に是の如く知るべし。(6の2)また次に比丘、所行・所相・所標、一切の無量空處を度り、無量識、この無量識處に成就して遊び、彼この行を受け、この相標を念じ、念を立すること如法にして一意に住せしめば、彼の比丘應に當に知るべし、我この法を生じ、退かず進まず亦復厭はず、我この法を生じ、能く我をして住せしめて而も我この定必ず久しく住することを得と。彼の比丘應に是の如く知るべし。(6の3)また次に比丘、所行・所相・所標、一切の無量空處を度り、無量識、この無量識處に成就して遊び、彼この行を受けず、この相標を念ぜず、唯無所有處相應の念想昇進具を行ぜば、彼の比丘應に當に知るべし、我この法を生じ、退かず住せず亦復厭はず、我この法を生じ、我をして昇進せしむ。是の如く久しからずして當に無所有處を得べしと。彼の比丘應に是の如く知るべし(6の4)また次に比丘、所行・所相・所標、一切の無量空處を度り、無量識、この無量識處に成就して遊び、彼この行を受けず、この相標を念ぜず、唯滅息相應の念想無欲具を行ぜば、彼の比丘應に當に知るべし、我この法を生じ、退かず住せず亦昇進せず、我この法を生じ、能く我をして厭はしむ。是の如く久しからずして當に漏盡を得べしと。彼の比丘應に是の如く知るべし。(7の1)また次に比丘、所行・所相・所標、一切の無量識處を度り、無所有この無所有處に成就して遊び、彼この行を受けず、この相標を念ぜず、唯無量識處相應の念想退轉具を行ぜば、彼の比丘應に當に知るべし、我この法を生じ、住せず進まず、亦復厭はず、我この法を生じて而も我をして退かしむ、然るに我この定久しく住することを得ずと。彼の比丘應に是

と。彼の比丘應に是の如く知るべし。(4の4)また次に比丘、所行・所相・所標、樂滅し苦滅し喜憂は本已に滅し、不苦不樂にして捨あり念あり清淨にして第四禪を得、成就して遊び、彼この行を受けず、この相標を念ぜず、唯滅息相應の念相無欲具を行ぜば、彼の比丘應に當に知るべし、我この法を生じ、退かず住せず亦昇進せず、我この法を生じ能く我をして厭はしむ。是の如く久しからずして當に漏盡を得べしと。彼の比丘應に是の如く知るべし。(5の1)また次に比丘・所行・所相・所標、一切の色想を度り有對想を滅し若干想を念ぜず、無量空、この無量空處に成就して遊び、彼この行を受けず、この相標を念ぜず、唯色樂相應の念想退轉具を行ぜば、彼の比丘應に當に知るべし、我この法を生じ、住せず進まず亦復厭はず、我この法を生じて而も我をして退かしむ。然るに我この定久しく住することを得ずと。彼の比丘應に是の如く知るべし。(5の2)また次に比丘、所行・所相・所標、一切の色想を度り有對想を滅し若干想を念ぜず、無量空、この無量空處に成就して遊び、彼この行を受け、この相標を念じ、念を立すること如法にして一意に住せしめば、彼の比丘應に當に知るべし、我この法を生じ退かず進まず亦復厭はず、我この法を生じ、能く我をして住せしめて而も我この定必ず久しく住するを得と。彼の比丘應に是の如く知るべし。(5の3)また次に比丘、所行・所相・所標、一切の色想を度り有對想を滅し若干想を念ぜず、無量空、この無量空處に成就して遊び、彼この行を受けず、この相標を念ぜず、唯無量識處相應の念想昇進具を行ぜば、彼の比丘應に當に知るべし、我この法を生じ、退かず住せず亦復厭はず、我この法を生じ、我をして昇進せしむ。是の如く久しからずして當に無量識處を得べしと。彼の比丘應に是の如く知るべし。(5の4)また次に比丘、所行・所相・所標、一切の色想を度り有對想を滅し若干想を念ぜず、無量空、この無量空處に成就して遊び、彼この行を受けず、この相標を念ぜず、唯滅息相應の念想無欲具を行ぜば、彼の比丘應に當に知るべし、我この法を生じ、退かず住せず亦昇進せず、我この法を生じ、能く我をして厭は

あり、第三禪を得、成就して遊び、彼この行を受けず、この相標を念ぜず、唯第四禪相應の念想昇進具を行ぜば、彼の比丘應に當に知るべし、我この法を生じ、退かず住せず亦復厭はず、我この法を生じ我をして昇進せしむ。是の如く久しからずして當に第四禪を得べしと。彼の比丘應に是の如く知るべし。(3の4)また次に比丘、所行・所相・所標、喜と欲とを離れ捨・無求にして遊び、正念正智にして而も身に樂を覺ゆ、謂く聖[者]の說く所の(聖)所捨・念・樂住・空あり、第三禪を得、成就して遊び、彼この行を受けず、この相標を念ぜず、唯滅息相應の念想無欲具を行ぜば、彼の比丘應に當に知るべし、我この法を生じ、退かず住せず亦昇進せず、我この法を生じ能く我をして厭はしむ。是の如く久しからずして當に漏盡を得べしと。彼の比丘應に是の如く知るべし。(4の1)また次に比丘、所行・所相・所標、樂滅し苦滅し喜憂は本已に滅し不苦不樂にして、捨あり念あり清淨にして第四禪を得、成就して遊び、彼この行を受けず、この相標を念ぜず、唯第三禪相應の念想退轉具を行ぜば、彼の比丘應に當に知るべし、我この法を生じ、住せず進まず亦復厭はず、我この法を生じて而も我をして退かしむ。然るに我この定久しく住することを得ずと。彼の比丘應に是の如く知るべし。(4の2)また次に比丘、所行・所相・所標、樂滅し苦滅し喜憂は本已に滅し不苦不樂にして、捨あり念あり清淨にして第四禪を得、成就して遊び、彼この行を受け、この相標を念じ、念を立すること如法にして一意に住せしめば、彼の比丘應に當に知るべし、我この法を生じ、退かず進まず亦復厭はず、我この法を生じ能く我をして住せしめて而も我この定必ず久しく住することを得と。彼の比丘應に是の如く知るべし。(4の3)また次に比丘、所行・所相・所標、樂滅し苦滅し喜憂は本已に滅し不苦不樂にして捨あり念あり清淨にして第四禪を得成就して遊び、彼この行を受けず、この相標を念ぜず、唯無量空處相應の念想昇進具を行ぜば、彼の比丘應に當に知るべし、我この法を生じ、退かず住せず亦復厭はず、我この法を生じ我をして昇進せしむ。是の如く久しからずして當に無量空處を得べし

この定必ず久しく住することを得と。彼の比丘應に是の如く知るべし。(2の3)また次に比丘、所行・所相 所標、覺觀已に息み内靖一心にして覺無く觀無く、定より生ずる喜と樂とあり、第二禪を得成就して遊び、彼この行を受けず、この相標を念ぜず、唯第三禪相應の念想昇進具を行ぜば、彼の比丘應に當に知るべし、我この法を生じ、退かず住せず亦復厭はず、我この法を生じ我をして昇進せしむ。是の如く久しからずして當に第三禪を得べしと。彼の比丘應に是の如く知るべし。(2の4)また次に比丘、所行・所相・所標、覺觀已に息み内靖一心にして覺無く觀無く、定より生ずる喜と樂とあり、第二禪を得成就して遊び、彼この行を受けず、この相標を念ぜず、唯滅息相應の念想無欲具を行ぜば、彼の比丘應に當に知るべし、我この法を生じ、退かず住せず亦昇進せず、我この法を生じ能く我をして厭はしむ。是の如く久しからずして當に漏盡を得べしと。彼の比丘應に是の如く知るべし。(3の1)また次に比丘、所行・所相・所標、喜と欲とを離れ捨・無求にして遊び、正念正智にして而も身に樂を覺ゆ、謂く聖[者]の說く所の(聖)所捨・念・樂住・空あり、第三禪を得、成就して遊び、彼この行を受けず、この相標を念ぜず、唯第二禪相應の念想退轉具を行ぜば、彼の比丘應に當に知るべし、我この法を生じ、住せず進まず亦復厭はず、我この法を生じて而も我をして退かしむ。然るに我この定久しく住することを得ずと。彼の比丘應に是の如く知るべし。(3の2)また次に比丘、所行・所相・所標、喜と欲とを離れ捨・無求にして遊び、正念正智にして而も身に樂を覺ゆ、謂く聖[者]の說く所の(聖)所捨・念・樂住・空あり、第三禪を得成就して遊び、後この行を受け、この相標を念じ、念を立すること如法にして一意に住せしめば、彼の比丘應に當に知るべし、我この法を生じ、退かず進まず亦復厭はず、我この法を生じ能く我をして住せしめて而も我この定必ず久しく住することを得と。彼の比丘應に是の如く知るべし。(3の3)また次に比丘、所行・所相・所標、喜と欲とを離れ捨・無求にして遊び、正念正智にして而も身に樂を覺ゆ、謂く聖[者]の說く所の(聖)所捨・念・樂住・空

に比丘、所行・所相・所標、欲を離れ惡不善の法を離れ、覺有り觀有り、離より生ずる喜と樂とあり、初禪を得、成就して遊び、彼この行を受けこの相標を念じ、念を立して如法にして一意に住せしむれば、彼の比丘應に當に知るべし、我この法を生じ、退かず進まず亦復厭はず、我この法を生じ能く我をして住せしめ、而も我この定必ず久しく住することを得と。彼の比丘應に是の如く知るべし。(1の3)また次に比丘、所行・所相・所標、欲を離れ惡不善の法を離れ、覺有り觀有り、離より生ずる喜と樂とあり、初禪を得、成就して遊び、彼この行を受けず、この相標を念ぜず、[三]唯第二禪相應の念想昇進具を行ぜば、彼の比丘應に當に知るべし、我この法を生じ、退かず住せず亦復厭はず、我この法を生じ我をして昇進せしむ。是の如く久しからずして當に第二禪を得べしと。彼の比丘應に是の如く知るべし。(1の4)また次に比丘、所行・所相・所標、欲を離れ惡不善の法を離れ、覺有り觀有り、離より生ずる喜と樂とあり、初禪を得成就して遊び、彼この行を受けず、この相標を念ぜず、唯滅息相應の念想無欲具を行ぜば、彼の比丘應に當に知るべし、我この法を生じ、退かず住せず亦昇進せず、我この法を生じ能く我をして厭はしむ。是の如く久しからずして漏盡を得べしと。彼の比丘應に是の如く知るべし。(2の1)また次に比丘、所行・所相・所標、覺觀已に息み、內靖一心にして覺無く觀無く、定より生ずる喜と樂とあり、第二禪を得成就して遊び、彼この行を受けず、この相標を念ぜず、唯初禪相應の念想退轉具を行ぜば、彼の比丘應に當に知るべし、我この法を生じ、住せず進まず亦復厭はず、我この法を生じて而も我をして退かしむ。然るに我この定久しく住することを得ずと。彼の比丘應に是の如く知るべし。(2の2)また次に比丘、所行・所相・所標、覺觀已に息み內靖一心にして覺無く觀無く、定より生ずる喜と樂とあり、第二禪を得、成就して遊び、彼この行を受け、この相標を念じ、念を立すること如法にして一意に住せしめば、彼の比丘應に當に知るべし、我この法を生じ、退かず進まず亦復厭はず、我この法を生じ能く我をして住せしめ、而も我

【三】「唯第二禪相應の念想を行じて昇進具はれば」とも讀み得らる。

正思を修習して快樂息寂なれば無量識處より無所有處に趣く、これ勝息寂なり。彼の行禪者すなはちこの念を作す、我が心正思を修習して快樂息寂なれば、無量識處より無所有處に趣き、これ勝息寂なりと。彼如眞を知り已りてすなはち彼の心を覺りて而も定を失はず。是の如く行禪者熾盛なれば則ち熾盛の如眞を知る。(7)また次に行禪者一切の無量識處を度り、無所有、この無所有處に成就して遊ぶ。彼の心正思を修習して快樂息寂なれば、無所有處より非有想非無想處に趣き、これ勝息寂なり。彼の行禪者すなはちこの念を作す、我が心正思を修習して快樂息寂なれば、無所有處より非有想非無想處に趣き、これ勝息寂なりと。彼如眞を知り已りてすなはち彼の心を覺りて而も定を失はず。是の如く行禪者熾盛なれば則ち熾盛の如眞を知る。世間實にこの四種の行禪者有りとは、これに因るが故に說く。』佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百七十七、說經第六

我が聞きしこと是の如し。ある時佛拘樓瘦劍摩瑟曇なる拘樓の都邑に遊びたまひぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『我今當に汝等が爲に法を說くべし。初め妙、中ごろ妙、竟り亦妙にして義有り文有り、具足し清淨にして梵行を顯現す。四種說經と名づく。四種說經の如くその義を分別せん。諦に聽け、諦に聽きて善くこれを思念せよ。我今當に說くべし。』時に諸の比丘教を受けて而も聽きぬ。佛言はく『云何が四種說經その義を分別するや。(1の1)若し比丘有り、所行・所相・所標、欲を離れ惡不善の法を離れ、覺有り觀有り、離より生ずる喜と樂とあり、初禪を得、成就して遊び、彼この行を受けず、この相・標を念せず、唯[一]欲樂相應の念想、[二]退轉の具を行ぜば、彼の比丘應に當に知るべし、我この法を生じ、住せず進まず亦復厭はず、我この法を生じて而も我をして退かしむ。然るに我この定久しく住することを得ずと。彼の比丘應に是の如く知るべし。(1の2)また次

【一】欲樂相應念想。初禪以下なる欲界の樂と相應せる念想の意。

【二】退轉具。「欲樂相應の念想を行じて退轉具はれば」とも讀み得るか。

を失はず。是の如く行禪者熾盛なれば則ち熾盛の如眞を知る。(2)また次に行禪者覺觀已に息み內靖一心にして覺無く觀無く、定より生ずる喜と樂とあり、第二禪を得、成就して遊ぶ。彼の心正思を修習して快樂息寂なれば、第二禪より第三禪に趣く、これ勝息寂なり。彼の行禪者すなはちこの念を作す、我が心正思を修習して快樂息寂なれば、第二禪より第三禪に趣き、これ勝息寂なりと。彼如眞を知り已りてすなはち彼の心を覺りて而も定を失はず。是の如く行禪者熾盛なれば則ち熾盛の如眞を知る。(3)また次に行禪者喜と欲とを離れ捨・無求にして遊び、正念正智にして而も身に樂を覺ゆ、謂く聖[者]の說く所の(聖)所捨・念・樂住・空あり、第三禪を得、成就して遊ぶ。彼の心正思を修習して快樂息寂なれば、第三禪より第四禪に趣く、これ勝息寂なり。彼の行禪者すなはちこの念を作す、我が心正思を修習して快樂息寂なれば、第三禪より第四禪に趣き、これ勝息寂なりと。彼如眞を知り已りてすなはち彼の心を覺りて而も定を失はず。是の如く行禪者熾盛なれば則ち熾盛の如眞を知る。(4)また次に行禪者樂滅し苦滅し喜憂は本已に滅し、不苦不樂にして捨あり念あり清淨にして第四禪を得、成就して遊ぶ。彼の心正思を修習して快樂息寂なれば、第四禪より無量空處に趣き、これ勝息寂なり。彼の行禪者すなはちこの念を作す、我が心正思を修習して快樂息寂なれば、第四禪より無量空處に趣き、これ勝息寂なりと。彼如眞を知り已りてすなはち彼の心を覺りて而も定を失はず。是の如く行禪者熾盛なれば則ち熾盛の如眞を知る。(5)また次に行禪者一切の色想を度り有對想を滅し若干想を念ぜず、無量空、この無量空處に成就して遊ぶ。彼の心正思を修習して快樂息寂なれば、無量空處より無量識處に趣く、これ勝息寂なり。彼の行禪者すなはちこの念を作す、我が心正思を修習して快樂息寂なれば、無量空處より無量識處に趣き、これ勝息寂なりと。彼如眞を知り已りてすなはち彼の心を覺りて而も定を失はず。是の如く行禪者熾盛なれば則ち熾盛の如眞を知る。(6)また次に行禪者一切の無量空處を度り、無量識、この無量識處に成就して遊ぶ。彼の心

を念ぜず、唯第三禪相應の念想本退具を行ず。彼の行禪者すなはちこの念を作す、我が心本の相を離れ更に餘處に趣き、第四禪を失ひ定を滅すと。彼如眞を知り已りて如に於て退かず意定を失はず。是の如く行禪者衰退すれば則ち衰退の如眞を知る。(6)また次に行禪者所行・所相・所標、喜と欲とを離れ捨・無求にして遊び、正念正智にして而も身に樂を覺ゆ、謂く聖[者]の說く所の(聖)所捨・念・樂住・空あり第三禪を得成就して遊ぶ。彼この行を受けず、この相・標を念ぜず、唯第二禪相應の念想本退具を行ず。彼の行禪者すなはちこの念を作す、我が心本の相を離れ更に餘處に趣き、第三禪を失ひ定を滅すと。彼如眞を知り已りて如に於て退かず意定を失はず。是の如く行禪者衰退すれば則ち衰退の如眞を知る。(7)また次に行禪者所行・所相・所標、覺觀已に息み內靖一心にして覺無く觀無く、定より生ずる喜と樂とあり、第二禪を得成就して遊ぶ。彼この行を受けず、この相・標を念ぜず、唯初禪相應の念想本退具を行ず。彼の行禪者すなはちこの念を作す、我が心本の相を離れ更に餘處に趣き、第二禪を失ひ定を滅すと。彼如眞を知り已りて如に於て退かず意定を失はず。是の如く行禪者衰退すれば則ち衰退の如眞を知る。(8)またこの行禪者所行・所相・所標、欲を離れ惡不善の法を離れ、覺有り觀有り、離より生ずる喜と樂とあり、初禪を得成就して遊ぶ。彼この行を受けず、この相・標を念ぜず、唯欲樂相應の念想本退具を行ず。彼の行禪者すなはちこの念を作す、我が心本の相を離れ更に餘處に趣き、初禪を失ひ定を滅すと。彼如眞を知り已りて如に於て退かず、意定を失はず。是の如く行禪者衰退すれば則ち衰退の如眞を知る。(III)云何が行禪者熾盛なれば則ち熾盛の如眞を知るや。(1)彼の行禪者欲を離れ惡不善の法を離れ、覺有り觀有り、離より生ずる喜と樂とあり、初禪を得、成就して遊ぶ。彼の心正思を修習して快樂息寂なれば則ち初禪より第二禪に趣く、これ勝息寂なり。彼の行禪者すなはちこの念を作す、我が心正思を修習して快樂息寂なれば則ち初禪より第二禪に趣き、これ勝息寂なりと。彼如眞を知り已りてすなはち彼の心を覺りて而も定

(III) 熾盛則知二熾盛如眞一。

入り、應に餘の小想を思ふべくして非有想非無想處に入る。彼如眞を知らずし已りて彼の心を覺らずして而もすなはち定を失ふ。是の如く行禪者衰退して而も熾盛なりと謂ふ。(Ⅲ)云何が行禪者衰退すれば則ち衰退の如眞を知るや。(1)彼の行禪者所行・所相・所標一切の無所有處を度り、非有想非無想、この非有想非無想處に成就して遊ぶ。彼この行を受けず、この相・標を念ぜず、唯無所有處相應の念相・本退具を行ず。彼の行禪者すなはちこの念を作す、我が心本の相を離れ更に餘處に趣き、非有想非無想處を失ひ定を滅すと。彼如眞を知り已りて如に於て退かず意定を失はず。是の如く行禪者衰退すれば則ち衰退の如眞を知る。(2)また次に行禪者所行・所相・所標一切の無量識處を度り、無所有、この無所有處に成就して遊ぶ。彼この行を受けず、この相・標を念ぜず、唯無量識處相應の念想・本所行を行ず。彼の行禪者すなはちこの念を作す、我が心本の相を離れ更に餘處に趣き、無所有處を失ひ定を滅すと。彼如眞を知り已りて如に於て退かず、意定を失はず。是の如く行禪者衰退すれば則ち衰退の如眞を知る。(3)また次に行禪者所行・所相・所標一切の無量空處を度り、無量識、この無量識處に成就して遊ぶ。彼この行を受けず、この相・標を念ぜず、唯無量空處相應の念想・本退具を行ず。彼の行禪者すなはちこの念を作す、我が心本の相を離れ更に餘處に趣き、無量空處を失ひ定を滅すと。彼如眞を知り已りて如に於て退かず意定を失はず。是の如く行禪者衰退すれば則ち衰退の如眞を知る。(4)また次に行禪者所行・所相・所標一切の色想を度り有對想を滅し若干想を念ぜず、無量空、この無量空處に成就して遊ぶ。彼この行を受けず、この相・標を念ぜず、唯色樂相應の念想・本退具を行ず。彼の行禪者すなはちこの念を作す、我が心本の相を離れ更に餘處に趣き、無量空處を失ひ定を滅すと。彼如眞を知り已りて如に於て退かず意定を失はず。是の如く行禪者衰退すれば則ち衰退の如眞を知る。(5)また次に行禪者所行・所相・所標、樂滅し苦滅し喜憂は本已に滅し、不苦不樂にして捨あり念あり、淸淨にして第四禪を得、成就して遊ぶ。彼この行を受けず、この相・標

(Ⅲ) 衰退可知衰退如眞。

知らずし已りて彼の心を覺らずして而もすなはち定を失ふ。是の如く行禪者衰退して而も熾盛なりと謂ふ。(4)また次に行禪者樂滅し苦滅し、喜憂は本已に滅し、不苦不樂にして捨あり念あり清淨にして第四禪を得成就して遊ぶ。彼餘の小想を思ひ無量空處道を修習す。彼の行禪者すなはちこの念を作す、我が心正思を修習して快樂息寂なれば第四禪より無量空處に趣く、これ勝息寂なりと。彼の行禪者如眞を知らず寧ろ厭相應の想を思ふべくして第四禪に入り、應に餘の小想を思ふべくして無量空處に入る。彼如眞を知らずし已りて彼の心を覺らずして而もすなはち定を失ふ。是の如く行禪者衰退して而も熾盛なりと謂ふ。(5)また次に行禪者一切の色想を度り有對想を滅し若干想を念ぜず、無量空、この無量空處に成就して遊ぶ。彼餘の小想を思ひ無量識處道を修習す。彼の行禪者すなはちこの念を作す、我が心正思を修習して快樂息寂なれば無量空處より無量識處に趣く、これ勝息寂なりと。彼の行禪者如眞を知らず、寧ろ厭相應の想を思ふべくして無量空處に入り、應に餘の小想を思ふべくして無量識處に入る。彼如眞を知らずし已りて彼の心を覺らずして而もすなはち定を失ふ。是の如く行禪者衰退して而も熾盛なりと謂ふ。(6)また次に行禪者一切の無量空處を度り、無量識處、この無量識處に成就して遊ぶ。彼餘の小想を思ひ無所有處道を修習す。彼の行禪者すなはちこの念を作す、我が心正思を修習して快樂息寂なれば無量識處より無所有處に趣至す、これ勝息寂なりと。彼の行禪者如眞を知らず、寧ろ厭相應の想を思ふべくして無量識處に入り、應に餘の小想を思ふべくして無所有處に入る。彼如眞を知らずし已りて彼の心を覺らずして而もすなはち定を失ふ。是の如く行禪者衰退して而も熾盛なりと謂ふ。(7)また次に行禪者一切の無量識處を度り、無所有、この無所有處に成就して遊ぶ。彼餘の小想を思ひ非有想非無想處道を修習す。彼の行禪者すなはちこの念を作す、我が心正思を修習して快樂息寂なれば無所有處より非有想非無想處に趣く、これ勝息寂なりと。彼の行禪者如眞を知らず、行禪者、寧ろ厭相應の想を思ふべくして無所有處に

有處に成就して遊ぶ。彼の心正思を修習すれば無所有處より非有想非無想處に趣く、これ勝息寂なり。彼の行禪者すなはちこの念を作す、我が心本の相を離れ更に餘處に趣き無所有處を失ひ定を滅すと。彼の行禪者、我が心正思を修習して快樂息寂なれば無所有處より非有想非無想處に趣き、これ勝息寂なりと如眞を知らず。彼如眞を知らずし已りて如に於て退轉し意すなはち定を失ふ。是の如く行禪者熾盛にして而も衰退すと謂ふ。(Ⅱ)云何が行禪者衰退して而も熾盛なりと謂ふや。(1)彼の行禪者欲を離れ惡不善の法を離れ、覺有り觀有り、離より生ずる喜と樂とあり、初禪を得、成就して遊ぶ。彼餘の小想を思ひ第二禪道を修習す。彼の行禪者すなはちこの念を作す、我が心正思を修習して快樂息寂なれば則ち初禪より第二禪に趣く、これ勝息寂なりと。[而も]彼の行禪者如眞を知らず、寧ろ厭相應の想を思ふべくして初禪に入り、應に餘の小想を思ふべからずして第二禪に入る。彼如眞を知らずし已りて彼の心を覺らずして而もすなはち定を失ふ。是の如く行禪者衰退して而も熾盛なりと謂ふ。(2)また次に行禪者覺觀已に息み內靖一心にして覺無く觀無く、定より生ずる喜と樂とあり、第二禪を得、成就して遊ぶ。彼餘の小想を思ひ第三禪道を修習す。彼の行禪者すなはちこの念を作す、我が心正思を修習して快樂息寂なれば、第二禪より第三禪に趣く、これ勝息寂なりと。彼の行禪者如眞を知らず、寧ろ厭相應の想を思ふべくして第二禪に入り、應に餘の小想を思ふべくして第三禪に入る。彼如眞を知らずし已りて彼の心を覺らずして而もすなはち定を失ふ。是の如く行禪者衰退して而も熾盛なりと謂ふ。(3)また次に行禪者喜と欲とを離れ捨、無求にして遊び、正念正智にして而も身に樂を覺ゆ、謂く聖[者]の說く所の(聖)所捨・念・樂住・空あり第三禪を得、成就して遊ぶ。彼餘の小想を思ひ第四禪道を修習す。彼の行禪者すなはちこの念を作す、我が心正思を修習して快樂息寂なれば第三禪より第四禪に趣く、これ勝息寂なりと。彼の行禪者如眞を知らず、寧ろ厭相應の想を思ふべくして第三禪に入り、應に餘の小想を思ふべくして第四禪に入る。彼如眞を

(Ⅱ) 衰退而謂二熾盛一。

ば第三禪より第四禪に趣く、これ勝息寂なり。[然るに]彼の行禪者すなはちこの念を作す、我が心本の相を離れ更に餘處に趣き第三禪を失ひ定を滅すと。彼の行禪者、我が心正思を修習して快樂息寂なれば第三禪より第四禪に趣き、これ勝息寂なりと如眞を知らず。彼如眞を知らずし已りて如に於て退轉し意すなはち定を失ふ。是の如く行禪者熾盛にして而も衰退すと謂ふ。(4)また次に行禪者樂滅し苦滅し喜憂は本已に滅し、不苦不樂にして捨あり念あり清淨にして第四禪を得、成就して遊ぶ。彼の心正思を修習すれば第四禪より無量空處に趣く、これ勝息寂なり。[然るに]彼の行禪者すなはちこの念を作す、我が心本の相を離れ更に餘處に趣き第四禪を失ひ定を滅すと。彼の行禪者、我が心正思を修習して快樂息寂なれば、第四禪より無量空處に趣き、これ勝息寂なりと如眞を知らず。彼如眞を知らずし已りて如に於て退轉し意すなはち定を失ふ。是の如く行禪者熾盛にして而も衰退すと謂ふ。(5)また次に行禪者一切の色想を度り有對想を滅し若干想を念ぜず無量空、この無量空處に成就して遊ぶ。彼の心正思を修習すれば無量空處より無量識處に趣く、これ勝息寂なり。[然るに]彼の行禪者すなはちこの念を作す、我が心本の相を離れ更に餘處に趣き無量空處を失ひ定を滅すと。彼の行禪者、我が心正思を修習して快樂息寂なれば、無量空處より無量識處に趣き、これ勝息寂なりと如眞を知らず、彼如眞を知らずし已りて如に於て退轉し意すなはち定を失ふ。是の如く行禪者熾盛にして而も衰退すと謂ふ。(6)また次に行禪者一切の無量空處を度り無量識、この無量識處に成就して遊ぶ。彼の心正思を修習すれば無量識處より無所有處に趣く、これ勝息寂なり。[然るに]彼の行禪者すなはちこの念を作す、我が心本の相を離れ更に餘處に趣き無量識處を失ひ定を滅すと。彼の行禪者、我が心正思を修習して快樂息寂なれば無量識處より無所有處に趣き、これ勝息寂なりと如眞を知らず。彼如眞を知らずし已りて如に於て退轉し意すなはち定を失ふ。是の如く行禪者熾盛にして而も衰退すと謂ふ。(7)また次に行禪者一切の無量識處を度り無所有、この無所

(4)第四禪。
(5)無量空處。
(6)無量識處。
(7)無所有處。

卷の第四十六

百七十六、行禪經第五

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『世間眞實に四種の行禪者有り。云何が四と爲す。(1)或は行禪者有り、熾盛にして而も衰退すと謂ふ。(2)或は行禪者有り、衰退して而も熾盛なりと謂ふ。(3)或は行禪者有り、衰退すれば則ち衰退すと如眞を知る。(4)或は行禪者有り、熾盛なれば則ち熾盛なりと如眞を知る。(I)云何が行禪者熾盛にして而も衰退すと謂ふや。(1)彼の行禪者欲を離れ惡不善の法を離れ、覺有り觀有り、離より生ずる喜と樂とあり、初禪を得、成就して遊ぶ。彼の心正思を修習すれば則ち初禪より第二禪に趣く、これ[一]勝息寂なり。[然るに]彼の行禪者すなはちこの念を作す、我が心本の相を離れ更に餘處に趣き初禪を失ひ定を滅すと。彼の行禪者、我が心正思を修習して快樂息寂なれば則ち初禪より第二禪に趣き、これ勝息寂なりと如眞を知らず。彼如眞を知らずし已りて如に於て退轉し意すなはち定を失ふ。是の如く行禪者熾盛にして而も衰退すと謂ふ。(2)また次に行禪者覺觀已に息み内靖一心にして覺無く觀無く、定より生ずる喜と樂とあり、第二禪を得、成就して遊ぶ。彼の心正思を修習すれば第二禪より第三禪に趣く、これ勝息寂なり。[然るに]彼の行禪者すなはちこの念を作す、我が心本の相を離れ更に餘處に趣き第二禪を失ひ定を滅すと。彼の行禪者、我が心正思を修習して快樂息寂なれば第二禪より第三禪に趣き、これ勝息寂なりと如眞を知らず。彼如眞を知らずし已りて如に於て退轉し意すなはち定を失ふ。是の如く行禪者熾盛にして而も衰退すと謂ふ。(3)また次に行禪者、喜と欲とを離れ捨、無求にして遊び、正念正智にして而も身に樂を覺ゆ、謂く聖[者]の說く所の(聖)所捨・念・樂住・空[あり]、第三禪を得、成就して遊ぶ。彼の心正思を修習すれ

(I) 熾盛而謂二衰退一。

(1) 初禪。

[一] 勝息寂。勝れたる安息である、寂止である。

(2) 二禪。

(3) 三禪。

樂にして當來に亦樂報を受く。彼の慧者、如眞にこの受法現に樂にして當來に亦樂報を受くるを知り、如眞を知り已りてすなはち習行して斷ぜず、習行して斷ぜずし已りてすなはち喜愛可の法生じ不喜・不愛・不可の法滅す。これを慧法と謂ふ。彼習行法に如眞を知り、不習行法に如眞を知り、習行法に如眞を知り不習行法に如眞を知り已りてすなはち習行法は習ひ不習行法は習はず、習行法は習ひ不習行法は習はずし已りてすなはち喜愛可の法生じ不喜・不愛・不可の法滅す。これを慧法と謂ふ。世間の眞實にこの四種の受法有りとは、これに因るが故に説く。』佛説是の如し。彼の諸の比丘佛の所説を聞きて歡喜奉行しぬ。

不可の法生じ喜愛可の法滅す。これを癡法と謂ふ。彼習行法如眞を知らず、不習行法如眞を知らず、習行法如眞を知らず、不習行法如眞を知らずし已りて不習行法は習ひ、習行法は習はず、不習行法は習ひ習行法は習はずし已りてすなはち不喜・不愛・不可の法生じ喜愛可の法滅す。これを癡法と謂ふ。(1)若し受法現に樂にして當來に苦報を受くる有れば、彼の慧者如眞にこの受法現に樂にして當來に苦報を受くるを知り、如眞を知り已りてすなはち習行せずして而もこれを斷じ、習行せずして斷じ已りてすなはち喜愛可の法生じ不喜・不愛・不可の法滅す。これを慧法と謂ふ。(2)若し受法現に苦にして當來に樂報を受くる有れば、彼の慧者如眞にこの受法現に苦にして當來に樂報を受くるを知り、如眞を知り已りてすなはち習行して斷ぜず、習行して斷ぜずし已りてすなはち喜愛可の法生じ不喜・不愛・不可の法滅す。猶ほ大小便に若干種の藥を和するが如し。或は人有り病の爲の故に服す。服する時惡色臭にして無味、口に可からずして而も咽を傷く。服し已りて腹に在りてすなはち藥と成る。是の如くこの受法現に苦にして當來に樂報を受く。彼の慧者、如眞にこの受法現に苦にして當來に樂報を受くるを知り、如眞を知り已りてすなはち習行して斷ぜず、習行して斷ぜずし已りてすなはち喜愛可の法生じ不喜・不愛・不可の法滅す。これを慧法と謂ふ。(3)若し受法現に苦にして當來に亦苦報を受くる有れば、彼の慧者如眞にこの受法現に苦にして當來に亦苦報を受くるを知り、如眞を知り已りてすなはち習行せずして而もこれを斷じ、習行せずして斷じ已りてすなはち喜愛可の法生じ不喜・不愛・不可の法滅す。これを慧法と謂ふ。(4)若し受法現に樂にして當來に亦樂報を受くる有れば、彼の慧者如眞にこの受法現に樂にして當來に亦樂報を受くるを知り、如眞を知り已りてすなはち習行して斷ぜず、習行して斷ぜずし已りてすなはち喜愛可の法生じ不喜・不愛・不可の法滅す。猶ほ酥蜜に若干種の藥を和するが如し。或は人有り病の爲の故に服す。服する時好き色・香・味、口に可く而も咽を傷けず、服し已りて腹に在りてすなはち藥と成る。是の如くこの受法現に

【四】酥蜜（Navanita, Madhu）巴利文には Dadhi(酪)、sappi(熟酥)、madhu(密)、phāṇita(糖)?

謂ふ。(1)若し受法現に樂にして當來に苦報を受くる有るも、彼の癡者如眞にこの受法現に樂にして當來に苦報を受くるを知らず。如眞を知らずし已りてすなはち習行して斷ぜず、習行して斷ぜずし已りて、すなはち不喜・不愛・不可の法生じ喜愛可の法滅す。猶ほ阿摩尼藥の如し。一分の好き色・香・味あり、然も雜ふるに毒を以てす。或は人有り病の爲の故に服す。服する時好き色・香・味口に可くして而も咽を傷けず、服し已りて腹に在りてすなはち藥と成らず。是の如くこの受法現に樂にして當來に苦報を受く。彼の癡者如眞にこの受法現に樂にして當來に苦報を受くるを知らず、如眞を知らずし已りてすなはち習行して斷ぜず、習行して斷ぜずし已りてすなはち不喜・不愛・不可の法生じ喜愛可の法滅す。これを癡法と謂ふ。(2)若し受法現に苦にして當來に樂報を受くる有るも、彼の癡者如眞にこの受法現に苦にして當來に樂報を受くるを知らず、如眞を知らずし已りてすなはち習行せずして而もこれを斷じ、習行せずして斷じ已りてすなはち不喜・不愛・不可の法生じ喜愛可の法滅す。これを癡法と謂ふ。(3)若し受法現に苦にして當來に亦苦報を受くる有るも、彼の癡者如眞にこの受法現に苦にして當來に亦苦報を受くるを知らず、如眞を知らずし已りてすなはち習行して斷ぜず、習行して斷ぜずし已りてすなはち不喜・不愛・不可の法生じ喜愛可の法滅す。猶ほ大小便にまた雜ふるに毒を以てするが如し。或は人有り病の爲の故に服す。服する時惡色臭にして無味、口に可からずして而も咽を傷く。服し已りて腹に在りてすなはち藥と成らず。是の如くこの受法現に苦にして當來に亦苦報を受く。彼の癡者如眞にこの受法現に苦にして當來に亦苦報を受くるを知らず、如眞を知らずし已りてすなはち習行して斷ぜず、習行して斷ぜずし已りてすなはち不喜・不愛・不可の法生じ喜愛可の法滅す。これを癡法と謂ふ。(4)若し受法現に樂にして當來に亦樂報を受くる有るも、彼の癡者如眞にこの受法現に樂にして當來に亦樂報を受くるを知らず、如眞を知らずし已りてすなはち習行せずして而もこれを斷じ、習行せずして斷じ已りてすなはち不喜・不愛・

（1）現樂當來苦報。

【五】阿摩尼藥は Āpāniya-kaṁsa に當るか。但 Āpāni-yakaṁsa は水呑瓶にして藥に非ず。

（2）現苦當來樂報。

（3）現苦當來苦報。

（4）現樂當來樂報。

す。こはこれ癡法なり。我が法は甚だ深くして見難く覺り難く達し難し。是の如く我が法甚だ深くして見難く覺り難く達し難くして[然も]不喜不愛不可の法滅し喜愛可の法生ず。これ不癡法なり。世間眞實に四種の受法有り。云何が四と爲す。(1)或は受法有り、現に樂にして當來に苦報を受く。(2)或は受法有り、現に苦にして當來に樂報を受く。(3)或は受法有り、現に苦にして當來に亦苦報を受く。(4)或は受法有り、現に樂にして當來に亦樂報を受く。(1)云何が受法現に樂にして當來に苦報を受くるや。或は一[人]有り、自ら樂しみ自ら喜びて殺生し、殺生に因りて樂を生じ喜を生ず。彼自ら樂しみ自ら喜びて不與取・邪婬・妄言乃至邪見あり、邪見に因りて樂を生じ喜を生ず。是の如く身樂しみ心樂しみ、不善不善に從ひて生じ、智に趣かず覺に趣かず涅槃に趣かず。これを受法現に樂にして當來に苦報を受くと謂ふ。(2)云何が受法現に苦にして當來に樂報を受くるや。或は一[人]有り、自ら苦しみ自ら憂へて殺を斷じ、殺を斷ずるに因りて苦を生じ憂を生ず。彼自ら苦しみ自ら憂へて不與取・邪婬・妄言を斷じ、乃至邪見を斷じ、邪見を斷ずるに因りて苦を生じ憂を生ず。是の如く身苦しみ心苦しみ、善善に從ひて生じ、智に趣き覺に趣き涅槃に趣く。これを受法現に苦にして當來に樂報を受くと謂ふ。(3)云何が受法現に苦にして當來に亦苦報を受くるや。或は一[人]有り、自ら苦しみ自ら憂へて殺生し、殺生に因りて苦を生じ憂を生ず。彼自ら苦しみ自ら憂へて不與取・邪婬・妄言乃至邪見あり、邪見に因りて苦を生じ憂を生ず。是の如く身苦しみ心苦しみ、不善不善に從ひて生じ、智に趣かず覺に趣かず涅槃に趣かず。これを受法現に苦にして當來に亦苦報を受くと謂ふ。(4)云何が受法現に樂にして當來に亦樂報を受くるや。或は一[人]有り、自ら樂しみ自ら喜びて殺を斷じ、殺を斷ずるに因りて樂　生じ喜を生ず。彼自ら樂しみ自ら喜びて不與取・邪婬・妄言を斷じ乃至邪見を斷じ、邪見を斷ずるに因りて樂を生じ喜を生ず。是の如く身樂しみ心樂しみ、善善に從ひて生じ、智に趣き覺に趣き涅槃に趣く。これを受法現に樂にして當來に亦樂報を受くと

は根を食し或は果を食し、或は自落果を食し、或は蓮合衣を持し、或は毛衣を持し或は頭舍衣を持し或は毛頭舍衣を持し或は全皮を持し或は穿皮を持し或は全穿皮を持し、或は散髮を持し或は編髮を持し或は散編髮を持し、或は剃髮する有り、或は剃鬚する有り、或は鬚髮を剃り、或は拔髮する有り、或は拔鬚する有り、或は鬚髮を拔き、或は住立斷坐し、或は蹲行を修し、或は刺に臥す有りて刺を以て床と爲し、或は草に臥す有りて草を以て床と爲し、或は水に事ふる有りて晝夜に手抒し、或は火に事ふる有りて竟昔より之を燃し、或は日月に事へて尊祐大德とし叉手を彼に向く。かくの如きの比無量の苦を受け煩熱の行を學し、彼この法を受け具足を成じ已りて身壞れ命終りて必ず惡處に至り地獄の中に生ず。これを受法現に苦して當來に亦苦報を受くと謂ふ。(4)云何が受法現に樂にして當來に亦樂報を受くるや。或は一[人]あり、自然に重濁欲ならず、重濁恚ならず、重濁癡ならず、彼數ば欲心に隨ひて苦を受け憂感せず、數ば恚心癡心に隨ひて苦を受け憂感せず。彼樂を以て喜を以てその形壽を盡して梵行を修行し乃至歡悅心あり。彼この法を受け成じ具足し已りて[六]五下分結盡き、彼に化生して而も般涅槃し不退法を得てこの世に還らず。これを受法現に樂にして當來に亦樂報を受くと謂ふ。世間の眞實にこの四種の受法有りとは、これに因るが故に說く。[二]佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百七十五、[一]受法經[下]第四

我が聞きしこと是の如し。ある時佛[二]拘樓瘦劍磨瑟曇なる拘樓の都邑に遊びたまひぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『この世間是の如く欲し是の如く望み是の如く愛し是の如く樂ひ是の如き意あり、不喜不愛不可の法をして滅せしめ、喜愛可の法をして生ぜしめんと。彼是の如く欲し是の如く望み是の如く愛し是の如く樂ひ是の如き意あるも、然も不喜不愛不可の法生じ喜愛可の法滅

(4)現樂當來樂。

【六】五下分結　一卷「水喩經」註[七]を見よ。

【一】M. 46 Mahā-Dhammasamādāna-sutta. 竺法護譯「應法經。」

【二】二卷「漏盡經」註[二、三]を見よ、

くと。是の如く或は沙門梵志有り、快く莊嚴せる女と共に相娛樂し、是の如き說を作す「この沙門梵志、欲に於て當來に何の恐怖有り何の災患有るを見て而も欲を斷じ、欲を斷ずるを施設するや」この快く莊嚴せる女の身體に於て樂更樂觸る。彼この女と共に相娛樂し中に於て遊戲す。彼この法を受け成じ具足し已りて身壞れ命終りて惡處に趣至し地獄の中に生ず。方にこの念を作す「彼の沙門梵志、欲に於てこの當來の恐怖を見、この災患を見るが故に欲を斷じ欲を斷ずるを施設す。我等欲に因り欲を諍ひ欲に緣るが故に是の如き極苦甚重の苦を受く」と。これを受法現に樂にして當來に苦報を受くと謂ふ。(2)云何が受法現に苦にして當來に樂報を受くるや。或は〔四〕一[人]あり自然に重濁欲・重濁恚・重濁癡なり、彼數ば欲心に隨ひて苦を受け憂慼し、數ば恚心癡心に隨ひて苦を受け憂慼す。彼苦を以て憂を以てその形壽を盡して梵行を修行し乃至啼泣して淚を墮す。彼この法を受け成じ具足し已りて身壞れ命終りて必ず善處に昇り天中に生ず。これを受法現に苦にして當來に樂報を受くと謂ふ。(3)云何が受法現に苦にして當來に亦苦報を受くるや。或は沙門梵志有り、〔五〕裸形にして衣無く、或は手を以て衣と爲し、或は葉を以て衣と爲し、或は珠を以て衣と爲し、或は瓶を以て水を取らず、或は槐を以て水を取らず、刀杖もて劫抄するの食を食せず、欺妄の食を食せず、自往せず遣信せず來尊せず善尊せず住尊せず、若し二人食する有れば中に在りて食せず、懷妊の家にて食せず、狗を畜ふ家にて食せず、家に糞蠅有りて飛來すれば而も食せず、魚を噉はず肉を食せず、酒を飲まず惡水を飲まず、或は都て飲まず、無飲の行を學し、或は一口を噉ひ一口を以て足ると爲し、或は二・三・四乃至七口、七口を以て足ると爲し、或は一得を食し一得を以て足ると爲し、或は二・三・四乃至七得、七得を以て足ると爲し、或は日に一食し一食を以て足ると爲し、或は二・三・四・五・六・七日・半月・一月に一食し一食を以て足ると爲し、或は菜茹を食し或は稗子を食し或は穄米を食し或は雜𥻆を食し或は頭々邏食を食し或は麁食を食し、或は無事處に至り無事に依り、或

(2)現苦當來樂。

【四】自然重濁欲、重濁恚、重濁癡(pakatiyā tibbarāgajātiko, tibbadosajātiko, tibbamohajātiko)。天然に强き貪欲、强き瞋恚、强き愚癡の質である。

(3)現苦當來苦。

【五】以下四參「師子經」本文(六五頁)及び註〔一八〕以下參照。

或は孔雀の食と爲り、或は風吹き去り、或は村火燒き、或は野火燒き、或は敗壞して種子と成らず。是の如く樹神、汝安隱を得。若しこの種子鹿の食と爲るに非ず、孔雀の食[と爲る]に非ず、風の吹き去るに非ず、村火の燒くに非ず、野火の燒くに非ず、亦敗壞して種子と成らざるに非ざれば、この種子缺かず穿たず亦剖坼せず、風・雨・日の中傷する所と爲らず、大雨漬すを得てすなはち速に生ず。彼の樹神而もこの念を作す「何等を以ての故に彼の邊傍の種子村・神村・百穀藥木の親々・朋友の樹神、種子に於て當來に何の恐怖有り、何の災患有りやを見て而も來りて我を慰勞し、樹神、怖るゝこと勿れ、樹神、恐るゝこと勿れ。樹神、この子或は鹿の食、或は孔雀の食と爲り、或は風吹き去り、或は村火燒き、或は野火燒き、或は敗壞して種子と成らず。是の如く樹神、汝安隱を得。若しこの種子鹿の食と爲るに非ず、孔雀の食[と爲る]に非ず、風の吹き去るに非ず、村火の燒くに非ず、野火の燒くに非ず、亦敗壞して種子と成らざるに非ざれば、この種子缺かず穿たず、亦剖坼せず、風・雨・日の中傷する所と爲らず大雨漬すを得てすなはち速に生ずと[いひしぞ]。莖枝葉を成し柔軟にして節を成し觸體喜悅す。この莖枝葉柔軟にして節を成し、觸體喜悅し樂更樂觸る。これ樹大枝節葉を成すに緣りて彼の樹を纒裹し覆蓋して上に在り、覆蓋して上に在り已りて、彼の樹神方にこの念を作す「彼の邊傍の種子村・神村・百穀藥木の親々朋友の樹神、種子に於てこの當來の恐怖を見、この災患を見るが故に而も來りて我を慰勞して言ひぬ、樹神、怖るゝこと勿れ、樹神、怖るゝこと勿れ。この種子或は鹿の食、或は孔雀の食と爲り、或は風吹き去り、或は村火燒き、或は野火燒き、或は敗壞して種子と成らず。是の如く樹神、汝安隱を得。若しこの種子鹿の食と爲るに非ず、孔雀の食[と爲る]に非ず、風の吹き去るに非ず、村火の燒くに非ず、野火の燒くに非ず、亦敗壞して種子と成らざるに非ざれば、この種子缺かず穿たず亦剖坼せず、風・雨・日の中傷する所と爲らず、大雨漬すを得てすなはち速に生ずと。我種子に因り種子に緣るが故にこの極苦甚重の苦を受

ば、王童子聞き已りて必ず大に歡喜し、汝を供養してその形壽を盡さん。謂く衣被・飲食・臥具・湯藥及び種々の諸の生活の具なり。』尊者浮彌白して曰く『世尊、我本未だ曾てこの四喩を聞かず。何に由りて說くを得ん。唯今始めて世尊より之を聞く。』佛說是の如し。尊者浮彌及び諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百七十四、【一】受法經「上」第三

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『世間の眞實に四種の【二】受法有り。云何が四と爲す。(1)或は受法有り、現に樂にして當來に苦報を受く。(2)或は受法有り、現に苦にして當來に樂報を受く。(3)或は受法有り、現に苦にして當來に亦苦報を受く。(4)或は受法有り、現に樂にして當來に亦樂報を受く。(1)云何が受法現に樂にして當來に苦報を受くるや。或は沙門梵志有り、快く莊嚴せる女共に相娛樂し、是の如き說を作す、『この沙門梵志、欲に於て當來何の恐怖有り、何の災患有るを見て而も欲を斷じ欲を斷ずるを施設するや。』この快く莊嚴せる女の身體に於て樂更樂觸れ、彼この女と共に相娛樂し中に於て遊戲す。彼この法を受け成じ具足し已り身壞れ命終りて惡處に趣き至り地獄の中に生ず。方にこの念を作す「彼の沙門梵志欲に於てこの當來の恐怖を見この災患を見るが故に欲を斷じ欲を斷ずるを施設す。我等欲に因り欲を諍ひ欲に緣るが故に是の如き極苦甚重の苦を受く」と。猶ほ春後月の日中極めて熱きがごとし。【三】葛藤子有り、日に炙られ坼き迸りて一娑羅樹の下に墮つ。彼の時娑羅樹神これに因るが故に而も恐怖を生ず。こゝに於て彼の樹神、若しは邊傍の種子村神村、百穀藥木に、親々朋友の樹神有り、種子に於て當來に恐怖有り災患有るを見るが故にすなはち彼の樹神の所に往至し而も慰勞して曰く「樹神、怖るゝこと勿れ、樹神、怖るゝこと勿れ。今この種子、或は鹿の食、

【一】M. 45, Cūla-Dhamma-samādāna-sutta.

【二】受法(Dhammasamādāna)。

(1)現樂當來苦。

【三】葛藤子(Māluvāsipāṭikā)。

煖湯を以て漬し、而も取りて之を壓すれば、彼必ず油を得。所以者何。正を以て油を求む。謂く麻子を壓す。是の如く浮彌、若し沙門梵志有りて正見[乃至]正見定あり、彼願を作し行じて正梵行を行ぜば、彼必ず果を得。願無く、願あり願無く、願有るに非ず願無きに非ずして正梵行を行ぜば、彼必ず果を得。所以者何。正を以て果を求む。謂く道有り。浮彌、若し沙門梵志有りて邪見[乃至]邪見定有り、彼願を作し行じて邪梵行を行ぜば、必ず果を得ず。願無く、願あり願無く、願有るに非ず願無きに非ずして正梵行を行ぜば、必ず果を得ず。所以者何。邪を以て果を求む。謂く道無きなり。浮彌、(vii)猶ほ人有るが如し。火を得んと欲する者、濕木を以て火母と作し、濕鑽を以て鑽れば、必ず火を得ず。願無く、願あり願無く、願有るに非ず願無きに非ずして人火を得んと欲して濕木を以て火母と作し濕鑽を以て鑽れば、必ず火を得ず。所以者何。邪を以て火を求む。謂く濕木を鑽る。是の如く浮彌、若し沙門梵志有りて邪見[乃至]邪見定あり、彼願を作し行じて邪梵行を行ぜば、必ず果を得ず。願無く、願あり願無く、願有るに非ず願無きに非ずして正梵行を行ぜば、必ず果を得ず。所以者何。邪を以て果を求む。謂く道無きなり。浮彌、若し沙門梵志有りて正見[乃至]正見定あり、彼願を作し行じて正梵行を行ぜば、彼必ず果を得。願無く、願あり願無く、願有るに非ず願無きに非ずして正梵行を行ぜば、彼必ず果を得。所以者何。正を以て果を求む。謂く道有り。(viii)浮彌、猶ほ人有るが如し。火を得んと欲する者、燥木を以て火母と作し、燥鑽を以て鑽れば、彼必ず火を得。願無く、願あり願無く、願有るに非ず願無きに非ずして人火を得んと欲して燥木を以て火母と作し、燥鑽を以て鑽れば、彼必ず火を得。所以者何。正を以て火を求む。謂く燥木を以て鑽る。是の如く浮彌、若し沙門梵志有りて正見[乃至]正見定あり、彼願を作し行じて正梵行を行ぜば、彼必ず果を得。願無く、願あり願無く、願有るに非ず願無きに非ずして正梵行を行ぜば、彼必ず果を得。所以者何。正を以て果を求む。謂く道有り。浮彌、若し汝王童子の爲にこの四喩を說か

(vii) 濕木によりて火を得んとす。

(viii) 燥木によりて火を得んとす。

果を得。願無く、願有り願無く、願有るに非ず願無きに非ずして正梵行を行ぜば、彼必ず果を得。所以者何。正を以て果を求む。謂く道有り。浮彌、(iv)猶ほ人有るが如し。酥を得んと欲する者、器を以て酪を盛り抨を以て之を抨けば、彼必ず酥を得。願無く、願あり願無く、願有るに非ず願無きに非ずして人酥を得んと欲して器を以て酪を盛り抨を以て之を抨けば、彼必ず酥を得。所以者何。正を以て酥を求む。謂く酥を抨く。是の如く浮彌、若し沙門梵志有りて正見[乃至]正見定あり、彼願を作し行じて正梵行を行ぜば、彼必ず果を得。願無く、願あり願無く、願有るに非ず願無きに非ずして正梵行を行ぜば、彼必ず果を得。所以者何。正を以て果を求む。謂く道有り。浮彌、若し沙門梵志有りて邪見[乃至]邪見定あり、彼願を作し行じて邪梵行を行ぜば、必ず果を得ず。願無く、願あり願無く、願有るに非ず願無きに非ずして邪梵行を行ぜば、必ず果を得ず。所以者何。邪を以て果を求む。謂く道無きなり。浮彌、(v)猶ほ人有るが如し。油を得んと欲する者、笮具を以て沙を盛り、冷水を以て漬し、而も取りて之を壓すれば、必ず油を得ず。願無く、願あり願無く、願有るに非ず願無きに非ずして人油を得んと欲して笮具を以て沙を盛り、冷水を以て漬し、而も取りて之を壓すれば、必ず油を得ず。所以者何。邪を以て油を求む。謂く沙を壓す。是の如く浮彌、若し沙門梵志有りて邪見[乃至]邪見定あり、彼願を作し行じて邪梵行を行ぜば、必ず果を得ず。願無く、願あり願無く、願有るに非ず願無きに非ずして邪梵行を行ぜば、必ず果を得ず。所以者何。邪を以て果を求む。謂く道無きなり。浮彌、若し沙門梵志有りて正見[乃至]正見定あり、彼願を作し行じて正梵行を行ぜば、彼必ず果を得。願無く、願あり願無く、願有るに非ず願無きに非ずして正梵行を行ぜば、彼必ず果を得。所以者何。正を以て果を求む。謂く道有り。(vi)猶ほ人有るが如し。油を得んと欲する者、笮具を以て麻子を盛り、煖湯を以て漬し、而も取りて之を壓すれば、彼必ず油を得。願無く、願あり願無く、願有るに非ず願無きに非ずして人油を得んと欲して笮具を以て麻子を盛り、

(iv) 酪を盛りて酥を得んとす。

(v) 笮具に沙を盛りて油を得んとす。

(vi) 笮具に麻子を盛りて油を得んとす。

ず乳を得ず。所以者何。邪を以て乳を求む。謂く牛の角を㲉るなり。是の如く浮彌、若し沙門梵志有りて邪見[乃至]邪見定あり、彼願を作し行じて邪梵行を行ぜば必ず果を得ず。願無く、願あり願無く、願有るに非ず願無きに非ずして邪梵行を行ぜば必ず果を得ず。所以者何。邪を以て果を求む。謂く道無きなり。浮彌、若し沙門梵志有りて正見[乃至]正見定あり、彼願を作し行じて正梵行を行ぜば彼必ず果を得。所以者何。正を以て果を求む。謂く道有り。浮彌、(ii)猶ほ人有るが如し。乳を得んと欲する者、飼牛に飽飲せしめて而も牛乳を㲉らば彼必ず乳を得。願無く、願あり願無く、願有るに非ず願無きに非ずして、人乳を得んと欲し、飼牛に飽飲せしめて而も牛乳を㲉れば、彼必ず乳を得。所以者何。正を以て乳を求む。謂く牛乳を㲉るなり。是の如く浮彌、若し沙門梵志有りて正見[乃至]正見定あり、彼願を作し行じて正梵行を行ぜば、彼必ず果を得。願無く、願あり願無く、願有るに非ず願無きに非ずして正梵行を行ぜば、彼必ず果を得。所以者何。正を以て果を求む。謂く道有り。浮彌、若し沙門梵志有りて邪見[乃至]邪見定あり、彼願を作し行じて邪梵行を行ぜば、必ず果を得ず。願無く、願あり願無く、願有るに非ず願無きに非ずして邪梵行を行ぜば、必ず果を得ず。所以者何。邪を以て果を求む。謂く道無きなり。浮彌、(iii)猶ほ人有るが如し。酥を得んと欲する者、器を以て水を盛り抨を以て之を抨けば、必ず酥を得ず。願無く、願あり願無く、願有るに非ず願無きに非ずして、人酥を得んと欲して器を以て水を盛り抨を以て之を抨けば、必ず酥を得ず。所以者何。邪を以て酥を求む。謂く水を抨く。是の如く浮彌、若し沙門梵志有りて邪見[乃至]邪見定あり、彼願を作し行じて邪梵行を行ぜば、必ず果を得ず。願無く、願あり願無く、願有るに非ず願無きに非ずして邪梵行を行ぜば、必ず果を得ず。所以者何。邪を以て果を求む。謂く道無きなり。浮彌、若し沙門梵志有りて正見[乃至]正見定あり、彼願を作し行じて正梵行を行ぜば、彼必ず

(ii) 牛に飽飲せしめて乳を搾る。

(iii) 器に水を盛りて酥を得んとす。

童子、問はんと欲せばすなはち問へ。我聞き已りて當に思ふべし。』王童子すなはち尊者浮彌に問ひぬ『或は沙門梵志有りて我が所に來詣し而も我に語げて曰く「王童子、人有り、四(1)願を作し正梵行を行じて彼必ず果を得。(2)或は願無く、(3)或は願あり願無く、(4)或は願有るに非ず願無きに非ずして正梵行を行ずるも、彼必ず果を得」と。尊者浮彌の尊師何の意あり云何が說きたまふや。』尊者浮彌告げて曰く『王童子、我面り世尊より聞かず、亦諸の梵行[者]より聞かず。世尊或は是の如く說きたまはん、「或は人有り、願を作し五正梵行を行じて彼必ず果を得、或は願無く、或は願あり願無く、或は願有るに非ず願無きに非ずして正梵行を行ずるも、彼必ず果を得」と。』王童子白して曰く『若し尊者浮彌の尊師是の如き意あり是の如く說きたまはゞ、これ世間・天及び魔・梵・沙門・梵志、人より天に至るに於て最もその上に在り。尊者浮彌此に在りて食すべし。』尊者浮彌默然として而も受けぬ。王童子尊者浮彌默然として受くるを知り已りて卽ち坐より起ち自ら澡水を行じ、極美淨妙の種々豐饒なる食噉含消を以て自ら手もて斟酌し飽滿を得しめ、食訖り器を收め澡水を行じ已りて一小床を取り別に坐して法を聽きぬ。尊者浮彌彼の爲に法を說き勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ、無量の方便もて彼の爲に法を說き勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已りて坐より起ち去りて、佛の所に往詣し、佛足に稽首し却きて一面に坐し、王童子と共に論ぜる所の者は、盡く佛に向ひて說きぬ。世尊聞き已りて告げて曰はく『浮彌、何の意もて王童子の爲に四喩を說かざりしや。』尊者浮彌問ひて曰く『世尊、何をか四喩と謂ふ。』世尊答へて曰はく『浮彌、若し沙門梵志有りて邪見[乃至]邪見定あり、(1)彼願を作し行じて邪梵行を行ずれば必ず果を得ず。(2)願無く、(3)願あり願無く、(4)願有るに非ず願無きに非ずして邪梵行を行ぜば、必ず果を得ず。所以者何。邪を以て果を求む。謂く道無きなり。(i)浮彌、猶ほ人有るが如し。乳を得んと欲する者而も牛の角を𤛓らば、必ず乳を得ず。願無く、願あり願無く、願有るに非ず願無きに非ずして、人乳を得んと欲して而も牛の角を𤛓らば必

【四】「彼等或は希望を懷きて梵行を修するも果に達すること能くせず。」「正梵行」の「正」は恐くは衍にして、「必得ㇾ果」は「不ㇾ得ㇾ果」なるべし。

【五】「正梵行」の「正」は衍にあらず。

(i) 牛の角を搾りて乳を得んとす。

へて曰く『是の如し、世尊。』世尊告げて曰はく『若し比丘自害を念ぜず、害他を念ぜず、亦俱害を念ぜず、比丘但自ら饒益し及び他を饒益し多人を饒益するを念じ、世間を愍傷し天の爲人の爲義及び饒益を求め安隱快樂を求むれば、比丘、是の如く聰明の比丘黠慧廣慧あり、是の如く如來聰明の比丘黠慧廣慧ありと施設す。』比丘白して曰く『善き哉善き哉、唯然り世尊。』彼の時比丘佛の所說を聞きて善く受け善く持し善く誦習し已りて卽ち坐より起ち佛足を稽首し繞三匝して而も還りぬ。彼の時比丘世尊の敎を聞き遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤し、彼遠離獨住に在りて心放逸無く修行精勤し已りて族姓子の[その]爲に鬚髮を剃除し袈裟衣を著け至信に家を捨て家無くして學道する所の者、[卽ち]唯無上の梵行訖り、現法中に於て自ら知り自ら覺り、自ら作證し成就して遊び、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辨じ、更に有を受けずと如眞を知りぬ。彼の尊者法を知り已りて乃至阿羅訶を得ぬ。佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百七十三、[一]浮彌經第二

我が聞きしこと是の如し。ある時佛王舍城に遊び竹林迦蘭哆園に在しぬ。その時[二]尊者浮彌亦王舍城の無事禪室中に在りぬ。こゝに於て尊者浮彌夜を過ぎて平旦衣を著け鉢を持し、王舍城に入りて而も乞食を行ぜんと欲しぬ。尊者浮彌またこの念を作しぬ、且く王舍城に入りて乞食することを置き、我寧ろ[三]王子耆婆先那童子の家に往至すべしと。こゝに於て尊者浮彌すなはち王子耆婆先那童子の家に往至しぬ。王子耆婆先那童子遙に尊者浮彌の來るを見、卽ち座より起ち偏に著衣を袒ぎ、叉手を尊者浮彌に向け是の如き說を作しぬ『善く來りぬ、尊者浮彌、尊者浮彌久しく此に來らず。この床に坐すべし』尊者浮彌卽便ち坐に就きぬ。王子耆婆先那童子尊者浮彌の足に稽首し却きて一面に坐し白して曰く『尊者浮彌、我問ふ所有らんと欲す。我が問を聽すや。』尊者浮彌答へて曰く『王

【一】M.126, Bhūmija-sutta.

【二】尊者浮彌(Āyasmā Bhūmija)。

【三】王子耆婆先那童子は巴利にては Jīvasena Kumāra 壽軍童子なるべし、しかし巴利經には Jayasena Kumāra 勝軍童子となす。

極妙の辯才あり善思惟有り。世尊、多聞の比丘多聞の比丘を說く。世尊、云何が多聞の比丘なる。云何が多聞の比丘を施設するやと、比丘、問ふ所是の如しと爲すや。』比丘答へて曰く『是の如し世尊』世尊告げて曰はく『比丘、我が說く所甚だ多し。[四]謂く正經・歌詠・記說・偈他・因緣・撰錄・本起・此說・生處・廣解・未曾有法及び說義なり。比丘 若し族姓子有り、我が說く所の四句偈に[於て]義を知り法を知り、法に趣き法に向ひ、梵行に趣順すれば、比丘、多聞の比丘と說きてまたこれに過ぐる無し。比丘、是の如きは多聞の比丘なり。如來是の如く多聞の比丘を施設す。』比丘白して曰く『善き哉善き哉、唯然り世尊。』彼の時比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。(3)問ひて曰く『世尊、[五]多聞の比丘明達智慧[あるもの]多聞の比丘明達智慧あるを說く。世尊、云何が多聞の比丘明達智慧ありや、云何が多聞の比丘明達智慧ありと施設するや。』世尊聞き已りて歎じて曰はく『善き哉善き哉、比丘、謂く賢道有りて而も賢觀有り、極妙の辯才あり善思惟有り。世尊、多聞の比丘明達智慧[あるもの]多聞の比丘明達智慧あるを說く。世尊、云何が多聞の比丘明達智慧ありや。云何が多聞の比丘明達智慧ありと施設するやと、比丘、問ふ所是の如しと爲すや。』比丘答へて曰く『是の如し、世尊。』世尊告げて曰はく『比丘、若し比丘この苦を聞き、また慧を以て苦の如眞を正見すれば、苦の習・苦の滅・苦滅の道を聞き、また慧を以て苦滅道の如眞を正見す。比丘、是の如く多聞の比丘明達智慧あり。如來是の如く多聞の比丘明達智慧ありと施設す。』比丘白して曰く『善き哉善き哉、唯然り世尊。』彼の時比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。(4)問ひて曰く『世尊、[六]聰明の比丘黠慧廣慧[あるもの]聰明の比丘黠慧廣慧あるを說く。世尊、云何が聰明の比丘黠慧廣慧ありや。云何が聰明の比丘黠慧廣慧ありと施設するや。』世尊聞き已りて歎じて曰はく『善き哉善き哉、比丘、謂く賢道有りて而も賢觀有り、極妙の辯才あり善思惟有り。世尊、云何が聰明の比丘黠慧廣慧ありや。云何が聰明の比丘黠慧廣慧ありと施設するやと、比丘、問ふ所是の如しと爲すや。』比丘答

【四】正經・歌詠…。十二部經なり、一卷「善法經」註〔一二〕を見よ。

【五】第三問、學問ありて洞察智あるもの。「意經」には「智慧捷疾。」

【六】第四問、博識にして大智あるもの。

巻の第四十五

心品第三（十經あり）

〔十經とは〕心・浮彌・受法は二、行禪・說・獨師・五枝財物主・罌曇彌・多界なり。

百七十二、心經第一[一]

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衛國に遊び、勝林給孤獨園に在しぬ。その時一比丘有り、獨り安靖處に宴坐し思惟し、心にこの念を作しぬ、[二]誰か世間を將ち去り、誰か染著を爲し、誰か自在を起すやと。彼の時比丘則ち晡時に於て宴坐より起ち佛の所に往詣し、稽首して足を禮し却きて一面に坐し、白して曰く『世尊、我今獨り安靖處に宴坐し思惟し、心にこの念を作しぬ、(1)誰か世間を將ち去り、誰か染著を爲し、誰か自在を起すやと。』世尊聞き已りて歎じて曰はく、『善き哉善き哉、比丘、謂く賢道有りて而も賢觀有り、極妙の辯才あり、善思惟有り。誰か世間を將ち去り、誰か染著を爲し、誰か自在を起すやと、比丘、問ふ所是の如しと爲すや。』比丘答へて曰く、『是の如し、世尊。』世尊告げて曰はく『比丘、心世間を將ち去り、心染著を爲し、心自在を起す。比丘、彼世間を將ち去り、彼染著を爲し、彼自在を起す。比丘、多聞の聖弟子心將ち去るに非ず、心染著するに非ず、心自在なるに非ず。比丘、多聞の聖弟子心の自在に隨はず、而も心多聞の聖弟子に隨ふ。』比丘白して曰く『善き哉善き哉、唯然り世尊。』彼の時比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行し、(2)問ひて曰く『世尊、多聞の比丘多聞の比丘を說く。世尊、[三]云何が多聞の比丘なる。云何が多聞の比丘を施設するや。』世尊聞き已りて嘆じて曰はく『善き哉善き哉、比丘、謂く賢道有りて而も賢觀有り、

【一】A. ii 177. 竺法護譯「意經。」

【二】誰將二世間一去、誰爲二染著一、誰也二自在一。「意經」には「以レ何故世間牽、以レ何故受二於苦一、以レ何故生巳、生巳人二隨從一。」巴利文「世は何によりて引かれ、世は何によりて惱まされ、何物起れば世は追隨するや。」

【三】第二問「多聞にして法を受持するものとは如何。」

し一「人」有りて殺・不與取・邪婬・妄言・乃至邪見を離れ、これ離れ護り已りて身壞れ身終りて善處天中に生ぜば、彼即ちこれに因りこれに緣り、身壞れ命終りて善處天中に生じ、或はまた本善業を作し、作し已り成ぜば、離れ護るに因るが故に、未だ盡く應に報を受くべからず、彼これに因りこれに緣りて身壞れ命終りて善處天中に生じ、或はまた死時善心を生じ、心所有の法正見と相應し、彼これに因りこれに緣りて身壞れ命終りして善處天中に生ず。阿難、如來彼の人是の如きを爲すを知る。また次に〔三〕四種の人有り。或は人有り、有無くして有に似、或は有にして有無きに似、或は有無くして有無きに似、或は有にして有に似る。阿難、猶ほ四種の棕の如し。或は棕熟せずして熟するに似、或は熟して熟せざるに似、或は熟せずして熟せざるに似、或は熟して熟せるに似たり。是の如く阿難、四種の棕を人に喩ふ。或は人有りて有無くして有に似、或は有にして有無きに似、或は有無くして有無きに似、或は有にして有に似る」と。佛說是の如し。尊者阿難及び諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

中阿含經卷第四十四

【三】業に四種あり、(1)無力にして無力の觀あると、(2)無力にして有力の觀あると、(3)有力にして有力の觀あると、(4)有力にして無力の觀あるとなり。

さず。若し所見所知を極力捫摸し、一向に著してこれ眞諦にして餘は皆虚妄なりと說かば、我彼を聽さず。所以者何。阿難、如來彼の人異るを知る。阿難、(1)若し一「人」有りて殺・不與取・邪婬・妄言乃至邪見を離れず、これ離れず護らず已りて身壞れ身終りて善處天中に生ぜば、彼若し本不善業を作し、作し已り成ぜば、離れず護らざるに因るが故に、彼現法中に於て報を受け訖りて而も彼に生ず。或はまた後報に因るが故に彼この因を以てせずこの緣を以てせず、身壞れ命終りて善處天中に生じ、或はまた本善業を作し、作し已り成ぜば、離れ護るに因るが故に、未だ盡く應に善處報を受くべからず。彼これに因りこれに緣るが故に、身壞れ命終りて善處天中に生ず。或はまた死時善心を生じ、心所有の法正見と相應し、彼これに因りこれに緣りて身壞れ命終りて善處天中に生ず。阿難、如來彼の人是の如きを爲すを知る。阿難、(2)若し一「人」有りて殺・不與取・邪婬・妄言乃至邪見を離れ、これ離れ護り已りて身壞れ命終りて惡處地獄の中に生ぜば、彼若し本善業を作し、作し已り成ぜば、離れ護るに因るが故に、彼現法中に於て報を受け訖りて而も彼に生ず。或はまた本不善業を作し、作し已り成ぜば、離れず護らざるに因るが故に、未だ盡く應に地獄の報を受くべからず、彼これに因りこれに緣りて身壞れ命終りて惡處地獄の中に生じ、或はまた死時不善心を生じ、心所有の法邪見と相應し、彼これに因りこれに緣りて身壞れ命終りて惡處地獄の中に生ず。阿難、如來彼の人是の如きを爲すを知る。阿難、(3)若し一人有りて殺・不與取・邪婬・妄言乃至邪見を離れず、これ離れず護らず已りて身壞れ命終りて惡處地獄の中に生ぜば、彼即ちこれに因りこれに緣りて身壞れ命終りて惡處地獄の中に生ず。或はまた本不善業を作し、作し已り成ぜば、離れず護らざるに因るが故に、未だ盡く應に地獄の報を受くべからず。彼これに因りこれに緣りて身壞れ命終りて惡處地獄の中に生じ、或はまた死時不善心を生じ、心所有の法邪見と相應し、彼これに因りこれに緣りて、身壞れ命終りて惡處地獄の中に生ず。阿難、如來彼の人是の如きを爲すを知る。阿難、(4)若

與取・邪婬・妄言乃至邪見を離れ、これ離れ護り已りて身壞れ命終りて惡處地獄の中に生ずるを見ると「いはば」、我彼を聽す。若しこの說を作し、若し更に是の如き比有りて殺・不與取・邪婬・妄言乃至邪見を離れ、これ離れ護れば、彼の一切身壞れ命終りて亦惡處地獄の中に生ずと「いはば」、我彼を聽さず。若しこの說を作し、是の如く見るは則ち正見と爲し、この見に異るは則ち彼の智邪に趣くと「いはば」、我彼を聽さず。若し所見所知を極力捫摸し、一向に著してこれ眞諦にして餘は皆虛妄なりと說かば、我彼を聽さず。所以者何。阿難、如來彼の人異るを知る。阿難、(3)中に於て若し一沙門梵志有り天眼を得、天眼を成就して是の如き說を作し、身惡行有り亦身惡行の報有り、口意惡行有り亦口意惡行の報有りと「いはば」、我彼を聽す。若しこの說を作し、我彼殺・不與取・邪婬・妄言乃至邪見を離れず、これ離れず護らず已りて身壞れ命終りて惡處地獄の中に生ずるを見ると「いはば」、我彼を聽す。若しこの說を作し、若し更に是の如き比有りて殺・不與取・邪婬・妄言・乃至邪見を離れず、これ離れず護らざれば、彼の一切身壞れ身終りて亦惡處地獄の中に生ずと「いはば」、我彼を聽さず。若しこの說を作し、是の如く見るは則ち正見と爲し、この見に異るは則ち彼の智邪に趣くと「いはば」、我彼を聽さず。若し所見所知を極力捫摸し、一向に著してこれ眞諦にして餘は皆虛妄なりと說かば、我彼を聽さず。所以者何。阿難、如來彼の人異るを知る。阿難、(4)中に於て若し一沙門梵志有りて天眼を得、天眼を成就して是の如き說を作し、身妙行有り亦身妙行の報有り、口意妙行有り亦口意妙行の報有りと說かば、我彼を聽す。若しこの說を作し、我彼殺・不與取・邪婬・妄言乃至邪見を離れ、これ離れ護り已りて身壞れ身終りて善處天中に生ずるを見ると「いはば」、我彼を聽す。若しこの說を作し、若し更に是の如き比有りて殺・不與取・邪婬・妄言乃至邪見を離れ、彼の一切身壞れ命終りて亦善處天中に生ずと「いはば」、我彼を聽さず。若しこの說を作し、是の如く見るは則ち正見と爲し、この見に異るは則ち彼の智邪に趣くと「いはば」、我彼を聽

如き比有りて殺・不與取・邪婬・妄言乃至邪見を離れず、これ離れず護らざれば、彼の一切身壞れ身終りて亦惡處地獄の中に生ずと、是の如く見るに則ち正見と爲し、この見に異るは則ち彼の智邪に趣く。若しは所見所知を極力捫摸し、一向に著してこはこれ眞諦にして餘は皆虚妄なりと說く。阿難、(4)若し一[人]有り、殺・不與取・邪婬・妄言乃至邪見を離れ、これ離れ護り已りて身壞れ命終りて善處天中に生ぜば、若し沙門梵志有りて天眼を得、天眼を成就して而も彼を見、見已りてこの念を作す、身妙行有り亦身妙行の報有り、口意妙行有り亦口意妙行の報有り。所以者何。我彼殺・不與取・邪婬・妄言乃至邪見を離れ、これ離れ護り已りて身壞れ命終りて善處天中に生ぜるを見る。若し更に是の如き比有りて殺・不與取・邪婬・妄言乃至邪見を離れ、これ離れ護れば、彼の一切身壞れ身終りて亦善處天中に生ずと、是の如く見るは則ち正見と爲し、この見に異るは則ち彼の智邪に趣く。若しは所見所知を極力捫摸し、一向に著してこはこれ眞諦にして餘は皆虚妄なりと說く。阿難、(1)中に於て若し一沙門梵志有りて天眼を得、天眼を成就し是の如き說を作し、身惡行無く亦身惡行の報無く、口意惡行無く亦口意惡行の報無しと[いはば]、我彼を聽さず。若しこの說を作し、我彼殺・不與取・邪婬・妄言乃至邪見を離れず、これ離れず護らず已りて身壞れ命終りて善處天中に生ずと[いはば]、我彼を聽さず。若しこの說を作し、若し更に是の如きの比有り殺・不與取・邪婬・妄言乃至邪見を離れず、これ離れず護らざれば、彼の一切身壞れ命終りて亦善處天中に生ずと[いはば]、我彼を聽さず。若しこの說を作し是の如く見るは則ち正見と爲し、この見に異るは則ち彼の智邪に趣くと[いはば]、我彼を聽さず。若し所見所知を極力捫摸し、一向に著してこはこれ眞諦にして餘は皆虚妄なりと說かば、我彼を聽さず。所以者何。阿難、如來彼の人異るを知る。阿難、(2)中に於て若し一沙門梵志有りて天眼を得、天眼を成就し是の如き說を作し、身妙行無く亦身妙行の報無く、口意妙行無く亦口意妙行の報無しと[いはば]、我彼を聽さず。若しこの說を作し、我彼殺・不

身壞れ命終りて惡處地獄の中に生ず。阿難(4)或は一「人」有り、殺・不與取・邪婬・妄言乃至邪見を離れ、これ離れ護り已りて身壞れ命終りて善處天中に生ず。阿難(1)若し一「人」有り殺・不與取・邪婬・妄言乃至邪見を離れず、これ離れず護らず已りて身壞れ命終りて善處天中に生ぜば、若し沙門梵志有りて天眼を得天眼を成就して而も彼を見、見已りてこの念を作す、身惡行無く亦身惡行の報無く、口意惡行無く亦口意惡行の報無し。所以者何。我彼殺・不與取・邪婬・妄言乃至邪見を離れず、これ離れず護らず已りて身壞れ命終りて善處天中に生ずるを見る。若し更に是の如き比有りて殺・不與取・邪婬・妄言乃至邪見を離れず、これ離れず護らざれば、彼の一切身壞れ命終りて亦善處天中に生ずと、是の如く見るは則ち正見と爲しこの見に異るは則ち彼の智邪に趣く。若し所見所知に極力捫摸し、一向に著してこはこれ眞諦にして、餘は皆虛妄なりと說く。阿難、(2)若し一「人」有り、殺・不與取・邪婬・妄言乃至邪見を離れ、これ離れ護り已りて身壞れ身終りて惡處地獄の中に生ぜば、若し沙門梵志有りて天眼を得、天眼を成就して而も彼を見、見已りてこの念を作す身妙行無く亦身妙行の報無く、口意妙行無く亦口意妙行の報無し。所以者何。我彼殺・不與取・邪婬・妄言乃至邪見を離れ、これ離れ護り已りて身壞れ身終りて惡處地獄の中に生ぜるを見る。若し更に是の如き比有りて殺・不與取・邪婬・妄言乃至邪見を離れ、これ離れ護れば、彼の一切身壞れ命終りて亦惡處地獄の中に生ずと、是の如く見るは則ち正見と爲しこの見に異るは則ち彼の智邪に趣く。若し所見所知に極力捫摸し一向に著してこはこれ眞諦にして餘は皆虛妄なりと說く。阿難、(3)若し一「人」有り、殺・不與取・邪婬・妄言乃至邪見を離れず、これ離れず護らず已りて身壞れ命終りて惡處地獄の中に生ぜば、若し沙門梵志有りて天眼を得天眼を成就して而も彼を見、見已りてこの念を作す、身惡行有り亦身惡行の報有り口意惡行有り亦口意惡行の報有り。所以者何。我彼殺・不與取・邪婬・妄言乃至邪見を離れず、これ離れず護らず已りて身壞れ身終りて惡處地獄の中に生ぜるを見る。若し更に是の

【三】捫摸、固執すること。

者阿難語げて曰く『賢者大周那、說くべし說くべし。』こゝに於て世尊問ひて曰はく『阿難、周那比丘何事を說かんと欲するや。』尊者阿難白して曰く『世尊、今自ら當に聞きたまふべし。』こゝに於て尊者大周那、謂く尊者三彌提異學哺羅陀子と共に論ぜし所の者は、盡く佛に向ひて說きぬ。世尊聞き已りて告げて曰はく『阿難、三彌提比丘[九]癡人の無道を看よ。所以者何。異學哺羅陀子事を問ひて不定なり。而も三彌提比丘癡人一向に答へぬ。』尊者阿難白して曰く『世尊、若し三彌提比丘この事に因りて所有覺を說かば、この苦當に何の咎あるべきや。』世尊、尊者阿難を呵して曰はく『看よ、阿難比丘も亦復無道なり。阿難、この三彌提癡人、彼の異學哺羅陀子盡く三覺、樂覺・苦覺・不苦不樂覺を問ひぬ。阿難、若し三彌提癡人異學哺羅陀子の所問の爲に是の如く「賢哺羅陀子、[一〇]若し故作樂業を作し已り成ずれば、當に樂報を受くべし。若し故作苦業を作し已り成ずれば、當に苦報を受くべし。若し故作不苦不樂業を作し已り成ずれば、當に不苦不樂報を受くべし」と答ふれば、阿難、若し三彌提癡人異學哺羅陀子の所問の爲に是の如く答ふれば、異學哺羅陀子の眼尙ほ敢へて三彌提癡人を見ざらん。況やまた能く是の如き事を問はんや。阿難、若し汝世尊より[一一]分別大業經を問はゞ、如來に於て倍すまた增上し心靖くして喜を得ん。』こゝに於て尊者阿難、叉手を佛に向け白して曰く『世尊、今正にこの時なり。善逝、今正にこの時なり。若し世尊諸の比丘の爲に分別大業經を說きたまはゞ、諸の比丘聞き已りて當に善く受持すべし。』世尊告げて曰はく『阿難、諦に聽け、善くこれを思念せよ。我當に汝が爲に具に分別して說くべし。』尊者阿難白して曰く『唯然り。』時に諸の比丘敎を受けて而も聽きぬ。佛言はく『阿難、(1)或は一[人]有り、殺・不與取・邪婬・妄言乃至邪見を離れず。これ離れず護らず已りて身壞れ命終りて善處天中に生ず。阿難(2)或は一[人]有り、殺・不與取・邪婬・妄言乃至邪見を離れ、これ離れ護り已りて身壞れ命終りて惡處地獄の中に生ず。阿難、(3)或は一[人]有り、殺・不與取・邪婬・妄言乃至邪見を離れず、これ離れず護らず已りて

【九】看二三彌提比丘癡人無道一。巴利文「優陀夷癡人の非道を見よ。」

【一〇】「若し[人]有意的にして樂を感ずべき業、身口意を以て作せば彼樂を感じ、若し有意的にして苦を……彼苦を感じ、若し有意的にして不苦不樂を……彼不苦不樂を感ず。」

【一一】分別大業經(Mahākamma-vibhaṅga-sutta)。

作業を作し已り成ずれば、我必ず報を受くと說かずと。』異學哺羅陀子再び三たびに至りて尊者三彌提に語げて曰く『賢三彌提、我面り沙門瞿曇より聞き、面り沙門瞿曇より受けぬ、身口業は虛妄にして唯意業のみ眞諦なり。或は定有り、比丘彼の定に入りては所覺無しと。』尊者三彌提亦再び三たび告げて曰く『賢哺羅陀子、汝この說を作すこと莫れ。世尊を誣謗すること莫れ。世尊を誣謗するは不善と爲す。世尊是の如く說きたまはず。賢哺羅陀子、世尊無量の方便もて說き、若し故作業を作し已り成ずれば、我報を受けざる無く、或は現世に受け、或は後世に受くと說き、若し不故作業を作し已り成ずれば、我必ず報を受くと說かずと。』異學哺羅陀子尊者三彌提に問ひぬ『若し故作業を作し已り成ずれば、當に何の報を受くべきや。』尊者三彌提答へて曰く『賢哺羅陀子、若し故作業を作し已り成ずれば、必ず苦を受く。』異學哺羅陀子また尊者三彌提に問ひて曰く『賢三彌提、汝この法律に於て學道幾時なりや。』尊者三彌提答へて曰く『賢哺羅陀子、我この法律に於て學道して未だ久しからず、始めて三年のみ。』こゝに於て異學哺羅陀子すなはちこの念を作しぬ、年少の比丘尚能く師を護る。況やまた舊學上尊上尊の人をやと。こゝに於て異學哺羅陀子尊者三彌提の所說を聞きて、是とせず非とせず、即ち座より起ち頭を奮ひて而も去りぬ。彼の時尊者大周那、尊者三彌提の晝行坐處を去ること遠からざりき。こゝに於て尊者大周那、謂く尊者三彌提異學哺羅陀子と共に論ぜし所の者は、彼盡く誦習し善く受持し已りて即ち座より起ち尊者阿難の所に往詣し共に相問訊し却きて一面に坐し、謂く尊者三彌提異學哺羅陀子と共に論ぜし所の者は、盡く尊者阿難に向ひて之を說きぬ。尊者阿難聞き已りて語げて曰く『賢者周那、この論に因り往きて佛に見え、世尊に奉獻すべきを得ん。賢者周那、今共に佛に詣り具に世尊に向ひて而もこの義を說かん。或は能くこれに因り世尊より異法を聞くを得ん。』こゝに於て尊者阿難、尊者大周那共に佛に往詣し、尊者大周那佛足に稽首し却きて一面に坐し、尊者阿難[亦]佛足に稽首し却きて一面に住しぬ。彼の時尊

【七】 法律（Dhammavinaya）。佛法のこと。

【八】 尊者大周那（Āyasmā Mahācunda）。

業を作せば必ず卑賤族を得、尊貴族相應の業を作せば必ず尊貴族を得、無財物相應の業を作せば必ず無財物を得、多財物相應の業を作せば必ず多財物を得、惡智慧相應の業を作せば必ず惡智慧を得、善智慧相應の業を作せば必ず善智慧を得。摩納、こはこれ我が前に說きし所、衆生自らの行業に因り業に因りて報を得、業に緣り業々處に依り、衆生その高下に隨ひて妙不妙に處る。』鸚鵡摩納都提子白して曰く『世尊、我已に解す。善逝、我已に知る。世尊、我今自ら佛・法・及び比丘衆に歸す。唯願はくは世尊、我を受けて優婆塞と爲したまへ。今日より始めて終身自ら歸し乃ち命盡くるに至らん。世尊、今日より都提の家に入ること、この舍衞の地の優婆塞の家に入る如くしたまひ、都提の家をして長夜に利義を得、饒益安隱快樂を得しめたまへ。』佛說是の如し。鸚鵡摩納都提子及び無量の衆佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

[1]百七十一、分別大業經第十

我が聞きしこと是の如し。ある時佛王舍城に遊び竹林迦蘭哆園に在しぬ。その時[2]尊者三彌提亦王舍城に遊び[3]無事の禪屋中に住しぬ。こゝに於て[4]異學哺羅陀子中後に彷徉して尊者三彌提の所に往詣し、共に相問訊し却きて一面に坐し、『賢三彌提、我問ふ所有らんと欲す、我が問を聽くや。』尊者三彌提答へて曰く『賢哺羅陀子、問はんと欲せばすなはち問へ。我聞き已りて當に思ふべし。』異學哺羅陀子すなはち問ひて曰く『賢三彌提、我面り沙門瞿曇より聞き、面り沙門瞿曇より受けぬ、身口業は虛妄にして唯意業のみ眞諦なり。或は[5]定有り、比丘彼の定に入りては所覺無しと』。尊者三彌提告げて曰く『賢哺羅陀子、汝この說を作すこと莫れ、世尊を誣謗すること莫れ。世尊を誣謗するは不善と爲す。世尊是の如く說きたまはず。賢哺羅陀子、世尊無量の方便もて說き、若し[6]故作業を作し已り成ずれば、我報を受けざる無く、或は現世に受け、或は後世に受く。若し不故

【一】M,136, Mahākamma-vibhaṅga-sutta.
【二】尊者三彌提 (Āyasmā Samiddhi)。
【三】無事禪屋 (araññа-kuṭikā)。森林屋舍の意。
【四】異學哺羅陀子 Potaliputta paribbājaka)。
【五】定(Samāpatti 等至)あり、若しそれに專心すれば、何事をも感ずるなし。
【六】故作業 (Sañcetanika kamma)、三卷「思經」註を見よ。

飮食・衣被・華鬘・塗香・屋舍・床・榻・明燈・給使を施與し、彼この業を受け具足を作し已りて身壞れ命終れば必ず善處に昇り天中に生じ、人間に來り生じては多く財物有り　所以者何。この道多く財物有るを受く。謂く男子女人施主と作り布施を行ず、摩納、當に知るべし。この業是の如き報有り。摩納(13)何に因り何に緣りて男子女人惡智慧有りや。若し男子女人有りて數々彼に往詣して事を問はず、彼若し名德の沙門梵志有るも、彼に往詣し時に隨ひて義を問はず、「諸尊、何者か善と爲し何者か善ならざる。何者か罪と爲し何者か罪に非ざる。何者か妙と爲し何者か妙ならざる。何者か白と爲し何者か黑と爲すや。白黑何より生ずるや。何の義か現世の報にして何の義か後世の報なる」と。設し問ふも行ぜず。彼この業を受け具足を作し已りて身壞れ命終れば必ず惡處に至り地獄の中に生じ、世間に來り生じては惡智慧有り。所以者何。この道惡智慧を受く。謂く男子女人數々彼に往詣して事を問はず、摩納、當に知るべし。この業是の如き報有り。摩納、(14)何に因り何に緣りて男子女人善智慧有りや。若し男子女人有り能く數々彼に往詣して事を問ひ、彼若し名德の沙門梵志有れば數々彼に往詣し時に隨ひて義を問ふ、「諸尊、何者か善と爲し何者か善ならざる。何者か罪と爲し何者か罪に非ざる。何者か妙と爲し何者か妙ならざる。何者か白と爲し何者か黑と爲すや。白黑何より[生ずるや。]何の義か現世の報にして何の義か後世の報なる」と問ひ已りて能く行ず、彼この業を受け具足を作し已りて身壞れ命終れば、必ず善處に昇り天中に生じ、人間に來り生じては善智慧有り。所以者何。この道善智慧を受く。謂く男子女人能く數々彼に往詣し事を問ふ。摩納、當に知るべし、この業是の如き報有り。摩納、當に知るべし　短壽相應の業を作せば必ず短壽を得、長壽相應の業を作せば必ず長壽を得、多疾病相應の業を作せば必ず多疾病を得、少疾病相應の業を作せば必ず少疾病を得、不端正相應の業を作せば、必ず不端正を得、端正相應の業を作せば必ず端正を得、無威德相應の業を作せば必ず無威德を得、威德相應の業を作せば必ず威德を得、卑賤族相應の

(13)何故に惡智慧ありや(Duppañña)。

具足を作し已りて身壞れ命終れば必ず善處に昇り天中に生じ、人間に來り生じては大威德有り。所以者何。この道威德有るを受く。謂く男子女人嫉妬を懷かず、摩納、當に知るべし。この業是の如き報有り。摩納、(9)何に因り何に緣りて男子女人卑賤の族に生ずるや。若し男子女人有りて憍慠大慢にして彼敬ふべきを敬まはず、重んずべきを重んぜず、貴ぶべきを貴ばず、奉すべきを奉せず、供養すべきを供養せず、道を與ふべきに道を與へず、坐を與ふべきに坐を與へず、叉手し向ひて禮拜問訊すべきを叉手し向ひて禮拜問訊せず、彼この業を受け具足を作し已りて身壞れ命終れば必ず惡處に至り地獄の中に生じ、人間に來り生じては卑賤の族に生ず。所以者何。この道卑賤の族に生ずるを受く。謂く男子女人憍慠大慢なり、摩納、當に知るべし。この業是の如き報有り。摩納、(10)何に因り何に緣りて男子女人尊貴の族に生ずるや。若し男子女人有りて憍慠大慢ならず、彼敬ふべきは而も敬ひ、重んずべきは而も重んじ、貴ぶべきは而も貴び、奉事すべきは而も奉事し、供養すべきは而も供養し、道を與ふべきは而も道を與へ、坐を與ふべきは而も坐を與へ、叉手し向ひて禮拜問訊すべきは而も叉手し向ひて禮拜問訊し、彼この業を受け具足を作し已りて身壞れ命終れば、必ず善處に昇り天中に生じ人間に來り生じては尊貴の族に生ず。所以者何。この道尊貴の族に生ずるを受く。謂く男子女人憍慠大慢ならず、摩納、當に知るべし。この業是の如き報有り。摩納、(11)何に因り何に緣りて男子女人財物有ること無きや。若し男子女人有りて施主と作らず、布施を行ぜず、彼沙門・梵志・貧窮・孤獨・遠來・乞者に飮食・衣被・華鬘・塗香・屋舍・床榻・明燈・給使を施與せず、彼この業を受け具足を作し已りて身壞れ命終れば必ず惡處に至り地獄の中に生じ、人間に來り生じては財物有ること無し。所以者何。この道財物無きを受く。謂く男子女人施主と作らず、布施を行ぜず、摩納、當に知るべし。この業是の如き報有り。摩納、(12)何に因り何に緣りて男子女人多く財物有りや。若し男子女人有りて施主と作り布施を行じ、彼沙門・梵志・貧窮・孤獨・遠來・乞者に

(9)何故に賤族に生ずるや(Nīcakulīna)、

(10)何故に貴族に生ずるや(Uccakulīna)

(11)何故に財物なきや(Appabhoga 少財)、

(12)何故に財物ありや(Mahābhoga 多財)。

男子女人衆生を觸嬈す、摩納、當に知るべし。この業是の如き報有り。摩納(4)何に因り何に縁りて男子女人疾病有ること無きや。若し男子女人有りて衆生を觸嬈せず、彼手拳を以てせず、木石を以てせず刀杖を以てせず衆生を觸嬈[せず]、彼この業を受け具足を作し已りて身壞れ命終れば必ず善處に昇り天中に生じ、人間に來り生じては疾病有ること無し。所以者何。この道疾病無きを受く。謂く男子女人衆生を觸嬈せず、摩納、當に知るべし。この業是の如き報有り。摩納、(5)何に因り何に縁りて男子女人形端正ならざるや。若し男子女人有りて急性にして惱多く、彼少しく聞く所あればすなはち大に瞋恚し憎嫉し憂を生じ廣く諍怒を生じ、彼この業を受け具足を作し已りて身壞れ命終れば必ず惡處に至り地獄の中に生じ、人間に來り生じては形端正ならず。所以者何。この道形端正ならざるを受く。謂く男子女人急性にして惱多し、摩納、當に知るべし。この業是の如き報有り。摩納、(6)何に因り何に縁りて男子女人形體端正なりや。若し男子女人有りて急性[ならず]惱多からず、彼柔軟麁獷の强言を聞きて大に瞋恚せず憎嫉して憂を生ぜず、廣く諍怒を生ぜず、彼この業を受け具足を作し已りて身壞れ命終れば、必ず善處に昇り天中に生じ、人間に來り生じては形體端正なり。所以者何。この道形體端正なるを受く。謂く男子女人急性[ならず]惱多からず、摩納、當に知るべし。この業是の如き報有り。摩納、(7)何に因り何に縁りて男子女人威德有ること無きや。若し男子女人有りて內に嫉妬を懷き、彼他の供養恭敬を得るを見てすなはち嫉妬を生じ、若し他に物有るを見れば我が得ならしめんと欲し、彼この業を受け具足を作し已りて身壞れ命終れば、必ず惡處に至り地獄の中に生じ、人間に來り生じては威德有ること無し。所以者何。この道威德無きを受く。謂く男子女人內に嫉妬を懷く、摩納、當に知るべし。この業是の如き報有り。摩納、(8)何に因り何に縁りて男子女人大威德有りや。若し男子女人有りて嫉妬を懷かず、彼他の供養恭敬を得るを見て嫉妬を生ぜず、若し他に物有るを見るも我が得ならしめんと欲せず、彼この業を受け、

---

(4)何故に疾病なきや。(Appābādha 少病)。
【10】 彼手拳を以て、木石を以て、刀杖を以て衆生を觸嬈せず。

(5)何故に端正ならざるや(Dubbaṇṇa 醜陋)。

(6)何故に端正なりや(Vaṇṇavanta)。

(7)何故に威德なきや(Appesakkha 威力少き)。

(8)何故に威德ありや(Mahesakkha 威力大なる)。

聽きて乃ち敢へて陳ぶるや。』世尊告げて曰はく『汝の問ふ所を恣にせよ。』『瞿曇、[六]何に因り何に緣りて彼の衆生は倶に人身を受けて而も高下有り妙不妙有りや。所以者何、瞿曇、我短壽有り長壽有る者を見、多病有り少病有る者を見、端正ならず端正有る者を見、威德無き威德有る者を見、卑賤の族有り尊貴の族有る者を見、財物無き財物有る者を見、惡智有り善智有る者を見る。』世尊答へて曰はく『[七]彼の衆生は自らの行業に因り、業に因りて報を得、業に緣り業々處に依り、衆生その高下に隨ひ、妙不妙に處る。』鸚鵡摩納世尊に白して曰く『沙門瞿曇の所說至略にして廣く分別せず。我知ること能はず。願はくは沙門瞿曇、我が爲に廣く說き、義を知るを得しめよ。』世尊告げて曰はく『摩納、諦に聽け、善くこれを思念せよ。我當に汝が爲に廣く分別して說くべし。』鸚鵡摩納白して曰く『唯然り。當に教を受けて聽くべし。』佛言はく『摩納、(1)何に因り何に緣りて男子女人壽命極めて短きや。若し男子女人有りて[八]殺生し凶弊極惡にして血を飮み、害意もて惡に著き、諸の衆生乃、蜫蟲に於て慈心有ること無く、彼この業を受け具足を作し已りて身壞れ命終れば必ず惡處に至り地獄の中に生じ人間に來り生じては壽命極めて短し。所以者何。この道短壽を受く。謂く男子女人殺生し凶弊極惡にして血を飮む。摩納、當に知るべし。この業是の如き報有り。摩納、(2)何に因り何に緣りて男子女人壽命極めて長きや。若し男子女人有りて殺を離れ殺を斷じ刀杖を棄捨し、慚有り愧有り慈悲心有りて一切乃至蜫蟲を饒益し、彼この業を受け具足を作し已りて身壞れ命終れば、必ず善處に昇り天中に生じ、人間に來り生じては壽命極めて長し。所以者何。この道長壽を受く。謂く男子女人殺を離れ殺を斷す、摩納、當に知るべし。この業是の如き報有り。摩納、(3)何に因り何に緣りて男子女人多く疾病有りや。若し男子女人有りて[九]衆生を觸嬈し、彼或は手拳を以て或は木石を以て或は刀杖を以て衆生を觸嬈し、彼この業を受け具足を作し已りて身壞れ命終れば、必ず惡處に至り地獄の中に生じ、人間に來り生じては多く疾病有り。所以者何。この道多く疾病を受く。謂く

【六】巴利經はこゝより初まる、何因何緣（Ko hetu ko paccayo）。

【七】巴利文「摩納よ、有情は業の所有者たり、業の嗣續者、業の母胎、業の親族、業の所依たり。業は有情を分ちて妙不妙となす。」

(1)何故に短壽なりや。(Appāyu)。

【八】巴利文「好殺殘忍にして手を血に染め、常に殺傷を事とし、有情に對して仁愛の念なし。」「極惡飮血」に就ては三卷「思經」註【四】を見よ。

(2)何故に長壽なりや。(Dīghāyu)。

(3)何故に疾病ありや。(Bavhābādha 多病)。

【九】巴利文「彼掌を以て、土塊を以て杖を以て刄物を以て有情を傷害せんとする質なり。」

我が父ならば、白狗、當に還りて大床の上に在るべし」と。摩納、白狗必ず還りて床に上らん。「若し前世の時これ我が父ならば、白狗、また金槃中に於て食せ」と。摩納、白狗必ず當にまた金槃中に於て食すべし。「若し前世の時これ我が父ならば、我が擧げし所の金・銀・水精・珍寶の藏處を示せ。謂く我が知らざる所なり」と。摩納、白狗必ず當に汝が已前擧げし所の金・銀・水精・珍寶の藏處を示すべし。謂く汝の知らざる所なり。』こゝに於て鸚鵡摩納佛の所說を聞き善く受持し誦し、世尊を繞り已りて而もその家に還り白狗に語げて曰く『若し前世の時これ我が父ならば、白狗、當に還りて大床の上に在るべし。』白狗卽ち還りて大床の上に在りぬ。『若し前世の時これ我が父ならば、白狗、また金槃中に於て食せ。』白狗卽ち金槃中に還りて食しぬ。『若し前世の時これ我が父ならば、當に我に父の本擧げし所の金・銀・水精・珍寶の藏處を示すべし。謂く我が知らざる所なり。』白狗卽ち床上より來下し前世に止宿せる所の處に往至し、口及び足を以て床の四脚の下を掊ぎぬ。鸚鵡摩納すなはち彼の處より大に寶物を得ぬ。こゝに於て鸚鵡摩納都提子寶物を得已りて極めて大に歡喜し、右膝を以て地に著け叉手を勝林給孤獨園に向け、再び三たび聲を擧げて世尊を稱譽しぬ『沙門瞿曇の所說虛じからず、沙門瞿曇の所說眞諦なり。沙門瞿曇の所說實の如し。』再び三たび稱譽し已りて舍衞より出で勝林給孤獨園に往詣しぬ。その時世尊無量の大衆に前後圍繞せられて而も爲に法を說きたまひぬ。世尊遙に鸚鵡摩納の來るを見、諸の比丘に告げたまはく『汝等鸚鵡摩納の來るを見るや。』答へて曰く『見るなり。』世尊告げて曰はく『鸚鵡摩納今命終らば、臂を屈伸する頃の如く必ず善處に至らん。所以者何。彼我に於て極めて善心有り。若し衆生有り、善心に因るが故に身壞れ命終れば、必ず善處に至り天中に生ず。』その時鸚鵡摩納佛の所に往詣し共に相問訊し却きて一面に坐しぬ。世尊告げ曰はく『云何、摩納、我が所說の如く白狗は是の如しと爲すや、是の如くなくならざりしや。』鸚鵡摩納白して曰く『瞿曇、實に所說の如し。瞿曇、我また問ふ所有らんと欲す。

ば、臂を屈伸する頃の如く必ず地獄に生ぜん。所以者何。彼我に於て極めて大に瞋恚するを以てなり。若し衆生有りて心瞋恚するに因るが故に身壞れ命終れば、必ず惡處に至り地獄の中に生ぜん。』こゝに於て鸚鵡摩納都提子佛の所に往詣し世尊に語げて曰く『沙門瞿曇、今我が家に至りて乞食して來れるや。』世尊答へて曰はく『我今汝が家に往至して乞食しぬ。』『瞿曇、我が白狗に向ひて何等の事を說き我が白狗をして極めて大に瞋恚せしめ、床より來下し木聚の邊に至りて憂慼愁臥せしめしや。』世尊答へて曰はく『我今平旦衣を著け鉢を持し舍衛に入りて乞食し、展轉して汝が家に往詣して乞食しぬ。こゝに於て白狗遙に我が來るを見、見已りて而も吠えぬ。我白狗に語げぬ「汝應に爾すべからず。謂く汝呧より吠ゆるに至る」と。この故に白狗極めて大に瞋恚し床より來下し木聚の邊に至りて憂慼愁臥しぬ。』鸚鵡摩納世尊に問ひて曰く『白狗の前世これ我が何等なりしや。』世尊告げて曰はく『止みね、止みね、摩納、愼みて我に問ふこと莫れ。汝これを聞き已らば必ず可意せさらん。』鸚鵡摩納また再び三たび世尊に問ひて曰く『白狗の前世これ我が何等なりしや。』世尊も亦再び三たびに至りて告げて曰はく『止みね、止みね、摩納、愼みて我に問ふこと莫れ。汝これを聞き已らば必ず可意せさらん。』世尊また摩納に告げて曰はく『汝再び三たびに至りて我に問ひて止まず。鸚鵡摩納當に知るべし。彼の白狗は前世の時に於て卽ちこれ汝が父にして[五]都提と名づけしなり。』鸚鵡摩納この語を聞き已りて倍す極めて大に恚り、世尊を誣ひんと欲し世尊を謗らんと欲し世尊を墮さんと欲し、是の如く沙門瞿曇を誣ひ謗り墮し世尊に告げて曰く『我が父都提大に布施を行ひ大齋祠を作し、身壞れ命終りて正に梵天に生じぬ。何に因り何に緣りて乃ちこの下賤の狗中に生ぜんや。』

世尊告げて曰はく『汝が父この增上慢を以てこの故に下賤の狗中に生じぬ、

　梵志增上慢あり、ここに終り六處に生ず、　雞・狗・猪・及び豺・驢の五と地獄の六たり。

鸚鵡摩納、若し汝我が所說を信ぜざれば、汝還歸して白狗に語げて曰ふべし、「若し前世の時これ

【五】 都提(Todeyya)。

巻の第四十四

百七十、[1]鸚鵡經第九

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊夜を過ぎて平旦衣を著け鉢を持し舍衞に入りて乞食し、乞食の時に於て[2]鸚鵡摩納都提子の家に往詣したまひぬ。この時鸚鵡摩納都提子少しく[3]所爲有り出行して在らざりき。彼の時鸚鵡摩納都提子の家に白狗有り、大牀上に在りて金槃中に食しぬ。こゝに於て白狗遙に佛の來るを見、見已りてすなはち吠えぬ。世尊白狗に語げたまはく『汝應に爾すべからず。謂く[4]汝呿より吠ゆるに至る。』白狗聞き已りて極めて大に瞋恚し、牀より來下して木聚の邊に至り憂慼愁臥しぬ。鸚鵡摩納都提子後に於て家に還り、己の白狗極めて大に瞋恚し、牀より來下して木聚の邊に至り憂慼愁臥するを見、家人に問ひて曰く『誰か我が狗に觸嬈し、極めて大に瞋恚せしめ牀より來下して木聚の邊に至り憂慼愁臥[せしめ]しや。』家人答へて曰く『我等都べて白狗に觸嬈し大に瞋恚せしめ牀より來下して木聚の邊に至り憂慼愁臥[せしめ]しむる無し。摩納、當に知るべし。今日沙門瞿曇此に來りて乞食し、白狗見已りてすなはち逐ひてこれを吠えぬ。沙門瞿曇白狗に語げて曰く「汝應に爾すべからず、謂く汝呿より吠ゆるに至る」と。これに因りて摩納、故に白狗をして極めて大に瞋恚せしめ牀より來下し木聚の邊に至りて憂慼愁臥せしめぬ。』鸚鵡摩納都提子聞き已りてすなはち大に瞋恚し、世尊を誣ひんと欲し、世尊を謗らんと欲し、世尊を墮さんと欲し、是の如く沙門瞿曇を誣ひ謗り墮さんとて、卽ち舍衞より出で〻勝林給孤獨園に往詣しぬ。彼の時世尊無量の大衆に前後圍繞せられて而も爲に法を說きたまひぬ。世尊遙に鸚鵡摩納都提子の來るを見、諸の比丘に告げたまはく『汝等、鸚鵡摩納都提子の來るを見るや。』答へて曰く『見るなり』。世尊告げて曰はく『鸚鵡摩納都提子今命終ら

【一】M. 135, Cūḷa-Kammavibhaṅga-sutta. 天息災譯「分別善惡報應經」、失譯「兜調經」、求那跋陀羅譯「鸚鵡經」、瞿曇法　譯「佛爲首迦長者說業報差別經」。

【二】鸚鵡摩納都提子 (Subha Māṇava Todeyyaputta)。トーデーヤの子にしてスバハと呼ぶ婆羅門青年の意。

【三】少有二所爲一少し用事があつて。

【四】從レ呿至レ吠。「兜調經」には「汝平常時擧レ手青レ吧、今反作レ狗嚇、不レ知二慚愧一。」に作る。

の樂・離の樂・息の樂・正覺の樂たり、食無く生死無く、修すべく習ふべく廣布すべく、我彼に於て則ち修すべしと說くは、この法諍無し。何等を以ての故にこの法諍無きや。この法苦無く煩無く熱無く憂感無く正行あり。この故にこの法則ち諍無し。中に於て若し導說する有り、眞實にあらず虛妄にして義と相應する無きは、この法諍有り。何等を以ての故にこの法諍有りや。この法苦有り煩有り熱有り憂感邪行有り。この故にこの法則ち諍有り。中に於て若し導說する有り、眞實にして虛妄にあらず義と相應する無きは、この法諍有り。何等を以ての故にこの法諍有りや。この法苦有り煩有り熱有り憂感邪行有り。この故にこの法則ち諍有り。中に於て若し導說する有り、眞實にして虛妄にあらず義と相應するは、この法諍無し。何等を以ての故にこの法諍無きや。この法苦無く煩無く熱無く憂感無くして正行あり。この故にこの法則ち諍無し。齊限無くして說くは、この法諍有り。何等を以ての故にこの法諍有りや。この法苦有り煩有り熱有り憂感邪行有り。この故にこの法則ち諍有り。齊限して說くは、この法諍無し。何等を以ての故にこの法諍無きや。この法苦無く煩無く熱無く憂感無くして正行あり。この故にこの法則ち諍無し。國の俗法に隨ひて是とし及び非とするは、この法諍有り。何等を以ての故にこの法諍有りや。この法苦有り煩有り熱有り憂感邪行有り。この故にこの法則ち諍有り。國の俗法に隨ひて是とせず非とせざるは、この法諍無し。何等を以ての故にこの法諍無きや。この法苦[七]無く煩無く熱無く憂感無く正行あり。この故にこの法則ち諍無し。これを諍法と謂ふ。汝等當に諍法及び無諍法を知り、諍法及び無諍法を知り已りて諍法を棄捨し無諍法を修習すべし。汝等當に學すべし。是の如く『[八]須菩提族姓子無諍道を以て後に於て法を知ること法の如し。

法を知りて眞實の如く、　須菩提偈を說く、　この行眞實空なり　これを捨てゝ止息に住す。』

佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

中阿含經卷第四十三

【七】大正藏本「此法有レ苦」に作れど、有は無の衍なるべし、

【八】須菩提族姓子（Subhūti Kulaputta）。

は杅と說き或は椀と說き或は器と說く。如し彼々の方、彼々の人間、彼々の事、或は甌と說き或は樺と說き或は杅と說き或は椀と說き或は器と說くは、彼々の事その力に隨はず一向にこはこれ眞諦にして餘は虛妄なりと說かず。是の如く國の俗法に隨ひて是とせず非とせず。國の俗法に隨ひて是とすること莫れ、非とすること莫れとは、これに因るが故に說く。(8)有諍法・無諍法あり。云何が有諍法なる。云何が無諍法なる。若し欲と相應し喜樂と俱にして極下賤の業もて凡夫の行を爲すは、この法諍有り。何等を以ての故にこの法諍有りや。この法苦有り煩有り熱有り憂感邪行有り。この故にこの法則ち諍有り。若し自身の苦行至苦にして聖行に非ず義と相應する無きは、この法諍有り。何等を以ての故にこの法諍有りや。この法苦有り煩有り熱有り憂感邪行有り。この故にこの法則ち諍有り。この二邊を離るれば則ち中道有り、眼を成じ智を成じ自在に定を成じ、智に趣き覺に趣き涅槃に趣くはこの法諍無し。何等を以ての故にこの法諍無きや。この法苦無く煩無く熱無く憂感無くして正行あり。この故にこの法則ち諍無し。有結盡きざるは、この法諍有り。何等を以ての故にこの法諍有りや。この法苦有り煩有り熱有り憂感邪行有り。この故にこの法則ち諍有り。有結滅盡するは、この法諍無し。何等を以ての故にこの法諍無きや。この法苦無く煩無く熱無く憂感無くして正行あり。この故にこの法則ち諍無し。內樂を求めざるは、この法諍有り。何等を以ての故にこの法諍有りや。この法苦有り煩有り熱有り憂感邪行有り。この故にこの法則ち諍有り。內樂を求むるは、この法諍無し。何等を以ての故にこの法諍無きや。この法苦無く煩無く熱無く憂感無くして正行あり。この故にこの法則ち諍無し。中に於て若し樂有り、聖[者]の樂に非ず、これ凡夫の樂にして病の本・癰の本・箭刺の本たり、食有り生死有り、修すべからず習ふべからず廣布すべからず、我彼に於て則ち修すべからずと說くは　この法諍有り。何等を以ての故にこの法諍有りや。この法苦有り煩有り熱有り憂感邪行有り。この故にこの法則ち諍有り。中に於て若し樂有り、これ聖[者]の樂にして無欲

(8)「沙門の法を犯すなかれ。」

べしと說くや。若し比丘有り、欲を離れ惡不善の法を離れ、［乃至］第四禪を得、成就して遊ぶに至るは、この樂これ聖［者］の樂・無欲の樂・離の樂・息の樂・正覺の樂たり、食無く生死無く、修すべく習ふべく廣布すべく、我彼に於て則ち修すべしと說く。齊を決定し知を決定し已る。所有の內樂當に彼を求むべしとは、これに因るが故に說く。(5)相導說することを莫れ、亦面前に稱譽することを莫れとは、これ何に因りて說くや。相導說する有り、眞實ならず虛妄にして義と相應する無く、相導說する有り、眞實にして虛妄にあらずして義と相應する無く、相導說する有り、眞實にして虛妄にあらずして義と相應す。(i)中に於て若し導說する有り、眞實ならず虛妄にして義と相應する無きは、これ終に說くべからず。(ii)中に於て若し導說する有り、眞實にして虛妄にあらずして義と相應する無きは、彼亦當に學ぶべくしてこれを說かず。(iii)中に於て若し導說する有り、眞實にして虛妄にあらずして義と相應するは、彼時を知り正智正念にして彼を成就せしむると爲す。是の如く面前に稱譽す。相導說することを莫れ、亦面前に稱譽することを莫れとは、これに因るが故說く。(6)齊限して說き齊限せざることを莫れとは、これ何に因りて說くや。齊限せずして說けば身を煩はし、念意忘し、心疲極し、聲壞れ、智に向ふ者自在ならず。齊限して說けば、身を煩さず、念意忘せず、心疲極せず聲壞れず、智に向ふ者自在を得。齊限して說き齊限せざることを莫れとは、これに因るが故に說く。(7)國の俗法に隨ひ、是とすること莫れ非とすることを莫れとは、これ何に因りて說くや。云何が國の俗法に隨ひ、是とし及び非とするや。彼々の方、彼々の人間、彼々の事、或は甌と說き或は橢と說き或は杅と說き或は椀と說き或は器と說く。如し彼々の方、彼々の人間、彼々の事、或は甌と說き或は橢と說き或は杅と說き或は椀と說き或は器と說くは、彼々の事その力に隨ひて一向にこはこれ眞諦にして餘は虛妄なりと說く。是の如く國の俗法に隨ひ、是とし及び非とす。云何が國の俗法に隨ひ、是とせず非とせざるや。彼々の方、彼々の人間、彼々の事、或は甌と說き或は橢と說き或

(5)巴利文「私かに語話をなすことなかれ、面のあたり破滅を說くことなかれ。」

(6)「惶るなくして語り、惶てゝ語るなかれ。」

(7)「國の語法を護らざるなかれ。」

【六】甌(ほとぎ、かめ)、橢(はち、わん)、杅(ゆのみ)、椀(わん、はち)、器(うつは)。

無く煩無く熱無く憂感無くして正行ありと。この法に達せず、唯苦法無く煩無く熱無く憂感無くして正行あり。彼これを知り已る。この故にすなはち法を說く。(xi)內樂を求めざるは、この法苦有り煩有り熱有り憂感邪行有り。彼これを知り已りて則便ち法を說く。所以者何。彼是の如く說かず、若し內樂を求めざれば、彼亦內を求めず。この故に彼の一切苦有り煩有り熱有り憂感邪行有りと。この法に達せず、唯苦法有り煩有り熱有り憂感邪行有り。彼これを知り已る。この故にすなはち法を說く。(xii)內樂を求むるは、この法苦無く煩無く熱無く憂感無くして正行あり。彼これを知り已りて則便ち法を說く。所以者何。彼是の如く說かず、若し內樂を求むる有れば、彼亦內を求む。この故に彼の一切苦無く煩無く熱無く憂感無くして正行ありと。この法に達せず、唯苦法無く煩無く熱無く憂感無くして正行あり。彼これを知り已る。この故にすなはち法を說く。是の如く稱せず譏らずして而も爲に法を說く。稱有り譏有り、無稱無譏有りて而も爲に法を說くは、これに因るが故に說く。(4)齊を決定し知を決定し已る。所有の內樂當に彼を求むべしとは、これ何に因りて說くや。(i)樂有り、聖[者]の樂に非ず、これ凡夫の樂にして病の本・癰の本・箭刺の本たり、食有り生死有り、修すべからず習ふべからず廣布すべからず。我彼に於て則ち修すべからずと說く。(ii)樂有り、これ聖[者]の樂・無欲の樂・離の樂・息の樂・正覺の樂たり、食無く生死無く、修すべく習ふべく廣布すべし。我彼に於て則ち修すべしと說く。云何が樂有り、聖[者]の樂に非ず、これ凡夫の樂にして病の本・癰の本・箭刺の本たり、食有り生死有り、修すべからず習ふべからず廣布すべからず。我彼に於て修すべからずと說くや。彼若し五欲の功德に因りて喜を生じ樂を生ずるは、この樂聖[者]の樂に非ず、これ凡夫の樂にして病の本・癰の本・箭刺の本たり、食有り生死有り、修すべからず習ふべからず廣布すべからず、我彼に於て則ち修すべからずと說く。云何が樂有り、これ聖[者]の樂・無欲の樂・離の樂・息の樂・正覺の樂たり、食無く生死無く、修すべく習ふべく廣布すべく、我彼に於て則ち修す

(4)巴利文「安樂決定を知るべく、安樂決定を知りて內部の樂を求むべし。」

す。(v)内樂を求めざるは、この法苦有り煩有り熱有り憂感邪行有り。彼これを知り已りて則便ち自ら識る。所以者何。若し内樂を求めざる有れば彼亦内を求めず。この故に彼の一切苦有り煩有り熱有り憂感邪行有り。彼これを知り已る。この故にすなはち自ら識る。(vi)内樂を求むるは、この法苦無く煩無く熱無く憂感無くして正行あり。彼これを知り已りて則便ち自ら稱す。所以者何。若し内樂を求むる有れば、彼亦内を求む。この故に彼の一切苦無く煩無く熱無く憂感無く正行あり。彼これを知り已る。この故にすなはち自ら稱す。是の如く稱有り識有りて而も法を說かず。稱せず識らずして而も爲に法を說く。(vii)云何が稱せず識らずして而も爲に法を說くや。若し欲と相應し喜樂と倶にして極下賤の業もて凡夫の行を爲せば、この法苦有り煩有り熱有り憂感邪行有り。彼これを知り已りて則便ち法を說く。所以者何。彼是の如く說かず、欲は無常・苦にして磨滅の法なりと。彼欲の無常を知り已る。この故に彼の一切苦有り煩有り熱有り憂感邪行有り。この法に達せず。唯苦法有り煩有り熱有り憂感邪行有り。彼これを知り已る。この故にすなはち法を說く。(viii)自身の苦行至苦にして聖行に非ず義と相應する無きは、この法苦有り煩有り熱有り憂感邪行有り。彼これを知り已りて則便ち法を說く。所以者何。彼是の如く說かず、自身の苦行至苦にして聖行に非ず義と相應する無きは、この法苦有り煩有り熱有り憂感邪行有りと。この法に達せず、唯苦法有り煩有り熱有り憂感邪行有り。彼これを知り已る。この故にすなはち法を說く。(ix)有結盡きざるは、この法苦有り煩有り熱有り憂感邪行有り。彼これを知り已りて則便ち法を說く。所以者何。彼是の如く說かず、若し有結盡きざれば彼の有亦盡きず。この故に彼の一切苦有り煩有り熱有り憂感邪行有りと。この法に達せず、唯苦法有り煩有り熱有り憂感邪行有り。彼これを知り已る。この故にすなはち法を說く。(x)有結盡くれば、この法苦無く煩無く熱無く憂感無くして正行あり。彼これを知り已りて則便ち法を說く。所以者何。彼是の如く說かず、若し有結盡くれば彼の有亦盡く。この故に彼の一切苦

爲すこと莫れとは、これ一邊を說き、亦自身の苦行至苦にして聖行に非ず義と相應する無きを求むること莫れとは、これ二邊を說く。欲樂の極下賤の業を求めて凡夫の行を爲すこと莫れ、亦自身の苦行至苦にして聖行に非ず義と相應する無きを求むること莫れとは、これに因るが故に說く。(2)この二邊を離るれば則ち中道有り、眼を成じ智を成じ自在に定を成じ、智に趣き覺に趣き涅槃に趣くとは、これ何に因りて說くや。聖道八支有り。正見乃至正定、これを謂ひて八と爲す。この二邊を離るれば則ち中道有り、眼を成じ智を成じ自在に定を成じ智に趣き覺に趣き涅槃に趣くとは、これに因るが故に說く。(3)稱有り譏有り無稱無譏有りて而も爲めに法を說くとは、これ何に因りて說くや。云何が稱を爲し、云何が譏を爲して而も法を說かざるや。(i)若し欲と相應する有りて喜樂と俱にして極下賤の業もて凡夫の行を爲せば、この法苦有り煩有り熱有り憂慼邪行有り。彼これを知り已りて則便ち自ら譏る。所以者何。欲は無常・苦にして磨滅の法なり。彼欲の無常を知り已る。この故に彼の一切苦有り煩有り熱有り憂慼邪行有り。彼これを知り已る。この故にすなはち自ら譏る。(ii)自身の苦行至苦にして聖行に非ず義と相應する無きは、この法苦有り煩有り熱有り憂慼邪行有り。彼これを知り已りて則便ち自ら譏る。所以者何。彼の沙門梵志苦を畏る可き所、鬚髮を剃除し袈裟衣を著け至信に家を捨て家無くして學道する者、彼の沙門梵志またこの苦を抱く。この故に彼の一切苦有り煩有り熱有り憂慼邪行有り。彼これを知り已る。この故にすなはち自ら譏る。(iii)有結盡きざるは、この法苦有り煩有り憂慼邪行有り。彼これを知り已りて則便ち自ら譏る。所以者何。若し有結盡きざれば彼の有亦盡きず。この故に彼の一切煩有り熱有り憂慼邪行有り。彼これを知り已る。この故にすなはち自ら譏る。(iv)有結盡くれば、この法苦無く煩無く熱無く憂慼無くして正行あり。彼これを知り已りて則便ち自ら稱す。所以者何。若し有結盡くれば彼の有亦盡く。これ故に彼の一切苦無く煩無く熱無く憂慼無くして正行あり。彼これを知り已る。この故にすなはち自ら稱

(3)「稱譽をも知るべく毀呰をも知るべし、稱譽を知り毀呰を知りて稱むることなく毀ることなく、唯法を說くべし。」

く廣布し、非有想非無想處天中に生ず。是の如く意行生ず。また次に比丘、一切非有想非無想處想を度り、[一五]知滅し身觸成就して遊び、慧もて見、諸の漏盡き智を斷ず。彼の諸の定中この定最第一最大最上最勝最妙なりと說く。猶ほ牛に因りて乳有り、乳に因りて酪有り、酪に因りて生酥有り、生酥に因りて熟酥有り、熟酥に因りて酥精有り、酥精は最第一最大最上最勝最妙なりと說くが如し。是の如く彼の諸の定中この定最第一最大最上最勝最妙なりと說く。この定を得、この定に住しこの定に住し已りてまた生老病死の苦を受けず。これを苦邊と說く。』佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百六十九、[一]拘樓瘦無諍經第八

我が聞きしこと是の如し。ある時佛婆奇瘦[二][三]劍磨瑟曇なる拘樓の都邑に遊びたまひぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『我當に汝が爲に法を說くべし。初め妙中ごろ妙、竟り亦妙にして義有り文有り、具足淸淨にして梵行を顯現す。[四]分別無諍經と名づく。諦かに聽け、諦かに聽きて善くこれを思念せよ。』時に諸の比丘教を受けて而も聽きぬ。佛言はく『欲樂の極下賤の業を求めて凡夫の行を爲すこと莫れ。亦自身の苦行至苦にして聖行に非ず義と相應する無きを求むること莫れ。この二邊を離るれば則ち中道有り、眼を成じ智を成じ自在にして定を成じ、智に趣き覺に趣き涅槃に趣き、[五]稱有り譏有り、無稱無譏有りて而も爲に法を說き、齊を決定し知を決定し已る。所有の內樂常に彼を求む。相導說すること莫れ。亦面前に稱譽し齊限して說くこと莫れ、齊限を求むること莫れ。國の俗法に隨ひ是とすること莫れ非とすること莫れ。これ分別無諍經の事なり。(1)欲樂の極下賤の業を求めて凡夫の行を爲すこと勿れ、亦自身の苦行至苦にして聖行に非ず義と相應する無きを求むること莫れとは、これ何に因りて說くや。欲樂の極下賤の業を求めて凡夫の行を

【一五】以下巴利文は「彼思へらく、余は實に諸漏の滅盡よりして無漏・心解脫・慧解脫を現世に於て自ら證知し實現し達得して住せんと。彼は諸漏の滅盡よりして無漏・心解脫・慧解脫をば現世に於て自ら證知して實現し達得して住す。比丘等よ、この比丘は更に何處にも生ぜず、何方へも生れ出でず。」

【一】 139, Araṇa-vibhaṅga-sutta; cf. S. iv. 330, v. 421.

【二】 婆奇瘦 (Bhaggesu)。Bhaggā の於格複數形なり。

【三】 劍磨瑟曇拘樓都邑 (Kammāssadhamma Kurūnaṃ nigamo)。

【四】 分別無諍 (Araṇa-vibhaṅga)

【五】 巴利文「稱譽をも知るべく、毀呰をも知るべし、稱譽を知り毀呰を知りて稱むることなく毀ることなく、唯法を說くべし安樂決定を知るべく、安樂決定を知りて內部の樂を求むべし。私かに語話をなすことなかれ。面のあたり破滅を語ることなかれ。怖るることなくして語り、愴てゝ語るなかれ。國の語法を護らざるなかれ。沙門の法を犯すなかれ。」

樂しみ欲し住す。彼この定に樂しみ欲し住し已りて必ずこの處り有り。彼に住し彼に樂しみ、命終りて無量空處天中に生ず。諸の無量空處天は彼に生じ彼に住し、無量空處想を受け、及び比丘此に住し、無量空處想を受く。この二の無量空處想に差別有ること無く、二俱に等しく等し。所以者何。先にこゝに定を行じ然る後彼に生ず。彼この定を是の如く修し是の如く習ひ是の如く廣布し、無量空處天中に生ず。是くの如く意行生ず。また次に比丘、無量空處を度り、【二】無量識、この無量識處に成就して遊ぶ。彼この定に樂しみ欲し住す。彼この定に樂しみ欲し住し已りて必ずこの處り有り。彼に住し彼に樂しみ、命終りて無量識處天中に生ず。諸の無量識處天は彼に生じ彼に住し、無量識處想を受け、及び比丘此に住し無量識處想を受く。この二の無量識處想に差別有ること無く、二俱に等しく等し。所以者何。先にこゝに定を行じ然る後彼に生ず。彼この定を是の如く修し是の如く習ひ是の如く廣布し、無量識處天中に生ず。是の如く意行生ず。また次に比丘、無量識處を度り、【三】無所有、この無所有處に成就して遊ぶ。彼この定に樂しみ欲し住す。彼この定に樂しみ欲し住し已りて必ずこの處り有り。彼に住し彼に樂しみ、命終りて無所有處天中に生ず。諸の無所有處天は彼に生じ彼に住し、無所有處想を受け、及び比丘此に住し、無所有處想を受く。この二の無所有處想に差別有ること無く、二俱に等しく等し。所以者何。先にこゝに定を行じ然る後彼に生ず。彼この定を是の如く修し是の如く習ひ是の如く廣布し、無所有處天中に生ず。是の如く意行生ず。また次に比丘、一切無所有處想を度り、【四】非有想非無想、この非有想非無想處に成就して遊ぶ。彼この定に樂しみ欲し住す。彼この定に樂しみ欲し住し已りて必ずこの處り有り。彼に住し彼に樂しみ、命終りて非有想非無想處天中に生ず。諸の非有想非無想處天は彼に生じ彼に住し、非有想非無想處想を受け、及び比丘此に住し、非有想非無想處想を受く。この二想差別有ること無く、二俱に等しく等し。所以者何。先にこゝに定を行じ然る後彼に生ず。彼この定を是の如く修し是の如く習ひ是の如

【二】識無邊處(Viññānañcāyatana)。

【三】無所有處(Ākiñcaññāyatana)。

【四】非有想非無想處(Nevasaññānāsaññāyatana)。

の如く修し是の如く習ひ是の如く廣布し、梵身天中に生ず。是の如く意行生ず。また次に比丘、[五]覺觀已に息み內靖・一心にして覺無く觀無く、定より生ずる喜と樂とあり第二禪を得、成就して遊ぶ。彼この定に樂しみ欲し住す。彼この定に樂しみ欲し住し已りて必ずこの處り有り。彼に住し彼を樂しみ、命終りて　[六]晃昱天中に生ず。諸の晃昱天は彼に生じ彼に住し定より生ずる喜と樂とを受け、及び比丘此に住し第二禪に入り定より生ずる喜と樂とを受く。この二の定より生ずる喜樂に差別有ること無く、二倶に等しく等し。所以者何。先にこゝに定を行じ然る後彼に生ず。彼この定を是の如く修し是の如く習ひ、是の如く廣布し、晃昱天中に生ず。是の如く意行生ず。また次に比丘、[七]喜欲を離れ捨・無求にして遊び、正念正智にして而も身に樂を覺ゆ。謂く[彼]の聖[者]の說く所の(聖)所捨・念・樂住・空[あり]、第三禪を得、成就して遊ぶ。彼この定に樂しみ欲し住す。彼この定に樂しみ欲し住し已りて必ずこの處り有り。彼に住し彼に樂しみ、命終りて　[八]遍淨天中に生ず。諸の遍淨天は彼に生じ彼に住し無喜樂を受け、及び比丘此に住し第三禪に入り無喜樂を受く。この二の無喜樂に差別有ること無く二倶に等しく等し。所以者何。先にこゝに定を行じ然る後彼に生ず。彼この定を是の如く修し是の如く習ひ是の如く廣布し、遍淨天中に生ず。是の如く意行生ず。また次に比丘、[九]樂滅し苦滅し喜憂は本已に滅し、不苦不樂にして捨あり念あり、清淨にして第四禪を得、成就して遊ぶ。彼この定に樂み欲し住す。彼この定に樂しみ欲し住し已りて必ずこの處り有り。彼に住し彼に樂しみ、命終りて　[一〇]果實天中に生ず。諸の果實天は彼に生じ彼に住し捨・念・清淨の樂を受け、及び比丘此に住し、第四禪に入り捨・念・清淨の樂を受く。この二の捨念清淨の樂に差別有ること無く、二倶に等しく等し。所以者何。先にこゝに定を行じ然る後彼に生ず。彼この定を是の如く修し是の如く習ひ是の如く廣布し、果實天中に生ず。是の如く意行生ず。また次に比丘、[一一]一切の色想を度り、有對想を滅し、若干想を念ぜず、無量空、この無量空處に成就して遊ぶ。彼この定に

【五】第二禪定生喜樂地には內靜・喜・樂・一心の四支あり。

【六】晃昱天(Ābhassarā devā)＝光音天。

【七】第三禪離喜妙樂地には捨・念・樂・慧・心の五支あり。

【八】遍淨天(Subhakiṇhā devā)。

【九】第四禪捨念清淨地には不苦不樂・捨・念・一心の四支あり。

【一〇】果實天(Vehapphalā devā)。廣果天なり。

【一一】四無色の第一、空無邊處(Ākāsānañcāyatana)。

の色を樂しみ欲し著し住し、現在の覺・想・行・識を樂しみ欲し著し住す。是の如く比丘現在の法を受く。』世尊卽ちまた問ひて曰はく『阿難、云何が比丘現在の法を受けざるや。』尊者阿難答へて曰く『世尊、若し比丘現在の色を樂しまず欲せず著せず住せず、現在の覺・想・行・識を樂しまず欲せず著せず住せず。是の如く比丘現在の法を受けず。世尊、我是の如きを以つて諸の比丘の爲めに夜講堂に集まりて跋地羅帝偈及びその義を說きぬ。』こゝに於て世尊諸の比丘に告げたまはく『善き哉善き哉、我が弟子眼有り智有り義有り法有り。所以者何。謂く弟子師の面前に在りて是の如き句是の如き文もて廣くこの義を說きぬ。實に阿難比丘の所說の如く、汝等應に當に是の如く受持すべし。所以者何。この說觀義應に是の如くなるべし。』佛說是の如し。尊者阿難及び諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百六十八、意行經第七[一]

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『我今汝が爲めに法を說かん。初め妙中ごろ妙竟り亦妙にして義有り文有り、具足淸淨にして梵行を顯現す。謂く分別意行經なり。如意行[二]生ず。諦かに聽け、諦かに聽きて善くこれを思念せよ。』時に諸の比丘敎を受けて而も聽きぬ。佛言はく『云何が意行生ずるや。若し[三]比丘有り欲を離れ惡不善の法を離れ覺有り觀有り、離より生ずる喜と樂とあり初禪を得、成就して遊ぶ。彼この定に樂しみ欲し住す。彼この定に樂しみ欲し住し已りて必ずこの處り有り。彼に住し彼を樂しみ、命終りて梵身天[四]中に生ず。諸の梵身天は彼に生じ彼に住して離より生ずる喜と樂とを受け、及び比丘は此に住して初禪に入り、離より生ずる喜と樂とを受く。この二の離より生ずる喜樂に差別有ること無く、一倶に等しく等し。所以者何。先にこゝに定を行じ然る後彼に生ず。彼この定を是

【一】 120, Saṅkhāruppatti-sutta.

【二】 如意行 (Saṅkhārup-patti)。Lord Chalmers は Plastic forces と譯す。

【三】 一卷「晝度樹經」註〔八〕以下を見よ。初禪離生喜樂地には覺・觀・喜・樂及び一境性の五支あり。

【四】 梵身天(Brahma-kāyika devā)。

教を受け即ち座より起ち佛足に稽首し遶三匝して而も去り、尊者阿難の所に往至して而も語げて曰く『世尊、尊者阿難を呼びたまふ。』尊者阿難即ち佛の所に往き稽首して禮を作し却きて一面に住しぬ。世尊問ひて曰はく『阿難、汝實に諸の比丘の爲めに夜講堂に集まりて跋地羅帝偈及びその義を說けるや。』尊者阿難答へて曰く『唯然り。』世尊問ひて曰はく『阿難、汝云何が諸の比丘の爲に跋地羅帝偈及びその義を說けるや。』尊者阿難即便ち說きて曰く

『愼みて過去を念ずること莫れ。　亦未來を願ふこと勿れ。　過去の事已に滅し、　未來また未だ至らず。　現在所有の法、　彼亦當に思を爲すべし。　堅强有ること無きを念じ、　慧者覺ること是の如し。　若し聖人の行を作さば、　孰か死を愁ふるを知らん。　我要ず彼に會はず、大苦災患終る。　是の如く精勤を行じて晝夜に懈怠無し。　この故に常に當に跋地羅帝偈を說くべし。』

世尊即ちまた問ひて曰はく『阿難、云何が比丘過去を念ずるや。』尊者阿難答へて曰く『世尊、若し比丘有り過去の色を樂しみ欲し著し住し、過去の覺・想・行・識を樂しみ欲し著し住す。是の如く比丘過去を念ず。』世尊即ちまた問ひて曰はく『阿難、云何が比丘過去を念ぜざるや。』尊者阿難答へて曰く『世尊、若し比丘過去の色を樂しまず欲せず著せず住せず、過去の覺・想・行・識を樂しまず欲せず著せず住せず。是の如く比丘過去を念ぜず。』世尊即ちまた問ひて曰はく『阿難、云何が比丘未來を願ふや。』尊者阿難答へて曰く『世尊、若し比丘未來の色を樂しみ欲し著し住し、未來の覺・想・行・識を樂しみ欲し著し住す。是の如く比丘未來を願ふ。』世尊即ちまた問ひて曰はく『阿難、云何が比丘未來を願はざるや。』尊者阿難答へて曰く『世尊、若し比丘未來の色を樂しまず欲せず著せず住せず、未來の覺・想・行・識を樂しまず欲せず著せず住せず。是の如く比丘未來を願はず。』世尊即ちまた問ひて曰はく『阿難、云何が比丘現在の法を受くるや。』尊者阿難答へて曰く『世尊、若し比丘現在

ず、大苦災患終る。是の如く精勤を行じて晝夜に懈怠無し。この故に常に當に跋地羅帝偈を說くべし。

强耆、(1)云何が比丘過去を念ずるや。若し比丘過去の色を樂しみ欲し著し住し、過去の覺・想・行・識を樂しみ欲し著し住す。是の如く比丘過去を念ず。强耆、(2)云何が比丘過去を念ぜざるや。若し比丘過去の色を樂しまず欲せず著せず住せず、過去の覺・想・行・識を樂しまず欲せず著せず住せず。是の如く比丘過去を念ぜず。强耆(3)云何が比丘未來を願ふや。若し比丘未來の色を樂しみ欲し著し住し、未來の覺・想・行・識を樂しみ欲し著し住す。是の如く比丘未來を願ふ。强耆(4)云何が比丘未來を願はざるや。若し比丘未來の色を樂しまず欲せず著せず住せず、未來の覺・想・行・識を樂しまず欲せず著せず住せず。是の如く比丘未來を願はず。强耆、(5)云何が比丘現在の法を受くるや。若し比丘現在の色を樂しみ欲し著し住し、現在の覺・想・行・識　樂しみ欲し著し住す。是の如く比丘現在の法を受く。强耆、(6)云何が比丘現在の法を受けざるや。若し比丘現在の色を樂しまず欲せず著せず住せず、現在の覺・想・行・識を樂しまず欲せず著せず住せず。是の如く比丘現在の法を受けず。』佛說是の如し。尊者盧夷强耆及び諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百六十七、[一]阿難說經第六

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衛國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その[二]時尊者阿難諸の比丘の爲に夜[三]講堂に集まりて[四]跋地羅帝偈及びその義を說きぬ。その時一比丘有り、夜を過ぎて平旦佛の所に往詣し稽首して禮を作し却きて一面に坐し白して曰はく『世尊、彼の尊者阿難諸の比丘の爲めに夜講堂に集まりて跋地羅帝偈及びその義を說きぬ。』こゝに於て世尊一比丘に告げたまはく『汝阿難比丘の所に往至し是の如き語を作せ、「阿難、世尊汝を呼びたまふ」と。』彼の一比丘世尊の

---

(1)念二過去一。「溫泉林天經」にては六根六境六識相對の上に過未現の念不念を述べしが、こゝにては五蘊に就て說く。
(2)不レ念二過去一。
(3)願二未來一。
(4)不レ願二未來一。
(5)受二現在法一。
(6)不レ受二現在法一。

【一】M. 132, Ānan'a-bhad-dekaratta-sutta.
【二】尊者阿難(Āyasmā Ānanda)。
【三】講堂(Upaṭṭhānasālā)。隨侍室の意。
【四】跋地羅帝偈。「溫泉林天經」を見よ。

だ至らず。　現在所有の法、　彼亦當に思を爲すべし。　堅强有ること無きを念じ、　慧者覺ること是くの如し。　若し聖人の行を學べば、　孰か死を愁ふるを知らん。　我要ず彼に會はず、　大苦災患終る。　是の如く精勤を行じて晝夜に懈怠せず。　この故に常に當に跋地羅帝偈を說くべし

と。比丘、我是の如く跋地羅帝偈を受持し義を受持せず」と。我また天に問ひぬ「誰か跋地羅帝偈及びその義を受持するや」と。天我に答へて曰く「佛舍衛國に遊び勝林給孤獨園に在す。彼跋地羅帝偈及びその義を受持したまふ。比丘、往きて面り世尊に從ひて跋地羅帝偈及びその義を善く受持し誦すべし。所以者何。跋地羅帝偈及びその義は義有り法有り梵行の本爲り、智に趣き覺に趣き涅槃に趣き、族姓者至信に家を捨て家無くして學道するもの、當に跋地羅帝偈及びその義を以て善く受持し誦すべし」と。彼の天是の如きを說き、我が足に稽首し遶三匝し已りて卽ち彼處に沒しぬ。』こゝに於て世尊尊者盧夷强耆に問ひたまはく『汝彼の天何處より來り、彼の天何と名づくるやを知るや。』尊者盧夷强耆答へて曰く『世尊、我彼の天何處より來るを知らず、亦名を知らず。』世尊告げて曰はく『强耆、彼の天子[五]般那と名づけ、三十三天の軍將爲り。』彼の時尊者盧夷强耆白して曰はく『世尊、今正にこの時なり。善逝、今正にこの時なり。若し世尊諸の比丘の爲に跋地羅帝偈及びその義を說きたまはば諸の比丘世尊より聞き已りて當に善く受持すべし。』世尊告げて曰はく『强耆、諦かに聽け、善くこれを思念せよ。我當に汝が爲めに廣くその義を說くべし。』尊者盧夷强耆白して曰く『唯然り。當に敎を受けて聽くべし。』佛言はく、

愼みて過去を念ずること莫れ。　亦未來を願ふこと勿れ。　過去の事已に滅し、　未來また未だ至らず。　現在所有の法、　彼亦當に思を爲すべし。　堅强有ること無きを念じ、　慧者覺ること是の如し。　若し聖人の行を作さば、　孰か死を愁ふるを知らん。　我要ず彼に會は

【五】般那（Candana,）。「尊上經」にては「般那末難。」

を說くべし。

比丘、我是の如く跋地羅帝偈を受持し義を持せず。』尊者盧夷强耆また彼の天に問ひぬ『誰か跋地羅帝偈及びその義を受持するや。』彼の天答へて曰く『佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在す。彼跋地羅帝偈及びその義を受持したまふ。比丘、往きて面り世尊に從ひて跋地羅帝偈及びその義を善く受持し誦すべし。所以者何。跋地羅帝偈及びその義は義有り法有り梵行の本爲り、智に趣き覺に趣き涅槃に趣く。族姓者至信に家を捨て家無くして學道するもの、當に跋地羅帝偈及びその義を以つて善く受持し誦すべし。』彼の天是の如きを說き、尊者盧夷强耆の足に稽首し遶三匝し已りて卽ち彼處に沒しぬ。天沒して久しからず。こゝに於て尊者盧夷强耆釋中に在りて[四]夏坐を受け訖り、三月を過ぎ已り衣を補治し竟りて衣を攝り鉢を持し舍衞國に往詣し展轉進前して舍衞國に至り勝林給孤獨園に住しぬ。その時尊者盧夷强耆佛の所に往詣し稽首して禮を作し却きて一面に坐し白して曰く『世尊、我ある時釋中に遊び無事禪室に在りき。世尊、我その時に於て夜將に旦に向はんとして彼の禪室より出で露地の禪室の蔭の中に在り繩床上に於て尼師檀を敷き結跏趺坐しぬ。その時一天有り形體極妙色像巍々として夜將に旦に向はんとして我が所に來詣し稽首して禮を作し却きて一面に住し、彼の天色像威神極妙にして光明普く照し、その禪室に於て彼の天却きて一面に住し已りて而も我に白して曰く「比丘、跋地羅帝偈及びその義を受持するや」と。我彼の天に答へぬ「跋地羅帝偈を受持せず、亦義を受けず」と。尋いで彼の天に問ひぬ「汝跋地羅帝偈及びその義を受持するや」と。彼の天答へて曰く「我跋地羅帝偈を受持し然も義を受けず」と。我また天に問ひぬ「云何が跋地羅帝偈を受持して而も義を受けざるや」と。天我に答へて曰く「ある時佛王舍城に遊び竹林迦蘭哆園に住し、その時世尊諸の比丘の爲に跋地羅帝偈を說きたまひぬ、

愼みて過去を念ずること莫れ、　亦未來を願ふこと勿れ。　過去の事已に滅し、　未來また未

【四】受二夏坐一。雨安居をなすこと。

はく『善き哉善き哉、[彼]我が弟子中眼有り智有り法有り義有り。所以者何。謂く師弟子の爲に略してこの教を說き廣く分別せず。彼の弟子この句を以てこの文を以て而も廣くこれを說く。大迦旃延比丘の所說の如く汝等應に當に是の如く受持すべし。所以者何。說觀義應に是の如くなるべきを以てなり。』佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百六十六、[一] 釋中禪室尊經第五

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衛國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時[二]尊者盧夷强耆釋中に遊び無事禪室に在りき。こゝに於て尊者盧夷强耆夜將に旦に向はんとして、彼の禪室より出で露地の禪室の蔭の中に在り繩床上に於て尼師檀を敷き結跏趺坐しぬ。その時一天有り形體極妙色像巍々として夜將に旦に向はんとして尊者盧夷强耆の所に往詣し稽首して禮を作し却きて一面に住し、彼の天色像威神極妙にして光明普く照し、その禪室に於て彼の天却きて一面に住し已りて尊者盧夷强耆に白して曰く『比丘、[三]跋地羅帝偈及びその義を受持するや。』尊者盧夷强耆彼の天に答へて曰く『我跋地羅帝偈を受持せず、亦義を受けず。』尋いで彼の天に問ひぬ『汝跋地羅帝偈及びその義を受持するや。』彼の天答へて曰く『我跋地羅帝偈を受持し然も義を受けず。』尊者盧夷强耆また彼の天に問ひぬ『云何が跋地羅帝偈を受持して而も義を受けざるや。』彼の天答へて曰く『ある時世尊王舍城に遊び竹林迦蘭哆園に住したまひぬ。その時世尊諸の比丘の爲に跋地羅帝偈を說きたまひぬ、

愼みて過去を念ずること莫れ、　亦未來を願ふこと勿れ。　過去の事已に滅し、　未來また未だ至らず。　現在所有の法、　彼亦當に思を爲すべし。　堅强有ること無きを念じ、　慧者覺ること是の如し。　若し聖人の行を學べば、　孰か死を愁ふるを知らん。　我要ず彼に會はず、　大苦災患終る。　是の如く精勤を行じ、　晝夜懈怠無し。　この故に常に當に跋地羅帝偈

【一】 M-134, Lomasakaṅgiya-bhaddekaratta-sutta. 法護譯「尊上經」
【二】 尊者盧夷强耆 (Āyasmā Lomasakaṅgiya)。
【三】 跋地羅帝偈 (Bhaddekaratta)。

彼を樂ふに因り已りてすなはち現在の法を受く。是の如く耳・鼻・舌・身［亦然り。］若し意・法・意識有り、現在は彼現在に於て識りて欲染著するに因り已りて則便ち彼を樂ふ。彼を樂ふに因り已りてすなはち現在の法を受く。諸賢、是の如く比丘現在の法を受く。諸賢、(6)云何が比丘現在の法を受けざるや。諸賢、比丘若し眼・色・眼識有り、現在は彼現在に於て識りて欲染著せず、識りて欲染著せざるに因り已りて則便ち彼を樂はず。彼を樂はざるに因り已りてすなはち現在の法を受けず。是の如く耳・鼻・舌・身［亦然り。］若し意・法・意識有り、現在は彼現在に於て識りて欲染著せず、識りて欲染著せざるに因り已りて則便ち彼を樂はず。彼を樂はざるに因り已りてすなはち現在の法を受けず。諸賢、是の如く、比丘現在の法を受けず。諸賢、謂く世尊略してこの教を說き廣く分別せずして卽ち座より起ち室に入りて宴坐したまひぬ、

愼みて過去を念ずること莫れ。　亦未來を願ふこと勿れ。　過去の事已に滅し、　未來また未だ至らず。　現在所有の法、　彼亦當に思を爲すべし。　堅强有ること無きを念じ、　慧者覺ること是の如し。　若し聖人の行を學べば、　孰か死を愁ふるを知らん。　我要ず彼に會はず、　大苦災患終る。　是の如く精勤を行じ、　晝夜に懈怠無し。　この故に常に當に跋地羅帝偈を說くべし。

これ世尊略して說き廣く分別したまはず、我この句を以てこの文を以つて廣く說くこと是くの如し。諸賢、往きて佛に向ひ具さに陳ぶべし。若し世尊の所說の義の如くば、諸賢等すなはち共に受持すべし。』こゝに於て諸の比丘尊者大迦旃延の所說を聞きて善く受持し誦し、卽ち座より起ち尊者大迦旃延を遶ること三匝して而も去り、佛の所に往詣し稽首して禮を作し却きて一面に坐し白して曰く『世尊、向に世尊略してこの教を說き廣く分別せずして卽ち座より起ち室に入りて燕坐したまひぬ。尊者大迦旃延この句を以つてこの文を以て而も廣くこれを說きぬ。』世尊聞き已りて嘆じて曰

(6) 不レ受二現在法一

有りて法を知り喜ぶべく、意の念ずる所、法を愛し欲相應心あり、樂しみて本を捫摸す。本は卽ち過去なり。彼過去の爲に識りて欲染著し、識りて欲染著するに因り已りて則便ち彼を樂ふ。彼を樂ふに因り已りてすなはち過去を念ず。諸賢、是の如く比丘過去を念ずるなり。諸賢、(2)云何が比丘過去を念ぜざるや。諸賢、比丘實に眼有りて色を知り喜ぶべく、意の念ずる所、色を愛し欲相應心あり、樂しみて本を捫摸す。本は卽ち過去なり。彼過去の爲に識りて欲染著せず、識りて欲染著せざるに因り已りて則便ち彼を樂はず、彼を樂はざるに因り已りてすなはち過去を念ぜず。是の如く耳・鼻・舌・身[亦然り。]實に意有りて法を知り喜ぶべく、意の念ずる所、法を愛し欲相應心あり、樂しみて本を捫摸す、本は卽ち過去なり。彼過去の爲めに識りて欲染著せず、識りて欲染著せざるに因り已りて則便ち彼を樂はず、彼を樂はざるに因り已りてすなはち過去を念ぜず。諸賢、是の如く比丘過去を念ぜず。諸賢(3)云何が比丘未來を願ふや。諸賢、比丘若し眼・色・眼識有り、未來は彼未だ得ざるを得んと欲し已りて心願を得、心願に因り已りて則便ち彼を樂ふ。彼を樂ふに因り已りてすなはち未來を願ふ。是の如く耳・鼻・舌・身[亦然り。]若し意・法・意識有り、未來は[彼]未だ得ざるを得んと欲し已りて心願を得、心願に因り已りて則便ち彼を樂ふ。彼を樂ふに因り已りてすなはち未來を願ふ。諸賢、是の如く比丘未來を願ふ。諸賢、(4)云何が比丘未來を願はざるや。諸賢、比丘若し眼・色・眼識有り、未來は[彼]未だ得ざるを得んと欲せず已りて心願はざるを得、心願はざるに因り已りて則便ち彼を樂はず。彼を樂はざるに因り已りてすなはち未來を願はず。是の如く耳・鼻・舌・身[亦然り。]若し意・法・意識有り、未來は[彼]未だ得ざるを得んと欲せず已りて心願はざるを得、心願はざるに因り已りて則便ち彼を樂はず。彼を樂はざるに因り已りてすなはち未來を樂はず。諸賢、是の如く比丘未來を願はず。諸賢、(5)云何が比丘現在の法を受くるや。諸賢、比丘若し眼・色・眼識有り、現在は彼現在に於て識りて欲染著し、識りて欲染著するに因り已りて則便ち彼を樂ふ。

(2)不レ念二過去一。
(3)願二未來一。
(4)不レ願二未來一。
(5)受二現在法一。

と。我等すなはちこの念を作しぬ「諸賢、誰か能く世尊の向に略說したまへる所の義を廣く分別するや」と。我等またこの念を作しぬ『尊者大迦旃延常に世尊の稱譽したまふ所、及び諸の智梵行人の[稱譽する所]爲り。尊者大迦旃延能く世尊の向に略說したまへる所の義を廣く分別せん」と。唯願はくは尊者大迦旃延、慈愍の爲の故に而も廣くこれを說かれよ。』尊者大迦旃延告げて曰く『諸賢、我が喩を說くを聽け。慧者喩を聞けば則ちその義を解す。諸賢、猶ほ人有るが如し。實を求むるを得んと欲し、實を求むるが爲の故に斧を持ちて林に入り、彼大樹を見るに根莖節枝葉華實を成ず。[然るに]彼の人根莖節實に觸れず、但枝葉にのみ觸る。諸賢の所說も亦復是の如し。世尊現に在すに、捨て來りて我に就きて而もこの義を問ふ。所以者何。諸賢、當に知るべし。世尊はこれ眼・これ智・これ義・これ法・法主・法將にして眞諦義を說きたまひ、一切の義を現ずるは彼の世尊に由る。諸賢、應に世尊の所に往詣して而もこの義を問ふべし。「世尊、これ云何。これ何の義なりや」と。如し世尊說きたまはゞ、諸賢等當に善く受持すべし。』時に諸の比丘白して曰く『唯然り。尊者大迦旃延、世尊はこれ眼・これ智・これ義・これ法・法主・法將にして眞諦義を說きたまひ、一切の義を現ずるは彼の世尊に由る。我等世尊の所に往詣して而もこの義を問はん。「世尊、これ云何。これ何の義なりや」と。如し世尊說きたまはゞ我等當に善く受持すべし。然るに尊者大迦旃延は常に世尊の稱譽したまふ所、及び諸の智梵行人の[稱譽する所]爲り。尊者大迦旃延能く世尊の向に略說したまへる所の義を廣く分別せん。唯願はくは尊者大迦旃延、慈愍の爲の故に而も廣くこれを說かれよ。』尊者大迦旃延諸の比丘に告げぬ『諸賢等共に我が說く所を聽け。諸賢、(1)云何が比丘過去を念ずるや。諸賢、比丘、實に眼有りて色を知り喜ぶべく、意の念ずる所、色を愛し欲相應心あり、樂しみて本を[八]捫摸す。本は卽ち過去なり。彼過去の爲に識りて欲染著し、識りて欲染著するに因り已りて則便ち彼を樂ふ。彼を樂ふに因り已りてすなはち過去を念ず。是の如く耳・鼻・舌・身[亦然り。]實に意

【七】四二卷「分別觀法經」註を見よ。

(1)念二過去一。

【八】捫摸。摑む、執る。

佛是の如きを說き、卽ち座より起ち室に入りて宴坐したまひぬ。こゝに於て諸の比丘すなはちこの念を作しぬ『諸賢、當に知るべし。世尊略してこの敎を說き廣く分別せずして卽ち座より起ち室に入りて宴坐したまふ。[謂く]、

愼みて過去を念ずること莫れ。　亦未來を願ふこと勿れ。　過去の事已に滅し、　未來また未だ至らず。　現在所有の法、　彼亦當に思を爲すべし。　堅强有ること無きを念じ、　慧者覺ること是の如し。　若し聖人の行を作さば、　孰か死を愁ふるを知らん。　我要ず彼に會はず、　大苦災患終る。　是の如く精勤を行じ晝夜に懈怠無し。　この故に常に當に跋地羅帝偈を說くべし

と。』彼[等]またこの念を作しぬ『諸賢、誰か能く世尊の向に略して說きたまへる所の義を廣く分別するや。』彼[等]またこの念を作しぬ『尊者大迦旃延常に世尊の稱譽する所、及び諸の智梵行人の[稱譽する所]爲り。[六]尊者大迦旃延能く世尊の向に略して說きたまへる所の義を廣く分別せん。諸賢、共に尊者大迦旃延の所に往詣しこの義を說くを請はん。若し尊者大迦旃延分別を爲さば、我等當に善く受持すべし。』こゝに於て諸の比丘尊者大迦旃延の所に往詣し共に相問訊し却きて一面に坐し白して曰く『尊者大迦旃延、當に知るべし。世尊略してこの敎を說き廣く分別せず、卽ち座より起ち室に入りて宴坐したまふ。[謂く]、

愼みて過去を念ずること莫れ。　亦未來を願ふこと勿れ。　過去の事已に滅し、　未來また未だ至らず。　現在所有の法、　彼亦當に思を爲すべし。　堅强有ること無きを念じ、　慧者覺ること是の如し。　若し聖人の行を學べば、　孰か死を愁ふるを知らん。　我要ず彼に會はず、　大苦災患終る。　是の如く精勤を行じ、　晝夜に懈怠無し。　この故に常に當に跋地羅帝偈を說くべし。

【六】 尊者大迦旃延(Āyasmā Mahākaccāno)。

夜將に旦に向はんとする[時]、我が所に來詣し稽首して禮を作し却きて一面に住しぬ。彼の天色像威神極妙にして光明普く溫泉の岸を照し、彼の天却きて一面に住し已りて而も我に白して曰く「比丘、跋地羅帝偈を受持するや」と。我彼の天に答へぬ「跋地羅帝偈を受持せず」と。我彼の天に問ひぬ「汝跋地羅帝偈を受持するや」と。彼の天答へて曰く「我亦跋地羅帝偈を受持せず」と。我また問ひぬ「誰か跋地羅帝偈を受持するや」と。彼の天答へて曰く「世尊この王舍城に遊び竹林迦蘭哆園に住し、彼跋地羅帝偈を受持したまふ。比丘 往きて而り世尊從り善く跋地羅帝偈を受持し誦すべし。所以者何。跋地羅帝偈は義有り法有り梵行の本たり、智に趣き覺に趣き涅槃に趣き、族姓者至信に家を捨て家無くして學道する[者]、當に跋地羅帝偈を以て善く受持し誦すべし」と。彼の天是の如きを說き、我が足に稽首し遶三匝し已りて卽ち彼の處に沒しぬ。』世尊問ひて曰はく『三彌提、汝彼の天何處より來り、彼の天何と名くるを知るや。』尊者三彌提答へて曰く『世尊、我彼に天何所より來るを知らず、亦名を知らず。』世尊告げて曰はく『三彌提、彼の天子正殿と名づけ三十三天の軍將たり。』こゝに於て尊者三彌提白して曰く『世尊、今正にこれ時なり。善逝、今正にこれ時なり。若し世尊諸の比丘の爲に跋地羅帝偈を說きたまはば、諸の比丘世尊より聞き已りて當に善く受持すべし。』世尊告げて曰はく『三彌提諦かに聽け、諦かに聽け、善くこれを思念せよ。我當に汝が爲に說くべし。』尊者三彌提白して曰く『唯然り。』時に諸の比丘敎を受けて而も聽きぬ。佛言はく、

愼みて過去を念ずること莫れ。亦未來を願ふこと勿れ。過去の事已に滅し、未來また未だ至らず。現在所有の法、彼亦當に思を爲すべし。[五]堅强有ること無きを念じ、慧者覺ること是の如し。若し聖人の行を作さば、孰か死を愁ふるを知らん。我要ず彼に會はず、大苦災患終る。是の如く精勤を行じ晝夜懈怠無し。この故に常に當に跋地羅帝偈を說くべし。

【五】以下意味稍々不明。巴利文「不變不動を知りてこれを追へ。今日こそは勤苦をなすべく、誰か明日の死を知らんや。吾等彼の死の大軍と戰ひて[克つ]なきが故に。斯の如く熱烈に晝夜に怠りなくして住するもの、それをば良き牟尼はバッテーカラッタとは呼ぶ。」

巻の第四十三

百六十五、[一]温泉林天經第四

我が聞きしこと是の如し。ある時佛王舍城に遊び竹林迦蘭哆園に在しぬ。その時尊者[二]三彌提亦王舍城に遊び[三]温泉林に住しぬ。こゝに於て尊者三彌提、夜將に旦に向はんとする[時]、房より而も出でて温泉に往詣し、衣を岸上に脫ぎ温泉に入りて浴し、浴し已りて還り出で體を拭き衣を著けぬ。その時一天有り、形體極妙にして色像巍々たり。夜將に旦に向はんとする[時]、尊者三彌提の所に往詣し稽首して禮を作し却きて一面に住しぬ。彼の天色像威神極妙にして光明普く温泉の岸を照しぬ。彼の天却きて一面に住し已りて尊者三彌提に白して曰く『比丘、[四]跋地羅帝偈を受持するや。』尊者三彌提彼の天に答へて曰く『我跋地羅帝偈を受持せず。』彼の天に尋問しぬ、『汝跋地羅帝偈を受持するや。』彼の天答へて曰く『我亦跋地羅帝偈を受持せず。』尊者三彌提また彼の天に問ひぬ『誰か跋地羅帝偈を受持するや。』彼の天答へて曰く『世尊この王舍城に遊び竹林迦蘭哆園に在す。彼跋地羅帝偈を受持したまふ。比丘、往きて面り世尊從り善く跋地羅帝偈を受持し誦すべし。所以者何。跋地羅帝偈は法有り義有り梵行の本たり、智に趣き覺に趣き涅槃に趣く。族姓者至信に家を捨て家無くして學道する[者]、當に跋地羅帝偈を以て善く受持し誦すべし。』彼の天是の如きを說き、尊者三彌提の足に稽首し遶三匝し已りて卽ち彼の處に沒しぬ。こゝに於て尊者三彌提天沒して久しからずして佛の所に往詣し稽首して禮を作し却きて一面に坐し白して曰く『世尊、我今日に於て夜將に旦に向はんとする[時]、房を出でゝ彼の温泉所に往詣し衣を岸上に脫ぎ温泉に入りて浴し、浴し已りてすなはち出でゝ岸に住まりて身を拭きぬ。その時一天有り、形體極妙にして色像巍々たり。

【一】M. 133, Kaccāna-bhaddekaratta-sutta.

【二】三彌提(Samiddhi)。

【三】温泉林(Tapodārāma)。

【四】跋地羅帝偈(Bhaddekarattassa uddeso ca vibhaṅgo ca)「善一樂の說示と分別と。」竺法護譯の「佛說尊上經」には「賢善偈及解義」

したまはず我この句を以て、この文を以て廣く說くこと是の如し。諸賢、往きて佛に向ひて具陳すべし。若如し世尊の義を說きたまふ所は、諸賢等すなはち受持すべし。』こゝに於て諸の比丘尊者大迦旃延の所說を聞きて善く受持し誦して卽ち坐より起ち、尊者大迦旃延を遶ること三匝して而も去り、佛の所に往詣し稽首して禮を作し、却きて一面に坐し白して曰く『世尊、向に世尊略してこの義を說き、廣く分別せずして卽ち坐より起ち室に入りて燕坐したまへるを、尊者大迦旃延この句を以て、この文を以て而も廣くこれを說きぬ。』世尊聞き已りて嘆じて曰はく『善き哉、善き哉、[彼]我が弟子の中眼有り智有り法有り義有り。所以者何。謂く師弟子の爲に略してこの義を說き、廣く分別せざるを、彼の弟子この句を以て、この文を以て而も廣くこれを說く。迦旃延比丘の所說の如く、汝等應に當に是の如く受持すべし。所以者何。觀義を說くに應に是の如くなるべきを以てなり。』佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

中阿含經卷第四十二

し、彼識を得んと欲し、識を求め識に著し識に住し、識卽ちこれ我、識これ我有なりとし已りて識識を捫摸し、識識を捫摸し已りて彼の識を變易する時、識識を轉じ、識識を轉じ已りて、彼恐怖の法を生じて心中に住し、心知らざるに因るが故にすなはち怖懼煩勞し受けずして而も恐怖す。諸賢、是の如く比丘受けずして恐怖す。諸賢、(6)云何が比丘受けず恐怖せざるや。諸賢、比丘色染を離れ色欲を離れ色愛を離れ色渴を離る。諸賢、若し比丘有りて色染を離れ色欲を離れ色愛を離れ色渴を離るれば、彼色を得んと欲せず色を求めず色に著せず色に住せず、色これ我に非ず、色我有に非ずとし、彼色を得んと欲せず色を求めず色に著せず色に住せず、色これ我に非ず、色我有に非ずとし已りて識色を捫摸せず、識色を捫摸せずし已りて彼の色を變易する時、識色を轉ぜず、識色を轉ぜずし已りて彼恐怖の法を生ぜず、心中に住せず、心知るに因るが故にすなはち怖懼せず煩勞せず、受けず恐怖せず。是の如く覺・想・行「亦然り。」比丘識染を離れ識欲を離れ識愛を離れ識渴を離る。諸賢、若し比丘有りて識染を離れ識欲を離れ識愛を離れ識渴を離るれば、彼識を得んと欲せず識を求めず識に著せず識に住せず、識これ我に非ず、識我有に非ずとし、彼識を得んと欲せず識を求めず識に著せず識に住せず、「識」これ我に非ず、識我有に非ずとし已りて識識を捫摸せず、識識を捫摸せずし已りて彼の識を變易する時、識識を轉ぜず、識識を轉ぜずし已りて彼恐怖の法を生ぜず、心中に住せず、心知るに因るが故にすなはち怖懼せず煩勞せず、受けず恐怖せず。諸賢、是の如く比丘受けず恐怖せず。諸賢、謂く世尊略してこの義を說き、廣く分別せずして卽ち坐より起ち室に入りて燕坐したまひぬ、「比丘、是の如く是の如く觀ぜよ。「卽ち」汝觀じ已りて、比丘、心外に出でゝ灑散し心内に住せず、受けずして而も恐怖するが如くに。比丘、是の如く是の如く觀ぜよ。「卽ち」汝觀じ已りて、比丘、心外に出でず灑散せず、心中に住し、受けず恐怖せざるが如くに。是の如くすればまた生老病死せず。これを苦邊と說く」とて。これを世尊略して說き、廣く義を分別

(6) 不レ受不二恐怖一。

の(聖)所捨・念・樂住・空あり第三禪を得、成就して遊ぶ。彼の識無喜の味に著せず、彼に依らず彼に住せず彼に緣らず彼に縛せられず、識內に住す。また次に諸賢、比丘樂滅し苦滅し、喜憂は本已に滅して不苦・不樂捨あり念あり清淨にして第四禪を得、成就して遊ぶ。[彼の]識捨及び念清淨の味に著せず、彼に依らず彼に住せず彼に緣らず彼に縛せられず、識內に住す。また次に諸賢、比丘一切の色想を度り、有對想を滅し若干想を念せず、無量空、この無量空處に成就して遊ぶ。彼の識空智の味に著せず、彼に依らず彼に住せず彼に緣らず彼に縛せられず、識內に住す。また次に諸賢、比丘一切の無量空處を度り、無量識、この無量識處に成就して遊ぶ。彼の識識智の味に著せず、彼に依らず彼に住せず彼に緣らず彼に縛せられず、識內に住す。また次に諸賢、比丘一切の無量識處を度り、無所有、この無所有處に成就して遊ぶ。彼の識無所有智の味に著せず、彼に依らず彼に住せず彼に緣らず彼に縛せられず、識內に住す。また次に諸賢、比丘一切の無所有處を度り、非有想非無想、この非有想非無想處に成就して遊ぶ。彼の識無想智の味に著せず、彼に依らず彼に住せず彼に緣らず彼に縛せられず、識內に住す。諸賢、是の如く比丘心內に住す。諸賢、云何が比丘受けずして而も恐怖する(5)。諸賢、比丘[一五]色染を離れず色欲を離れず色愛を離れず色渴を離れず。諸賢、若し比丘有りて色染を離れず色欲を離れず色愛を離れず色渴を離れざれば、彼色を得んと欲し色を求め色に著し色に住し、色即ちこれ我、色これ我有なりとし、色を得んと欲し色に著し色に住し、色即ちこれ我、色これ我有なりとし已りて識色を[一六]捫摸し、識色を捫摸し已りて彼の色を變易する時、識色を轉じ、識色を轉じ已りて彼恐怖の法を生じて心中に住し、心知らざるに因るが故にすなはち怖懼煩勞し受けずして而も恐怖す。是の如く覺・想・行[亦然り。]比丘識染を離れず識欲を離れず識愛を離れず識渴を離れず。諸賢、若し比丘有りて識染を離れず識欲を離れず識愛を離れず識渴を離れざれば、彼識を得んと欲し、識を求め識に著し識に住し、識即ちこれ我、識これ我有なりと

(5) 不レ受而恐怖、「著することなくして恐怖す。」

【一五】色覺(=受)想行識の五蘊に就ていふ。

【一六】捫摸。摑む、執るの意。巴利の Viparipamati に當るが如し、然らば變化する意。

して覺無く觀無く、定より生ずる喜と樂[とあり]第二禪を得、成就して遊ぶ。彼の識定味に著し、彼に依り彼に住し彼に緣り彼に縛せられ、識內に住せず。また次に諸賢、比丘喜欲を離れ、捨・無求にして遊び、正念・正智にして而も身に樂を覺ゆ、謂く[彼の]聖[者]の說く所の(聖)所捨・念・樂・住・空あり、第三禪を得、成就して遊ぶ。彼の識無喜の味に著し、[九]彼に依り彼に住し彼に緣り彼に縛せられ、識內に住せず。また次に諸賢、比丘樂滅し苦滅し、喜憂は本已に滅して不苦・不樂にして捨あり念あり清淨にして第四禪を得、成就して遊ぶ。彼の識捨及び念清淨に著し、[一〇]彼に依り彼に住し彼に緣り彼に縛せられ、識內に住せず。また次に諸賢、比丘一切の色想を度り、有對想を滅し、若干想を念ぜず、無量空、この無量空處に成就して遊ぶ。彼の識空智の味に著し、[一一]彼に依り彼に住し彼に緣り彼に縛せられ、識內に住せず。また次に諸賢、比丘一切の無量空處を度り、無量識、この無量識處に成就して遊ぶ。彼の識識智の味に著し、[一二]彼に依り彼に住し彼に緣り彼に縛せられ、識內に住せず。また次に諸賢、比丘一切の無量識處を度り、無所有、この無所有處に成就して遊ぶ。彼の識無所有智の味に著し、彼に依り彼に住し彼に緣り彼に縛せられ、識內に住せず。また次に諸賢、比丘一切の無所有處を度り、非有想非無想、この非有想非無想處に成就して遊ぶ。彼の識無想智の味に著し、[一四]彼に依り彼に住し彼に緣り彼に縛せられ、識內に住せず。諸賢、是の如く比丘心內に住せず。諸賢(4)云何が比丘心內に住するや。諸賢、比丘欲を離れ惡不善の法を離れ、覺有り觀有り、離より生ずる喜と樂と[あり]、初禪を得、成就して遊ぶ。彼の識離味に著せず、彼に依らず彼に住せず彼に緣らず彼に縛せられず、識內に住す。また次に諸賢、比丘覺・觀已に息み、內靜・一心にして覺無く觀無く、定より生ずる喜と樂と[あり]、第二禪を得、成就して遊ぶ。彼の識定味に著せず、彼に依らず彼に住せず彼に緣らず彼に縛せられず、識內に住す。また次に諸賢、比丘喜欲を離れ、捨・無求にして遊び、正念・正智にして而も身に樂を覺ゆ、謂く[彼の]聖者の說く所

【八】「彼」とは、定より生ずる喜と樂とを指す。

【九】「彼」とは、離喜妙樂を指す。

【一〇】「彼」とは、捨念清淨を指す。

【一一】無量空。

【一二】無量識。

【一三】無所有。

【一四】非有想非無想。

(4) 心住ㇾ內。

義を問ふ。所以者何。諸賢、當に知るべし。世尊は【五】これ眼・これ智・これ義・これ法・法主・法將にして眞諦の義を說きたまひ、一切の義を現ずるは、彼の世尊に出る。諸賢、應に世尊の所に往詣して而もこの義を問ふべし。「世尊、これ云何。これ何の義なりやと。」如し世尊說きたまはゞ諸賢等當に善く受持すべし。』時に諸の比丘白して曰く『唯然り、尊者大迦旃延、世尊はこれ眼・これ義・これ法・法主・法將にして、眞諦義を說きたまひ、一切の義を現ずるは彼の世尊に由る。我等應に世尊の所に往詣して而もこの義を問ふべし、「世尊これ云何、これ何の義なりや」と。如し世尊說きたまはゞ、我等當に善く受持すべし。然るに尊者大迦旃延常に世尊の稱譽したまふ所、及び諸の智梵行人の「稱譽する所」爲り、尊者大迦旃延能く世尊の向に略して說きたまへる所の義を廣く分別せん。唯願はくは尊者大迦旃延、慈愍の爲の故に而も廣くこれを說かれよ。』尊者大迦旃延諸の比丘に告げぬ、『諸賢等、共に我が說く所を聽け。諸賢(1)云何が比丘心外に出でゝ灑散するや。諸賢、比丘眼に色を見、識色相を食し、識色の樂相に著し、識色の樂相に縛せられ、彼の色相の味に結縛し、心外に出でゝ灑散す。是の如く耳鼻舌身「亦然り。」意に法を知り、識法相を食し、識法の樂相に著し、識法の樂相に縛せられ、彼の法相の味に結縛し、心外に出でゝ灑散す。諸賢、是の如く比丘心外に出でゝ灑散す。諸賢(2)云何が比丘心外に出でゝ灑散せざるや。諸賢、比丘眼に色を見、識色相を食せず、識色の樂相に著せず、識色の樂相に縛せられず、彼の色相の味に結縛せず、心外に出でゝ灑散せず、是の如く耳鼻舌身「亦然り。」意に法を知り、識法相を食せず、識法の樂相に著せず、識法の樂相に縛せられず、彼の法相の味に結縛せず、心外に出でゝ灑散せず。諸賢、是の如く比丘心外に出でゝ灑散せず。諸賢、(3)云何が比丘心內に住せざるや。諸賢、【六】比丘欲を離れ惡不善の法を離れ、覺有り觀有り、離より生ずる喜と樂「とあり」初禪を得、成就して遊ぶ。彼の識離味に著し、彼に依り彼に住し彼に緣り彼に縛せられ、識內に住せず。また次に諸賢、比丘覺觀已に息み、內靜・一心に

【五】巴利文「世尊は知者にして知り、見者にして見る。眼たり、智たり、法たり、梵たるもの、話者、說者、義利を起し、甘露を與ふるもの、法主、如來なり。」

(1)心出レ外灑散、「識外に散亂し普布す。」

(2)心不レ出レ外不二灑散一。

(3)心不レ住レ內、「心內に住立せず。」

【六】以下四禪八定を說く、四禪に就ては一卷「晝度樹經」註【八】以下を見よ。

【七】「彼」とは、離より生ずる喜と樂とを指す。

比丘、心外に出でゝ灑散し、心內に住せず、受けずして而も恐怖するが如くに。比丘、是の如く是の如く觀ぜよ。[卽ち]汝觀じ已りて、比丘、心外に出でず、灑散せず、心內に住し受けずして恐怖せざるが如くに。是の如くしてまた生老病死せず。これを苦邊と說く」とて。』彼[等]またこの念を作しぬ、『諸賢、誰か能く世尊の向に略して說きたまへる所の義を廣く分別せん。』彼[等]またこの念を作しぬ、『[三]尊者大迦旃延常に世尊の稱譽したまふ所、及び諸の智梵行人の[稱譽する所]爲り。尊者大迦旃延能く、世尊の向に略して說きたまへる所の義を廣く分別せん。諸賢、共に尊者大迦旃延の所に往詣しこの義を說くことを請はん。若し尊者大迦旃延爲に分別すれば、我等當に善く受持すべし。』こゝに於て諸の比丘尊者大迦旃延の所に往詣し共に相問訊し却きて一面に坐し白して曰く『尊者大迦旃延、當に知るべし。世尊略してこの義を說き廣く分別せずして卽ち坐より起ち室に入りて燕坐したまひぬ。「比丘、是の如く是の如く觀ぜよ。[卽ち]汝觀じ已りて、比丘、心外に出でて灑散し、心內に住せず、受けずして而も恐怖するが如くに。比丘、是の如く是の如く觀ぜよ。[卽ち]汝觀じ已りて、比丘、心外に出でず灑散せず、心內に住し受けずして恐怖せざるが如くに。是の如くしてまた生老病死せず。これを苦邊と說く」とて。我等すなはちこの念を作しぬ、「諸賢、誰か能く世尊の向に略して說きたまへる所の義を廣く分別せん」と。我等またこの念を作しぬ、「尊者大迦旃延常に世尊の稱譽したまふ所、及び諸の智梵行人の[稱譽する所]爲り。尊者大迦旃延能く世尊の向に略して說きたまへる所の義を廣く分別せん」と。唯願はく尊者大迦旃延、慈愍の爲の故に而も廣くこれを說かれよ。』その時尊者大迦旃延告げて曰く『諸賢、我が喩を說くを聽け。慧者は喩を聞けば則ちその義を解せん。諸賢、猶ほ人有るが如し。[四]實を求むるを得んと欲し、實を求めんが爲の故に斧を持ちて林に入り、彼大樹の根莖節枝葉花實を成せるを見、彼の人根莖節實に觸れず、但枝葉にのみ觸る。諸賢の說く所亦復是の如し。世尊現はに在すに、捨て來りて我に就きて而もこの

【三】 尊者大迦旃延 (Āyasmā mahā-kaccāno)、

【四】 實(Sāra)。木の心をいふ。

これを第一の方と謂ひ、內色想無くして外色を觀ずるを、これを第二の方と謂ひ、淨解脫し身觸成就して遊ぶを、これを第三の方と謂ひ、一切色想を度り有對想を滅し、若干想を念ぜず、無量空、この無量空處に成就して遊ぶ。これを第四の方と謂ひ、一切無量空處を度り、無量識、この無量識處に成就して遊ぶ。これを第五の方と謂ひ、一切無量識處を度り、無所有、この無所有處に成就して遊ぶ。これを第六の方と謂ひ、一切無所有處を度り、非有想非無想、この非有想非無想處に成就して遊ぶ。これを第七の方と謂ひ、一切非有想非無想處想を度り知滅盡し身觸成就して遊び、慧もて觀じ漏盡き智を斷ずるを、これを第八の方と謂ふ。無上の調御士は士を調御し一切の方に趣かしむとは、これに因るが故に說く。』佛說是の如し。彼の諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百六十四、分別觀法經第三[一]

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衞國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊諸の比丘に告げたまはく『我當に汝[等]が爲に法を說くべし。初め妙・中ごろ妙・竟り亦妙にして義有り文有り、具足し清淨にして梵行を顯現す。謂く分別觀法經なり。諦かに聽け。諦かに聽きて、善くこれを思念せよ。』時に諸の比丘白して曰く『世尊、唯當に教を受くべし。』佛言はく『比丘、是の如く是の如く觀ぜよ。[卽ち]汝觀じ已りて、比丘、心外に出でゝ灑散し、心內に住せず、受けずして、而も恐怖するが如くに。比丘、是の如く是の如く觀ぜよ。[卽ち]汝觀じ已りて、比丘、[二]心外に出でず灑散せず、心內に住し受けずして恐怖せざるが如くに。是の如くしてまた生老病死せず。これを苦邊と說く。』佛是の如きを說き已りて卽ち坐より起ち室に入りて燕坐したまひぬ。こゝに於て諸の比丘すなはちこの念を作しぬ『諸賢、當に知るべし。世尊略してこの義を說き廣く分別せずして卽ち坐より起ち室に入りて燕坐したまひぬ。「比丘、是の如く是の如く觀ぜよ。[卽ち]汝觀じ已りて、

【一】M. 138, Uddesavibhanga-sutta.

【二】巴利文「識外に散亂せず、普布せず、識內に住立してあれば、著することなく怖れざるものには、未來生老病苦の生起あらず。」

快樂の爲にし、これ饒益樂の爲にす。若し彼の弟子而も恭敬せず、亦順行せず智を立せず、その心法・次法に趣向せず、正法を受けず、世尊の教に違ひ、定を得る能はざれば、世尊これを以つて憂慼を爲さず。但世尊捨無所爲にして常念常智なり。これを第一の意止と謂ひ、謂く聖人の習ふ所、聖人の習ひ已る所、衆教ふべきなり。(ii)また次に如來弟子の爲に法を說き憐念愍傷し、義及び饒益を求め安隱快樂を求め、慈悲心を發し、これ饒益の爲にし、これ快樂の爲にし、これ饒益樂の爲にす。若し彼の弟子恭敬し順行して而も智を立し、その心法・次法に歸し趣向し、正法を受持して世尊の教に違はず、能く定を得れば、世尊これを以つて歡喜を爲さず。但世尊捨無所爲にして常念常智なり。これを第二の意止と謂ひ、謂く聖人の習ふ所、聖人の習ひ已る所、衆教ふべきなり。(iii)また次に如來弟子の爲に法を說き憐念愍傷し、義及び饒益を求め安隱快樂を求め、慈悲心を發し、これ饒益の爲にし、これ快樂の爲にし、これ饒益樂の爲にす。或は弟子有りて而も恭敬せず、亦順行ならず、智を立せず、その心法・次法に趣向せず、正法を受けず、世尊の教に違ひ、定を得る能はざれば、[また]或は弟子有りて恭敬し順行して而も智を立し、その心法・次法に歸し趣向し、正法を受持して世尊の教に違はず、能く定を得れば、世尊これを以て憂慼を爲さず、亦歡喜せず。但世尊捨無所爲にして常念常智なり。これを第三の意止と謂ひ、謂く聖人の習ふ所、聖人の習ひ已る所、衆教ふべきなり。三意止謂く聖人の習ふ所、聖人の習ひ已る所、衆教ふべしとは、これに因るが故に說く。(8)無上の調御士は士を調御し一切方に趣かしむとは、これ何に因りて說くや。調御士はこれ士を調御し一方に趣かしむ、或は東方或は南方・或は西方・或は北方なりと說く。調御象者は象を調御して一方に趣かしむ、或は東方・或は南・西・北方なり。調御馬者は馬を調御して一方に趣かしむ、或は東方・或は南・西・北方なり。調御牛者は牛を調御して一方に趣かしむ。或は東方・或は南・西・北方なり。無上の調御士は士を調御して一切の方に趣かしむ。中に於て方とは色色を觀ずるを

【一六】無上調御士者調御士趣一切方者、「彼は調御者の長、御すべき人々の調御者なり。」

樂にして若干更樂ならず。云何が捨有り、無量更樂・若干更樂なる。若し捨色の爲・聲の爲・香の爲・味の爲・觸の爲なれば、この捨無量更樂・若干更樂なり。云何が捨一更樂にして若干更樂ならざる。謂く捨或は無量空處に依り、或は無量識處に依り、或は無所有處に依り、或は非有想悲無想處に依る。この捨一更樂にして若干更樂ならず。謂くこの捨一更樂有りて若干更樂ならざるは、これを取りこれに依りこれに住す。謂くこの捨無量更樂・若干更樂有るは、彼を滅し彼を除き彼を吐す。是の如く彼を斷ず。無量を取り無量に依り無量に住し、謂くこの捨一更樂有りて若干更樂ならざるは、これを取りこれに依りこれに住す。謂くこの捨無量更樂・若干更樂有るは、彼を滅し彼を除き彼を吐す。是の如く彼を斷ず。中に於て彼を斷じこれを成就すとは、これに因るが故に說く。(6)[一四]無量の說法當に內を知るべしとは、これ何に因りて說くや。如來四弟子有り、增上行有り增上意有り增上念有り增上慧有り、辯才有り第一辯才を成就し、壽活百歲なり。如來彼の爲に法を說きて滿百年、飮食の時・大小便の時・睡眠息の時及び聚會の時を除く。彼如來所說の法の文句法句、義を觀じ慧を以つて而も速に義を觀じ、また更に如來の法を問はず。所以者何。如來の說法極り有ること無く法を盡すべからず。文句法句、義を觀じ、乃ち四弟子命終るに至る。猶ほ四種の善射の人の如し。挽彊俱に發し、善く學び善く知りて而も方便有り速に過去を徹す。是の如く世尊四弟子有り、增上行有り增上意有り增上念有り增上慧有り、辯才有り第一辯才を成就し壽活百歲なり。如來彼の爲に法を說きて滿百年、飮食の時・大小便の時・睡眠息の時及び聚會の時を除く。彼如來所說の法の文句法句、義を觀じ慧を以つて而も速に義を觀じ、また更に如來の法を問はず。所以者何。如來の說法極り無く盡すべからず。無量の說法當に內を知るべしとは、これに因るが故に說く。(7)[一五]三意止は謂く聖人の習ふ所、聖人の習ひ已る所衆教ふべしとは、これ何に因りて說くや。(i)若し如來弟子の爲に法を說き憐念愍傷し、義及び饒益を求め安隱快樂を求め、慈悲心を發し、これ饒益の爲にし、これ

【一四】無量當ㇾ知ㇾ內者、巴利文にこの一なし。

【一五】三意止謂聖人所習、聖人所習已、衆可ㇾ教者、「三意住はこれ聖者の修する所、聖者は修し師として群衆を敎ふるに堪ふとは。」

ふ。(v)云何が[一〇]六捨著に依り、(vi)云何が六捨無欲に依るや。眼色を見已りて捨を生ず。當に知るべし、二種あり。或は著に依り、或は無欲に依る。云何が捨著に依るや。眼色を知りて捨を生ず。彼平等にして多く聞かず、智慧無く、愚癡の凡夫色の爲に捨有りて色を離れず。これを捨著に依ると謂ふ。云何が捨無欲に依るや。色無常にして變易し、盡き無欲にして滅息するを知り、前及び今一切の色無常・苦・滅の法なりと憶ひ已りて捨住し、若し至意有れば捨を修習す。これを捨無欲に依ると謂ふ。是の如く耳・鼻・舌・身[亦然り。]意法を知り已りて捨を生ず。當に知るべし、二種あり。或は著に依り、或は無欲に依る。云何が捨著に依るや。意法を知りて捨を生ず。平等にして多く聞かず、智慧無く、愚癡の凡夫法の爲に捨有りて法を離れず。これを捨著に依ると謂ふ。云何が捨無欲に依るや。意法無常にして變易し、盡き無欲にして滅息するを知り、前及び今一切の法無常・苦・滅の法なりと憶ひ已りて捨住し、若し至意有れば捨を修習す。これを捨無欲に依ると謂ふ。これを六喜著に依り六喜無欲に依り、六憂著に依り六憂無欲に依り、六捨著に依り六捨無欲に依ると爲し、總べて三十六刀を說く。當に內を知るべしとは、これに因るが故に說く。(5)中に於て彼を斷じこれを成就すとは、これ何に因りて說くや。謂くこの六喜無欲に依るは、これを取りこれに依りこれに住す。謂くこの六喜著に依るは、彼を滅し彼を除き彼を吐す。是の如く彼を斷ず。謂くこの六憂無欲に依るは、これを取りこれに依りこれに住す。謂くこの六憂著に依るは、彼を滅し彼を除き彼を吐す。是の如く彼を斷ず。謂くこの六捨無欲に依るは、これを取りこれに依りこれに住す。謂くこの六捨著に依るは、彼を滅し彼を除き彼を吐す。是の如く彼を斷ず。謂くこの六憂無欲に依るはこれを取りこれに依りこれに住す。謂くこの六喜無欲に依るは、彼を滅し彼を除き彼を吐す。是の如く彼を斷ず。謂くこの六捨無欲に依るは、これを取りこれに依りこれに住す。謂くこの六憂無欲に依るは、彼を滅し彼を除き彼を吐す。是の如く彼を斷ず。[一二]捨有り、無量更樂・若干更樂なり。[一三]捨有り、一更

【一〇】六捨依著(Cha gehasitā upekhā)、六捨依無欲(Cha nekkhamasitā upekkhā)。

【一一】於レ中斷レ彼成二就是一者、「これによりてこれを斷ぜよとは」。

【一二】有レ捨無量更樂、若干更樂、「捨の種々に、依止種々なるあり。」

【一三】有レ捨一更樂、不若干更樂、「捨の一種に、依止一種なるあり。」

喜無欲に依るや。色の無常にして變易し、盡き、無欲にして滅息するを知り、前及び今一切の色は無常・苦・滅の法なりと憶ひ已りて喜を生ず。是の如き喜、これを喜無欲に依ると謂ふ。是の如く耳・鼻・舌・身[亦然り。]意法を知り已りて喜を生ず。當に知るべし、二種あり。或は著に依り、或は無欲に依る。云何が喜著に依るや。意法を知り、喜ぶべくして意に念じ法を愛し欲相應の樂あり、未だ得ざるは得んと欲し、已に得たるは憶ひ已りて喜を生ず。是の如き喜、これを喜著に依ると謂ふ。云何が喜無欲に依るや。法無常にして變易し、盡き無欲にして滅息するを知り、前及び今一切の法は無常・苦・滅の法なりと憶ひ已りて喜を生ず。是の如き喜、これを喜無欲に依ると謂ふ。(iii)云何が六[九]憂著に依り(iv)云何が六憂無欲に依るや。眼色を見已りて憂を生ず。當に知るべし、二種あり。或は著に依り、或は無欲に依る。云何が憂著に依るや。眼色を知り喜ぶべくし　意に念じ色を愛し欲相應の樂あり、未だ得ざるは得ず、已に得たるは過去に散り、壞滅變易して憂を生ず。是の如き憂、これを憂著に依ると謂ふ。云何が憂無欲に依るや。色無常にして變易し、盡き無欲にして滅息するを知り、前及今一切の色は無常・苦・滅の法なりと憶ひ已りてこの念を作す、「我何の時か彼の處に成就して遊ぶや。謂く處とは諸の聖人成就して遊ぶなりと。」これを上具觸願し恐怖し苦憂を知り憂を生ずと爲す。是の如き憂、これを憂無欲に依ると謂ふ。是の如く耳・鼻・舌・身[亦然り。]意法を知り已りて憂を生ず。當に知るべし、二種なり。或は苦に依り、或は無欲に依る。云何が憂著に依るや。意法を知り喜ぶべくして意に念じ法　愛し欲相應の樂あり、未だ得ざるは得ず、已に得たるは過去に散り、壞滅變易して憂を生ず。是の如き憂、これを憂著に依ると謂ふ。云何が憂無欲に依るや。法無常にして變易し、盡き無欲にして滅息するを知り、前及び今一切の法は無常・苦・滅の法なりと憶ひ已りてこの念を作す、「我何の時か彼の處に成就して遊ぶや。謂く處とは諸の聖人成就して遊ぶなりと。」これを上具觸願し恐怖し苦憂を知り憂を生ずと爲す。是の如き憂、これを憂無欲に依ると謂

【九】六憂依著(Cha geha-sitāni domanassāni)・六憂依無欲(Cha nekkhammasitāni domanassāni)。

告げたまはく『我當に汝が爲に法を說くべし。初め妙、中ごろ妙、竟り亦妙にして義有り文有り、具足し清淨にして梵行を顯現す。謂く分別六處經なり。諦かに聽け、諦かに聽きて、善くこれを思念せよ。』時に諸の比丘白して曰く『世尊、唯當に敎を受くべし。』佛言はく『汝等[二]六處當に內を知るべし。六更樂處當に內を知るべし。十八意行當に內を知るべし。三十六刀當に內を知るべし。中に於て彼を斷じこれを成就す。無量の說法、當に內を知るべし。三意止は謂く聖人の習ふ所、聖人の習ひ已る所衆敎ふべし。無上の調御士は、士を調御し一切方に趣く。これを分別六處經の事と謂ふ。(1)[三]六處當に內を知るべしとは、これ何に因りて說くや。謂く眼處・耳・鼻・舌・身・意處なり。六處當に內を知るべしとは、これに因るが故に說く。(2)[四]六更樂處當に內を知るべしとは、これ何に因りて說くや。謂く眼更樂は色を見んが爲に、耳更樂は聲を聞かんが爲に、鼻更樂は香を嗅かんが爲に、舌更樂は味を嘗めんが爲に、身更樂は觸を覺らんが爲に、意更樂は法を知らんが爲なり。六更樂處當に內を知るべしとは、これに因るが故に說く。(3)[五]十八意行當に內を知るべしとは、これ何に因りて說くや。比丘は眼に色を見已りて[六]色の喜住を分別し、色の憂住を分別し、色の捨住を分別し、是の如く耳・鼻・舌身[亦然り。]意法を知り已りて法の喜住を分別し、法の憂住を分別し、法の捨住を分別す。これを六喜を分別し、六憂を分別し、六捨を分別すと謂ひ、總べて十八意行を說く。十八意行當に內を知るべしとは、これに因るが故に說く。(4)[七]三十六刀當に內を知るべしとは、これ何に因りて說くや。六喜の著に依る有り、六喜の無欲に依る有り、六憂の著に依る有り、六憂の無欲に依る有り、六捨の著に依る有り、六捨の無欲に依る有り。(i)云何が[八]六喜著に依り、(ii)云何が六喜無欲に依るや。眼色を見已りて喜を生ず。當に知るべし、二種あり。或は著に依り、或は無欲に依る。云何が喜著に依るや。眼色を知り喜ぶべくして意に念じ色を愛し欲相應の樂あり、未だ得ざるは得んと欲し、已に得たるは憶ひ已りて喜を生ず。是の如き喜、これを喜著に依ると謂ふ。云何が

【二】六內處以下八條目を擧ぐ。巴利文には無量說法當レ知レ內の一なく、更に六外處卽ち六境、六識身卽ち六識の二を加へて九條目となす。各條目の巴利名は下に擧ぐ。

【三】六處當知內者(Cha ajjhattikāni āyatanāni veditabbāni iti)。「當に六の內處を知るべしとは。」

【四】六更樂處當知內者(Cha phassakāyā veditabbā iti)。「當に六觸知るべきなりとは。」

【五】十八意行當知內者(Aṭṭhādasa manopavicārā veditabbā iti)。

【六】色喜住(Somanassaṭṭhāniya rūpa)、色憂住(Domanassaṭṭhāniya rūpa)、色捨住(Upekkhaṭṭhāniya rūpa)。

【七】三十六刀當知內者(Chattiṃsa sattapadā veditabbā iti)。「三十六有情跡當に知るべしとは。」Lord Chalmers は英譯して、The thirty-six tracks for creatures といふ。

【八】六喜依著(Cha gehasitāni somanassāni)、六喜無欲(Cha nekkhammasitāni somanassāni)。

有に當りてこれ亦自ら擧げ、我無色有に當りてこれ亦自ら擧げ、我非有色非無色に當りてこれ亦自ら擧げ、我有想に當りてこれ亦自ら擧げ、我無想に當りてこれ亦自ら擧げ、我非有想非無想に當りてこれ亦自ら擧ぐ。これ貢高なり、これ憍慠なり、これ放逸なり。比丘、若しこの一切の自ら擧げ貢高・憍慠・放逸なる無ければ、[一六]意これ息すと謂ふ。比丘、若し意息すればすなはち憎まず憂へず勞せず怖れず。所以者何。彼の比丘法を成就するが故に、また憎を說くべき者有らず。若し憎まざれば則ち憂へず、憂へざれば則ち愁しまず、愁しまざれば則ち勞せず、勞せざれば則ち怖れず。怖れざるに因りてすなはち當に般涅槃すべく、生已に盡き梵行已に立ち所作已に辨じ更に有を受けずと如眞を知る。』この法を說き已りて尊者弗迦邏娑利塵を遠ざけ垢を離れ、諸法の法眼生じぬ。こゝに於て尊者弗迦邏娑利法を見法を得、白淨の法を覺り疑を斷じ惑を度し更に餘尊無く、また他に由らず、猶豫有ること無く已に果證に住し、世尊の法に於て無所畏を得、卽ち坐より起ち佛足に稽首し白して曰く『世尊、我過を悔ゆ。善逝、我自首す。愚の如く癡の如く不定の如く不善解の如く、良田を識らず、自ら知る能はず。所以者何。我如來・無所著・等正覺を稱して君と爲せるを以てなり。唯願はくは世尊、我が過を悔ゆるを聽きたまへ。我過を悔い已りて後更らに作さず。』世尊告げて曰はく『比丘、汝實に愚癡なり。汝實に不定なり、汝不善解なり。謂く如來・無所著・等正覺を稱して君と爲す。比丘、若し汝能く自ら過を悔い、見已りて發露し護りて更に作さゞれば、比丘、是の如くなれば則ち聖法律中に於て益して而も損せず。謂く能く自ら過を悔い、見已りて發露し、護りて更に作さず。』佛說是の如し。尊者弗迦邏娑利佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

百六十三、[一]分別六處經第二

我が聞きしこと是の如し。ある時佛舍衛國に遊び勝林給孤獨園に在しぬ。その時世尊諸の比丘に

【一六】意息。

【一】M. 137, Saḷāyatana-vibhaṅga-sutta.

處に依れば、故これ［一一］有爲なり。若し有爲なれば則ちこれ無常なり。若し無常なれば卽ちこれ苦なり。若しこれ苦なればすなはち苦と知り、苦と知り已りて彼この捨また移りて無量空處に入らず。我がこの淸淨の捨　量識處・無所有處・非有想非無想處に依れば、故これ有爲なり。若し有爲なれば則ちこれ無常なり。若し無常なれば卽ちこれ苦なり。若しこれ苦なればすなはち苦と知り、苦と知り已りて彼この捨また移りて無量識處・無所有處・非有想非無想處に入らず。比丘、若し比丘有りてこの四處に於て慧を以てこれを觀じてその如眞を知り、心成就せず移入せざれば、彼その時に於てまた有爲ならず、亦所思無し。謂く有及び無なり。彼身を受け最後覺なれば則ち身を受けて最後覺なるを知り、命を受けて最後覺なれば則ち命を受けて最後覺なるを知り、身壞れ命終り壽命已に訖り、彼の所覺一切滅し息止し、冷かなるに至るを知る。比丘、譬へば燈を燃すが如し。油に因り炷に因る。彼若し人更に油を增益する無く亦炷を續がざれば、これ前已に滅し訖りて後相續せず、また受くる所無しと爲す。是の如く比丘身を受けて最後覺なれば則ち身を受けて最後覺なるを知り、命を受けて最後覺なれば則ち命を受けて最後覺なるを知り、身壞れ命終り壽命已に訖り、彼の所覺一切滅し息止し、冷かなるに至るを知る。比丘、これを比丘の［一二］第一の正慧と謂ひ、謂く究竟滅訖に至り、漏盡の比丘彼を成就し、第一の正慧處を成就す。比丘、この解脫眞諦に住し移動せざるを得。眞諦とは謂く如法なり。妄言とは謂く虛妄の法なり。比丘、彼の［一三］第一の眞諦處を成就す。比丘、彼の比丘施を施設し若し本必ず怨家有るも、彼その時に於て放捨し吐し離れ解脫し滅訖す。比丘、これを比丘の［一四］第一の正惠施と謂ふ。謂く一切の世を捨離し盡く欲無く滅し息止す。比丘、彼を成就し第一の惠施處を成就す。比丘、彼の比丘心欲恚癡の爲に穢され解脫を得ず。比丘、この一切の婬怒癡盡き欲無く滅し息止し、第一の息を得。比丘、彼を成就すれば［一五］第一息處を成就す。比丘、我はこれ自ら擧げ、我有に當りてこれ亦自ら擧げ、我非有非無に當りてこれ亦自ら擧げ、我色

【一一】有爲、無常、苦。

【一二】第一正慧。

【一三】第一眞諦處。

【一四】第一正惠施。

【一五】第一息處。

(e)捨更樂に因るが故に捨覺を生ず。彼捨覺を覺り、捨覺を覺り已りて卽ち捨覺を覺るを知る。若し比丘有りてこの捨更樂を滅し、この捨更樂を滅し已りて、若し捨更樂より捨覺を生ずる有れば、彼亦滅し息止し已に冷かなるを知る。比丘、彼々の更樂の故に彼々の覺を生じ、彼々の更樂を滅し已りて彼々の覺亦滅す。彼この覺更樂に從ひ、更樂の本たり更樂の習たり更樂より生じ、更樂を以て首と爲し更樂に依りて行ずるを知る。比丘、猶ほ火母鑽及び人の方便に因りて熱し相[合]ふが故に而も火を生ずるが如し。比丘、彼々の衆多の林木相離れ分散し、若し彼より火を生ずれば、火數ば熱し生に於て數ば受け、彼都べて滅し止息して則ち樵木を冷す。是の如く比丘、彼々の更樂の故に彼々の覺を生じ、彼々の更樂を滅するが故に彼々の覺亦滅す。彼この覺更樂に從ひ、更樂本たり更樂習たり、更樂に從ひて生じ、更樂を以て首と爲し更樂に依りて行ずるを知る。若し比丘この三覺に染まずして而も解脫すれば、彼の比丘唯捨を存し極めて清淨なり。比丘、彼の比丘この念を作す、「我がこの清淨の捨移りて無量空處に入り是の如き心を修し、彼に依り彼に住し彼を立し彼に緣り彼に繫縛す。我がこの清淨の捨移りて無量識處・無所有處・非有想非無想處に入り是の如き心を修し、彼に依り彼に住し彼を立し彼に緣り彼に繫縛すと。」比丘、猶ほ煉金に工なる上妙の師のごとし。火を以て金を燒き鍛へて極めて薄からしめ、又火燥を以て數々火を足し熱煉して淨からしめ、極めて柔軟にして而も光明有らしむ。比丘、この金は金師に於て以て數々火を足し熱煉して淨からしめ、極めて柔軟にして而も光明有らしめ已りて、彼の金師は施設する所に隨ひ、或は繒綵を縺り、新衣を嚴飾し、指鐶・臂釧・瓔珞・寶鬘、意の作す所に隨ふ。是の如く比丘、彼の比丘この念を作す、「我がこの清淨の捨移りて無量空處に入り是の如き心を修し、彼に依り彼に住し彼を立し彼に緣り彼に繫縛し、我がこの清淨の捨移りて無量識處・無所有處・非有想非無想處に入り是の如き心を修し、彼に依り彼に住し彼を立し彼に緣り彼に繫縛すと。」彼の比丘またこの念を作す、「我がこの清淨の捨無量空

(e)捨更樂、捨覺。

を比丘、內風界と謂ふ。比丘、若し內風界及び外風界有れば、彼の一切總べて風界と說く。彼の一切我が有に非ず、我彼の有に非ず、亦神に非ず。是の如く慧もて觀じてその如眞を知り、心この風界に染著せず。これを比丘、慧を放逸せずと謂ふ。また次に比丘、慧を放逸せず。若し比丘有りて身界を分別し、(v)「今我がこの身內空界有りて而も生に於て受く。これ云何と爲す。謂く眼空・耳空・鼻空・口空 咽喉動搖し、謂く食噉含消安徐として咽に住し、若しは下り過ぎて出づ。斯の如きの比なり。この身中餘は內に在り、內に攝する所空、空に在りて肉・皮・骨・筋の覆ふ所と爲らずと。」これを比丘、內空界と謂ふ。比丘、若し內空界及び外空界有れば、彼の一切總べて空界と說く。彼の一切我が有に非ず、我彼の有に非ず、亦神に非ず。是の如く慧もて觀じてその如眞を知り、心この空界に染著せず。これを比丘、慧を放逸せずと謂ふ。比丘、若し比丘有りてこの五界に於てその如眞を知り、如眞を知り已りて心彼に染[著]せず、(vi)而も解脫すれば唯餘識有り。これ何等の識なる。樂識・苦識・喜識・憂識・捨識なり。比丘、(a)樂更樂に因るが故に樂覺を生ず。彼樂覺を覺り、樂覺を覺り已りて卽ち樂覺を覺るを知る。若し比丘有りてこの樂更樂を滅し、この樂更樂を滅し已りて若し樂更樂より樂覺を生ずる有れば、彼亦滅し息止し已に冷かなるを知る。比丘、(b)苦更樂に因るが故に苦覺を生ず。彼苦覺を覺り、苦覺を覺り已りて卽ち苦覺を覺るを知る。若し比丘有りてこの苦更樂を滅し、この苦更樂を滅し已りて若し苦更樂より苦覺を生ずる有れば、彼亦滅し息止し已に冷かなるを知る。比丘、(c)喜更樂に因るが故に喜覺を生ず。彼喜覺を覺り、喜覺を覺り已りて卽ち喜覺を覺るを知る。若し比丘有りてこの喜更樂を滅し、この喜更樂を滅し已りて若し喜更樂より喜覺を生ずる有れば、彼亦滅し息止し已に冷かなるを知る。比丘、(d)憂更樂に因るが故に憂覺を生ず。彼憂覺を覺り、憂覺を覺り已りて卽ち憂覺を覺るを知る。若し比丘有りてこの憂更樂を滅し、この憂更樂を滅し已りて、若し憂更樂より憂覺を生ずる有れば、彼亦滅し息止し已に冷かなるを知る。比丘、

(v)空界。
(vi)識界。
(a)樂更樂、樂覺。
(b)苦更樂、苦覺。
(c)喜更樂、喜覺。
(d)憂更樂、憂覺。

く。云何が比丘・(5)慧を放逸せざるや。若し比丘有りて身界を分別して、(i)「今我がこの身內地界有りて而も生に於て受く。これ云何と爲す。謂く髮毛・爪・齒・麁細の膚・皮・肉・骨・筋・腎・心・肝・肺・脾・大腸・胃・糞斯の如きの比なり。この身中餘は內に在り、內に攝する所堅、堅性內に住し、生に於て受くる所なりと。」これを比丘、內地界と謂ふ。比丘、若し內地界及び外地界有れば、彼の一切總べて地界と說く。彼の一切我が有に非ず、我彼の有に非ず、亦神に非ず。是の如く慧もて觀じてその如眞を知り、心この地界に染著せず。これを比丘、慧を放逸せずと謂ふ。また次に比丘、慧を放逸せず。若し比丘有りて身界を分別して、(ii)「今我がこの身內水界有りて而も生に於て受く。これ云何と爲す。謂く腦・膜・眼・淚・汗・涕・唾・膿・血・肪・髓・涎・淡・小便、斯の如きの比なり。この身中餘は內に在り、內に攝する所、水、水性內を潤し、生に於て受くる所なりと。」これを比丘、內水界と謂ふ。比丘、若し內水界及び外水界有れば、彼の一切總べて水界と說く。彼の一切我が有に非ず、我彼の有に非ず、亦神に非ず。是の如く慧もて觀じてその如眞を知り、心この水界に染著せず。これを比丘、慧を放逸せずと謂ふ。また次に比丘、慧を放逸せず。若し比丘有りてこの身界を分別し、(iii)「今我がこの身內火界有りて而も生に於て受く。これ云何と爲す。謂く熱身・暖身・煩悶身・溫莊身、謂く飲食を消す。斯の如きの比なり。この身中餘は內に在り、內に攝する所火、火性內を熱し、生に於て受くる所なりと。」これを比丘、內火界と謂ふ。比丘、若し內火界及び外火界有れば、彼の一切總べて火界と說く。彼の一切我が有に非ず、我彼の有に非ず、亦神に非ず。是の如く慧もて觀じてその如眞を知り、心この火界に染著せず。これを比丘、慧を放逸せずと謂ふ。また次に比丘、慧を放逸せず。若し比丘有りて身界を分別し、(iv)「今我がこの身內風界有りて而も生に於て受く。これ云何と爲す。謂く〔一〇〕上風・下風・脇風・掣縮風・蹴風・非道風・節節風・息出風・息入風、斯の如きの比なり。この身中餘內に在り、內に攝する所風、風性內を動かし、生に於て受くる所なりと。」これ

(5)不レ放ニ逸慧一。
(i)地界。
(ii)水界。
(iii)火界。
(iv)風界。
【一〇】巴利文には上風、下風、腹に住まる風、腔に住まる風、諸肢を廻る風、出息、入息の七種を擧ぐ。

り。彼に依りて出家學道し法を受く。』世尊即ちまた問ひて曰はく『比丘、曾て師を見しや。』尊者弗迦邏娑利答へて曰く『見ず。[五]』世尊問ひて曰はく『若し師を見れば識ると爲すや不や。』尊者弗迦邏娑利答へて曰く『識らず。然るに賢者、我聞くに世尊、如來・無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛・衆祐と號すと。彼これ我が師にして彼に依りて出家學道し法を受く』。彼の時世尊またこの念を作したまひぬ、「この族姓子我に依りて出家學道し法を受く。我今寧ろ爲に法を說くべきやと。」世尊念じ已りて尊者弗迦邏娑利に語げて曰はく『比丘、我汝が爲に法を說かんに初め善、中ごろ善、竟亦善にして、義有り文有り具足し清淨にして梵行を顯現す。謂く六界を分別す。汝當に諦かに聽き善くこれを思念すべし。』尊者弗迦邏娑利答へて曰く『唯然り。』佛彼に告げて曰はく『比丘、人[六]六界聚・[七]六觸處・[八]十八意行・[九]四住處有り、若し彼に住する有れば憂慼の事を聞かず、憂慼の事を聞かず已りて、意すなはち憎まず憂へず勞せず亦恐怖せず、是の如く教有りて慧を放逸にせず、眞諦を守護し、惠施を長養す。比丘、當に最上を學すべし、當に至寂を學し、六界を分別すべし。是の如く比丘、(1)人六界聚有り。これ何に因りて說くや。謂く地界・水界・火界・風界・空界・識界なり。比丘、人六界聚有りとは、これに因るが故に說く。比丘、(2)人六觸處有り。これ何に因りて說くや。謂く比丘、眼觸は色を見、耳觸は聲を聞き、鼻觸は香を嗅ぎ、舌觸は味を嘗め、身觸は觸を覺り、意觸は法を知る。比丘、人六觸處有りとは、これに因るが故に說く。比丘、(3)人十八意行有りとは、これ何に因りて說くや。謂く比丘、眼色を見て、色の喜住を觀じ、色の憂住を觀じ、色の捨住を觀じ、是の如く耳・鼻・舌・身[亦然り。]意法を知り、法の喜住を觀じ、法の憂住を觀じ、法の捨住を觀ず。比丘、この六喜觀・六憂觀・六捨觀、合し已りて十八行なり。比丘、人十八意行有りとは、これに因るが故に說く。比丘、(4)人四住處有りとは、これ何に因りて說くや。謂く眞諦住處・慧住處・施住處・息住處なり。比丘、人四住處有りとは、これに因るが故に說

【五】巴利文「君よ、彼の世尊を私はまだ見たこともありません、見ても知らないでせう。」

【六】六界聚(Chadhāturo)。地水火風空識の六大なり。二一卷「說處經」に出づ。

【七】六觸處(Caphassāyatano)。

【八】十八意行(Aṭṭhādasamanopavicāro)。

【九】四住處(Catu adhiṭṭhāno)。

(1)六界聚。

(2)六觸處。

(3)十八意行。

(4)四住處。(i)眞諦住處(Saccādhiṭṭhāna)、(ii)慧住處(Paññā-)、(iii)施住處(Cāga-)、(iv)息住處(Upasama-)。

卷の第四十二

根本分別品第二（十經あり）

〔十經とは〕分別六界〔分別六〕處・分別觀法・温泉林天・釋中禪室尊・阿難說・意行・拘樓瘦無諍・鸚鵡・分別〔大〕業なり。

百六十二、分別六界經第一[1]

我が聞きしこと是の如し。ある時佛摩竭陀國に遊び王舍城に往詣して宿りたまひぬ。ここに於て世尊陶家[2]に往至し語げて曰はく『陶師、我今陶屋に寄りて一宿せんと欲す。汝聽さるゝや。』陶師答へて曰く『我所違無し[3]。然るに一比丘有りて先に已に中に住す。若し彼聽さば、住せんと欲せば意に隨へ』。その時　尊者弗迦邏娑利[4]先に已に彼に在り陶屋の中に住しぬ。ここに於て世尊陶師の家を出で彼の陶屋に入り尊者弗迦邏娑利に語げて曰はく『比丘、我今陶屋に寄りて一宿せんと欲す。汝聽さるゝや。』尊者弗迦邏娑利答へて曰く『君、我所違無し。且この陶屋に草座已に敷く。君、住せんと欲せば自ら意に隨ふべし。』その時世尊彼の陶屋より外に出で足を洗ひ訖りて還內に入り、草座上に於て尼師檀を敷き結跏趺坐し、夜竟るまで默然として靖坐し意を定めぬ。尊者弗迦邏娑利亦夜竟るまで默然として靖坐し意を定めぬ。彼の時世尊而もこの念を作したまひぬ、「この比丘寂靖に住止し甚奇甚特なり。我今寧ろ彼の比丘に、汝の師是誰なりや、誰に依りて出家學道し法を受くるやと問ふべしと」。世尊念じ已りて問ひて曰はく『比丘、汝の師是誰なりや。誰に依りて出家學道し法を受くるや。』尊者弗迦邏娑利答へて曰く『賢者、沙門瞿曇なる釋種の子有り、釋の宗族を捨て鬚髮を剃除し、袈裟衣を著け至信に家を捨て家無くして學道し無上正盡覺を覺る。彼これ我が師な

【一】M. 140, Dhātuvibhaṅga-sutta.

【二】巴利にては陶師名を Bhaggava と呼ぶ。

【三】我無所違（Na kho me, bhante, garu）。「大德よ、私には差閊へありません。」

【四】尊者弗迦邏娑利（Āyasmā pukkusāti）。

世云何。』世尊答へて曰はく『比丘、梵志梵摩極めて大利有り、最後に法を知り法の爲の故に我を煩勞せざりき。比丘、梵志梵摩[三二]五下分結盡き、彼に生じて般涅槃を得、不退法を得てこの世に還らず。』その時世尊梵摩[三三]阿那含を得んと記說したまひぬ。佛說是の如し。梵志梵摩及び諸の比丘佛の所說を聞きて歡喜奉行しぬ。

中阿含經卷第四十一

【三二】五下分結。一卷「水喩經」註〔七〕を見よ。

【三三】阿那含（Anāgāmin）。一卷「水喩經」註〔四〕を見よ。在家人は阿那含果に達し得れど、阿羅漢果に達することを得ず。

日より始めて終身自ら歸し乃ち命盡くるに至らん。』時に梵志梵摩叉手を佛に向け白して曰く『世尊、唯願はくは明日[三二]願を垂れて請を受けたまへ。及び比丘衆[亦受けよ。]』世尊梵志梵摩の爲の故に默然として而も受けたまひぬ。梵志梵摩世尊默然として受けたまへるを知り已りて佛足に稽首し繞三匝して而も去り、その家に還歸し、卽ちその夜に於て餚饌極妙上味、種種豐饒なる食噉含消を施設し、施設し已り訖りて平旦床を敷き、時至りて唱へて曰く『世尊、飯食已に辦じぬ。唯聖時を知りたまへ。』こゝに於て世尊夜を過ぎて平旦、衣を著け鉢を持し比丘翼從し世尊前に在りて梵志梵摩の家に往詣し、比丘衆の前に於て座を敷きて而も坐したまひぬ。梵志梵摩世尊及び比丘衆の衆の坐已に定まれるを知り、自ら澡水を行じ上味の餚饌種々豐饒なる食噉含消を以て自ら手もて斟酌し極めて飽滿せしめ、食し訖り器を收め澡水を行じ竟りて一小床を取り坐して呪願を受けぬ。梵志梵摩坐し已りて世尊彼の爲に呪願を說きて曰はく

呪火は第一の齋、　通音は諸の音の本たり、　王は人中の尊爲り、　海は江河の長爲り、
月は星中の明爲るも、　明照日に過ぐる無し。　上下[四]維諸方及び一切世間、　人より乃ち
天に至るまで、　唯佛最も第一なり。

こゝに於て世尊梵志梵摩の爲に呪願を說き已りて座より起ちて去りたまひ、彌薩羅國に住することと數日を經、衣を攝め鉢を持し則便ち遊行して舍衛國に至り展轉して前進し舍衛國に到り勝林給孤獨園に住したまひぬ。こゝに於て衆多の比丘舍衛に乞食する時、彼の彌薩羅の梵志梵摩偈を以て佛の事を問ひ、彼すなはち命終りぬと聞き、諸の比丘聞き已りて、食し訖り中後に衣鉢を收擧し手足を澡洗し尼師檀を以て肩上に著け佛の所に往詣し、稽首して禮を作し、却きて一面に住し白して曰く『世尊、我等衆多の比丘平旦衣を著け鉢を持し舍衛に入りて乞食せる時彼の彌薩羅の梵志梵摩偈を以て佛の事を問ひ、彼すなはち命終りぬと聞きぬ。世尊、彼何處に至り、何許に生ずと爲し、後

【三二】世尊、唯願明日垂願受請。巴利文にては「尊瞿曇の、比丘衆と共に明日余の食を〔受くることを〕諾したまはんことを。」

說に達す。彼沙門瞿曇の爲に極めて意を下して尊敬し禮を作し供養し奉事す。沙門瞿曇甚奇甚特なり。大如意足有り大威德有り大福祐有り大威神有り。所以者何。この彌薩羅國の所有梵志居士は梵志梵摩彼[等]に於て最も第一なり。謂く[二九]財物の故に。梵志梵摩極大富樂にして資財無量、畜牧產業稱計すべからず、封戶食邑種々具足し、食豐かにして彌薩羅乃至水草木、謂く王摩竭陀未生怨鞞陀提子特に梵封を與ふ。彼沙門瞿曇の爲に極めて意を下して尊敬し禮を作し供養し奉事す。沙門瞿曇甚奇甚特なり。大如意足有り大威德有り大福祐有り大威神有り。所以者何。この彌薩羅國の所有梵志居士は梵志梵摩彼[等]に於て最も第一なり。謂く[三〇]壽命の故に。梵志梵摩極大長老にして壽命具足し年百二十六なり。彼沙門瞿曇の爲に極めて意を下して尊敬し禮を作し供養し奉事す。』この時世尊他心智を以て彼の大衆の心の念ずる所を知り世尊知り已りて梵志梵摩に告げたまはく『止みね、止みね。梵志、但心喜べば足る。還りてまた坐すべし。汝が爲に法を說かん。』梵志梵摩佛足に稽首し却きて一面に坐しぬ。世尊彼の爲に法を說き、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ、無量の方便もて彼の爲に法を說き、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已りて、諸佛の法の如く先づ端政の法を說き、聞者歡悅しぬ。謂く施を說き戒を說き生天の法を說き、欲を毀呰して災患と爲し、生死を穢と爲し、無欲を稱嘆して妙道品白淨と爲し、爲にこれを說き已りて佛彼に歡喜心・具足心・柔軟心・堪耐心・昇上心・一向心・無疑心・無蓋心有り、能有り力有りて佛の正法を受くるを知り、謂く諸佛所說の正要の如く世尊具さに彼の爲に苦習滅道を說きたまひぬ。梵志梵摩即ち座上に於て四聖諦、苦習滅道を見、猶ほ白素染めて色と爲し易きが如く、是の如く梵摩即ち座上に於て四聖諦、苦習滅道を見ぬ。こゝに於て梵摩法を見、法を得、白淨法を覺り、疑を斷じ、惑を度し、更に餘尊無くまた他に由らず、猶豫有ること無く、已りて果證に住し、世尊の法に於て無所畏を得、即ち座より起ち佛足に稽首しぬ『世尊、我今自ら佛・法及び比丘衆に歸す。唯願はくは世尊、我を受けて優婆塞と爲したまへ。今

於て第一人者なり。

【二九】彼はまた財物多き點に於て第一人者なり。

【三〇】長壽なる點に於て第一人者たり。

し。我寧ろ彼に甚深の[二三]阿毘曇を說くべしと。」世尊知り已りて梵志梵摩の爲に卽ち頌を說きて曰はく

　現世は樂法の故に、　饒益は後世の爲なり。　梵志、汝事を問ひ本意の思ふ所に隨へ。　彼々諸の問ふ事、　我汝が爲に疑を斷ぜん。

〔梵志梵摩問ひて曰く〕

　世尊已に問ふを許す。　梵志梵摩の故に。　すなはち世尊に事を問ひ本意の思ふ所に隨はん。
　云何が梵志爲る。　[二四]三達何の義有りや。　何を以て無著と說き、　何等か正盡覺なる。

その時世尊頌を以て答へて曰はく

　惡不善の法を滅して擇梵行に立住し、　梵志の行を修習し、　こゝを以て[二五]梵志爲り。　過去を明達し、　樂及び惡道を見、　無明盡く訖るを得、　これを知りて[二六]牟尼を立つ。　善く清淨心を知り、　盡く婬・怒・癡を脫し、　三明を成就し、　こゝを以て三達爲り。　不善の法を遠離し正に第一義に住し、　第一世の敬する所、　こゝを以て無著たり。　天及び人を饒益し、　眼を與へ諍を滅壞し、　普く知り現に覩盡くし、　こゝを以て正盡覺たり。

こゝに於て梵摩卽ち座より起ち佛足に稽首せんと欲しぬ。彼の時大衆同時に俱に高大音聲を發しぬ、『沙門瞿曇甚奇甚特なり。大如意足有り大威德有り大福祐有り大威神有り。所以者何。この彌薩羅國の所有梵志居士は、梵志梵摩彼[等]に於て最も第一なり。謂く[二七]出生の故に。梵志梵摩父母の舉ぐる所と爲り生を受くること清淨にして乃至七世の父母種族を絕たず、生々惡無し。彼沙門瞿曇の爲に極めて意を下して尊敬し禮を作し供養し奉事す。沙門瞿曇甚奇甚特なり。大如意足有り大威德有り大福祐有り大威神有り。所以者何。この彌薩羅國の所有梵志居士は、梵志梵摩彼[等]に於て最も第一なり。謂く[二八]學書の故に。梵志梵摩博聞總持し四典經を誦過し深く因緣・正文・戲・五句

【二三】阿毘曇（Abhidhamma）。法卽ち經を哲學的に取扱ひたるものをいふ。

【二四】三達（Tevijja）。三達とは佛教的にいへば、(1)宿命、(2)天眼、(3)漏盡の三明あるものをいひ、婆羅門的にはリグ、サーマ、ヤジュルの三ヴェーダに通ぜるをいふ。

【二五】梵志（Brāhmaṇa）を釋す。

【二六】牟尼（Muni）。

【二七】梵摩婆羅門は「生れ」よき點に於てあらゆる婆羅門居士中第一なり。

【二八】彼はまた學問ある點に

に陰馬の藏有りと爲すや不や。一切の人尊ぶこと深密なり。云何が人最尊と爲すや。現に微妙舌を視ず。若し尊廣長舌有らば、唯願はくは我をして見るを得せしめよ。今實に疑惑心有り。願はくは調御して我が疑を決せよ。

世尊この念を作したまひぬ、「この梵志梵摩我が身の三十二相を求め、彼三十を見、二に於て疑有り。陰馬の藏及び廣長舌なり。我今寧ろ彼の疑惑を除くべしと。」世尊知り已りて如其像如意足を作したまひ、如其像如意足を作し已りて梵志梵摩世尊の身の陰馬の藏及び廣長舌を見ぬ。中に於て廣長舌とは、舌口より出でゝ盡くその面を覆ふ。世尊如意足を止め已りて梵志梵摩の爲にこの頌を說きて曰はく、

謂く汝昔曾て聞きし所の三十二大人の相、彼の一切我が身に在り、滿ち具足し最上にして正し。調御して我に於て疑を斷じ、梵志微妙の信を發せよ。至りて見聞するを得難きは最上正盡覺なり。世に出づること極めて難しと爲すは最上正盡覺なり。梵志我は正覺にして無上の正法王なり。

梵志梵摩聞き已りて而もこの念を作しぬ、「この沙門瞿曇三十二大人の相を成就す。謂く大人の相を成就すれば必ず二處有り、眞諦にして虛ならず。若し家に在れば必ず轉輪王と爲り聰明にして智慧あり、四種の軍有りて天下を整御し、如法の法王にして七寶を成就す。彼の七寶は輪寶・象寶・馬寶・珠寶・女寶・居士寶・主兵臣寶、これを謂ひて七と爲す。千子具足し顏貌端政にして勇猛無畏、能く他の衆を伏し、彼必ずこの一切の地乃至大海を統領し、刀杖を以てせず、法を以て敎令し安隱を得せしむ。若し鬚髮を剃除し袈裟衣を著け至信に家を捨て家無くして學道すれば必ず如來・無所著・等正覺を得、名稱流布して十方に周聞す。」こゝに於て世尊而もこの念を作したまひぬ、「この梵志梵摩長夜に諛諂無く欺誑無く、欲する所問ふ所は一切知らんと欲し、觸嬈する爲に非ず。彼亦是の如

ること已に畢りぬ。尊自ら時を知られよ。』こゝに於て梵摩極賢妙車に乘り、彌薩羅より出でゝ北行して大天㮈林に至り、世尊を見て禮拜し供養せんと欲しぬ。その時世尊無量の衆「の中」に在り、前後圍繞せられて而も爲に法を說きたまひぬ。梵志梵摩遙かに世尊無量の衆「の中」に在り、前後圍繞せられて而も爲に法を說きたまへるを見、見已りて恐怖しぬ。こゝに於て梵摩卽ち避け道側に在り、樹下に至りて住まり、一摩納に告げぬ、『汝彼の沙門瞿曇「の所」に往詣し、我が爲に、聖體康强安快無病にして起居輕便氣力常の如きやを問訊し、是の如き語を作せ、「瞿曇、我が師梵摩、聖體康强安快無病にして起居輕便氣力常の如きやを問訊す。瞿曇、我が師梵摩來りて沙門瞿曇を見んと欲す」と。』こゝに於て摩納卽ち敎を受けて行き、佛の所に往詣し共に相問訊し却きて一面に坐し白して曰く『瞿曇、我が師梵摩、聖體康强安快無病にして起居輕便氣力常の如きやを問訊す。瞿曇、我が師梵摩來りて沙門瞿曇を見んと欲す。』世尊告げて曰はく『摩納、梵志梵摩をして安隱快樂ならしめ、天及び人・阿修羅・揵沓惒・羅刹・及び餘の種々の身をして安隱快樂ならしめよ。摩納、梵志梵摩來らんと欲せば意に隨へ。』こゝに於て摩納佛の所說を聞きて善く受け善く持し卽ち坐より起ち佛を繞ること三匝して而も去り、還りて梵志梵摩の所に詣り白して曰く『尊、我已に沙門瞿曇に通じぬ。彼の沙門瞿曇今住まりて尊を待つ。唯尊時を知られよ。』梵志梵摩卽ち車より下り步みて佛の所に詣りぬ。彼の衆遙かに梵志梵摩の來るを見、卽ち座より起ち道を開きてこれを避けぬ。所以者何。名德及び多識有るを以ての故に。梵志梵摩彼の衆に告げて曰く『諸賢、各々また坐せ。我直に往きて沙門瞿曇を見んと欲す。』こゝに於て梵摩佛の所に往詣し共に相問訊し却きて一面に坐しぬ。その時梵摩二根、眼根及び耳根を壞せず。梵志梵摩坐し已りて諦かに佛の身の三十二相を觀じ、彼三十相を見、二相に於て疑有り。陰馬の藏及び廣長舌なり。梵志梵摩卽ち時に偈を以て世尊に問ひて曰く、

我昔曾て聞きし所の如くば、　三十二大人の相　中に於て求めて二を見ず。　尊沙門瞿曇の身

の宗族を捨て、出家學道し、鞞陀提國に遊行し、大比丘衆と俱に展轉し來りてこの彌薩羅に至り大天捺林に住す。沙門瞿曇大名稱有りて十方に周聞す。沙門瞿曇、如來・無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛衆祐と號し、彼この世・天及び魔・梵・沙門・梵志に於て人より天に至るまで自ら知り自ら覺り、自ら作證し成就して遊ぶ。彼法を說きて、初め妙、中ごろ妙、竟亦妙にして義有り文有り具足し清淨にして梵行を顯現す。若し如來・無所著・等正覺を見て敬重し禮拜し供養し承事する者有れば快く善利を得と。」「我等寧ろ共に往きて彼の沙門瞿曇を見、禮拜し供養すべし」とて、彼の彌薩羅の梵志居士各等類眷屬と相隨へ、彌薩羅より出でゝ北行し大天捺林に至り、世尊を見、禮拜し供養せんと欲して佛[の所]に往詣し已りて、或は彌薩羅の梵志居士有りて佛足に稽首し却きて一面に坐し、或は佛と共に相問訊し却きて一面に坐する有り、或は叉手を佛に向け却きて一面に坐する有り、或は遙かに佛を見已りて默然として而も坐する有り。彼の彌薩羅の梵志居士各々坐し已りて佛爲に法を說き、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ、無量の方便もて彼[等]の爲に法を說き、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已りて默然として住したまひぬ。梵志梵摩聞きぬ、「沙門瞿曇なる釋種の子釋の宗族を捨て出家學道し、鞞陀提國に遊行し大比丘衆と俱に展轉し來りてこの彌薩羅國に至り大天捺林に住す。彼の沙門瞿曇大名稱有りて十方に周聞し、彼の沙門瞿曇、如來・無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛衆祐と號し、彼この世・天及び魔・梵・沙門・梵志に於て人より天に至るまで自ら知り自ら覺り、自ら作證し成就して遊ぶ。彼法を說きて初め妙、中ごろ妙、竟亦妙にして義有り文有り、具足し清淨にして梵行を顯現す。若し如來・無所著・等正覺を見、敬重し禮拜し供養し承事する者有れば快く善利を得と。」「我寧ろ往きて沙門瞿曇を見、禮拜し供養すべし」とて、梵志梵摩御者に告げて曰く『汝速に駕を嚴れ。我今沙門瞿曇[の所]に往詣せんと欲す。』御者教を受けて即ち速に駕を嚴り訖り、還りて白して曰く『駕を嚴

Ambavana,。一四卷「大天捺林經」參照。

た稱譽せず、但慚ぢて默然たるのみ。諸の居士の爲に法を說き、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ、無量の方便もて彼の爲に法を說き勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已りて卽ち坐より起ち、すなはち退きて而も還る。彼家を出づる時身低仰せず。尊、沙門瞿曇家を出づる時終に身を低めず。尊、沙門瞿曇諸根常に定まる。彼街巷に在りて低視せず亦仰視せず、唯直正に視、中に於て所知・所見を礙へず。尊、沙門瞿曇村を出づる時終に身を低めず。所以者何。本の善行を以ての故に。彼村を出づる時身低仰せず。尊、沙門瞿曇園に入る時終に身を低めず。彼園に入る時身低仰せず。尊、沙門瞿曇園に入る時終に身を低めず。彼中食後に衣鉢を收擧し手足を澡洗し尼師檀を以て肩上に著け房に入りて宴坐す。尊、沙門瞿曇世間を饒益するが故に房に入りて宴坐す。尊、沙門瞿曇則ち晡時に於て宴坐より起ち、面色光澤あり。所以者何。如來・無所著・等正覺なるを以ての故に。尊、沙門瞿曇口に【三〇】八種の音聲を出す。一に曰く甚深、二に曰く【三一】毘摩樓簸、三に曰く入心、四に曰く可愛、五に曰く極滿、六に曰く活瞿、七に曰く分了、八に曰く智なり。多人の愛する所、多人の樂ふ所、多人の念ずる所にして心定を得せしむ。尊、沙門瞿曇衆に隨ひて法を說き聲衆の外に出でず、唯衆に在り、彼［等］の爲に法を說き、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ、無量の方便もて彼［等］の爲に法を說き、勸發・渴仰・成就・歡喜せしめ已りて卽ち坐より起ち本の所に還歸す。尊、沙門瞿曇その像是の如く、但殊勝有りてまたこれに過ぐ。尊、我彼の沙門瞿曇［の所］に詣り從ひて梵行を學せんと欲す。』梵志梵摩告げて曰く『意に隨へ。』こゝに於て優多羅摩納梵志梵摩の足に稽首し、繞三匝して而も去り、佛の所に往詣し佛足に稽首し却きて一面に坐し、白して曰く『世尊、願はくは世尊に從ひて學道し具足を受け比丘を成就し、世尊に從ひて梵行を修行するを得ん。』こゝに於て世尊優多羅摩納を度し學道して具足を受けしめ、優多羅摩納を度し學道して具足を受けしめ已りて鞞陀提國に遊行し大比丘衆と俱に展轉して前に進み彌薩羅に到り、彌薩羅の【三二】大天捺林に住したまひぬ。彼の彌薩羅の梵志・居士聞きぬ、「沙門瞿曇なる釋種の子、釋

【三〇】如來の八音とは(1)極好音(Vissaṭṭha 流暢なる)、(2)尊慧音(Viññeyya 可知の)、(3)柔軟音(Mañju 微妙なる)、(4)和適音(Savanīya 可聞の)、(5)不女音(Bindu 密滿なる)、(6)不誤音(Avisārī 明晰なる)、(7)深遠音(Gambhīra 甚深の)、(8)不竭音(Ninnādī 多響の)をいふ。本文中に擧ぐる八音を一々これ等に配することは殆ど不可能なり。

【三一】毘摩樓簸、上記八種の何れに當るや考へ得ず。

【三二】大天捺林(Makhādeva-

る時先づ右足を擧げ、正しく擧げ正しく下し、行きて擾亂せず亦惡亂無し。行く時兩踝終に相振れず。尊、沙門瞿曇行く時塵土の爲に坌されず。所以者何。本の善行を以ての故に。彼園を出づる時身低仰せず。尊、沙門瞿曇園を出づる時終に身を低めず、村間に往到し身極めて右旋し觀察すること龍の如く遍く觀じて而も觀じ、恐れず怖ぢず亦驚懼せず、諸方を觀ず。所以者何。如來・無所著・等正覺なるを以ての故に。彼村に入る時身低仰せず。尊、沙門瞿曇村に入る時終に身を低めず。彼街巷に在りて低視せず亦仰視せず、唯直正に視、中に於て所知・所見を礙へず。尊、沙門瞿曇諸根常に定まる。所以者何。本の善行を以ての故に。彼家に入る時身低仰せず。尊、沙門瞿曇家に入る時身低仰せず。尊、沙門瞿曇家に入る時終に身を低めず。尊、沙門瞿曇身を迴して右旋し床を正して而も坐す。彼床上に於て身力を極めて坐せず、亦手を以て肶に案じて床に坐せず。彼床に坐し已りて悒悒せず煩惱せず亦復樂しまず。澡水を受くる時高からず下からず、多からず少からず。彼飲食を受くるに高からず下からず、多からず少からず。尊、沙門瞿曇食を受けて鉢に平かにし羮飲食に等しくす。尊、沙門瞿曇、摶食齊整にして徐ろに口中に著け、摶食未だ至らざれば豫め口を張らず、及び口中に在りて三たび嚼みて而も咽み、飯及び羮亦斷碎せざる無く、餘口に在る有りてまた後の摶[食]を內る。尊、沙門瞿曇三事清淨の食を以て味を得んと欲し、彼の食を染味せんと欲せず、財物の爲ならず、[一九]貢高の爲ならず、自ら飾る爲ならず、莊嚴の爲ならず、但身を存し久しく住して患無からんと欲し用て故疹を止め、新病を起さず、命を存し患無く力有り快樂にして飯食已に訖り、手を洗ふ水を受くるに高からず下からず、多からず少からず。鉢を澡ぐ水を受くるに高からず下からず多からず少からず。彼手を洗ひ淨め已りてその鉢亦淨め、鉢を洗ひ淨め已りてその手亦淨め、手を拭き已りてすなはち鉢を拭き、鉢を拭き已りてすなはち手を拭き、彼鉢を洗拭し已りて一面に安著し、近づけず遠ざけず、數ば鉢を觀ず、亦鉢の爲にせず。彼この食を毀呰せず亦彼の食

【一九】 Cf. A. ii. 40.

た次に尊、(31)沙門瞿曇頂に內髻有り、團圓相稱ひ、髮は螺のごとく右旋す。これを尊、沙門瞿曇の大人大人の相と謂ふ。また次に尊、(32)沙門瞿曇眉間に毛を生じ潔白にして右縈す。これを尊、沙門瞿曇の大人大人の相と謂ふ。これを尊、沙門瞿曇三十二大人の相を成就すと謂ひ、若し大人の相を成就すれば必ず二處有り、眞諦にして虛ならず。若し家に在れば必ず轉輪王と爲り聰明にして智慧あり、四種の軍有りて天下を整御し、己に由りて自在、如法の法王にして七寶を成就す。彼の七寶は輪寶・象寶・馬寶・珠寶・女寶・居士寶・主兵臣寶、これを謂ひて七と爲す。千子具足し顏貌端政にして勇猛無畏、能く他の衆を伏し、彼必ずこの一切の地乃至大海を統領し、刀杖を以てせず、法を以て敎令し安隱を得せしむ。若し鬚髮を剃除し袈裟衣を著け至信に家を捨て家無くして學道すれば必ず如來・無所著・等正覺を得、名稱流布して十方に周聞す。また次に尊、我沙門瞿曇を見るに、衣を著け已れば衣を著け、衣を被已れば衣を被、房を出で已れば房を出で、園を出で已れば園を出で、道を行きて村間に至り、村に入り已れば村に入り、巷に在りて家に入り已れば家に入り、床を正し已れば床を正し、坐し已れば坐し、手を澡ぎ已れば手を澡ぎ、飲食を受け已れば飲食を受け、食し已れば食し、手を澡ぎ呪願し坐より起ち、家を出で已れば家を出で、巷に在りて村を出で已れば村を出で、園に入り已れば園に入り、房に入り已れば房に入る。尊、沙門瞿曇衣を著けて齊整にして高からず下からず、衣體に近づかず、風衣をして身を遠離せしむる能はず。尊、沙門瞿曇衣を被、齊整にして高からず下からず、衣體に近づかず、風衣をして身を遠離せしむる能はず。尊、沙門瞿曇常に新衣を著くるに聖に隨順し、刀を以て割截し染めて惡色と作す。是の如く彼の聖染めて惡色と作す。彼衣を持するは、財物の爲ならず、貢高の爲ならず、自ら飾る爲ならず、莊嚴の爲ならず。但蚊虻風日の觸るゝ所を障蔽するが爲の故なり、及び慚愧してその身を覆ふが爲の故なり。彼房を出づる時身低仰せず。尊、沙門瞿曇房を出づる時終に身を低めず。尊、沙門瞿曇若し行かんと欲す

これを尊、沙門瞿曇の大人大人の相と謂ふ。また次に尊、(10)沙門瞿曇肌皮軟細にして塵水著せず。これを尊、沙門瞿曇の大人大人の相と謂ふ。また次に尊、(11)沙門瞿曇一一毛なり。一一毛とは身の一一の孔に一毛生ずるなり。色紺青の若く、螺の如く右旋す。これを尊、沙門瞿曇の大人大人の相と謂ふ。また次に尊、(12)沙門瞿曇鹿の蹲腸にして猶ほ鹿王の如し。これを尊、沙門瞿曇の大人大人の相と謂ふ。また次に尊、(13)沙門瞿曇陰馬の藏猶ほ良馬王のごとし。これを尊、沙門瞿曇の大人大人の相と謂ふ。また次に尊、(14)沙門瞿曇身形圓好にして猶ほ尼拘類樹のごとく、上下圓くして相稱ふ。これを尊、沙門瞿曇の大人大人の相と謂ふ。また次に尊、(15)沙門瞿曇身阿曲せず。身曲らずとは、平立して手を伸べ以てその膝を摩すなり。これを尊、沙門瞿曇の大人大人の相と謂ふ。また次に尊、(16)沙門瞿曇身黄金色にして紫磨金の如し。これを尊、沙門瞿曇の大人大人の相と謂ふ。また次に尊、(17)沙門瞿曇身七處滿つ。七處滿つとは兩手・兩足・兩肩及び項なり。これを尊、沙門瞿曇の大人大人の相と謂ふ。また次に尊、(18)沙門瞿曇その上身大にして猶ほ師子の如し。これを尊、沙門瞿曇の大人大人の相と謂ふ。また次に尊、(19)沙門瞿曇師子頰車なり。これを尊、沙門瞿曇の大人大人の相と謂ふ。また次に尊、(20)沙門瞿曇脊背平直なり。これを尊、沙門瞿曇の大人大人の相と謂ふ。また次に尊、(21)沙門瞿曇兩肩の上連通し頸平滿なり。これを尊、沙門瞿曇の大人大人の相と謂ふ。また次に尊、(22)―(25)沙門瞿曇四十齒あり、牙「平にして」、齒踈ならず、齒白く齒通じ、[一六]第一味を味ふ。これを尊、沙門瞿曇の大人大人の相と謂ふ。また次に尊、(26)―(27)沙門瞿曇梵音愛すべく、その聲猶ほ[一七]迦羅毘伽の如し。これを尊、沙門瞿曇の大人大人の相と謂ふ。また次に尊、(28)沙門瞿曇廣長舌なり。廣長舌とは舌口より出で遍くその面を覆ふなり。これを尊、沙門瞿曇の大人大人の相と謂ふ。また次に尊、(29)沙門瞿曇[一八]承涙處滿ちて猶ほ牛王の如し。これを尊、沙門瞿曇の大人大人の相と謂ふ。また次に尊、(30)沙門瞿曇眼色紺青なり。これを尊、沙門瞿曇の大人大人の相と謂ふ。ま

【一六】 巴利文にては「味第一味」を別立し、第三十一の「頂有肉髻」を省くことは「三十二相經」註に記せり。

【一七】 迦羅毘伽(Karavika)、即ち迦陵頻伽なり。

【一八】 承涙處滿猶如牛王(Gopamukha)。眼睫如牛王相。牛の王者の如きマツゲある相。

政にして勇猛無畏、能く他の衆を伏し、彼必ずこの一切の地乃至大海を統領し、刀杖を以てせず、法を以て教令し安隱を得せしむ。若し鬚髮を剃除し、袈裟衣を著け、至信に家を捨て、家無くして學道すれば、必ず如來・無所著・等正覺を得、名稱流布して十方に周聞すと。」優多羅摩納またこの念を作しぬ、「我寧ろ極めて威儀禮節を觀じ、及び遊行して趣く所を觀ずべしと。」こゝに於て優多羅摩納尋いで佛に隨ひて行き、夏四月に於て威儀禮節を觀じ、及び遊行して趣く所を觀じぬ。優多羅摩納夏四月を過ぎ、世尊の威儀禮節を悅可し及び遊行して趣く所を觀じて白して曰く『瞿曇、我今事有り、還りて辭を請はんと欲す。』世尊告げて曰はく『優多羅、汝去りて意に隨へ。』優多羅摩納世尊の所說を聞きて善く受け善く持し、卽ち坐より起ち繞三匝して而も去り、梵志梵摩の所に往詣し梵志梵摩の足に稽首し却きて一面に坐しぬ。梵志梵摩問ひて曰く『優多羅、實に聞く所の如く沙門瞿曇大名稱有りて十方に周聞し、實に三十二大人の相有りと是の如しと爲すや、是の如くならずと爲すや。』優多羅摩納答へて曰く『唯然り尊。實に聞く所の如く沙門瞿曇大名稱有りて十方に周聞す。沙門瞿曇、實に三十二相有りと是の如くにして是の如くならざるに非ず。尊、[一五](1)沙門瞿曇足安平にして立つ。これを尊、沙門瞿曇の大人大人の相と謂ふ。また次に尊、(2)沙門瞿曇足下に輪を生じ、輪に千輻有りて一切具足す。これを尊、沙門瞿曇の大人大人の相と謂ふ。また次に尊、(3)沙門瞿曇足の指纖長なり。これを尊、沙門瞿曇の大人大人の相と謂ふ。また次に尊、(4)沙門瞿曇足の周正直なり。これを尊、沙門瞿曇の大人大人の相と謂ふ。また次に尊、(5)沙門瞿曇足の跟踝の後の兩邊平滿なり。これを尊、沙門瞿曇の大人大人の相と謂ふ。また次に尊、(6)沙門瞿曇足の兩踝臛し。これを尊、沙門瞿曇の大人大人の相と謂ふ。また次に尊、(7)沙門瞿曇身毛上向す。これを尊、沙門瞿曇の大人大人の相と謂ふ。また次に尊、(8)沙門瞿曇手足の細軟猶ほ雁王の如し。これを尊、沙門瞿曇の大人大人の相と謂ふ。また次に尊、(9)沙門瞿曇手足極妙にして柔弱軟々猶ほ劬羅華のごとし。

【一五】一一卷「三十二相經」註を見よ。

學道すれば、必ず如來・無所著・等正覺を得、名稱流布して十方に周聞すと。』優多羅答へて曰く『唯然り尊。我諸經を受持するに、三十二大人の相有り、若し大人の相を成就すれば必ず二處有り、眞諦にして虛ならず。若し家に在れば必ず轉輪王と爲り聰明にして智慧あり、四種の軍有りて天下を整御し、已に由りて自在、如法の法王にして七寶を成就す。彼の七寶は輪寶・象寶・馬寶・珠寶・女寶・居士寶・主兵臣寶、これを謂ひて七と爲す。千子具足し顏貌端政にして勇猛無畏、能く他の衆を伏し、彼必ずこの一切の地乃至大海を統領し、刀杖を以てせず、法を以て教令し安隱を得せしむ。若し鬚髮を剃除し袈裟衣を著け至信に家を捨て家無くして學道すれば、必ず如來・無所著・等正覺を得、名稱流布して十方に周聞すと。』梵志梵摩告げて曰く『優多羅、汝彼の沙門瞿曇の所に往詣し、彼の沙門瞿曇を觀、實に三十二大人の相有りと是の如しと爲すや、是の如くならずと爲すや[を觀よ。]』優多羅摩納聞き已りて梵志梵摩の足に稽首し繞三匝して而も去り、佛の所に往詣し共に相問訊し却きて一面に坐し、世尊の身の三十二相を觀ぬ。彼、世尊の身を見るに三十相有りて二相に於て疑惑しぬ、【二】陰馬の藏及び【三】廣長舌なり。世尊念じて曰はく『この優多羅我が身に於て三十二相を觀、彼三十相有るを見て二相に於て疑惑す。陰馬の藏及び廣長舌なり。我今寧ろその疑惑を斷ずべし。』世尊知り已りて卽ち【四】如其像如意足を作し、如其像如意足を作し已りて、「優多羅摩納をして我が身の陰馬の藏及び廣長舌を見せしめんと。」こゝに於て世尊卽ち如其像如意足を作し、如其像如意足を作し已りて優多羅摩納、世尊の身の陰馬の藏及び廣長舌を見ぬ。廣長舌は口より出でゝ舌盡くその面を覆ふ。優多羅摩納見已りて而もこの念を作しぬ、「沙門瞿曇、三十二大人の相を成就す。若し大人の相を成就すれば必ず二處有り、眞諦にして虛ならず。若し家に在れば必ず轉輪王と爲り聰明にして智慧あり、四種の軍有りて天下を整御し、已に由りて自在、如法の法王にして七寶を成就す。彼の七寶は輪寶・象寶・馬寶・珠寶・女寶・居士寶・主兵臣寶、これを謂ひて七と爲す。千子具足し顏貌端

【二】陰馬藏 (Kosohita-vattha)。佛の男根密藏して馬陰の如くなるをいふ。
【三】廣長舌(Pahūta-jivha)。舌薄輭にして廣く長し。
【四】「如其像」の意義は八卷「侍者經」註【一九】に釋したり。

至大海を統領し、刀杖を以てせず、法を以て教令して安隱を得せしむ。若し鬚髮を剃除し、袈裟衣を著け、至信に家を捨て、家無くして學道すれば、必ず如來・無所著・等正覺を得、名稱流布して十方に周聞すと。」梵志梵摩聞き已りて告げて曰く『優多羅、我聞くこと是の如し、「彼の沙門瞿曇なる釋種の子、釋の宗族を捨て、鬚髮を剃除し袈裟衣を著け、至信に家を捨て、家無くして學道し、鞞陀提國に遊び大比丘衆と倶なりと。」優多羅、彼の沙門瞿曇大名稱有りて十方に周聞す。彼の沙門瞿曇、如來・無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛衆祐と號し、彼この世・天及び魔・梵・沙門・梵志に於て人より天に至るまで自ら知り、自ら覺り、自ら作證し成就して遊ぶ。彼法を說きて初め妙、中ごろ妙、竟り亦妙にして義有り文有り、具足し清淨にして梵行を顯現す。また次に優多羅、彼の沙門瞿曇、三十二大人の相を成就す。若し大人の相を成就すれば必ず二處有り、眞諦にして虛ならず。若し家に在れば、必ず轉輪王と爲り聰明にして智慧あり、四種の軍有りて天下を整御し、已に由りて自在、如法の法王にして七寶を成就す。彼の七寶は輪寶・象寶・馬寶・珠寶・女寶・居士寶・主兵臣寶、これを謂ひて七と爲す。千子具足し顏貌端政にして勇猛無畏、能く他の衆を伏し、彼必ずこの一切の地乃至大海を統領し、刀杖を以てせず、法を以て教令し安隱を得せしむ。若し鬚髮を剃除し、袈裟衣を著け、至信に家を捨て、家無くして學道すれば、必ず如來・無所著・等正覺を得、名稱流布して十方に周聞す。優多羅、汝諸經を受持するや、三十二大人の相有り、若し大人の相を成就すれば必ず二處有り、眞諦にして虛ならず。若し家に在れば必ず轉輪王と爲り、聰明にして智慧あり、四種の軍有りて天下を整御し、已に由りて自在、如法の法王にして七寶を成就す。彼の七寶は輪寶・象寶・馬寶・女寶・居士寶・主兵臣寶、これを謂ひて七と爲す。千子具足し顏貌端政にして勇猛無畏、能く他の衆を伏す。彼必ずこの一切の地乃至大海を統領し、刀杖を以てせず、法を以て教令し安隱を得せしむ。若し鬚髮を剃除し袈裟衣を著け至信に家を捨て家無くして

梵志品（續き）

百六十一、梵摩經第十

我が聞きしこと是の如し。ある時[二]佛鞞陀提國に遊びたまひ、大比丘衆と倶なりき。その時[三]彌薩羅に梵志有り、名づけて[四]梵摩と曰ひ、極大富樂にして資財無量、畜牧産業稱計すべからず、封戸食邑種々具足し食豐にして[五]彌薩羅乃至水草木、謂く摩竭陀王未生怨鞞陀提子特に[六]梵封を與へしなり。梵志梵摩に[七]一摩納有り、[八]優多羅と名づけ、父母の擧ぐる所と爲り生を受くること清淨にして乃至七世の父母種族を絶たず、生々惡無く、博聞總持して[九]四典經を誦過し深く因縁・正文・戲・五句説に達しぬ。梵志梵摩聞きぬ、「沙門瞿曇なる釋種の子有り、釋の宗族を捨て鬚髮を剃除し袈裟衣を著け至信に家を捨て家無くして學道し、鞞陀提國に遊び大比丘衆と倶なり。彼の沙門瞿曇大名稱有りて十方に周聞す。彼の沙門瞿曇、[一〇]如來・無所著・等正覺・明行成爲・善逝・世間解・無上士・道法御・天人師にして佛衆祐と號し、彼この世・天及び魔・梵・沙門・梵志に於て、人より天に至るまで自ら知り自ら覺り、自ら作證し成就して遊ぶ。彼法を説きて初め妙、中ごろ妙、竟り亦妙にして義有り文有り、具足し清淨にして梵行を顯現すと。」また次に聞きぬ、「彼の沙門瞿曇[一一]三十二大人の相を成就す。若し大人の相を成就すれば、必ず二處有り、眞諦にして虛ならず。若し家に在れば必ず轉輪王と爲り聰明にして智慧[有り]、四種の軍有りて天下を整御し、己に由りて自在、如法の法王にして七寶を成就す。彼の七寶は輪寶・象寶・馬寶・珠寶・女寶・居士寶・主兵臣寶、これを謂ひて七と爲す。千子具足し顏貌端政にして勇猛無畏、能く他の衆を伏す。彼必ずこの一切の地乃

【一】M. 91, Brahmāyu-sutta「梵摩渝經」。
【二】鞞陀提國（Videha）。
【三】彌薩羅（Mithilā）。
【四】梵摩（渝）（Brahmāyu）。
【五】長阿含、「阿摩晝經」、「種德經」・「究羅檀頭經」にも王の婆羅門に梵封を與ふるの記事あり。一二卷「鞞婆陵耆經」參照。
【六】梵封（Brahma-deyya）、王が婆羅門に與へたる食邑。
【七】摩納（婆、縛）（Mānava）婆羅門青年、儒童。
【八】優多羅（Uttara）。
【九】四典經（Vedas）以下婆羅門の五典の事は一二卷「鞞婆陵耆經」に出づ。
【一〇】如來の十號は二卷「七日經」註（二六）以下に釋せり。
【一一】一一卷「三十二相經」を見よ。

を引例してこれを是認せられた。王は使人の復命を聞き、尙末利夫人の敎によつて遂に優婆塞にならんと誓つた。

（二一七）八城經　尊者阿難は大長者八城居士の爲に、如來は慧眼第一義を見て一法を說き聖弟子をして心解脫を得しむとて、(1)四禪を成就し(2)四無量心を成就し(3)四無色定を成就して法を觀じ漏盡を得、或は五分下結を斷じて來世に化生して般涅槃し不退法を得と說いた。居士はこの十二甘露門を受持し、尊者を供養した。

（二一八）阿那律陀經（上）　比丘たちは尊者阿那律陀に賢にして死する法を問うた。尊者は(1)四禪を成就し(2)六神通を證して現法に解脫することを以て答へた。

（二一九）阿那律陀經（下）　尊者阿那律陀は煩熱せずして命終るの法を說いて(1)見質直にして聖愛戒を得(2)四念處(3)四無量心(4)四無色定(5)慧觀もて漏盡を得るの五法を擧けた。

（二二〇）見經　尊者阿難は舊友の一異學の爲に、世の有常無常・有底無底・命卽身・命異身異乃至如來の終不終の問題は如來の通說したまはざる所、唯是の如く知るべきであると諭した。

（二二一）箭喩經　鬘童子は佛が世の有常無常有底無底乃至如來の終不終について決定してお說きにならぬのに慊らず、佛にこの不滿を訴へた。佛は出家學道の目的はこの見を知る爲でなく、この見を求むるは義と相應せず益する所無く唐じく煩苦を受けるのみとて、毒箭を受けながらそれを拔かず、而もその箭の由來を詮索して命を失ふ者に喩へ、尙四諦こそ如來の正道であると諭された。

（二二二）例經　無明・行・識・名色・六處・更樂・覺・愛・受・有・生・老死を斷じ解脫し乃至總知して別知するには(1)四念處(2)四正斷(3)四如意足(4)四禪(5)五根(6)五力(7)七覺支(8)八支聖道(9)十一切處(10)十無學法を修すべしとて各項を詳述す。

昭和六年三月廿五日

譯者　立花俊道　識

順(20)──(27)三覺の緣起・苦樂・無常・災患・使・對(28)無明の對(29)明の對である。

(二一一)**大拘絺羅經**　舍梨子・大拘絺羅二尊者の問答。(1)不善・不善根(2)善・善根(3)智慧(4)證(5)智・識別ならず(6)智慧の義・勝・功德(7)正見(8)正見の二因二緣(9)正見を攝する五支(10)當來有の生と(11)不生(12)三覺の緣起(13)覺想思別ならず(14)滅無對(15)意五根の依爲り(16)意は壽に依り(17)壽は暖に依り(18)壽暖別ならず(19)生身の三法(20)死と滅盡定の別(21)滅盡定と無想定の別(22)兩者より起つ時の別(23)滅盡定を起つ時の三觸(24)空・無願・無相(25)不移動定の四因四緣(26)無所有定の三因緣(27)無想定起生の二因緣(28)住止の二因緣(29)起つ時の三因緣についての問答を記す。

(二一二)**一切智經**　波斯匿王は佛の來遊を聞いて駕を整へて佛を訪ひ(1)一切智(2)四姓種の勝如(3)四姓種の後世の差別(4)その斷行の上の勝如(5)斷の勝如(6)天の存否(7)三十三天の有無(8)梵の有無等を問うた。佛はこれに對していろ／＼の方便を以て答へられた。その間に波斯匿王の太子鞞留羅大將と尊者阿難の問答があつて阿難は波斯匿王の稱讚する所となつた。

(二一三)**法莊嚴經**　波斯匿王は城外の園觀に詣り樹下寂靜を見て漫ろに佛を景慕し駕を命じて彌婁離に在す佛を訪れ、十一の法靖を說いて佛を讚仰して辭し去つた。王の辭去後佛は比丘たちを集めてこの話を語げ法莊嚴經と名づけて受持せよと訓誨なされた。

(二一四)**鞞訶提經**　尊者阿難は波斯匿王の爲に(1)如來は梵行者乃至世間の憎惡する身行を行ぜざることを說き(2)不善身行を說いて身行の患を擧げ、(3)如來は善身行を行ずる所以を詳述した。王は尊者が財寶等の布施を受けないことを知り、傳家・寶物鞞訶提衣を布施した。尊者は布施を受けて佛の所に往き一切を語げて佛の稱讚を得た。

(二一五)**第一得經**　(1)波斯匿王の境界中の勢力(2)諸天世界の造主大梵(3)晃昱天(4)四想(5)八除處を樂しむ者(6)十一切處を樂しむもの、皆これ變易の法なりと觀じて次第に上昇し、第六を觀ずるを以て第一清淨說なりと稱し無我・不有とその證の爲の道を第一外依見處と謂ひ、四無色定を成就するを第一現法涅槃と謂ひ、四斷の中樂欲を斷ずる者、及び飮酒睡眠この三法を捨離すれば滅盡處に至ると說く。

(二一六)**愛生經**　佛は愛兒を失つて愁慼懊惱、正心を失へる一梵志の爲に、愛生ずれば憂慼を生ずると說かれた。梵志は愛生ずる時喜心樂をこそ生ずれ、憂慼有るべからずとて佛の所を去り、市中の遊民にこれを語げたので風評流布して波斯匿王の耳に入つた。王は解せず、末利夫人の勸によつて那利鴦伽梵志をして佛に問はしめた。佛は愛兒を失へる母の發狂

求・非聖求を說き、更に佛が二十九歲出家より成道後五比丘の爲に中道を說き八正道を說いて敎化せられる迄の經歷をお說きになつた。

(二〇五)五下分結經　五下分結（欲・恚・身見・戒禁取見・疑）は捨の如眞を知らざるによつて熾盛となり、道跡によつて斷絕するを說き果實乃至栰の喩を以て五下分結を斷じて四禪を得(四)無色定に住し更に昇進して解脫を得るに至るを說く。

(二〇六)心穢經　比丘・比丘尼の必退法と淸淨法を說いて各〻十支を擧ぐ。(1)五穢(イ)世尊を疑ひ(ロ)法(ハ)戒(ニ)敎を疑ひ(ホ)諸梵行者世尊に稱譽せられるを責數す）(2)五縛（身欲に染著し、所說沙門の說と相應せず、衆會を樂しみ少所得に停住して昇進を求めず）を拔かず解かざれば必退の法、之を拔き解けば淸淨法である。淸淨法を成就し欲定・精進定・心定・思惟定・堪任の五法を修習すれば涅槃に趣に趣く。

(二〇七)箭毛經(上)　異學箭毛は佛に向つて不蘭迦葉その他の名德を難じて後に沙門瞿曇は(1)麁衣(2)麁食(3)少食(4)麁住止床座(5)燕坐の五法によつて弟子達の恭敬奉事を受けるといふに對して、佛はその正しい見方でないことを指摘し、更に五法を說いて弟子たちが佛を離れない理由であるとなされた。(1)無上戒(2)無上智慧(3)無上知見(4)厭愛箭(5)宿命智通・漏盡智通作證。

(二〇八)箭毛經(下)　佛は異學箭毛の爲に佛弟子は無量の過去を憶念し天眼もて衆生の死時生時を知見すると說き、箭毛が實に知らずして最勝最上の色を說くのをいろ〳〵の喩を以て論駁され、又箭毛が後世一向樂を說き一道跡によつてそれを實現するとなすの妄見を指摘して、現世の一向樂世證を說き、四禪を成就するを最上最妙の作證となされた。

(二〇九)鞞摩那修經　佛は異學鞞摩那修自ら知らざる最勝色を說くを訶し五欲の功德に自ら意樂する所を執して最上最勝を願求せざるの非を戒しめられた。異學は却つて佛を憎んで世の前際後際も知らずに究竟智を得ると記說すると誣謗した。佛は世の前際後際はおろか、一生も憶せざれ、質直に我に從ふ者こそ正法を知ると說かれた。異學遂に法眼を生じ佛に從つて出家學道した。

(二一〇)法樂比丘尼經　法樂比丘尼は毘舍佉優婆夷の問に應じて如法に答へて佛の稱譽を得た。(1)自身(2)自身見(3)無身見(4)滅身見(5)陰卽盛陰・陰非盛陰(6)八支聖道(7)その有爲(8)三聚及び(9)それと八支聖道との關係(10)滅無對(11)初禪の五支(12)定及びその相・力・功・修(13)生身の三法(14)死と滅盡定(15)滅盡定と無想定(16)この二無心定を起つ者の差(17)滅盡定に入るの念及び(18)起つの念無く(19)この定を起ちての樂趣・

た。童子は之を可とせずして去つた。沙彌はこのことを佛に申し上げると、佛は欲に縛られた者はこの義を知らぬとて調象の法に喩へて如來が四念處を以て衆生を調御し乃至四禪を得一切の疾苦逼迫に堪耐するに至るをお說きになつた。

(一九九)**癡慧地經**　愚癡の法と智慧の法を說く。(I)愚癡の法、惡思・惡說・惡作有るもの、現世には(イ)惡名(ロ)苦治の畏怖(ハ)惡行による臨終の憶念恐怖の三憂苦を受け、後世には地獄の苦(十一の喩を說く)畜生の苦(五種)を受け、人間に生ずるの至難なること盲龜浮木の喩の如し。(II)智慧の法、善思・善說・善作有るもの、現世に三種の喜樂(イ)十善道による稱譽(ロ)苦治の恐怖無き喜樂(ハ)妙行による臨終の歡喜を受け、後世は善處の樂を受くとて轉輪王の七寶に喩へてこれを說き六更樂有りとなす。

(二〇〇)**阿梨吒經**　阿梨吒比丘は佛が欲は障礙有りて骨鎖・肉臠・把炬・火坑・毒蛇・夢・假借・樹果の如しと說かれたのを曲解して欲を生ずれば障礙無しとの邪見を起した。佛は蛇喩法・筏喩法を說いて顚倒の見を捨てよと諭され更に(イ)六見處を說き(ロ)因內恐怖・因內無恐怖・因外恐怖・因外無恐怖を說き(ハ)更に六見處を說き、神見を斷じて乃至正解脫を得る次第を說かれた。

(二〇一)**嗏帝經**　嗏帝比丘は識が輪迴するとの邪見を起した。佛は(1)識は六根六境に緣つて生ずる緣起の法であるとし、(2)栰の喩を以て如來の眞說と雖も執著するの非を諭し、(3)四食の緣起及び滅を說いて所謂十二因緣法を明し、これを正見して沙門道を得ると說かれた。

晡利多品第五

(二〇二)**持齋經**　毘舍佉たちの齋戒を行ずるに因んで佛は三種の齋を說かれた。(1)放牛兒齋(食に樂著す)(2)尼乾齋(遠方の衆生の爲に刀杖を棄捨し乃至父母等一切無しと說く)(3)聖八支齋(殺・不與取・非梵行・妄言・飮酒・大床・華鬘等・非時食を離るゝことにて最勝正解脫の道なり。)更に五法を行ずべきを說く。(1)如來(2)法(3)衆(4)自戒(5)諸天を憶念して自ら齊しからんと念ずるのである。

(二〇三)**晡利多經**　晡利多居士は一切の財物を後嗣に與へ無求無爲乞食の生活をすることを以て俗事を離れた沙門梵志であると自稱した。佛は八支の俗を斷ずる法のあることをお說きになり、(1)殺(2)不與取(3)邪婬(4)妄言(5)貪著(6)害恚(7)憎嫉惱(8)增上慢を離れることを擧げてこれを詳述され、更に八支斷俗事を說いて欲は(1)骨鎖(2)肉臠(3)火炬(4)火坑(5)毒蛇(6)夢(7)假借(8)樹果の如しと觀じて遂に解脫を得べしとお說きになると、居士は法眼を得て優婆塞となつた。

(二〇四)**羅摩經**　佛は比丘たちの爲に聖

度して四無色定を成就し更に一結を斷ずることであるとお說きになつた。

(一九三)牟犁破群那經　牟犁破群那比丘は常に比丘尼と集會し、他の比丘が比丘尼のことをいふと瞋恚して鬪諍をなし、比丘尼また同樣であつた。佛は破群那を教訶して出家學道の修行事をお說きになつた。(1)坐食を學し(2)善語恭順を學し(3)互言道を學して四無量心を成就し(5)捶打石擲刀害を受けて而も堪耐して惡語言せざるを學すべしと。

(一九四)跋陀和利經　跋陀和利比丘は佛の說かれる一坐食戒に堪へ得ないと訴へ、他の比丘等が皆佛戒を奉行するのに獨り衆を離れ一夏の間佛を見ず、三月を過ぎて佛の許に詣り過を悔いた。佛は一度は面訶されたが遂に悔を納れられ、具戒有れば四增上心・三明達を得るとてこれを解說された。跋陀和利は同じく比丘の犯戒を或は苦治し或は苦治せざる所以を問うた。佛は爲に四種の比丘を說き、更に跋陀和利の問に答へて昔は少しの戒を設けて而も比丘よく遵奉したが、反之、今日多くの戒を設けて而も比丘遵奉するもの少き所以を明し、最後に馬喩の法を以て十無學法をお說きになつた。

(一九五)阿濕具經　佛は一食戒を設けられたが阿濕具・弗那婆修は四食をとつて安隱快樂に耽つた。佛は二比丘を呼んで教訶して下の如く法を說かれた。(1)樂覺苦覺共に善法を增して不善法を減ずるものと、不善法增して善法減ずるものとがある。前者は修すべく後者は斷ずべし。故に一切の身の苦樂心の苦樂を修せよ、或は斷ぜよとは說かず。(2)俱解脫・慧解脫の比丘は無放逸を行ぜず。(3)身證・見到・信解脫・法行・信行有る比丘は無放逸を行ずとてその各項を詳說し(4)漸々に習學して究竟智を得る次第を明し、(5)兩比丘の佛に違逆するを訶し有信の弟子の得果を說く。

(一九六)　那經　尼乾親子の死後弟子等鬪諍を事として白衣の忌憚を受けた。周那は之を尊者阿難に告げ、二人共に往つて佛に向ひ、佛の滅後比丘衆の間にもこの諍有らんかと申し上げた。佛は比丘間の鬪諍は多く道及び道跡に囚るとてその所以を說き六諍本を擧げて之を絕斷すべしとし更に七止諍法を說き六慰勞法を說いて水乳和合の法となされた。

(一九七)優婆離經　佛は尊者優婆離の爲に、比丘衆が犯戒の比丘を治すべき十五法を說き、所作業に隨つてその適用を誤らざることを戒しめられた。(1)作異業說異業(2)面前律(3)憶律(4)不癡律(5)自發露律(6)君律(7)責數(8)下置(9)擧(10)擯(11)憶(12)根本治(13)驅出(14)不慢(15)治。

(一九八)調御地經　沙彌阿夷那和提は王子耆婆先那の求によつて比丘が正法律中に不放逸精勤を行じて一心を得るを說い

穢を斷じて漏盡を得るに至るまでを詳述された。

(一八八)阿夷那經　佛は異學阿夷那に因み智慧について二衆を略說されたが比丘たちはその義を解せなかつた。尊者阿難は爲にこれを廣說して佛の稱讃を受けた。(1)法衆、法を行じ法を說く人、法を行じ法を說く衆の前にあつて所知を說き自ら智慧有りと說く。(2)非法衆、非法の人非法の衆の前にあつて自ら智慧有りと稱す。邪見等の十邪道は非法、正見等の十正道は是法、非法によつて惡不善の法を生ずるは非義、是法によつて善法を生ずるは義と說く。

(一八九)聖道經　衆生の憂苦懊惱を滅する一道として聖正定を說き、正定に正見乃至正方便の七支の助法を擧げて各支を解說し正見を先行とする所以を明し、有學は八支を成就し無學の阿羅漢は正解脫正智を加へた十支を成就すると說く。十邪支及びこれに依因する不善の法、これを二十不善品といひ、十正支及びこれに依因する善、これを二十善法、合して四十大法品、若し正知せずして邪解すれば十詰責を受く。

(一九〇)小空經　空を行ずるを說く。(1)村想(村といふ考)人想(人といふ考)を空じて煩はされず、唯一無事想(森林に過ぎずとの考)を念じ(2)一無事を空じ地想(地の高下等を念ぜず、唯これ平正なりとの念)を念じ(3)無量空處想(4)無量識處想(5)無所有處想(6)無想心定と次第に空じ次第に念じて停住せず遂に無想心定を捨てゝ現法に解脫し肉身を存するのみ、所謂三漏を空じて顚倒せず無爲心解脫を得るは諸佛如來の勝跡である。

(一九一)大空經　佛は嘩說を戒しめ遠離を稱說なされた。衆を樂ふ者は正覺の樂心解脫を得ず、遠離を樂ふ者はこれを得それば色の變易の法たり、憂苦の本たるを知り一切の色想を度り外空を行ずるからである。空を行ずるに五法あり、これを成就して不放逸を得る。有信の弟子佛に隨ふは聖論を得る爲であつて、煩師煩弟子煩梵行の比でないとて、煩師煩弟子煩梵行を詳說す。

大品第二

(一九二)加樓烏陀夷經　尊者烏陀夷は佛が(1)過中食(2)夜食(3)夜食を辨じて朝・中の爲にすること(4)非時行乞を斷ぜよとお說きになつても比丘たちが小事なりとて樂しまざるも、世尊を敬重する爲にこれを斷じて世の誹謗を免れしことを申し上げた。佛は烏陀夷の爲に癡人は佛の教を奉行せずして繫縛を生じ有信の族姓子は奉行して縛を斷ずることを譬を以て說かれ、尙ほ捨を行ずるも欲想應の念有れば解脫を得ずと諭し凡夫の樂と聖者の樂を說いて前者は五欲による樂、後者は惡不善の法を離れ乃至第四禪を得更に移動過

知るべきである。

（一八三）馬邑經（下）　沙門梵志の法として沙門の道跡を說く。貪・恚・瞋・不語・結慳・誑諂・無慚・無愧・惡欲・邪見有るものを息めなければ假令如法に僧伽梨衣を持ち或は無衣乃至持水の苦行を行ずるも沙門といはれぬ。貪乃至邪見を息滅すればこれ沙門の道跡といふ。五蓋・心穢を斷じ四無量心を修して解脫すること四姓の族姓子の出家する者齊しく行じて得る所である。

（一八四）牛角娑羅林經（上）　尊者舍梨子は大目揵連・大迦葉・大迦旃延・阿那律陀・離越哆・阿難などの上尊比丘の訪問を受け、時の依住地牛角娑羅林は景色勝れて愛樂すべき所であるが、これはどんな比丘によつて美しく見えるかと問うた。上尊比丘たちは各自ら修する行を以て推定した。それから佛の所に往つて判定を請うと、佛は皆自ら實際行じて說く所、亦佛の教に違はぬとて印可を與へられ、更に佛の見解をお說きになつた。

（一八五）牛角娑羅林經（下）　佛は那摩提に遊行の序で城外の牛角娑羅林にあつて和合精進して怠らざる阿那律陀・難陀・金毘羅の三尊者を訪れ安隱にして乏しき所無きやとお問ひになつた。三尊者は交交答へて(1)身口意の慈業を行じ己心を捨てゝ同行尊者たちの心に隨從して少しの不可なく(2)心を一にし師を一にして四禪を成就し(3)四無量心に住し(4)四無色處を成就し(5)六通を得、現法に解脫を得て人上の法を得て居るから安隱であると申上げた　佛が去られてから三尊者は互に稱歎しつゝ修行についた。諸天亦傳へ聞きて佛及び三尊者を讃仰した。

（一八六）求解經　意に緣つて他の心の如眞を知ることの出來ない場合には眼と耳とに識知せられる法によつて如來を求め知解すべきことを說く。若しその尊者に眼耳に知られる(1)穢汚法(2)雜法無く(3)白淨法(4)長夜行(5)高名有り(6)災患無きを知り、(7)他人についてその尊者が修行を樂しんで恐怖せず、欲を離れ欲を盡くすと聞きその人について如來の法を聞いて、その尊者の正覺者であることを知り、如來を求めて知解することが出來る。

雙品第一

（一八七）說智經　佛は比丘たちに漏盡を得たと自稱する比丘がある時はよくその說を受け奉行し、その上に(1)如來所說の五盛陰(2)四食（摶食・更樂・意念・識）(3)四說（見見・聞聞・識識・知知）(4)內六處(5)六界について知見を問ひ、(6)內識外相の上の一切の我・我所・慢使を斷除する方法を問ふべきことを教へ、實に漏盡の比丘ならばこの様に答へるであらうとて、(1)五盛陰は無常變易の法であると知つて染著を離れて漏盡を得る次第から(6)發心出家し禁戒を修め十惡業を斷じ乃至五蓋・心

苦と憂とを感じつゝ十善を行ひ、(三)は苦憂を感じつゝ十惡を犯し、(四)は樂喜を感じつゝ十善を行ふものである。

(一七六)行禪經　行禪者の四種は(一)熾盛にして衰退すと謂ひ、(二)衰退して熾盛なりと、(三)衰退して衰退すと、(四)熾盛にして熾盛なりと謂ふをいふ。(一)は四禪八定を修する上に自ら昇進せるを退墮すと知り、(二)退墮せるを昇進すと、(三)退墮して退墮すと、而して(四)昇進して昇進すと知るをいふ。

(一七七)說經　四禪八定を修する上に(一)退墮すると、(二)久しく住すると、(三)昇進すると、(四)無欲にして厭うとの四種あり。

(一七八)獵師經　獵師の餌を蒔くは以て鹿を捕へんがためである。第一群の鹿これを食ひて捕へられ、第二第三群は知りて警戒せしが飢餓に堪へ得ずして亦捕はれた。第四群は遂に捕へられなかつた。こゝに餌は五欲の喩、獵師は魔王、鹿は沙門梵志の喩である。第一乃至第三の沙門梵志は信施を受用して放逸なりしため魔王の虜となつたが、第四の沙門梵志は魔王の至らざる所に脫れた。魔王不至之處とは四禪・四無量心・四無色定・滅盡定である。

(一七九)五支物主經　外道の沙門文祁子は佛弟子五支に語りて(一)身惡業を行はず、(二)口惡言せず、(三)邪命を行はず、(四)惡念せざるを第一善の無上士、質直の沙門といふといつた。佛これを聞きてこは嬰兒も能くすることなりといはれ、更に五支のために(一)不善戒、(二)善戒、(三)不善念、(四)善念の何なりや、何より生ずるや、何處に滅し敗壞し、如何に行滅するに至るやを說かれた。

(一八〇)瞿曇彌經　瞿曇彌夫人袈裟を縫うて佛に獻ぜんとしたが、初めは受けられなかつた。阿難尊者夫人の佛を多く益せしことを申すと、佛は亦自ら夫人を益せしことの多きを語られ、袈裟を受け、これに因みて七施衆・十四私施・四種の布施の淨不淨を說かれた。

(一八一)多界經　佛阿難のために恐怖・遭事・災患・憂慼は愚者に起りて賢者に起らざることを說かれると、阿難は悲泣して賢者愚者の別を問うた。佛は(一)界、(二)處、(三)緣起、(四)是處非處を知れるは賢者にして知らざるは愚者なりと敎へられ、更に細目に亘つて說き示された。

雙品第四

(一八二)馬邑經(上)　沙門が沙門と自稱するには沙門の法、梵志の法の如くなるを學ばねばならぬとて沙門梵志の法を說く。(1)身行淸淨なるも自ら滿足せずして次第に上學を求め(2)口行淸淨(3)意行淸淨(4)命行淸淨を成就し(5)諸根を守護し(6)出入・行住坐臥を正知し(7)獨住遠離して五蓋・心穢を除き四禪を成就し乃至解脫を

と中道といふものがある。眼を成じ智を成じ自在に定を成じ、智覺涅槃に趣かしむるものである。齊しきに決定しその決定を知つて內心の樂を求むべきである。互に蔭口を利いてはならぬ、面前で稱めてはならぬ。齊限して說かねばならぬ。國の俗法に隨つて行つて漫りに是非してはならぬ。といふ意味を布說したものである。

（一七〇）鸚鵡經　都提の子鸚鵡の狗は大床上に居たが佛を見るや床を下つて吠えた。佛はこの狗は前世に鸚鵡の父なりしことを發き、その證據をも擧げられた。初め憍慢なりし鸚鵡は屈して佛に敎を請ひ何故に人間に高下妙不妙の別あるやを問うた。佛は人に壽命の長短、健康多病、美醜、威德・財產・智慧の多少、家に貴賤の別ある所以を說明された。

（一七一）分別大業經　一外道尊者三彌提に向つて、佛の旨として三業の中身口の二は虛、唯意のみ眞である、一種の定ありこれに入れば知覺を失ふといへば、三彌提はこれを否認して、こは佛言に非ずといふ。尊者大周那は話を漏れ聞きてこれを阿難に傳へ、周那と阿難とは共に佛所に往きて敎を請ける。佛は故作業の樂・苦・不苦不樂の果を感ずべきものは一一異れる果を感ずることを說かれ、十惡を離れず死して天界に生れるあり地獄に生れるあり、十惡を離れ死して地獄と天界とに生れるものがある。これを見て或沙門梵志は正しき應報を否認するが、これには複雜なる因緣あり皮相の關係說のみを以て律すべきに非ざることを說く。

心品第三

（一七二）心經　一比丘のために、世間は何物に牽かれ、惱まされ、追隨するや、多聞にして法を受持するもの、學問あり洞察智あるもの、博識にして大智あるものは誰なりやを說く。

（一七三）浮彌經　尊者浮彌者婆先那童子のため、人の願あり、願なき、願あり願なき、願あるに非ず願なきに非ずして梵行を修するも、若し修すること正しからざれば、その果を得る能はざることを說く。尊者後これを佛に申せしに佛は彼のため四種の喩を說きて、それを補足された。

（一七四）受法經（上）　現世樂にして未來苦なる、現世苦にして未來樂なる、現未共に苦なると樂なると、この四種の因果の關係ある場合を說き示された。

（一七五）受法經（下）　世間の癡法では喜愛可の法の生ぜんことを望み樂ふに拘らず、不喜愛不可の法生ず、佛の不癡法は難見難覺であるが、こゝには喜愛可の法が生ずる。世には（一）現在樂未來苦、（二）現在苦未來樂、（三）現未共に苦、（四）現未共に樂と、この四受法がある。（一）は樂と喜とを感じつゝ十惡を犯し、（二）は

利は法淨眼を開き得、それまで佛を君と呼びたることを謝した。

（一六三）分別六處經　眼耳鼻舌身意の六內處、眼耳鼻舌身意の六更樂卽ち六觸、色聲香味觸法一一の喜住・憂住・捨住といふ十八意行、これ等六喜・六憂・六捨の著に依るものと無欲に依るものとにて三十六力（＝有情の足跡）を說き、更に彼（著に依るもの）を斷じ此（無欲に依るもの）を成就すべきこと、佛に無量の說法あるが、當にこれを知るべきこと、三意止（＝三念住）は聖人の修習する所であり、修習して衆を教ふる所であるが、それと、最後に無上調御士は士を調御して一切方に趣かしむることとを說かれた。

（一六四）分別觀法經　世尊曾て比丘等のために初中後善、文義具足、梵行顯現の法、分別觀法經といふものを說かれた。それは心識若し外に出でゝ散亂し廣布し、內に住立してあらざれば、執著することなくして怖れざるものには、生老病苦の生起を見るが、反之心識外に出でず散亂廣布せず、內に住立してあれば執著するなくして怖るゝものには未來に生老病苦の生起することがないといふのであつた。比丘等はこの佛の略說の意を解せず、尊者大迦旃延の委說によりて漸くこれを解し得た。

（一六五）溫泉林天經　三彌提比丘が溫泉に一浴して身體を乾かしてると、一天子現はれ跋地羅帝偈を知るや、知らずば佛に問へといつた。これを問うと佛は「過去を念ずるな、未來を願ふな、唯現在にのみ思を致せ、不變不動のものを知りてこれを追へ、吾等死と戰うて克つことなき故明日は死なぬとも限らぬ、されば今日勤苦せよ、斯く勤苦するものを跋地羅帝とはいふ」といふ偈を說かれた。佛のこの略說を尊者大迦旃延は根境識相對の上に委說したのがこれである。

（一六六）釋中禪室尊經　これも跋地羅帝偈の說明で、この同じ略說の偈をば、今度は佛自ら色覺想行識の五蘊の上に就いて委說されたものである。

（一六七）阿難說經　これも同じ偈の話であるが、これは尊者阿難が比丘等のためにやはり五蘊に就て委說したのを佛が聞いて是認されたのである。

（一六八）意行經　比丘この世にありて四禪八定を修すれば、彼は其處に憧れることによりてそれ〴〵色界無色界に生れ出る。彼が修定中に受ける樂と生天後其處で受ける樂とは等しくして差別がない。彼は次第に上生して最後に無漏解脫を得る。これがこの意行といふものである。

（一六九）拘樓瘦無諍經　欲樂の極々下賤なる業で、凡夫の行たるものを求めてはならぬ、自身の苦行の至つて苦しく聖者の行に非ず義と相應せざるものを求めてはならぬ。この二邊卽ち兩極端を離れる

答へて、無病は第一の利、涅槃は第一の樂、諸道は八正道にして安隱甘露に住すると說き、無病涅槃は聖慧眼淨、聖慧眼淨は四種の法によつて得らると教へ、苦・苦の習・滅・道の如眞を知ることに依つて法眼自ら生ずと結ばる。

（一五四）婆羅婆堂經　世尊婆私吒及び婆羅婆の二學者に身の淸淨穢垢は種姓に依らずして其の行による事を教へ更に四種姓及び沙門の起原を說かる。

（一五五）須達哆經　世尊須達哆居士のために大施の功德十一を說かれる。

（一五六）梵波羅延經　世尊一梵志の所問に答へて、今の梵志は故の梵志の法を學ぶ者なく、梵志久しく已に故の梵志法を越ゆと說き更に其の然る由來を偈によつて述べらる。

（一五七）黃蘆園經　世尊鞞蘭若梵志年耆宿老のために四禪・憶宿智通・生死智通・漏盡智通及び不癡結を說かる。

（一五八）頭那經　世尊頭那梵志に梵志猶如レ天。梵志似ニ如天一。梵志不レ越レ界。梵志越レ界。梵志旃荼羅を詳說し梵志を化せらる。

（一五九）阿伽羅訶那經　阿伽羅訶那、世尊に經典・人・稻麥・地・水・火・風・空・日・月・四天王・三十三天・焰摩天・兜瑟哆天・化樂天・他化樂天・梵天・忍辱溫良・涅槃の所依を問ふに世尊涅槃に所依なきを示さる。

（一六〇）阿蘭那經　世尊比丘講堂に集會して「人命短少要らず後世に到るが故に應に善事をなし、梵行を行ずべきである。然るに今、法行・義行・善行・妙行に於て無爲にして求むる所なし」と談ずるを讃歎して過去世の物語をなし脫苦の道を說かる。

（一六一）梵摩經　彌薩羅國に梵摩といふ梵志があつた。生れもよく博學であり、巨萬の富を積み長壽で、人の尊敬を受けてゐた。或時世尊の三十二相具足の眞僞をその子の優多羅に調べさせた。優多羅は世尊の許に至つて三十相までは見得たけれども殘りの二相を疑つた。そこで世尊は陰馬藏と廣長舌の二相を示された。優多羅は梵摩の許に歸ると世尊の三十二相具足及びその行狀について詳しく報告し、更に自らは世尊に就いて學道せんことを乞うた。梵摩許す。後に梵摩自らも亦世尊に歸依して梵行を勵み、世尊から阿那含を得るに至らんとの記莂を受くるに至つた。

根本分別品第二

（一六二）分別六界經　佛の弟子と自稱しながら未だ佛を見たることなき弗迦邏娑利のために、佛は地水火風空識の六界聚、眼耳鼻舌身意の六觸處、六喜觀・六憂觀・六捨觀の十八意行、眞諦・慧・施・息の四住處を說き、その慧を放逸にせず、眞諦を守護し、惠施を長養し、至寂（＝息）を學ぶべきことを說かれた。於是乎弗迦邏娑

親近・遠離・燕坐・知足・正念・精勤・觀興衰法・無漏・解脫の十法を所依とすべきこと、及び世尊の四伺の稱說、三種解脫無差別のことを談ず。

（一四六）象跡喩經　卑盧異學生聞梵志の問に四句分別を以て答へて世尊所說の法は善にして而も大なること婆惒毘象の跡の如しと言ひ、更に出家後は禁戒を受持し知足を行じ、諸根を守護し、正知正念に住し、遠離獨住禪觀し、四禪を習修せば遂に無漏淸淨に到るであらうと敎ふ。

（一四七）聞德經　生聞梵志世尊に在家出家博聞し誦習する所以を問ふに、自ら調御し、自ら息止する爲であると答へ、更に其の功德を十四種を擧げらる。

（一四八）何苦經　世尊生聞梵志の所問に答へて、在家者は不自在を以て苦となし、自在を以て樂となすが出家者は自在を以て苦となし、不自在を樂となすと云ひ、人天諍へば利義なく、惡非法を行ずれば饒益を得ず、身口意に非法を行じ、惡を行ずれば當に減損すべしと說き、更に善惡知識を月の盈虧に比す。

（一四九）何欲經　世尊生聞梵志に對して刹利居士・婦人・偸劫・梵志及び沙門の所欲を答へ、中に就て沙門は眞諦を得んと欲し、智慧を行じ、立つ所、戒を以てし無事處に依り、涅槃を以て訖りとなすと說かる。

（一五〇）鬱瘦歌邏經　鬱瘦歌邏梵志世尊に四奉事の方法を問はれ信・戒・博聞・庶幾・智慧を增益すれば奉事となし得と答へ、更に梵志四種姓の爲に乞求・弓箭・田作・麻の自有財物を施設すと說く。尙梵志一切の人皆能く若干種の木を用ひて火母となし、鑽を以てこれを鑽り、火を生じて長養するが如く、我自ら善く解し、善く諸法を知り、人の爲に息止法・滅訖法・覺道法・善趣法を施設し、自有財物を施設すと言ふや、世尊我が得る所の火、得る所の不放逸能く放逸及び貢高・慢を滅すと說かる。

（一五一）阿攝惒經　阿攝惒邏延多那、梵志は梵天の子でその口から生れたものであるが餘者は然らずと高言するや世尊その非を難じ、種族の如何を問はず、正しく趣けば善く解し自ら如法を知り得ると敎へ、この理を解し易からしむべく洗浴・父母合會・出生の譬を藉りて說かる。

（一五二）鸚鵡經　世尊鸚鵡摩納都題子の所問に答へて、家に在ると在らざるとに論なく、正行を行ずれば能く解し、如法を知り得ると說き、正邪二行の各例を擧げらる。鸚鵡梵志、眞諦・熱行・誦習・苦行・梵行の五法によつて大果報功德を得ると說けども却つて世尊に破られて瞋恚を抱いたので世尊欲・恚・身見・戒取・疑の五法皆心より起るとなし、梵天・梵道跡に歸する摩納の見を說破せらる。

（一五三）鬚閑提經　世尊鬚閑提の所問に

四種善親を示し、最後に聖法律中の六方禮を述べられる。

（一三六）商人求財經　世尊の正法律を信じない者の害を蒙ること猶閻浮洲中の商人羅刹の爲に食はるるが如く、世尊の正法律を信ずるものの安穩に度り得ること恰も商人駈馬王に乘るが如しと說く。而して世尊の正法律とは六根・六境・五陰・六大等これ我に非ずと觀ずるにある。

（一三七）世間經　世尊自ら世間の習を斷じ、證世間滅を作し、世間道跡を修せらる。若し一切正しきあれば世尊の知見覺得が存する。蓋し世尊の言說せられたものは眞諦にして虛ならず、如を離れず、亦顚倒に非ず、實を審にするからである。故に是を如來の師子吼といふ。

（一三八）福經　福報は妙善にして饒益すること多しと說ける世尊は往昔長夜福をなし、その報を受けた本生譚をなし給ふ。七年慈心を修し、七反の成敗劫にこの世に來還せず、世間敗壞の時晃昱天に生じ、世間轉成の時梵天中に生じ、梵にあつては大梵となり、千返自在天に生じ、三十六返釋となり、無量百返頂生王となつたと說き、更に布施・調御・守護の三業の果にして三業の報が存すると結ばる。

（一三九）息止道經　年少比丘始めて戒を成就するには數々息止道に於て、骨相・靑相・腐相・食相・骨鏁相を觀ぜよと說く。

（一四〇）至邊經　愚癡にして欲樂を失ひ、又沙門の義を失ひ、倶に二邊を忘失すること猶燒ける殘火の燼の如く、又無事處に燒人の殘火の燼の如しと說く。

（一四一）喩經　無量の善法を得るには一切不放逸を以て本と爲し、習となし、是によつて生じ、是を主となすと說く。而して不放逸は此世他世を利し、勇猛にして諸義を觀じ、慧者は必らず解脫すと云ひ、是を諸物に於て主なるものに比す。

梵志品第二

（一四二）雨勢經　鞞陀提子未生怨跋耆國を打たんとして使を遣はし世尊の意見を聞くに七不衰法を說かれて到底勝ち得ざるを悟る。世尊これに因んで更に比丘の七不衰法各七と、六慰勞法を說かる。

（一四三）傷歌邏經　世尊傷歌邏に如意足示現・占念示現・教訓示現の三示現を說き、就中如意足示現を最上・最妙・最勝なりとせらる。

（一四四）算數目揵連經　世尊算數梵志目揵連に三業を護り、四念處を觀じ、六根門を護り、貪伺・憂戚・惡不善法を生ぜず、常に正知正念を持して遠離獨住禪觀し、五蓋・心穢・慧羸を斷じ究竟して漏盡智を得よと教へ更に教に從ふものは遂に究竟涅槃に至り諸人中第一者たり得んと結ばる。

（一四五）瞿默目揵連經　瞿默目揵連及び大臣雨勢の問に阿難答へて佛滅後は佛に等しき者がないから持戒・博聞・善知識

ち怨家をして好色・安眠・大利・朋友・稱譽・大富・生天の事なからしめる諸項をあぐ。

(一三〇)教曇彌經　曇彌凶暴急弊極めて麁惡なる爲に生地の優婆塞に驅逐せられ佛所に來詣して所汚・所說・所犯なきに彼等の驅逐に會ふは甚だ寃しと訴ふ。世尊玆に於て彼が本生譚を持ち來つて沙門の法を示されたので彼啼泣してこの法に住せんことを誓ふ。

(一三一)降魔經　魔王細形を化作して目犍連の腹中に入れるを彼定に入つて觀破したので口より出て前に坐す。目犍連乃ち本生話を持ち來つて彼に告ぐるや彼心悸き恐怖して彼の所說を奉行した。

(一三二)賴吒恕羅經　世尊遊行中賴吒恕羅居士の子佛法に感激し父母に出家の許しを請うたが聽されないので飲食を絶つて地に伏して立たなかつた。遂に出家を許されて精進努力阿羅漢となり、約束に從ひ父母の所に還つて乞食した。此處に於て父母金錢・妻女によつて戒を破らしめんとしたが却つて說法せられるに到つた。更に拘牢婆王に此世無護無可依恃、此世一切趣向老法、此世無常要當捨去、此世無滿無有厭足の四事を說く。

(一三三)優婆離經　世尊遊行中長苦行尼揵彷徉して佛所に到り、佛の所問に從つて身口意の三罰中身罰を最重とすると答へたが世尊は意業の重んずべきを說かる。尼揵子是を聞き優婆離居士を遣はして世尊を化せしめんとしたが却つて化せられ優婆塞となる。次で施論・戒論・生天論・心論・四諦論の說法を聽き尼揵子への入門を拒んだので彼その歸佛せるを知り、大いに憤り世尊の教化を幻呪の法と罵り、遂に熱血を吐き、惡患に罹つて命終したといふ。

(一三四)釋問經　天王釋・三十三天・五結樂子佛所に詣で天王釋先づ疑惑の事を問ふに世尊結に對して慳・嫉の二あることを答へ、その原因が愛・不愛及び欲・念・思に存するを示し、かくして純大苦陰の生ずる所以を示さる。而して滅戯道跡を八支正道となし、それに趣向するには念・言・求の三法を斷じ、更に六法を行じ、命存する一時の頃、喜・憂・捨の三法を除くにありと示さる。倘天王釋の所問に答へて世尊沙門・梵志無上愛に於て善く心解脫すれば究竟に到り、梵行を究竟すと說かるるや彼初めて疑惑の刺が拔かれたといつて歡喜す。彼更に釋の名、阿修羅との戰に關して說き、遂に見法を得、白淨法を覺り、已に果證を得たといふ。

(一三五)善生經　善生居士の父臨終の時子に遺勅して東南西北上下六方を恭敬・供養・禮事すべしと教へた。世尊その言を聞いて、殺生・不與取・邪婬・妄言の四業及びその原因たる欲・恚・怖・癡の四事を說き、更に六非道・六災患・四不親而似親・

（一一八）龍象經　波斯匿王の念と名づくる大龍王東河を歴度するを見て烏陀夷是を誰となすやと世尊に問ひしに、世尊身口意を以て害し得ざる我を龍といふと答へらる。

（一一九）說處說　先づ過現未の三說處ありと說き、一心聞法の者は正定を得遂に心解脫に達すと述ぶ。更にその所說に依つて四處卽ち一向論・分別論・結論・止論に對して相應に答へる者、及び處非處・所知・說喩・通跡に住する者は共に論じ得べきも然らざるものは共に論じ得ずといふ。又說義・說事に要する諸條件を擧ぐ。

（一二〇）說無常經　五蘊の無常・苦・非神の觀をなし七道品を修習し正思・正念なれば遂に心解脫を得。これ世中の最尊阿羅訶であると說く。

（一二一）請請經　十五請日世尊我身は最後邊にして無上の醫王であり、汝等は我が眞子なりと說き更に舍利子の聰明無比にして法輪彼に依つて能く轉ずと賞歎せらる。而して舍利子解脫者の數を問ふに五百比丘中九十は三明達、更に九十は俱解脫、餘は慧解脫を得んと答へらる。

（一二二）瞻波經　世尊十五日瞻波に於て從解脫を說かるる豫定であつたが衆中に不淨の者が居たので欲明に向はんとするのに說かれなかつた。目犍連如其像定に入り他心智を以てその不淨比丘を觀破し是を會外に擯棄した。世尊玆に於て頌を以て清淨は清淨と共に常に和合すべきことを說かる。

（一二三）沙門二十億經　二十億比丘宴坐しつつ心解脫し得ざる白心を觀じ、戒道を捨てて、家に歸り、布施して福業を行じようと考へた。世尊他心智に依つてそれを觀破し、琴の譬喩を以て極端なる精進不精進を排し、能く時を分別し、この相を觀察し、不放逸であれと諭さる。乃ち二十億は佛の所說を守り遂に阿羅訶を成じたといふ。

（一二四）八難經　世尊梵行を行ずるに八難八非時あり、一不難一是時あることを說かる。

（一二五）貧窮經　有欲の貧窮人に擬へて聖法中不善の貧窮・擧貸・長息・責索・數往求索・收縛を說く。

（一二六）行欲經　行欲の人に非法及び法・非法並びに如法に求財する三種を二十例擧げて其の中、行欲に於て最上、最下を分つ。

（一二七）福田經　世尊給孤獨居士に先づ學人・無學人の二福田人あるを告げ、更に學人に十八種、無學人に九種あることを述べらる。

（一二八）優婆塞經　世尊舍梨子に五戒及び四增上心を問はれる、乃ちこれ等を細說する。

（一二九）怨家經　瞋恚に基く七怨家法卽

によつて住するも亦同じ。

（一〇八）**林經**（下）　前經と殆ど同じ。異る處は唯沙門の義を詳述するにある。

（一〇九）**自觀心經**（上）　內止及び最上慧觀法を既に得てゐるか否かと己心を觀察し各四句分別をなす。而して內止を得最上慧觀法を得れば更に漏盡・智通・作證を求める。善法を增長すれば四具を畜へ一切人に押習し得と說き、然らずんば是を畜へ押習し得ずと說く。更に可習法、不可習法を辨じて善法を增修し惡不善法を衰退すと述べる。

（一一〇）**自觀心經**（下）　己心を觀察して增伺・瞋恚心・睡眠纒・調貢高・疑惑・身諍・穢汚心・不信・懈怠・無念・無定・惡慧を行ずれば方便を求めて精進し、この惡不善法を除くべく、若しこれを行ぜざれば更に漏盡・智通・作證を求むべきであると說く。

（一一一）**達梵行經**　漏・覺・想・欲・業・苦の各及原因・報・勝如を知るの道を示す。

（一一　）**阿奴波經**　世尊他心智を以て提惒達哆の墮獄して苦難するを見、これを阿難に告げ更に如來大人の根智を說き、前後各三種の人卽ち清淨の法を得、衰退の法を得、身壞命終墮獄の者並に衰退の法を得、清淨の法を得、現世に般涅槃する者を示し勤加精進をすゝめらる。

（一一三）**諸法本經**　異學へ一切諸法の本・和・來・有・上主・前・上・眞・訖りを夫々欲・更樂・覺・思想・念・定・慧・解脫・涅槃となすと答ふべきを敎へ、更に出家苦邊を得る には學道心・無常想・無常苦想・苦無我想・不淨想・惡食想・一切世間不可樂想・死想を習ひ世間習の滅・味・患・出要の如眞を知つてかゝる想心を習ふべきであると諭す。

（一一四）**優陀羅經**　正觀・正覺・癰（身）本を知ること及び癰の一切漏を細說する。

（一一五）**蜜丸喩經**　世尊「宗本」及び「法」を解說して一切世間・天・魔・梵・沙門・梵志鬪諍なく、離欲清淨の梵行を修習し、諂曲を捨離し、悔を除き、有・非有に著せず、想なき事とせらる。而してそは苦邊なりと答へらる。衆其の深義を知らないので迦旃延代つて三事和合を中心として定を細說した所、世尊是を歎じ名づけて蜜丸喩のとせらる。

（一一六）**瞿曇彌經**　世尊の姨母大愛三度出家を請ふ。世尊乃ち是を許して八尊師法を說く。而して女人の出家によつて正法止住千年中其の半ばを減じたと言はれ更に女人は五事を行じ得ずと說かる。

大品第一

（一一七）**柔軟經**　世尊出家以前父王の處に於ける柔軟の生活を述べ、更に離欲離惡の法を求めて遂に初禪を成就したと說かる。その時の念の內容は病・老・死法を離れて初めて不畏・無想に入り、淨梵行を行ずることとである。

燃を救ふが如く惡不善の法を滅せんとして精勤し、五蓋心穢なく五力成就すと知れば、善法に住して退かざらんと修行廣布すべきである。

（九六）無經　前經と同じく淨法衰退と淨法轉增とを說く。

因品第四

（九七）大因經　緣起及び緣起支を說き、無神・無我・七識住・二處を明かし、更に八解脫を述べる。

（九八）念處經　觀身如身・覺・心・觀法如法の四念處を細說し、これに住せば必ず二果を得、或は現法に究竟智を得、若しくは餘有りて阿那含に達すと說く。

（九九）苦陰經（上）　欲・色・覺を各々味・患・出要の三に解說し、中に就て現當二世に於ける欲による苦陰を詳述する。

（一〇〇）苦陰經（下）　五欲種の所患を說き現當二世に於て欲の樂なく無量の苦陰あるをこと述べる。

（一〇一）增上心經　增上心を得んと欲せば五相を念ずべきを說く。かくせば已生の不善、惡念滅し、心、常に住し、止息し、意、一にして定を得ることを說く。

（一〇二）念經　諸念を欲念・恚念・害念と無欲念・無恚念・無害念とに分け、前念に依つて無量の惡不善の法を生ずと說く。世尊成道以前この念を斷除すべく努力されしことを說かれる。

（一〇三）師子吼經　尊師を信じ、法を信じ、戒德具足を信じ、同道を愛敬するの四法あるが故に四種の沙門以外に沙門梵志なきを說く。而して究竟に達するには欲・恚・癡・愛・受・無慧・憎・諍・二見を離れて慧を獲、四受を斷ずるには無明を除くを要することを敎へる。

（一〇四）優曇婆邏經　異學の爲に不可憎具足の行にして穢となるもの及び穢とならないもの各十二を說く。更に不可得行第一、及び眞實を得るには四行をなし、四無量心を行じて宿住通、天眼通に達すべしといふ。而して弟子戒によりて梵行を行ずる所以は最上最妙最勝なる漏盡を得るにありと結ぶ。

（一〇五）願經　十三種の願經を說き、各行の最後に具足戒を受けて禪を廢せず、觀行を成就して空靜處に住せんことを願ふ。

（一〇六）想經　地・水・火・風・神・天・生主・梵天・無煩・無熱・無量空處・無量識處・無所有處・非無想非有想處・一・別・若干・見・聞・識・知・一切に於て則ち我一切を知り、一切是神に非ず、神所に非ず、神は一切に非ざるを計し已つて初めて一切を知り得と說く。

林品第五

（一〇七）林經（上）　比丘一林に依つて住し修行得脫乃至四具に就て種々觀察して、或者は去り、或者は夜半に去り、或者は終身此處に居留する。塚間・村邑・人

らねばならぬとて中道の法を說き、念欲乃至貪著を斷ずること及び八支聖道であると說かれた。

（八九）**比丘請經**　戾語法を成就するものは、梵行者によつて善く敎へ注意されることが出來ず、蔭にあつて非難されるのみである。善語法有る者は善く梵行者の敎示注意を受けることが出來る。戾語法とは惡欲・忿欲乃至恩無く恩を知らざることである。故に比丘は戾語法あれば人の憎惡する所と知つて自省すべきである。かくして定心を得解脫を得最上果を得られる。

（九〇）**知法經**　自ら稱して我諸法を知り貪欲乃至惡欲惡見無しと說くも、而も心に貪欲乃至惡欲惡見を生ずる比丘は、梵行人この人の心惡見法に向つて無餘涅槃せざるを知る。梵行人は自ら稱せずして而も心に貪欲乃至惡欲惡見を生ぜざる比丘は無餘涅槃を得ると知る。

（九一）**周那問見經**　世間紛然の邪見は滅し盡して捨離することが出來る。それには欲・惡不善の法十惡業等に於て漸損の法を學し發心を學し對の法を學し昇上の法、般涅槃の法を學ばねばならぬ。

（九二）**青白蓮華喩經**　法に(1)身に從ひて滅し口に從はざるもの(2)口に從ひて滅し身に從はざるもの(3)身口に從はず慧見に從つて滅するものの三がある。(1)は不善の身行充滿して身に著する時(2)は不善の口行充滿して口に著する時、同行の比丘の敎訶によりて不善を滅し善を修するに至るをいふ。(3)但增伺乃至惡欲惡見は慧見に從つて滅す。增伺乃至惡見は身・戒・心・慧を修して滅する。如來世間に生じ世間に長ずるも世間の法に著せざるはこれによる。

（九三）**水淨梵志經**　水浴を以て一切の惡を淨除するとなす水淨梵志に對して佛は心二十一の穢法に汚されたる者は必ず地獄に墮し、心穢に汚されなければ必ず天上に生れる。この心の穢は水を以て淨洗すべきでなく、善法こそ淨洗の法であると說いて梵志を敎化された。

（九四）**黑比丘經**　黑比丘は鬪諍を好む人。佛は鬪諍を好み惡欲あり乃至宴坐せざる者は涅槃を得ず同梵行者の恭敬禮事を得られないこと、惡馬の飼養人無きに等しいとて七法をお說きになつた。この惡七法を成就せず善七法を成就すれば涅槃に至り同梵行者の恭敬禮事を得られること良馬の如くである。

（九五）**住法經**　比丘が禁戒を信じ博聞・布施・智慧・辯才・阿含・及びその所得があつても(1)退善法によつて退步する者、(2)住善法によつて停住して進退せざる者(3)增善法によつて增進して退かざる者の三つの場合がある。若し比丘自らを省察して我に增伺等の五蓋心穢乃至惡慧無きかどうかを觀じ、若し惡慧有るを知れば頭

はこれを窘めると象子の親友がこれを遮つて象子は戒德多聞の比丘だから詰責するなと言つた。尊者は佛や上尊長老の前では如法に愼んでも蔭にあつて放逸なれば遂に戒を捨て道を罷めるであらう。假令四禪、無想定を得るも更に上進を求めなければ遂に戒を捨て道を罷めるであらうから、他の心を曉知せずして褒貶すべきでないと戒めた。後果して象子比丘は戒道を捨てた。

（八三）長老上尊睡眠經　尊者大目犍連ある時獨處にあつて睡眠した。佛はこれに因んで睡眠を滅する方法、並に安眠に計著すべからざることを教へ、次いで比丘の修行事を說き、三覺の無常興衰の法なるを觀じて究竟を得るをお說きになつた。

（八四）無刺經　佛鞞舍離に遊ばれた時鞞舍離の人々は高唱宣傳して佛を訪ひ法を聞いて歸つた。時に近くに居た名德の長老比丘たちは、禪定は聲を障礙の刺となすといつて牛角娑羅林に避けた。佛は大にその措置を稱歎し、具さに持戒・四禪・四無色定の刺（障礙）を說き、欲刺・恚刺・愚癡刺の三を說かれた。

（八五）眞人經　眞人の法と不眞人の法とある。不眞人の法とは自分の豪貴・端正・才辯・諸經を誦すること、衣食・遠離・四禪・四無色について自ら誇り他を賤しめることであり、眞人の法とは四禪・四無色の無量なるを觀じて恭敬供養を得、他を賤しめることのないことである。

（八六）說處經　尊者阿難の下に多くの年少の比丘が居た。尊者は佛にこの年少の比丘たちに敎ふべき方便を問うた。佛は五陰・六內處・六外處乃至七覺支・八支聖道に至るまで三十項の修行の德目を以て教化すべきこと誨へ、更に頂法によつて無常・苦・空・無我を思念し忍樂欲を生ずべきことをお說きになつた。

穢品第三

（八七）穢品經　四種の人がある。(1)內に穢有りて而も知らず(2)內に穢有りて自ら知る(3)內に穢無きを自ら知らず(4)內に穢無きを自ら知る。(1)と(3)は下賤の人(2)と(4)は最勝の人である。自覺無ければ不善を捨て善を修するの心起らず、自覺有れば善は增修し惡は意を盡して斷ずるからである。穢とは欲によつて惡不善の法を生ずることである。これに十一の因緣あることを說く。人の穢あるを知らざれば親近すべからざるに親近し、穢有るを知れば親近すべきに親近す。

（八八）求法經　比丘は法を求むべく、飮食を求めてはならぬ。飢渴の故を以て殘食を食ふは法を忘じて佛意に契はず、苦痛日夜に及ぶも法を奉じて殘食を顧みざるは佛意を得。これ少欲知足を得乃至涅槃を得るからである。師如何に淨業怠らざるも弟子淨業を樂まなければその師の法所益無し。故に比丘は師の法を求め守

の餌となり惡不善の法の本なりとし、これを善觀すれば淨不動・淨無所有處想・淨無想處と次第に昇進して遂に我・我所無く本有を捨て、若しこの捨に著する者は涅槃を得ざるも捨に樂著せざれば必ず涅槃に入るとお說きになつた。

（七六）郁伽支羅經　比丘は四念處を修め三定を習ひ四無量心に住して怠らざれば現法に究竟智を得或は阿那含を得られると說く。

（七七）娑雞帝三族姓子經　阿那律陀・難提・金毘羅の三尊者は年少新學の比丘であつたから佛は慈愛を以て懇ろに法を說き、欲・惡法に覆はるれば貪・恚、睡眠を生じ不可樂を忍び得ず、欲・惡法を離るれば捨樂止息を得ると敎へ又如來が遠離獨坐するは（一）自ら現法に樂居し（二）後生の人に範を示す爲、如來が弟子に記莂を與へるのは後人の儀表としたいからであるとて、漏盡の比丘・比丘尼・五下分結・三結を盡した四聖衆について記莂を與へる例を說かれた。

（七八）梵天請佛經　一梵天が邪見を起して梵天界は有常不變であると執著した。佛はその無常變易を說かれたが、梵天は邪見を捨てず、却つて佛を已の配下の如く取扱つた。佛は自分は梵天やその眷屬の持たない知見を持つて居ることを說いて梵天の邪見を破られた。梵天は神通を以て佛と競うたが佛の敵でなかつた。時に魔波旬佛によつて自分の境界を侵されることを恐れて佛に弟子を敎化しない樣にと勸めたが佛は波旬の心を知つて彼を退かしめた。

（七九）有勝天經　仙餘財主は尊者阿那律陀に大心解脫と無量心解脫の別を問うた。尊者は大心解脫は一樹一林乃至二三國に依りて修行する者の得る所、無量心解脫は無事處に在りて四無量心を成就する者の所得であると敎へ、三種の天を說いて沙門梵志の修行の程度によりて差別して生ずることを說いた。

（八〇）迦絺那經　佛は尊者阿那律陀の道業勝れることを知つて自ら進んで比丘たちと共に阿那律陀の爲に衣を補治された。その序で、尊者は佛の命によつて迦絺那法を說き、自らの發心出家より十惡業を離れ十善業を修し乃至解脫を得六神通を得るに至るまでの次第を說き、佛の稱譽を受けた。

（八一）念身經　佛は十八念身を說いて念身を稱歎し、念身有れば善法盡くその中にあつて魔波旬の爲に隙を伺はれることがない。反之念身無ければ魔波旬につけ入られると說かれ、念身の十八德をお說きになつた。

（八二）支離彌梨經　質多羅象子といふ比丘はいつも他の比丘たちの說の竟るを待たずに自說を述べ恭敬善觀しないで上尊長老に問ひかけた。そこで尊者大拘絺羅

城主大善見王は佛の前生であつて轉輪王となり治國、法に依り慈愍昆蟲に及び、淨妙の行を修して一切の欲を離斷し四禪を得、四無量心に住し命終つて梵天に生れた。この拘尸城こそ如來因緣の地、今最後身を捨てるにこの地を得しは奇特な事であると仰せられた。

(六九)三十喩經　佛は布薩會の日衆の寂靜なるを見て歡喜に堪へず、因に王・大臣の具有する三十德に喩へて、比丘・比丘尼が惡を捨て善を修する爲の德目三十條を說かれた。

(七〇)轉輪王經　轉輪王相繼の法を以て天下を統領すれば人民盛に、泰平を謳歌するも、一朝法を誤れば殺生妄語邪婬相踵いで起り人壽轉た減じ惡業を以て相稱譽するに至る。相繼の法とは法齋を設け布施を行じ上尊名德の沙門梵志について法を聞き以て治國の憲章とするのである。これ轉輪王の自境界である。比丘亦自境界有り。四念處を修することである。四念處有れば欲を離れ乃至心解脫慧解脫を得更に有を受けざるに至る。

(七一)蜱肆經　鳩摩羅迦葉は蜱肆王の問に答へて、後世衆生の生魂の否定すべからざるを說いた。王はいろ〳〵な反證を擧げてその妄說なるを指摘しようとしたが迦葉の巧妙な喩によつて遂に伏せざるを得なかつた。しかし王は他の侮を畏れて己の邪見を固執するので迦葉は糞を擔ふ人の喩を始め種々の喩を以てその不可を諭した。王は遂に伏して福業の爲に大施を行はんとした。迦葉は大施は續かず却つて善根を遮斷するから長齋を設けよと勸めた。王は迦葉によつて教化され福業を積むも尙ほ慳しむ心を捨て得ず、爲に林中に生れた。

長壽王品第二

(七二)長壽王本起經　佛は拘舍彌の比丘等の鬪諍を事とするを見て、忍行を說いてこれを戒しめ、長壽王と長生童子の徹底した忍行の物語をなされた。しかし比丘等は佛の教を守らなかつた。佛は護寺林中に遠離されたが、出でゝ般那曼闍寺林に往き、阿那律陀等三尊者の爲に疑患乃至不觀色患の十一患を說いてこれ安樂を失ふ原因であるとされ、三定乃至廣無量定を修せば安樂に住し阿羅訶を得と說かれた。

(七三)天經　佛が未だ正覺を成ぜられない以前に光明を以て天についての八事を見て智見の明淨を計り、遠離して精進したまへるを說かれた。

(七四)八念經　佛は尊者阿那律陀や比丘等の爲に道は無欲乃至不戲の八大人覺によつて得られると說き、更に比丘の衣食住についての態度をお示しになり、これによつて二果を得られると教へられた

(七五)淨不動道經　佛は一切の欲・色・欲想色想を毀呰して無常虛僞妄言にして魔

る。生滅無常の法は染著すべからず、我・我所有るべからず。因有りて始めて果がある。因滅すれば果滅す。一切法は緣起の法である。この理を知れば我・我所に執せず欲を離れて解脫すとお說きになつた。王は法淨眼を生じ歸佛して優婆塞となつた。

(六三)鞞婆陵耆經　佛は尊者阿難の爲に昔迦葉如來の下に在つて發心修行せる本生譚をお說きになつた。昔時佛は優多羅童子と名け、大長者の愛兒であつた。然るに夙とくから迦葉佛に歸依し、十善業を修して怠らず家に在つて梵行、尙出家學道者にも優れる勝友難提婆羅陶師の勸化によつて迦葉如來について出家學道した。迦葉如來は後迦私國王頻鞞を敎化するの序で、難提婆羅陶師の梵行を稱譽せられた。王は自國內に陶師の如き殊勝の人あるを喜び僎物を彼に贈つた。

(六四)天使經　佛如來は天眼を以て衆生の所作業の善惡に隨つてその死時・生時乃至上天・墮獄を知ることが出來る。一人有つて父母に孝ならず沙門梵志を恭敬せず、後世の罪を畏れざれば閻王の世界に生れ、その苦治を受けて四門大地獄を始め所謂五大地獄を往來して極苦を受く。閻王苦治するに先立ち天使を遣して檢問す。故にこの經を天使經と名ける。

王相應品第一

(六五)烏鳥喩經　佛は一梵志と獮獸・烏鳥等との問答を喩として比丘は身口意の淸淨を護り八支聖道を勤修して遠離に住すべきことを說かれた。

(六六)說本經　大勢の比丘が集まつて比丘として持戒妙法あり、乞を以て自濟すると在家居士朝々百千萬の利を得る大長者たると何れが勝るかと論じ合つた。尊者阿那律陀は擧國困窮の際、辟支佛に一鉢の食を施した前生福業によつて天上に生れ人間に生れ、今この妙果を得たることを說いて福業の勝ることを述べた。佛は更に未來に轉輪王の出世有り、彌勒如來の出世有らんことを記別された。衆中の阿夷哆は我こそその轉輪王たらんと言つて佛の訶責を受け、尊者彌勒は自ら彌勒如來たらんと言つて佛から錦綾衣を付囑された。時に魔王は彌勒如來の出世を妨げんとして果さなかつた。

(六七)大天㮏林經　佛は彌薩羅の大天㮏林に在つて尊者阿難の爲に佛の本生譚を說かれた。佛は昔子より子、孫より孫へと展轉すること八萬四千代轉輪王となり後出家して仙人に學び梵行を修してこの大天㮏林中に居られたといふのである。

(六八)大善見王經　佛は拘尸城外の娑羅林中、二本並立の娑羅樹の間に床を敷いて涅槃に入らうとされた。尊者阿難はこの邊鄙の小城を般涅槃の地に選ばれた佛の御心を知ることが出來なかつた。佛は拘尸城の昔を說いて稱歎しその時の拘尸

する根本要件である。

(五一)本際經　凡夫迷惑の本たる有愛は因る所あつて生ずる。卽ち無明を因緣となす、無明は五蓋に、乃至惡知識に親近するは惡人に緣る。聖者の明解脫亦因る所がある。卽ち七覺支を緣となす。七覺支は四念處に、乃至善知識に親近するは善人に緣る。

(五二)食經(上)。(五三)食經(下)　これを喩ふれば大海は大河を、大河は小河を、小河は大川を、乃至溪澗は大雨を緣となすと同じである。

(五四)盡智經　漏盡は四聖諦の義を如眞に知見することによつて得られる。この盡智は亦原因がある、卽ち解脫である。解脫は無欲を、乃至善法を聞くは善知識に奉事するを緣となす。

(五五)涅槃經　涅槃にも亦因由する所がある、卽ち解脫である。解脫は無欲に、乃至行は無明に因由する。

(五六)彌醯經　尊者彌醯は好榛林に獨坐して三惡念を起した。佛はそれは心解脫の熟なるに因るとて五習法を說いて心解脫成就を敎へられた。(1)善知識にして善知識と交る(2)學戒を受持す(3)戒等、沙門の說を說く。(4)精進を行ず(5)智慧善觀を修す。その上更に惡露慈息出・息入・無常想の四法を修すべきである。

(五七)卽爲比丘說經　前經と義同じ。

王相應品第六

(五八)七寶經　轉輪王の七寶と如來の七寶と比喩す。

(五九)三十二相經　三十二相を具足すれば、在家は轉輪王、出家は如來無所著となつて十方に周聞す。三十二相とは何か。この經仔細にこれを明す。

(六〇)四洲經　世人欲に於て足るを知り欲を厭患して命終る者少し。轉輪王頂生四洲を統領して滿足せず更に欲に隨ひて三十三天の法堂に入り帝釋天の半座を

得遂に帝釋天を放逐して自ら天界を統領せんとの野望を起し忽ち墜ちて下界に在り、如意足神通を失つて命終つた。欲望知足無きが爲である。而も頂生とは佛御自身の前生であつた。

(六一)牛糞喩經　佛一比丘の爲に五蘊の無常變易の法なるを說きたまふ。佛の前生刹利頂生王の特有せる七寶今一も無し。色無常變易の法なるが故である。無常の法は苦の法である。何ぞ我・我所を執せんや。五蘊無常を知つて厭離すれば解脫を得と。

(六二)頻鞞娑邏王迎佛經　摩竭陀王頻鞞娑邏は佛の名聲を聞いて佛の所を訪うたが、側に當時大尊師として世を擧げて歸崇する鬱毘邏迦葉の居るを見て、佛が師か迦葉が師かを疑つた。佛は王の意を知つて迦葉に歸佛の因緣を說かしめられた。王を始め人々は佛の威德を知つたので佛は王の爲に五蘊は生滅無常の法であ

容界に大風起るに因る(2)如意足神通の比丘・護比丘天の想を發すに因る(3)如來三月後に般涅槃するに因る。如來は又諸天と坐を共にして少しの區別なく光明却つて彼に勝る。

(三七)瞻波經　十五日布薩の日に佛は會中に不淨心の比丘が混り居るを知つて波羅提木叉を說かれなかつた。尊者大目乾連は不淨の比丘を放逐して佛に戒を說かれんことを願つた。佛は大海の八德に喩へて說法せられた。

(三八)郁伽長者經(上)　遊樂に亂醉せる郁伽長者は佛の威容を見て醉醒め、往つて法を聞き法眼を得て優婆塞となつた。長者は家に歸つて大勢の夫人を意に任せて去らしめた。歸佛後の長者は五戒を守ること堅固に、諸の福業を積み八の未曾有法を成就した。

(三九)郁伽長者經(下)　佛般涅槃の後間もなく郁伽長者は大施行を設け散財量ることが出來なかつた。尊者阿難は長老上尊比丘たちの意を含んで長者の大施を止めようとした。長者は財盡きるも厭はず、只轉輪王の願の如く我が願を滿たしめよとて志を枉げなかつた。そして自ら得たる八の未曾有法を說いた。

(四〇)手長者經(上)　手長者は惠施・愛言・以利・等利の四事攝を以て大衆を攝した。一日佛の說法を聞いて家に還り靜坐して四無量心を成就した。これを知つて三十三天が長者を稱歎したので、毘沙門天王がそれを長者に告げた。しかし長者は誇らず、佛の稱歎を得た。

(四一)手長者經(下)　佛は手長者の八未曾有法を稱歎なされた。それは彼が(1)少欲(2)信(3)慚(4)愧(5)精進(6)念(7)定(8)慧の八を具足したからである。

習相應品第五

(四二)何義經　佛は尊者阿難に持戒は後悔無からしめんが爲であるとお說きになり、進んで持戒は詮ずる所無欲にして解脫を得、彼岸に度らんが爲であると說かれた。

(四三)不思經　けれども持戒が我をして後悔無からしめるのだと思うてはならぬ。持戒有れば自然に後悔無きを得乃至解脫を得る。

(四四)念經　持戒・不悔乃至解脫涅槃は正念正智を基となす。正念正智無ければこれを成就することが出來ない。

(四五)慚愧經(上)　正念正智は正思惟に依り、正思惟は信に依り、信は愛敬に依り愛敬は慚愧に依る。慚愧無ければ愛敬・信乃至解脫涅槃を害す。

(四六)慚愧經(下)　尊者舍梨子亦これを廣說した。

(四七)戒經(上)。(四八)戒經(下)　佛と尊者舍梨子交々持戒の功德を說く。

(四九)恭敬經(上)。(五〇)恭敬經(下)　恭敬尊重の心は戒定慧を成就し涅槃を具足

(14)識の四諦(15)行の四諦を知れば正見を得正法に入るを得と。

（三〇）象跡喩經　尊者舍梨子の說法。無量の善法は四聖諦の中に攝することが出來る。中に於て苦聖諦に四苦八苦ありとし。第八五盛陰の苦なる所以を明す。一切色法は四大假和合のものである。四大各內外の二を含む。一切の法、わけてわがこの身は四大假和合のものにして因緣を俟つて成就したものであると觀じて如何なる困苦も能く堪耐し四無量心に住して一切の有愛欲を離れなければならぬ。一切は因緣生なりと見れば卽ち法を見、五盛陰を厭離して解脫を得るに至る。

（三一）分別聖諦經　佛は舍梨子目乾連の二尊者を稱譽して生母・養母に喩へ、尊者舍梨子に四聖諦の義を分別して比丘たちに廣說せよと命ぜられた。尊者舍梨子は佛の敎を受けて四諦を廣說し、苦聖諦に八苦を說き、苦習諦に愛染執著を說いて以て苦の因と爲し、愛染執著を斷じ欲を離れ欲無きを以て苦滅となして苦滅諦を明し、正見乃至正定を說いて道諦を詮示して比丘たちに歡喜を與へた。

未曾有法品第四

（三二）未曾有法經　尊者阿難は佛が迦葉佛の時初めて發心してから托胎・誕生を經、出家・成道・遊行・敎化の時代に至るまでの佛の生涯中に起つた二十四の不可思議の事を擧げて讚歎した。

（三三）侍者經　佛は老境に向はれたので常隨侍者を求められた。舍梨子目乾連の二上足を始め多くの長老たちは自ら進んで佛の侍者たらんと願つた。けれども佛はこれを聽されず、暗に尊者阿難を求められた。尊者阿難は三願を條件として佛の侍者となり、佛は尊者の聰明を稱譽されたといふのがこの經の筋である。それと同時に尊者の侍者時代から阿羅漢果を得て般涅槃するに至るまでの事蹟を記してある。

（三四）薄拘羅經　尊者薄拘羅は出家學道すること八十年、その間の淨行を說く。

（三五）阿修羅經　大海に八德がある樣に佛の正法律にも八德がある。しかしその功德は大海の八德は正法の八德に比すべくもない。(1)大海は漸廣漸深、正法は漸修漸學(2)大海は潮時を失はず、正法は禁戒犯す無し(3)大海は甚深甚廣、正法亦然り(4)大海は鹹味一味、正法は無欲味覺・息道味一味(5)大海に無量の珍寶有り、正法に四念處乃至八支聖道の珍寶有り(6)大海は大神の居所正法は四向四果の聖者の居所(7)大海は死屍を受けず、正法は不精進の徒を容れず(8)大海は五河の水を受けて差別無し、正法は四姓を入れて差別なく沙門釋子となす。

（三六）地動經　佛が金剛國に居られた時大地震があつた。佛は大地の動く因緣として三つを說かれた。(1)地の最底たる

(二五)水喩經　瞋念を制止する五除惱の法を說く。(1)身不淨行口淨行の人を見て慧者は身の不淨行は念ぜず、口の淨行のみを見て瞋念を制する。(2)口不淨行身淨行の者(3)身不淨行口不淨行で心に少し淨行あるを見て慧者はその淨を念じて不淨を見ず以て瞋念を制す。(4)身口意不淨行に充ちて一毫の淨行も無い者を見て慧者は哀愍慈念し只管善知識を授け淨行を修めさせようとする。(5)身口意淨行に充ちた者を見ては清泉に渇を癒やすやうにその淨行を希念する。瞋念はかうして自ら消え去るであらう。

(二六)瞿尼師經　調笑・憍傲・心獼猴の如き瞿尼師比丘に因んで尊者舍梨子は無事の比丘の守るべき法を說いた。(1)同梵行者を尊重恭敬し(2)調笑躁擾せず(3)下劣な談話に耽らず(4)高ぶり傲らず口數少く(5)諸根を護り放逸ならず(6)食は足るを知りて貪らず(7)精進して(8)正念正智を學し(9)時を知つて非時に行ぜず(10)坐處を擇びて、他を妨げず(11)律阿毘曇を論じ(12)息解脫して色を離れ無色定に至るを談論し(13)漏盡智通を論ずべし。これ獨り森林に遠離する比丘のみでなく村里に依つて修行する比丘も學ぶべし。然らざれば、他の詰責誹謗を免れない。

(二七)梵志陀然經　尊者舍梨子が舊友梵志陀然を敎化せしことを記す。尊者は舍衛國にあつて王舍城なる舊友梵志陀然が道業を怠り邪惡に耽ると聞き往つて之を詰つた。梵志は父母に孝養し妻子を養ひ祭祀を行ふなどすべて福業を積んで居ると答へた。尊者は地獄の喩を以て父母その他の爲にとて邪惡を作すの不可を諭し、如法に父母を養ひ福業を積むことが出來ることを敎へ、遂に彼を濟度した。間もなく梵志陀然の病篤きを聞き馳せ赴いて之を慰問し、苦痛の中に、梵天に憬れて居る梵志の心根を察して、佛の說かれる四無量心こそ梵天に生れる道であると說いて梵志に安心を與へた。

(二八)敎化病經　祇園精舍を佛に獻じた給孤獨長者は病危篤の時尊者舍梨子を請じて說法を願つた。尊者は趣いて長者を慰問し、長者には上信・善戒乃至正智があつてもう須陀洹果を得たから、更に上進して斯陀含果、阿那含果を得るであらうと勵ました。長者は尊者の說法によつて危篤の病から癒ることを得た。長者は歡喜して佛に歸依するに至つた由來、祇園精舍建立の苦心等を話し已つて尊者を供養した。

(二九)大拘絺羅經　尊者舍梨子は尊者大拘絺羅に正見を得正法に入る方法を問うた。答ふらく、(1)不善及び不善根(2)善及び善根を知ること(3)食の四諦(4)漏の四諦(5)苦の四諦(6)老死の四諦(7)生の四諦(8)有の四諦(9)取の四諦(10)愛の四諦(11)覺即ち受の四諦(12)更樂即ち觸の四諦(13)六處の四諦

た人まで殺生者だといはれぬのと同様、他人の幻者なることを知つても、自分まで幻者だとはいはれぬと諭された。伽彌尼は更は十惡を行へば現世にその報を受けると說くものがあるが、これは眞實かと問うた。佛は一切現世にあつて報を受けるとは限らぬと喩を以て敎へられた。伽彌尼は六師外道中四論師の異つた見方を擧げてその何れが眞實であるかを問うた。佛は遠離の法を說き十惡業道を斷じ十善業道を修し四無量心を修し心定を得て疑惑無く一心を得れば、四論師の說く所その何れが是、何れが非なるも、それにふれず、自ら守つて解脫の道を進むことが出來ると誨へられた。

舍梨子相應品第三

(二一)等心經　二種の人についての尊者舍梨子の說法。(1)内結の人。禁戒を修習し貪欲等を斷ずるを學び息心解脫を得るも欒中に愛著して現法に究竟智を得ず、命終りて餘意生天に生れて再びこの世に還らざる阿那含の人。(2)外結の人。禁戒を修め波維提木叉を護り、纖介の罪も之を愼しむ。この人阿那含に非ずしてこの世に還り來る。

(二二)成就戒經　尊者舍梨子は比丘たちに戒定慧を成就すれば現法に想知滅定に出入し、然らざるも、命終の後餘意生天に生じて想知滅定に出入すと說いた。衆中の烏陀夷はこれを非とした。二人は佛の前に往つて論じた。佛は尊者舍梨子の說を正しいとして烏陀夷を面訶なされた。後佛は衆の前にあつて長老比丘が梵行者から恭敬される所以をお問になつた。尊者白淨は五の法を以て答へた。(1)禁戒を守る者(2)廣學多聞の者(3)四增上心を得た禪伺の者(4)智慧明達の者(5)漏盡の者。この五を缺けば梵行者の恭敬を得られない。

(二三)智經　黑齒比丘が尊者舍梨子を中傷する考で佛に向つて尊者を讒言したので佛は尊者を呼んで問はれた。これはその時同尊者の答である。生に因がある。生の因の盡きるを知れば、智を得生盡き梵行立ち所作辨じ更に有を受けずと知ることが出來る。生は有に因り、有は受に因り、受は愛に因り愛を本となす。愛は三覺に對する愛著、三覺は無常の法・苦・滅の法なりと見れば愛著卽ち滅す。愛盡き恐怖疑惑無く不善漏無ければ、生盡き更に有を受けることがない。

(二四)師子吼經　佛も尊者舍梨子も舍衞國に安居した時のこと、尊者は安居を終り佛の許を得て遊行に出た。時に一比丘佛に向つて尊者舍梨子は私を輕慢して遊行に出たと申した。佛は早速尊者を呼んで訊された。尊者は十の喩を以て、身々念有る者は人を輕慢することはないと答へた。彼の比丘は過を悔い慈愍を願つた。

修して阿那含又はそれ以上の果報を受く。

(一六)伽藍經　佛羈舍子の伽藍に遊行され、その名聲四方に擴がれるにより伽藍人來りて佛を見る。佛法を説いて示敎利喜され、凡夫は貪瞋癡の三因習本有の爲に心覆はれて十惡業を作る。聖弟子は十惡を離れて十善を行ひ、四無量心を修して四安隱處を得と說きたまふと、伽藍人等は佛の所説を聞いて歸佛した。

(一七)伽彌尼經　佛、伽彌尼天に問ひたまはく、村邑の男女懈怠にして十不善業を行ひながら、叉手求索することによりて死後天上に生れやうか。答ふ否。そは大石を水中に擲ち叉手求索してその浮出でんことを待つの非理なると同じい。十惡には黑報がある。反之彼等精進して十善業を行ひ、叉手求索するも死後惡處に生れ出ることはない。酥油を水に投ずれば上に浮ぶと同樣である。十善の人は、身は烏獸に食はれ燒かれ埋められど、彼の心意識は信・精進・多聞・布施・智慧に熏ぜられて天上に生るといふ。

(一八)師子經　師子大臣はもと尼乾子の徒であつた。佛の許へ來つて、佛は不可作を宗本とされると聞くが、それは眞實か否かと問ふ。佛はそは眞實なりと答へ、佛は(1)不可作(身口意の惡行の)、(2)可作(身口意妙行の)、(3)斷滅(惡行の)、(4)可惡(惡行の)、(5)法律(三毒を斷ずるための)、(6)苦行(生死の根本を斷つための)、(7)不入於胎(當來不生の故に)、(8)安隱(生老病死憂慼染汚を脫するが故に)の八種の宗本を說くことを是認されると、彼は尼乾子を棄てゝ優婆塞となつた。

(一九)尼乾子經　尼乾外道の苦行は解脫の正道に非ざるを指摘す、尼乾は苦行によつて前世の業を滅し、身口意を護つて新業を造らざれば苦樂を感ずべき業因盡きるを以て苦も滅盡すると說く。しかしこは虛妄の方便に過ぎぬ。(1)尼乾は前世の有無、善惡の作不作を知らず、又苦行によつて必ず苦滅を得るの顯證もない。苦行によつて苦を受け、その苦を止息す。尼乾の一生は苦に終始するものと云へる。(3)苦行によつて苦報業を轉じて樂報業と作し、乃至熟報業を轉じて不熟報業と作すことの不可能であることは彼等も認める所、以上の三點を以て苦行の解脫の正道ならざるを知る。如來正覺の法は然らず行欲を斷じて苦を盡くし、苦盡きて善法生じ不善法滅す。苦を斷じてまた生ぜず、更に欲を斷ずるを求め、遠離靜坐して五蓋心穢を斷じ欲を離れ惡不善の法を離れ乃至四諦を知り現法に究竟智を得て解脫することが出來る。

(二〇)波羅牢經　波羅牢伽彌尼佛を訪ひ、あなたは幻を幻と知るとのこと、事實ならば、あなたも幻者ではないかと問うた。佛は他の殺生を知つたからとて知つ

（惡友惡外道などより遠ざかること）(4)用（衣服臥具等を受用するに當つての反省）(5)忍（血肉乾渇すとも精進を捨てじとの決心）(6)除（欲恚害の三念を除くこと）(7)思惟（七覺支の思惟）によりて斷ずべきである。

業相應品第二

（一一）鹽喩經　不善業を作し(1)苦果地獄の報を受くると(2)苦果現法の報を受くるとがある。(1)は身戒心慧を修せず但壽命短し(2)は此等を修す、但壽命長し。(1)は一兩の鹽を少水に投ずるが如し極めて鹹し(2)は一兩の鹽を恒水に投ずるが如し其味を變ぜず。

（一二）恕破經　尊者目連、尼乾子の弟子釋恕破に問ふ、比丘身口意を護りながら不善漏を生じ後世に至らしむる理ありや、答へていふ有り。佛はこの恕破の答を是認したまふ。彼は更に佛の問に答へて、比丘の不善身口意行あり、無明行・漏・煩熱・憂慼ありたるものが、後不善の諸行・無明行滅し、新業を造らず故業を棄て現世に於て煩熱なく聖慧の知見する所となる。斯の如き比丘は後世に至ることなく、正心解脱して六善住所を得。六善住所とは六根六境相對しても喜ばず憂へず捨無求無爲にして正念正智を得ることなりといふ。恕破は尼乾子を棄てゝ佛に歸依した。

（一三）度經　沙門婆羅門の中には、人の所爲は(1)宿命造即ち宿因による、(2)尊祐造即ち神の所造による、(3)無因無緣即ち全く原因なしと、この三種の説を主張するものがあるが、共に邪説で、これに對して佛は眼耳鼻舌身意の六處法と地水火風空識の六界法とを自ら知り覺つて居られる。六界によりて六處あり更樂（＝觸）あり、覺（＝受）あり、覺によりて苦習滅道の四相を知り、苦を知り習を斷じ滅を證し道を修して正智を得。

（一四）羅云經　羅云（＝羅睺羅）のために說かれた經。佛水器を取り(1)少水を瀉留して道少きものに喩へ、(2)水を殘らず棄てゝ全く道なきものに喩へ、(3)水器を地上に覆せて道覆へれるものに喩へ、(4)水器を仰けて道空なるものに喩へ、これ等の何れの場合も人は慚愧心を棄てたれば惡として作さゞるはなし。(5)王象の戰陣に入るや初は身體の各部を用ひながら鼻を護るが、後には鼻をも用ふ。これも同じく惡として作さゞるなきに喩へらる。人の鏡を用ふるはその面を見んがためなるが如く、人は時々反省して過現未三時に於ける三業の淨不淨自爲爲他を觀て取るべきは取り捨つべきは捨つべし。

（一五）思經　業に(1)故作と(2)不故作とあり、(2)は果報を齎さゞれど(1)は必ず果報を齎す。それは身三口四意三の十惡業である。聖弟子はこの三不善業を捨てゝ三善業を成就し、慈悲喜捨の四無量心を

者の布施功德を空しからざらしむべし。

(六)善人往經　善人の趣くべき場所に七種ある。(1)現在未來に我我所の念なく生有の樂に染せられずして修行すれば完慧を得ず少慢を盡さゞるも五下分結を斷じて中般涅槃を得ること麩を燒けば燃えて直に滅するが如し(2)同じく中般涅槃を得るは鐵を燒き椎を以て打てば火迸り空中にて滅するが如く(3)迸りたる火の空中より落下し地に達せずして滅するが如く(4)生般涅槃を得るは地上に落下して後滅するが如く(5)行般涅槃を得るは地上に落下し少しく薪草を燒きて後滅するが如く(6)無行般涅槃を得るは多く薪草を燒きて後滅するが如く(7)上流般涅槃を得るは都邑山野を燒きて後滅するが如し(8)最後には完慧を得、現法中に於て息迹滅度する是れ無餘涅槃である。

(七)世間福經　七種の世間福と出世間福とがある。善男善女の比丘に(1)房舍(2)床座(3)衣服(4)朝粥(5)中食(6)園民を施し(7)風雨寒雪に增施供養するは世間福にして、之には大福果あり。又善男善女、佛弟子の(1)某處に遊ばん(2)此處に來らん(3)此處に來れりと聞いて喜び、(4)往いて見(5)禮敬供養し(6)三歸(7)五戒を受く。之にも大福果あり。前者は世間福にして後者は出世間福である。五大河の水量るべからざるが如く、この二種の福果亦量るべからず。

(八)七日經　(1)雨らざれば諸樹百穀枯る(2)二日出れば溝渠川流水竭く(3)三日出れば大江河の(4)四日出れば五大河の水竭く(5)五日出れば大海水漸く減じて全くなきに至る(6)六日出れば大地須彌山共に燒盡す(7)七日出れば乃至梵天燒盡す。斯く諸行は無常變易の法なり捨離すべし。昔善眼大師弟子等のため梵世法を說くと彼等或は欲界六天に生れ或は梵天に生れ大師は其上增上慈を修して晃昱(=光音)天に生れた。大師は釋尊の前身で其時も自他を饒益したが未だ苦を脫し得なかつた。今は佛となつて自他を饒益し諸苦を脫して居る。

(九)七車經　舍梨子と滿慈子との問答である。前者問ふ尊は何故に佛に就て修行するぞ、(1)戒淨の爲か。否。(2)心淨(3)見淨(4)疑蓋淨(5)道非道知見淨(6)道跡知見淨(7)道跡斷智淨の爲か。然らず、無餘涅槃の爲である。無餘涅槃は戒淨乃至道跡斷智淨一々の爲に施設されしや。否、而も此等を離れては又無餘涅槃なし。波斯匿王舍衞城より娑雞帝城、一日の中に至らんとし途中七車を備へ一々乘換へ第七車にて娑城へ著いた。王は第一車乃至第七車の一によりて達したのではなく七車總てによりて達したのである。

(一〇)漏盡經　漏卽ち煩惱に諸種あり、或は(1)見(如實知見を得ること)によりて斷ずべく或は(2)護(諸根を護ること)(3)離

然らざるとあり（六）持法者中義を觀ると然らざるとあり（七）觀義者中法に隨順すると然らざるとある、各々前者勝る。而して（八）自他を饒益し人天のために安隱快樂を求むると然らざるとありて前者勝る。彼こそは最極の第一人者である。

（二）晝度樹經　三十三天の晝度樹の(1)葉が萎むと、葉久しからず落つるならんと云ひて喜び(2)葉が落ちると又生えるならんとて(3)網を生ずるならんとて(4)如鳥嘴を生ずるならんとて(5)開いて鉢の如くならんとて(6)悉く開くならんとて(7)百由延の間光照し色映じ香熏ずるならんとて彼等は次々に喜ぶ。佛弟子にも之に似て七段の事がある、(1)出家を思ふ(2)出家學道す(3)—(6)初禪乃至四禪を得、(7)諸漏盡きて心解脱慧解脱を得。これ晝度樹の七段の生長變化に喩ふべきである。

（三）城喩經　王城に七事具足し四倉豐饒なれば外敵の爲に破られる虞がない、七事具足とは(1)樓櫓峙ちて地盤が堅い(2)深く廣き堀が鑿つてある(3)周圍の地面が平で道路が通じて居る(4)象馬車歩の四軍が備はつて居る(5)弓矢鉾戟の軍器を用意してある(6)智勇兼備の大將が門を守る(7)堅固な高い墻を回らす。四事豐饒とは(1)水草薪木を備へ(2)米麥の類を用意し、(3)豆の類を用意し(4)油蜜甘蔗魚肉の類を用意す。佛弟子にも七善法四増上心がある。七善法とは(1)信根立ち(2)慚恥を(3)羞愧を(4)精進を行ひ(5)廣學多聞にして法を忘失せず(6)正念を行ひ(7)智慧を修して興衰の法を觀じ曉了して苦を盡すことを得る。四増上心とは初禪乃至四禪を修することで、これによれば安隱快樂にして自ら涅槃を致すことを得る。

（四）水喩經　水泳者に七種ある。(1)常に水に沈める(2)出て又沈める(3)出て其儘なる(4)出て觀る(5)觀てから渡り(6)彼岸に至り(7)岸に住まるとである。其に同じく世には(1)不善に覆はれ不善果を得(2)善法を修習しても堅固ならず(3)堅固なり(4)四諦を知り三結を盡し(5)三毒を薄くし(6)五下分結を盡し(7)完全なる解脱を得るとの七種の修行者がある。

（五）木積喩經　地方遊行中積んだ木の燃えるを見ての說教である。(1)此火を抱くと女を抱くと、何れが樂しきやといふに、火を抱くは身を燒けど死後惡趣に墮つる憂はない(2)繩で堅く髀を縛ると信施を受け身體を按摩させると(3)利刀で髀を斷つと信施敬禮を受けると(4)熱せる板金を身に纏ふと衣服の施を受けると(5)熱鐵丸を口に投ずると食味の施を受けると(6)熱せる銅鐵床の上に臥すと坐臥具の施を受けると(7)熱せる銅鐵の釜中に投ぜられると房舍の施を受けるとを比較すれば前者は苦、後者は樂と思はれんも、若し犯戒不精進の徒ならば後者によりて惡報を受く、比丘は自ら出家學道に精進して施

中阿含經解題（三）

一　飜譯次第（既出）

二　漢巴兩中阿含の對照（既出）

三　巴利「中部」と漢譯「中阿含經」（既出）

四　中阿含各經の異譯（既出）

五　中阿含各經大意

各經の大意を如何に書くべきやは可なりの難問題である。これに就ては『中阿含經』全部を通じてこの中に說かれた重なる問題を列擧することも一の方法であり、全經十八品に分れて居る、その各品に說いてある事柄を擧げることも亦一の方法である。しかし『中阿含經』は本來中邊の長さの說敎を集めたといふ以外、諸經全部に亙れる共通性は見出し得られないからして、全經の大意を書くことは可なり無理である。反之各品に收められた諸經はそれ〴〵或共通點を有つて居るから、各品の大意を書くことはあまり無理ではない。しかし各品の共通一致の點といふのは或は形式により或は內容により、而してそれも亦區々で、常に同一見點から見たものではないからして、各品の大意を以て全編の大意とすることにも不徹底あるは免れがたいと思ふ。それで私はこの二の方法の何れをも採らずして二百二十二經一々に就て、その大意を書くこととし、それには簡潔ながらも必ず大意を摑み得るやう、卽ちこれによつて內容の大體を窺知し得るやうに、而してその內容は主に敎義に關する部分のみを擧げるやうに特に注意した積りである。

七法品第一

（一）善法經　七知經と名くる單譯經の存するによりても知られる通り、七種の法を知ることに就て說いた經である。七知とは(1)知法、卽ち十二部經を知ること、(2)知義、これは此義、あれは彼義と說かれた言葉の意義を知ること、(3)知時、修行をなすに時刻により適當の種類を知ること、(4)知節、飮食睡眠其他適宜の時節を知ること、(5)知己、信・戒・聞・施其他に於て、己の得たる所幾何なりやを知ること、(6)知衆、これは刹利集、梵志集と、集の性質を知り去住語默如何に振舞ふべきやを知ること、(7)知人勝如、（一）人の中に信者不信者ありて信者勝り（二）信者中屢々比丘を見ると然らざるとありて前者勝り（三）比丘を見るものゝ中禮敬すると然らざるとあり（四）禮敬者中經を問ふと然らざるとあり（五）問經者中法を持つと

中阿含經國譯完了に際して

昭和三年の秋『中阿含經』の國譯に著手して以來正に二年有半、この間常住不斷これがために筆を手にして居たわけではないが、教師として住職として個人として雜用多き中にこれがために閑を殺がれ頭腦を支配されたことは亦非常なものであつた。茲に全篇の國譯を終ることを得たのは余に取りて一の大なる喜びである。この全譯を果し得たのは工藤天淳君が過去二年の間余と起居を共にしてこの業を助けたるによる所が多い。特に記して謝意を表する。

目次

阿含部　六

立花俊道譯

國譯一切經

大東出版社藏版

8369